

諫 山 遺 跡

本文・遺物図版編

東九州自動車道（県境～宇佐間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

2016

大分県教育庁埋蔵文化財センター

諫 山 遺 跡

本文・遺物図版編

東九州自動車道（県境～宇佐間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

序 文

本書は、西日本高速道路（株）が実施している東九州自動車道（県境～宇佐間）の建設工事に伴って行われた諫山遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は土地買収の進捗に応じて、平成23年度から25年度にかけて7回に分けて実施しました。

その結果、検出された弥生時代の竪穴建物や160基に及び、他地域との交流を示す土器も多く出土するなど、諫山遺跡は大分県内でも有数の弥生時代集落遺跡であることがわかりました。

また、縄文時代では、県内でも最も多くの陥し穴を検出し、古代では緑釉陶器が出土するなど古代豪族諫山氏の本貫地の可能性が指摘でき、中世でも連続する屋敷区画が検出されるなど各時代に渡って貴重な資料を得ることができました。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となり、また文化財に対する意識を高める一助となることを願うとともに、調査全般にわたりまして御協力頂いた地元教育委員会や地域の方々に対しまして、心より御礼申し上げます。

平成28年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 後 藤 一 重

例 言

- 1 本書は西日本高速道路株式会社より委託を受け大分県教育委員会が実施した、東九州自動車道（県境～宇佐間）建設工事に伴う発掘調査の調査報告書である。
- 2 本書には、平成 23 年度から同 25 年度にかけて 7 次にわたって実施した跡山遺跡発掘調査の調査成果を収載している。
- 3 報告書は 2 分冊とし、第 1 分冊には本文と遺物図版を、第 2 分冊には遺構図版と写真図版を収載する。本書はその第 1 分冊「本文・遺物図版編」である。
- 4 調査は第 1 次から第 5 次が（株）イビソク、第 6 次から第 7 次が（株）鳥田組にそれぞれ一部業務を委託して実施した。
- 5 出土遺物の整理作業については、平成 24 年度から同 27 年度にかけて（株）九州文化財総合研究所に委託して実施した。
- 6 出土遺物はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市中判田）で保管している。
- 7 本書の執筆は、古殿鈴代、高山加代（以上大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託）の協力の下、第 1 次、3 次分を後藤一重（埋蔵文化財センター所長）、第 2 次と第 7 次の一部を小柳和宏（同次長）、第 4 次と 5 次は松本康弘（同主幹）、第 6 次と 7 次は坂本嘉弘（同嘱託）が行った。なお、各節の小結と総括については文責を文末に記している。
- 8 本書の編集は小柳が行った。

目次

序文

例言

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	3
第2章 遺跡の立地と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の概要	9
第4章 遺構と遺物	24
第1節 縄文時代	24
1) 概要	24
2) 陥し穴	24
3) 土坑	30
4) 小結	30
第2節 弥生時代から古墳時代前期	31
1) 概要	31
2) 竪穴建物	32
3) 掘立柱建物	69
4) 土坑	70
5) 貯蔵穴	87
6) 溝	94
7) 墓	94
8) その他の遺構	96
9) 小結	97
第3節 古墳時代後期	98
1) 概要	98
2) 竪穴建物	98
3) 土坑	99
4) 小結	99

第4節 古代	99
1) 概要	99
2) 堅穴建物	99
3) 土坑	100
4) 溝	101
5) 小結	101
第5節 中世から近世	102
1) 概要	102
2) 土坑	102
3) 溝	103
4) 掘立柱建物	106
5) 地下式土坑	106
6) 墓	106
7) 小結	107
第6節 柱穴出土遺物	108
第7節 包含層出土遺物	112
1) 縄文時代	112
2) 弥生時代から古墳時代前期	113
3) 古代	113
4) 中世から近世	113
第8節 時期不明の遺構	114
1) 帯状柱穴列	114
2) 掘立柱建物	114
3) 溝	114
第5章 総括	115
第1節 弥生時代～古墳時代前期の土器について	115
第2節 諫山遺跡について	122

遺物図版

以下、第2分冊

遺構図版

写真図版

報告書抄録

插图目次

第 1 图	隼山遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第 52 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(33)	155
第 2 图	調査次数と遺構配置図	10	第 53 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(34)	156
第 3 图	遺構配置図	11	第 54 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(35)	157
第 4 图	土層位契図と土層図(A-A')	12	第 55 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(36)	158
第 5 图	土層図(B-B')	13	第 56 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(37)	159
第 6 图	土層図(C-C')	13	第 57 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(38)	160
第 7 图	土層図(D-D')	14	第 58 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(39)	161
第 8 图	土層図(E-E')	15	第 59 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(40)	162
第 9 图	土層図(F-F')	15	第 60 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(41)	163
第 10 图	土層図(G-G')	16	第 61 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(42)	164
第 11 图	隔し穴遺構分布図	17	第 62 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(43)	165
第 12 图	住居跡遺構分布図	18	第 63 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(44)	166
第 13 图	土坑分布図	19	第 64 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(45)	167
第 14 图	溝遺構分布図	20	第 65 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(46)	168
第 15 图	墳墓分布図	21	第 66 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(47)	169
第 16 图	帯状柱穴列分布図	22	第 67 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(48)	170
第 17 图	隼山遺跡 周辺字図	23	第 68 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(49)	171
第 18 图	隼山遺跡 出土弥生時代前・中期土器編年図	120	第 69 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(50)	172
第 19 图	隼山遺跡 出土弥生時代前期・古墳時代初期土器編年図	121	第 70 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(51)	173
第 20 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(1)	123	第 71 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(52)	174
第 21 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(2)	124	第 72 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(53)	175
第 22 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(3)	125	第 73 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(54)	176
第 23 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(4)	126	第 74 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(55)	177
第 24 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(5)	127	第 75 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(56)	178
第 25 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(6)	128	第 76 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(57)	179
第 26 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(7)	129	第 77 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(58)	180
第 27 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(8)	130	第 78 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(59)	181
第 28 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(9)	131	第 79 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(60)	182
第 29 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(10)	132	第 80 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(61)	183
第 30 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(11)	133	第 81 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(62)	184
第 31 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(12)	134	第 82 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(63)	185
第 32 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(13)	135	第 83 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(64)	186
第 33 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(14)	136	第 84 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(65)	187
第 34 图	隼山遺跡 住居跡出土土器実測図(15)	137	第 85 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(66)	188
第 35 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(16)	138	第 86 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(67)	189
第 36 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(17)	139	第 87 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(68)	190
第 37 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(18)	140	第 88 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(69)	191
第 38 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(19)	141	第 89 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(70)	192
第 39 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(20)	142	第 90 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(71)	193
第 40 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(21)	143	第 91 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(72)	194
第 41 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(22)	144	第 92 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(73)	195
第 42 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(23)	145	第 93 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(74)	196
第 43 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(24)	146	第 94 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(75)	197
第 44 图	隼山遺跡 住居跡出土土器実測図(25)	147	第 95 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(76)	198
第 45 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(26)	148	第 96 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(77)	199
第 46 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(27)	149	第 97 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(78)	200
第 47 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(28)	150	第 98 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(79)	201
第 48 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(29)	151	第 99 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(80)	202
第 49 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(30)	152	第 100 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(81)	203
第 50 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(31)	153	第 101 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(82)	204
第 51 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(32)	154	第 102 图	隼山遺跡 住居跡出土遺物実測図(83)	205

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とし、大分県と宮崎県を經由して鹿児島県鹿児島市に至る高速道路であり、九州の東海岸部を縦断する主要幹線道路となる。全区間が開通すれば、すでに供用している九州縦貫自動車道及び九州横断自動車道等と一体となり循環型高速交通ネットワークを形成し、東九州地域はもとより九州全体の産業、経済、観光の発展に大きな期待が寄せられている。

約109%となる大分県内では、福岡県境から宇佐間(13.5%)を新規事業として西日本高速道路(株)が建設を行い、既に開通している宇佐別府道路と接続することにより、九州横断自動車道(大分道)を經由して、既に供用を開始している東九州自動車道(大分-佐伯間)に接続する。なお、佐伯から宮崎県境間は「新直轄方式」により、国土交通省佐伯河川国道事務所が建設を行っている。これらは、何れも平成26年度中には開通の見込みとなっている。

この報告書の対象となる県境-宇佐間の路線は、中津平野や宇佐平野といった平野部を通らず、大部分が八面山や妙見山から北の平野部に向けて延びる尾根とその間の谷水田部分を横断するように設定されている。そのため、最も広い平坦地は県境の山国川を越えた佐知地区の平野と、その平野を望む諫山の洪積台地上ということになる。残りの地区は、丘陵裾の僅かな平坦地や、幅の狭い谷底平野部分ということになる。これらの地区を平成12年度と14年度に踏査し、21ヶ所の埋蔵文化財包蔵地及び詳細な調査が必要な地区をリストアップした。その後、試掘調査などを行い、本調査が必要な遺跡が11ヶ所となり、平成21年度から25年度にかけて発掘調査を実施した。この内、諫山遺跡は平成23年度から25年度にかけて、7次にわたって調査を行った。

第2節 調査の経過

諫山遺跡の調査は、諫山の台地上を横断する形で路線が設定されたことから、長さ600m、幅50mの長大なものとなった。そのため、買収状況に合わせて調査を行うこととなり、3カ年に7次の調査を行うこととなった(調査次数は業者発注ごとにカウントするため、同時期に隣接地で調査を行っていても次数が異なる場合がある。また逆に、調査地点が隠れていても、一括の発注の場合は同じ調査次数となっている。)。以下、各調査回数ごとに調査経過を記す。

第1次調査(平成23年度)

平成23年6月13日	表土剥ぎ(～17日)
6月22日	包含層掘削
6月30日	遺構検出作業
7月1日	包含層から仿製鏡出土
8月9日	遺構掘削
10月7日	空中写真撮影
10月17日	拡張区表土剥ぎ(～20日)
10月24日	拡張区包含層掘、遺構検出
11月1日	拡張区で緑釉陶器出土
11月15日	遺構掘削
平成24年2月3日	空中写真撮影
2月5日	現地説明会
2月24日	調査完了

第2次調査(平成23年度)

平成23年9月29日	2、3区表土剥ぎ(～10月14日)
10月6日	2区遺構検出作業

平成23年10月17日	2区包含層掘削
10月19日	3区包含層掘削
10月24日	遺構配置図作成のための空撮
10月26日	2区遺構掘削
11月11日	1区表土剥ぎ(～25日)
11月14日	3区遺構掘削
11月25日	1区包含層掘削
12月2日	2、3区空中写真撮影
平成24年1月10日	1区遺構掘削
2月27日	1区掘削作業終了
3月13日	1区空中写真撮影、調査完了

第3次調査(平成23年度)

平成23年10月18日	表土剥ぎ(～20日)
10月24日	包含層掘削、遺構検出
11月21日	遺構掘削
平成24年2月5日	現地説明会
2月21日	調査完了

第4次・5次調査(平成24年度)

平成24年5月14日	C・D区表土剥ぎ
5月15日	A・B区表土剥ぎ
5月16日	D区遺構掘削開始
5月18日	A区遺構検出
5月21日	C区遺構検出、石蓋2基検出
5月22日	A区遺構掘削、B・C区遺構検出
5月28日	B・C・D区遺構掘削
5月30日	A区終了
6月5日	E区半分表土剥ぎ
6月6日	A・D区調査終了
6月7日	A・B・D区空中写真撮影
6月11日	G区表土剥ぎ、E区遺構検出
6月20日	F区表土剥ぎ
6月22日	F区遺構検出
6月26日	E区遺構掘削、G区遺構検出
6月29日	C・E区空中写真撮影
7月9日	G区遺構掘削
7月25日	E区残り表土剥ぎ
7月26日	E区遺構検出
7月27日	B区完了
7月31日	E区遺構掘削
8月9日	C、E区空中写真撮影
9月5日	F区表土剥ぎ
9月10日	F区遺構検出
9月11日	C区完了

平成24年9月12日	F区遺構掘削
9月20日	G区空中写真撮影
9月23日	現地説明会
10月1日	G区にて地下式土坑検出
10月5日	F区空中写真撮影
10月9日	G区残り表土剥ぎ
10月10日	G区遺構検出
10月11日	F区残り表土剥ぎ
10月23日	F区空中写真撮影
11月7日	G区空中写真撮影
11月22日	終了

第6次調査(平成25年度)

平成25年6月10日	区域2表土除去開始(～13日)
6月11日	区域1表土除去開始(～12日)
6月12日	区域2遺構検出
6月14日	区域1遺構検出
6月18日	区域2遺構掘削開始
7月12日	区域2空中写真撮影
7月17日	区域1遺構検出
7月29日	区域2遺構掘削終了
7月31日	区域1遺構掘削開始
8月22日	区域1の溝中から地下式土坑2基検出
9月14日	区域1空中写真撮影
9月27日	調査終了

第7次調査(平成25年度)

平成25年9月12日	表土剥ぎ開始(～18日)
9月24日	区域1遺構検出
9月25日	区域1遺構掘削開始
10月2日	区域1石棺検出
10月23日	中津東高校見学
10月31日	区域2(市道部分)遺構検出、包含層掘り下げ
11月10日	現地説明会
12月5日	空中写真撮影
12月25日	区域1調査終了
平成26年1月7日	区域3表土剥ぎ
2月5日	区域4表土剥ぎ
2月9日	区域2全景写真撮影、区域4包含層掘削、遺構検出
2月12日	区域3遺構検出、区域4遺構掘削
2月17日	区域3遺構掘削
2月21日	区域2、区域4調査終了
2月25日	区域3調査終了

第3節 調査組織の構成

第1次調査（平成23年度）

埋蔵文化財センター 所長	山口博文
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班副主幹	徳脇仁志
◇ 大型事業班課長補佐（総括）	後藤重（調査担当）

第2次調査（平成23年度）

埋蔵文化財センター 所長	山口博文
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班副主幹	徳脇仁志
◇ 受託事業班課長補佐（総括）	小柳和宏（調査担当）
◇ 受託事業班副主幹	染谷和徳（調査担当）
◇ 受託事業班主事	越智淳平（調査担当）

第3次調査（平成23年度）

埋蔵文化財センター 所長	山口博文
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班副主幹	徳脇仁志
◇ 受託事業班課長補佐（総括）	小柳和宏
◇ 一般事業班主幹	友岡信彦（調査担当）

第4次調査（平成24年度）

埋蔵文化財センター 所長	山口博文
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班主査	山村光広
◇ 受託事業班課長補佐（総括）	小柳和宏
◇ 受託事業班主幹	友岡信彦（調査担当）

第5次調査（平成24年度）

埋蔵文化財センター 所長	山口博文
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班主査	山村光広
◇ 受託事業班課長補佐（総括）	小柳和宏
◇ 受託事業班主幹	友岡信彦（調査担当）

第6次調査（平成25年度）

埋蔵文化財センター 所長	宮内克己
◇ 管理予算班課長補佐（総括）	春山義光
◇ 管理予算班主査	山村光広
◇ 受託事業班参事（総括）	小柳和宏
◇ 受託事業班副主幹	後藤晃一（調査担当）
◇ 受託事業班嘱託	坂本嘉弘（調査担当）

第7次調査（平成25年度）

埋蔵文化財センター 所長

- ◇ 管理予算班課長補佐（総括）
- ◇ 管理予算班主査
- ◇ 受託事業班参事（総括）
- ◇ 受託事業班副主幹
- ◇ 受託事業班嘱託

宮内克己
春山義光
山村光広
小柳和宏
後藤晃一（調査担当）
坂本嘉弘（調査担当）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

諫山遺跡の立地する「諫山台地」は、山国川の段丘崖に沿って約4^{km}、幅200～500^mで北東から南西方向に延びる標高40^mほどの台地である。西側は山国川の氾濫原との間に高さ約10^mほどの崖が生じているが、東側は、大丸川によってやはり10^mほどの比高差がある。しかし、東側には急な崖はなく、西側と比べると比較的緩やかに傾斜している。台地上には集落が点在しているが、多くは畑地となっている。台地上には、江戸時代の享保2年(1685)に着工し、元禄2年(1689)に完成した荒瀬井路が通っているが、台地上は水の供給は受けなかったようである。当然、元禄年間以前には、台地上に水源はなく、全て畑地だったと考えられる。

もう少し巨視的に見れば、諫山の台地は「下毛原」と呼ばれる洪積台地の南端近くということになる。西には山国川の湾曲によってできた三日月状の真坂平野があり、東側は大丸川の谷底平野があり、前記したように両側が10^mほどの比高差を有している。諫山の台地は、諫山遺跡のやや北東側で若干の低地が東西に走る部分があるが、これは洪積層堆積時代に大丸川がそのまま西進し、山国川と合流していた時の旧河道である。後に山国川の堆積作用により、大丸川は流路の変更を余儀なくされたものである。

台地上をやや巨細に見ると、今回調査を行った部分は台地幅が最も広いところで、東西約500^m、南北約15^mのあまり起伏の無い平地が広がる部分(大字諫山と大字原口)の、ほぼ中央付近と言うことが出来る。ここは、旧度山国川が作った三日月状を呈する氾濫原の平野部を見下ろす位置に当たる。

調査区内の、台地東端から中央部は畑地で、西側は現集落である。現在の集落部分は、小字が「〇〇屋敷」となっており、中世に起源を持つものである可能性が考えられた。また、この「〇〇屋敷」の部分は、江戸時代の荒瀬井路より西側に納まる。さらに、台地を横断する区画溝が存在した可能性が高く、その区画溝にも集落の南北が挟まれていたことが想定できる。

第2節 歴史的環境

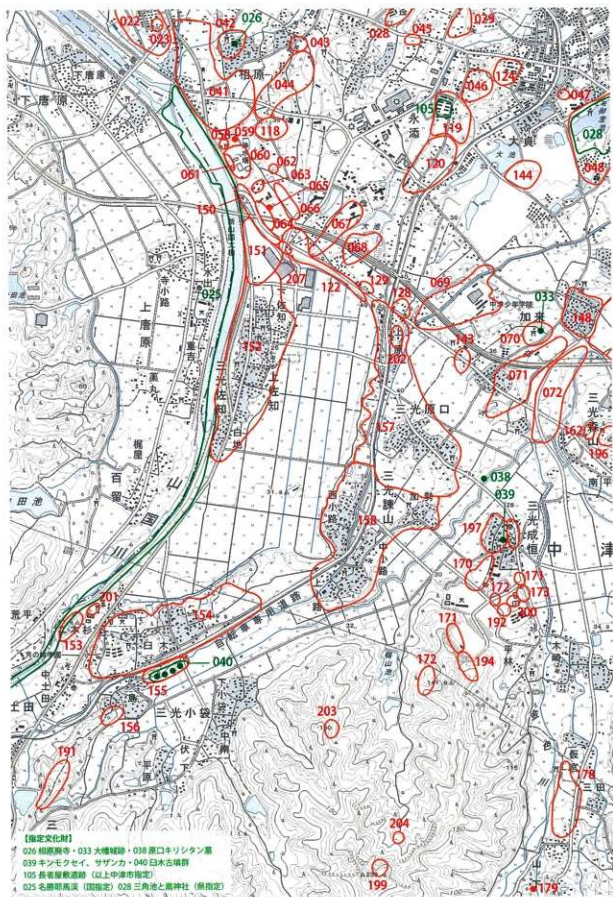
中津は、大分県内では宇佐平野と並んで広い平野を有するが、主に遺跡が展開するのはその背後にある広大な洪積台地である下毛原においてである。諫山地区は、その下毛原の最も南に位置するが、台地上はほぼ遺跡に覆われていると言っても過言ではないほど、遺跡の集中する地区にあたる。下毛原では、旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていない。縄文時代になるとボウガキ貝塚や法垣貝塚などの貝塚が、大丸川流域などの小河川流域に形成される一方、山国川の自然堤防状の遺跡である佐知遺跡や、河口部に近い高畑遺跡等でも集落が形成されている。

弥生時代になると、台地を望む丘陵上の遺跡である森山遺跡等が従来知られていたが、今回の諫山遺跡の調査までは、あまり大規模な調査は行われていない。小規模な調査で、貯蔵穴群や墓地などが確認されている。古墳時代になると、下毛原では上の原において、小規模な方墳(勸助野地遺跡)が作られ、さらに5世紀後半には横穴墓が出現する。横穴墓の造営は、墳丘墳の少ない当地では主流となり、7世紀代まで存続する。その後、7世紀末から8世紀にかけて寺院(相原庵寺)が出現し、台地上では火葬墓が見られるようになるなど、仏教の影響が浸透する。

ところで、諫山の地は、古代には「豊前国下毛郡諫山郷」の地にあたると思われる。この諫山郷は、旧三光村の大部分(大字田口、成河、森山、原口、諫山、白木、株)を含んでいたとされる。この諫山郷を本貫地としたと考えられる郡司に「擬少領無位勇山伎美麻呂」がいる。この勇山伎美麻呂は、天平12年(740)に太宰少貳藤原広嗣が反乱を起こした際に、隣接する仲津郡の擬少領藤原東人等と共に反乱軍に加わり、のち政府軍に投降している。その後の動静は不明である。

参考文献

「三光村史」三光村 昭和63年6月



第1図 三光山跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

第1表 遺跡一覧表

番 号	遺跡名	所在地	種 別	時 代
022	上万田遺跡	万田	集落・墳墓	弥生・古墳・中世
023	河原田城跡	万田	城跡	中世
028	西永添遺跡	永添	包蔵地	弥生・古墳
029	縄屋遺跡	永添	包蔵地	弥生・古墳
041	三口遺跡	相原・堀屋	集落	弥生・古墳・古代
042	相原興寺	相原	寺院跡	古代
043	法華寺城跡	相原	城跡	中世
044	台酒跡	相原	包蔵地	弥生・古墳
045	永添中園遺跡	永添	包蔵地	弥生・古墳
046	八並城跡	永添	城跡	中世
047	東ノ浦遺跡	永添	包蔵地ほか	古墳
048	御澄池周辺遺跡	大貞	包蔵地	古墳ほか
058	坂手前横穴墓群	相原	墳墓	古墳
059	鶴手神社裏山古墳	相原	墳墓	古墳
060	坂手隈城跡	相原	墳墓・城跡	古代・中世
061	坂手隈横穴墓群	相原	墳墓	古墳
062	相原古墳群	相原	墳墓	古墳
063	幣旗部古墳群	相原	墳墓	古墳
064	助助野地遺跡	相原	墳墓	縄文・古墳
065	上人塚古墳	相原	墳墓	古墳
066	榑ヶ泊池東遺跡	相原	包蔵地	弥生・古墳
067	六畝町遺跡	永添	包蔵地	弥生・古墳
068	大池南遺跡	永添	集落	弥生
069	清水郎西遺跡	加来	集落	古墳
070	大幡城跡	加来	城跡	中世
071	黒水遺跡	加来	集落・墳墓	縄文・中世・近世
072	大坪遺跡	加来	集落	縄文・弥生・古墳
118	相原山首遺跡	相原	古墳	古墳・古代・中世
119	長者屋敷遺跡	永添	宮舎・城跡	奈良・平安・中世
120	福引田遺跡	永添	包蔵地	
122	上ノ原平原遺跡	相原・永添・三光佐知	集落	弥生・古墳
124	東浦遺跡	永添	水田	
128	清次郎原遺跡	加来	集落	弥生
129	上ノ原稲荷塚遺跡	永添	墳墓	古墳
143	横遺跡	加来	集落	縄文ほか
144	中ノ林遺跡	大貞	集落	弥生・古墳
148	加来居屋敷遺跡	加来	城館	中世・近世
150	上ノ原横穴墓群	三光佐知	墳墓	古墳
151	佐知久保遺跡	三光佐知	集落	弥生・縄文・古墳
152	佐知遺跡	三光佐知	集落	縄文~中世
153	城の百穴横穴墓群	三光土田字城	墳墓	古墳
154	臼木遺跡	三光臼木	包蔵地	古墳・弥生
155	臼木古墳群 (1~4号)	三光臼木	墳墓	古墳
156	外園遺跡	三光臼木	墳墓	中世
157	原口遺跡	三光原口	包蔵地	弥生・古墳
158	鎌山遺跡	三光鎌山	包蔵地ほか	弥生・古墳
162	赤添横穴墓群	三光森山	墳墓	古墳
170	成恒遺跡	三光成恒	包蔵地	弥生・古墳
171	庵ノ尾横穴墓群	三光成恒	墳墓	古墳
172	鶴山横穴墓群	三光鎌山	墳墓	古墳
173	瑞雲寺遺跡	三光成恒	寺院跡	古代・中世
178	飯宮遺跡	三光田口	包蔵地	弥生・古墳
179	山下経塚	三光山下	経塚	鎌倉
191	臼木上ノ原遺跡	三光臼木	墳墓	弥生・古墳
192	成恒笹原遺跡	三光成恒	祭祀	古墳
194	大泊平横穴墓群	三光田口・成恒	墳墓	古墳
196	北平城跡	三光森山	城跡	中世
197	田島崎城跡	三光成恒	城跡	中世
199	辰の口洞穴	三光田口	祭祀	
200	瑞雲遺跡	三光成恒	祭祀	奈良・平安・中世
201	土田城跡	三光土田	城跡	中世
202	耳とり池遺跡	三光原口	生活遺跡	奈良
203	コウゴウ石遺跡	三光鎌山	祭祀	
204	鶴山谷奥遺跡	三光鎌山	祭祀	
207	上ノ原遺跡	三光佐知	集落	弥生・古墳

第3章 調査の概要

調査は用地買収の進展に応じて、3ヶ年、7次にわたって行われた。さらに、道路部分の調査が最後になったことなどから、必ずしも隣接する調査区が順番に調査出来たわけではないので分かりづらくなっている部分があるが、調査区ごとの対象区を第2図に示した。横には、その結果検出された遺構を全て示している。第3図にはやや拡大した図があるが、中で色付きの遺構が、今回の報告で取り上げたものである。第3図は2段に分かれているので分かりづらいが、上段の右側が犬丸川に面する斜面に接する部分、下段の左側が山国川の沖積地に面する斜面に接する部分になる。つまり、上段右側を「台地東部」、上段左側から下段右側を「台地中央部」、下段左側を「台地西部」とすることが出来る。

縄文時代は、54基の陥し穴が検出された(第11図)。この検出基数はこれまでの県内の調査では最大である。分布は、概ね台地西部に集中する。台地中央部では3基確認されたに過ぎない。注目されたのは、陥し穴底部の構造が分かる事例が複数検出された点である。

弥生時代では中期から古墳時代初期の大規模な集落跡が検出されたのが最も大きな成果である。第12図の赤い四角や円形が堅穴建物であるが、大きく分けると、台地東部、台地中央部、台地西部にまとまりがあるのが分かる。時期別の変遷を追うと、概ね台地東部が古く、台地西部が新しい時期となることがわかった。

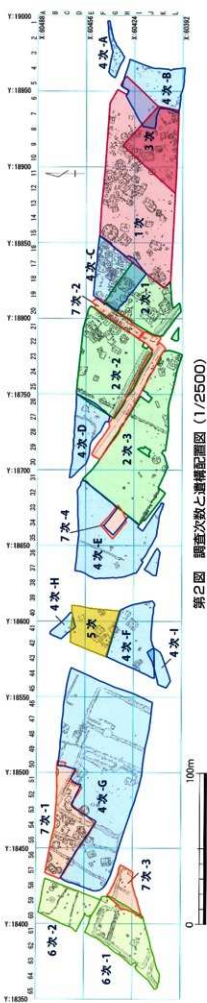
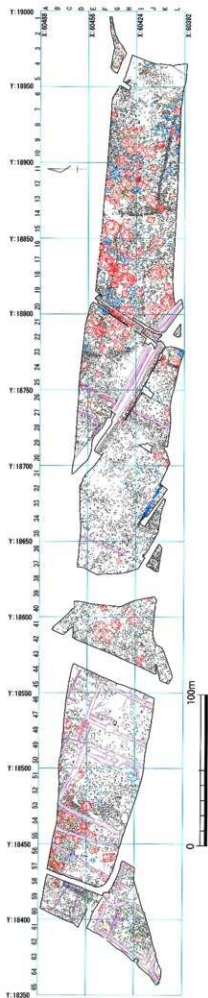
古墳時代後期の遺構は、数基の堅穴建物に限られる。この時期、諫山遺跡から2,000mほど下流の山国川を望む崖面には上ノ原横穴墓群が築かれる。その集落は台地上よりも、むしろ山国川沖積微高地上に展開することがわかる事例である。

古代は、緑釉陶器が出土するなど、台地東部で遺物が集中している。明確な遺構は確認されなかったが、この地域の何らかの重要な施設が至近にあることを想定させる。古代豪族で下毛郡の郡司を出した諫山氏との関連が注目される。

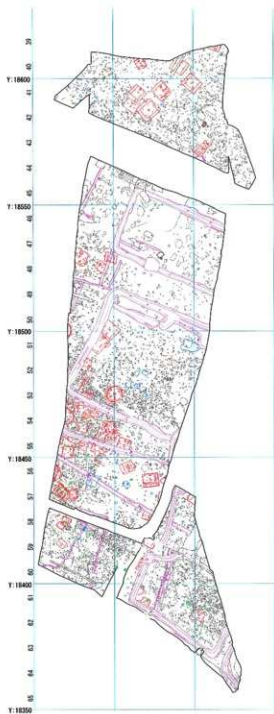
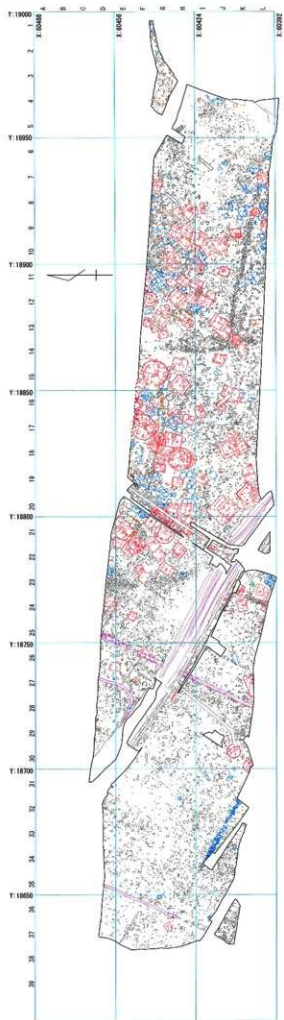
中世は、小字や現地の地割りなどからも、何らかの遺跡が展開することが予想されたが、台地西部に於いて、屋敷区画が検出された。室町時代に始まり江戸期まで存続していたことが確かめられた。

その他、注目される遺構としては、連続する柱穴列があげられる。第16図で見ると、うっすらと帯状になった部分が複数箇所あるのがわかる。時期が分かる形での遺物の出土がなかったため、時期決定に苦慮したが、結局今回は時期不明として扱った。少なくとも、中世前半よりは古い時期の所産であると考えている。

このように、今回の諫山遺跡の調査では、調査面積が大きかったこともあって、各時代とも新知見を得ることができた。

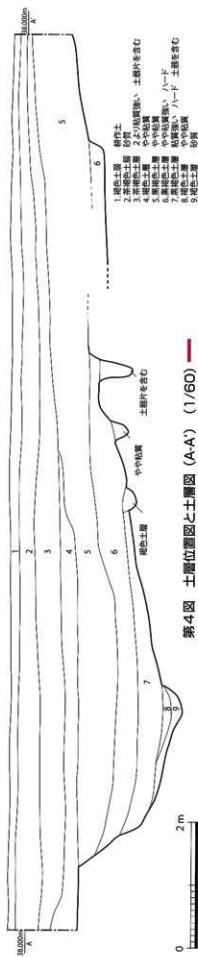
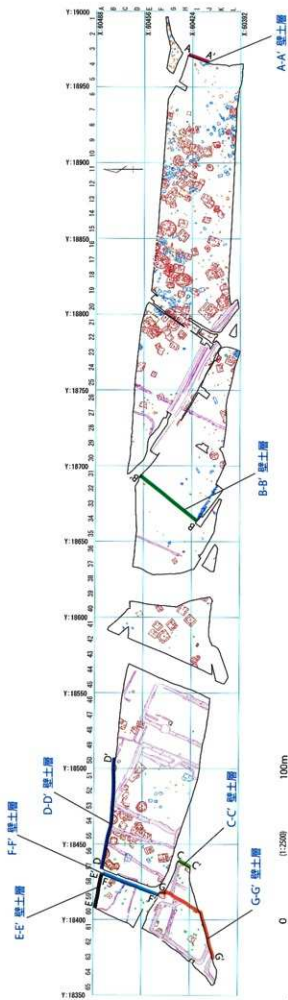


第2図 調査回数と遺構配置図 (1/2500)

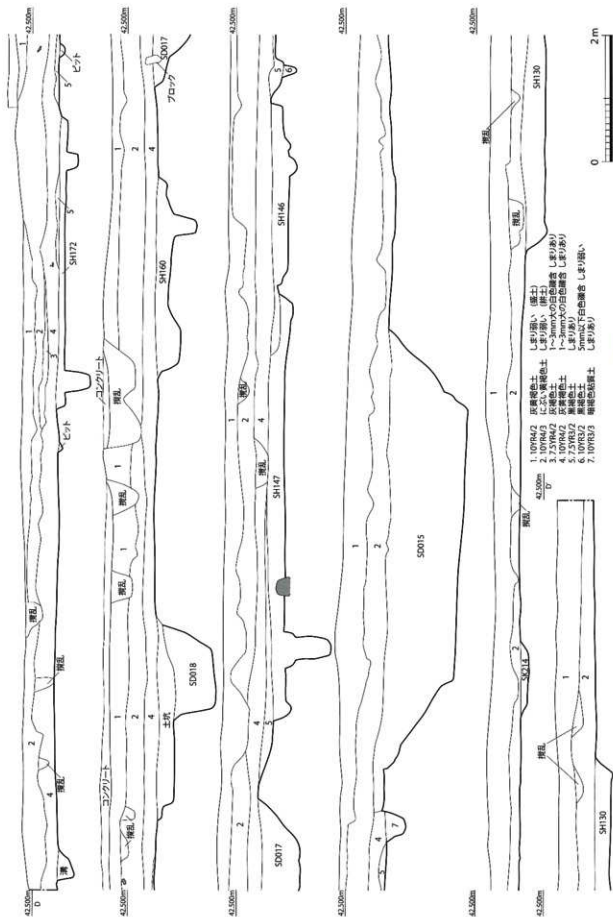


第3図 遺構配置圖 (1/1500)

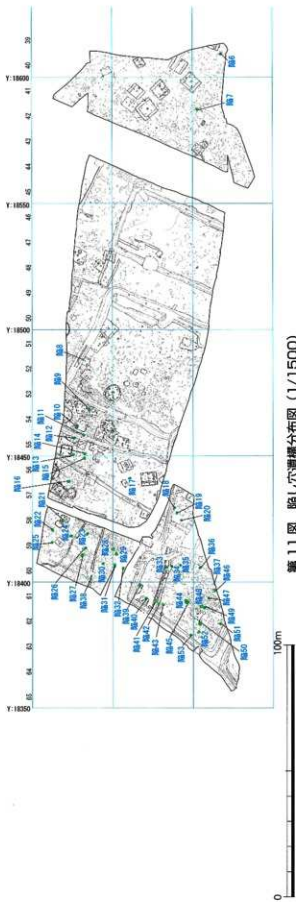




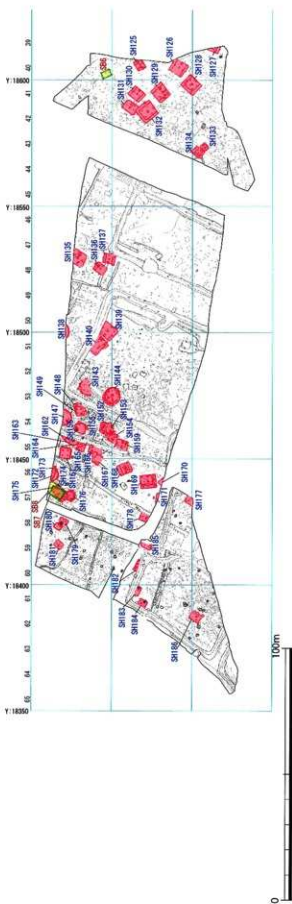
第4図 土層位置図(A-A') (1/60)



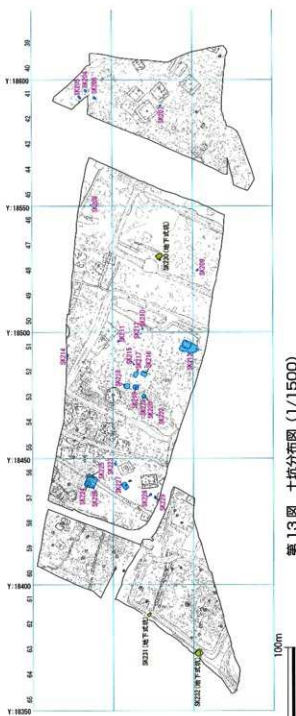
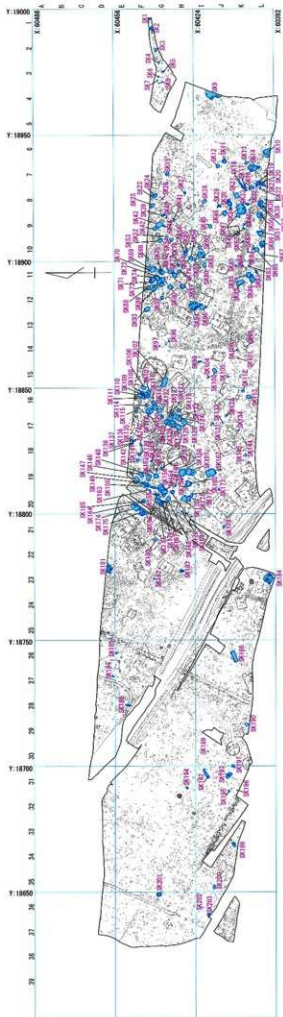
第7図 土層図 (D-D) (1/60)



第11図 陥し穴遺構分布図 (1/1500)



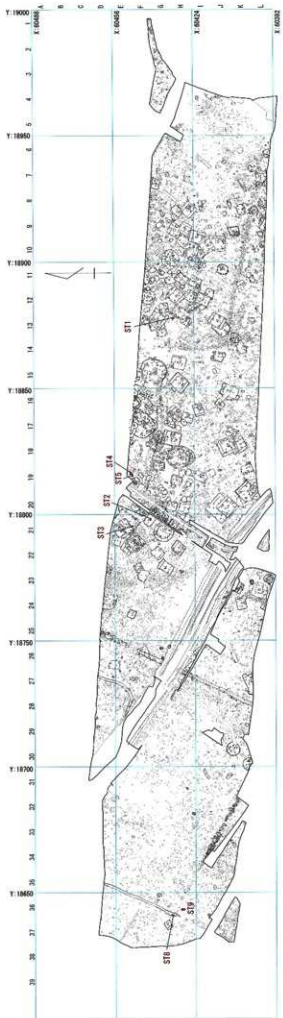
第 12 图 住居跡遺構分布图 (1/1500)



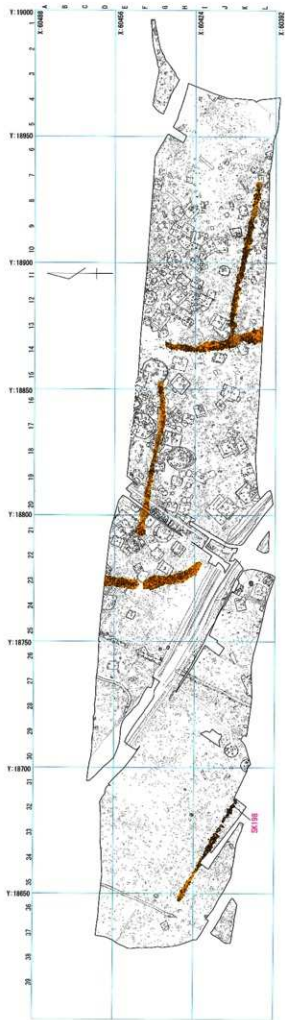
第 13 图 土坑分布图 (1/1500)



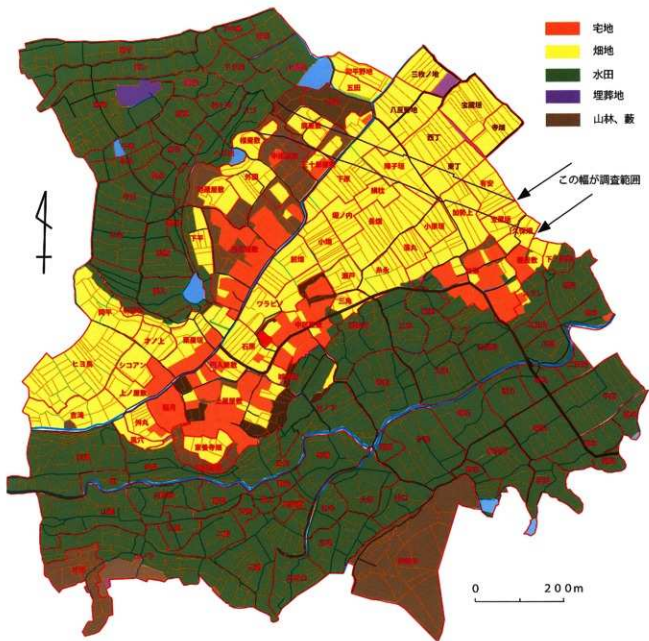
第 14 図 溝遺構分布図 (1/1500)



第 15 図 墳墓分布図 (1/1500)



第 16 図 带状柱穴列分布図 (1/1500)



第 17 図 諫山遺跡周辺字図

第4章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

1) 概要

各時代の遺構検出面である黄褐色土の上層には、黒色土が堆積する。黒色土は厚い箇所でも0.5mにも達し、多くの遺物が包含されていることが、事前の確認調査で確かめられている。そのため、縄文時代の包含層が存在する可能性も視野にいれ、黒色土を人力で掘り下げた。その結果、弥生時代の遺物が大量に出土したが、縄文時代の遺物は極めて少量であった。

遺構についても、弥生時代などの遺構が多く検出されるなかで、縄文時代の遺構は少数であった。そのなかで、台地の西端部を中心に陥し穴を確認した。その数は50基を超え、一遺跡における陥し穴調査数としては、県下最大となった。また、陥し穴の底面にみられる杭の立て方等に関する新知見を得るなど、大きな調査成果をあげた。その他の縄文時代に属す遺構は、全く確認できなかった。なお、弥生時代以降の遺構中から遺物が出土したが、その数は微量である（第7節参照）。

2) 陥し穴

跡山遺跡からは54基の陥し穴状の遺構が検出された。その分布状況は、台地中央部から西方にかけて密増し、西端の調査区からは六割にあたる34基が検出された。形状は床面方形が主体を占めるが、楕円形や円形なども存在する。遺構の時期は、周辺に弥生時代以降の遺構が濃厚に分布するにもかかわらず、遺構内からの遺物の出土はほとんど無く、弥生時代には完全に埋立てられていたと考える。こうした状況から、縄文時代の遺構と考え、以下個別に報告を行う。

SK1001 (第709図)

SK1001は2次調査Ⅲ区(K-23)で検出された。主軸をほぼ東西にし、上部は一部崩壊しているが、上面は2.0m×1.3mで、深さ1.15mで1.1m×0.6mの平坦な床面に達する。床面の中央に径10cm、深さ25cmの杭穴が検出された。また、遺構内の中位で拳大の礫群が出土したが、遺構埋没時のものとする。

SK1002 (第710図)

SK1002は2次調査Ⅱ区(G-26)で検出され、南東部は溝で切られている。主軸は北西-南東で、平面形は小判形である。計測できる主軸は1.32mで、短軸は1.0mである。検出面から床面までの深さは1.0mで、南東部は約20cmの段が付き高い。それを含めた規模は1.05m×0.65mである。

SK1003 (第711図)

SK1003は2次調査Ⅱ区(G-26)で検出された。平面形は主軸を南北にとるほぼ方形で、検出面は1.1m×0.9mである。深さは約1.0m、床面の規模は0.52m×0.57mで中央部が緩く窪む。中心部には径12cm、深さ10cmの杭穴があり、その縁で小礫が検出された。

SK1004 (第712図)

SK1004は2次調査Ⅱ区(G-26)で検出された。主軸をほぼ東西にとり、検出面での平面形は、方形であるが、北側が拡張された状況で、壁面に段を生じながら0.85m掘り下げられている。その結果、検出面での規模は1.0m×0.95m、本体部の深さは1.04mで、床面は0.8m×0.5mである。

SK1005 (第713図)

SK1005は2次調査Ⅲ区(H-32)で検出された。検出面での平面形は上部が崩壊したため主軸をほぼ南北にとる1.4m×0.8mの長楕円形であったが、深さ1.23mで0.93m×0.42mの明確な長方形の平坦な床面に達する。床面中央には径20cm、深さ24cmの杭穴が検出された。

SK1006 (第714図)

SK1006は4次調査F区(J-40)で検出された。検出面での平面形は上部が崩壊したためか主軸をほぼ南北にとる $11\text{m} \times 0.8\text{m}$ の長楕円形であったが、中位から明確な長方形になり、深さ 0.85m で $0.65\text{m} \times 0.4\text{m}$ の平坦な床面に達する。床面中央には径 17cm 、深さ 30cm の杭穴が検出された。

SK1007 (第715図)

SK1007は4次調査F区(I-42)で検出された。検出面での平面形は東北-南西に主軸をとる縦い長方形で規模は $11\text{m} \times 0.85\text{m}$ である。深さは 1.25m で、断面形はややフラスコ状になる。床面は $1.0\text{m} \times 0.4\text{m}$ で、中央部に径 20cm 、深さ 15cm の杭穴を検出した。

SK1008 (第716図)

SK1008は7次調査1区(C-52)で検出された。別な遺構で北側の大部分が失われており、陥し穴か否か判断できない。残された規模は深さ 0.85m 、床面が $0.5\text{m} \times ?$ であり、不明な部分が多い。

SK1009 (第717図)

SK1009は7次調査1区(C-54)で検出された。北側を他の遺構から大きく切られているが、検出面での平面形は主軸を東西にとる $1.0\text{m} \times 0.7\text{m}$ の楕円形で、深さ 0.52m で平坦な床面に達する。床面の規模は隅丸長方形で、西側に6カ所、東側に3カ所、径 $6 \sim 4\text{cm}$ 、深さ $10 \sim 14\text{cm}$ の杭を打込んだと思われる痕跡を検出した。

SK1010 (第718図)

SK1010は7次調査1区(C-54)で検出された。検出面での平面形は主軸を北西-南東にとる $1.0\text{m} \times 0.6\text{m}$ の隅丸長方形で、遺存状態の良い南側での深さは 0.9m を測る。床面は平坦で、 $0.85\text{m} \times 0.5\text{m}$ の隅丸長方形をし、中央部に径 20cm 、深さ 10cm の杭穴があり、その埋上は黄灰色粘質土で硬く、上面には小礫も配されていた。さらに、検出時にはその上面に4カ所、径 4cm 、深さ 5cm の杭を立てた痕跡が検出された。また、その周辺にも3カ所、径 $8\text{cm} \sim 5\text{cm}$ 、深さ約 5cm の柱状痕跡が検出された。

SK1011 (第719図)

SK1011は7次調査1区(C-55)で検出された。検出面での平面形は主軸をほぼ南北にとる $0.95\text{m} \times 0.84\text{m}$ の縦い隅丸長方形で、深さは 0.85m を測る。床面は平坦で、 $0.75\text{m} \times 0.54\text{m}$ の隅丸長方形をし、中央部に径 26cm 、深さ 55cm の杭穴があり、検出時にはその上面に6カ所、径 $5 \sim 4\text{cm}$ 、深さ $40 \sim 50\text{cm}$ の杭を立てた痕跡が検出された。杭穴内の埋上は粘質土で硬く、杭を支えるために選ばれたような感を受ける。

SK1012 (第720図)

SK1012は7次調査1区(C-55)で検出された。検出面での平面形は崩壊しているためか、主軸を北西-南東にとる $1.2\text{m} \times 0.84\text{m}$ の縦い隅丸長方形で、深さは 0.80m を測る。床面は平坦で、 $0.84\text{m} \times 0.4\text{m}$ の隅丸長方形をし、中央部に径 20cm 、深さ 35cm の杭穴があり、短軸方向の上層観察では埋められていた杭状の痕跡が確認されている。また、北隅でも径 10cm 、深さ 15cm の穴が検出された。

SK1013 (第721図)

SK1013は7次調査1区(C-55)で検出された。検出面では他の遺構から切られているが、平面形は主軸をほぼ東西にとる $1.1\text{m} \times 0.68\text{m}$ の隅丸長方形である。深さは 1.12m で、床面の規模は $0.68\text{m} \times 0.5\text{m}$ の隅丸長方形をし、中央部に径 25cm 、深さ 24cm の杭穴があり、その上縁には掌大の扁平礫と小礫が検出された。

SK1014 (第722図)

SK1014は7次調査1区(C-55)で検出された。検出面では崩壊しているためか、平面形は主軸をほぼ南北にとる

1.2m×0.9mの楕円形であるが、深さ0.96mで達する床面は0.73m×0.44mの隅丸長方形をし、中央部に径20φ、深さ40φの杭穴があり、検出時には黄灰色粘質土に褐色粘質土で径4φの6本の杭を3本2列に並べて14φ打込んだ痕跡が確認された。

SK1015 (第723図)

SK1015は7次調査Ⅰ区(C-56)で検出された。検出面では上部が崩壊しているためか、平面形は主軸をほぼ東西にとる1.2m×0.84mの楕円形であるが、深さ0.74mで達する床面は0.57m×0.32mの隅丸長方形をし、中央部に径12φ、深さ35φの杭穴があり、その底面で径4φ、深さ5φの杭状痕跡を確認した。また、陥し穴の底は黒褐色粘質土に覆われ、最深部の杭先も褐色粘質土である。

SK1016 (第724図)

SK1016は7次調査Ⅰ区(B-56・57)で検出された。検出面での平面形は主軸をほぼ南北にとる1.2m×0.95mの長方形である。深さは0.70mで、床面も1.0m×0.7mの長方形をし、中央部に径20φ、深さ20φの杭穴があり、土層観察では、その中に径10φと径5φの杭状痕跡を確認した。さらにその南側でも径8φ、深さ15φの杭状痕跡も確認した。陥し穴底部は黒褐色粘土で覆われ、杭部分は灰褐色粘土である。

SK1017 (第725図)

SK1017は4次調査G区(E-56)で検出された。検出面での平面形は主軸を南北にとる1.3m×0.50mの長楕円形である。深さは0.80mで、床面も1.12m×0.2mの細長い形状をしている。中央部に径28φ×15φ、深さ20φの杭穴がある細長い陥し穴である。

SK1018 (第726図)

SK1018は7次調査Ⅲ区(C-58)で検出された。検出面では他の遺構と切あつているが、平面形は主軸を北西-南東にとる0.88m×0.64mの長方形で、残りの良好な部分での深さは0.66mである。床面の規模は0.72m×0.5mの隅丸長方形をし、中央部に径28φ、深さ38φの杭穴があり、その検出時には黄灰色粘質土に褐色粘質土で径6φの6本の杭を3本2列に並べて10～18φ打込んだ痕跡が確認された。

SK1019 (第727図)

SK1019は7次調査Ⅲ区(H-58)で検出され、主軸はほぼ東西で、検出面での平面形は1.1m×0.73mの楕円形気味であるが、深さ0.82mで達する平坦な床面の規模は0.8m×0.6mの隅丸長方形である。床面中央部からは、径50φ、深さ40φの杭穴がある。

SK1020 (第728図)

SK1020は7次調査Ⅲ区(H-58)で検出された。主軸はほぼ南北にとり、検出面での平面形は0.94m×0.6mの緩い長方形である。深さは0.80mで、床面の規模は0.72m×0.45mの隅丸長方形気味である。床面中央部には、径20φ、深さ30φの杭穴があり、北西隅にも径12φ、深さ20φの穴がある。

SK1021 (第729図)

SK1021は6次調査Ⅱ区(B-58)で検出された。主軸はほぼ東西にとり、検出面での平面形は1.44m×0.72mの長楕円形である。深さは0.90mで、床面の規模は1.03m×0.38mと細長く、床面中央部には、径25φ、深さ45φの杭穴がある。陥し穴底部は灰色粘質土、杭穴内には灰褐色粘土が充填されていた。さらにその粘質土内には小角礫が含まれていた。

SK1022 (第730図)

SK1022は6次調査Ⅱ区(A-B-58)で検出された。検出面での平面形は径1.1mのほぼ円形である。深さは0.62mで、

床面の規模も径 0.8m の円形である。床面には特徴的な装置は確認されなかった。

SK1023 (第 731 図)

SK1023 は 6 次調査Ⅱ区 (C-59) で検出された。主軸は北西-南東にとり、検出面での規模は 1.3m × 0.85m で、東側の壁上部崩落したためか不整形な長楕円形である。深さは 0.70m で、床面の規模は 1.05m × 0.44m と細長く、床面中央部には、径 23φ、深さ 15φ の杭穴がある。陥し穴底部は暗褐色、杭穴内は黒褐色の粘質土が充填されており、さらに小礫も出土した。

SK1024 (第 732 図)

SK1024 は 6 次調査Ⅱ区 (B-59) で検出された。主軸は南北にとり、検出面での規模は上部が崩落のため 1.45m × 1.0m の不整形な長楕円形である。深さは 1.0m で、床面の規模は 0.7m × 0.5m の長方形で、床面中央部には、径 22φ、深さ 28φ の杭穴があり、底部からは小礫も確認された。遺構内は底部に灰黄褐色や褐灰色の粘質土。杭穴内には灰色の粘質土が充填されている。

SK1025 (第 733 図)

SK1025 は 6 次調査Ⅱ区 (A・B-59) で検出された。主軸は北西-南東にとり、検出面での規模は 1.0m × 0.73m の隅丸長方形である。深さは 0.7m で、床面の規模は 0.7m × 0.5m の隅丸長方形である。床面中央部には、径 20φ、深さ 10φ の暗灰色粘質土で埋められた杭穴があり、その上面や内部には小礫が含まれている。

SK1026 (第 734 図)

SK1026 は 6 次調査Ⅱ区 (C-59) で検出された。主軸は北西-南東にとり、検出面での規模は 1.0m × 0.9m のほぼ円形である。深さは 0.7m で、床面の規模は 0.6m × 0.42m の長楕円形である。床面中央部には、底部で確認された黄褐色粘質土に径 4φ の杭 6 本を 3 本 2 列に約 10φ 打込んだ痕跡を確認した。

SK1027 (第 735 図)

SK1027 は 6 次調査Ⅱ区 (C-59) で検出された。主軸は北西-南東にとり、検出面での規模は 1.54m × 1.22m で東北側が不整形な楕円形である。深さは 0.8m で、床面の規模は 1.0m × 0.52m の長方形である。床面中央部には、径 30φ、深さ 50φ の灰色粘土で埋められた杭穴があり、その上面を含め遺構下部は粘質土で埋まっている。上面で検出された礫は直接関係はない。

SK1028 (第 736 図)

SK1028 は 6 次調査Ⅱ区 (D・E-59) で検出された。主軸は北西-南東にとり、検出面での規模は 1.26m × 0.90m で長方形である。深さは 0.8m で、床面の規模は 0.8m × 0.55m の緩い長方形である。床面中央部には、径 20φ、深さ 15φ で小礫を含む褐色粘土が充填した杭穴があり、その上面を含め遺構下部は粘質土で埋まっている。

SK1029 (第 737 図)

SK1029 は 6 次調査Ⅱ区 (E-59) で検出された。主軸はほぼ東西にとり、検出面での規模は 1.08m × 0.93m の楕円形である。深さは 0.55m で、床面の規模も 0.82m × 0.60m の楕円形である。床面中央部には、径 6φ、深さ 10φ の杭状痕跡が中心杭を囲むように円形に 7カ所検出されている。それらを含め遺構下部は粘質土で埋まっている。

SK1030 (第 738 図)

SK1030 は 6 次調査Ⅱ区 (D-60) で検出された。主軸は北西-南東で、検出面での規模は 0.98m × 0.9m の不定形をしており、深さは 0.85m で、床面の規模も 0.66m × 0.53m の不定形である。床面中央部には、径 40φ、深さ 50φ の褐色粘質土が充填した杭穴があり、検出時にはその上面で径 5φ、深さ 20φ の杭が 7 本、3 本 2 列、その間に 1 本で配されている痕跡が確認された。

SK1031 (第739図)

SK1031は6次調査Ⅱ区(E-60)で検出された。主軸はほぼ東西で、他の遺構と切合うが、検出面での規模は1.30m×0.71mの長方形をしており、深さは0.95mで、床面の規模も1.01m×0.48mの長方形である。床面中央部には、径34cm、深45cmの褐色粘質土が充填した杭穴が検出された。

SK1032 (第740図)

SK1032は6次調査Ⅱ区(E-60)で検出された。主軸は北西-南東で、上部が鼠道でかなり削平されており、検出面での規模は0.95m×0.71mの長方形で、深さは0.11mしか残されず、床面の規模も0.86m×0.58mの長方形である。床面中央部には、径40cm、深さ55cmの粘質土が充填した杭穴が検出された。

SK1033 (第741図)

SK1033は6次調査Ⅰ区(G-60)で検出された。主軸は北西-南東で、検出面での規模は1.32m×0.71mの長楕円形、深さは1.0mで、床面の規模も1.01m×0.47mの長楕円形である。床面中央部には、径25cm、深さ30cmの小礫を含む灰色粘質土が充填した杭穴が検出され、検出時の上面では径4cm、深さ20cmの杭状痕跡が確認された。

SK1034 (第742図)

SK1034は6次調査Ⅰ区(G-60)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.05m×0.62mの長楕円形、深さは0.52mで、床面の規模も0.61m×0.33mの長楕円形である。床面中央部には、径22cm、深さ25cmの黄褐色粘質土が充填した杭穴が検出され、検出時の上面では径8cm、深さ28cmの杭状痕跡が2カ所確認され、東側には焼石が埋められていた。

SK1035 (第743図)

SK1035は6次調査Ⅰ区(H-60)で検出された。主軸はほぼ東北-南西で、検出面での規模は0.94m×0.74mの楕円形で、深さは0.81m、床面の規模も0.58m×0.30mの長楕円形である。床面中央部には、径25cm、深さは25cmで2段になる。検出時の上面には径8cm、深さ10cmの杭状痕跡が2カ所確認され、その間に扁平な小礫が挟まるような状態で検出された。

SK1036 (第744図)

SK1036は6次調査Ⅰ区(I-60)で検出された。主軸はほぼ北西-南東で、検出面での規模は1.18m×0.75mの楕円形で、深さは0.81m、床面の規模は0.71m×0.48mの緩い長方形である。床面中央部には、径23cm、深さは40cmの杭穴があり、検出時の上面には径6cm、深さ40cm以上の杭状痕跡が2カ所確認された。この杭を支えるように陥し穴底部に厚さ15cmの粘質土で固められ、さらに小礫2個で補強されていた。

SK1037 (第745図)

SK1037は6次調査Ⅰ区(J-61)で検出された。大部分が調査区外に延びているため、全容は不明である。確認できる深さは0.65であるが、それ以上ある。下部には粘質土が貼られている。

SK1038 (第746図)

SK1038は6次調査Ⅲ区(C-60)で検出された。主軸はほぼ北西-南東で、上部はかなり削平されているが、検出面での規模は0.92m×0.52mの楕円形で、深さは0.26m残り、床面の規模は0.91m×0.49mの緩い長方形である。床面中央部には、径15cm、深さは25cmの杭穴があり、中は明黄褐色や黄褐色の粘質土で埋まっていた。

SK1039 (第747図)

SK1039は6次調査Ⅰ区(F-61)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.01m×0.60mの緩い長方形で、深さは0.71m残り、床面の規模は0.81m×0.41mの緩い長方形である。床面中央部には、径22cm、深さは27cmの杭穴があり、

遺構の下部には10^号の厚さの明黄褐色粘質土が貼られ、その中や杭穴には杭を支えるため礫が混在していた。

SK1040 (第748図)

SK1040は6次調査1区(F-61)で検出された。主軸はほぼ北西-南東で、検出面での規模は1.3^号×0.67^号の不整形な長楕円形で、深さは0.8^号残り、床面も1.05^号×0.48^号の不整形な長楕円形である。床面中央部には、径30^号、深さは46^号の杭穴があり、遺構検出時には杭状痕跡が4ヵ所確認された。陥し穴の下部には褐灰色粘質土が10^号の厚さで貼られ、その中や杭穴には杭を支えるため礫が混在し、杭穴の底には杭状痕跡が認められた。

SK1041 (第749図)

SK1041は6次調査1区(G-61)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.3^号×0.84^号の緩い長方形で、深さは0.65^号残り、床面も0.95^号×0.67^号の緩い長方形である。床面中央部には、径25^号、深さは35^号の杭穴が検出された。

SK1042 (第750図)

SK1042は6次調査1区(G-61)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.14^号×0.7^号の不整形な楕円形で、残りの良好な場所で深さは0.73^号で、床面は0.8^号×0.45^号の緩い長方形である。床面中央部には、径30^号、深さは35^号の杭穴が検出され、その検出面では径5^号、断面では深さ20^号前後の杭状痕跡が8ヵ所確認できた。また、陥し穴下部は厚さ7^号に暗褐色粘質土が貼られている。

SK1043 (第751図)

SK1043は6次調査1区(G-61)で検出された。主軸はほぼ東北-南西で、検出面での規模は1.2^号×0.75^号の楕円形で、深さは0.7^号、床面は0.7^号×0.4^号の緩い長方形である。床面南西寄りには径5^号~12^号、深さ20^号前後の杭穴が検出された。この陥し穴で下部も厚さ10^号前後の黒褐色粘質土が貼られている。

SK1044 (第752図)

SK1044は6次調査1区(H-61)でSK1045を切った状態で検出された。主軸はほぼ北西-南東で、検出面での規模は1.25^号×0.83^号の長方形で、深さは1.0^号、床面は0.94^号×0.52^号の隅丸長方形である。床面南西寄りには径15^号と20^号、深さ20^号、前後の杭穴が2ヵ所検出された。この2ヵ所には少なくとも5本以上で深さ15^号前後の杭状痕跡が観察された。この陥し穴で下部も厚さ10^号前後の黒褐色粘質土が貼られている。

SK1045 (第753図)

SK1045は6次調査1区(H-61)でSK1044に切られた状態で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面の規模は1.05^号×0.87^号の長方形で、深さは0.9^号、床面は0.75^号×0.53^号の隅丸長方形と考える。床面中央には径30^号、深さ40^号の杭穴が検出された。この杭穴からは径10^号、深さ15^号の杭状痕跡が2ヵ所観察され、それを支えるように、小礫も配されていた。

SK1046 (第754図)

SK1046は6次調査1区(J-61)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.02^号×0.8^号の小判形で、深さは0.65^号で、床面も0.98^号×0.7^号の小判形と考える。床面中央は緩く窪み、径22^号、深さは2段で25^号になり、最深部の径は5^号の杭状痕跡が検出され、小礫が置かれていた。

SK1047 (第755図)

SK1047は6次調査1区(I-61)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は1.0^号×0.65^号の不整形な楕円形で、深さは0.8^号である。床面は0.64^号×0.44^号の小判形で、床面中央は緩く窪み、径30^号、深さ26^号の杭穴が検出され、その検出面で径5^号、深さ12^号前後の杭状痕跡を確認した。また杭穴には扁平礫も埋められていた。

SK1048 (第756図)

SK1048は6次調査1区(I-61・62)で検出された。主軸はほぼ南北で、検出面での規模は13%×09%の縦い長方形で、深さは05%で、床面も09%×05%の縦い長方形である。床面は平坦でなく、特徴的な装置や粘質土の貼りも観察できず、陥し穴ではない可能性が高い。

SK1049 (第757図)

SK1049は6次調査1区(I-61・62)で検出された。主軸はほぼ北西-南東で、検出面での規模は13%×08%の楕円形で、深さは11%である。床面も113%×06%の楕円形で、床面のほぼ中央に径26%、深さ40%の杭穴が検出され、その検出面で南北方向に並ぶ径5%の杭状痕跡を3本確認し、断面観察では、杭穴下部に突き出た部分があり、55%埋まっていた可能性がある。また陥し穴の下部には厚さ20%の褐灰色粘質土が貼られている。

SK1050 (第758図)

SK1050は6次調査1区(I-62)で検出された。主軸はほぼ東西で、検出面での規模は135%×114%の不整楕円形で、深さは09%である。床面も105%×075%の不整楕円形で、床面のほぼ中央に径26%、深さ48%の杭穴が検出され、その検出面で東西方向に並ぶ径5%の杭状痕跡を3カ所確認し、断面観察では、深23%埋まっていた杭状痕跡を3本確認した。また杭穴内にはそれを支えるためか、礫も検出した。さらに陥し穴の下部には10%の厚さで黄褐色粘質土が貼られていた。

SK1051 (第759図)

SK1051は6次調査1区(J-62)で検出された。主軸はほぼ北東-南西で、検出面での規模は112%×070%の長楕円形で、深さは075%である。床面も071%×038%の長楕円形で、床面中央に径12%、深さ10%の杭穴が検出され、その検出面で径5%の杭状痕跡を2カ所確認した。粘質土は杭穴に充填されている。

SK1052 (第760図)

SK1052は6次調査1区(I-62・63)で検出された。主軸は南北で、検出面での規模は126%×10%の卵形で、深さは060%である。床面は068%×058%の縦い台形で、床面の北東寄りに径26%、深さ37%の杭穴が検出され、その検出面で径5%、断面で35%の杭状痕跡を確認した。

SK1053 (第761図)

SK1053は6次調査1区(H-63)で検出された。主軸はほぼ北東-南西で、検出面での規模は096%×074%の楕円形で、深さは07%である。床面も076%×060%の楕円形で、床面中央に径16%、深さ17%の杭穴が検出され、その検出面で径5%、深さ11%の杭状痕跡を確認した。また粘質土は陥し穴の下部に10数%の厚さで貼られている。

SK197 (第655図)

調査区B-57に位置する。廻りが崩れているが、本来は南北065%、東西125%ほどの方形の土坑で、深さは09%である。床面には直径約02%、深さ015%の穴があいている。形状から考えると陥し穴と思われる。出土遺物は無い。

3) 土坑

SK005 (第475図)

調査区G-3に位置する。東西12%、南北07%の楕円形を呈し、深さ015%の規模で、東側に深さ015%の柱穴がある。遺物は第145図1868の縄文土器深鉢である。内外面ともに糸痕文を施す。出土遺物から、この土坑の時期は縄文時代後期のものである。

4) 小結

隼山遺跡の調査は、台地を東西に横断し広範囲にわたり行われた。しかし、検出した遺構は陥し穴のみであった。

陥し穴は、台地の西端にあたる6次調査区で32基確認され、隣接する4次や7次を併せると、その数は40基以上となった。時期を明確にすることができないが、縄文時代の所産と考えられる。台地の西端に集中することから、台地上から台地西側の平野部へ下る獣道があり、そのルートを中心に配置されたものと推定することができる。土器などの出土がほとんどみられないことから、近接した位置に集落は存在しなかったものと考えられる。同様な陥し穴がまとまって検出された遺跡として、本遺跡の東北約1kmに位置する黒水遺跡がある。黒水遺跡は、台地に切れ込む谷に面しており、谷に下る獣道を意識して陥し穴を配置したものであろう。やはり、出土遺物はほとんどなく、日常の生活域とは離れた場所にあったと思われる。今回確認した陥し穴は、底面に杭を立てるものであるが、杭の立て方に二つのタイプがあることが分かった。Aタイプは、底面に柱穴状の穴を掘り、その中に複数の杭を配置し土を埋め戻し杭を固定するもの、Bタイプは、杭を1本ずつ突き刺すように直接床面に立てるものである。このような底面の杭の立て方についての詳細が把握できたのは、県下初のことである。

遺物は、弥生時代の遺構や包含層などから出土した。土器が極めて微量であるなか、扁平打製石斧が一定量認められるのは注目される。完形品もあるが、破損品が多数を占める。東九州における縄文時代では、後期後半から晩期にかけての遺跡から扁平打製石斧がまとまって出土する。しかし、諫山遺跡ではこの時期の土器は数点確認されたのみである。この状況から、打製石斧が縄文時代後晩期の所産であるとすれば、本遺跡の地は集落から離れた畑地で、耕作に使用された扁平打製石斧が残され、一部が弥生時代の竪穴建物跡の埋土に混入したと解釈できる。しかし、水田耕作に不可欠な台地上に集落を形成する諫山遺跡の状況は、大野川上中流域の火山が台地上に立地する弥生時代後期から古墳時代前期の集落と共通するものがみられる。これら大野川流域の遺跡でも扁平打製石斧の出土が確認されるが、縄文時代後晩期と時代的に重複する場合も多いため、縄文時代遺物の混入として捉えられる傾向にあった。本遺跡の状況を考えた時に、扁平打製石斧が縄文時代の所産と単純に考えるのは躊躇され、その使用年代や畑作との関係について再考する必要がある。(後藤一重)

第2節 弥生時代から古墳時代前期

1) 概要

諫山遺跡からは縄文時代から近世までの遺構や遺物が確認されている。その中で、弥生時代から古墳時代初頭の集落から得た資料が質・量共に主体を占める。すなわち、この時期の豊前南部地域の集落を構成するあらゆる要素が良好な状態で含まれていると考える。

集落を構成する主要遺構は竪穴建物であるが、明確に確認できたのは弥生時代中期から古墳時代初頭の竪穴建物である。中期は北部九州と同様に円形竪穴建物が主体を占める。内部構造も中心に炉跡があり、柱穴も円形に配置されているが、豊前北部地域に比較すると小型が目立つ。後期になると方形竪穴建物が主体を占めるが、円形竪穴建物も数を減じながら存続する。また方形竪穴建物は、花卉形作匠の影響を受けたものか、張り出し部を持つものが目立つ。数量的には弥生時代後期の竪穴建物が圧倒的に多く、激しく切合っており、同じ集落内で建て替えが繰り返されていることがわかる。また、内部構造も中央に炉跡、2～4本柱、両側にベッド状遺構が付き、磨湾が廻る。この形態は古墳時代初頭まで継承される。

土坑も数多く検出された遺構であるが、明らかに目的をもって構築された袋状貯蔵穴と、用途不明で形状も多様な土坑もある。袋状貯蔵穴は床面形が円形と方形があり、弥生時代前期末から中期初頭に特徴的な遺構で、床面から完形品の土器が出土する場合が多い。また土坑は用途が多様なためか、前期末から後期の各時期のものが検出されており、形態も多様である。また、土坑内からは遺物が多く出土する廃棄土坑がある一方、ほとんど遺物が出土しない土坑もある。

柱穴状遺構は数量的に最も多く検出された遺構である。これらは掘立柱建物や櫛列など複数で構造物を構成するものが一般的である。諫山遺跡でもこうした遺構が含まれるであろうが、この時期のそれは明確に区別することができない。なお、柱穴状遺構と小規模な土坑は明確に区別できず、検出向で50%程度のものを任意的に判定した。

こうした集落跡ではあるが、糞棺・石蓋土坑・石棺などの埋葬遺構も確認されている。これらの埋葬遺構は石蓋土坑が並んで検出された以外は、集落内に分散しており、墓域を形成していない。また、規格も長さがいずれ前後で、成人用とは考えられない。集落内に埋葬された小児墓と考える。

遺構の形状は不明であるが、土器が集約的に出土する場所も確認された。それ以外にも、遺構検出に至るまでに多

くの遺物が出土したが、これらは下位の遺構に属していたと考えられるが、区別できなかった。こうした遺物は、前者を土器層、後者を包含層出土の遺物として報告を行う。

以上のような遺構からは、各時期の土器や石器をはじめ、鉄器や青銅製品が出土している。土器は竪穴建物跡や上坑の埋没時の窪みに多量に廃棄された状態で出土するものが多い。このため、前期や中期の土器は土坑から、後期は竪穴建物からまとまって得られた。これらの土器群からは、地域的特徴を知ることができた。また、九州でも瀬戸内海に面しているため、北部九州系と瀬戸内系の土器が併存して出土しており、両者の関係の一端が明らかになった。前・中期の器種は、壺・甕・高坏に蓋や長頸壺が加わる程度であるが、後期の土器群は器種分化が激しく、壺形土器・甕形土器・高坏・鉢・長頸壺・脚付鉢・器台があり、さらにそれぞれの器種に器形の多様化が見られる。

石器は多様で、弥生時代に特徴的な磨製石器は狩猟・武器である磨製石鏃、収穫具の多量の石包丁、武器祭祀具の石剣（矛）・石戈、木材伐採や加工用の蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの各種石斧、鉄器を対象したと考えられる砥石がある。これに対し、縄文系石器として、狩猟・武器である打製石鏃、加工用の石匙、土掘具と考えられている多数の扁平打製石斧、調理具と想定されている各種の敲石・磨石・石皿が出土している。これらの石材は、磨製石包丁に立岩産石材、扁平打製石斧には結晶片岩、打製石鏃に姫島産黒曜石が一部で使用されている。以上の他多数の剥片も出土しており、集落内で石器製作を行っていた痕跡とみることができる。

鉄器の出土は、大型製品である鉄鏃（3382）が出土しているが、砥石の出土量に比較すると少ない。この地域の粘質土壌に影響され、鉄鏃やヤリガンナ・摘具などの小型品は消滅した可能性が高い。青銅製品では仿製内行花文鏡（3324）が1面のみ出土している。

2) 竪穴建物

ここでは、古墳時代に属する第Ⅷ期（庄内並行）までの建物を扱うこととする。

SH001（第304図）

調査区F・G-7・8に位置する。北側が調査区外に及び、東西4.0～4.15m、南北が現状で3.6mである。方形を呈するものと思われ、北側に高さ0.05mのベッド状遺構が付く。床面までの深さは0.15mである。中央に長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mの楕円形を呈する炉跡があり、炉跡の最下層に焼土混じりの土が堆積する。主柱穴は1本で、炉跡の南側に位置する。炉跡の北側にも柱穴があるが、やや浅く補助的な役割を担うものであろう。また、東壁近くに一辺約1.0m、深さ0.1mの略方形の土坑が、南辺中央に長径0.7m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑が各々ある。ベッド状遺構は、地山削り出し後、黒色土塊を含む暗黄褐色土で整上成形する。

遺物は第20図1～8で、1～4は弥生土器鉢、5は砥石、6、7は打製石斧、8は敲石である。1は口径10cm以下の小型品である。底部は丸底で、内湾気味の体部が口縁部にいたる。口縁部はやや肥厚きみである。2～4は口径13～15cmである。2は平底気味の丸底底部から直線的な体部が斜方向に立ち上がり口縁にいたる。3は丸底の底部から内湾する体部が立ち上がり、口縁部付近はほぼ直立する。4は底部平底気味で、やや内湾する体部が口縁部にいたる。5は砥石の欠損品である。6、7は扁平打製石斧で、両者とも欠損品である。8は敲石。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅧ期である。

SH002（第305図）

調査区L-7に位置する。南西部がわずかに調査区外に及ぶが、東西5.2m、南北4.4mの長方形を呈する。削平が著しいため壁の立ち上がりは大半が失われているが、残存する部分で0.05mである。竪穴の廻りである東西の壁に沿い、幅0.9m、高さ0.05mのベッド状遺構が付される。竪穴内に多数の柱穴がみられるが、その大半は東西に連なる柱穴帯を構成するものである。主柱穴は2本で、東西の主軸上のベッド状遺構が立ち上がる位置にある。炉跡は床面中央にあり、径0.8m、深さは0.2mの円形を呈する。炉跡の壁内には焼土粒や炭粒が混じるが、まとまった焼上りや焼きしまった箇所は確認できなかった。また、南辺中央付近に東西1.25m、南北0.9m、深さ0.25mの土坑がある。この土坑の東側にも深さ0.1mの方形基調の土坑があり、内部より白色粘土が少量出土した。ベッド状遺構は地山を削りだした後、半分程度は黄色土混じりの黒色土を盛っている。

遺物は第20図9である。9は弥生時代中期の壺底部である。本竪穴に伴うものではなく、流れ込みである。

良好な出土遺物がないため、本竪穴建物の時期は不明であるが、竪穴の形状から弥生時代後期の所産であろう。

SH003 (第306図)

調査区H-8・9に位置し、SH004を切る。南西-北東に主軸をもつ長方形を呈する。長辺4.3m、短辺3.4mで、深さは0.2mである。主柱穴は1本で、長軸線上の中央からやや北に寄った位置にある。床面中央には、0.7m×0.5m、深さ0.15mの楕円形を呈する炉跡がある。炉跡内に焼上塊や焼きしまった箇所はなく、埋土の下層に焼土が混じるのみである。東辺やや北寄りの壁際には、0.7m×0.5m、深さ0.2mの土坑がみられる。

遺物は第20図10～16で、10～14は弥生土器壺、鉢、脚部、15は磨製石剣、16は磨製石鎌である。10、11は壺である。10は口縁部が外方にくの字状に折れる。11は弥生時代中期の所産で流れ込みと思われる。口縁部の折れが強く、胴部がほとんど張らない。15は磨製石剣の破片である。両面とも稜があまり明確ではなくやや丸みを帯びるが、刃部は鋭く仕上げられている。16は柳葉形を呈するもので、幅に比し長さが多い。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はVI期である。

SH004 (第308図)

調査区H-8・9に位置し、北西隅をSH003に切られる。また、本竪穴の南東に位置する第5号竪穴を切る。竪穴は一辺5.1mの方形を呈し、深さは0.15～0.2mである。北壁と南壁に沿い、幅1.2m、高さ0.05～0.1mのベッド状遺構が付く。ベッド状遺構は黒色土ブロックを含む暗黄褐色土を盛っている。この盛土中には土器片が入っており、土器片が混じる土を使いベッド状遺構を成形したことがわかる。主柱穴は2本で、南北方向の主軸上のベッド状遺構が立ち上がる位置にある。炉跡は中央に位置し、径0.8m、深さ0.05の円形を呈する。焼土混じりの黒土がみられる。東辺中央の壁際には長径1.0m、短径0.8mの土坑がある。

遺物は第21・22図17～51で、17～45は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、器台、46～48は石包丁、49～51は磨石である。17～19は複合口縁壺の口縁部である。17、18の口縁部はやや外反し、短く内傾して立ち上がる。19はほぼ直立気味に立ち上がり、口縁短部が短く外方に折れる。20は胴部資料で、断面方形の突帯が付く。21～23は壺の口縁部から胴部上半である。口縁部はくの字状に折れ、胴部は長胴気味である。22は胴部外面にタタキ痕が残る。27～36は高坏である。このうち、27～32は坏部で、27～31は坏部中程に稜をもち、上半が外反し口縁にいたる。この中には、上半のあまり発達せず外反が顕著でないもの(27)、上半部が発達し外反が顕著なもの(31)、両者の中間的な形態をなすもの(28～30)などがある。32は内湾して口縁にいたるもので、坏部の最大径は中程にある。33～36は脚部である。33は坏部と脚部の接合部で、筒状の脚部に粘土を充填したもの。34は長脚で、裾部に円形の透かし穴がある。35は低脚。36は上半が円柱状を呈し、下半部がハの字状に開く。37～40は鉢である。37は胴部が半球形を呈し、口縁部がくの字状に折れる。38は口縁部が狭く外反する。39は小型品で、平底を呈する。40は球形の胴部で、底部はわずかに平底が残る。24～26、41、42は底部である。24は壺で平底を呈する。胴部外面には、タタキ痕が残る。25、26は壺で、25は凸レンズ状の平底、26は平底を呈する。41は円盤貼付状のしっかりした平底である。42は甕の底部で、焼成前の穿孔がみられる。46～48は石包丁である。このうち48は刃部は外湾し、中央上部に2ヶ所の穿孔がある。49～51は磨石である。49は下面が磨られ、上面中央に敲打痕が残る。50は各面を磨面として使用し、両端部には敲打痕が残る。51は上面と下面が磨面である。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はVII期である。

SH005 (第307図)

調査区I-8・9に位置し、北西コーナー付近をSH004に切られる。本竪穴は側平が著しく、床面も本来の姿を留めない。部分的に壁がわずかに残ることから、一辺4.5mの方形を呈するものと思われる。現状でベッド状遺構の存在について手がかりはないが、存在した可能性は十分にある。主柱穴は東西の主軸上に2本配しており、柱穴間距離は2.5mである。主柱穴の中間に、0.75×0.55m、深さ0.25mの上坑があり、これが炉跡と考えられる。しかし、焼土等は出土していない。また、炉跡の南側には、炉跡と壁の中間に長径1.0m、短径0.75m、深さ0.2mの楕円形の土坑がある。土坑内には東西に並ぶように、2本の浅い柱穴がみられる。

図示できた遺物は、第23図52のみである。52は副片の側縁に調整を施し板状に整えたもので、一部に磨かれた

痕跡がある。磨製石剣等の未成品の可能性が考えられる。

良好な出土遺物がないが、堅穴の形状や他遺構との切り合い関係から、弥生時代後期の所産と推定される。

SH006 (第313図)

調査区 K・L-8・9 に位置する。一辺 28cm、深さ 0.05～0.1m の小型方形の堅穴建物で、南東コーナー付近を除いて幅 0.15～0.25m、深さ 0.05m の周溝が巡る。東西に連なる柱穴帯に切られるため本来の姿が分かり難いが、中央付近の床面に焼土がわずかに残存する。主柱穴は 1 本で、炉跡の南側 0.6m の位置にある。

遺物は第 23 図 53～55 で、いずれも弥生土器である。53 は甕の上半部である。胴部はほとんど張らず頸部から底部にいたる。口縁部は頸部から外方に強く折れ、端部がやや肥厚する。54 は外面にタタキ痕が残る破片である。55 は甕の底部で、厚底を呈する。

出土遺物に混入がみられるが、本堅穴建物の時期は弥生時代後期か。

SH007 (第309図)

調査区 G・H-9 に位置する。長辺 5.1m、短辺 4.6m、深さ 0.2m のほぼ方形を呈する。SH008 に南西隅を切られ、弥生時代中期の第 9 号堅穴建物と切る。炉跡は中央にあり、径 1.1m、深さ 0.1m の円形を呈する。炉跡底面には径 0.4m の薄い焼土層が認められるが、埴土に焼土や炭はみられない。堅穴内の北西隅には、長さ 2.2m、幅 1.2m、高さ 0.1m の盛土成形によるベッド状遺構がある。主柱穴は 2 本で、南東―北西の主軸上にある。また、東辺中央の壁際には、一辺約 1.0m、深さ 0.1m の方形土坑がある。

遺物は第 23 図 56～63 で、56～61 は弥生土器壺、甕、器台、高坏、62 は磨製石斧、63 は砥石である。56 は無頸甕である。小型品で、胴部中に最大径をもち、窄まるように口縁部にいたる。口縁部は上方にわずかに引き上げられる。57 は短頸甕である。底部は平底で、胴部は張らず胴部中程が最大径となる。口縁部は短く直立気味に立ち上がる。胴部外面にタタキ痕がみられる。61 は把手状のものである。59 は小型の器台の底部と思われ、器壁が厚い。60 は高坏脚部である。円柱状を呈する上半部から底部に向かいの字状に大きく開く。60 は器台と思われ、外面にはタタキ痕が残る。62 は扁平な磨製石斧の欠損品である。63 は砥石の欠損品である。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅥ期である。

SH008 (第310図)

調査区 H-9 に位置し、SH007 と SH009 を切る。南北 4.3～4.5m、東西 4.2～4.3m、深さ 0.3m の方形を呈するもので、東壁及び西壁に沿って幅 1.0m のベッド状遺構が付く。ベッド状遺構の床面からの高さは 0.15～0.2m あり、本遺跡のなかでは比較的高いが、床面からの立ち上がりは斜めである。ベッド状遺構は、黒色土泥じりの黄褐色土による盛土で成形されている。床面は中央付近で、数段の薄い貼床が認められるが、他は地山を削り出したままである。炉跡は中央にある。0.6m×0.7m、深さ 0.1m のしっかりした方形を呈する。炉跡底面には焼土層が残る。主柱穴は 2 本で、東西の主軸上に位置する。また、南辺中央の壁際には一辺 0.5m、深さ 0.15m の方形基調の土坑がみられるが、先行する第 9 号堅穴建物の主柱穴のひとつと重複している。このほか、炉跡北東に径 0.7m、深さ 0.15m の円形土坑がある。

遺物は第 24 図 64～69 で、64～67 が弥生土器壺、鉢、68 が砥石、69 が扁平打製石斧である。64 はド城式の甕で、口縁下に刻み目突帯が付される。混入品と考えられる。65 は小型の脚付き鉢で、胴部は球状を呈する。66、67 は鉢で、両者とも口径に比し高さが低い。66 はわずかに内湾気味の体部が口縁にいたる。67 は 66 に比べ内湾が顕著で、口縁はほぼ直立する。68 は長方形を呈する砥石。69 は扁平打製石斧の欠損品。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅦ期である。

SH009 (第311図)

調査区 H-10 に位置する。大型の円形堅穴建物であるが、ほぼ東半分を SH007、SH008、SH010 により切られている。残存部から規模を復元すると、径 8.0m ほどになると思われ、深さは 0.1～0.15m である。床面の中央に、長さ 1.2m、幅 0.9m、深さ 0.4m の不定形気味の土坑がある。土坑内において焼土や炭などは出土していない。主柱穴は、中央の土坑を中心に 9 本が円形に配置されている。これらは 1.2～2.0m の間隔で建てられているが、南側の部分におい

て間隔が3.0%の箇所がある。この方向に入口施設があった可能性が高い。

遺物は第24図70～81で、70～76は弥生土器壺、甕、77と78は磨石、79は敲石、80と81は砥石である。70、71、73は甕である。70、71は口縁部で、頸部から大きく外反し口縁にいたる。口縁部は端部が肥厚し角張る。73は胴部上半から頸部にかけてのもので、肩が張った胴部から頸部が垂直気味に立ち上がる。72、74～76は甕である。72は口縁部が逆し字状気味に強く折れ、口縁端部が上方につまみ上げられる。74も口縁部が外方に比較的強く折れる。75、76は底部である。76は厚底を呈するが、75は底部が比較的薄い。77、78は磨石で、中央部や端部に敲打痕があり、敲石としての使用があったことが分かる。79は敲石で、両端面に敲打痕がある。80、81は砥石である。80は全ての面が研ぎ面として利用されている。81は残存する2面とも研ぎ面である。

出土遺物から、本壑穴建物の時期はIII期である。

SHO10 (第312図)

調査区I-9・10に位置する。壑穴は南北に長軸をもつ長方形で、長辺6.0%、短辺4.7%、深さ0.25%である。南西隅を第11号壑穴建物により切られている。短辺の北壁及び南壁に沿い、幅1.1%、高さ0.1%のベッド状遺構がある。ベッド状遺構は、暗黄褐色土による盛土で成形されている。床面も同様な土による層厚数%の貼床がみられる。炉跡は床面中央にあり、長さ0.8%、幅0.6%、深さ0.1%の略方形を呈する。炉跡底面には径0.25%の薄い焼土層が残る。主柱穴は長軸線上に2本を配する。このうち、南側の主柱穴はベッド状遺構の下及び上に2本あり、主柱穴の継ぎえがあったことが分かる。また、東壁に接して長径1.1%、短径0.7%、深さ0.2%の土坑がある。床面は、炉跡周辺の中央部が硬化している。

遺物は第25・26・28図82～106、131で、82～101は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、器台、支脚、102は土製勾玉、103は砥石、104～106、131は石鏃、扁平打製石斧などの石器である。82、83は複合口縁壺で、大きく外反する頸部から口縁部が内傾して立ち上がる。84、85は短頸壺である。肩から胴部中程にかけ大きく張り、口縁部は短く外傾し立ち上がる。85は頸部に断面三角形の突帯が付される。86～91は甕である。86、87は口縁部が短くし字状に外方に折れた形状をなす。88は下城式、口縁下に1条の刻目突帯が付される。89は小壺形で最大径が口縁部にあり、わずかに括れた頸部から口縁部が短く外傾する。底部はやや不安定な平底である。90は底部平底で、球状を呈する胴部から口縁部がくの字状に折れる。91は長胴で、口縁部がくの字状に折れる。92、93は底部資料である。92は平底、93は丸底である。94は高坏の坏部で、上半が直立気味に立ち上がったのち外反する。95も高坏の坏部か。口縁部が短く外方に折れる。96～98は鉢である。96、97は半球形を呈し、97の底部は粘土貼り付けにより小さく突起する。98は球状の器形を呈し、口縁部が短く外方に折れる。99～101は器台である。99、100は筒型を呈するが、中程で括れ口縁部と底部に向かい大きく広がる。101は杵形器台とも呼ばれる支脚である。受け部面の中央に円孔があり、一端に器を支えるための突起が付く。102は、長さ2.3%の土製勾玉である。頭部に穿孔があり、わずかに尾の部分で屈曲する。104は完形の砥石で、上下面、両端面、両側面の6面全てを研ぎ面として使用している。103は石鏃である。105、106は扁平打製石斧で、両者とも長さ約8センチの小型品である。131は磨製石斧で刃部を欠く。

明らかに混入品と思われるものもあるが、出土遺物から本壑穴建物の時期はVI期である。

SHO11 (第314図)

調査区I-10に位置し、SHO10、SHO12を切る。長辺5.5～5.7%、短辺5.0%、深さ0.3～0.4%で東西方向に長軸をもつ長方形を呈する。このうち、東壁付近は削平が著しいため、壁の立ち上がりが残存しない。短辺の東壁と西壁に沿い、幅1.0%ほどのベッド状遺構が各々付く。ベッド状遺構は、黒色土と地山の黄褐色土による盛土成形である。床面についても、同様な土を用いた層厚数%の貼床が認められる。炉跡は中央からやや北に寄った位置にある。一辺0.8%、深さ0.15%の方形を呈し、底面に焼土層が残る。主柱穴は2本で、長軸線上の床面に配している。また、南辺中央の壁際には、径0.8%、深さ0.2%の土坑がある。

遺物は第26図107～116で、107～113は弥生土器壺、甕、鉢、114は石鏃、115は砥石、116は鉄製品である。107、108は甕である。107は頸部から口縁に向かい大きく外反する。108は底部平底で、胴部は球状を呈する。やや外傾しながら、軽傷から口縁に向かい立ち上がる。109は脚付き甕である。長胴を呈し、口縁部はくの字状に折れる。111～113は鉢である。111は半球形を呈するもので、底部丸底である。112は半球形の胴部から口縁部がくの字状

に折れる。113は球形の胴部でわずかに平底が残る。短い口縁部は外しながら立ち上がる。110は丸底の底部である。114は石鏃で、先端部と片方の脚を欠く。115は砥石で、上下面、両側面、両端面を研ぎ面としている。116は鉄製の刀子で、先端部と基部を欠く。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH012 (第315図)

調査区J-10に位置し、SH011より北側が切られる。加えて、東側は削平が著しく、壁の立ち上がりが残存しない。その規模は、南北が推定6.5m、東西が推定7.0m、深さ0.15mで、東西に長軸をもつ長方形を呈する。しかし、西側のラインをみると、南から4.0mの箇所まで内側に0.5m折れ曲がりそのまま北にのびる。同じように壁のラインが屈曲する例は、SH061にもみることができる。短辺である東壁と西壁に沿って、幅1.0m、高さ0.1mのベッド状遺構が付く。西側のベッドについては、壁のラインが折れ曲がる関係から、部分的に幅は0.5mとなる。ベッドの成形は、西側が地山削りだしの後、上部の敷土を地山混じりの土で整地している。東側は削平のため不明。主柱穴は4本で、長軸である東西の柱間距離が3.4m、南北が3.1mである。炉跡は中央からやや南東に寄った位置にある。0.9m×0.8m、深さ0.1mの円形を呈し、底面に焼土層が残る。また、南辺中央の壁際に1.7m×1.3m、深さ0.2～0.3mの土坑がある。

遺物は第27図117～123で、117～121は弥生土器壺、蓋、高坏、鉢、122は砥石、123は土製品の投擲である。117、119は高坏である。117は坏部で、口縁部が短く内湾する。119は長脚の脚部である。118は壺の頸部で、刻みが施された帯状の突帯が貼り付けられる。120は鉢である。丸底の底部から内湾しながら口縁部にいる。121は壺の胴下半部で、底部に穿孔がある。外面にはタタキ痕がみられる。122は砥石片で上下面及び端面を研ぎ面としている。123は土製の投擲で、ラグビーボール状の形態を呈する。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH013 (第316図)

調査区J-K-9に位置する。南北に長軸をもつ長方形を呈し、長辺41～45m、短辺34m、深さ0.15mである。中央には、1.0m×0.7m、深さ0.1mの円形気味の土坑がある。炉跡の可能性をもつが、内部から焼土や炭が出土しないため断定はできない。主柱穴は長軸上に2本を配する。また、北側の一部を除き壁際に幅0.15～0.2m、深さ0.05～0.1mの周溝が巡る。周溝内には、径0.05～0.2m、深さ0.05～0.1mの小ピットが多数みられる。規則的な配置ではないが、周溝内に全体にある。周溝は長さ0.7mだけ切れるが、この部分は竪穴の平面形が歪み、やや突出したようにみえる箇所である。入口施設があった可能性も考えられよう。

遺物は第27図124～128で、124～126は弥生土器壺、蓋、127が砥石、128が石包丁である。124は壺である。胴部はあまり張らず、口縁部が逆L字状気味に強く折れる。頸部下には断面三角形の突帯が1条貼り付けられる。口縁部は上下に肥厚する。125は蓋で端部付近をやや肥厚させ、端部はわずかに内傾させる。126は、比較的薄い壺の底部である。127は砥石で上下面、両側面、両端面を研ぎ面とする。128は一部欠損した石包丁である。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH014 (第317図)

調査区L-9に位置する。大半が調査区外に及ぶこととSH015に切られることから、平面形は定かではない。円形基溝であるが、明確な主柱穴が確認されないことなどから、楕円形を呈するものであろう。

遺物は第28図129、130で、129は須恵器坏の口縁部と思われるが、小破片のため口径等は不明である。130は壺の胴部である。外面に縦方向の平行タタキ、内面に青海波文の当具痕が残る。

混ざり込み等があり詳細時期は不明だが、竪穴の形態から弥生時代中期に位置づけられよう。

SH016 (第318図)

調査区H-I-10・11に位置する。南西-北東に主軸をもつもので、長辺47～52m、短辺40m、深さ0.2mの長方形を呈する。そして、北東の辺の中央部が幅1.5mにわたり、0.7～0.8mに突出している。そのため、全体としては凸字形をなす。短辺の南西側壁と北東側壁に沿って、幅1.0m、高さ0.05～0.1mのベッド状遺構が付く。南西側のベッド

は、黒色土ブロックを含む暗黄褐色土の盛土成形であるが、北東側のベッドはほとんど地山削りだしである。ベッド状遺構はそのままの高さで突出部に続いている。炉跡は床面中央にあり、径0.6m、深さ0.1mの円形を呈する。最下層に焼土混じりの土が堆積している。主柱穴は2本で、長軸線上に配している。また、南東側の壁近くには、一辺0.6m、深さ0.3mの方形の土坑がある。

遺物は第28図137～141、第163図2118、2119で、弥生土器壺、鉢がある。137、138、2118、2119は甕である。137は胴部が張らない長胴で、底部は丸底である。口縁部はくの字状に折れる。ない外面ともハケ目調整が施される。138は小型品である。丸底で長胴を呈するが、137に比べ胴下半部がやや張る。2118は直線的な胴部から口縁部が外方に折れる。2119は端部が上方に肥厚し跳ね上がり口縁状を呈する。139～141は鉢である。いずれも丸底で内湾しながら口縁にいたる半球形を呈するが、141は部分的に腰部中程からやや外反する。

出土遺物から、本壑穴建物の時期はⅤ期である。

SHO17 (第319図)

調査区G・H-10・11に位置する。径7.0～7.5m、深さ0.1～0.2mの円形を呈する。北側の一部において、弥生時代中期の不定形土坑と重複するが、その前後関係は不明である。中央やや東寄りに、1.6×1.0m、深さ0.1mの不定形土坑があり、それを囲むように主柱穴と思われる柱穴が5本または6本みられる。南側の壁に接し、東西約2.0m、南北1.3m、高さ0.1mのベッド状遺構がある。地山削りだしによるもので、入口施設に関連する可能性をもつ。また、中央から北に寄った箇所に地床跡と思われる焼土がある。焼土は床面に伴うもので、径0.4mの範囲が硬く焼きしまっている。

遺物は第29図142～159で、142～150は弥生土器壺、甕、器台、151～159は石包丁、砥石、打製石斧、磨石等の石器である。142～145は甕である。142は口縁部の小破片で、短く外方に折れた口縁端部に刻みが施される。143は下城式で、ほぼ直立する口縁したに断面三角形の刻目突帯が1条付される。144は口縁部が逆L字状気味に強く折れ、頸部下に断面三角形の突帯が1条みられる。145は胴部がやや張り、口縁部がくの字状に折れる。146～148は底部である。146は甕で、厚底を呈する。147、148は甕と思われるもので、平底を呈する。149、150は器台である。149は器高の低い小型品であるが、器壁が厚い。両者とも筒状を呈し、口縁部と底部がラッパ状に開く。151、152は石包丁である。両者とも刃部が外湾する。形態的には、152が151に比べ両端が丸くなるため、全体的に丸みを帯びた印象になる。157～159は砥石である。157は不定形の石材を利用したもので、片面のみ研ぎ面として使用している。158は一部を欠損するが、ほぼ完成品である。片方の側面を除く5面が研ぎ面として使用されている。159は大きく欠損しているが、現状で確認できる面は全て研ぎ面として利用されている。153は扁平打製石斧片である。154～156は磨石や敲石で、154、156が磨石、155が敲石である。

出土遺物から、本壑穴建物の時期はⅤ期である。

SHO18 (第320図)

調査区J-11に位置する。南北4.2m、東西3.9m、深さ0.1mの規模をもつ。東辺と西辺が弧状を呈しており、方形と円形の中間的な平面形を呈する。床面中央部には径約1.0m、深さ0.3mの土坑がある。土坑内からは、焼土や炭などは出土していない。主柱穴は1本で、中央にある土坑の南側に位置する。また、北壁を除いて壁際に幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.1mの周溝がみられるが、部分的に途切れる箇所がある。

遺物は第30図160～183で、160～181は弥生土器壺、甕、高坏、182、183は敲石である。160、161、164～166は壺である。160、161、164、165は鑷先状口縁を呈するもので、161は口縁部上面に円形浮文が貼り付けられる。164、165は長くのびる頸部外面に、断面L字状の突帯が多数みられる。166は胴部資料で、断面三角形に突帯が1条付される。162、163、167～169は甕である。162は外面口縁下に突帯が付く。163は下城式で、口縁下に刻目突帯が1条貼り付けられる。167は逆L字状口縁を呈するもので、頸部下に断面方形の低い突帯が1条付される。本来は断面L字状を呈するものか。168、169は逆L字状にちかい形態をもつ。両者とも口縁端部が上方に肥厚する跳ね上がり口縁を呈し、頸部直下に断面三角形の突帯が1条付される。171は把手状のものである。170、172は高坏である。170は坏部で、鑷先口縁を呈する。172は長い脚部である。173～181は底部である。173は甕で平底を呈する。174～181は甕で、175、179を除き厚手である。182、183は敲石である。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH019 (第321図)

調査区F-11に位置する。北半が調査区外に及ぶもので、西側に位置するSH020を切る。平面形については、南辺は直線的であるのに対し東辺と西辺は弧状を呈することから、第18号竪穴建物と同様な方形と円形の中間的な形態を呈する可能性がある。中央付近に径0.8m、深さ0.05mの円形の土坑があるが、土坑内から焼土や炭の出土はない。主柱穴については不明である。出土遺物は散発的で、床面からやや浮いた状態である。

出土遺物は第31図184、185で、弥生土器甕、鉢である。184は甕で、口縁部が短く外方に折れ、端部に刻みが施される。185は鉢である。底部は平底を呈し、胴下半部がやや張り直線的に口縁部にいたる。胴部中程に断面三角形の突帯が1条付される。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅢ、Ⅳ期である。

SH020 (第322図)

調査区F-11に位置する。北半が調査区外に及ぶもので、東側に位置するSH019に切られる。他遺構に切られる部分もあることから定かではないが、南北に長軸を有する楕円形を呈する可能性がある。明確な炉跡や主柱穴は確認できない。竪穴内からは甕や台石が出土したが、いずれも床面よりわずかに浮いている。

出土遺物は第31図186～192で、186～190は弥生土器甕、191は石鏃、192は炭石である。186は下城式で、外面口縁下に断面三角形の刻目突帯が1条貼り付けられる。187～189は口縁部が逆L字状気味に強く折れる形態である。このうち188の頸部下には断面三角形の突帯が1条付されるが、他には突帯がみられない。189は厚底の底部となり、胴下部に円形を呈する焼成後の穿孔がみられる。190は厚底の底部で、上げ底を呈する。191は都島産黒曜石製の石鏃で、正三角形を呈する。192は炭石である。裏表面の中央部と側端部に敲打痕が残る。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅡ期である。

SH021 (第323図)

調査区G-11に位置する。東西に長軸をもつ楕円形を呈するが、南側をSH022や貯蔵穴に切られる。規模は南北4.5m以上、東西3.1m、深さ0.1mである。主柱穴の可能性をもつ柱穴が、中央やや北側にある。また、中央東寄りの位置には、径0.5m、深さ0.2mの円形を呈する土坑がみられる。

出土遺物は第31図193、194である。193は甕の底部と思われ、平底を呈する。194は高環の坏部で、やや深めの形態を呈する。坏部の底部から直線的に鋤先状を呈する口縁部にいたる。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH022 (第325図)

調査区H-11に位置する。南北に長軸を有する長方形を呈するもので、北側に位置するSH021を切る。規模は東辺4.4m、西辺4.8m、東西3.8～3.9m、深さ0.2mである。床面中央に、0.8×0.55m、深さ0.1mの皿上の土坑があり、底面に径0.2mの焼土があることから炉跡と思われる。主柱穴は、中央の土坑を挟むように長軸線上に2本を配する。東辺中央には、壁に接し0.5×0.6m、深さ0.35mの土坑がある。壁際には、幅0.1～0.2m、深さ0.05mの周溝が巡るが、3箇所の一部途切れる。また、中央土坑の北側1.7mの位置に、長さ2.05m、幅0.2m、深さ0.05mの小溝が東西方向にある。この小溝の性格は不明だが、これを境に北側が中央の床面から0.05mほど高くなる。

出土遺物は第31図195～200で、壺、甕、鉢などがある。195は複合口縁壺の胴部上半から口縁部にかけての資料である。外反しながら短く立ち上がる頸部から、口縁が外反する。口縁立ち上がり部が段となる。肩部はあまり張らず、なで肩状を呈する。196は甕である。口縁部が逆L字状気味に強く折れ、口縁端部は状に肥厚し跳ね上がり口縁を呈する。197～199は鉢である。197は半球形の胴部から口縁がくの字状に折れる。底部は九底である。198は肩部が張らない胴部から口縁がわずかに外傾する。199は半球形を呈するもので、九底である。200は複合口縁壺のミニチュア土器である。胴部は肩が張り、九底の底部に向かい帯まるように続く。頸部は短く、頸部から外傾しながら内湾気味に口縁部が立ち上がり複合口縁を表現している。

混入品もあるが、出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅤ期である。

SH023 (第 324 図)

調査区 II・I-11 に位置する。平面形が方形で、その規模は南北 4.4m、東西 3.9 ～ 4.2m、深さ 0.2m である。炉跡と思われる土坑は床面中央にあり、長径 0.8m、短径 0.65m、深さ 0.15m の楕円形を呈する。土坑内にまとまった焼土層はないが、壁上は焼土混じりの土である。炉跡の東側の壁際には、長径 1.1m、短径 0.9m、深さ 0.15m の楕円形土坑がある。主柱穴は 2 本で、炉跡挟むように中輪線からやや西側に寄った位置に配している。しかし、2 本とも深さが 0.2m と、やや浅いのが気になる。

出土遺物は第 32 図 201 ～ 204 で、201 ～ 203 は弥生土器壺、甕、器台、204 は打裂石斧である。201 は壺の肩部で、外面には貝殻遺線押捺による木葉文がみられる。202 は甕の底部で、厚底を呈する。203 は器台の下半部で、底部に向かいラッパ状に開く。204 は円盤状を呈する打裂石斧である。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅤ期か。

SH024 (第 326 図)

調査区 F-12 に位置する。円形を呈するもので、北側が調査区外に及ぶ。また、東側は円形や長方形の貯蔵穴から一部切られている。その規模は、径 5.5m、深さ 0.1m である。床面中央に、径 1.0m、深さ 0.5m の円形土坑があるが、焼土や炭などは出土していない。主柱穴は 7 本と思われ、中央の土坑を囲むように円形に配する。主柱穴内部の床面は、顕著に踏み固められている。また、中央土坑の西側 0.5m の床面には径 0.2m の焼土があり、地床炉の可能性もある。

出土遺物は第 32-33 図 205 ～ 225 で、205 ～ 222 は弥生土器壺、甕、高坏、223 ～ 225 は磨製石剣、敲石である。205、206 は壺である。205 は頸部が大きく外反し、口縁部は鋸先状を呈する。206 は胴部の資料で、突帯が 1 条付く。207 ～ 215 は甕である。このうち 206、207 は、口縁部が外方に強く折れ、胴部は肩などがほとんど張らず底部に続く。208 ～ 215 は、頸部下数分の部分に断面三角形の突帯が 1 条付される。口縁部は逆 L 字状気味に強く折れ、端部がやや肥厚するものが多い。胴部はやや張り底部に向かう。216、217 は高坏の脚部である。216 は坏部下に断面三角形の突帯が 1 条付く。217 は長脚で、底部は大きくラッパ状に開く。218 ～ 222 は底部である。このうち 218 ～ 221 は甕で、いずれも厚底を呈する。222 は壺と思われる。223 はサヌカイト製の二次加工剥片の欠損品である。224 は磨製石剣の刀身部である。両面とも中央にやや鋭さを欠く稜を有し、断面は扁平な菱形状を呈する。225 は敲石である。両面の中央部及び両側面に敲打痕が残る。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅣ期である。

SH025 (第 327 図)

調査区 G・H-12 に位置し、SH026 を切る。南北 6.0m、東西 5.3m、深さ 0.2m の長方形を呈する。短辺の南壁と北壁に沿い、幅 0.1 ～ 1.2m、高さ 0.1m のベッド状遺構が付く。ベッドは黒色土ブロックを含む暗黄褐色土による盛土で成形されている。床面についても同様な土による貼床がみられ、中央付近は踏み固めが顕著である。炉跡は床面中央に一辺 0.7m の方形土坑があり、底面に焼土層がある。東辺中央の壁際に 0.7 × 0.5m、深さ 0.25m の方形土坑がある。主柱穴は南北の長輪線上に 2 本配する。

出土遺物は第 34 図 226 ～ 241 で、226 ～ 239 は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、支脚、240、241 は砥石、磨石である。226、227 は壺である。226 は胴部資料で、外面に鋸歯文などがみられる。227 は鋸先口縁を呈するものである。228 ～ 230 は甕である。228 は龜ノ甲式である。口縁部が短く逆 L 字条に折れ、口縁下に突帯が 1 条付く。口縁端部と突帯に刻目が施される。229 は口縁部がくの字状に折れ、頸部に断面三角形の突帯が 1 条付く。230 は全形の分かるものである。口縁部はくの字状に折れ、胴部はあまり張らず底部にいたる。口径と胴部最大径がほぼ同じである。底部は平底を呈する。231 は壺の胴部資料で、断面方形の刻目突帯が 2 条貼り付けられる。232 ～ 234 は高坏である。232 は坏部で、中程から口縁に向かい大きく外反する。233 は長脚の脚部で、円形の透かし穴がある。234 も脚部で、上半部は円柱状を呈し、中程から底部に向かい大きく開く。開きはじめの箇所には円形の透かし穴がみられる。235、236 は鉢である。両者とも丸底で半球形を呈する。238 は甕形器台と称される支脚である。受け部が斜めになり、一端に器を支える突起が付く。237、239 は底部である。237 は甕の底部で、厚底を呈する。239 は平底である。

240は砥石である。断面長方形を呈し、上下面、両側面、両端面を研ぎ面としている。241は磨石で、両端部には敲打痕がみられる。

明らかな混入品もあるが、出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH026 (第328図)

調査区H-12に位置する。北西隅をSH025に切られ、南側に位置するSH027を切る。基本的には長方形を呈し、南北4.4～4.9㍍、東西4.2㍍、深さ0.3㍍の規模をもつ。平面形で特徴的なのは、北西隅が長さ2.5㍍にわたり約0.5㍍突出している点である。短辺の北壁と南壁に沿って幅1.0㍍、高さ0.1㍍のベッド状遺構が付く。ただし、北側のベッドについては、東壁からはじまり西壁まで0.8㍍を残し終わっている。ベッドは、黒色土を含む暗黄褐色土により盛土で成形されている。床面についても同様な土による層厚数㍍の貼床がみられ、中央付近は踏み固めが顕著である。また、床面中央には、0.7×0.5㍍、深さ0.2㍍の楕円形土坑があり、下層に焼土混じりの土が堆積していることから炉跡と思われる。炉跡の東側の壁際には、径0.7㍍、深さ0.4㍍の土坑がある。支柱穴は南北の主軸線上に2本配している。

出土遺物は第35図242～259で、242～260が弥生土器壺、甕、高坏、鉢、261が鉄製品である。このうち、242～245は弥生時代中期の上器で、混入品と考えられる。242は壺の胴部で、上半部にヘラ描きによる文様がみられる。243～245は甕である。243は口縁下に断面三角形の突帯が付される。244は口縁部が短く逆し字状に折れる。245は厚底の底部である。246は袋状口縁である。247～249は甕である。247、248は口縁部がくの字状に折れ、胴部中程が張る。249は全形が分かる資料である。底部は平底で、胴部は中程が張った長胴形を呈する。口縁部はくの字状に折れる。250、251は胴下半部の資料で、丸みをもつ胴部が平底の底部にいたる。253、254は高坏である。253は全形が分かる資料である。脚部は、上部が比較的細く、中程から底部に向かい大きく開く。中程に円形の透かし穴が二段にわたり穿たれる。坏部は、内湾気味の下半部から上半部が外湾気味に口縁部にいたる。254は脚部で、253と同様な形態である。やはり、二段の円形透かし穴が穿たれるが、253に比べやや下位である。255は長頸壺である。平底で球形を呈する胴部から頸部が直立気味に口縁部にいたる。252、256～260は鉢である。252は扁平気味の胴部で、口縁部は外方に強く折れる。256～260は半球形を呈するもので、口径に比し器高の比較的低いもの(256、257)と器高が比較的高いもの(258、260)がある。259は小型品である。底部形態が分かるもののうち、257は平底が残るが、258、259は丸底気味である。261は不明の鉄製品。

混入品もあるが、出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅥ期か。

SH027 (第329図)

調査区I-12に位置し、北側をSH026に切られ、東側に位置するSH028を切る。南北に長軸を有する長方形を呈するもので、その規模は南北5.6㍍、東西4.1～4.3㍍、深さ0.2㍍である。床面の中央に、径0.6～0.7㍍、深さ0.15㍍の円形土坑があり、埋土が焼土混じりであることから炉跡と考えられる。炉跡の東側の壁際には、径0.9㍍、深さ0.25㍍の円形の土坑がある。支柱穴は、南北の主軸線上に2本配している。

出土遺物は第36・37図262～279で、262～274は弥生土器壺、甕、高坏、器台、275～278は砥石、磨石、279は鉄鎌である。262は壺の胴部である。断面は字状の突帯が1条付く。263～268は甕である。263、264は上半部の資料で、胴部がやや張り、口縁部がくの字状に折れる。265～268は全形が分かる資料である。いずれも胴部中程が最大径となり平底を呈する。265が球状に近い形態であるのに対し、266は長胴である。また、267、268はやや影れ気味となる。269は短頸壺である。胴部は球状を呈し、底部はわずかに平底が残る。頸部は短く直立する。270は高坏の坏部である。中程に稜をもち、上半部が内湾気味に内傾する。271は鉢で底部は緩やかな平底を呈する。口縁部は短く外方に折れる。272は器台の下半部である。底部は小さく外方に開く。273、274は厚底を呈する。273には円形の穿孔がみられる。275～277は砥石で、いずれも欠損品である。278は磨石で、上面中央部、側面、両端面などに敲打痕が残る。279は鉄製の鎌で直線的な形状を呈し、基部が柄の装着用に折れる。

若干の混入品もあるが、出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH028 (第330図)

調査区I-12に位置し、西側をSH027に切られる。東西に長軸を有するもので、コーナー部が丸みをもつ長方形を

呈する。規模は、東西41㎝以上、南北33㎝、深さ0.15㎝である。北側の壁際に0.7×0.5㎝、深さ0.1㎝の土坑があるが、炉跡については不明である。主柱穴は、東西の主軸線上に2本を配する。

出土遺物は第37図280～282で、弥生土器鉢、甕がある。280は小型の鉢である。平底の底部から斜方向に立ち上がり、口縁にいたる。281、282は甕の胴部下半で、平底を呈する。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅢ、Ⅳ期である。

SH029 (第331図)

調査区G-12に位置する。東西に長い長方形を呈し、規模は、東西37～39㎝、南北34㎝、深さ0.15㎝である。床面中央には、径0.5㎝、深さ0.1㎝の円形の土坑があり、底面に径0.15㎝の焼土層があることから炉跡と思われる。南側の壁際中央には、長さ0.8㎝、幅0.4㎝、深さ0.2㎝の土坑がある。そのほかの円形土坑などは、竪穴埋没後に掘り込まれたものである。主柱穴は1本で、炉跡の東側にある。床面については、整地層はほとんどが認められず地山削り出しのままである。

出土遺物は第38図283～295で、283～293が弥生土器壺、甕、器台、鉢、294と295が石器である。283、285は甕の口縁部で、283は口縁部が逆し字状に折れ端部が肥厚する。285は逆し字状口縁を呈し、頸部下に断面三角形の突帯が1条付く。286は細身の筒型器台である。284は手づくねの浅い鉢。287～293は底部である。287～291は弥生中期の甕などの底部。292、293は弥生後期の壺、甕の底部である。石器のうち、294は磨製石鏃で、高さの高い三角形を呈する。295は砥石の欠損品である。上下面、片方の側面、小口面が研ぎ面として利用されている。

混入品もみられるが、出土遺物から本竪穴の時期はⅣ期である。

SH030 (第332図)

調査区F-13に位置し、先行する径約20㎝の円形土坑を切って同位置に構築している。その後、南側をSH031や楕円形の土坑に切られる。小型方形の竪穴で、残存する北辺の長さは33㎝である。床面の貼床はみられず、硬化も認められない。主柱穴は1本と思われ、中央からやや東に寄った位置にある。

出土遺物は第39図296～302で、296～299は弥生土器壺、高坏、鉢、301、302は砥石、敲石である。296、297は甕である。296は口縁部外面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、刻みを施す。297は口縁部が外方に強く折れ、頸部下に2条の断面三角形の突帯が付される。298は高坏の坏部で、口縁部は短く内側に屈曲する。299は鉢である。偏球形を呈し、頸部がわずかに立ち上がる。脚が付く可能性もある。301は砥石の欠損品である。上面と片方の側面が研ぎ面である。302は敲石で、上面中央付近と端部に敲打痕がある。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH031 (第333図)

調査区G-13に位置し、SH030、SH032、SH033を切る。規模は、東西5.65～6.77m、南北6.1m、深さ0.4mである。東南隅と東北隅が各々東側に突出しており、平面形は凹字上を呈する。突出部の幅は、東南隅が1.25m、東北隅が2.05mで、各々0.8m突出する。また、南北の壁に沿い幅1.2m、高さ0.1mの暗黄褐色土による盛土成形によるベッド状遺構が付く。ベッドは突出部まで続くが、北側はベッド状遺構の幅に比べ突出部の幅が広い。突出部付近でベッドがL字状に折れる。炉跡は中央にあり、0.8×0.6m、深さ0.1mの土坑の底面に0.2×0.3mの硬化した焼土層が残る。東側の壁近くには、一辺0.5～0.6m、深さ0.2mの方形土坑がある。主柱穴は、南北の主軸線上に炉跡を挟むように2本みられる。

出土遺物は第40・41図303～334で、303～324は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、325は土器片加工品、326～334は磨製石剣、石包丁、砥石、打製石斧、敲石である。弥生土器のうち、303～306は壺である。303は胴部口縁を呈するもので、上面に円形の浮文が貼り付けられる。304は胴部資料で、低い字突帯がみられる。305は丸底にちかい底部をもち、胴部は球状を呈する。頸部下には断面三角形の低い突帯が付される。太い頸部は内傾して立ち上がり、中程から大きく反外し口縁部にいたる。胴部中程には注口が付く。306は長頸壺である。底部は平底の名残を残し、やや偏球形の胴部から頸部が反外気味に立ち上がる。307～317は甕である。このうち307～309は弥生時代中期のもので、混入品と考えられる。307は肥厚した口縁部と口縁下の突帯に刻み目がみられる。308、309

はくの字状に口縁が折れ、頸部下に突帯が付される。310～313は上半部あるいは全形が分かる資料である。口縁部はくの字状に折れる。胴部は、やや張って最大径が胴部中程にあるもの(310、312、313)、胴部が張らず最大径が口縁部にあるもの(311)がある。311、313に胴部内面にはヘラ削りが見られる。314、315は胴部中程に最大径をもつ胴部資料で、底部は両者とも平底である。316、317は脚付きの甕と思われる。318～320は高坏の脚部である。いずれも上半が比較的細い円柱状を呈し、底部に向かい大きく開く。318、319には二段の円形透かし穴が穿たれている。321、322は鉢である。322は平底であるが、321は丸底にちかい可能性がある。両者とも底部からやや内湾気味に斜方向に立ち上がり口縁にいたる。323は蓋である。やや厚手で頂部に握みが付く。端部に向かい厚みを減じ、端部は丸くおさまられている。324は杓子状の製品である。先端部などを欠くが、浅い塊状の形態を呈するものに、柄に相当するものが付いた痕跡が残る。325は土器片加工品で、土器片打ち欠き円形に成形している。326は磨製石剣の先端部ちかくの資料である。両面とも中央部に稜をもち、断面は菱形を呈する。327は石包丁である。刃部はやや外湾するが、端部が丸みをもって仕上げられていることから、全体としては長方形にちかいやや細身の形状である。330、331は砥石の欠損品である。328、329は扁平打製石斧である。328は完形品であるが、長さ約9cmの小型品である。329は欠損品である。332～334は敲石で、上下面や側面に敲打痕がみられる。333については、上下面が磨られている。

混入品もあるが、出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期である。

SH032 (第334図)

調査区F-13に位置する。方形を呈するが、大半をSH031とSH030に切られているため、全形は不明である。しかし、支柱穴や壁際にあったと思われる土坑が確認されたことから、その規模は、辺約4.0mであったと推測できる。残存する壁にそって幅0.15～0.2m、深さ0.1mの周溝があることから、四周の壁に沿い周溝が全周していた可能性が高い。支柱穴は、南北方向に2本配している。

出土遺物は第42・43図335～369で、335～361は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、362は土器片加工品、363～369は石包丁、砥石、打製石斧、敲石である。335、336は壺である。335は長頸壺などの可能性をもつもので、外面に平行櫛指文がある。336は鋤先状を呈する口縁部である。337～346は甕である。このうち337～339は弥生時代中期のもので、混入品と思われる。337、338は口縁部が逆L字状気味に強く折れ、頸部下に断面三角形の突帯が付される。339は厚底の底部である。底部近くから底面にむかい穿孔が施される。対向する2ヶ所にあることから、紐を通し吊り下げた可能性がある。340～346はいずれも口縁部がくの字状に折れるものである。胴部がやや張るものが多いなかで、346は胴部下が下影れ状に大きく張る。341は胴部外面に、平行タタキが確認できる。また、346の胴部内面にはヘラ削りが見られる。347～349は底部で、いずれも平底を呈する。350～352は高坏である。350は坏部で、口縁部が内側に屈曲する。351、352は脚部である。351は下半部で、大きくラッパ状に開く。円形の透かし穴が穿たれる。352は上半部で、比較的細い円柱状部分から底部に向かい開きはじめる。円形の透かし穴がある。353～360は鉢である。353～356は球状の胴部から口縁部が外力に折れる。355と358は同一個体の可能性があり、底部は平底である。356、357は偏球形の胴部から口縁部が逆L字状に折れる。360は半球形を呈するもの、359も同様な器形を呈すると思われるが、直線的に口縁部にいたる。361は把手状のものである。362は土器片加工品で、土器片を円形に成形している。363、364は石包丁である。刃部は大きく外湾するもので、全体として半円形を呈する。365、366は砥石である。両者とも欠損品であるが、全ての面を研ぎ面として使用している。367は打製石斧の欠損品である。368、369は敲石である。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期である。

SH033 (第335図)

調査区G-13に位置する。長方形を呈すると思われるが、SH031、SH032に切られている。その規模は、短辺4.0m、長辺4.8m以上、深さ0.1mである。一部の壁際に幅0.1～0.2m、深さ0.05mの周溝がみられるが、全周はしない。支柱穴は東西の主軸線上に2本配する。好跡については不明である。

出土遺物は第44図370～384で、370～381は弥生土器壺、甕、382～384は磨製石剣、砥石、磨石である。弥生土器のうち、370～372は壺である。370、371は外傾する頸部が口縁部にいたり、鋤先状口縁を呈する。

372は頸部で、多条の十字突帯が付される。373～375は甕である。いずれも口縁部が逆L字状気味に強く折れる。373は胴部に突帯がなく、374、375は頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。また、374、375の口縁端部は肥厚が顕著である。376～381は底部である。いずれも甕と思われ、376を除き厚手である。382は磨製石製の刃部である。両面の中央に稜があり、断面変形を呈する。383は砥石の欠損品である。上下面及び両側面が研ぎ面として使用されている。384は磨石である。両面に磨った痕跡と敲打痕が残る。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅣ期である。

SH034 (第336図)

調査区H-13に位置する。隅丸方形を呈するもので、南北4.4^{cm}、東西3.5^{cm}、深さ0.1^{cm}である。主柱穴は東西の主軸線上に2本配する。東側の壁際には、長さ1.6^{cm}、幅0.8^{cm}、深さ0.15^{cm}の楕円形を呈する土坑がある。炉跡と思われるものはない。

出土遺物は第44図385、540である。385は厚底を呈する甕の底部である。540は高坏の脚部で、上半の筒状部から幅に向かい大きく開く。円形の透かし穴がある。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅢ期か。

SH035 (第338図)

調査区J-13に位置する。南側にある第36号壜穴建物を切る。南北に長い長方形を呈し、南北6.2^{cm}、東西4.7^{cm}、深さ0.3^{cm}である。短辺の北壁と南壁に沿って、幅1.1^{cm}、高さ0.1^{cm}のベッド状遺構がある。ベッド状遺構は暗茶褐色土や黒褐色土の盛上により成形されている。床面中央には一辺0.6^{cm}、深さ0.1^{cm}の方形の土坑があり、底面が径0.15^{cm}にわたり被熱のため赤変していることから、炉と考えられる。炉の東側の壁際には、0.7×0.6^{cm}、深さ0.3^{cm}の土坑がある。主柱穴は、南北の中軸線上に炉を挟むように2本配している。

出土遺物は第45図386～394で、386～390は弥生土器壺、甕、高坏、器台、391～394は砥石、磨石である。

396、387は弥生時代中期の混入品である。386は甕で、鋤先状口縁を呈する。387は甕で、頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。388は複合口縁壺で、口縁部が直立する。389は高坏脚部で、円形の透かし穴がある。390は器台で、器壁が極めて厚い。円筒状を呈し、底部がわずかに外側に肥厚する。391は石包丁である。刃部は大きく外湾する。392、393は砥石で、各面を研ぎ面とする。394は磨石で両面に磨った痕跡と敲打痕が残る。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期である。

SH036 (第339図)

調査区J-13に位置する。北側を第35号壜穴建物に切られる。平面形は南北に長い長方形基調であるが、コーナー部が丸みをもち、南辺が弧状を呈する。規模は、南北約7.0^{cm}、東西5.6^{cm}、深さ0.2^{cm}である。北辺を除き壁に沿って幅0.3^{cm}、深さ0.15^{cm}の周溝がある。中央付近に径0.7^{cm}、深さ0.1^{cm}の円形を呈する土坑がある。SH035に半分切られているが、埋土に焼土が混入することから炉跡であったと思われる。炉跡の東側の壁との間には、東西幅1.3^{cm}、深さ0.1^{cm}の土坑ある。主柱穴は、南北の主軸上に2本を配する。

出土遺物は第45図395～401で、395～398は弥生土器壺、高坏、399～401は砥石、磨石である。395は甕である。口縁部は逆L字状気味に強く折れ、頸部に断面三角形の突帯が1条付く。396は高坏脚部の上半で、円柱状を呈する。397、398は底部で、両者とも平底を呈する。399、400は砥石である。399は表面が薄く剝離したもので、研ぎ面が残る。400も欠損品で、残存する各面が研ぎ面として使用されている。401は磨石の欠損品である。上面中央部、端部、側面に敲打痕が残る、下面に磨り面がみられる。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期か。

SH037 (第337図)

調査区J・K-13・14に位置する。小型の方形壜穴で、西側に位置するSH038を切る。また、柱穴帯と重複しており、壜穴内と周辺にある大部分の柱穴は柱穴帯のものである。壜穴の規模は、東西4.0^{cm}、南北3.2^{cm}、深さ0.3^{cm}である。壁に沿い深さ0.1^{cm}の堀溝が巡るが、南辺部分は他箇所の倍の幅0.4^{cm}となり、南東隅はコーナーに沿わずに掘られて

いる。中央やや南寄りに、 0.6×0.5 ㍎、深さ 0.15 ㍎の不定形土坑があり、最下層に焼土混じりの土が堆積していることから炉跡と思われる。主柱穴については1本で、炉跡の西側 0.5 ㍎にある。

出土遺物は第46図402～408で、402～405は弥生土器壺、甕、406、407は磨製石斧、408は杵である。402は壺で、鋤先状口縁を呈する。403は胴部がやや張り、口縁部がくの字状に折れる。405は無須壺である。底部はしっかりした平底で、胴部中程に最大径をもつ球形にちかひ形態である。404は底部資料で、平底を呈する。406、407は磨製石斧である。406は刃部を欠くもので、基部が窄まる。407は片刃と思われる。刃部と基部の幅がほぼ同じである。408はうすい青色を呈するガラス小玉である。

明らかな混入品もあるが、出土遺物から、本堅穴の時期はⅥ期か。

SH038 (第340図)

調査区K-14に位置する。東西に長い楕円形を呈するもので、東端がSH037に切られている。その規模は、長径 5.3 ㍎、短径 3.2 ㍎、深さ 0.2 ㍎である。炉跡と思われる土坑や焼土は確認できなかった。また、堅穴内にいくつかの柱穴があるもの、位置や規模から主柱穴として積極的に考えられるものはなかった。

出土遺物は第46図409～414である。409は甕の口縁部で、口縁部がくの字状に折れる。胴部はあまり張らないようである。410は厚手のものである。器種は不明であるが、円形を呈すると思われる透かしがみられる。411～414は底部である。このうち、412は壺と思われ、平底を呈する。他は甕で、414は上げ底を呈し、底部はあまり厚くない。411、413は厚底を呈する。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅢ期である。

SH039 (第341・342図)

調査区J-14に位置する。一辺 3.9 ㍎、深さ 0.2 ㍎のやや小型の方形を呈し、北西隅と南東隅に2箇所の突出部を有する。突出部は、両者とも幅 1.7 ㍎で壁から 0.7 ㍎突出する。突出部はいずれも床面から $0.06 \sim 0.1$ ㍎高いベッド状を呈し、内側は壁のラインよりもベッドがやや張り出す状態である。突出部のベッド状遺構は、地山削り出しにより成形され、最上層に数枚黒褐色の盛土がある。このうち、北西隅の突出部では、最上層の盛土を除去した段階で長さ 1.0 ㍎、幅 0.4 ㍎、深さ 0.35 ㍎の長方形気味の土坑を検出した。突出部はほぼ中央にあり、土坑の方位も堅穴建物の方位とはほぼ同様であることから、本堅穴に伴うものと判断した。同じような土坑は堅穴内の北東隅近くと西階沿いにもあり、方位的にも堅穴及び突出部土坑と関連が強いものである。これらの土坑からは遺物の出土はなかったが、形状から墓の可能性が考えられる。南東隅の突出部には土坑等の遺構はなかった。床面中央には、径 0.4 ㍎、深さ 0.2 ㍎の円形土坑があり、炉跡と考えられる。炉跡東側の隙間からは、径 0.8 ㍎の円形の土坑がある。主柱穴は、炉跡の南側約 1.0 ㍎の位置に1本ある。

出土遺物は第46～50図415～460で、415～454は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、器台、455～460は石包丁、砥石、敲石である。415～417は複合口縁壺である。415、416は頸部下に断面三角形の突帯が付される。417は前二者に比べ人型のものであるが、口縁部を欠く。頸部下には刻みを有する断面三角形の突帯が貼り付けられる。418～422、424～428は甕である。これらのなかには、口縁部がくの字状に折れ口径と胴部最大径がほぼ同じもの(418～420、422、428)、口縁部がくの字状に折れ口径よりも胴部最大径がかなり大きいもの(421、424～427)がある。底部形態については、425と426は同一個体と思われ、平底を呈する。427、428も平底である。429～435は壺あるいは甕の底部資料である。完全な平底を呈するもの(429、432)、凸レンズ状を呈するもの(430、431、433、435)、丸底にちかひのもの(434)などがある。また、429の外面には平行タキがみられる。435は壺で、胴部中程に断面方形の突帯が付く。436～440は高坏である。このうち、436～438は坏部である。いずれも中程に稜をもち、上半部が口縁に向かい外反する。439、440は脚部である。上半部は比較的細い円柱状を呈し、中程から底部に向かい大きくラッパ状に開く。440には円形透か穴が二段にわたり穿たれている。441は長径壺である。球状の胴部から頸部が直立気味に立ち上がる。442～447は鉢である。443は口径に比べ器高が高いもので、口縁部が内傾する。他は半球形を呈するもので、人型品(446、447)と小型品(442、444、445)がある。底部形態の分かるものうち、444～446は平底、442は丸底である。また、446の外面には平行タキがみられる。450～454は器台である。450、451は筒状の胴部から口縁部が大きく外反する。452、454は鼓形を呈し、上半部をU字状に大きく

挟る。448、449は底部である。448は口縁部を欠くがミニチュア土器と思われる。449は鉢の底部で、平底を呈する。455、456は石包丁である。455は長方形基調の形態で、刃部はやや外湾する。456は欠損品であるが、刃部が大きく外湾するもので、半円形を呈するものと思われる。457は砥石で上面、側面、小口面、下面の一部、以上が研ぎ面として使用されている。458～460は砥石である。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅦ期である。

SH040 (第343図)

調査区H-14-15に位置する。南北に長い長方形を呈し、その規模は南北5.7m、東西4.6～5.1m、深さ0.15mである。中央に径0.9m、深さ0.1mの円形の土坑があり、底面に焼きしまった焼土層があり焼土混じりに埴土に覆われていることから炉跡と思われる。このほか、中央の炉跡を取り囲むように、炉跡の北西、北東、南西に3か所の焼土がある。これらは径0.3～0.5mで、非常に硬く焼きしまっている。特に北西、北東のものが顕著で、中央の炉跡の焼土よりも硬化している。いずれも明確な土坑は伴わないが、わずかに皿状の掘り穿められた状況が観察された。炉跡の東側の壁沿いには、1.1×0.9m、深さ0.2mの長方形の土坑がある。土坑内の両端には深さ0.2～0.5mの柱穴が2本みられる。主柱穴は2本で、南北に主軸上に炉跡を挟むように配している。炉跡周辺の中央部は、踏み固められ床面の硬化が顕著である。このほか北西隅にベッド状遺構がある。ベッドは長さ2.0m、幅1.2m、高さ0.1mで、地山を削り出し成形した後に数層の盛土で成形している。盛土を除去した後に、長さ1.1m、幅0.4m、深さ0.1mの長方形の土坑を検出した。位置や方位からみて、本堅穴に伴うものと思われる。床面には層数数層の貼床があり、中央付近は踏み固められ硬化が顕著であった。

出土遺物は第50～52図461～482で、461～479は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、482は砥石である。461～464は壺である。461、462は長頸壺で、461は頸部から口縁部にかけての資料で、口縁部は外反する。462は底部が平底で、胴部は球形にちかい形態を呈する。頸部は肩部から外反気味に立ち上がり、外反する口縁部にいたる。胴部中程よりもやや上部には注口が付く。463、464は短頸壺と思われる。463は平底を呈し、胴部中程からやや下位に胴部最大径がくる。肩部はなで肩状で、頸部から短く外反し口縁部にいたる。464は底部を欠くが、463と同様な器形を呈する。465～470は甕である。465～468は胴部下半を欠く資料である。口縁部はくの字状に外方に折れ、胴部は肩部から中位にかけてやや張る長胴形を呈する。口径と胴部最大径がほぼ同様なもの(466)、胴部最大径が口径よりもやや大きいもの(465、467～469)がある。469、470は同一個体と思われる。465などと同様な器形を呈し、底部は平底である。471は高坏の坏部で、口縁部が内側に屈曲する。472～477は鉢である。472は平底を呈する半球形の胴部から、口縁部がくの字状に外方に折れる。473～477は概ね半球形の器形を呈するが、口縁部が直立するものや斜方向に伸びるものなどがみられる。底部形態が分かるものうち、475、477は丸底で、476は凸レンズ上である。481は駒付きの鉢と思われる小型品で、ハの字状に開く低い脚が付く。外面には赤色顔料が塗られている。478～480は底部で、いずれも平底である。482は砥石である。

出土遺物から、本堅穴建物の時期はⅤ期である。

SH041 (第344図)

調査区F・G-15に位置する。径10.2～10.8m、深さ0.2mの円形を呈するもので、北西部をSH042に切られていて、壁に沿って幅0.2m、深さ0.1mの周溝が巡る。周溝は、堅穴の南側に二重になっている。部分的に堅穴の拡張が行われたことが分かる。中央からやや南東に寄った位置に、1.2～1.45m、深さ0.4mの円形の土坑がある。内部からは、焼土や炭などは出土していない。土坑中には深さ0.3mの柱穴が2本あり、各々から大型の川原石が落とし込まれた状態で出土した。中央の円形土坑の東側の壁沿いには、1.6×0.7m、深さ0.1mの浅い土坑がある。炉跡と思われる焼土は、中央の土坑の北東0.8mの床面上にある。床面が径0.2m被熱により赤く硬化している。主柱穴は壁から1.0～1.5mの位置にあり、円形に配している。その数は、大規模な擾乱があるため明確ではないが、10本あるいは11本であると思われる。また、床面については重複するSH042の床面とレベル差がない。堅穴出土遺物のうち、北東部の壁近くに一括してみられるものは検出面で確認されたものである。遺物取り上げ時は明確にできなかったが、他遺構が重複していた可能性がある。

出土遺物は第52・53図483～506で、483～497は弥生土器壺、高坏、鉢、器台、支脚、498～506は石包

丁、磨製石剣、砥石、磨石、打製石斧などの石器である。483～486は壺である。483は鋤先口縁を呈し、口縁部上面にへう拵きによる細沈線が連続してみられる。484は長頸甕である。やや太目の頸部が外傾気味に立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。頸部の立ち上がり部には、断面三角形の突帯が付く。485、486は壺の胴部で、両者とも丸みをもつ。485は1条、486は2条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。487は甕で、口縁部から肩部にかけての資料である。肩部は張り、口縁部は外方にくの字状に折れる。頸部下に断面三角形と突帯が付く。488は高坏の坏部である。口縁部が小さく内方に屈曲する。489は鉢と思われ、口縁部がくの字状に折れる。円形の穿孔がみられる。490～494は鉢である。490、491は九底を呈する小型品で、内外面に指オサエ痕が残る。492は平底を呈する。胴部は内湾し、そのまま内傾気味の口縁部にいたる。493、494は小型品の底部である。493は平底で、胴部が斜方向に直線的に立ち上がる。494は低い脚台が付く。495、496は器台である。495は鼓形を呈し、上部に括れ部がある。口縁部が外に開き、底部は大きくハの字状に開く。496は冚形器台と呼ばれる支脚である。受け部は斜めになっており、中央に円形の穿孔がある。また、一端に器を支える突起が付く。497は把手状のものである。498、499は石包丁である。ともに刃部が大きく外反し、半月形を呈するものと思われる。500は磨製石剣である。表面が剥離した部分が多いが刃身である。断面は概ね菱形を呈するが、両面とも中央の稜線が明瞭ではない。501～504は砥石である。501、502は薄いもので、各面が研ぎ面として利用されている。503、504は厚いものである。503は残存する各面が研ぎ面となっている。504は完形品と思われるが、上面、側面、下面の一部が研ぎ面になっており、両小口面は使用されていない。505は磨石である。片面が磨り面として利用されている。また、磨り面の中央付近と両端面に敲打痕が残る。506は扁平打製石斧。

前述したように、他遺構が重複していた可能性やSH042の遺物との区分が不十分であったため、時期の異なる遺物が本竪穴建物跡の遺物として混入しているようである。弥生時代後期に位置づけられる土器は本竪穴に伴わない混入品と考えられ、本竪穴建物跡の時期はⅣ期である。

SH042 (第345図)

調査区F-15に位置する。SH04を切り、北半が調査区外に及ぶ。現状で東西6.5～6.7mで、炉跡などの位置から全体を復元すると南北は約6.0mとなり、長方形を呈するものと思われる。炉跡と思われる上坑は、径約1.0m、深さ0.1mの円形を呈し、底面に径0.2mの硬化した焼土が残る。炉跡の南側の機障には、径1.0m余、深さ0.5mの上坑がある。主柱穴と思われる柱穴は炉跡の東側1.4mの位置にあるが、炉跡の西側では確認することができない。よって、東西に長軸をもつ1本柱の竪穴建物であると考えられる。

出土遺物は第53図507～514で、507～512は弥生土器壺、甕、高坏、513は磨製石斧、514は鉄製品である。507は壺の胴部で、貝殻腹縁により弧状の文様が描かれる。508、509は高坏の坏部である。外面に稜がつき、両者とも稜の位置が全体の中程～中程下位に下がり、口縁が大きく外反し外方に開く。510は鉢の口縁部か。511、512は底部である。511は平底の痕跡が残るレンズ状の底部である。512は底面に平底にちかい円盤を貼り付ける。513は柱状片刃石斧で、縦方向に薄く剥離したものである。514は鉄製品で、刀子の基部と思われる。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH044 (第347図)

調査区H-15に位置する。南西～北東に長軸をもつ長方形を呈するものであるが、北西壁の中央に突出部を有することから、平面形は凸字状を呈する。その規模は、長辺6.5～6.8m、短辺5.5～5.8m、深さ0.35mである。突出部は、長さ2.15mで1.25m突出している。両短辺の壁に沿って幅1.2m、高さ0.1mのベッド状遺構が付く。このうち、北東壁のベッドは南東壁に沿って0.6m屈曲しL字状を呈する。両者のベッドとも、壁際に幅0.15～0.25m、深さ0.1mの小溝が走る。ベッドは、茶褐色土などの盛土により成形されている。また、突出部についても床面から0.1m高いベッド状遺構となっている。やはり、壁に沿って幅0.1～0.2m、深さ0.05mの小溝がみられる。この部分は、基本的に地山削り出しで、最上層に厚さ数cmの黒褐色を呈する整地層がみられる。床面中央には、0.75×0.95m、深さ0.1mの土坑があり、底面に径0.2mの焼土層が残っており炉跡と考えられる。炉跡と南西壁の間には、1.1×1.3m、深さ0.2mの土坑がある。土坑内には、深さ0.2mの柱穴が対峙するように並ぶ。主柱穴は長軸上に2本を配する。

出土遺物は第54図515～530で、515～524は弥生土器の甕、壺、鉢、器台、525～529は砥石、530は鉄

製品である。515、516は壺である。515は口縁部が外方に強く折れるもので、胴部は張らない。516は口縁部がくの字状に折れ、胴部は長胴気味で肩部から中程にかけ張る。517は短頸壺である。胴部は大きく張り、口縁部は短くくの字状に折れる。518は長頸壺か。頸部より上部を欠き、胴部は球状を呈し丸底である。520、521は鉢である。両者とも口径に比しやや器高の低いもので、底部はわずかに平底が残る。520は内湾する胴部が口縁にいたる。521は底部から直線気味に口縁にいたる。519、522、523は底部である。519は壺で平底を呈する。522は壺と思われる、わずかに平底が残る底部から球状の胴部に続く。523は厚みをもつもので、平底である。524は器台である。上部は円柱状を呈し、太い脚が底部にむかい伸び、底部ちかくでやや開き踏ん張るようなかたちをとる。525～529は砥石である。欠損して不明な部分もあるが、上下面に加え、側面や端面も研ぎ面として使用している。厚さの分かるものうち、528は厚く、他は比較的薄い。530は鉄製の刀子である。

混入品もみられるが、出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期である。

SHO45 (第348図)

調査区J-15・16に位置する。南北6.0%、東西4.5%、深さ0.2%の長方形を基本形とし、4箇所の突出部が付く。南壁には1箇所の突出部があり、南西隅から長さ2.1%が南に1.1%突出する。突出部は床面より0.05%が高く、壁に沿った幅0.2%、深さ0.1%の小溝がある。この小溝は突出部を出て、西壁に沿いしばらく続く。ここでは地山を削りだし成形した後に、厚さ数%の黒褐色土で盛上りベッド状にしている。西壁には、長さ4.5%の突出部があり、0.8%突出する。床面より0.1%高く、北壁と南から西壁にかけ、壁に沿った小溝がある。黒褐色土や茶褐色土の盛土によりベッド状に成形している。北壁には2箇所の突出部がある。北西隅と北東隅から長さ2.0%が、各々1.2%北側に突出する。やはり床面よりも0.1%高く、幅0.15～0.25%、深さ0.1%の小溝が壁に沿って走る。北西隅が黒褐色土の盛土で成形されるのに対し、北東隅はほとんど地山削り出しである。炉跡は床面中央からやや東に寄った位置にある。0.9×0.75%、深さ0.1%の土坑底面に径0.25%の焼土があり、埋土は焼土混じりの土である。炉跡東側の壁際には、1.2×0.8%、深さ0.2%の土坑がある。主柱穴は長軸上に2本が配される。

出土遺物は第55・56図531～539、541～548で、531～539、541～543は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、544～548は石包丁、砥石、紡錘車などの石器・石製品である。531、532は壺である。531は胴部中程が大きく張るもので、平底を呈する。頸部下と胴部中程に断面三角形の突帯が各々1条付される。532は外反気味に立ちあがる頸部から、口縁部が外方に強く折れる。口縁端部は上下に肥厚する。頸部に刻みを有する断面三角形の突帯が1条付される。533～539は壺である。いずれも口縁部は頸部からくの字状に外方に折れ、外反気味に口縁にいたる。胴部は長胴で、胴部最大径が口径よりもやや大きい。539のみ底部が残る、しっかりした平底である。541は鉢である。半球形の体部から口縁部が外方に折れる。542は小型の鉢で、平底を呈するものと思われる。543は平底の底部である。544は石包丁である。比較的細身で、刃部は外湾する。545はサヌカイト製のスクレイパーである。横長剥片側面の両面に細かい剥離を施す。547は砥石で上下面及び両側面が研ぎ面となる。546は紡錘車である。両面及び側面に研磨等を施し円形に整え、中央に円形の穴を穿つ。548は磨石で磨り面と敲打痕が残る。

出土遺物から、本壜穴建物の時期はⅥ期である。

SHO46 (第346図)

調査区J-16に位置する。南西-北東に長軸を有する長方形を呈する。一部が試掘トレンチのため明瞭ではないが、長辺3.5%、短辺3.0%、深さ0.2%である。中央付近に径0.7%、深さ0.05%の円形土坑がある。底面に径0.2%の焼土層があり、埋土に焼土が混じることから炉跡と考えられる。炉跡南東側の壁に沿って、1.0×0.55%、深さ0.1%の土坑がある。主柱穴は1本である。床面の踏み固めは顕著ではない。

出土遺物は極めて少なく小破片で、図示できるものはなかった。

本壜穴建物の時期は、壜穴の形態から弥生時代後期である。

SHO47 (第349図)

調査区I-16に位置する。東西に長い長方形を呈し、東西4.8%、南北3.7%、深さ0.25%である。西壁と東壁にベッド状遺構が付く。西壁のベッドは幅0.8%、高さ0.1%で、地山の小ブロックを含む黒褐色土の盛土による。北壁から

両壁にかけて、幅0.15m、深さ0.05mの小溝がある。東壁のベッドは幅1.2mで、北壁から29mで終わっている。高さは0.1mで、地山削り出しの壁近く以外は地山ブロックを含む黒色土の盛土による成形である。小溝などはみられない。炉跡は中央からやや南に寄った位置にある。0.6×0.7m、深さ0.05mの方形気味の土坑底面に径0.2mの焼土層がある。炉跡と南壁の間には、1.0×0.6m、深さ0.1mの土坑がある。また、南東隅周辺には不定形気味の土坑がある。主柱穴は1本で、東壁沿いのベッド状遺構コーナー部にある。

出土遺物は第56図549～564である。549～563は弥生土器壺、甕、高坏、鉢、器台で、564は砥石である。549は小型の壺である。胴部中程が大きく張り、すはまるように肩部から頸部へと続く。550～553は甕である。550は内面にヘラ削りが一部みられる。551は底部に低い脚が付き、口縁部は緩やかに外反する。552は平底を呈するもので、胴部はあまり張らず胴部最大径と口径がほぼ同じである。口縁部は緩やかに外反する。553は上半部の資料で、552と同様な器形を呈する。554は高坏である。坏部は中程で大きく張り口縁部に向かい内傾する。内外面にヘラ磨きが施される。555、556、560、561は鉢である。555は平底でコップ状を呈する。556は平底で、口縁部に向かいすはまる。560は小型品で、丸底の体部から口縁部が外方に折れる。561は厚底で上げ底状を呈する底部である。562は脚部である。557～559、563は器台である。557は円筒状を呈するもので、器高が低く、器壁が厚い。558、559、563は下半部で、底部に向かい大きく開く。564は砥石の欠損品である。

出土遺物から、本竈穴建物はⅦ期である。

SH048 (第350図)

調査区H-17グリッドに位置する。SK129と前後関係にあり、構築順はSK129→SH048である。東西3.2m、南北4.5mの長方形を呈し、深さ0.3mである。主柱穴は2本で、中央やや東側に直径0.6mの炉穴があり、東壁際には大きさ1.5×1.5m、深さ0.15mの土坑がある。炉付近と北側壁際の床面で炭を検出した。

遺物の多くが床面近くから出土しており、それを第57図565～582に示した。565は弥生時代土器壺で肩部に三角突帯を張る。566は刻目突帯の下城式の甕の口縁部。567、568は甕の口縁。571～574は厚底の甕の底部。569、570は高坏の脚部。575は鉢。576は鉢。577は脚付き鉢。578は壺形土器。579は器台である。580は泥岩製の砥石。581は安山岩製の台石。582は鉄斧である。

出土遺物から、この竈穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期に属する。

SH049 (第351図)

調査区GH-16-17にまたがってある。SK119、SK121と前後関係にあり、構築順はSK119-SK121→SH048である。東西5.5m、南北4.5mの長方形を呈し、深さ0.15mである。床面から数基の浅い柱穴を検出している。東側に幅1.5m、高さ0.1m、西側に幅0.9m、高さ0.1mのベッド状遺構を持つ。南壁際には大きさ1.5×1.5m、深さ0.3mの土坑がある。中央部で炉穴は確認できなかったが、床面から土器に混じって炭が見られた。

遺物は第57～60図583～638である。583～586は弥生土器壺。583は口縁平坦。585は胴部最大径近くにM字突帯を廻らす。587～602は甕で、口縁立ち気味で、底部はレンズ状を呈す。603～610は高坏。612-613は脚付き無頸壺。613は鉢。614は長頸部の体部か。615～617は碗。618は脚付き鉢である。622～628は器台。629は水色を呈するガラス小玉。630は千枚岩質泥岩製の扁平打製石斧。631～638は安山岩製の台石、凹石、砥石、磨石である。

出土遺物から、この竈穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期に属する。

SH050 (第352図)

4次調査区北側のF-16グリッドに位置し、北側大半は調査区外に伸びる。残存している範囲は東西5.0m、南北1.7mで、長方形を呈している。その深さは0.2mである。SH052と切り合い関係にあり、SH052→SH050の順である。

SH050とSH052は当初1基の遺構として調査をしていたため、遺物の区別はしていなかった。両遺構の遺物を第61図640～651に図示した。そのうち641の甕と645の付付き鉢のみがSH050単独の出土遺物である。

640-641は弥生土器甕。642、643、646は高坏。644、645は台付鉢。648は姫島産黒曜石のスクレイパー、649-650は泥岩製の砥石。651は安山岩製の砥石。647はガラス小玉である。これらの出土遺物から、この竈穴建物

の時期は弥生時代後期である。

SH051・052 (第353図)

調査区F-16に位置し、SH060に切られている。SH051(方形プランの竪穴建物)とSH052(円形プランの竪穴建物)がほぼ重なった状態で検出されており、前後関係はSH052→SH051の順である。SH052は、およそ径5.2m、深さ0.2mである。大半がSH051と重複しているため、床面遺構は確認できなかった。SH051は、4.2m以上×3.2m以上の規模で、深さ0.3mである。南東隅際に大きさ1m、深さ0.4mの土坑がある。

出土遺物から、これらの竪穴建物の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SH053 (第354図)

調査区F-16に位置する。土坑SK116、SK117、SK119と前後関係をもつ。東西3.1m、南北3.1mの方形を呈し、深さ0.2mである。東側に幅1.2m、高さ0.15mのベッド状遺構を持つ。主柱穴は1本で、中央部に大きさ0.7m×1.0m、深さ0.2mの土坑がある。遺物は主にベッド状遺構の上で若干浮いた状態で出土した。

その遺物は第61・62図652～656、658、660～664である。652は弥生土器壺、653～656、658、660は壺、658は頸部に三角突帯を廻らす。660は厚手上底の裏の底部、663は壺の底部。661は小型壺、662は鉢である。664は千枚岩製の磨製石斧である。

出土遺物及び土坑との前後関係から、竪穴建物の時期は弥生時代後期である。

SH054 (第356図)

調査区F-17グリッドに位置する大型の竪穴建物である。SH056に北西側を切られている。さらに北側は調査区外に伸びる。東西10.2m、南北10.4m以上の不整形円形を呈し、深さ0.25mである。周囲の一部に壁溝を掘り、南側はSH057を切っている。中央部に径1.8mほどの浅い土坑を持ち、主柱穴は円形に廻る。

遺物は建物全体の床面からまんべんなく出土しており、それらは第62～65図665～722、753に示した。665～677は弥生土器壺、667は口縁部平坦、鋤先状を呈している。668は複合口縁、669は瀬戸内系の壺である。670は突帯に刻みを入れ、677は磨掃きを施す。678～682は壺である。683・684は高坏の脚、685は鉢、686～688は小型壺で、686は無頸、688は頸部に穿孔を施す。695・696は器台である。697は泥岩製の石剣、698～701は石包丁で、そのうち699は泥岩、700は結晶片岩、701は立岩産の輝緑凝灰岩製である。702・703は磨製石斧で、702は蛇紋岩製、703は砂岩製である。704は珪岩の石鏃、705はサマカイト製のスクレイパー、707は姫島産のスクレイパーである。708は剥片石器で火打ち石として使用されたものか。709は結晶片岩の打製石斧、710～716は砥石、そのうち710～715は泥岩、716は珪花木製、717～720は安山岩の白石、721は石製品の蓋、722は緑泥片岩の紡錘車である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期に属す。

SH055 (第355図)

調査区F-16及びF-17にまたがって位置する円形の竪穴建物である。SH054及びSH051に東西を切れ、残存部は少ない。東西2.3m、南北4.0m、深さ0.25mである。復元径は5.8mほどである。壁溝があり、柱穴はプランに沿って円形に廻る。

遺物は床面や土坑内から出土している。第65図723～728である。723は弥生土器壺、724は高坏、727は姫島産黒曜石の石鏃、728は千枚岩質頁岩の石鏃未成品である。これらの出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期前半のⅢ期に属するものと考えられる。

SH056 (第357図)

調査区E-17に位置する。SH054と前後関係があり、SH054→SH056の順である。北側は大半が調査区外に伸びる。東西6.1m、南北2.6m以上の方角を呈し、深さ0.3mである。確認された主柱穴は1本で、南西部の床にはベッド状遺構が造られている。

遺物は多く、その大半が床面やベッド状遺構直上での出土である。遺物は第65図729～732、第66・67図に図

示した。729は弥生土器壺の頸部、M字突帯を5条廻らす。730～732、734～742は甕、底部は平底からレンズ状を呈す。743～752は高杯や鉢である。763～765は石包丁で、763は結晶片岩、764・765は立岩産輝緑凝灰岩製である。766は台石、768は凹石、769は敲石、いずれも安山岩製。767は結晶片岩の石斧である。出土遺物及びSH054との前後関係から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期前葉のV期に属するものと考えられる。

SH057 (第358図)

調査区F-17に位置する円形竪穴建物で、その大半をSH054に切られており、残りは東西60%、南北19%、深さ0.1%であり、その復元径は62%ほどとなる。柱穴は円形プランに沿って廻る。

床面から若干の遺物は出土したが、細片のみで、遺物の時期を確定できなかったが、SH054との前後関係から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉以前であると考えられる。

SH058 (第359図)

調査区FG-17-18にまたがってある。南東隅をSH059に切られている。東西79%、南北57%の長方形を呈し、深さ0.3%である。当初1基の遺構として調査をしていたが、掘り進めていくと、3基の方形竪穴建物の可能性が出てきた。一つは小型4本柱の建物、一つはSH058の大半を占める4本柱の建物、もう一つは西側に残る張り出しを持った建物である。そのため出土した遺物も若干の時期差が見られた。その遺物は第68図770～778、733である。770は弥生土器壺の胴部、771～776、733は甕で口縁部は立ち気味。777は泥岩の砥石、778は泥岩の石斧である。出土遺物から、これらの竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のVI期と考えられる。

SH059 (第360図)

調査区G-17-18に位置し、SH058を切って建てられている。東西56%、南北74%の長方形を呈し、深さ0.25%であり、周囲に側溝を廻らす。主柱穴は2本で、中央部に直径14%ほどの炉穴があり、南東隅には大きさ18%×20%、深さ0.35%の土坑がある。その土坑の両側に竪穴内部を仕切ったような跡が確認された。北側2か所に約10cmの高さのベッド状遺構があり、南西隅に張り出し部の傾斜が検出された。

建物の床面直上から遺物が出土しており、それらは第68図779～794に示した。779及び786～788は弥生土器壺で、786・787は複合口縁をもつ。780～785及び789～791は甕、781は直立する口縁に刻目突帯をもつ。792は姫烏産黒曜石の石匙、793は砂岩製の砥石、794は安山岩製の凹石である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のVI期である。

SH060 (第361図)

調査区J-17に位置する。方形を呈するもので、西側をSH061に切られる。その規模は、南北38～41%、東西35%、深さ0.05%である。中央に0.4×0.3%、深さ0～0.05%の楕円形の土坑があり、焼土混じりの埋土であることから炉跡と思われる。炉跡の東側には、1.1×0.8%、深さ0.3%の楕円形土坑がある。土坑は東壁とは接しておらず、0.1%の間隔があいている。主柱穴は、南北の主軸上に炉跡はさみ2本配する。このうち北側の柱穴は南側に比べ浅いことから、基本的に1本柱で北側は補助的なものであった可能性もある。

出土遺物は第69図795～797である。795、796は弥生土器高杯、鉢で、797は石罐である。795は高杯脚部で長脚である。上半部で筒状を呈し、裾部に向かい開き始める。円形の透かし穴がある。796は小型の鉢である。胴部中程が張り、括れた頸部から口縁部が開くものである。797はサヌカイト製石罐で、先端部を欠く。

出土遺物から、本竪穴建物の時期はVI期か。

SH061 (第363図)

調査区J-18に位置し、SH060とSH062を切る。南北7.0～7.3%、東西6.4%、深さ0.25%の長方形を基本形とするが、南西隅に突出部をもち、北東コーナー部に屈曲がみられるため、やや複雑な平面形を呈する。南壁を除く各壁に沿って幅1.2%、高さ0.05～0.2%のベッド状遺構が付く。西側、東側のベッドとも南壁まで及ばず、南壁との間を0.3～0.7%残し終わっている。西側のベッドは、突出部を含めた西壁のラインに平行するように屈曲する。西側と北側のベッド

は高さに違いがあり、北側が0.05m低い。また、ベッドの成形は西側が基本的に地山削り出しで、上層の敷石に地山ブロックを含む黒褐色土が盛られている。これに対し東側は地山削り出しの割合が少なく盛土が多い。床面中央には炉跡が2基あり、南側の炉跡が北側を切っている。北側が0.7×0.5m、深さ0.1mの不定形、南側が0.6×0.5m、深さ0.05mの円形を呈する。両者とも底面に焼土層が残る。焼土混じりの土で埋まっている。炉跡南側の壁近くには、東西1.5m、南北1.1m、深さ0.5mの不定形土坑がある。主柱穴は4本である。各々の位置において2本あるいは重複して柱穴がある。炉跡にも切り合いがあったことから、建て直しがあったことが分かる。

出土遺物は第69図798～801で、壺、鉢などがある。798、799は複合口縁蓋で同一個体と思われる。798は口縁部で外傾する。799は胴部上半である。頸部に刻みを有するベルト状の突帯が付き、肩部が大きく張る。800は鉢である。小さな平底の底部を有し、口縁部に向かい直線的に開く。801は低い脚部である。

出土遺物から、本壺穴建物はⅧ期である。

SH062 (第364図)

調査区K-18に位置する。北側がSH061に切られる。壺穴は東西に長い長方形を呈し、東西5.6m、南北4.1m、深さ0.3mである。短辺の西壁と東壁に沿い、幅1.1～1.3m、高さ0.1mのベッド状遺構が付く。ベッドは地山削り出しの後、地山ブロックを含む黒褐色土の盛土による成形である。炉跡は中央やや南寄りの位置にあり、径0.7m、深さ0.05mの土坑底面に焼土層が残る。炉跡の南側には、径0.7m、深さ0.3mの円形土坑がある。主柱穴は2本で、東西の主軸上に配する。

出土遺物は第69-70図802～816で、壺、甕、高坏などの土器に加え、砥石、鉄製品、土器片加工品などがある。802、805は壺である。802は複合口縁の外傾する口縁部である。805は壺の胴部で、刻みを有するベルト状突帯が付く。803、804、806は甕の上半部である。いずれも外反気味の口縁部が頸部から外方に折れる。807～809は高坏である。807は坏部と思われる。808、809は脚部である。両者とも長脚で、やや細身の円柱部から裾に向かい大きく開く。809には円形の透かし穴がみられる。810～812は壺と思われる。このうち810と811は小型品である。811、812の底部は、レンズ底あるいはレンズ底にちかひ形態を呈する。813、814は砥石である。813は欠損品で、残存する3面に研ぎ面としての使用が認められる。814は完形品で、直方体を呈する。上下面及び4面の側面が研ぎ面として使用されている。815は鉄製品の欠損品で、鉋先と思われる。816は上器片を打ち欠きにより円形に成形したものである。

出土遺物から、本壺穴建物はⅧ期である。

SH063 (第362図)

調査区FG-18グリッドに位置する。SH064と切り合いをもち、SH063→SH064である。東西4.0m、南北4.6mの長方形を呈し、深さ0.15mである。主柱穴は2本で、中央部に0.8m×0.6mの炉穴があり、南東隅には大きさ0.9m×1.1m、深さ0.35mの土坑がある。

遺物は建物床面及び竪穴土坑内から出土している。それを図示したのが、第70図817～824である。817は弥生土器壺、胴部は張らない。819は無頸壺、818・820は壺、821は泥岩製の砥石、822はサヌカイトの石鏡、823は結晶片岩の石斧、824は安山岩の台石である。これらの出土遺物及びSH064との前後関係から、この壺穴建物の時期は弥生時代中期後半のⅣ期に属すると考える。

SH064 (第365図)

調査区FG-18-19にまたがってある。SH063と切り合いをもち、SH064→SH063である。東西3.7m、南北4.5mの長方形を呈し、深さ0.25mである。主柱穴は2本で、中央部に0.7m×1.0mの楕円形の炉穴があり、東西両側に大きさ1m程度の土坑がある。また、壺穴の周囲に0.3～0.5m幅の側溝を掘っている。

遺物は主に中央炉及び柱穴周辺から出土している。それは第71・72図836～839である。825・828・829は弥生土器壺、826～830は甕、口縁立ち気味で、底部はレンズ状である。831は鉢である。833・834は石包丁で、833は泥岩、834は緑泥片岩製の瀬戸内系のものである。835は泥岩の砥石、836は鉋山産黒曜石の石鏡、837は結晶片岩の石斧、838・839は安山岩製の砥石である。これらの出土遺物から、この壺穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期に属するものと考えられる。

SH065 (第366図)

調査区 G-18 に位置し、竪穴南半を SH066 に切られている。東西 4.5[㍎]、南北(復元) 4.3[㍎]の円形を呈し、深さ 0.2[㍎]である。主柱穴は 4 本あり、中央部の炉穴は SH066 の削平を受けたため不明である。

遺物は全体に散らばって出土しており、図示できるものは、第 72 図 840 ~ 845 に示した。840・842・843 は弥生土器壺、841 は甕、844 は高坏の脚、845 は石製の未成品で、腰岳産黒曜石製である。

出土遺物及び SH066 との前後関係からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代中期前半のⅢ期と思われる。

SH066 (第367図)

調査区 GH-18 に位置する。SH065、SH067 と前後関係を持ち、SH065 → SH066、SH067 → SH066 の順である。東西 9.2[㍎]、南北 9.4[㍎]の円形を呈し、深さ 0.1 ~ 0.3[㍎]である。8 本の主柱穴は円形プランに沿って廻り、中央部に 2.0[㍎] × 1.3[㍎]の炉穴があり、竪穴周囲に廻溝を掘る。

遺物は建物の床全体から出土しており、それは第 72 図 846 ~ 856、第 73・74 図、第 75 図 898 ~ 900 である。第 72 図 846 ~ 856、第 73 図 857 ~ 859 は弥生土器壺である。846・847 は口縁上面が平埴、848 は袋状口縁、849 ~ 851 は瀬戸内系、852 は頸部に穿孔を施し、856 は頸部の三角突帯に刻みをもつ。857・858 の底部は平底からやや丸みをもつものである。860 ~ 870 は甕、871 ~ 874 は鉢、875・876 は付付鉢である。886 は高坏、885・887 は器台である。888 は泥岩製の石包丁、完形品である。889 は黒曜石の石鏃で、890 ~ 892 の剥片は黒曜石製である。893・894 は磨石、895・896 は敲石、897 は凹石、898 は台石、899 は砥石で、いずれも安山岩。900 は鉄鏃である。出土遺物及び SH065 との前後関係からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉 ~ 後葉のⅥ期に属するものと考えられる。

SH067 (第368図)

調査区 H-18 に位置し、北側の 3 分の 2 を SH066 に切られている。東西 6.5[㍎]、南北 6.7[㍎]の円形を呈したと思われる。残存箇所の深さは 0.15[㍎]である。主柱穴は円形プランに沿って廻っていたようで、中央部の炉穴は不明である。

出土遺物は細片のみで、遺構の正確な時期は確定できないが、SH066 との前後関係からみて、弥生時代中期後半以前のものと考えられる。

SH068 (第369図)

調査区 GH-19 に位置する。東西 3.8[㍎]、南北 4.6[㍎]の不整形を呈し、深さ 0.4[㍎]である。主柱穴は 2 本で、中央部に 0.7[㍎] × 0.8[㍎]の炉穴があり、東壁中央に大きさ 1.2[㍎] × 0.8[㍎]、深さ 0.25[㍎]の土坑がある。竪穴周囲には幅 0.3 ~ 0.4[㍎]の側溝が付く。

遺物は床面全体から出土しており、それらは第 75 図 901 ~ 913 である。902 は弥生土器無頸壺、905 は壺の胴部、910 は壺の底部である。901 は下城式の甕、906 は三角突帯の甕、909 は器台である。911 は泥岩の砥石、912 は安山岩の磨石、913 は安山岩の敲石である。

出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉 ~ 後葉のⅥ期である。

SH069 (第370図)

調査区 I-19 に位置する。東西 3.5[㍎]、南北 5.1[㍎]の長方形を呈し、残存する深さは 0.2[㍎]である。主柱穴は 2 本で、主柱穴を挟んだ中央部に直径約 0.5[㍎]の炉穴がある(炉の東側の長方形の土坑は竪穴建物に伴うものではない)。炉穴のすぐ南西側に床面が焼けて硬化した部分が認められた。

遺物は床面からやや浮いた状態で出土しており、917 は榿際でつぶれた様な状況で出土している。しかし、いずれも本来この建物に伴うものではない。また、堆積状況は第 370 図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第 76 図 914 ~ 924 である。914 ~ 919 は弥生土器壺、921 と 922 は壺である。壺は口縁部が「く」の字に折れ、917 と 918 はタタキ裏が残る。919 は小型の甕で、底部は凸レンズ状に突出する。920 は脚付き甕、922 は平底の壺底部である。923 は姫島産黒曜石製のスクレイパーで右側を加工している。924 は安山岩製の敲石である。

出土遺物には弥生時代後期前半のものも含むが、新しい遺物を評価するとこの竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH070 (第371図)

調査区 K-19 に位置する。東西 6.4m、南北 4.5m の長方形を呈し、残存する深さは 0.25m である。主柱穴は 2 本で、中央部に 0.9 × 0.5m の炉穴があり、北側壁際には大きさ 1.0m × 0.5m、深さ 0.15m の土坑がある。また、南東角部には東西 1.0m、南北 1.8m の長方形を呈する一段高い突出部が付設している。

出土した遺物は少なく、第 76 図 925 ～ 929 である。925 は複合口縁壺で、下部にやや稜線を有する、926 は甕または鉢、927 は器台、928 と 929 は壺の底部である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅡ期である。

SH071 (第372図)

調査区 K-19-20 に位置する。SH073 から切られている。東西 7.0m、南北 6.5m の長方形で、残存する深さは 0.25m である。一部削平されているが、本来は南側の一边を除く三辺に幅 0.9m、高さ 5m ほどのベッド状の高まりが「コ」字状に取り巻いている。主柱穴は 4 本で、床面中央やや南寄り直径 0.8m の炉穴があり、壁が焼けて赤化していた。また、その南の壁際には大きさ 2.0m × 1.5m、深さ 0.3m の土坑がある。

遺物は第 77 図 930 ～ 944 である。930 と 931 は弥生土器壺、932 と 933 は甕、934 ～ 939 は鉢、940 は甕の底部である。941 は安山岩製の石包丁、942 ～ 944 は鉄器である。942 は刀子、943 と 944 は断面方形を呈する。鉄鏃か。甕は外面にタタキ痕を有する (933)。934 の鉢は小さな平底である。935 と 936 は脚を持つ鉢である。937 は底部が小さく突出するもので、長径壺の底部かも知れない。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅡ期である。

SH072 (第373図)

調査区 K, L-20 に位置する。SH071 を切っている。南側は調査区外となるため南北方向の大きさは不明であるが、東西は 4.1m で、深さは 0.25m である。形状は長方形と考えられる。主柱穴は不明であるが、中央部に直径約 0.5m の炉穴があり、焼土が堆積していた。

出土遺物は第 77 図 945 ～ 950 である。945 ～ 949 は弥生土器甕、950 は壺である。945 は口縁部直下に突帯を廻らせるもの、945 ～ 949 は「く」の字口縁部の甕で、体部にはタタキ痕が認められるものがある (947、949)。950 は平底の壺の底部である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅡ期である。

SH073 (第374図)

調査区 K-20 に位置する。SH071 を切っている。東西 5.6m、南北 4.2m の長方形を呈し、残存する深さは 0.4m である。主柱穴は 2 本で、中央部に直径約 0.65m、深さ 0.1m の炉穴があり、床が焼けていた。

遺物は第 78 図 951 ～ 962 である。951 と 952 は壺、953 と 954 は甕、955 と 956 は高坪、958 は脚付き鉢である。957 と 959 は小型の甕、960 と 961 は壺の底部と考えられる。951 は断面台形でキザミ目を有する。952 は短い口縁部の直下に突出する突帯を廻らせる。953 と 954 は「く」の字口縁部の甕である。962 は葎石である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅡ期である。

SH074 (第375図)

調査区 K-20 に位置する。SH073 に切られているため、全形は不明であるが方形または長方形を呈する。残存する深さは 5m 程度である。主柱穴は 2 本と考えられる。床面は第 73 号竪穴建物に大きく削られており、炉穴等は不明である。

遺物は第 78 図 963 と 964 である。963 は鉢で、ほぼ丸底状を呈する。963 は大型の甕の胴部破片である。

出土遺物は少ないが、この竪穴建物の時期はⅡ期と考えられる。

SH075 (第377図)

調査区 J-20 に位置する。SH076 を切っている。東西 6.6m、南北 6.6m のほぼ正方形を呈し、深さは 0.4m である。

主柱穴は4本で、中央部に直径約0.5mの炉穴と思われる土坑があり、南東の壁中央に接して大きさ1.3m×1.5m、深さ0.35mの土坑がある。また、北側と南側の壁際には幅約1.0mで、段差10cmほどのベッド状施設が認められる。西側にも一部長さ2.8mにわたって高まりがある。

遺物は第79図965～981である。965と966は弥生土器壺、967～970は甕、971は高坏、972～976は鉢である。977は器台、978は壺の底部と思われる。980は砂岩製の砥石である。979は立岩産輝緑凝灰岩製の石包丁、981は結晶片岩製の砥石。965はベルト状の突帯で、ハケ原体の押印文がある。966は口縁部に凹線文が廻る瀬戸内系の壺。鉢はやや平底の残るものから、丸底のものがある。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH076 (第378図)

調査区J-20に位置する。SH075に切られている。東西9.0m、南北8.5mのはほぼ正方形を呈する大型の建物で、残存する深さは0.2mである。主柱穴は4本で、中央やや南よりに直径約0.5mの炉穴がある。北側の壁際には僅かに高まりが認められるので、本来はベッド状施設があったものと考えられる。

遺物は第79図982～第80図998である。982～997は弥生土器である。982は口縁部が「く」字に折れる複合口縁壺で、頸部にはベルト状の突帯が廻る。984～986は壺で、長胴となる。987と988は鉢、989と990は高坏、991は脚付きの鉢である。992～994は丸底の鉢、996は壺の底部、997は甕の底部、995は突起を有する支脚、998は扁平打製石斧である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH077 (第379図)

調査区H-20に位置する。東西4.7m、南北4.2mの長方形を呈し、深さは0.36mである。東側の一辺は約0.4mほど張り出していた可能性がある。主柱穴は2本で、中央部に直径約0.6mの炉穴があり、焼土と炭化物が堆積している。また、東西の各辺に沿って0.1mほど高いベッド状施設が認められる。

遺物は第81図999～1011である。999は弥生土器壺で口縁部上半が垂直に立ち上がる複合口縁壺である。1000～1003は甕、1004は鉢、1006は小型の鉢と思われる。1005は器台、1007と1008は壺の底部である。1009と1010は安山岩製の砥石、1011は磨石である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期と考えられる。

SH078 (第380図)

調査区G、H-20に位置する。東西3.6m、南北4.2mの長方形を呈し、深さは0.3mである。主柱穴は2本で、中央部に直径約0.5mの炉穴があり、東側中央の壁に接しては大きさ949m×949m、深さ949mの土坑がある。また、深さ数cmの溜溝が廻る。

堆積状況は第380図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第82図1012～1027である。1012～1014は弥生土器壺、1015と1016は小型の短頸壺、1017は胴部に穴がつけられた長頸壺、1018と1019は高坏である。1021と1022は壺の底部、1020は壺の底部である。1023は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。また、1024～1027は張り出し部から出土している。1024～1026は甕で、1027は口縁部が鋸先状になる高坏である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH080 (第376図)

調査区K-21に位置する。SD001に切られており、大半は失われている。幸うじて北側の一辺が残っており、東西3.5mである。深さは0.3mである。床面には大量の焼土と共に、弥生土器の大型破片が床面に接して出土した。

遺物は第83図1028～第84図1039である。1028～1031は弥生土器壺で、頸部がやや内傾ぎみに立ち上がり、口縁部が強く折れ曲がる。1029の胴部には断面的な突帯が廻る。1032～1034は甕で、胴部最大径を上位に有し、厚みの薄い平底を呈する。1032には頸部に突帯が廻る。1035と1036は鉢である。1035は小さく折れる口縁部を持つ。

1036 は平底で内湾しながら開く。1037 と 1038 は器台である。器壁は比較的薄く、丁寧に作られている。1039 は立岩産輝緑凝灰岩製の石包丁である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH081 (第 381 図)

調査区 D、E-2021 に位置する。大半が調査区に外に広がっており、辛うじて南西角部が残っており、(長) 方形住居であることがわかる。深さは 0.2% である。主柱穴は調査範囲内では確認できなかった。

遺物は第 85 図 1040 ～ 1042 である。1040 と 1041 は弥生土器鉢で、1041 は口縁部が小さく折れ開く。胴部には焼成後穿孔がある。1042 は鉄器で、刃部を有することから刀子と思われる。残存長 8.5%。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH082 (第 382 図)

調査区 F-21 に位置する。一部は調査年度の関係で調査できていないので、全長は不明であるが、南北は 3.5%、深さは 0.3% である。主柱穴は不明で、炉跡は確認できなかった。

遺物は壁際にやや浮いた状態で出土した。

遺物は第 85 図 1043 ～ 1055 である。1043 と 1044 は弥生土器壺、1045 ～ 1047 は蓋、1048 は鉢、1049 は蓋である。1050 と 1051 は小型の壺で 1051 にはヘラミガキが認められる。1052 は脚。1053 は長頸壺。1054 と 1055 は壺の底部である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH083 (第 384 図)

調査区 G-2021 に位置する。市道下で発見されたが、西側は一段低い畑地であったため全形は確認できていない。復元すると直径約 8.2% の円形となり、深さは 0.2% である。主柱穴は可能性のある 4 本は確認できたが全体の配置は不明である。中央やや南寄りには 0.6% × 0.9% の焼けた範囲が広がるので、炉跡と考えられる。また、壁に沿って壁溝が廻るが、残りは良くない。また、床面には方形に溝が掘られており、切り合いを示すものかもしれないが、独立した建物としては扱わなかった。

遺物は第 86 図 1056 ～ 1060 である。1056 は弥生土器壺の口縁部。1057 は器台である。1058 は鉢。1059 は石包丁、1060 は安山岩製の打製石斧である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH084 (第 383 図)

調査区 G-2021 に位置する。SH083 を切っている。その SH083 同様、西側は一段低い畑地であったため全形は確認できず、かろうじて東側の一辺のみ残存する。東西方向に 7.7% の(長) 方形を呈し、深さは 0.15% である。主柱穴は不明で炉穴も調査範囲では確認できなかったが、壁際に焼土が堆積していた。

遺物は第 86 図 1063 ～ 1065 である。1063 は弥生土器壺、1064 は鉢である。1064 は内外面ともよく磨かれている。出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅤ期である。

SH085 (第 385 図)

調査区 G-21 に位置する。東西 3.4% で南北は不明、深さは 0.1% である。主柱穴は不明である。東側の一辺には壁溝が廻る。

遺物の内、図示できるのは第 86 図 1066 である。弥生土器の小型壺で、口縁部はやや幅広となる。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH087 (第 386 図)

調査区 H-21 に位置する。SH088・SH089 を切って、SH077 に切られている。大きさは南北方向の 5.0% しか確認

できない。深さは0.45mである。柱穴や土坑は調査範囲では確認できなかった。

遺物は第86図1067～第87図1071である。1067は頸部に突帯を廻らせる壺。1068は鉢、1069は壺の胴部である。1070は壺、1071は凝灰岩製の砥石である。1070は口縁部がやや外反しながら開く、やや長胴気味の球形胴で、底部はほぼ丸底となる。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH088 (第386図)

調査区H-21に位置する。SH087に切られている。南北6.0m、深さは0.35mである。調査範囲が狭く、柱穴や土坑は確認できなかった。

遺物は第87図1072～1082である。1072～1074は弥生土器甕、1075は脚付きの鉢、1076は高坏、1077と1078は鉢である。1079と1080は小型の壺、1081は器台、1082は壺の底部である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH089 (第387図)

調査区H-21に位置する。SH087に切られている。大きさは不明で、深さは0.35mである。主柱穴は不明である。床面の北側から東側にかけて、幅1.0mで高さ0.15mほどのベッド状施設が廻る。

遺物は第88図1083～1091である。1083は弥生土器甕、1084と1085は壺、1086と1087は高坏、1088から1090は鉢である。1091は敲石である。1086の高坏は、口縁端部が小さく屈曲して立ち上がる。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅥ期である。

SH090 (第388図)

調査区H-21に位置する。SH087を切っている。東西4.1m、南北3.8mと僅かに長方形を呈し、深さは0.35mである。主柱穴は4本と考えられるが、南側の2本は確認できなかった。また、南側の辺中央に直径約0.7mで床面からの深さ0.35mの土坑がある。

遺物は床の中央付近に床直で出土している。廃絶後の早い時期に遺棄したことが窺える。

遺物は第88図1092～第91図1135までで、完形に近い遺物も多く出土している。1092は複合口縁の弥生土器壺、1093～1099と1114は壺、1100～1113は甕、1119～1129は高坏、1115～1118は小型の壺である。1132～1135は敲石である。1092の複合口縁壺は、口縁端部が小さく摘ままれ外方に延びる。1094の壺は、胴部下半部に焼成後の穿孔がある。1098と1114の壺胴部には扁平な突帯が廻り、刷毛様原体で押圧される。甕は概ね底部がやや凸レンズ状に突出する。高坏は口縁上半部が大きく開かず、外傾しながら開く程度である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ～Ⅷ期である。

SH094 (第389図)

調査区J-22に位置する。中央部を攪乱で確認できないが、南北3.4m、深さは0.45mである。壁溝と考えられる溝が廻るため竪穴建物としたが、柱穴も確認できず、竪穴建物とは断定はできない。

出土遺物は第91図1136のスクレイパー1点である。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH095 (第390図)

調査区E-21に位置する。SH096を切って、第5号掘立柱建物に切られている。東西3.7m、南北4.6mの長方形を呈し、深さは0.35mである。北東側の一辺には、約15°高いベッド状施設が作られている。柱穴は確認できなかったが、ほぼ中央部に浅い皿状の炉と考えられる土坑があり、竪穴建物と判断した。

遺物は第92図1137～1147である。1137～1140は弥生土器甕、1141は高坏、1142～1145は鉢である。1146は壺の底部と考えられる。1047は安山岩製の扁平打製石斧である。1144は外面から内面の上半部まで赤彩が

施されている。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH096 (第390図)

調査区 E-21 に位置する。SH095 に切られている。東西 6.3m、南北 6.1m のほぼ正方形を呈し、深さは 0.2m である。柱穴はいくつか確認されたが、主柱穴は不明である。中央部に直径約 0.5m の炉穴があり、南東の一辺中央には大きき 9.49m × 9.49m、深さ 9.49m の土坑がある。

遺物は第 92 図 1148 ～ 1153 である。1148 は半葎竹管文を施す弥生土器壺、1150 ～ 1153 は鉢、1149 は突起のつく支脚である。1150 は外面から内面の上半部まで赤彩が施されている。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH097 (第391図)

調査区 G-21 に位置する。直径 7.7m の円形に近い不整多角形を呈し、深さは 0.3m である。一部未掘であるが、周壁には幅 1.3m のベッド状施設が多角形の角で段差を有しながら廻る。さらに、ベッド状施設で囲まれた内側は、一辺 3.6m の方形の窪みがあり、その中央やや東側に 1.0m × 1.1m の炉穴と思われる土坑と、そのさらに東側に土坑が掘られている。主柱穴はベッド状施設際に廻る 5 本 (+a) である。

遺物は第 93 図 1154 ～ 1159 である。1154 は二重口縁壺の口縁部、1155 は壺、1156 と 1157 は鉢、1158 は器台である。1159 は鉄線の茎部である。1154 の二重口縁壺は、口縁部がわずかに内湾気味に内傾する。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH098 (第392図)

調査区 E-21.22 に位置する。SH005 を切っている。東西 4.6m、南北 3.6m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。東西両側に 10° ほど高いベッド状施設がある。柱穴は 5 箇所確認されたが、主柱穴は不明である。中央部に直径約 0.4m の炉穴と思われる小さな土坑がある。また、東側一辺の中央には大きき 0.8m × 0.3m、深さ 0.25m の土坑がある。

遺物は第 93 図 1160 ～ 1164 である。1160 は刻み目突帯を廻らせる弥生土器壺、1161 ～ 1163 は壺、1164 は緑泥片岩製の打製石斧である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH099 (第393図)

調査区 E、F-21.22 に位置する。SH100 を切っている。東西 5.3m、南北 6.3m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。主柱穴は 949 本で、中央部に直径約 0.5m の炉穴があり、その南側には 1.1m × 0.9m の土坑がある。また、北側と南側には幅 1.0m で高さ 0.1m のベッド状遺構がある。

遺物は第 94 図 1165 ～ 1174 である。1165 ～ 1167 は弥生土器壺、1168 ～ 1170 は鉢、1171 と 1172 は器台である。1173 は粘板岩製の砥石、1174 は安山岩製の磨石である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH100 (第394図)

調査区 E-22 に位置する。SH099 に切られている。東西 3.7m、南北 4.4m の長方形を呈し、深さは残りの良い北側で数m である。主柱穴は 2 本で、中央部に一辺約 0.5m の炉穴があり、その東には大きき 0.7m × 0.55m、深さ 0.2m の土坑がある。また、南北の両側の壁際には幅 1.2m のベッドが敷設されていた痕跡が認められた。

遺物は第 94 図 1175 ～ 1180 である。1175 は弥生土器壺、1176 と 1177 は鉢、1178 は脚付きの鉢、1179 は壺の底部と思われる。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅢ期である。

SH101 (第395図)

調査区 F-21.22 に位置する。SH102 を切っている。東西 4.2m、南北 5.4m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。柱穴は複数箇所を確認されたが、主柱穴と思われる柱穴は認められなかった。中央部には炭化した木材が残る炭化物の広がりがあり、竈と考えられる。

遺物は第 95 図 1181 ～ 1190 である。1181 ～ 1184 は弥生土器甕、1185 ～ 1187 は鉢、1188 は長頸壺、1189 と 1190 は脚付きの鉢である。1183 の甕は長胴となり、底部は丸底である。

出土遺物から、この竈穴建物の時期はⅦ期である。

SH102 (第397図)

調査区 F、G-22 に位置する。SH101 に切られている。東西 3.9m、南北 4.6m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。主柱穴は 2 本で、中央部やや南寄りには大きさ 0.8m × 0.75m、深さ 0.1m の土坑がある。

遺物は第 96 図 1191 ～ 1204 である。1191 ～ 1194 は弥生土器壺、1195 と 1196 は甕、1197 と 1198 は小型壺、1199 と 1200 は高坏、1201 ～ 1204 は壺の底部と思われる。1193 の壺底部にはへら掻きの「×」印がある。

出土遺物から、この竈穴建物の時期はⅦ期である。

SH103 (第399図)

調査区 II-22 に位置する。東西 4.3m、南北 5.0m の長方形を呈し、西側一辺のほぼ中央部に 1.9m × 1.2m の張り出し部が付く。残存する深さは 0.3m で、張り出し部は 10cm ほど床が高くなっている。建物本体の床は十字状に一段高くなり、東西の壁に沿って幅約 1.0m のベッド状施設となる。明確な主柱穴は確認できなかった、中央部に直径約 0.6m の竈穴があり、そのすぐ南側には大きさ 0.8m × 0.9m、深さ 0.1m の土坑がある。さらに、北東隅のベッドにも、直径 0.8m で深さ 0.7m の土坑がある。

遺物の出土状態は流入土に伴うものである。また、堆積状況は第 399 図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第 97 図 1205 ～ 1216 である。1205 は弥生土器甕で、口縁部は垂直に平坦面を持ち、屈曲して開く口縁部となる。1206 は直口壺、1207 と 1208 は壺の、1209 は甕の底部である。1210 ～ 1214 は鉄製品。1210 は鉄鎌の茎か。1211 は釣り針と思われ、返しが付く。1215 は粘板岩製の石剣の鋒。1216 は安山岩製の砥石である。

出土遺物から、この竈穴建物の時期はⅦ期である。

SH104 (第396図)

調査区 F-23 に位置する。SH105 に切られている。東西 3.2m、南北 3.5 + a m の長方形を呈し、深さは 0.1m である。柱穴は幾つか確認されたが主柱穴不明である。南側一辺の中央の壁に接して大きさ 0.8m × 0.5m、深さ 0.2m の土坑がある。

遺物は第 97 図 1217 ～ 1223 である。1217 と 1218 は弥生土器壺で、頸部に突帯が一条通る。1219 は小型の壺、1220 と 1221 も小型の壺か。1222 と 1223 は壺の底部。

出土遺物から、この竈穴建物の時期はⅦ期である。

SH105 (第398図)

調査区 F-23 に位置する。東西 4.7m、南北 3.5m のややいびつな長方形を呈す。記録図面がないため、遺態ながら深さは確認できなかった。柱穴の深さも不明なため、主柱穴を特定できない。中央やや西寄りの床面は被熱で硬化していた。

遺物は、遺構のラインが確認できる前（地山が黒褐色土の時）から多量に出土しており、埋設途中で一括廃棄を行ったことがわかる。

遺物は第 98 図 1224 ～ 第 106 図 1344 である。1224 ～ 1231 は弥生土器壺で、二重口縁部をなすもの。1232 ～ 1246 は単口縁の壺、1247 ～ 1283 は甕である。口縁部は外反しながら「く」字状に折れる。底部はやや突出気味の平底である。1284 ～ 1294 は高坏で、口縁端部を小さく屈曲するものである。1295 ～ 1297 は脚付きの鉢である。1298 ～ 1304 は脚である。1305 と 1306 は小型壺、1307 ～ 1312 は長頸壺、1313 ～ 1322 と 1327 ～ 1332 は鉢である。

1325 は小型の甕、1326 は刺突文を施している。器種不明。1323 は脚が付くのであるいは高坏か。1335 は小型の甕で脚を有する。1333 と 1334 は壺の底部、1336 は脚台である。1337 ～ 1344 は器台である。複合口縁壺の内 1228 は、口縁上半に櫛掻き波状文を持つ豊後型の二重口縁壺（安国寺式土器）である。1229 も口縁部上半が大きく伸びた壺後型の二重口縁壺の可能性が高い。壺は概ね平底か、わずかに突レンズ状に突出気味の平底である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH106 (第 400 図)

調査区 G-2223 に位置する。東西 3.7m、南北 6.0m の長方形を呈し、深さは 0.25m である。主柱穴は 2 本で、南北の隙間には高さ 0.1m で幅 1.0m のベッド状施設がある。中央から北側ベッドにかけて、床面には焼土が滞積していた。遺物の出土は流入土中である。また、堆積状況は第 400 図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第 106 図 1345 ～ 1348 である。1345 は高坏、1346 ～ 1348 は甕である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH109 (第 401 図)

調査区 K-2324 に位置する。北側半分は道路により削平を受けている。東西 4.2m、南北 3.0+ a m、深さは 0.3m である。主柱穴は不明、南側の一辺に沿って幅 1.0m で高さ 5cm ほどのベッド状施設がある。

遺物は図示できるものが第 106 図 1349 の甕のみである。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅡ期と考えられる。

SH110 (第 403 図)

調査区 L-2324 に位置する。SH112 に切られている。東西 5.3m、南北 5.7m の長方形を呈し、深さは 0.3m である。主柱穴は中央の炉を挟んで南北に並ぶ 2 本である。中央部に壁面が焼けた直径約 0.7 × 0.6m の炉穴があり、その東側には大きさ 0.9m × 1.0m、深さ 0.3m の土坑がある。

遺物の出土状態は床面からやや浮いた状態である。また、堆積状況は第 403 図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第 106 図 1350 ～ 第 107 図 1368 である。1350 と 1351 は弥生土器壺で二重口縁となる。1352 ～ 1355 も壺の胴部である。1356 ～ 1359 は甕、1360 は高坏、1361 と 1362 は小型壺である。1363 は鉢、1364 と 1365 は器台、1366 は小型の鉢である。1367 は安山岩製の石包丁、1368 は安山岩製の敲石である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH111 (第 402 図)

調査区 K-24 に位置する。東西 3.8m、南北 4.5m の長方形を呈し、北東角部と北東角部にはそれぞれ 1.7m × 0.8m と、1.8m × 1.1m の張り出し部を有する。特に南東部の張り出しは、竪穴建物の角に対して 45 度の角度で敷設されており、建物内側との境は弧を描く。建物本体との床面の比高差は 0.1m である。北東部の張り出しは比高差はない。

床面のはほぼ中央には炭が滞積した、直径 0.55m、深さ 0.15m の炉があり、その南の壁際には 1.2m × 1.0m、深さ 0.2m の土坑がある。また、西側の壁際と北東隅部の張り出しとの境には壁溝がある。主柱穴は炉を挟んで東西にある 2 本である。

遺物は床面に接するように出土しているが、周辺部で若干浮いているので、廃後時間をあまり置かない段階で一括して廃棄したものと考えられる。また、堆積状況は第 402 図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第 108・109 図 1369 ～ 1387 である。1369 ～ 1371 は弥生土器壺、1372 ～ 1378 は甕、1379 は高坏、1380 ～ 1384 は器台である。1385 は安山岩製の石包丁、1386 は粘板岩製の砥石、1387 は不明鉄製品である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH112 (第 404 図)

調査区 L-24 に位置する。SH110 と SH113 を切っている。大部分が調査区外になるため、大きさは不明である。深さは 0.15m である。炉や柱穴も調査範囲内では確認できなかった。

遺物は第110図1388と1389である。1388は高坏の坏部、1389は小型丸底甕である。
出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH113 (第405図)

調査区L-24に位置する。SH112に切られている。大部分が調査区外になるため、大きさは不明である。深さは0.15mである。炉や柱穴も調査範囲内では確認できなかったが、北西隅部に2.0m×1.1mで、建物本体の床面との差が数cmの張り出し部が確認できた。

遺物は第110図1390～1392である。1390と1391は高坏、1392は器台である。
出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH114 (第406図)

調査区D-24に位置する。北側は調査区外となっており、全形は不明である。東西6.0mで深さは0.3mである。建物の平面プランは東側の一边は直線であるのに対し、南側から西側にかけては緩やかに弧を描き、隅丸方形になる。床面は相似形に中央部が数cm低くなっており、壁の崩落が要因ではないことがわかる。主柱穴は不明。中央部と考えられる北側の調査区壁際に1.05×0.85m、深さ0.15mの炉穴があり、その東側壁際には大きさ1.5m×1.2m、深さ0.35mの土坑がある。また、南側壁際にも1.2m×0.8mの浅い皿状の土坑がある。

遺物は第110図1393～1405である。1393～1395は弥生土器壺、1396と1397は甕、1398と1399は壺、1400は鉢、1401～1403は甕の底部である。1404は安山岩製の砥石、1405は安山岩製の石包丁で、両短辺に挟りを入れている。
出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH115 (第407図)

調査区E-24.25に位置する。東西3.3m、南北3.1mのやや長方形を呈し、深さは0.3mである。主柱穴は南北の壁際中央にある2本で、断面図からわかるとおり「ハ」字に開くように掘られている。中央部に直径約0.6mの炉穴があり、その南東側には大きさ0.9m×0.5mで浅い皿状の土坑がある。また、東側と北側の一边中央部を除いて壁溝が廻る。

遺物は中央部はほぼ床直の状況、周辺部はやや浮いた状況で、多量に出土している。磨廃後やや壘まりかかった段階で一括廃棄をしていると考えられる。堆積状況は自然堆積である。

遺物は第111図1406～第114図1444である。1406～1416は弥生土器の大型の壺で、1404は袋状口縁をなす。1414は口縁端部に凹線文を持つ。1415は頸部に多条の凹線を廻らす。1417～1424は甕で、口縁部が緩やかに外反しながら「く」字状に開く。底部は平底である。1425～1429は壺の底部、1430と1431は長頸壺、1432～1436は鉢。1437はジョッキ形土器、1438～1441は通常の器台、1442も小さいが器台か。1443は砥石、1444は安山岩製の磨石である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH116 (第408図)

調査区F-26に位置する。SD002に切られている。東西3.4m、南北4.2mの長方形を呈し、残存する深さは0.1mである。主柱穴と考えられる深い柱穴は北側一辺の中央にあるビットであるが、対応する南側には確認できなかったため、不明と言わざるを得ない。中央や北寄りに焼土が認められたので、炉と考えられる。

遺物は第115図1445～1449である。1445～1448は弥生土器壺、1449は安山岩製の石包丁である。1445は二重口縁部の壺となろう。1446は頸部に一条の突帯を廻らせ、外面突帯下部に刺突文が入れられる。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH117 (第409図)

調査区DE-26/27にまたがってある。東西4.0m、南北5.4mの長方形を呈し、深さ0.3～0.4mである。南東側に高さ0.2mのベッド状遺構をもつ。主柱穴は2本で、炉穴は確認できていない。

遺物は主に中央部床面から出土している。第115図1450～1461に示した。1450～1457は弥生土器壺、1458

は鉢である。1460-1461は器台で、外面に斜め格子目の叩きを施す。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期に属すると考える。

SH121 (第410図)

調査区K-27に位置する。南側は調査区外になり、全形は窺えない。東西は80㎝で、残存する深さは0.25mである。この建物に伴う主柱穴は不明である。北東角部には1.9m×1.1mの方形の張り出し部がある。張り出し部は床面が僅かに高くなる。また、北西側にも長方形の張り出し部状のものがあるが、この建物に伴うものかどうか判断できなかった。

遺物の出土は流れ込みの状態である。また、堆積状況は第410図に示すように、自然堆積状態である。

遺物は第116図1463～第117図1478である。1463～1468と1471は弥生土器壺、1469と1470は壺である。1472と1473は鉢、1474と1475は脚付きの鉢か。1476は脚である。1477は立岩産輝綠凝灰岩製の石包丁、1478は鉄製の鎌である。全長22cm。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅦ期である。

SH122 (第411図)

調査区K-30に位置する。直径55㎝の円形を呈し、残存する深さは0.25mである。主柱穴は円形に廻る5本で、中央部に直径約0.9m、深さ0.4mの炉穴があり、若干炭化物が堆積していた。また、壁際には幅10cm、深さ数cmの壁溝が廻っている。

遺物は第117図1479～1483である。1479は弥生土器壺、1480と1481は甕、1482は高坏である。1482の高坏は弥生時代後期の混入と思われる。1483は経島産黒曜石製の打製石鎌である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH123 (第412図)

調査区J、K-30に位置する。南側約半分は調査区外である。復元すると直径55㎝の円形を呈し、残存する深さは0.35mである。主柱穴と考えられる深い柱穴は調査範囲内では2本であり、円形に回るというより、4本主柱となると思われる。中央部に直径約0.8mの炉穴がある。また、硬化した床面の直上は、図示した範囲が厚さ1cm程度の炭化物で覆われていた。焼土などは無く、炭化した木材も確認できなかったため、火災住居であるとすれば、片付けされた可能性がある。炭化物の上には、自然堆積ではない茶褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されていることも、火災の片付けか、あるいは廃絶後に何らかの火を使った行為を行ったことを示唆している。

遺物は第117図1484の経島産黒曜石製打製石鎌のみである。

時期を示す遺物はないが、竪穴の形状から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期である。

SH124 (第413図)

調査区G-37グリッドに位置する。東西26m、南北3.2mの小型長方形を呈し、深さ0.1～0.2mである。主柱穴は1本で、炉穴等の施設は検出できなかった。一部張り床が確認できた。

遺構の残存状態が悪く、出土した遺物は細片のみで、時期の確定にはいたっていない。

SH125 (第414図)

調査区F-40に位置し、東側は一部調査区に広がっている。東西4.2m、南北3.5mの長方形を呈し、深さ0.2～0.3mである。主柱穴は2本で、中央部に直径0.6mの炉穴があり、北側の両サイドに高さ5cmほどのベッド状遺構を造る。また、東の2辺の壁際に側溝を掘る。

炉跡周辺を中心に遺物の出土が見られた。それらは第118図1485～1495である。1485は弥生土器壺で口縁部は若干内湾する。1486～1488は甕で、1487は口縁が立ち、胴が長く、丸底である。1490は高坏の脚、1491は坏、1492～1494は鉢である。1495は安山岩の敲石である。

これらの出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期である。

SH126 (第415図)

調査区H-40に位置し、東隣は調査区外に広がる。中央部に攪乱を受けるが、その規模は東西5.5%、南北6.0%の長方形を呈し、深さ0.1～0.2%である。主柱穴は2本で、中央部に直径1.0%の炉穴があり、東壁沿いに大きさ0.6%×1.1%、深さ0.3%の土坑がある。竪穴の南北両側に幅1.0%、高さ0.05%程度のベッド状遺構をもつ。

遺物は主に北側床土と東側土坑周辺から出土した。それらの遺物は第118図1496～1503と第119図1504～1511である。1496～1500は弥生土器壺、1496～1498は複合口縁、1499は肩部に刻目突帯を、1500は胴部にM字突帯を張る。1501～1504は甕、1504は胴が長く、最大径は胴部下にある。1505は坏、1506は小型壺、1507・1508は手づくね土器である。1509は泥岩の砥石、1510は鉄製の槍筈である。これらの出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は古墳時代初期のⅦ期である。

SH127 (第416図)

調査区I-J-39に位置する。全体の3分の1を調査しただけで、大半は調査区外に広がる。残存する規模は東西3.0%、南北4.2%の長方形を呈し、深さ0.2%である。床面からは南側と西側に高さ0.1%ほどのベッド状遺構が確認されたのみである。

遺物の出土も少なく、時期を確定できるのは第119図1511の坏形土器ぐらいであった。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期と考える。

SH128 (第418図)

調査区H-I-41グリッドに位置する。東西5.7%、南北6.5%の長方形を呈し、深さ0.35%である。主柱穴は4本で、中央部に直径0.7%の炉穴があり、南東壁中央に大きさ1.1%×0.5%、深さ0.3%の土坑がある。その南東壁を除いた3辺には幅約1.0%、高さ0.15%程度のベッド状遺構を廻らす。

遺物は壁際土坑内と中央の炉跡周辺から出土している。また、南側ベッド付近の床から赤色顔料を検出した。出土遺物は第119図1512～1519、第120図1520～1533に図示した。1512は弥生土器の複合口縁壺。1513～1515は甕で、底は丸い。1516・1517は高坏で、脚は長く伸びる。1518は無頸壺、1520は長頸壺、1522～1528は坏、1532は鉢である。1530・1531は壺の底部、1533は甕の底部である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期に属す。

SH129 (第419図)

調査区G-41に位置する。東西5.5%、南北6.3%の長方形を呈し、深さ0.2～0.35%である。主柱穴は4本で、中央東側に0.7%×0.9%の炉跡がある。床面からは北側と南側に幅約1.0%、高さ0.1%ほどのベッド状遺構を確認した。

遺物は西側床面を中心に多量な土器が出土した。それを第120図1534～1537と第121～124図及び第125図1595に示した。1534～1537は弥生土器壺、1534は長頸壺。1538～1569は甕である。1538～1552は口縁部が外反し、小ぶりなものが多く、1553～1561は胴が伸び、底は丸い。1562～1566は口縁が立ち気味でレンズ状の底を呈す。1570～1578は高坏、1571・1574・1575は口縁端部は反る。1573の脚は大きく開く。1578は脚に透かしを持つ。1579・1580は長頸壺、1583～1585は台付鉢、1582は鉢、1581、1586～1594は坏である。1595は安山岩の門石である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期である。

SH130 (第420図)

調査区F-41グリッドにあり、その規模は、東西4.5%、南北5.5%の長方形を呈し、深さ0.4%である。主柱穴は2本で、中央部に直径0.6%の炉穴があり、東隣部に大きさ0.4%×0.8%、深さ0.15%の土坑がある。北側と南側に幅約1.0%、高さ0.1%ほどのベッド状遺構を確認した。

床面全体から多くの遺物が出土しており、その遺物は第125図1596～1601と第126～129図及び第130図1655～1658である。1596～1605は壺で、底はレンズ状と丸いものがある。胴部はM字突帯に刻みを施す。1597は口縁直立し、肩が張る。1606～1617は甕である。1607・1608・1612はレンズ底をもち、1615・1617は丸底である。1618～1620は高坏の坏部で、口縁端部は外反する。1621～1627は高坏脚部で、長く伸びた脚は大きく開く。

1628～1635、1644は鉢で、1632～1635は口縁外反し、胴は張らずに底は丸い。1636は錐形土器、1637～1641は坏、1642は手づくね土器、1643は小型壺、1645は平底壺か。1647の高坏は脚は短く開く。1646・1648は台付鉢である。1649・1650は泥岩の砥石、1651～1655は安山岩の砥石、1656は安山岩の台石、1657は磨石である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅤ期と考える。

SH131 (第421図)

調査区E-F-41・42にまたがって位置し、南隅をSH132に切られている。東西4.1m、南北5.7mの長方形を呈し、深さ0.2～0.3mである。主柱穴は2本で、中央部に直径0.5mの炉穴があり、南東壁中央に大きさ1.2m×1.2m、深さ0.3mの土坑がある。南側柱穴付近の床には焼土が広がっていた。

遺物は主に壁際土坑から出土しており、それは第130図1659～1667・1529と第131図1668～1670である。1659・1665は弥生土器で口縁は袋状を呈す。1660は刻目尖突の甕で、1661は高坏、1663・1664は坏である。1666・1667は泥岩の砥石、1668は安山岩の打製石斧、1669は磨石、1670は台石である。

これらの出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅤ期のものである。

SH132 (第422図)

調査区F-42グリッドにある。その規模は、東西7.0m、南北6.9mのほぼ正方形を呈し、深さ0.3～0.4mである。主柱穴は4本で、中央部に直径0.8mの炉穴があり、南東壁中央には大きさ1.0m×0.8m、深さ0.35mの土坑がある。また、幅約1.0m、高さ0.15mほどのベッド状遺構が、壁際土坑のある南東壁を除く3辺に造られていた。

遺物は床面全体で確認できたが、特に南西側壁の周囲から多くの土器が出土した。それらは第131図1671～1678と第132～134図である。1671～1674、1678は弥生土器で肩が張り、底は丸い。1671は瀬戸内系、1672・1673は袋状口縁壺である。1675～1677、1679～1689は甕で、1675～1677、1679は肩が張らず直線的に広がる。1681・1682、1685～1689は口縁が立ち気味で、胴は中央から下部にかけて最大径をもつものが多く、底はレンズ状または丸底である。1690～1697と1718は高坏で、口縁端部は外反する。1698～1703は鉢で、1700・1701は脚が付く。1704～1713は坏で、1714～1716は甕台である。1719・1720は泥岩の砥石である。これらの出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅥ期である。

SH133 (第417図)

調査区I-43に位置する。中央部を近現代の井戸に壊され、西側隅をSH134に切られていた。竪穴の規模は、東西3.0m、南北2.5mの小型長方形を呈し、深さ0.2～0.3mである。主柱穴は1本確認した。中央部に0.5m×0.7mの炉穴があり、南東壁際に0.5m×0.4m、深さ0.4mの土坑がある。

遺物は遺構全体に散らばり出土した。第135図1721～1725に示した。1721・1722は弥生土器壺、1723は口縁端部が外反する高坏、1724は台付鉢である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅥ期と考える。

SH134 (第423図)

調査区I-43、SH133の側にある。東西3.5m、南北4.3mの長方形を呈し、深さ0.3～0.4mである。主柱穴は2本で、中央部に直径0.4mの炉穴があり、南壁際と北西部に幅1.0m、高さ0.1m程度のベッド状遺構がある。また、南東壁付近で焼土の広がりを検出した。

遺物は主に東側床面から出土しており、それは第135図1726～1733である。1726・1727は甕で、胴が長く、丸底である。1728・1729は小型壺で、1729は手づくねである。1730～1732は坏、1733の鉢は台が付く。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅤ期に属す。

SH135 (第425図)

調査区G-47・48にまたがって位置し、北側4分の1は調査区外に展開している。東西5.6m、南北5.5m以上の長方形を呈し、深さ0.2～0.45mである。主柱穴は2本確認した。中央部に直径0.7mの炉穴があり、南東壁付近に大きさ1.0m×1.2m、深さ0.25mの土坑がある。

中央炉跡付近からの台石2点のほか床面から遺物が出土した。第136図1734～1744である。1734は弥生土器甕で胴は丸く、底はレンズ状である。1735は甕、1736は高坏、1737は長頸壺、1738は鉢である。1739は高坏の脚、1742は泥岩の砥石、1743・1744は台石で、材質は安山岩である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期頃と考える。

SH136 (第424図)

調査区D-48に位置する。その規模は、東西4.8m、南北3.7mの長方形を呈し、深さ0.3mである。主柱穴は2本で、中央部に直径0.5mの炉穴があり、その横で台石が出土している。北壁沿いで幅0.9m、高さ約0.1mのベッド状遺構が確認できた。

遺物は主に炉跡周辺の床面と、土坑内から出土した。それを第136図1745～1750及び第137図1751～1753に示した。1745は弥生土器甕で口縁は外に開き、底は丸い。1746はド城式の甕、1748・1749の甕の底部は平底である。1751の鉢は外面にミガキがある。1752の甕の口縁は緩く外反し、胴は長い。1753は安山岩の台石である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期である。

SH137 (第426図)

調査区D-48に位置する。竪穴の規模は、東西4.0m、南北3.6mの長方形を呈し、深さ0.2～0.35mである。西側に若干の方形の張出しを造る。主柱穴は2本で、中央部に直径0.6mの炉穴があり、西壁中央部に大きさ0.9m×0.6m、深さ0.1mの土坑がある。南北壁に沿って幅1.0m、高さ0.05mのベッド状遺構をもつ。

遺物は、主に北側柱穴周辺から出土している。第137図1754～1761である。1754は弥生土器甕で、肩に三角突帯を廻し、刻みを施す。1756・1757は高坏で口縁端部は外反する。1758は胴の長い小型壺、1760・1761は器台である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初期のⅦ期である。

SH138 (第427図)

調査区B-50に位置する。大半が調査区外となっており、円弧の一部が確認されたのみである。円弧から復元すると、直径6m程度の円形建物となる。深さは0.35mである。柱穴や炉などは調査範囲内では確認できない。壁際には幅10cm、深さ数cmの壁溝が廻る。

遺物は第138図1762～1767である。1762と1763は弥生土器甕、1764と1765は甕、1766と1767は安山岩製の敲石である。1762は胴部最大径の部分に突帯が一条廻る。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はⅣ期である。

SH139 (第428図)

調査区D-50-51に位置し、北側をSD015に切られている。その規模は、東西5.4m、南北6.7m以上の長方形を呈し、深さ0.15mである。主柱穴は2本で、中央部に直径0.5mの炉穴があり、南東壁中央部には大きさ0.6m×0.7m、深さ0.15mの土坑がある。床面南西側に若干の高さを持つベッド状遺構が確認できた。

床面全体にわたり遺物が出土し、それを第138図1768・1769及び第139図に示した。1768・1769は弥生土器甕で、1768は胴に突帯を張り、「×」を刻む。1769の口縁は伸びて開き、肩が張り、底はレンズ状である。肩に弧を沈線で描く。1770～1775は甕で、底部はレンズ状から丸い。1776～1780は坏、1781は鉢である。1782・1783は砥石で、材質はいずれも泥岩製である。

これらの出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅦ期である。

SH140 (第429図)

調査区D-51に位置し、SH139同様、北半をSD015に切られている。東西7.0m、南北6.0m以上の長方形を呈し、深さ0.1mである。主柱穴は1本確認した。南東壁際に大きさ0.7m×0.9m、深さ0.15mの土坑がある。また、南西隅に幅2.0mの方形張り出し部をもつ。

遺物の出土は少なかったが、南西壁際の2か所で炭化した木片とその周りに広がる炭を確認した。遺物は第140図

1784～1786である。1784・1785は弥生土器甕で、1784は頸部に刻みを施す。1786は複合口縁の壺、1787は器台である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期前葉のV期である。

SH143 (第430図)

調査区C-52.53に位置する。第142号竪穴建物に切られている。上部はほとんど削平を受け、北側半分の壁溝しか残存しない。壁溝は幅15㎝、深さ数㎝で円形に廻ることから、復元直径6.8㎝程度の円形建物である。支柱穴は円形に廻る6本で、南側には本来もう1本あって、7本支柱となろう。炉跡も削平を受けて残っていない。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明であるが、円形であることから弥生時代中期であると考えられる。

SH144 (第432図)

調査区D-E-53にまたがって転出した竪穴建物である。その規模は、東西7.3㎝、南北6.5㎝の円形を呈し、深さ0.3㎝である。支柱穴は竪穴の円形に沿って検出している。中央部に直径1.0㎝程度の炉穴があり、円形壁に沿って幅0.3㎝、深さ0.1㎝の溝が廻る。

遺物の中央炉及び周囲の床面から出土した。第140図1788～1803である。1788～1790は弥生土器甕で、頸部に三角突帯を廻す。1791は器台、1792～1797は甕の底部で、厚手の上底である。1798は鉾岳産黒曜石の石核、1799は立岩産の輝緑凝灰岩製の石包丁、1800・1801は敲石、1802は磨石、1803は台石で、いずれも安山岩製である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半のIV期である。

SH147 (第433図)

調査区B-54に位置する。北側半分が調査区外となる。推定直径7.0㎝で、残存する深さは0.3㎝の円形建物である。支柱穴は円形に廻る5本で、調査区外にも3本程度あると考えられる。調査範囲では炉跡は確認できなかった。壁際には、幅10㎝で深さ数㎝の溝が廻る。

遺物は第141図1804～1808である。1804～1807は弥生土器甕、1808は鉾岳産黒曜石製の石核である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期はIV期である。

SH148 (第431図)

調査区C-53に位置する。SH149に切られている。東西3.5㎝の長方形を呈し、残存する深さは0.1㎝である。支柱穴は4本と考えられるが、南東部は溝SD015に切られており、確認できない。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH152 (第434図)

調査区D-54に位置する。SH153に切られている。東西3.9㎝で、南北は2.7㎝以上となり、深さは東側の残りの良い部分で0.1㎝である。支柱穴ははっきりしない。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH153 (第435図)

調査区D-54に位置する。SH152を切っている。東西3.8㎝、南北4.1㎝の長方形を呈し、深さは0.1㎝である。柱穴は多数検出されたが、支柱穴は不明である。また、床面には焼土などは確認されなかった。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH154 (第436図)

調査区D-54に位置する。調査次の境で南側の一部が未掘となっている。東西3.6㎝で、南北方向は不明である。残存する深さは10㎝ほどで、支柱穴は明確でない。

出土遺物も図示出来るものはなく、時期は不明である。

SH155 (第437図)

調査区 C-54 に位置する。SH156 に切られている。東西 4.2m、南北 4.3m のほぼ正方形を呈し、深さは 0.2m である。主柱穴と考えられる柱穴は確認できなかった。また、床面には焼土などは確認されなかった。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH156 (第438図)

調査区 C-54 に位置する。SH155 を切っている。北西側は削平されているが、直径 5.8m の円形に復元できる。幅 0.2m で、深さ数分の壁溝が残るのみで、壁は全く残っていなかった。柱穴は 4 箇所確認されたが、深さは浅く、また配列も不揃いなため、主柱穴とは考えづらい。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH159 (第440図)

調査区 E-55 に位置し、西側を SD017 による削平を受けている。また、SH154 とも前後関係を持ち、SH154 → SH159 の順である。東西 4.0m 以上、南北 5.0m 以上の長方形を呈し、深さ 0.1 ~ 0.2m である。主柱穴は 2 本で、中央部に 1.2m × 0.7m の炉穴があり、南東隅には大きさ 0.6m × 1.1m、深さ 0.35m の土坑がある。また、北側 2 辺に溝が残っていた。中央が跡付付近では炭化した木片を検出した。

遺物は主に壁際土坑周辺から出土しており、それを第 141 図 1809 ~ 1813 に示した。1809 は壺で、口縁直立し、胴は丸い。1810・1811 の甕は口縁が短く外反し、胴は張らずに伸びるものである。1812 は端部外反する高坏、1813 は脚付鉢である。

出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅡ期に属す。

SH162 (第439図)

調査区 B、C-55 に位置する。SH163 と SD017 に切られており、全形は不明である。南北は 3.9m で、深さは数分である。残存する範囲では柱穴が 2 本確認されたが、2 本主柱穴の長方形建物か、あるいは正方形に近い 4 本主柱かは判断できない。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH163 (第439図)

調査区 B、C-55 に位置する。SH162 を切っている。また、東側は SD017 に切られているため、西側半分しか残存しない。直径 4.2m ほどの円形建物に復元できる。壁際には幅 0.2m で深さ 0.2m の壁溝が廻る。柱穴は 2 箇所確認されたが、主柱穴となるかは判断できなかった。また、北西の壁際に炭化物と焼土がまとまって堆積していた。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH164 (第439図)

調査区 B、C-55 に位置する。SH163 に切られている。また、東側は SD017 に切られているため、全体の 4 分の 1 ほどしか残存しない。復元すると直径 3.0m ほどの円形建物となるだろう。壁際には幅 0.2m で深さ 0.2m の壁溝が廻る。主柱穴と考えられる柱穴は確認されなかった。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH165 (第442図)

調査区 C-55 に位置する。東側は SD017 に僅かに切られている。東西 3.5m、南北 3.2m の長方形を呈し、深さは 0.1m である。主柱穴は 4 本で、中央部に直径約 0.5m の炉穴があり、焼土が堆積していた。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH166 (第443図)

調査区 D-55 に位置する。東側は SD017 に切られているため、全体の半分程度しか残存しない。南北は 5.4m で、

上部が削平を受けており、壁はほとんど残存していない。主柱穴は不明である。
時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH167 (第444図)

調査区 D-55 に位置する。南側の一部は調査区境で調査出来ていないが、全形はほぼ判明する。東西 4.1m、南北 3.3m の長方形を呈し、残存する深さは数m である。柱穴は 2 箇所確認されたが、主柱穴とは言いがたい。床面南東隅部において、1.1m × 0.9m の略長方形に若干窪み、内部に焼土が堆積していた。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH168 (第445図)

調査区 E-56 に位置する。東西 5.4m、南北 4.2m の長方形を呈し、深さ 0.3 ~ 0.45m である。主柱穴は 2 本で、中央部に 0.6m × 0.9m の炉穴があり、南西壁中央には大きさ 0.7m × 0.8m、深さ 0.3m の土坑がある。南北両側に幅約 1.0m、高さ 0.1m ほどのベッド状遺構を造る。中央炉の北側床面からは炭化した木片が多く散らばっていた。また、南側ベッドの床面は焼けており、その周囲には焼土塊が広がっていた。

第 142 図 1815 ~ 1820 の遺物が、炭化木に混じって床面から出土した。1815 ~ 1817 は甕で、1817 の底は丸い。1818 は脚付鉢、1819 の小型鉢は手づくねである。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅡ期である。

SH169 (第446図)

調査区 F-56 に位置する。東西 5.3m、南北 6.3m の長方形を呈し、深さ 0.3m である。主柱穴は 2 本で、中央部に直径 0.4m の炉穴があり、東壁際には大きさ 0.5m × 0.4m、深さ 0.3m の土坑がある。南壁及び西壁沿いに幅 1.0m、高さ 0.05m のベッド状遺構を造る。

竪穴北側から少量の遺物が出土した。第 142 図 1821 ~ 1823 である。1821 の甕の底は丸い。1822 は鉢、1823 は小型壺である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅡ期に属す。

SH170 (第447図)

調査区 G-56 に位置する竪穴遺構で、その大半が調査区外にある。規模は東西 1.8m 以上、南北 3.1m 以上の方形を呈し、深さ 0.15m である。主柱穴は 1 本検出した。

遺物は第 142 図 1824 の小型丸底甕である。口縁外反し、胴は張らずに底に続く。出土遺物から、この竪穴建物の時期は古墳時代初頭のⅡ期である。

SH171 (第448図)

調査区 G-57 に位置する。東西 4.3m 以上、南北 0.8m 以上の方形を呈し、深さ 0.2m である。SH169 同様、大半が調査区外にあるため、竪穴内の施設を確認できなかった。

また、遺物の細片が出土しただけで、遺構の時期を確定することはできなかった。

SH172 (第449図)

調査区 B-56 に位置する。SH173 を切っている。また、北側は大半が調査区外になる。東西 4.2m で残存する深さは、最も残りの良い西側で 0.1m である。主柱穴と考えられる柱穴は調査範囲内では 1 箇所確認でき、本来は 4 本主柱になると考えられる。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明である。

SH173 (第449図)

調査区 B-56 に位置する。SH172 に切られており、さらに北側半分は調査区外になる。壁溝が残ることによって、ろうじて円形竪穴建物と確認できた。直径は 6.0m に復元できる。主柱穴は調査範囲内で 4 本確認できる。おそらく円形に廻るものと考えられる。炉や土坑などの施設は調査範囲内では確認できなかった。

時期のわかる出土遺物が無いが、堅穴のプランから見て建物の時期は中期と考えられる。

SH174 (第450図)

調査区 B-57 に位置する。SH176 を切って、SH175 に切られている。東西 3.8m、南北 6.3m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。南北方向が長いが、南北方向に 5.1m が主屋とも言える部分で、その北側に 1.2m 分の張り出しがあると理解できる。この部分は主屋部分より、5°ほど高い。「主屋」部分には東壁と北壁の半分から西壁の北半分にかけて壁溝が廻る。さらに「張り出し部」も東西 2 箇所の張り出しが連結しており、それぞれに部分的に壁溝が廻る。

主柱穴は「主屋」部分の東西の壁際にある 6 本と考えられる。中央やや北側に直径約 0.7m の炉があり、床面が焼けている。さらに南寄りには、幅 0.8m で長さ 2.8m の長方形を呈する土坑がある。

遺物は第 142 図 1825 ～ 1827 である。1825 は弥生土器甕、1826 は高坏、1827 は丸底の壺である。

出土遺物から、この堅穴建物の時期はⅧ期である。

SH175 (第451図)

調査区 B-57 に位置する。SH174 を切っている。東西 3.8m、南北 3.5m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。主柱穴は壁に近いところにある 4 本で、他には炉や土坑などは確認されなかった。

時期のわかる出土遺物が無いため、この堅穴建物の時期は不明である。

SH177 (第454図)

調査区 H-57 に位置する。北東角部以外は調査区外に広がるため全形は不明であるが、方形を基調とした建物である。残存する深さは 0.1m である。柱穴は複数検出されたが、主柱穴は不明である。北側の壁際に土坑があるが、この建物に伴うものかどうかは判断できなかった。

遺物は第 143 図 1830 と 1831 である。1830 は甕の口縁部、1831 は丸底の鉢である。

出土遺物から、この堅穴建物の時期はⅧ期である。

SH178 (第452図)

調査区 F-58 に位置する。東半を溝状遺構 SD018 に切られている。東西 3.0m 以上、南北 3.2m 以上の方形を呈し、深さ 0.2 ～ 0.3m である。主柱穴は 1 本検出した。西壁沿いで側溝を確認した。

遺物は主に堅穴の西側で出土し、それを第 143 図 1832 ～ 1835 に示した。1832 ～ 1834 は弥生土器甕、1832 は須玖式で、1834 は口縁立ち気味で、胴長丸底である。1835 は敲石である。これらの出土遺物からみて、この堅穴建物の時期は弥生時代後期終末のⅧ期である。

SH179 (第455図)

調査区 B-58 に位置する。SH180 に切られている。東西 3.5m、南北 3.2m の長方形を呈し、深さは 0.1m である。柱穴は複数検出されたが、明確に主柱穴と呼べるものは無かった。主柱穴は 4 本で、中央部に直径約 0.5m の土坑があり、さらにその南側には直径 0.9m の土坑がある。前者は炉の可能性はあるが、内部は焼けていない。一方、その西側の床面が直径 0.2m ほどの範囲で火熱を受けていた。

遺物は第 143 図 1836 ～ 1840 である。1836 ～ 1839 は弥生土器甕、1840 は姫島産黒曜石製の石核である。

出土遺物から、この堅穴建物の時期はⅧ期である。

SH180 (第456図)

調査区 B-58 に位置する。SH179 を切っている。小型で、東西 2.4m、南北 3.1m の長方形を呈し、深さは 0.2m である。床面には柱穴や土坑などは確認されなかったが、幅 0.1m で深さ 0.1m の壁溝がほぼ全周する。

遺物は第 143 図 1841 の安山岩製の敲石のみである。

時期のわかる出土遺物が無いため、この堅穴建物の時期は不明である。

SH181 (第457図)

調査区 B-59 に位置する。東西 29¹/₂、南北 34¹/₂ の長方形を呈し、深さは 0.2¹/₂ である。中央付近にピットが 2 箇所あるが、いずれも浅く柱穴ではない。特に東側のピットには焼土が入っていたことから、この建物に伴うものと考えられる。堅穴全体にもまばらではあるが、焼土や炭化物が広がっており、焼失家屋である可能性が高い。

遺物は第 144 図 1842 ~ 1851 である。1842 ~ 1847 は弥生土器甕、1848 と 1849 は鉢、1850 は高坏、1851 は壺である。出土遺物から、この堅穴建物の時期はⅧ期である。

SH182 (第458図)

調査区 F-60 に位置する。南側を SD022 に切られており、全形は不明である。東西方向には 4.8¹/₂ あり、深さは残りの良いところで 0.1¹/₂ である。柱穴は複数確認されたが、主柱穴は調査範囲内では確認できなかった。北西部に焼土が底に堆積した 0.8¹/₂ × 0.6¹/₂、深さ 7 ~ 8¹/₂ 土坑がある。位置から考えて炉とは言いがたい。

時期のわかる出土遺物がないため、この堅穴建物の時期は不明である。

SH183 (第459図)

調査区 F-61 に位置する。北側を SD022 に切られており、全形は不明である。東西方向には 4.0¹/₂ あり、深さは残りの良いところで 0.15¹/₂ である。柱穴は 2 箇所確認されたが、主柱穴は調査範囲内では確認できなかった。

西側の壁に接して焼土が確認された。床は被熱で硬化しており、一部袖状の高まりも確認されたことから、竈と考えられる。時期のわかる出土遺物がないため、この堅穴建物の時期は不明である。

SH186 (第462図)

調査区 H、I-62 に位置し、他の建物からは距離を置いて独立的に存在する。東西 34¹/₂、南北 44¹/₂ の長方形を呈し、深さは 0.1¹/₂ である。主柱穴は 4 本で、中央やや南寄りに直径約 0.4¹/₂ の炉穴と思われる土坑がある。

時期のわかる出土遺物がないため、この堅穴建物の時期は不明である。

3) 掘立柱建物

SB001 (第463図)

調査区 H-7 に位置する。1 間 × 1 間の方形を呈するもので、主軸方位は N-9°-E である。柱間寸法は、東側が 2.3¹/₂、南側が 2.2¹/₂、西側が 2.2¹/₂、北側が 2.0¹/₂ で、身舎面積は約 4.8 平方¹/₂ である。後述する SB002、SB003 の柱穴に比較すると径が小さい。柱痕については、精査したにも係らず確認することができなかった。

建物を構成する柱穴のうち、北東の柱穴 (SP078) から遺物が出土した (第 232 図 3116)。弥生土器高坏で、端部を欠くが鋤先口縁を呈する。

出土遺物から、本掘立柱建物の時期は弥生時代中期の可能性をもつ。

SB003 (第465図)

調査区 G-12・13、H-12・13 に位置する。1 間 × 3 間の長方形を呈するもので、主軸方位は N-27°-E である。柱間寸法は、東側桁行が北から 2.3¹/₂、2.1¹/₂、2.3¹/₂、西側桁行が北から 2.1¹/₂、2.4¹/₂、2.3¹/₂、北側梁行が 3.9¹/₂、南側梁行が 3.6¹/₂ で、身舎面積は約 25.3 平方¹/₂ である。Ⅷ期の SH025 及びⅢ期の SH034 と重複しており、両堅穴を切る。柱痕については、精査したにも係らず確認することができなかった。

建物を構成する柱穴のうち、東側桁行の北側から 3 番目の柱穴 (SP181) から遺物が出土した (第 241 図 3252)。弥生土器高坏の坏部で、やや細身の脚部が付くと思われる。

他遺構との重複関係から、本掘立柱建物の時期は弥生時代後期終末以降である。

SB004 (第466図)

調査区 G-16-17 に位置する。東西 3 間、南北 1 間の掘立柱建物である。建物の棟方向は東西であり、規模は 6.9¹/₂ × 4.0¹/₂、27.6 平方¹/₂ である。東西方向の柱穴の間隔は平均 2.3¹/₂ で、南北方向は 4¹/₂ と広い。また、柱穴の深さは 0.7 ~ 0.9¹/₂ と深い。

遺物は第 245 図 3316 ～ 3319 である。3316、3317 は弥生土器甕の口縁、3318 は弥生土器鉢、3319 は弥生土器壺の底部である。出土遺物から、この掘立柱建物の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅥ期である。

SB005 (第 468 図)

調査区 E-20/21 に位置する掘立柱建物である。一部調査区外に延びるが、5 間×5 間と考えられる。桁行より梁行の方が柱間が広く長方形の建物となる。梁行 6.5 間、桁行 8.9 間で、床面積は 57.9 平方間となるやや大型の建物である。今回の諫山遺跡の調査で確認された掘立柱建物では最大である。柱穴の大きさはやや不揃いで、大きいもので長軸方向が 0.9 間、小さいもので直径が 0.4 間ほどである。出土遺物は無いが、柱並びが不揃いなことや、柱数が多いことなどから弥生時代のもと考えた。この建物が南東向きが正面であるとすれば、前面には 20 間四方ほど建物などがない空間が広がることになり、この掘立柱建物の性格を考える上でポイントとなるだろう。

規模はこの SB005 より一回りほど大きい掘立柱建物が玖珠町の四日市遺跡で複数確認されている。いずれも弥生時代中期で、祭祀などに係わる遺構と考えられるが、この SB005 も同様な性格を有するものであろうか。

SB006 (第 467 図)

調査区 D-40 に位置する。1 間×1 間の掘立柱建物である。建物の棟方向は東西である。東西方向の柱穴の間隔は 2.4 間であるが、南北方向は 3.4 間と広い。柱穴の深さは 0.8 ～ 1.0 間と深く、安定している。

遺物は細片であり図示していないが、弥生時代のものである。

4) 土坑

ここでは、貯蔵穴や墓以外の用途不明の土坑を扱う。ただし、遺物が出土しておらず、時期の決定が困難な土坑についても、最も可能性の高い弥生時代の項で扱うことにする。

SK001 (第 471 図)

調査区東側の F-1 に位置し、遺構の南東部は調査区外に伸びている。東西 0.7 間、南北 1.1 間の隅丸方形を呈し、深さ 0.15 間である。

遺物は第 145 図 1859 の弥生土器甕の口縁部である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK002 (第 472 図)

同じく調査区 F-1 に位置し、SK001 同様、半分は調査区外に伸びている。東西 2.6 間、南北 1.7 間の隅丸方形を呈し、深さ 0.2 間である。床面から 3 基の柱穴と 2 基の土坑を検出している。

ここから出土した遺物は第 145 図 1860 の弥生土器甕の口縁部と 1861 の打製石斧である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は SK001 と同じく弥生時代中期後半のⅣ期か。

SK003 (第 473 図)

調査区 G-2 に位置する東西 1.3 間、南北 1.0 間の楕円形の土坑である。その深さは 0.3 間である。

遺物は第 145 図 1862 と 1863 の弥生土器甕の口縁部である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代中期前半のⅢ期に属するものと考えられる。

SK004 (第 474 図)

調査区 G-3 に位置する。東西 1.3 間、南北 1.2 間の円形を呈し、深さ 1.1 間の貯蔵穴である。

出土遺物は第 145 図 1864 ～ 1867 である。1864 は弥生土器高坏の坏部、復元口径は 31.4cm。1865 は壺の底部、1866 は平底甕の底部、1867 は姫島産黒曜石の剥片石鏃である。これらの出土遺物からみて、この竪穴建物の時期は弥生時代後期前葉のⅤ期である。

SK006 (第476図)

調査区 G-3 に位置する。東西 1.1m、南北 0.5m の楕円形を呈し、深さ 0.6 ~ 0.85m の貯蔵穴である。

遺物は第 145 図 1869 ~ 1871 である。1869 と 1870 は弥生土器壺の口縁部、1871 は高坏である。出土遺物から、この竪穴建物の時期は弥生時代後期前葉の V 期である。

SK007 (第477図)

調査区 G-3 に位置する東西 0.5m、南北 0.4m の円形土坑である。その深さは 0.4m である。

遺物は細片のみの出土であり、図示できるものはなく、遺構の時期確定にはいたらなかった。

SK008 (第478図)

調査区 G-3 に位置し、東西 0.9m、南北 0.8m の円形を呈する貯蔵穴で、その深さは 0.7m である。

遺物は第 145 図 1872 の弥生土器壺の口縁部である。先端が垂れ、鋤先状を呈する。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半の IV 期である。

SK013 (第483図)

調査区 K-7 に位置し、3分の1は西側調査区外に伸びる。東西 1.8m 以上、南北 0.7m の楕円形を呈し、深さ 0.35m である。

遺物は第 148 図 1903 ~ 1907 である。1903 は弥生土器壺、胴部に三角突帯を張り付ける。1904 ~ 1907 は甕である。これら出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代前期末葉から中期初頭の II 期である。

SK014 (第484図)

調査区 K-L-7 に位置する。北西—南東に長軸をもつ楕円形を呈する可能性をもつ。規模は、現状で北西—南東 3m、北東—南西 3m、深さ 0.05 ~ 0.1m である。中央に一辺約 0.5m、深さ 0.15m の土坑があり、底面に焼土が残る。本遺構の炉跡と考えられる。出土遺物は第 148 図 1908 ~ 1914 で、1908、1911、1912 は甕である。1908 は上半部の資料で、胴部中程が大きく張る。肩部と胴部最大径部分に各々断面三角形の突帯が一条付く。1911、1912 は底部で平底である。1909、1910、1913、1914 は甕である。1909、1910 は口縁部がくの字状に折れ、体部は直線的に底部に向かう。1909 は頸部下に 2 条の沈線が保護される。1913、1914 は厚底の底部である。出土遺物から、本土坑の時期は III 期である。

SK016 (第486図)

調査区 K-7・8 に位置する。長さ 4.4m、幅 0.35 ~ 0.6m、深さ 0.1 ~ 0.2m である。出土遺物は第 149 図 1917 ~ 1933 で、1917、1918 は甕である。1917 は頸部で、頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。1918 は肩部で断面長方形の突帯が付される。1919 ~ 1921 は甕である。1919 は口縁部が外力にくの字状に折れる。1920 は外面にタタキがある。1921 は口縁部がくの字状に折れ、肩部がやや張った体部に続く。1922、1923 は高坏部である。1922 は中程から口縁部に向かい大きく外反する。1923 は中程よりやや上部で稜をもち、内湾しながら口縁にいたる。1924 は脚部である。1925 は小型の鉢で、丸底である。1926、1927 は厚底を呈する甕の底部。1928 ~ 1932 は底部の厚さが体部と差がなく、レンズ底状を呈する。1931 以外は全て平底である。1933 は砥石の欠損品である。出土遺物から、本土坑の時期は VI 期である。

SK017 (第487図)

調査区 K-7・8 に位置する。東西に長いもので、二段掘り状を呈し、中央部が深い。規模は、長さ 2.7m、幅 0.4 ~ 0.6m、深さ 0.05 ~ 0.45m である。出土遺物は第 150 図 1934 ~ 1941 で、1934 は甕で、頸部下に 2 条の沈線がある。1935 ~ 1938 は甕である。1935、1936 は、口縁部が逆 L 字状に折れる。1937、1938 は口縁部が比較的緩やかに外方に折れる。1939 は甕である。1940、1941 は甕の底部で、厚底を呈する。出土遺物から、本土坑の時期は I 期か。

SK018 (第488図)

調査区 K-8 に位置する。南北に長い不定形を呈し、南北 1.9m、東西 0.7 ~ 1.4m、深さ 0.15 ~ 0.2m である。出

土遺物は第150図1942～1950で、全て弥生土器の甕である。1942～1946は上半部資料で、外方にくの字状に折れる。1946は跳ね上がり口縁状を呈する。1947～1950は厚底の底部である。出土遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK020 (第490図)

調査区L-7に位置する。いくつかの小土坑が重複していると思われるが、その前後関係は不明である。出土遺物は第151図1955で、厚底を呈する甕の底部である。出土遺物から、本土坑の時期はⅢ期か。

SK021 (第491図)

調査区L-7に位置し、SK020に先行すると思われる。径0.8～0.9m、深さ0.3mの円形を呈する。出土遺物は第151図1956で、厚底を呈する甕の底部である。遺物から、本土坑の時期はⅢ期か。

SK022 (第492図)

調査区L-8に位置する。径0.8～0.9m、深さ0.6mの円形を呈する。底面の径は0.3mで、底面に向かい窄まる。出土遺物は第151図1957で、厚底を呈する甕底部である。遺物から、本土坑の時期はⅡ期か。

SK024 (第494図)

調査区F・G-8に位置する。長さ2.2m、幅1.3m、深さ0.1～0.2mで、床面は比較的平坦である。出土遺物は第151図1959～1962である。1959は甕の胴部で3条の突帯が付く。1960～1962は甕で、口縁部が強く外方に折れる。1962は跳ね上がり口縁状を呈する。出土遺物から、本土坑の時期はⅢ期か。

SK027 (第497図)

調査区H-8に位置する。径0.85～0.95m、深さ0.05～0.15mの不整形円形を呈する。時期は不明である。

SK028 (第498図)

調査区I-8に位置する。長径1.85m、短径1.2m、深さ数cmの楕円形を呈する。時期は不明である。

SK029 (第499図)

調査区J-8に位置する。その規模は南北1.75m、東西0.5～1.1m、深さ0.05～0.2mである。出土遺物は第151図1966～1968の弥生土器甕で、口縁部が外方に強く折れる。本土坑の時期はⅤ期である。

SK030 (第500図)

調査区J-8に位置する。東西方向に長い不定形を呈するもので、その規模は東西3.9m、南北0.4～1.6m、深さ0.05～0.1mである。出土遺物は第152図1969～1973である。1969、1971は甕である。1969は胴部で、最大径に近い位置に断面三角形の突帯が付く。1971は底部で、平底を呈する。1970、1972は甕である。1970は上半部の資料で、口縁部は外方に強く折れ、胴部は肩部がわずかに張り底部へ向かう。1972は底部で、厚底を呈する。1973は敲石で、両端に敲打痕がみられる。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK032 (第502図)

調査区K-8に位置する。現状で東西0.5m、南北0.5m、深さ数cmである。出土遺物は第152図1975の甕である。口縁部は外方に強く折れ、頸部直下に断面三角形の突帯が付く。本土坑の時期はⅣ期である。

SK033 (第503図)

調査区K-8に位置する。規模は、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.25～0.5mである。時期は不明である。

SK034 (第504図)

調査区 K-8・9に位置し、北西隅をSK047に切られる。東西に長い楕円形を呈し、長径4.4^分、短径3.3^分、深さ0.1～0.2^分である。出土遺物は第152図1976～1979である。1976は甕の底部で厚底。1977は刃部を欠く磨製石斧。1978、1979は磨石である。1978は片面が磨り目として使用され、反対面に敲打痕がみられる。1979は両面を磨り面として利用。縁辺部には敲打痕も認められる。出土遺物から、本土坑の時期はⅣ期か。

SK035 (第506図)

調査区 L-8に位置する。不定形を呈するが、径0.4～0.6^分の不整円形土坑が重複している可能性もある。深さは0.1～0.15^分である。出土遺物は第153図1980の甕で底部は平底が残る。時期はⅤ期である。

SK036 (第506図)

調査区 L-8に位置する。小規模な土坑や柱穴と重複するが、一辺1.4～1.5^分、深さ0.1^分の方形を呈する。出土遺物は第153図1981～1983である。1981、1982は甕である。1981は口縁部が逆し字状を呈する。1982は厚底の底部である。1983は磨石で、両面が磨り面として使用され、両端部には敲打痕が残る。本土坑の時期はⅣ期である。

SK037 (第507図)

調査区 L-8に位置する。規模は、長さ1.7^分、幅0.5～0.7^分、深さ0.05～0.2^分である。出土遺物は第153図1984～1987で、厚底の甕底部である。遺物から、本土坑の時期はⅢ期か。

SK039 (第509図)

調査区 G-9に位置する。長方形の平面形を呈し、長さ1.2^分、幅0.8^分、深さ0.35^分である。出土遺物は第153図1990の弥生土器甕である。大きく外反し口縁部にいたる。本土坑の時期はⅢ・Ⅳ期である。

SK040 (第510図)

調査区 G-9に位置する。径0.55^分、深さ0.1^分の円形を呈する。出土遺物は第153図1991～1994の甕である。1991は上半部の資料で、口縁部は外方に強く折れ頸部の数^分下方に、断面三角形の突帯が一条付く。1992は1991と同様な甕形を呈するが、頸部下の突帯が付かない。1994は口縁部が外方に強く折れ、胴部は張らず底部にいたる。1993は脚部で、器壁は厚く、底部にむかいハの字状に開く。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK041 (第511図)

調査区 G-9に位置する。東西に長い不定形を呈し、東西1.15^分、南北0.3～0.5^分、深さ0.1^分である。出土遺物は第154図1995の器台である。上部を欠くが、筒状を呈する比較的細身のもので、底部はハの字状に開く。遺物から、本土坑の時期はⅤ期である。

SK043 (第513図)

調査区 G-9に位置し、SK042を切る。規模は南北2.7^分、東西1.9～2.1^分、深さ0.05～0.2^分である。出土遺物は第154図1998～2000である。1998は下城式甕である。外面口縁下に刻み目突帯が付される。1999、2000は底部で、両者とも厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK044 (第514図)

調査区 G-9に位置し、不定形を呈する。その規模は、長さ1.1^分、幅0.65^分、深さ0.15^分である。出土遺物は第154図2001～2004である。2001、2002は甕の口縁部で口縁部が外方に強く折れ、胴部はほとんど張らない。2003は高坏脚部である。坏部と脚部の接合部に断面三角形の突帯が一条付される。2004は甕の底部で、厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK048 (第518図)

調査区K-9に位置する。長方形を呈するもので、長さ1.3㎝、幅0.8㎝、深さ0.05㎝である。出土遺物は第155図2011の高坏脚部である。底部に向かい大きくハの字状に開き、裾部に凹形の透かし穴がある。遺物から、本土坑の時期はⅦ期である。

SK049 (第519図)

調査区K-9に位置する。長さ1.15㎝、幅0.45～0.7㎝、深さ0.05～0.15㎝の不定形を呈する。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK050 (第520図)

調査区L-9に位置する。規模は、東西2.2～2.4㎝、南北1.8～2.1㎝、深さ0.05～0.1㎝である。出土遺物は第155図2012～2020である。2012～2018は甕である。2012は口縁部が強く外方に折れる。頸部直下には断面三角形の突帯が一条付く。2013～2018は甕の底部で厚底を呈する。2019は石包丁である。やや細身で、刃部は外湾する。2020は砥石で、上下面及び両側面を研ぎ面として使用している。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK052 (第522図)

調査区G-9・10に位置する。現状で、南北0.7㎝、東西0.5㎝、深さ0.1㎝である。出土遺物は第158図2063～2065である。2063は胴部七半の資料で、肩部に断面方形の突帯が二条付く。2064は底部で平底を呈する。2065は甕の底部で厚底を呈する。焼成後の凹形の穿孔がある。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK055 (第525図)

調査区H-10に位置しており、SK056に切られる。土坑は東西方向に長い不定形を呈し、現状で東西2.0㎝、南北1.1～1.35㎝、深さ0.25㎝である。出土遺物は第160図2082である。2082は甕の底部で、厚底を呈する。焼成後の凹形の穿孔がある。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK058 (第528図)

調査区H-10に位置し、SH016に切られる。東西方向に長い楕円形を呈し、長径0.65㎝、短径0.4㎝、深さ0.15㎝である。出土遺物は第162図2099、2100である。2099は弥生土器である。頸部が直立し、外反し口縁部にいたる。口縁部は鋸先状を呈する。2100は土唾である。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK061 (第531図)

調査区I-10に位置し、SH011に南側を切られる。不定形を呈するもので、東西1.9～2.2㎝、南北2.7～3.2㎝、深さ0.1～0.15㎝である。出土遺物は第163図2115～2117、2120～2121である。2115、2116は甕の口縁部資料で、頸部が斜方向に立ち上がり鋸先状口縁を呈する。2116は内外面に赤色顔料が塗布されている。2117は張った胴部から頸部に向かい窄まり、頸部がやや斜めに立ち上がる甕である。2120は口縁部がくの字状に折れる甕で、頸部直下に断面三角形の突帯を一条付す。2121も甕で口縁部がくの字状に折れ、端部が肥厚する。胴部は中程がやや張り、頸部下に横走の沈線が二条みられる。底部は著しい厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK063 (第533図)

調査区K-10に位置する。長さ0.5㎝、短径0.4㎝、深さ数㎜の楕円形を呈する。出土遺物は第164図2123、2124で、両者とも小型の鉢である。2123は平底で体部が直立気味に立ち上がる。口縁部の仕上げは雑である。2124は2123に比べ器高が高い。遺物から、本土坑の時期はⅤ期である。

SK066 (第 536 図)

調査区 L-10 に位置する。南側が調査区外に及ぶため、全形は不明。不定形を呈するもので、その規模は現状で、南北 2.0m、東西 2.7m、深さ 0.1m である。時期を特定できる遺物がなく、本土坑の時期は不明である。

SK067 (第 537 図)

調査区 L-10 に位置する。南側が一部調査区外に及ぶが、不整形を呈するものと思われる。規模は、現状で南北 0.8m、東西 1.2m、深さ 0.1m である。上坑からの出土遺物は少量であるが、規模や形状から弥生時代中期の貯蔵穴であると思われる。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK068 (第 538 図)

調査区 F-10 に位置する。遺構の北側が調査区外に及ぶため、全形は不明である。土坑内からは、床面から浮いた状態で土器片などが出土した。出土遺物は第 165 図 2141 ~ 2150 である。2141 は壺である。頸部が外反し口縁部にいたる。口縁は鋤先状を呈するものか。2142 ~ 2150 は甕である。2142 ~ 2144 はいずれも口縁部がくの字状に折れる。2142 は胴部がやや張り、丸みをもつ。2143、2144 は胴部が張らず直線的である。2144 の頸部下には断面三角形の突帯が付く。2145 ~ 2150 は底部である。いずれも平底で厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK078 (第 546 図)

調査区 H-11 に位置する。長方形を呈し、長辺 1.0m、短辺 0.7m、深さ 0.15 ~ 0.5m である。土坑内からは土器片が少量出土したのみである。出土遺物は第 167 図 2177 の壺である。外反気味の頸部が外口縁部にいたり、口縁端部内側に粘土を貼り付け、断面長方形に肥厚させる。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK084 (第 552 図)

調査区 K-11 に位置する。径 0.45 ~ 0.5m、深さ 0.1m の円形を呈するもので、少量の上器片が出土した。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK087 (第 555 図)

調査区 L-11 に位置する。不定形を呈するが、小上坑が重複している可能性がある。規模は、長さ 1.65m、幅 0.5 ~ 0.7m、深さ 0.05 ~ 0.1m である。遺物は土器片が散発的に出土したのみである。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK094 (第 562 図)

調査区 H-I-12 に位置する。SH026、SH027、SK095 に切られるため全形は不明であるが、不定形を呈する。規模は、断面図の部分で長さ 3.7m、深さ 0.1 ~ 0.3m であるが、いくつかの土坑などが重複している可能性もある。出土遺物は第 168 図 2202 ~ 2205 である。2202、2203 は壺の胴部で、貝殻腹縁を押ささせ木の葉状文などが描かれる。2204 は高坏の坏部である。上半部は発達し大きく外反する。2205 は浅い輪状の坏部に、低めの脚が付く。混入品もみられるが遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK096 (第 564 図)

調査区 G-14 に位置する。不整形を呈するもので、径 0.75 ~ 0.9m、深さ 0.05m である。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK097 (第 565 図)

調査区 G-14 に位置する。不定形を呈し、1.7 × 1.1m、深さ 0.1m である。出土遺物は第 168 図 2208 ~ 2211 である。2208 は鋤先口縁を呈する壺であるが、混入品と思われる。2209 は甕である。口縁部はくの字状に折れ、胴部は肩が張る。2210、2211 は鉢である。2210 は底部に平底が残り、半球形の胴部から口縁部が外方に折れる。

2211 は内湾気味の胴部が口縁部に続く。混入品もあるが、遺物から、本土坑の時期はV期である。

SK098 (第566図)

調査区I-14・15に位置する。不定形を呈するもので、南北1.25m、東西0.45～0.7m、深さ0.1～0.2mである。中央付近から甕が出土した。床面から0.1m浮いた状態であった。出土遺物は第169図2212の弥生土器甕である。底部は平底であるが、厚底ではない。口縁部は外方に強く折れ、肩部が肥厚する。頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。遺物から、本土坑の時期はIV期である。

SK099 (第567図)

調査区K-14に位置する。長さ0.7m、幅0.25～0.4m、深さ0.05～0.25mの柱穴状を呈する。出土遺物は第169図2213の磨石である。下面に磨り面が残り、上面中央や側縁部に敲打痕がある。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK100 (第568図)

調査区K-14に位置する。円形を呈するもので、径0.75m、深さ0.2mである。出土遺物は第169図2214の弥生土器鉢である。底部は凸レンズ状で、平底の痕跡が残る。胴部上半は直線的に口縁部にいたる。遺物から、本土坑の時期はVI期である。

SK101 (第569図)

調査区K-14に位置する。円形を呈するもので、径1.0m、深さ0.55mである。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK102 (第570図)

調査区G-15に位置する。東西に長い長方形を呈し、SH041に切られる。長さ4.0m、幅1.7～1.9m、深さ0.05～0.1mの不整長方形を呈する。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK104 (第572図)

調査区I-15に位置する。東西に長い楕円形を呈するもので、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2mである。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK105 (第573図)

調査区J-15に位置する。東西に長い不定形を呈するが、2基の小土坑が重複している可能性もある。規模は東西0.75m、南北0.2～0.35m、深さ0.05～0.1mである。時期を特定できる遺物がないため、時期不明。

SK106 (第574図)

調査区F-15-16に位置する。東西1.4m、南北2.0mの隅丸方形を呈し、深さ0.2mである。

遺物は第169図2219～2223である。2219は弥生土器甕の口縁部、2220は鉢である。2221は甕の底部で、上底を呈す。2222と2223は姫島産黒曜石の石鏃である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代後期前葉のV期に属す。

SK107 (第575図)

調査区F-16に位置する。東西1.7m、南北1.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.15m～0.65mである。主柱穴は2本で、直径0.4～0.5m、深さ0.4～0.5mである。

遺物は第169図2224～2229である。2224～2226は弥生土器甕の口縁部で胴部は張らない。復元口径は約25cm。2227は甕の底部、2228は甕の底部、2229は姫島産黒曜石の石鏃である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時

代中期初頭のⅡ期である。

SK108 (第576図)

調査区 F-16 に位置する。東西 15%、南北 20% の隅丸長方形を呈し、深さ 0.5% である。床面から柱穴 1 本のほか、中央に長さ 20% の土坑細長い土坑が掘られ、さらにその中に浅い穴が並んで見つかった。

遺物は第 169 図 2230 と 2231 である。2230 は弥生土器高杯の口縁部、2231 は甕の蓋である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK109 (第577図)

調査区 F-16 に位置し、SK107 の後に掘られている。東西 16%、南北 15% の隅丸長方形を呈し、深さ 0.3% である。床面中央付近から柱穴を 1 本検出した。

遺物は第 170 図 2232 である。2230 は輝緑凝灰岩製の石包丁である。土坑の時期は弥生時代である。

SK110 (第578図)

調査区 F-16 に位置し、SK108 と前後関係があり、その順は SK108 → SK110 である。その規模は東西 17%、南北 19% の長方形を呈し、深さ 0.2% である。

遺物は第 170 図 2233 ～ 2235 で、2233 と 2234 は弥生土器甕で、口縁部は跳ね上げ、底部は上底である。2235 は千枚岩質泥岩の礫石斧である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期に属す。

SK112 (第580図)

調査区 K-16 に位置する。南北に長い長方形を呈し、南北 11%、南北 0.75%、深さ 0.15% である。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK113 (第581図)

調査区 K-16 に位置する。南北に長い楕円形を呈し、南北 1.95%、南北 1.35%、深さ 0.1% である。出土遺物は第 170 図 2236 の弥生土器高杯の脚部のみである。出土遺物から本土坑の時期はⅥ期である。

SK114 (第582図)

調査区 F-16 に位置する。東西 17%、南北 15% の不定方形を呈し、深さ 0.2% である。柱穴は 1 本で、その深さは 0.2% である。遺物は細片のみの出土であった。時期は不明である。

SK115 (第583図)

調査区 F-16 に位置する。東西 1.3%、南北 1.0% の長方形を呈し、深さ 0.4% ～ 0.6% である。物は細片のみで、図示するものはなかった。時期は不明である。

SK118 (第586図)

調査区 F-16 に位置する。東西 25%、南北 27% の円形を呈し、深さ 0.2% ～ 0.4% である。支柱穴は 2 本で、中央部に直径 0.4% の土坑がある。

遺物は第 172 図 2273 と 2274 である。2273 は弥生土器甕、2274 は器台である。これらから、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK119 (第587図)

調査区 H-16 に位置する。東西 1.1%、南北 1.7% の楕円形を呈し、深さ 0.4% である。

遺物は第 172 図 2275 の弥生土器甕の底部が床面から出土した。厚手の上底であることから、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期か。

SK120 (第588図)

調査区G-17に位置する。東西15㎝、南北10㎝の不整形を呈し、深さ0.3㎝である。

遺物は第172図2276～2279である。2276と2277は弥生土器甕の口縁、2278-2279は甕の底部である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK121 (第589図)

調査区G-17に位置する。東西16㎝、南北11㎝の不整形を呈している。SH049の下で検出した土坑である。

遺物は第173図である。2280～2282は弥生土器壺、2280と2281は頸部にM字突帯を張りつける。2281は甕先状で、端部が下がる。2283と2284は壺、2285と2286は高坏で、身が深い。2287は壺の底部、2288と2289は甕の底部である。出土遺物及びSH049との前後関係から、この土坑は弥生時代中期前半のⅢ期のものである。

SK123・124 (第591図)

調査区H-17に位置する。両者は前後関係を持ち、SK124→SK123の順である。SK123の規模は東西20㎝、南北21㎝の隅丸方形を呈し、深さ0.35㎝である。SK124は東西20㎝、南北20㎝以上でSK123と同様隅丸方形を呈している、その深さは0.45㎝である。

遺物は細片のみの出土であったため、時期の特定はできなかった。

SK125～128 (第592図)

調査区G-17に位置する。これらの土坑も切り合い関係を持ち、その前後関係はSK126→SK125→SK127・SK128の順である。SK125の規模は東西17㎝、南北23㎝以上の楕円形を呈し、深さ0.35㎝である。SK126は東西22㎝以上、南北26㎝で、こちらも楕円形を呈している、その深さは0.35㎝である。SK127は東西17㎝、南北21㎝の楕円形を呈し、深さ0.4㎝である。深さ0.4㎝の柱穴2本を床面で検出している。SK128は東西22㎝以上、南北21㎝以上の楕円形を呈し、深さ0.3㎝である。西壁際床で土坑を検出した。

これらの土坑の遺物は第174図2299～2304に図示した。SK125からは2299の弥生土器甕と2300の石英の石核が出土した。2301はSK126出土の弥生土器壺。2302はSK127出土の高坏の脚である。SK128からは2303の弥生土器壺と2304の姫島産黒曜石の石鏃が出土している。これらの遺物から、SK125、SK126、SK128は弥生時代中期前半のⅢ期、SK127は弥生時代中期後半のⅣ期と考える。

SK131 (第595図)

調査区I-17に位置する。北側を他遺構に切られるが、南北に長い不定形を呈する。その規模は、現状で南北18㎝、東西0.25～0.7㎝、深さ数㎝である。頸部より上部を欠く小型壺が、床面から0.1㎝浮いて出土した。出土遺物は第175図2325の小型丸底壺で、胴部は球形を呈し口縁部を欠く。本土坑の時期はⅦ期である。

SK132 (第596図)

調査区I-17に位置する。不定形を呈するもので、長さ0.95㎝、幅0.35～0.6㎝、深さ0.05㎝である。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK133 (第597図)

調査区J-17に位置する。楕円形を呈するもので、長径0.6㎝、短径0.5㎝、深さ0.05㎝である。床面から約0.1㎝浮いて石包丁が1個体出土した。出土遺物は第176図2326の石包丁で、一部を欠損する。全体としてやや細身で、刃部は外湾する。2個所に凹形の穿孔がみられる。遺物から、本土坑の時期は弥生時代中期である。

SK134 (第598図)

調査区K-17に位置する。東西に長い楕円形で、長径0.7㎝、短径0.3㎝、深さ0.1～0.15㎝である。出土遺物は第176図2327の甕である。口縁部は外方に折れ、胴部は胴部から中程にかけてやや張る。底部は丸底である。内外面

にはハケ目調整がみられる。遺物から、本土坑の時期はⅦ期である。

SK135 (第599図)

調査区 E-18 に位置する。東西 0.5m、南北 0.6m の楕円形を呈し、深さ 0.15m である。

遺物は第 176 図 2328 の甕である。口縁下に三角突帯を二条廻らせ、口唇部と突帯に刻目を施す。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK136 (第600図)

調査区 E-F-18 に位置する。東西 1.9m、南北 0.65m の長楕円形を呈し、深さ 0.2 ~ 0.3m である。遺物は中間層から出土している。第 176 図 2329 ~ 2332 である。2329 は弥生土器甕で鋤先状を呈す。2330 ~ 2332 は甕である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期初頭のⅡ期に属す。

SK137・138 (第601図)

調査区 E-18-19 に位置する。これらは切り合い関係を持ち、その前後関係は SK137 → SK138 の順である。SK137 の規模は東西 0.6m、南北 1.1m の楕円形で、深さ 0.3m である。SK138 は東西 0.9m、南北 0.5m で、こちらも楕円形を呈している、その深さは 0.2m である。

SK137 の遺物は第 176 図 2333 と 2334 で、SK138 は 2335 である。2333 は弥生土器甕、2334 は安山岩製の磨石で敲打痕がある。2335 は弥生時代甕である。出土遺物から、SK137 は弥生時代後期中葉のⅥ期、SK138 は弥生時代中期初頭のⅡ期である。

SK139 (第602図)

調査区 F-18 に位置する。東西 0.6m、南北 0.7m の円形で、深さ 0.25m である。遺物は中間層から出土している。

遺物は第 176 図 2336 ~ 2338 である。2336 は弥生土器甕で胴部に M 字突帯を廻らす。2337 と 2338 は甕である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK140 (第603図)

調査区 F-18 に位置する。その平面規模は東西 0.7m、南北 0.9m の楕円形で、深さ 0.25m である。

遺物は第 177 図 2339 ~ 2343 である。2339 は弥生土器甕、2340 と 2341 は甕である。甕は鋤先口縁である。2342-2343 は安山岩製の敲石である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期に属す。

SK141 (第604図)

調査区 F-18 に位置する。東西 1.1m、南北 1.1m の隅丸方形を呈し、深さ 0.2m である。

遺物は第 177 図 2344 ~ 2347 である。2344 と 2345 は弥生土器甕で、口縁部は外に大きく開く。2346 と 2347 は甕の底部。これらから、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK142 (第605図)

調査区 F-18 に位置し、東西 0.8m、南北 1.3m の平面楕円形を呈し、その深さは 0.1m である。

遺物は第 177 図 2348 の弥生土器甕の厚手の底部である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK143 (第606図)

調査区 F-18 に位置する。東西 0.7m、南北 1.0m の長方形を呈し、深さ 0.2m である。遺物は主に土坑の上層から出土している。

遺物は第 177 図 2349 ~ 2352 である。2349 は弥生土器甕で口縁は外に大きく開く。2350 と 2352 は甕、胴は張らず、底部は上底である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK144 (第607図)

調査区 K-18 に位置する。東西に長い不定形で、東西 1.15m、南北 0.5～0.8m、深さ 0.05m である。出土遺物は第 177 図 2353～2364 である。2353 は壺あるいは高杯の口縁部と思われる。2354、2355 は高杯の脚部である。両者とも長脚で、杯部の下に断面三角形の突帯が付される。2356～2364 は底部である。2360 は壺などの可能性をもつが、他は甕である。厚底を呈するものが多いが、2357、2358 は比較的薄い底部である。遺物から、本土坑の時期はⅢ・Ⅳ期である。

SK145 (第608図)

調査区 K-18 に位置する。東西に長い楕円形で、長径 0.5m、短径 0.3m、深さ 0.05m である。土坑の端に、完形の甕が横位で置かれていた。出土遺物は第 178 図 2365～2367 の甕である。2365 は混入品で、口縁部が逆 L 字状気味に強く折れる。2366 は内外面にハケ目がみられず、ナデなどの調整である。2367 は全形が分かる資料で、口径に比し器高が低い。底部は平底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅦ期である。

SK146 (第609図)

調査区 F-19 に位置し、その規模は東西 2.5m、南北 1.4m で、平面長楕円形を呈し、深さは 0.3m である。床面中央から直径 0.2m の柱穴を 1 本検出している。

遺物は第 178 図 2368 の弥生土器甕である。口縁は立ち気味で、胴は上位に最大部を持つ。このことから、この土坑の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅦ期である。

SK147 (第610図)

調査区 F-19 に位置する。東西 2.5m、南北 1.2m の長方形を呈し、深さ 0.3m～0.4m である。主柱穴は 1 本で、その直径は 0.3m、深さ 0.1m である。

遺物は主に土坑の中層から出土しており、それらを第 178 図 2369～2375 に示した。2369 は弥生土器壺、2370、2371 及び 2373 は甕である。2370 は内湾気味の口縁に突帯を廻らす。2372 の高杯は身が深い。2374・2375 は鉅島産黒曜石のスクレイパーである。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK149 (第612図)

調査区 F-19 に位置する。東西 1.1m、南北 7.8m の細長い形状で、深さ 0.2～0.45m である。SK150 と前後関係にあり、SK149→SK150 の順である。

遺物は 3 箇所集中的に出土しており、それらは第 179～181 図及び第 182 図 2402～2412 である。第 179 図 2378～2380 は弥生土器壺。2378 は下城式の肩部で円弧文を描く。2379 は口縁が外に開き、胴部上位に最大径を持つ。高さ 34.2cm、復元口径 27.2cm、最大径 33cm。第 179 図 2381～2389 及び第 180・181 図、第 182 図 2402～2412 は甕である。2402 は下城式の甕で刻目突帯を廻らす。2381 と 2386 は頸部下に沈線を、2 条廻らす。第 180 図 2394・2395・2398・2399、第 181 図 2400・2401、第 182 図 2402・2406 は頸部下に三角突帯を廻らす。2397 は高さ 31.6cm、復元口径 24.0cm。2400 は高さ 41.5cm、口径 32.4cm、底部径 8.4cm。2401 は高さ 39.2cm、口径 32.0cm、底部径 8.0cm。2404～2412 の甕の底部は厚手が多い。これらの出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK151 (第614図)

調査区 G-19 に位置する。東西 1.1m、南北 0.9m の円形土坑で、その深さは 0.35m である。遺物は細片のみの出土であり、遺物の時期を確定できなかった。

SK152 (第615図)

調査区 G-19 に位置する。東西 0.8m、南北 0.8m の円形を呈し、深さ 0.15m である。

遺物は第 182 図 2415～2417 である。2415 は弥生土器壺で胴部に一条の M 字突帯を廻らす。2416、2417 は甕である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期初頭のⅡ期である。

SK153 (第616図)

調査区 G-19 に位置する。直径 2.0m、深さ 0.4m の円形の土坑である。出土遺物は第 182 図 2418 ～ 2421 である。2418 と 2419 は壺、2420 は甗台である。2421 は粘板岩製の砥石である。時期はⅢ期である。

SK154 ～ 156 (第617図)

調査区 G-19-20 グリッドにまたがってある。SK154 は東西 4.0m、南北 2.5m の楕円形を呈し、深さ 0.3m ほどである。中央にある直径 0.5m の土坑周辺に焼土が広がっている。SK155 は東西 1.3m、南北 1.1m の円形を呈し、深さ 0.3m である。SK156 は東西 2.3m、南北 1.4m 以上の長方形を呈し、深さ 0.15m である。その前後関係は、SK155 → SK154、SK156 → SK154 である。

SK154 の遺物は第 183 図 2422 ～ 2434、SK155 は 2435、2336 に示した。SK155 は細片のみの出土であった。2422・2423・2425 は弥生土器壺で、肩部及び胴部に三角突帯を回す。2424 と 2426 ～ 2429 は甗、2430 は高坏か。2431 ～ 2433 は底部で 2431 は壺の平底、2432・2433 は厚手土底の甗である。2434 は石鏝の未成品で、素材は珪質頁岩。SK156 の 2435 は身の深い高坏で鋤先口縁を呈す。

出土遺物から、これらの土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期に属す。

SK157 (第618図)

調査区 H-19 に位置する。二つの方形土坑が切り合っているが、切られている方が SK156 である。甗割も別遺構に切られているため、南北の大きさは不明であるが、幅 2.2m の長方形の土坑である。残存する深さは 0.3m である。出土遺物は第 183 図 2437 ～ 2441 である。2437 と 2438 は二重口縁の壺、2439 と 2440 は甗、2441 の底部は壺と思われる。時期はⅥ期である。

SK158 (第619図)

調査区 H-19 に位置する。南北 2.5m、東西 2.6m のやや台形状を呈す土坑である。残存する深さは 0.3m である。出土遺物は第 184 図 2442 ～ 2455 である。2442 は大きく口が開く壺、2443 ～ 2452 までは甗である。2451 は鋤先状口縁を呈する。2453 は甗。2454 と 2455 は甗の底部である。時期はⅢ期である。

SK159 (第620図)

調査区 H-19 に位置する。SK160 に大きく切られる。そのため東西方向の規模は不明である。南北は 1.4m、残存する深さは 0.2m である。第 184 図 2456 と 2457 の甗が出土している。時期はⅢ期である。

SK160 (第620図)

調査区 H-19 に位置する。SK159 を切る。規模は南北 2.2m、東西 1.9m のやや長方形で、残存する深さは 0.3m である。埋土上面に焼土が見られた。出土遺物は無い。時期は不明である。

SK161 (第621図)

調査区 H-19 に位置する。直径 0.6m の土坑である。規模からして柱穴の可能性もある。埋土から第 185 図 2458 ～ 2461 が出土している。いずれも甗で、頸部に沈線を通らせる。時期はⅡ期である。

SK162 (第622図)

調査区 I-19 に位置する。南北 3.7m、東西 2.8m、深さ 0.1m の隅丸長方形の上坑である。出土遺物は無い。

SK163 (第623図)

調査区 F-20 に位置する。大部分が調査範囲外のため全形は不明である。確認できる範囲では、南北に 2.2m、深さは 0.25m である。出土遺物は第 185 図 2462 で、弥生土器甗である。時期はⅡ期である。

SK164 (第624図)

調査区F-20に位置する。

SK165に切られている。そのため全形は推定であるが、南北1.3m、東西1.0mで、深さは0.5mである。第185図2463の磨り石が出土している。時期は不明である。

SK165 (第624図)

調査区G-20に位置する。SK164を切っている。南北1.1m、東西1.0m、深さ0.25mの方形の土坑である。出土遺物は無い。

SK166 (第625図)

調査区F-20に位置する。調査区境に位置するため、西側の一部は未調査である。確認できる範囲では南北2.4m、深さは0.1mで、南側半分の床が数cm下がっている。出土遺物は無い。

SK167 (第626図)

調査区G-20に位置する。西側は調査区外になるため、全形は不明である。断面図を見るとわかるように、二つの土坑が切り合っている。平面的には確認できていない。合わせた大きさは南北1.2m、深さは0.2mである。出土遺物は無い。

SK168 (第627図)

調査区G-20に位置する。南西の一部を他遺構に切られているが、2.0m×1.4mの楕円形を呈する土坑である。残存する深さは0.3mである。出土遺物は第185図2464～2466である。2464は壺または高杯の口縁部、2465は壺、2466は蓋である。時期はⅡ期である。

SK169 (第628図)

調査区G-20に位置する。2.6m×2.2mの楕円形を呈する土坑で、皿状に深くなり、深さは0.18mである。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK170 (第629図)

調査区II-20に位置する。西側は別遺構に切られており、全形はわからないが、西側に向けて広がる台形状を呈すると考えられる。南北は東側で1.3m、西側で最大2.4m、残存する深さは0.1mである。出土した遺物は第185図2467～2469である。2467は壺、2468は内面から外面の口縁部下まで赤彩する鉢、2469は口縁部が大きく広がる鉢である。時期はⅣ期である。

SK171 (第630図)

調査区H-20に位置する。東西両側を別遺構に切られているため全形はわからないが、復元すると南北1.4m、東西2.1m、深さは0.4mとなる。掘り形は徐々に浅くなる皿状を呈する。出土遺物は第185図2470～2472である。2470は半歳竹管文を並行沈線の下にU字状に入れるもので、下城式の壺、2471と2472は壺である。時期はⅢ期である。

SK172 (第631図)

調査区H-20に位置する。南北1.0m、東西1.7mの隅丸長方形で、深さは0.19mである。出土遺物は第185図2473と2474で、いずれも壺である。時期はⅣ期である。

SK173 (第632図)

調査区J-20に位置する。南北1.1m、東西0.6mの楕円形を呈する土坑である。深さは0.24mである。比較的小さな土坑であるが、土器は多く出土している。第186図2475～2481である。2475は胴部に二条突帯を廻らせる壺。2476も壺の底部、2477～2481は何れも壺である。口縁部下に突帯を廻らせる。時期はⅣ期である。

SK174 (第633図)

調査区 E/F-20 に位置する。一部調査出来なかった部分があるが、南北 32^{cm}、東西 30^{cm}、深さ 0.25^m の方形を呈する土坑である。出土遺物は第 186 図 2482 ～ 2493 である。2482 は高坏か壺の口縁部、2483 ～ 2487 は壺、2488 は器台か、2489 は壺の底部、2490 ～ 2492 は壺の底部である。2493 は緑泥片岩製の扁平打製石斧である。時期は V 期である。

SK175 (第633図)

調査区 F-20 に位置する。幾つかの土坑が切り合っている可能性があるが、概ね南北 2.65^m で、深さは 0.3^m である。出土遺物は第 187 図 2494 ～ 2496 で、いずれも壺である。時期は III 期である。

SK176 (第634図)

調査区 G-20 に位置する。二つの土坑が重なっているが、新しい方は長さ 2.65^m、幅 0.6^m、深さ 0.2 ～ 0.25^m である。埋土上面付近から遺物は出土している。出土遺物は第 187 図 2497 ～ 2499 である。2497 は口縁部がややつまみ上げられる壺、2498 はミガキの入った高坏、2499 は壺の底部である。時期は III 期である。

SK177 (第635図)

調査区 G-20 に位置する。西側の一部は調査範囲外である。南北方向は 2.2^m、深さは 0.1^m である。床面からやや浮いた状態で遺物が出土している。出土遺物は第 187 図 2500 ～ 2505 である。2500 ～ 2502 は壺、2503 は小型の壺、2504 は大型の壺底部である。2505 は磨り石である。時期は IV 期である。

SK178 (第636図)

調査区 H-20 に位置する。西側が調査区外となるため全形はわからないが、南北方向には 1.2^m ある楕円形になるとと思われる。深さは 0.1^m である。出土遺物は第 188 図 2506 の壺である。時期は V 期である。

SK179 (第637図)

調査区 J-21 に位置する。図の中央部の方形を呈する土坑である。一辺 1.0^m で深さ 0.5^m の土坑である。出土遺物は第 188 図 2507 ～ 2511 である。2507 は単口縁の壺、2508 と 2509 は壺、2510 は鉢、2511 は壺底部である。時期は V 期である。

SK180 (第638図)

調査区 F/G-21/22 に位置する。長さ 2.05^m、幅 0.85^m の長楕円形を呈する土坑で、深さは 0.4^m である。東西の両側が一段高くなっており、中央部が皿状に窪む形となる。出土遺物は第 188 図 2512 ～ 2517 である。2512 は鋤先状口縁の壺、2513 ～ 2517 は壺。時期は III 期である。

SK181 (第639図)

調査区 D-22/23 に位置する。北側が調査区外となるため全形は不明であるが、長方形を呈すると思われる。南側の一辺は 1.25^m である。深さは数分である。出土遺物は第 188 図 2518 ～ 2521 である。2518 と 2519 は壺、2520 は高坏、2521 は粘板岩製の砥石である。時期は VI 期である。

SK184 (第642図)

調査区 L-23 に位置する。幅約 1.0^m の溝が一周する形で方形の区画を作っている。溝の外側で測ると、3.45^m × 3.6^m ほどとなる。深さは数分を浅い。出土遺物は第 189 図 2522 の壺である。時期は VI 期である。

SK185 (第643図)

調査区 E-26 に位置し、その規模は東西 0.7^m、南北 0.8^m で、平面円形を呈している。その深さは 0.3^m である。遺物は第 189 図 2523 の弥生土器臺であり、この土坑の時期は弥生時代後期中葉～後葉の VI 期である。

SK186 (第644図)

調査区J/K-26に位置する。長さ47㎝、幅1.6㎝の長方形を呈する土坑で、深さは0.65㎝である。しっかりした掘り形である。土層を見ると、人為的に埋め戻された可能性もある。出土遺物は第189図2524～2528である。2524は鍔先状口縁の壺、2525は口縁部が小さく曲がる鉢、2526と2527は壺の底部で、2527にはヘラで「×」が描かれている。2528は安山岩製の磨り石である。時期はⅣ期である。

SK187 (第645図)

調査区D-27に位置する。東西0.9㎝、南北0.6㎝の楕円形を呈し、中央に深さ0.7㎝の柱穴跡がある。出土遺物が細片で時期は不明である。

SK188 (第646図)

調査区E-28に位置する。東西2.2㎝、南北0.8㎝の楕円形を呈し、深さ0.1㎝～0.4㎝である。

遺物は第189図2529と2530である。2529は弥生土器壺で、複合口縁を呈す。2530は壺の底部で、土底をしている。これらの遺物から、この土坑の時期は弥生時代後期前葉のⅤ期である。

SK189 (第647図)

調査区I-30に位置する。南北0.35㎝、東西0.45㎝の楕円形を呈する土坑で、深さは0.4㎝である。第647図の出土土器が浮いているのは、地山が黒色で遺構の判別が困難だったことによる。位置から考えて、この土坑から出土したものと判断した。出土遺物は第189図2531～2534である。2531と2532は小型の壺、2533と2534は同じくやや小型の甕である。時期はⅥ期である。

SK190 (第648図)

調査区K-29に位置する。長さ1.5㎝、幅1.05㎝の長方形の土坑で、深さは0.45㎝である。断面図(第648図)からわかるように、大型の壺が土坑中央でつぶれており、側面に石があったことから、石で蓋をした壺棺墓だった可能性がある。壺がつぶれて出来た空間に土層Ⅰが一挙に堆積したと考えられる。出土遺物は第190図2535～2539である。2535は高坏の口縁部か。2536は甕、2537は大型の壺、2538は高坏、2539は甕である。時期はⅣ期である。

SK191 (第649図)

調査区J-30/31に位置する。南北1.2㎝、東西1.05㎝のやや長方形を呈する土坑である。深さは0.1㎝ほどで一度底面があり、さらにそこから数㎝中央付近が下がる。第649図は、土器が浮いているが、検出時には遺構プランが確認できなかったため、位置から考えて、この土坑に伴うものと判断した。出土遺物は第190図2540～第191図2553である。2540は、大型の器台か。2541は高坏、2542～2544と2546、2547は甕、2545は壺、2548～2552は高坏、2553は砥石である。時期はⅣ期である。

SK192 (第650図)

調査区I-31に位置する。長さ3.65㎝、幅0.8～1.0㎝の長方形を呈する土坑で、床は二段になっている。1段目は深さ0.5㎝、2段目は0.75㎝ある。遺物の出土状態から見ると、1段目の床の延長上に集中しており、あるいは1段目が後から掘られたのかもしれない。土層では分層出来なかったため、一つの遺構と考えた。出土遺物は第191図2554～第193図2571である。大型の破片が多く、一括で廃棄した状況である。2554は広口壺、2555は突帯を二条持つ壺、2556は壺底部、2557～2560も壺。2561～2570は甕、2571は高坏である。時期はⅣ期である。

SK193 (第651図)

調査区J-31に位置する。別遺構を切っているが、東西1.5㎝、南北1.3㎝の影らみを持つ長方形の土坑である。深さは0.6㎝である。遺物は床面から若干浮いて出土している。出土遺物は第193図2572～第194図2582である。

2572 と 2573 は高坏、2574 は壺の底部、2575 ～ 2582 は甕である。時期はⅣ期である。

SK194 (第 652 図)

調査区 H-31 に位置する。南北 1.0m、東西 0.6 ～ 0.8m の台形状を呈する土坑である。深さは 0.18m である。遺物は床面から出土した。出土遺物は第 194 図 2583 の高坏と 2584 の甕である。時期はⅣ期である。

SK195 (第 653 図)

調査区 J-31/32 に位置する。明確な遺構は捉えられなかったが、遺物が集中して出土したため土坑一括遺物として扱う。土器は第 194 図 2585 ～ 第 195 図 2591 である。2585 は蓋か。2586 と 2587、2589 ～ 2591 は甕、2588 は壺である。あるいは、2588 の壺を使用した壺棺だったものか。時期はⅢ期からⅣ期である。

SK196 (第 654 図)

調査区 K-31 に位置する。0.45m × 0.35m のいびつな円形の土坑である。遺物は床からやや浮いて出土している。出土遺物は第 195 図 2592 ～ 2594 である。2592 は大型の壺、2593 は高坏、2594 は壺である。時期はⅤ期である。

SK199 (第 657 図)

調査区 J-34 に位置する。規模は東西 1.8m、南北 1.2m で、平面隅丸長方形を呈し、深さ 0.8m である。

遺物は、遺構廃絶後すぐ流入したものである。それらは第 196 図 2602 ～ 2609 である。2602、2603 は弥生土器壺の口縁で、上面は平坦である。2604、2605 は甕で、2604 は頸部に三角突帯を廻す。2606、2608 の壺の底部は上底気味である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK200 (第 658 図)

調査区 I-35 に位置する。東西 1.8m、南北 1.2m の楕円形を呈し、深さ 1.2m である。

遺物は細片のみの出土で、時期は不明である。

SK201 (第 659 図)

調査区 G-36 に位置する。東西 2.0m、南北 1.2m の長方形を呈し、深さ 1.0m である。出土遺物が細片であったため、時期は不明である。

SK202 (660 図)

調査区 I-36 に位置する。東西 0.4m、南北 0.3m の円形を呈し、深さ 0.25m である。

遺物は第 196 図 2610 の弥生土器甕である。底部は九底の特徴を持つ。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代後期終末のⅣ期である。

SK203 (第 661 図)

調査区 I-36 に位置する。東西 1.9m、南北 1.2m 以上の長方形を呈し、深さ 1.2m である。

遺物は細片のみの出土であった。

SK204 (第 662 図)

土坑は調査区 C-41 グリッドにある。その規模は東西 1.2m、南北 0.7m、平面長楕円形を呈し、深さ 1.2m である。中央に柱痕が確認できた。

遺物の出土がなく、時期は不明である。

SK205 (第 663 図)

調査区 C-41 に位置する。東西 1.4m、南北 0.8m の長方形を呈し、深さ 0.7m である。第 663 図に示すように、中

夾に杵痕を確認した。遺物は細片のみの出土であったため、時期は不明である。

SK206 (第 664 図)

調査区 D-41 に位置する。東西 16㎝、南北 08㎝の長楕円形を呈し、深さ 08㎝である。土層より、中央に柱痕が確認できた。遺物の出土がなく、時期は不明である。

SK207 (第 665 図)

調査区 G-42 に位置する。東西 09㎝、南北 07㎝の楕円形を呈し、深さ 01㎝と浅い。
遺物は細片のみの出土で、構築時期は不明である。

SK209 (第 667 図)

調査区 I-48 に位置する。東西 06㎝、南北 11㎝の長楕円形を呈し、深さは 14㎝と深い。
遺物は細片のみの出土であったため、時期は不明である。

SK210 (第 668 図)

調査区 F-50 に位置する。東西 06㎝、南北 04㎝の不整形を呈し、深さ 035㎝である。遺物は上層から出土している。遺物は第 196 図 2612 と 2613 の弥生土器甕である。2612 の胴は張らない、2613 は厚手上底である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期のⅢ・Ⅳ期である。

SK211 (第 669 図)

調査区 E-51 に位置する。東西 06㎝、南北 08㎝の楕円を呈し、深さ 03㎝である。遺物はおもに上層から出土している。遺物は第 196 図 2614 の弥生土器甕の底部で、厚手上底である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK212 (第 670 図)

調査区 F-51 に位置し、その平面規模は東西 05㎝、南北 04㎝の円形であり、深さ 035㎝である。遺物の多くは中層から出土している。

遺物は第 197 図 2615 の弥生土器甕である。跳ね上げ気味の口縁端部である。高さ 29.2㎝、口径 32.0㎝、底部径 8.0㎝。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期に属するものである。

SK214 (第 672 図)

調査区 B-51 に位置する。北側が調査区外に延びるため、全形はわからないが、ほぼ正円であるとして、直径 13㎝ほどになる。深さは 016㎝である。時期は不明である。

SK215 (第 673 図)

調査区 F-52 に位置する。東西 05㎝、南北 04㎝の円形を呈し、深さ 05㎝である。遺物は埋土の下層に集中する。

遺物は第 198 図 2623 ～ 2625 である。2623、2624 は弥生土器甕、いずれも胴は張らない、2624 は頸部に三角突帯を廻す。2625 は結晶片岩製の打製石斧である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK216 (第 674 図)

調査区 F-52 に位置し、規模は東西 24㎝、南北 18㎝で平面長方形を呈している。深さは 02㎝である。東端際に浅い土坑をもち、中央部から炭化した木片とともに土器が出土した。

遺物は第 198 図 2626 の弥生土器甕である。口径は 29.4㎝である。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅥ期と考える。

SK217 (第 675 図)

調査区 F-52 に位置する。東西 16 $\frac{1}{2}$ 、南北 23 $\frac{1}{2}$ の長方形を呈し、深さ 02 $\frac{1}{2}$ である。SK216 同様、炭化した木片が出上した。遺物は細片のみで、時期は不明である。

SK218 (第 676 図)

調査区 E-53 に位置する。その規模は東西 23 $\frac{1}{2}$ 、南北 19 $\frac{1}{2}$ で、隅丸長方形を呈し、深さ 02 $\frac{1}{2}$ ~ 06 $\frac{1}{2}$ である。北側で柱穴を検出した。図示すべき遺物の出土はなかった。

SK219 (第 677 図)

調査区 F-53 に位置する。東西 20 $\frac{1}{2}$ 、南北 17 $\frac{1}{2}$ の隅丸長方形を呈し、深さ 03 $\frac{1}{2}$ ~ 05 $\frac{1}{2}$ である。中央で直径 04 $\frac{1}{2}$ の土坑、南側で柱穴を検出した。

遺物は細片のみの出土であったため、時期は不明である。

SK222 (第 679 図)

調査区 G-54 に位置する。東西 06 $\frac{1}{2}$ 、南北 06 $\frac{1}{2}$ の円形を呈し、深さ 04 $\frac{1}{2}$ である。土坑の上層には礫が詰まっていた。土器は細片のみで、時期の確定できるものはなかった。

SK223 (第 680 図)

調査区 E-56 に位置する。東西 10 $\frac{1}{2}$ 、南北 12 $\frac{1}{2}$ の長方形を呈し、深さ 05 $\frac{1}{2}$ である。遺物は細片のみの出土であったため、時期は不明である。

SK227 (第 682 図)

調査区 E-56-57 に位置する。東西 20 $\frac{1}{2}$ 、南北 30 $\frac{1}{2}$ の長方形を呈し、深さ 03 $\frac{1}{2}$ である。主柱穴は 1 本で、中央部に 05 $\frac{1}{2}$ × 08 $\frac{1}{2}$ の土坑がある。

遺物は床面から多く出土した。第 206 図 2712 ~ 2728 である。2712 ~ 2722 は弥生土器甕、2720 ~ 2722 は頸部に三角突帯を施す。2719 は高さ 33.7 $\frac{1}{2}$ 、口径 27.4 $\frac{1}{2}$ 、底部径 7.5 $\frac{1}{2}$ 。2723 は壺の底部、2724 ~ 2726 は甕の底部。2727 は姫島産黒曜石の石鏃、2728 は安山岩製の磨石で敲打痕がある。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半の IV 期である。

SK228 (第 683 図)

調査区 F-57 に位置する。東西 10 $\frac{1}{2}$ 、南北 07 $\frac{1}{2}$ の長方形を呈し、深さ 04.5 $\frac{1}{2}$ である。土器は細片のみで、時期の確定できるものはなかった。

SK229 (第 684 図)

調査区 G-57 に位置する。東西 12 $\frac{1}{2}$ 、南北 08 $\frac{1}{2}$ の長楕円形を呈し、深さ 06 $\frac{1}{2}$ ほどである。床の中央に浅い柱穴がある。遺物は細片のみで、時期は不明である。

5) 貯蔵穴

SK015 (第 485 図)

調査区 G-7 に位置する。北西-南東に長軸をもち、規模は長さ 16 $\frac{1}{2}$ 、幅 1.25 $\frac{1}{2}$ 、深さ 0.35 $\frac{1}{2}$ である。出土遺物は第 149 図 1915、1916 で、1915 は甕である。口縁部が短く逆 L 字に折られる。1916 は土器片加工品で、打ち欠きにより円形に整形している。出土遺物から、本土坑の時期は I 期か。

SK019 (第 489 図)

調査区 L-7 に位置する。SH019 と重複するが、竪穴建物に先行する。また、SK020 とも切り合い関係にあり、本

土坑が先行する。規模は、長辺1.8m、短辺1.35m、深さ0.15mで、床面面は平坦である。出土遺物は第151図1951～1954である。1951は壺の口縁部で、鋤先状口縁を呈する。1952は甕で口縁部外面を肥厚させ、刻みが施される。1953、1954は甕の底部。出土遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK023 (第493図)

調査区F-8に位置する。1.1×0.9mの不定形気味のもので、深さは0.45mである。出土遺物は第151図1958で、筒形の器台である。出土遺物から、本土坑の時期は弥生時代中期である。

SK025 (第495図)

調査区F-8に位置する。径1.4m、深さ0.4～0.45mの円形を呈するもので、貯蔵穴と思われる。出土遺物は第151図1963の竈である。頸部に断面八字状の突帯が付く。本土坑の時期はⅣ期か。

SK026 (第496図)

調査区G-8に位置する。径0.6～0.7m、深さ0.2mの円形を呈する。出土遺物は第151図1964、1965である。1964は小型の甕で胴部は扁球形気味である。胴部最大径部に断面三角形の突帯が一条付す。1965は平底の底部である。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK031 (第501図)

調査区K-8に位置するもので、一辺1.7～1.9m、深さ0.1mの方角を呈する。出土遺物は第152図1974の甕である。口縁部は逆L字状に折れ、頸部下に断面三角形の突帯が付く。本土坑の時期はⅣ期である。

SK042 (第512図)

調査区G-9に位置する。南北方向に長軸をもつもので、南端をSK043に切られる。規模は、長さ2.2m、幅1.1m、深さ0.45mである。出土遺物は第154図1996、1997である。1996は甕で、口縁部が緩やかに外方に折れる。1997は壺の胴部である。胴部最大径に近い位置に突帯が二条付く。遺物から、本土坑はⅤ期か。

SK045 (第515図)

調査区I-9に位置する。東西にやや長い楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.25m、深さ0.4mである。出土遺物は第154図2005で、鋤先口縁甕である。遺物から、本土坑の時期はⅢ・Ⅳ期である。

SK046 (第516図)

調査区J-9に位置する。平面形が方形を呈する貯蔵穴と思われる。その規模は、東西1.6m、南北1.3～1.6m、深さ0.2mで、床面は平坦である。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK051 (第521図)

調査区L-9・10に位置する。残存状態が良好な貯蔵穴で、平面形は不整形を呈する。規模は、径1.8～1.9m、深さ1.0～1.2m、底径1.9～2.0mである。また、断面についてはフラスコ状を呈する箇所が一部に残存している。出土遺物は第156～158図2021～2062である。2021～2026は壺である。2021は内傾する頸部から口縁部が大きく外反し長く伸びる。内外面にはヘラ磨きが施される。2024も同様な器形だが、2021に比べ口縁部が長く伸びない。2025は口縁部が逆L字状に折れる。2022は肩部が大きく張り、頸部が直立気味に伸びる。肩部に貝殻腹縁に文様が施される。2023、2026は両者とも底部は厚底を呈し、2023の底部は外方に張る。2027～2061は甕である。このうち2027～2036は、直線的な体部から口縁が短く外反あるいは外方に折れるものである。2034、2036は比較的緩やかに外反するが、他は短く強く折れる。中には、逆L字状に近いものもある。2037～2044は、口縁部外面に粘土紐を貼り付ける一群で、刻みをもつもの(2037、2038、2043、2044)ともたないもの(2039～2042)がある。2045は亀の甲式である。2046～2052は下城式甕である。2046～2048、2051、2052は口縁部がやや内湾気味で、口縁下に刻目突帯が一条付く。2049、2050は

緩やかに外反する口縁部で、口縁下に一条の刻目突帯が付される。また、2052は胴下半を意識的に欠いている。2053～2057、2059～2061は底部である。2056、2060が厚底気味で、他は比較的薄い形態である。2058は器台の底部と思われる。2062は敲石である。上面中央部や縁辺部に敲打痕がある。遺物から、本土坑の時期はⅠ期である。

SK053 (第523図)

調査区G-10に位置する。残存状態が比較的良好な貯蔵穴である。規模は、上面で南北1.6m、東西1.2m、深さ0.9m、そして底面で南北1.7m、1.25mである。底面は平坦で、断面はフラスコ状を呈する。また、南東隅には径0.3m、厚さ0.1mの礫を3個積み上げている。両者とも床面からは0.1～0.2m浮いている。出土遺物は第158・159図2066～2073である。2066～2068は壺である。2066は平底を呈し、胴部中位よりもやや上部に最大径がある。太目の頸部が直立し、口縁部が緩やかに外反する。2067は口縁部で、鋤先状を呈する。2068は突帯が一条付され、その下に沈線文が施される。2069～2072は甕である。2069は口縁部が短く緩やかに外反し、端部に刻みが施される。2071は頸部下に二条の沈線がみられる。2070、2072は口縁部外側に粘上耕を貼り付け、逆し字状の口縁形態とする。2073は短島産黒曜石製の石徹である。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK054 (第524図)

調査区G-10に位置する。規模は、径1.2～1.3m、深さ0.35mである。出土遺物は第159図2074～2079である。2074～2076は壺である。2074は直立気味の頸部から緩やかに外反し、鋤先状を呈する口縁部にいたる。2075は頸部が緩やかに外反し口縁部にいたる。2076は胴部最大径部分に突帯が一条付される。2077は甕である。2078、2079は甕である。2078は口縁部が逆し字状気味に強く折れる。口縁部は上下に肥厚する。2079は底部が薄く、上げ底を呈する。胴部は長胴で、肩部がわずかに張る。頸部下に断面三角形の突帯が一条みられる。口縁部は逆し字状を呈するが、口縁部上面は内傾する。2081は小型の鉢でコップ状を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK056 (第526図)

調査区II-10に位置し、SK055を切る。規模は、東西1.4m、南北0.95m、深さ0.3～0.35mである。出土遺物は第160・161図2083～2090である。2083～2085は壺である。2083は口縁部で、頸部が外反し口縁部にいたる。2084は胴上半部である。胴部中程が大きく張り、その部分に突帯が一条付される。2085は胴下半部である。平底を呈し、底部から斜方向に立ち上がり、大きく張った胴部中程にいたる。2086～2089は甕である。2086は口縁部が短く外方に折れ、胴部はほとんど張らず底部にいたる。2087はやや薄い平底で、頸部下に断面三角形の突帯が一条付される。口縁部は逆し字状を呈する。2088の口縁部も逆し字状気味である。2089は底部で、上げ底である。2090は磨石である。上面に磨り面が認められ、上下面中央部などに敲打痕が残る。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK057 (第527図)

調査区I-10に位置する。SH016と位置的に重複しており、堅穴建物に切られている。平面形が円形を呈する貯蔵穴で、径0.95～1.1m、深さ0.7mである。出土遺物は第161・162図2091～2098である。2091は壺である。底部平坦で、胴部中程が大きく張り、頸部に向かい窄まる。胴部最大径部分と頸部下に突帯が一条ずつ付される。口縁部は頸部から短く外方に折れる。2092～2096は甕である。2093～2096の底部形態は、厚底のもの(2095～2096)とやや薄く上げ底のもの(2093、2094)がある。口縁部はくの字状に折れるもの(2093、2097)と逆し字状気味に強く折れるもの(2092、2094～2096)がある。2098は短い棒状のものが貼り付けられている。本土坑の時期はⅡ期である。

SK059 (第529図)

調査区H-10に位置する。SH016と位置的に重複しており、堅穴建物に切られている。長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.35～0.55mである。出土遺物は第162・163図2101～2112である。2101～2104は壺である。2101は口縁部で、頸部から大きく外反する。2102、2103は断面くの字状の突帯が付く。2104は胴部中程に断面方形の突帯が二条付される。2105～2112は甕である。2105、2108は口縁部が外方にくの字状に折れる。2106、2107は逆し字状の口縁を呈する。

2109 は下城式の甕で、口縁下に刻目突帯が一条付く。2011 は脚部で、器壁が厚く、底部にむかい外反する。2010、2012 は底部である。2010 は上げ底で、比較的薄い。2012 は厚底である。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK060 (第 530 図)

調査区 I-10 に位置し、SH011 に南側を切られる。方形を呈するものと思われ、現状で南北 1.4m、東西 1.4m、深さ 0.5m である。出土遺物は第 163 図 2113、2114 で弥生土器甕である。2113 は口縁部が肥厚し逆 L 字状に折れる。2114 は口縁部が強く外方に折れ、端部が肥厚する。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK065 (第 535 図)

調査区 L-10 に位置する。円形を早する貯蔵穴で、径 16 ～ 18cm、深さ 0.15 ～ 0.3m である。床面から 0.1 ～ 0.4m 浮いて上器片がまとまって出土した。出土遺物は第 164・165 図 2126 ～ 2140 である。2126、2127、2136 は甕である。2126 は頸部が斜方向に立ち上がり、口縁部は鋤先状を呈する。2136 は斜方向に立ち上がる頸部が外反し口縁部にいたる。口縁端部は肥厚する。2127 は胴下半部で、底部は平底である。2128 ～ 2135、2137、2138 は甕である。2128、2129、2131、2132、2137 は口縁部が外方に強く折れ、頸部下に突帯を付さないものである。2137 は余形が分かる資料で、肩部はほとんど張らない。底部は平底で、厚底を呈する。底部ちかくに、円形を呈する焼成後の穿孔がみられる。2130、2133 ～ 2135 は、口縁部が外方に折れ、頸部下数分の位置に断面三角形の突帯が一条付く。2138 は胴部資料で、胴部中程から直線的に底部にいたる。底部は平底で、厚底を呈する。2139 は高坏の坏部である。やや深めの形態で、口縁部は鋤先状を呈する。2140 は砥石で、上下面及び両側面が研ぎ面として使用されている。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK069 (第 539 図)

調査区 F-11 に位置する。北西側を SH019 に、また南西側を SK070 により各々切られるため、全容は不明である。残存部から一辺 1.7m、深さ 0.9m の不整形方形を呈するものであったと思われる。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK070 (第 540 図)

調査区 F・G-11 に位置する。南東—北西に主軸をもつ不整形方形を呈するもので、SK069 を切る。また、南端には本土坑埋没後に柱穴が掘り込まれる。規模は、長さ 2.7m、幅 1.5 ～ 2.0m、深さ 0.45m である。

出土遺物は第 165 図 2151 の甕である。口縁部はくの字状に折れ、端部がやや肥厚する。頸部下数分の位置に断面三角形の突帯が一条付く。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK071 (第 541 図)

調査区 F・G-11 に位置する。SH020 と SK074 を切るが、南東隅を土坑に切られる。このほか、小土坑や柱穴と重複する。南東—北西に主軸をもつ長方形を呈するもので、長さ 2.8m、幅 1.6 ～ 1.9m、深さ 0.2m である。床面は平坦で、壁に沿い幅 0.2 ～ 0.25m、深さ 0.15 ～ 0.25m の溝が巡る。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK072 (第 542 図)

調査区 G-11 に位置する。SK074 を切り、SK073 に切られる。丸みをおびた長方形を呈し、南北に長軸をもつ。その規模は、長さ 2.3m、幅 1.8m、深さ 0.8m で、床面は平坦である。規模・形状から貯蔵穴と考えられる。遺物は少量の土器片などが出土したのみである。出土遺物は第 165 図 2152 ～ 2154 である。2152 は高坏脚部で、円柱状を呈する上部から、底部にむかい大きく開く。2153、2154 は壺底部で、厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK073 (第 542 図)

調査区 G-11 に位置する。SK072 と SK074 を切る。南西—北東に長軸をもつ不整形方形を呈し、長さ 3.1m、幅 1.5 ～ 2.2m、深さ 0.35 ～ 0.45m である。床面はほぼ平坦で、中央に 1.25 × 0.85m、深さ 0.1 ～ 0.15m の土坑がある。土坑内からは、

土器片などが出土した。出土遺物は第166図2155～2163である。このうち2155、2156は壺の口縁部で、2155は鋤先状口縁を呈する。2156は口縁部上面に鋸歯文がヘラ描きされる。2159、2160は壺の胴部上半資料である。胴部が大きく張るもので、肩部と胴部中程にかけての2ヶ所に、断面長方形の低い突帯が各々一条付く。2157、2158、2161～2163は甕である。2157、2158は口縁部で、両者とも外方に強く折れる。2158の頸部下には断面三角形の突帯が一条付く。2161～2163は底部で、いずれも厚底を呈する平底である。遺物から、本土坑の時期はIV期である。

SK074 (第542図)

調査区G-11に位置する。SK072とSK073に切られる。南西-北東に長軸をもつ不整長方形を呈するもので、現状で長さ22㎝、幅135～165㎝、深さ09㎝である。規模・形状から貯蔵穴と思われる。遺物は土器片が散発的に出土したのみである。時期を特定できる遺物がいないため、本土坑の時期は不明である。

SK075 (第543図)

調査区G-11に位置する。南西-北東に長軸をもつ長方形を呈し、長さ25㎝、幅17～18㎝、深さ01～015㎝である。出土遺物は第166図2164、2165で、弥生土器甕と磨石がある。2164は甕の底部で、厚底を呈する。2165は磨石の欠損品である。上下面に磨り面があり、上面中央部には敲打痕も残る。遺物から、本土坑の時期はIV期か。

SK076 (第544図)

調査区G-11に位置する。一辺12～15㎝、深さ01～02㎝の方形を呈するもので、床面はわずかに起伏がみられる。出土遺物は第166・167図2166～2170である。2166、2167は壺である。2166は肩部が大きく張り、頸部がやや外反しながら口縁部にいたる。肩部に断面三角形の突帯が一条付く。2167は底部から肩部にかけての資料である。底部は平底で、胴部中位よりも上部が胴部最大径となる。最大径部分と肩部に断面三角形の突帯が一条ずつ付される。2168～2170は甕である。2168は口縁部が外方にくの字状に折れ、胴部はやや膨らみをもちながら底部へ続く。2169は口縁部が逆L字状気味に強く折れ、肩部が上方に肥厚し跳ね上がり口縁を呈する。2170は底部で、厚底を呈する平底である。遺物から、本土坑の時期はIV期である。

SK077 (第545図)

調査区G・H-11に位置する。一辺14～16㎝、深さ08～105㎝の方形を呈するもので、床面は平坦である。壁がほぼ垂直に立ち上がり、黄色土(地山)ブロックが混じる土がレンズ状に堆積する。出土遺物は第167図2171～2176である。2171は小型品で鉢と思われる。器壁がやや厚く、口縁部が短く外反する。2172～2175は甕の底部である。いずれも平底で厚底を呈するが、2174は他に比べるとやや薄い底部である。2176は敲石で、上下面中央部及び側縁部に敲打痕が残る。遺物から、本土坑の時期はⅢ・IV期である。

SK080 (第548図)

調査区T-11に位置する。SH016から切られる。丸みをおびた長方形を呈し、長さ185㎝、幅12～13㎝、深さ025㎝である。規模・形状から貯蔵穴と思われる。遺物は土器片が散発的に出土したのみである。時期を特定できる遺物がいないため、本土坑の時期は不明である。

SK082 (第550図)

調査区K-11に位置する。南東-北西に長軸をもつ長方形で、長さ305㎝、幅17㎝、深さ025㎝である。床面は平坦で、壁は垂直あるいはやや斜めに立ち上がる。出土遺物は第167図2180～2182で、いずれも弥生土器甕である。2180、2181は口縁部が逆L字状気味に強く折れる。2182は口縁部がT字状を呈し、頸部下に断面三角形の突帯が付く。遺物から、本土坑の時期はIV期である。

SK085 (第553図)

調査区K-11に位置し、SK086を切る。一辺17～21㎝、深さ075㎝の不整形を呈する。床面は平坦で、壁は

斜めに立ち上がる。規模・形状から貯蔵穴と思われる。出土遺物は第167図2185～2187である。2185は壺の口縁部である。直立する胴部から口縁部にいたり、口縁部外面に粘土紐を貼り付け断面三角形に肥厚させる。2186は壺の平底を呈する底部である。2187は壺の底部と思われる、平底である。遺物から、本土坑の時期はⅡ期である。

SK086 (第554図)

調査区K-11に位置し、SK085に切られる。平面形は長方形を呈し、長さ2.9⁵/₁₆、幅1.7～1.9⁵/₁₆、深さ0.1～0.2⁵/₁₆である。出土遺物は第167図2188の磨製石斧である。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK088 (第556図)

調査区F-11・12に位置する。一辺1.2⁵/₁₆、深さ0.5⁵/₁₆の方形を呈する貯蔵穴を、0.9×0.7⁵/₁₆、深さ0.55⁵/₁₆の楕円形土坑が切っている。方形の貯蔵穴からは、床面から0.15⁵/₁₆浮いて土器片が集中する。出土遺物は第168図2189、2190で、方形の貯蔵穴から出土したものである。2189は壺の口縁部である。頸部から大きく外反し口縁部にいたる。口縁部は断面方形に仕上げられ、端面に連続刺突が施される。2190は下城式甕で、外面口縁下に刻目突帯が一条付される。遺物から、時期はⅡ期である。

SK089 (第557図)

調査区F-G-11・12に位置する。1.7×2.0⁵/₁₆、深さ0.1⁵/₁₆の長方形の土坑を、径1.3～1.5⁵/₁₆、深さ0.25⁵/₁₆の不整形土坑が切る。長方形の土坑は貯蔵穴と思われる。出土遺物は第168図2191の壺の口縁部である。直立する胴部から口縁部にいたり、口縁部外面に粘土紐を貼り付け断面三角形に肥厚させる。遺物から、土坑の時期はⅡ期である。

SK090 (第558図)

調査区G-11・12に位置する。1.6×1.85⁵/₁₆、深さ0.4⁵/₁₆の方形を呈する。出土遺物は第168図2192～2198である。2192～2194は壺の口縁部である。2192、2193は直線的な胴部から、口縁部が逆し字状気味に強く折れる。2194は下城式甕で、口縁部はわずかに内湾気味である。口縁下に刻目突帯が一条付される。2195は器台の下半部である。器壁が極めて厚く、底部に向かい大きく外反する。2196は壺の底部で、平底を呈する。2198は鉢小型の鉢である。平底を呈し、体部は底部から直線的に口縁部にいたる。2197は扁平打製石斧の欠損品である。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK091 (第559図)

調査区H-11・12に位置し、SH022に切られる。本土坑も2基の土坑が重複しており、一辺1.5⁵/₁₆、深さ0.2⁵/₁₆の不整形土坑を、一辺1.6～1.75⁵/₁₆、深さ0.7⁵/₁₆の方形土坑が切る。両者とも貯蔵穴であろう。

出土遺物は第168図2199であるが、どちらの土坑に帰属するか不明である。壺の底部と思われる、平底を呈する。遺物から、土坑に時期はⅣ期か。

SK092 (第560図)

調査区G-12に位置する。一辺1.0～1.4⁵/₁₆、深さ0.6⁵/₁₆の方形を呈する。出土遺物は第168図2200、2201で、弥生土器蓋と扁平片刃石斧がある。2200は蓋である。頸部が緩やかに外反し口縁部にいたる。2201は扁平片刃石斧の完形品である。基部が刃部と平行しない。遺物から、本土坑の時期は弥生時代中期か。

SK093 (第561図)

調査区F-12に位置する。南北方向に長軸をもつ長方形を呈するもので、長さ2.4⁵/₁₆、幅1.5～1.65⁵/₁₆、深さ0.2⁵/₁₆である。貯蔵穴と思われるが、遺物は土器片などが散発的に出土したのみである。時期を特定できる遺物がないため、本土坑の時期は不明である。

SK095 (第563図)

調査区I-12に位置する。SH027に切られ、第94号土坑を切る。南北方向に長い長方形を呈するものであるが、他遺構に切られているため全容は不明である。現状で、南北24㎝、東西185㎝、深さ0.15㎝で、貯蔵穴と思われる。土坑からは少量の土器片が散発的に出土したのみである。出土遺物は第168図2206、2207である。2206は長頸壺と思われ、直立する頸部が口縁部にいたる。外面に断面八字形の突帯が付される。2207は甕である。口縁部は外方に強く折れ、頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。遺物から、本土坑の時期はⅢ期である。

SK103 (第571図)

調査区I-J-15に位置する。東西に長い長方形を呈し、長さ20㎝、幅13㎝、深さ0.8㎝である。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。出土遺物は第169図2215～2218である。2215は甕の胴部で、断面三角形の突帯が三条付される。2216は甕の口縁部で、外方に強く折れる。頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。2217、2218は甕の底部で、両者とも平底で厚底を呈する。遺物から、本土坑の時期はⅣ期である。

SK111 (第579図)

調査区F-16に位置する。東西11㎝、南北16㎝の長方形を呈し、深さ0.3㎝である。南端床面から柱穴1本を検出した。その深さは0.4㎝である。貯蔵穴と考える。遺物は北側床面から多く出土した。

遺物は第170図2237～2240である。2237～2239は弥生土器甕で、その口縁は長く伸び、胴は丸い。2240は甕で胴はあまり張らない。出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK116 (第584図)

調査区F-16に位置する。東西17㎝、南北16㎝の不整形を呈し、深さ0.15㎝の貯蔵穴である。南側で柱穴を1本検出した。

遺物は床面全体から多く出土した。第170図2241～2249及び第171図2250である。2241～2245は弥生土器甕で、鋤先状を呈す。2246～2248は甕、2249は高坏である。2250は結晶片岩製の石斧である。

これらの出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK117 (第585図)

調査区F-G-16に位置する。東西19㎝、南北23㎝の不整形を呈し、深さ0.4㎝の貯蔵穴である。床面から2本の柱穴を検出した。

遺物の多くは、娶穴廃絶後、埋土が堆積する過程で入ったものである。第171図2251～2262及び第172図2263～2272に図示した。第171図2251～第172図2266までは弥生土器甕で、2251～2263は胴が張らない、口径(復元口径)は22.7%～27.4%である。2266は口縁下部に三角突帯を廻す、復元口径48.4%。2267と2268は高坏の脚部で内面に紋り痕がある。2269～2271は上底気味の甕の底部である。2272は安山岩製の磨石で敲打痕も残っている。

出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期である。

SK122 (第590図)

調査区G-16に位置する貯蔵穴で、その規模は東西18㎝、南北17㎝の円形を呈し、深さ0.9㎝である。堆積状況は第590図に示すように自然堆積である。遺物は主に床面直上から出土している。

遺物は第174図2290～2298である。2290～2292は弥生土器甕である。2290は短く外反する口縁下部に刻目突帯を巡らす。2293と2294は蓋、2295～2297は厚手の底部である。2298は安山岩製の白石である。これら出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期後半のⅣ期に属す。

SK129 (第593図)

調査区H-17に位置する貯蔵穴で、その規模は東西20㎝、南北26㎝の楕円形を呈し、深さ0.45㎝である。堆積状況は第593図に示すように自然堆積であり、中間層から遺物が多く出土している。

遺物は第175図2305～2315である。2305は弥生土器壺、2306は身の深い高坏、2307～2315は甕である。2308は口縁下に三角突帯が付く、底部はいずれも厚手、上底である。これら出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK130 (第594図)

調査区H-17に位置する貯蔵穴である。東西2.0m、南北2.4mの楕円形を呈し、深さ0.6m。堆積状況は第594図に示すように自然堆積であり、遺物は床面直上から出土している。

遺物は第175図2316～2324である。2316と2317は弥生土器壺で、そのうち2316は口縁端部が若干下がる。2318～2324は甕、2321と2322は口縁下に三角突帯をつける。これらの出土遺物から、この土坑の時期は弥生時代中期前半のⅢ期である。

SK150 (第613図)

調査区西端のF-19に位置する貯蔵穴である。西半が調査区外に伸びる。SK149を切って掘られている。東西1.1m以上、南北2.2mの方形を呈し、深さ0.2mである。遺物は埋土中層から主に出土している。

遺物は第182図2413、2414である。いずれも弥生土器壺で、2413は口縁部がやや開き、2414は直立気味である。出土遺物及びSK149との前後関係から、この土坑の時期は弥生時代中期初頭のⅡ期である。

6) 溝

SD003 (第692図)

調査区D-E-27・28に位置する。略南北方向から西方に緩やかに直角に折れ終息する。溝の方向はN-15°-Eで、調査区内で確認できた溝の長さはおおよそ23mであった。最大幅1.1m、深さ0.5mで、断面形は溝底が平坦で、ほぼ箱堀に近い形状になる。

遺物は第209図2762～2772である。2762～2764は弥生土器甕の口縁で、2764は三角突帯を貼る。2765～2767は弥生土器高坏、2768～2771は弥生土器の底部で、2770は甕、それ以外は甕の底部である。2772は打製石斧である。

これらの出土遺物から、この溝の時期は弥生時代後期中葉～後葉のⅥ期である。

SD005 (第693図)

調査区I-44に位置し、SH134と近現代の円形攪乱に切られている。略東西南方から直角に北方に折れ、調査区外に続く。溝の方向はN-20°-Wで、東西南方3.0m、南北方向2.6m確認できた。最大幅0.6m、深さ0.2mである。方形に廻る溝状遺構の可能性もある。

遺物は第209図2776の弥生土器鉢である。復元口径14.0cm、高さ2.6cm。出土遺物及びSH134との前後関係から、この溝状遺構の時期は古墳時代初頭のⅣ期である。

SD019・SD021 (第704図)

調査区C-D-58～61に位置する溝である。15m直線的に南下し、そこで西方向に直角に折れ、30mほど進んだ後、調査区外へ延びる。最大幅1.1m、深さ0.3m、溝の方向はN-10°-Eである。

遺物は第219図2923～2925である。2923は弥生土器壺の胴部、2924は敲石、2925は口縁部下に三角突帯を貼る弥生土器甕である。

これらの出土遺物から、この溝の時期は弥生時代前期である。

7) 墓

ST001 (第762図)

調査区H-13に位置する小児甕棺である。周辺に同様な甕棺はなく、単独で存在する。また、甕棺を区画するような施設もない。甕棺は南北方向に主軸をもつ長径0.9m、短径0.6mの楕円形を呈する掘り方に、甕の口縁部を南に向

けほぼ水平に置かれている。掘り方の底面は、中央部がわずかに窪む。棺は短棺で、土圧により潰れている。壺棺内の土は持ち帰り筋にかけたが、遺物等は全く出土しなかった。

壺棺に使用された土器(第221図2956)は、高さ約30㎝で、口縁部が強く外方に折れる。口縁部は上方に積み上げられる。頸部直下に断面三角形の突帯が一条付く。体部はあまり張らず、体部上半部に最大径をもつ。底部は厚底を呈する。

壺の形態から、本壺棺の時期はⅣ期である。

ST002 (第763図)

調査区F-21で出土した壺棺である。下棺である壺を地面に対して約40度傾けて寝せ、その上に倒置した壺を被せている。墓壇の大きさは長軸1.05m、短軸0.55mの楕円形を呈している。大きさからいって、小児用のものと考えられる。

棺として用いた壺(第221図2957)である。2957は単口縁の壺で、頸部に一条、胴部に二条の断面三角突帯を廻らせる。胴部最大径は中位より若干上部で、底部はやや凸レンズ状に突出する。これらの要素から、この壺棺の時期は弥生時代中期末から後期初頭(Ⅳ～Ⅴ期)に位置づけられる。

ST003 (第764図)

調査区E-21で出土した壺棺である。単棺で、長軸0.65m、短軸0.5mの楕円形の墓壇に地面に平行に横たえて納められている。口縁部には縁を塗っていた。

棺として用いた壺(第222図2958)は、口縁部が緩やかに屈曲しながら開き、胴部は球形で、底部はわずかに平底気味の丸底である。内面はヘラ削りを施す。この壺の時期は古墳時代前期から中期と考えられる。この種の壺を使った壺棺は県内での出土例は少ない。

ST004 (第766図)

調査区E-19に位置する。表土を除去すると蓋石が確認された。石は4枚で構成され、西側より鉛重ねで蓋がされていた。蓋石と墓壇の間は丁寧に白色粘土が敷かれていた。墓壇は長軸1.2m、短軸0.4mの長方形を呈し、深さ0.3mである。墓壇の西側床面で赤色顔料を検出している。土坑の形状と考えあわせて、頭位方向は西である。

遺物第222図2960、2961で、いずれも弥生土器である。2960は口縁、2961は肩に三角突帯を貼る。石蓋土壺墓の時期は弥生時代後期以後と考える。

ST005 (第767図)

ST004の南側で並ぶように確認されたのがST005である。蓋石は2枚で構成され、ST004同様西側より鉛重ねで蓋がされていた。また、白色粘土も蓋石と墓壇の間は丁寧に敷かれていた。墓壇は長軸1.1m、短軸0.3mの長方形を呈し、深さ0.3mである。墓壇の西側床面で赤色顔料を検出している。土坑の形状と考えあわせて、頭位方向は西である。

遺物第222図2962、2963である。いずれも弥生土器で、2962は口縁、2963は上底の底部である。石蓋土壺墓の時期はST004と同様弥生時代後期以降と考える。

ST006 (第765図)

調査区I-42に位置する土壺墓である。墓壇は2段階で、1段目は上面で長軸2.1m、短軸1.3m、深さ0.1mの長方形をなす。2段目は長軸1.8m、短軸0.65mの長方形を呈し、床面までの深さは0.2mである。墓壇の西側床面で赤色顔料を検出している。

遺物は細片しか出土しておらず、図示していないが弥生時代のものである。

ST007 (第768図)

調査区B/C-50で出土した石棺である。2段階の墓壇で、1段目は長軸2.1m、短軸1.1mから1.5mのやや台形状を呈する掘り形で、現地正面から0.15mほど掘り下げたところ石蓋が6枚鉛重ねで出土した。石蓋は安山岩製で、北側に行くほど、つまり最初に置いた石ほど大きく、最後に一番小さな石を被せている。石蓋を除去すると、赤彩の

ある備石が現れた。内部は土砂で埋まっていたが、掘り下げたところ、底面には2枚の板石が敷かれていた。側面も底面も一面赤彩（ハンガラ）されていた。目張りに、白色の粘土を使っていた。備石は、東側は3枚、西側は4枚の安山岩板石を重ねて並べている。鍔重ねが東西で同じようにされているので、一方が極端に広くなることはない。備石の掘り形も、南北ともほぼ同じである。そのため、頭位を決めたいが、幾分広い北側が頭位と考えておきたい。

出土遺物は、床からやや浮いた状態で2つに折れて鍔が出土している(第222図 2964)。刃部は見つからなかったが、残存長は復元で18.5cmで、刃部まで入れると20cmほどとなるだろう。鍔は確認出来ない。

時期を決める土器は出土していないが、蓋石や備石が鍔重ねであることから弥生時代終末から古墳時代初頭を想定しておきたい。

B) その他の遺構

不定形な形状の遺構、形状は不明であるが遺物が集中的に出土する部分をその他遺構として報告する。

SX001

SX001は小範囲から多量の土器が出土した土器溜り状の遺構である。2967・2968は口縁部が未発達な備先口縁壺で、2969～2974は口縁部が如意状口縁壺、2975はし字状、2976・2977は未発達なT字状口縁壺で須玖I式土器である。2978は口縁部下に刻目突起が廻る東九州の在土土器（下城式土器）である。2979は脚部である。2980は紅緑を加工した打製石器で、瀬戸内系の石包丁の可能性もある。2981は刃部を欠く磨製石斧であるが、重量から伐採斧と考える。弥生時代中期前半の土器組成である。

SX002

SX002から出土した2982は朝顔形に開く須玖式土器の壺である。

SX003

SX003から出土した2983は白磁碗である。

SX004

SX004からは土器や石器がまとめて出土している。2984は上部が3分の1扶れる器台である。2985は平底の痕跡が残る壺である。2986は丹塗り研磨された平底の小壺で、2987も平底である。2988は高坏の口縁部で、2889は壺の肩部、2990は脚付の鉢である。2991～3001は底部であるが、2991は壺である以外は甕である。3002は石包丁、3003～3005は敲石で、使用面は両端部にあるが、3003と3005は両面にも使用痕がある。

時期は弥生時代中期後半から後期前半の土器が混在している。

SX005

SX005から出土した3006は、高台付きの上師器塚である。

SX006

SX006から出土した3007・3008・3010は甕で、後者は跳ね上り口縁である。3009は壺の底部で中期に属する。3011は扁平打製石斧がこの時期に伴うと言える。

SX007

SX007から出土した3012は弥生土器甕の底部で、レンズ底になる。弥生時代後期中葉である。

SX008

SX008からは3016～3018の器台が出土したのが目立つ。3013は複合口縁壺、3014は甕、3015は脚で弥生時代後期中葉と考える。3019は甕の底部であるが、中期の混入であろう。

9) 小結

弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての堅穴建物跡や土坑を中心とした遺構は、幅約50%、東西約600%の調査区の東端から西端まで、密度の濃淡はあるものの全面的に分布する。すなわちこの調査区は、標高約45%の台地上で数100年間にわたり継続的に営まれた集落に対し、巨大なトレンチを入れたともと言える。そこで、この調査区を手掛かりに、諫山遺跡の巨大集落の展開を考える。

諫山遺跡での弥生時代の最初の集落は遺構・遺物の分布から、前期末の貯蔵穴や遺物が集中的に出土する台地の東側と考える。水田稲作を開始する弥生人の初期水田²¹⁾は、小河川沿いの低湿地で営まれることが、北部九州の唐津市菜畑遺跡や福岡市板付遺跡で明らかにされている。この場所からは台地東側を流れる大丸川へと緩い斜面が続いており、台地西側が崖状の急傾斜地となっている地形とは対照的である。諫山台地に弥生時代前期末に最初に住んだ弥生人は、この東側の小河川沿いや、台地周辺の低湿地で水田稲作を開始することを選択したと考える。

その後、弥生時代前期末から中期前半にかけての円形堅穴建物や同時期の遺物が出土する土坑は台地中央部近くまで検出されている。このことは、人口増に伴う集落の内側へと拡大と理解できる。その背景には、大丸川沿いを中心とした台地東側の水田開発が順調に進行し、稲作の生産性も向上したことがうかがわれる。遺跡から出土する収穫具である多量の石包丁や伐採用の石斧はこうしたことを裏付ける。

ところが中期後半になると、調査区内では、円形堅穴建物跡が台地の西側でも検出されるようになる。このように拡大する弥生集落は、この時期から台地の東と西に別れ、中央部は約150%にわたり堅穴建物跡は全く検出できない遺構の希薄な地帯が生じている。この現象は、後期にも継承され、台地上から集落が消える古墳時代初頭まで継続する。

この背景には、台地東側の水田開発だけでなく、台地西側でも行うようになったと考える。この場所は、一般河川の山国川が形成した比高差約15%の川沿いの自然堤防と諫山遺跡ある台地の間に、後背地が展開しており、水田地帯となっている。現在は園場整備事業で旧地形は失われているが、それ以前の地図には微高地とそれを取り囲む低地で織り成す地形が広がっている。

こうした中で、山国川沿いの自然堤防上の佐知遺跡は、諫山遺跡と同様、弥生時代前期末から始まり古墳時代後期まで続く集落跡で、この地でも水田開発が継続的に行われていたことを示す。諫山遺跡の人々も弥生時代中期後半以降この地での水田開発も始めたものと推測する。

ところで、豊前南部地域では宇佐市橘尻遺跡²²⁾や野口遺跡²³⁾などのように、弥生時代中期以降から集落外に墓地が形成されるようになることが明らかになっている。諫山遺跡でも甕棺・石蓋土坑・石棺が確認されているが、すべて弥生時代後期と考えられ、墓域を形成することもなく、しかも小児用である。

そうした中、諫山遺跡周辺でも南西方の臼木上ノ原遺跡では11基、東方丘陵の岡崎遺跡では21基の石棺・石蓋土坑が調査されている。²⁴⁾諫山遺跡の近接地でも現在農場の集荷場の西側、台地の西縁端部あたりで、成人を埋葬した墓地の存在が予想される調査成果が得られている。²⁵⁾

こうして、弥生時代前期末に台地東側の大丸川沿いでの水田経営を生産基盤として始まった諫山遺跡の集落は、順調に拡大を重ね、弥生時代中期後半には集落が分化し、墓地も形成される。そして弥生時代後期には台地の両側を生産基盤とする景観を持つ巨大な弥生集落が出現する。

しかし、北部九州で見ることができる弥生集落に伴う環溝は検出されなかった。それに対し、山国川左岸の福岡県沖積地では環溝集落の存在が明らかにされている。²⁶⁾山国川を挟んだ二つの地域の集落景観の差は、その後、古墳時代前期に前方後円墳(金床塚古墳)を出現させる左岸地域(福岡県側)とそうでない右岸地域(大分県側)の差異につながるものかもしれない。(坂本嘉弘)

註

- 1 山崎純男 1987「北部九州における初期水田」『九州文化史研究所紀要』32九州大学九州文化史研究施設
- 2 宇佐市教育委員会 1986「肥前川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」宇佐市文化財調査報告書第2集
- 3 宇佐市教育委員会 1987「肥前川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ」宇佐市文化財調査報告書第3集
- 4 三光村教育委員会 2001「三光村の遺跡」三光村文化財調査報告書(第3集)
- 5 三光村教育委員会 1991「三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ」
- 6 三光村教育委員会 1992「三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ」
- 7 行橋市史編纂委員会 2004「行橋市史」

第3節 古墳時代後期

1) 概要

弥生時代の後期に最大規模をはこる諫山遺跡は、古墳時代になっても継続して集落が営まれており、今回の調査で古墳時代初期の竪穴建物跡21基、古墳時代後半の竪穴建物跡4基、土坑2基等を検出した。ただ、弥生時代には調査区の東半にあった遺跡の中心地が、弥生時代終末から古墳時代初期にかけて台地の西側に広がり、古墳時代後期には、山国川の河岸段丘上に展開していたと思われる水田を見渡せる台地西側が集落の中心となっている。

集落を構成する竪穴建物は、古墳時代初期においては、弥生時代同様の規模に差異が認められ、30mを超えてベッドを付設するものとその半分程度のものである。しかしながら、古墳時代後期の竪穴建物においては、いずれも15m程度のもので、格別な規模の違いを窺うことはできない。

2) 竪穴建物

SH149 (第431図)

調査区C-53.54に位置する。SH148を切っている。東西3.8m、南北4.1mの長方形を呈し、残存する深さは0.1mである。主柱穴は不明である。北西部の床面には焼土が堆積し、さらに被熱で硬化したブロック状の粘土もあることから、竈の破壊された痕跡と思われる。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明であるが、竈が敷設されていたとすれば、古墳時代後期以降と考えられる。

SH161 (第441図)

調査区B-55に位置する。東西4.5m、南北4.6mのほぼ正方形を呈し、残存する深さは0.3mである。主柱穴は4本で、西側の壁際中央に竈がある。また、主柱穴で囲まれた範囲は、僅かに床面が登んでいる。西側の北半分を除く壁際には、幅0.2mで深さ0.1mの壁溝が通る。

竈は破壊されているが、中央部が直径0.3mほど焼けており、上部に焼土や炭、白色粘土が堆積した状態であった。

また、竪穴の堆積状況は第441図に示すように、自然堆積状態である。

出土遺物は第141図1814の安山岩製磨り石のみである。

時期のわかる出土遺物が無いため、この竪穴建物の時期は不明であるが、古墳時代後期以降である。

SH184 (第460図)

調査区F-61に位置する。北側を一部SD022に切られている。東西方向は3.2mで、残存する深さは残りの良い南側で0.3mである。柱穴は複数確認したが、主柱穴と判断できる柱穴はなかった。床面は西側が幅0.3mほど一段高くなっているが、あるいは建て替えの可能性がある。その内側の段に沿って竈が検出された。両側の袖が一部残り、床面は被熱で硬化していた。

遺物は第144図1852の弥生土器壺の胴部破片である。

出土遺物の時期は弥生時代中期であるが、竈を有していることから、古墳時代後期から古代にかけてのものである。

SH185 (第461図)

調査区F-59に位置するが、東側半分は削平を受けており、全体の形状・大きさは不明である。南北は4.9mで、深さは残りの良いところで0.4mである。主柱穴と思われる柱穴は1本しか確認できなかった。西側の一辺中央部には竈が敷設されている。竈は袖が僅かに残存しているだけで、底面が直径0.8mにわたって浅く窪み、焼土が滞積していた。

遺物は第144図1853～1857である。1853は須恵器坏蓋で口縁部が小さく折れる。1854は土師器の碗で、底部は丸底、1855と1856は土師器の壺、1857は須恵器の壺または壺の胴部破片である。

出土物から、この竪穴建物の時期は古墳時代後期である。

3) 土坑

SK062 (第 532 図)

調査区 K-10 に位置する。不定形を呈するが、小土坑や柱穴が重複していると思われる。規模は南北 0.9m、東西 0.4～0.5m、深さ 0.1～0.35m である。出土遺物は第 164 図 2122 の須恵器甕で、生焼け状態である。胴部は概ね球形を呈し丸底である。胴部に横走の沈線が二条みられる。本土坑の時期は古墳時代後期である。

SK148 (第 611 図)

調査区 F-19 に位置する。東西 2.5m、南北 1.9m の隅丸方形を呈し、深さ 0.4m である。床面から浅い柱穴が数個検出した。遺物は第 178 図 2376、2377 である。2376 は弥生土器甕の蓋。2377 は須恵器甕の体部である。出土遺物から、この土坑は古墳時代後期のものと考えられる。

4) 小結

古墳時代、この台地上では諫山遺跡のほか、南西に白木遺跡、北に原口遺跡や上ノ原遺跡があり、台地下の山国川の後背微高地には佐知遺跡、佐知久保畑遺跡等の集落遺跡が展開していた。諫山遺跡近辺で古墳時代を象徴する古墳は確認されていないが、台地斜面地には上ノ原横穴墓群、助助野地遺跡等の墳墓群が築かれている。

このようななかで、弥生時代から継続して営まれる諫山遺跡の集落は、古墳時代初頭でいったん途切れ、須恵器出現期には姿が見えなくなる。次にこの場所が利用されるのは台地西端部近くにカマドを付設した竪穴建物を築く古墳時代後半の 6 世紀である。このことは、山国川の後背地に展開する小規模の佐知遺跡が弥生時代前期以降古墳時代後期まで降絶えることなく継続的に集落が営まれているのとは対照的である。台地東側にある大丸川沿いの小規模水田よりも台地西側の山国川沿いの水田耕作を生産活動の中心においた結果、他集落との関係のなかで集落が縮小したものと捉えることができるのではないか。そのことは後期になって、台地西端に集落が復活することからも窺える。

この時代の遺物は、弥生時代に比べて少なく、土器以外の石包丁や鉄鎌等水田耕作に関する遺物、製鉄に関連する遺物や遺構、土鍾や製塩土器等漁労に関する遺物等同時代の周辺遺跡で確認されているものはほとんど出土していない。そのため、当時の人々の生産活動を明らかにすることができなかったが、今後の周辺部の調査に期待したい。

第 4 節 古代

1) 概要

本地域は古代の下毛郡にあたる。郡内には、山国、大家、麻牛、野仲、諫山、穴石、小楠の 7 郷があった。このうち諫山郷は、現在の中津市三光の大部分を占めるとされる。本遺跡の所在する大字諫山がその中心的な遺称地で、郷の中心的な地区であった可能性が考えられた。そのため、郷の中核に係る重要遺構の存在も想定しながら調査を進めた。包含層掘り下げの段階では、古代に比定される遺物は少量であった。しかし、越州窯青磁碗や緑釉陶片片が出土したため、当初予想された重要遺構の検出が期待された。包含層掘り下げ後に遺構検出を行い、竪穴建物跡、土坑、溝などを確認することができたが、予想に反し、遺構は極めて数発的でその数も少なかった。加えて、遺構分布も台地の中央部以東が中心で、台地全体に広く展開する状況ではないことが判明した。

2) 竪穴建物

SH015 (第 317 図)

調査区 L-9 に位置する。方形を呈すると思われるが、南側の大半が調査区外に及ぶため全容は不明である。調査区内で確認することのできた一辺は 4.3m である。深さは、削平が著しいため 0.05m である。西側の壁際には、0.4 × 0.8m の焼上があり、焼上下には皿上の土坑もある。また、焼上周囲約 1m の範囲の床面には白色粘土が薄く部分的に付着していた。以上から、焼土周辺にカマドが構築されていたものと推測される。

遺物は第 28 図 132～136 で、いずれも須恵器坏である。132 は古墳時代の坏身の口縁部である。小破片のため、口径等は不明である。133～136 も須恵器坏である。133 は高台が付かない浅いもの。136 はハの字状に張った断面長方形の高台が付く。体部は腰部がやや張り、内湾気味に口縁部にいる。

出土遺物から、本竪穴建物の時期は 7 世紀末である。

SH176 (第453図)

調査区B、C-57に位置する。SH174に切られている。一部途切れながら隅丸方形に廻る浅い溝(東西4.5%、南北3.9%)と、それに相似形で東西3.1%、南北2.5%の隅丸長方形に掘り込まれた約0.5%掘り込まれた部分からなる。掘込みは二段になる。周囲を廻る浅い溝と内部の掘込みとの間は、周堤のように見える。

遺物は内部の掘込み部の上面壁際に出土している。

遺物は第142図1828と1829である。1828は壺、1829は甗の把手である。

出土遺物から、この竪穴建物の時期は古代である。

3) 土坑

SKO12 (第482図)

調査区J-7に位置するもので、本土坑の南東約2%にはSKO11がある。平面形は三角形を呈し、南北1.4%、東西1.5%、深さ0.3～0.35%の規模を有する。出土遺物は第147図1893～1902で、1893は須恵器坏である。体部が口縁部に向かいわずかに外反気味である。1894～1897は土師器坏である。体部下半がわずかに張り気味で、そのままあるいはやや外反しながら口縁部に向け斜方向にのびる。1897の内面にはヘラ磨きが施される。また、底部切り離しの状況が分かる1896、1897についてはヘラ切り離しである。1898は高台付きの坏である。1901は土師器耳皿で、高台付き皿の二方を折ったものである。1899は甗である。口縁部は外方にくの字状に折れ、体部は直線的に底部へ向かう。1900は土鏝である。1902は扁平片刃石斧である。出土遺物から、本土坑の時期は9世紀初めである。

SKO38 (第508図)

調査区L-8に位置する。現状で、南北0.9%、東西1.6%、深さ0.2%である。出土遺物は第153図1988、1989である。1988は須恵器甗で同心円の充て具根が残る。1989は土師器の高台部である。比較的高い高台が付く。遺物から、本土坑の時期は、8～9世紀である。

SKO47 (第517図)

調査区K-9に位置し、第34号土坑を切る。規模は、東西1.6～1.75%、南北1.3%、深さ0.2～0.25%である。出土遺物は第154図2006～2010である。2006、2007、2009は土師器坏で底部はヘラ切りである。2008は須恵器坏である。2010は土師器甗である。口縁部は緩やかに外方に折れる。遺物から、本土坑の時期は8世紀末～9世紀初めである。

SKO64 (第534図)

K・L-10に位置する。不定形を呈するもので、長さ1.05%、幅0.9%、深さ0.05%である。出土遺物は第164図2125で、土師器高台付き椀である。高台は細身で断面長方形を呈する。やや外開き気味に付けられ、壺付部分がやや外側に張る。遺物から、本土坑の時期は9～10世紀と考えられる。

SKO79 (第547図)

調査区H-11に位置する。南北に長い楕円形を呈し、長径1.6%、短径1.1%、深さ0.2%である。出土遺物は第167図2178の須恵器甗である。本土坑の時期は古代か。

SKO81 (第549図)

調査区K-11に位置する。径0.75%、深さ0.2%の円形を呈する。出土遺物は第167図2179の土師器高台付き椀である。高台は比較的細く長いもので、外開きに付く。本土坑の時期は9世紀代か。

SKO83 (第551図)

調査区K-11に位置する。不定形を呈するもので、長さ0.75%、幅0.35～0.6%、深さ0.15～0.3%である。出土遺物は第167図2183、2184である。2183は土師器坏で、体部が底部に比べ薄く、内湾気味に口縁部にいたる。2184は高台付き椀で、比較的細く長めの高台が外開きに付く。遺物から、本土坑の時期は9世紀代か。

4) 溝

SD002 (第690・691図)

調査区D～K-25/28で、北北東から南南西に向けて延びる溝である。幅12 $\frac{1}{2}$ から18 $\frac{1}{2}$ で、深さ0.6から0.8、長さ5は検出した部分で67.5となる。ほぼ一直線に伸び、途中1箇所で大橋状に途切れる。その部分は長さ4.8になる。上層断面を見ると、最終段階で部分的に一度浅く掘り直しをしている可能性があるが、それ以前にも少なくとも1回の掘り直しが認められる。

出土遺物は、第207図2743～第209図2761である。2743～2647は周辺の弥生時代の遺構から流れ込んだもので、この溝に本来伴うものは2748～2756である。2748～2751は須恵器である。2748は竈か。2749は無蓋高坏か。2752～2756は土師器である。2752～2755は甕、2756は器種不明である。甕は内外面ともヘラ削りを施す長胴の甕で、口縁部は強く屈曲しながら開く。小破片の須恵器は6世紀後半のものと考えられるが、完全に近い長胴の土師器はやや下るものと考えられる。

これらのことから、この溝の時期は7世紀から8世紀のものとしておきたい。

SD004

調査区D～J-35～37に位置する。略南北方向に直線的に延びる。溝の方向はN-24°-Eで、長さ56.0、幅12 $\frac{1}{2}$ 、深さ0.5である。断面形は溝底がほぼ平坦である。途中、橋状に6 $\frac{1}{2}$ ほど溝が途切れる箇所がある。

遺物は第209図2773～2775である。2773は須恵器の坏蓋、2774はヘラ磨きがあり、底面はヘラ切りの土師器坏身である。その復元口径14.0 $\frac{1}{2}$ 、高さ2.6 $\frac{1}{2}$ 。2775は赧石である。坏蓋は返りがあり、7世紀代のものであるが、土師器の坏はやや新しく、この溝の時期は8世紀代と考える。

SD018 (第702図)

調査区B～F-55～58に位置する。調査区を南北に貫く形で、70 $\frac{1}{2}$ にわたって検出された溝である。最大幅22 $\frac{1}{2}$ 、深さ0.9 $\frac{1}{2}$ で、断面形は溝底が平坦で、ほぼ箱型に近い形状になる。溝の方向はN-20°-Eである。

遺物は第218図2916～2922である。2916～2918は須恵器坏蓋で、2919は須恵器の低脚の高坏で、2920-2921は須恵器甕。2922は安山岩の石台である。これらの出土遺物から、この溝の時期は8世紀後半である。

5) 小結

8、9世紀を中心とする、古代の溝を除く遺構・遺物は、主に台地の中央から東側において確認することができた。さらに細かくみれば、調査区の南側に集中する傾向にある。よって、この時期の中心は、本調査区東半部の南側調査区外にあると考えられる。しかし、台地を南北方向に直線的に延びる溝、SD002、SD004、SD018が概ねかな出土遺物ではあるが、古代に位置づけられることができれば、やや状況が変わってくるが、このことについては、今後の周辺部の調査を待ちたいと思う。

古代の諫山郡は、旧三光村の大部分の地域を占めるが、諫山の地名を残す大字諫山の本地域がその中心地域であったことが考えられる。今回の調査で、少数ではあるが越州窯青磁や緑釉陶器が出土していることから、郡の中核に係る上層の遺地であった可能性が高い。諫山遺跡のある台地上を北に約25 $\frac{1}{2}$ 行くと、下毛郡衛の正倉であったとされる長者屋敷官衙遺跡がある。大字諫山の地区は、郡の中核施設が所在する地区から、山国川上流域へ向かうルート上に位置しており、古代における要衝の地と言える。今回の調査では、その核心に迫る遺構を確認することができなかったが、今後の調査に期したい。

また、今回の調査で注目される遺構として、帯状柱穴がある(第8節1参照)。柱穴が帯状に連なるもので、調査区の東半部に幾筋かみられる。時期の決め手に欠くが、遺構の位置関係からみると、遺構・遺物が調査区の東半に集中した古代に係る可能性がある。柱穴は比較的に深いものが多く、柱穴列の幅は概ね2 $\frac{1}{2}$ ほどである。長さ約50 $\frac{1}{2}$ 以上にわたり直線的に続くものや、T字状に接続する箇所もある。何かの区画施設のようにも見えるが、区画される目立った遺構もないことからその性格は定かではない。類似する遺構として、ピット列遺構がある。これらは、大分市横尾遺跡第132次調査(大分市教委2009)、久留米市筑後国府跡(久留米市教委2008)、小都市上岩田遺跡(小都市教委2000)などでみられる。横尾遺跡や上岩田遺跡では、ピット列が3 $\frac{1}{2}$ 程の間隔をもち2列平行して並ぶ。筑後国府跡は1列のみである。これらは、いずれも古代に位置づけられている。道路の付属施設あるいは区画施設との評価がなされているが、定まっ

たものではない。本遺跡の例は他の遺跡に比べ幅があるが、全体的なあり方などを見ると類似している。その性格については、今後の課題としたい。

(後藤一重)

参考文献

『横尾遺跡2』大分市埋蔵文化財調査報告書第96集 大分市教育委員会 2009

『土岩田遺跡調査概報』小郡市文化財調査報告書第142集 小郡市教育委員会 2000

『筑後国府跡-第219次発掘調査報告書-』久留米市埋蔵文化財調査報告書第259集 久留米市教育委員会 2008

第5節 中世から近世

1) 概要

今回の調査は、陳山の台地をほぼ東西に貫くように行った。そのため、東側は眼下を流れる犬丸川流域との、そして西側は山国川の開析した平野部との関わりが大きく、さらに台地中央部には広い平坦地が広がる。そして、調査区の北側には「原口」の集落があり、調査区の一部は大宇「原口」に属している。

その調査区の中で、中世から近世の遺構が検出されたのは、調査区の西側約3分の1の部分になる。そして、検出された遺構は大部分溝である。そして、その溝の多くは屋敷地を圍繞する溝(堀)と考えられる。しかし、内部から明確な建物跡は検出出来なかった。

一方、調査区の中央付近を東南東から西北西に向けて通る道路が、20～30年前まで深さ2m近い堀状を呈していた、とされ、この「堀」の痕跡は調査区外の南側の道路部分でも幅7～9m近い堀込の痕跡が残されていた。そのため、この「堀」の構築時期、性格を探ることも調査の目的と位置づけた。しかしながら、結果的に幅7～9m近い堀込みは調査区内で確認されたものの、上部は近世、近代の掘り直しによって拡幅されていたことが明らかとなり、最下部で検出された土層の帰属時期は不明であった。そのため、この堀状のものが最初に掘られた時期や性格は不明のままであった。

2) 土坑

SK009 (第479図)

調査区I-J-4に位置し、東半は調査区外へ伸びる。東西62cm、南北30cmの隅丸方形を呈し、深さ0.2mである。床面から柱穴を3基検出した。柱穴の深さは0.2mほどである。

遺物は第145図1873～1880である。1873は土師器小皿で底部糸切り。復元口径9.8cm。1874は緑釉陶器の口縁部。1875～1880は内黒の椀形土器。口径は14.8cm～16.5cm、高さは6.0～6.5cmである。出土遺物から、この土坑の時期は11世紀代である。

SK010 (第480図)

調査区L-6に位置し、南半は調査区外へ伸びる。東西22cm、南北30cmの長方形を呈し、深さ0.2mである。床面から柱穴5本を検出している。西側に直径1.7mほどの円形の土坑があり、そこから遺物が出土している。

遺物は第146図1881～1886である。1881は土師器小皿、口径8.9cm。1882は瓦質の高台付椀で口径16.0cm、高さ5.2cm、高台径6.9cm。1883は土師器甕、1886は須恵器甕、1884は滑石性の石鍋で外側にノミ痕が残る。1885は土錘、長さ5.1cm。出土遺物から、この土坑の時期は12世紀代である。

SK011 (第481図)

調査区J-7に位置する。全体は南北1.8m、東西1.6mの不定形を呈する。土坑内には1.3×1.0m、深さ0.15mの不定形土坑があり、2基の土坑が重複している可能性が高い。出土遺物は第146図1887～1892で、1887は瓦器椀である。復元口径15.1cmで、体部内外面にヘラ磨きが施される。内面のヘラ磨きは、見込みから体部にかけて上方から見て右回りに連続的に施される。1888～1890は土師器椀の底部である。1888、1890は長方形気味の高台が外開きに付く。1889の高台は断面三角形で、他に比べるとやや短い。1891は高台付きの鉢などと思われる。1892は土鍋で口縁部はくの字状に折れる。内外面ともオサエヤナデによる調整のみである。本土坑の時期は12世紀前半である。

SK208 (第666図)

調査区 G-45 に位置する。東西 0.4m、南北 0.4m の円形を呈し、深さ 0.15m である。

遺物は第 196 図 2611 である。土師質の手づくね土器である。内面にはハスの型押し、底部には「人形製造 四日市町 四財津」の文字が刻まれる。「四日市町」は現在の宇佐市四日市のことで、近世の所産である。

SK213 (第671図)

調査区 H1-51 にまたがってある。東西 5.6m、南北 4.2m の不整形を呈す。東側に 3.0m × 2.4m、深さ 0.4m の土坑がある。

遺物は第 197 図 2616 ~ 2622 である。2616 は 15 世紀代の龍泉窯の青磁碗で、ほぼ完形である。口径 14.7cm、高さ 7.7cm、高台径 6.0cm。2617、1618 は備前焼の壺である。2619、2620 は瓦質の鍋、2620 は外面全体にススが付着している。2621 は石臼、2622 は弥生時代の葎石である。出土遺物から、この土坑の時期は 15 世紀代である。

SK220-221 (第678図)

土坑は調査区 F-53 に位置する。SK220 の規模は東西 0.6m、南北 0.8m で、平面楕円形を呈し、深さ 0.3m である。SK221 は東西 1.7m、南北 1.4m の隅丸長方形を呈し、深さ 0.2m である。

遺物は第 198 図 2627 の備前焼の大甕である。高さ 70.4cm、口径 36.5cm、底部径 29.5cm の二斗甕。出土遺物から、この土坑の時期は 15 世紀代である。

SK224・225・226 (第681図)

調査区 C-56/57 に位置する。SK224 から SK226 は、当初一番外側の大きな SK226 しか確認出来なかったため、4.1m × 4.4m の方形土坑として掘り下げを行った。土層断面の第 2 層であるが、断面を見るとさらに東側に延びていることがわかる。それを除去する頃から遺物が出土し始め、第 199 図 2628 ~ 第 205 図 2700 が出土した。調査時には、中世のものと思われた土師器小皿と近世陶磁器が一緒に出土したため、遺構の切り合い関係があると考えていたが、報告にあたり検討した結果、土師器小皿も近世の所産である可能性が高まり、一括資料として報告する。

2628 ~ 2640 と 2642 は磁器。2641 と 2643 は陶器。2644 は土師質の角火鉢。2645 ~ 2684 は素焼き土器小皿。2685 は瓦質の香炉、2686 ~ 2688 は瓦質土器、2689 ~ 2700 は素焼きの土鍾である。

以上、この土坑は陶磁器から 17 世紀末 ~ 18 世紀前半にかけて掘られたことがわかる。なお、2686 と 2687 の鉢、さらには 2688 の焙烙は宇佐市高村産と考えられる。この段階ではまだ 16 世紀の瓦質土器の名残りで焼き焼かされており、焙烙も二つの摘まみがつくタイプでは無く、フライパンのような把手がつく古いタイプである。近世高村焼の成立を考える上で貴重な資料である。さらに、この段階まで土師器小皿が存続することも押さえられた。

3) 溝

SD001 (第688・689図)

調査区の間を通る道路にはほぼ沿う形で南東から北西に向けて延びる溝である。聞き取り調査によると、20 ~ 30 年前までは堀状のものがあったのを埋めて道路にした、ということであった。実際、調査区外の南側は、現状でも道の両側は周囲の畑よりも一段低く、堀状になっている。

調査では、大きく 2 回の掘り直しを受けていることが明らかになった。現状や聞き取り調査で想定出来る幅約 10m の堀幅は最も新しい掘削であり、埋土から 20 ~ 30 年前の生活用品が捨てられた状態である (第 689 図 B-B' 土層断面図の第 1 層から第 6 層)。次の下層の溝 (同じく第 7 層から第 9 層) からは近世陶磁器が出土しているので、少なくとも現状に近い形で中世まで通ることは不可能である。しかし、最下層 (第 10 層、第 11 層) からは良好な遺物は出土しておらず、当初の掘削時期は不明とせざるを得ない。仮に、最下層の溝の片をそのまま上に延長すれば、5 ~ 6 m 程度の幅の溝が復元出来る。

SD006 (第694・695図)

調査区 D-J-45 ~ 49 に位置する屋敷の区画溝である。4.5m 直線的に北上し、そこで東に直角に折れ、2.5m 進んだ後、

南方向に直角に折れ、直線的に南下し、調査区外へ延びる。最大幅3.5㍍、深さ1.3㍍で、断面形は溝底が平坦で、ほぼ箱堀に近い形状になる。溝の方向はN-15°-Eである。

遺物は第210図2777～2793及び第211図2794～2799である。2777は染付け碗、2778は染付の蓋、2780は青磁の皿、2781は備前焼の壺の口縁、2782は18世紀後半から19世紀の陶器瓶、2783は瓦質の火消し壺、2784と2785は瓦質の播鉢、2786は瓦質の壺、2787は瓦質の深鉢、口縁と突帯の間に花のスタンプ文を施す。2788は高村焼の鉢で、突帯を貼り、列点文を施す。2789・2790は瓦質の火鉢、2791と2792は瓦質の鉢、2793は高村焼の椀鉢、2794は土人形の腕、2795は手づくね土製品の人形か。2796は土鍾、2797は泥岩の砥石、2798は鉄鎌、2799は寛永通宝である。

これらの出土遺物から、この溝は15世紀後半代に造られ、19世紀代まで存続していたものとする。

SD007 (第696図)

調査区C-49に位置する溝である。略東西方向に直線的に延びる。溝の方向はN-70°-Wで、長さ3.0㍍、幅0.75㍍、深さ0.3㍍である。

遺物は第211図2800の五輪塔の火輪である。安山岩製で35.0°角、高さ21.0㍍である。

SD008

調査区C・D-44～46に位置する溝である。略東西方向に直線的に延びる。溝の方向はN-62°-Wで、長さ19.2㍍、幅1.25㍍、深さ0.3㍍である。

遺物は第212図2801～2812である。2801と2802は肥前の染付け端反碗(1810～1860)である。2803は染付け皿、2804は染付けの仏飯具、2805は瀬戸美濃の紅皿、2806は青磁瓶の頸部、2807・2808・2810・2811は高村焼の椀鉢で、2808は胴部に刻目をもち、2810・2811は口縁内面に濃い丹塗りを施す。2811の底は蛇ノ目凹形高台。2809と2812は瓦質の角火鉢である。出土遺物から、この溝状遺構の時期は19世紀代である。

SD010

調査区E・F-47に位置する溝で、SD006に切られている。略南北方向に2筋平行して直線的に延びる。溝の方向はN-15°-Eで、長さ9.0㍍、幅0.8㍍、深さ0.35㍍と長さ10.2㍍、幅0.6㍍、深さ0.25㍍である。

遺物は第212図2813の上師質小皿で、底部糸切り後、板状圧痕が付く。出土遺物から、この溝状遺構の時期は14世紀代である。

SD013

調査区B・C-49-50に位置する溝である。略東西方向に直線的に延び、調査区外へと続く。溝の方向はN-70°-Eで、残存する長さは10.0㍍、幅2.1㍍、深さ0.6㍍である。

遺物は第212図2814～2816である。2814は青磁皿、2815は火鉢で、凹縁と突帯との間に梅花のスタンプ文を施す。2816は土鍾。出土遺物から、この溝状遺構の時期は15世紀後半代である。

SD014

調査区C・D-48-49に位置する溝である。略南北方向に直線的に延びる。南はSD011につながり、北は調査区外へと伸びている。溝の方向はN-10°-Eで、長さ10.6㍍、幅0.65㍍、深さ0.25㍍である。

遺物は第212図2817の銅製品の筭である。長さ10.3㍍、重さ5.0㍍。

SD015 (第697～699図)

調査区B～I-49～55に位置する屋敷の区画溝である。45°直線的に北上し、そこで東に直角に折れ、45°進んだ後、南方向に直角に折れ、直線的に南下し、調査区外へ延びる。最大幅3.5㍍、深さ1.3㍍で、断面形は溝底が平坦で、ほぼ箱堀に近い形状になる。溝は少なくとも1回の掘り直しが認められ、当初は屋敷西南部に張り出し部を造るよう一度東側に折れた後、北に折れ、屋敷溝の北側につながるものである。溝の方向はN-15°-Eである。

遺物は第 213～217 図である。2818～2820 は中国製の白磁碗、12 世紀初頭。2821 は青磁皿、龍泉窯か。2822～2826 は青磁碗、2822 は復元口径 15.0 ϕ 、2823 は復元口径 15.8 ϕ 。2827 は肥前唐津の碗、見込みと高台に胎土目。17 世紀初頭。2828 は肥前陶器碗、17 世紀後半から 18 世紀前半。2829・2830 は内野山焼の青磁碗、2831 は瀬戸美濃の天目碗、2832 は瀬戸美濃の碗、19 世紀後半。2833・2834 は京焼風の碗、2835～2845 は染付け碗、2835・2842 は型紙刷り、2839・2844 は肥前陶胎染付け碗、18 世紀前半。2845 は見込みに蛇ノ目刺割ぎ。2846・2847 は染付け小鉢、2848 は色絵小鉢、2849 は染付菊花皿、2850 は肥前染付皿、18 世紀。2851 は磁器の香炉、2853 は灰白色の瀬戸美濃磁器の水注、2854・2855 は陶器十瓶、2852 はその蓋。2856・2857 は陶器徳利、2857 は口縁楕円形で、底部に墨書あり。2858 は関西系の鉢、見込みに胎土目、蛇ノ目凹型高台。2859・2860 は備前焼の播鉢、2861・2862 は瓦質碗、2863～2867、2871 は瓦質の播鉢、2868～2870 及び 2872～2880 は瓦質の鍋、2881 は瓦質の提鉢。2882・2883 は瓦質の甕、2884～2889 は瓦質の火鉢で、2884・2885 は型押文様を施す。2890 は瓦質の焙烙の柄、2891 は土師質小皿、口径 9.4 ϕ 、高さ 1.4 ϕ 。2892 は瓦質の茶釜、2893～2895 は瓦質の甕、2896～2899 は瓦質の鉢で、2898 は高村焼の提鉢で、口縁内面に丹塗り、口径 42.8 ϕ 、高さ 13.5 ϕ 。2900 は土製品の人形の下部、2901 は土鍾、2902 は陶器の戸車、径 6.2 ϕ 。2903 は銅製品の弁、2904 は煙管の吸口、2905 は筒形の鉄滓、2906 は凝灰岩の瓦輪塔地輪である。

これらの出土遺物から、この溝の時期は SD006 同様、15 世紀代に造られ、19 世紀代まで存続していたものである。

SD016 (第 700 図)

調査区 G-H-54～56 に位置し、略東西方向に緩やかに曲線を描く溝である。SD015 と SD017 を切っている。溝の方向は N-8 ϕ -W で、残存する溝の長さは 16.0 ϕ 、幅 2.1 ϕ 、深さ 0.75 ϕ である。

遺物は第 218 図 2907 と 2908 である。2907 は肥前の白磁碗、2908 は関西系の播鉢である。出土遺物から、この溝状遺構の時期は 18 世紀代である。

SD017 (第 701 図)

調査区 B～H-54～59 に位置する屋敷の区画溝である。50 ϕ 直線的に南下し、そこで西に直角に折れ、32 ϕ 進んだ後、北方向に直角に折れ、直線的に北上する。最大幅 2.5 ϕ 、深さ 1.3 ϕ で、断面形は溝底が平坦で、ほぼ箱型に近い形状になる。溝の方向は N-15 ϕ -E である。

遺物は第 218 図 2909～2915 である。2909 は須恵器甕、2910 は中国産の碗、2911 は土師質の環、2912 は土師質の鉢、2913 は瓦質の碗、2914・2915 は瓦質の播鉢である。

これらの出土遺物から、この溝の時期は 15 世紀代に造られ、18 世紀代まで存続していたものとする。

SD022 (第 705・706 図)

調査区の E～J-59～63 にかけて展開する溝である。南東部は調査区外に延びるが、北東隅部を入り隅状にした長方形の区画を形成すると考えられる。溝で囲まれた部分は溝の内側で割って、南北 37 ϕ 、東西は推定で 27 ϕ 近くある。溝は、幅 2.4 ϕ から 3.2 ϕ 、深さは、深いところで 1.0 ϕ ほどで、概ね外側の立ち上がり方が急で、内側が緩やかとなる断面箱形から逆三角形を呈する。溝で囲まれた内部からは、並ぶ柱穴は検出されなかった。

出土遺物は第 219 図 2926～第 220 図 2948 である。2926～2928 は陶胎染付、2929、2931 と 2934～2937 は陶器、2930、2932、2933 は磁器である。この内、2932 は龍泉窯青磁碗の底部を打ち欠き、メンコ状にしたものである。2938～2940 は播鉢で、2940 は 16 世紀代の備前焼である。2941 と 2945 は瓦質土器火鉢、2942～2944 は土師質で、2942 は焙烙、2943 と 2944 は甕か鉢。土師質のものは宇佐市高村産である。2946 は九瓦、2947 はガラス玉、2948 は銅銭であるが鑄で特定出来ない。

出土遺物から見ると、17 世紀から 18 世紀代ものが中心となるが、一部中世に遡るものも含んでいる。後述の SD024 は、出土遺物に近世以降のものを含まず、15 世紀代に存続していたことは確かであるが、この SD024 と SD022 は溝のあり方が共存的であることから考えると、SD022 の開削時期も 15 世紀代に遡ることは十分考えられるところである。

SD023 (第 707 図)

調査区の G-59～62 に延びる溝である。2 本の溝が並行しながら略東西方向に延びる。調査区内では 25.8 ϕ 確認

されている。南側の溝は幅1.0m前後で、深いところで0.25m、北側の溝は幅0.33m前後で、数分程度の深さである。SD022に切られており、屋敷区画構築前の遺構ということになるが、出土遺物が無く時期の特定は出来ない。

SD024 (第708図)

調査区J/K-63/65に展開する溝である。調査区南西端で、溝のコーナー部分がごく一部調査されたに過ぎない。溝幅は1.8mから2.5mで、深さは0.15m程度と浅い。しかし、溝で囲まれるであろう南側の土地は、遺構検出面より1.5mほど高いので、実際は1.5m近い段差があったということである。

出土遺物は第220図2949～2955である。2955の備前焼播鉢を除くと、いずれも瓦質土器である。2955の備前焼播鉢は、乗間編年の中世5期のものであり、15世紀後半代である。瓦質土器も、火鉢の口縁部が肥厚せず、内傾あるいは内側に若干突出するなど15世紀の特徴を示す。

4) 掘立柱建物

SB007 (第469図)

調査区B-57に位置する掘立柱建物である。桁行2間、梁行4間で、3.4m×4.7mの規模である。柱穴の直径は0.2mから0.3mで、柱間は1.2mから1.6mとなる。出土遺物は弥生土器(第262図3563)であるが、柱穴規模などから中世の所産と考えられる。

SB008 (第470図)

調査区B-57に位置する掘立柱建物である。桁行2間、梁行4間で、6.6m×4.5mの規模である。柱穴の直径は0.2mから0.3mで、柱間は1.5mから2.0mとなる。出土遺物は無いが、柱穴規模などから中世の所産と考えられる。

5) 地下式土坑

SK230 (第685図)

調査区G-47/48に位置する地下式土坑である。室の規模は東西1.9m、南北2.3mの長方形を呈し、深さ0.7m以上である。現遺構面から室の底までの深さは2.2mである。土坑の西側に直径0.6m程度の入り口がある。0.9m垂直に下がったところに一旦段をつけ、そこから傾斜をつけて室に至る。土坑内の堆積状況は第685図に示すように自然堆積である。時期を確定できる遺物は出土していないが、中世以降のものか。

SK231 (第686図)

調査区F-62に位置する。SD022の西側、すなわち平野を窄む側の一辺の溝底で入口が見つかった地下式土坑である。入口部は北西側コーナー部から南へ約3.2mのところである。直径0.7mの縦坑がまっすぐ0.6m延び、そこから北側に斜め下向きに方向を変え、室に至る。室部分は平入りとなり、横方向に1.1m、奥行き1.05mのやや角を持つ卵形になる。天井までの高さは0.68mと、かなり窮屈な空間となる。時期の決め手となる遺物の出土は無いが、溝との連関性から考えても、戦国期を遡るものではない。

SK232 (第687図)

調査区I-63に位置する。SK231同様SD022の西側溝の底で入口部が検出された。入口部は南西側コーナー部から南へ約2.0mのところである。入口部は0.95m×0.8mの楕円形で、縦坑が0.7m掘られた後、一端足場の様な平場を作り、そこから斜め下に約0.5m下って室に至る。室部分は一辺約2.0mの方形で、天井までの高さは1.25mとなる。SK231に比べるとかなり大型である。床面には奥壁に沿うように河原石をまばらに敷いている。時期を示す遺物の出土は無いが、SK231同様の時期が想定される。

6) 墓

ST008 (第769図)

調査区H-36に位置する中世墓である。墓壙は長軸1.6m、短軸0.7mの長方形を呈し、深さ0.3mである。墓壙の

中央やや北西寄りの床から白磁碗が出土している。

遺物は第 222 図 2965 で、口径 16.1 ϕ 、器高 7.5 ϕ 、底部径 6.7 ϕ 。口縁部肥厚し、高台は低い。出土遺物から、墓の時期は 12 世紀後半代のものである。

ST009 (第 770 図)

調査区 G-36 に位置する中世墓である。墓壇は長軸 0.9 ϕ 、短軸 0.5 ϕ の長方形を呈し、深さ 0.15 ϕ である。墓壇の中央やや北東寄りの床から若干浮いた状態で、瓦器碗が出土している。

遺物は第 222 図 2966 である。口径 16.1 ϕ 、器高 6.0 ϕ 、底部径 6.7 ϕ 。内外面に磨き、外面に指頭圧痕が確認できる。出土遺物から、墓の時期は 13 世紀前半代のものである。

7) 小結

発掘調査の結果、基本的に明治 21 年調製の旧字図の字境に沿って溝が検出された (第 803 図)。興味深いのは、それぞれの区画溝が各々独立している事である。通常、このような区画溝が連続する遺跡では溝を共有する事例が多いが、ここでは、5 ϕ から 10 ϕ 近くの間をあけている。間に土塁などがあつたのであろうか。残念ながら、内部からは建物跡が検出出来なかつたが、溝の出土遺物や地名から考えて、それぞれが居住区 (屋敷地) であつたのは間違ひなからう。

一方、今回の調査ではこれらの外圍を囲むと思われる区画 (調査前の編み道路) は調査区域外で調査出来なかつた。この区画は東西約 140 ϕ 、南北約 180 ϕ の長方形で、西側には小字「榎屋敷」の突出部を敷設するように見える (以下、「大区画」と呼ぶ)。この大区画の中に、それぞれ独立した屋敷地を構えていた景観を復元出来る。その大区画の外圍 (南側) には小字「外圍」、「西居屋敷」などが広がる。「外圍」の「外」は、大区画の「外」を言い表しているのであろう。

ところで、この諫山地区の台地上の「屋敷」地名を見ると、大きくは二つに分けることが出来る (最も、このことは基本的にどこでも同様であるが)。一つは、「中原屋敷」といったように、具体的に居住者を示すような名前を付けるもの、もう一つは「居屋敷」地名である。そして、基本的に明治 21 年段階で「宅地」が建ち並ぶのは「居屋敷」地名の部分である。このことは、「中原屋敷」のように居住者を示すような名前の屋敷区画の場合は、そこが領主的な「イエ」と関連があつたことを窺わせる。つまり、中世から近世への移り変わりの中で、没落したり、さらに上位の領主と命運をともにしたり、あるいは武士として城下町への転居を余儀なくされたことなどにより、結局は近世以降に存続しなかつた屋敷地だつたのではなからうか。その旧領主の屋敷地は、その後基本的に他の村人は屋敷地としては用いなかつたのである。一方、「居屋敷」居住者は、ムラの構成員として「イエ」を維持すると共に、「ムラ」そのものの再生産も担っていたので、例えば「イエ」が没落しても、「ムラ」そのものは継続していく。

そのように考えられるとすると、今回の「廣屋敷」や「榎屋敷」の区画は、溝から出土する最も古い遺物 (特に古い中世前半期を除く) は 15 世紀代のもので、SD017 や SD024 のようにそれ以降の遺物を含まないものと、18 世紀の遺物まで含むものとに分けられる。SD015 は、出土遺物を見ると 15 世紀、16 世紀、17 世紀、18 世紀と明らかに繋がっており、19 世紀までは存続していない。後者は、中世からの居住者が連続的に居住していたものであろう。例えば、豊後高田市の弘田遺跡は、宇佐宮宗勲寺の東西別当が居住したが、中世からほぼ現在まで連続した屋敷区画が存続した例である。このように、何らかの要因によって、当然継続する場合もでける。

ところで、諫山遺跡は大字諫山に所在するが、その大字を名字とする一族が古代から中世にかけて活躍する。おそらく、大字諫山の範圍のどこかに諫山氏の本貫地があつたと考えて良いだろう。中世、この地は「諫山郷」と呼ばれ、内部に宇佐宮の官書料所を抱えていた。具体的には、諫山郷末弘名、実徳時元名、大石寺名がそうである。この内、末弘名の一部である「田嶋崎」は正長元年 (1428) 段階で諫山道秀が下作職を有しており、成恒弘種に貸し付け、永享 11 年 (1349) には、諫山道実が成恒助七に永代売却している。しかし、万種公事などは諫山氏に税負担がなされておらず、15 世紀中頃段階では、依然として「田嶋崎」には諫山氏の支配権が及んでいた。そして、文明 15 年 (1483) には「田嶋崎」を巡る争論で成恒氏が勝利し、「田嶋崎」での名主権は成恒氏のもとに移り、宇佐宮番役も諫山氏から成恒氏に移った。さらには、実徳時元名、大石寺名についても成恒氏が耕作権を買取って、名主の地位を築いた (三光村史)。

これらに登場する地名「田嶋崎」は、諫山地区から 500 ϕ ほど東へ行ったところにある「大字成恒」にあり、田嶋

崎城という中世城郭があることで知られる。そこを拠点として成恒氏は支配を広げていったのであろう。実徳時元名、大石寺名については、大永3年(1523)の坪付注文の中にてでる「久保畑」、「小原垣」という地名が、大字諫山内の「久保畑」と「小春垣」という小字に比定でき、散在的に所在していたことがわかる(第17図)。

つまり、今回調査の対象となった地区である大字諫山の東部は、諫山氏が成恒氏に徐々に侵食されていったことがわかる。一部は諫山の台地上にも及んでいるが(小春垣=小原垣や久保畑)、成恒氏の影響範囲は主に原口地区(諫山の北側の地区)に留まっているようにも見える。諫山氏の本貫地が「大字諫山」にあったとすれば、今回調査対象となった「廣屋敷」や「緑屋敷」などの原敷地名が集中する地区が、そこからやや南西に行ったところにある「城屋敷」や「頼任屋敷」などが散在する地区にあったのか、どちらかということになろう。

今回の調査では、廣屋敷や中原屋敷などの区画の成立が15世紀後半段階であることがわかった。もし、今回の調査区が諫山氏と関係があるとすれば、先述した諫山氏と成恒氏の関係からすれば、諫山氏が成恒氏に相論で負けた時期にあたる。

一方、「城屋敷」などがある地点はどうだろうか。「城屋敷」の字名は、ここに領主の館があったことを示しているように思える。現在の小字「城屋敷」は、台地の端の30%四方ほどの部分、さらにそこからの斜面と沖積地の水田部分を含んでいる。また、南に隣接する小字「上居屋敷」との間の道路(板道)は、堀状に深く掘られている。一方、北側には小字「中居屋敷」が接続しており、「城屋敷」に接する部分には浄土真宗寺院の長仁寺がある。長仁寺は17世紀後半には真宗寺院として顕れているが、もとは天台宗であったとされる。墓地には中世まで廻る五輪塔が複数あり、真宗寺院以前の開基を裏付けるものであろう。仮に「城屋敷」が諫山氏の館であったにしては、一辺30%は小さすぎる。その場合は、現在の小字「中居屋敷」の部分まで含んで、少なくとも50%四方は確保する必要がある。

ところで、成恒氏は最前支配が大内氏から大友氏に替わっても、依然としてこの地の下作職を保持し、在地に強い力を保っていた。一方、現在「諫山」の姓を名乗る一族はこの諫山にはいないことでわかるように、ある段階で諫山氏の影響力は無くなっている。文書が伝わらないこともその姿を追えない要因ではあるが。

地名からいっても、「城屋敷」が中世諫山氏の屋敷であった可能性は高いのではなかろうか。そうすれば、「緑屋敷」や「廣屋敷」の居住者が誰か、ということになるが、それは不明と旨わざるを得ない。地名の「三十郎」は人名であろうが、ほかは具体的に何を指すのかはわからない。いずれにしても、15世紀から16世紀の遺物組成を見ると、瓦質土器が大半であり、該期の陶磁器はほぼ皆無であることから考えて、階層的にはそれほど上位ではなかったと考えておきたいが、居屋敷や外圍居住者とは当然相対的に上位に位置づけられたはずである。(小柳和宏)

参考文献

『三光村史』三光村 昭和63年6月

『角川川本地名辞典 44大分県』角川書店 平成3年9月

第6節 柱穴出土遺物

3020は弥生土器甕の口縁、3021は弥生土器壺の底部、3022は弥生土器壺の口縁、内側に肥厚し、三角突帯を貼る。3023も壺の胴部、M字突帯を貼る。3024は弥生土器壺の口縁、3025は土師器小皿、3026は弥生土器壺の底部、3027は弥生土器壺の口縁、3028は弥生土器壺の口縁、3029は弥生土器高坏の脚部、透かしをもつ。3030は弥生土器鉢の口縁、3031は弥生土器壺の口縁で三角突帯を貼る。3032は土師質の内黒塚で三角高台付き、3033は弥生土器高坏の脚部、3034は弥生土器壺の口縁、3035は土師質の内黒塚、3036は土師器の坏、3037は弥生土器壺の口縁、3038は弥生土器壺の口縁、3039は土師質小皿、径8.2%ほど。3040は土師器の塊、3041は弥生土器壺の口縁、3042は土師質土器坏、口径11.9%ほど。3043は弥生鉢型土器、3044は弥生土器高坏、3045は弥生土器壺の口縁、3046は弥生土器壺の口縁、3047は弥生土器壺の厚底、3048は弥生土器壺の口縁、3049は弥生土器高坏、3050は弥生土器鉢、三角突帯を貼る。3051は須恵器坏身、3052は土師質土器坏身、口径16.2%。3053は弥生土器高坏の脚部、3054は弥生土器壺の底部、3055は弥生時代壺の厚底、3056は弥生土器複合口縁壺、3058は弥生土器鎌先口縁壺、3059は土師器の坏の底部、3060は弥生土器壺の底部である。3061は弥生土器壺の底部、3062は姫鳥産黒曜石の使用痕のある剥片石器、3063は土師質土器坏身、3064は瓦器塊、3065は白磁の皿、3066は弥生土器壺の口縁、3067は弥生土器壺の肩先口縁、3068は弥生土器壺の胴部でM字突帯を張る。3069は弥生土器高坏の脚、

3070 は弥生土器壺、3071 は弥生土器壺、3072 は須恵器杯身、3073 は弥生土器壺、3074 は弥生土器壺、3075 は弥生土器壺の口縁、3076 は下城式甕である。口縁部がわずかに内傾気味で、口縁直下に刻みが施された断面三角形の突帯が一条付される。

3077 は弥生土器鉢、3078 は弥生土器高坏、3079 は弥生土器壺の底部、3080 は弥生土器甕、3081 は瓦器碗、3082 は結晶片岩の打製石斧、3083 は弥生土器壺の底部、3084 は安山岩の敲石、3085 は弥生土器壺、3086 は弥生土器壺の胴部、3087・3088 はは琉花木製の剥片石器、3089 は弥生土器壺、3090 は下城式の甕、3091 は弥生土器壺、3092 は土鉢、3093 は弥生土器壺の厚底、3094 は弥生土器壺の底部、3095 は弥生土器高坏の脚部、3096 は弥生土器壺の底部、3097 は弥生土器壺の口縁、3098 は弥生土器壺、3099 は弥生土器壺、突帯を廻らす。

3100 は弥生土器壺の底部で、3101 は弥生土器壺、3102 は安山岩の敲石、3103 は土師質の内黒土器、3104 は弥生土器壺、3105 は土師器杯身、3106 は土師質小皿で底部糸切り、3107 は土師質小皿で底部へら切り。3108 は土師質小皿で糸切り、3109 は土師質の内黒塊、3110 も土師質の内黒塊、3111 は弥生土器壺、3112 は弥生土器壺である。口縁部はくの字状に外方に折れ、端部は尖り気味である。胴部は長胴で中程が張るもので、外面上半と内面にハケ目がみられる。3113 は弥生土器壺である。胴下半部の資料で平底を呈するが、底部は比較的薄い作りである。底面には焼成後の穿孔が施されている。3114、3115 は、弥生土器壺と磨製石斧である。3114 は甕で斜方向に直線的のびる胴部から、口縁部が外方にし字状に折れる。3115 は全長10^{cm}程度の比較的小型の磨製石斧である。基部の幅に比べ刃部の幅が広い。基部には敲打痕が残ることから、敲石に転用されたことが分かる。3116 は弥生土器壺、3117 は土師器杯である。体部は口縁部にむかい直線的に伸び、口縁端部はやや肥厚しわずかに外傾する。9世紀代か。

3118 は土鉢、3119 は安山岩の磨製石斧、3120 は弥生土器器台である。筒状を呈するもので器壁が厚く、底部が外方にひらく。3121 は須恵器高坏、3122 は須恵器杯である。3123 は弥生土器壺、3124 も弥生土器壺、3125 は弥生土器壺、3126 は弥生土器壺の口縁部、3127 は弥生土器の厚底甕、3128 は弥生土器壺の口縁、突帯を廻らす、3129 は弥生土器高坏。3130 は弥生土器高坏である。3131 は弥生土器壺である。3132 は弥生土器壺の全形が分かる資料である。口縁部はくの字状に折れ、端部がやや肥厚する。胴部はほとんど張らず底部にいたる。底部は平底で、厚底を呈する。胴部外面はハケ目調整が施される。3133 は姫島産黒曜石製石匙である。基部と匙部の一部を欠く。匙部の残存部は細身でやや尖り気味である。3134 は弥生土器壺である。底部資料で、厚い平底を呈する。外面にはハケ目調整がみられる。3135 は弥生土器壺である。3136 は弥生土器壺である。3137 は弥生土器壺の口縁部で、肥厚し鋸先状を呈する。3188 は甕である。口縁部は外方に短く屈曲する。胴部外面にはハケ目調整がみられる。

3139 は弥生土器壺である。全形が分かる資料で、最大径は口縁部にある。口縁部は短く外方にくの字状に折れる。頸部から肩部にかけてはほとんど張らず、そのまま底部にいたる。底部上げ底を呈する平底で、比較的薄い。胴部外面と口縁部内面にハケ目調整が施されている。3140 は弥生土器壺である。大きく張った肩部の資料で、断面三角形の突帯が一条付される。3141 は弥生土器鉢である。3142 は弥生土器壺である。胴部中程の資料で、最大径部分に断面三角形の突帯が二条付される。外面には横方向のへら磨きが施されている。3143 は砥石である。上下面、両側面、両端面が研ぎ面として使用されている。3144 は弥生土器壺である。口縁部資料で、鋸先状の口縁を呈する。3145 は土師器碗の底部である。3146 は扁平打製石斧で、刃部を欠く。3147 は須恵器の口縁部と思われる。3148 は弥生土器器台である。筒状を呈するもので、口縁部と底部が外反する。3149 は磨製石斧である。基部と刃部を欠損する。3150 は砥石である。3151 は弥生土器壺の口縁部で、端部は角張る。内面にへら描くによる鋸歯文がみられる。3152 は甕の底部で、やや厚目の平底を呈する。外面はハケ目調整が施されている。

3153 は壺で、外傾して直線的に伸びる頸部から口縁部がし字状に折れる。3154 は下城式甕である。やや内湾気味に口縁部にいたり、口縁下に断面三角形の刻みを有する突帯が付く。3155 は壺の底部で、平底である。3156 は鉢である。体部は偏球形を呈し、口縁部がくの字状に折れる。3157 は小型の器台である。厚底を呈する甕の底部に似た形態である。3158 と 3159 は砥石である。両者とも欠損品であるが、残存する面は全て研ぎ面として使用されている。3160 は頸部が大きく開き、口縁部は鋸先口縁を呈する。3161 は胴部資料で、胴部中程に断面三角形の突帯が三条付く。3162 は弥生土器壺である。3163 は弥生土器壺である。3164 は弥生土器壺と思われる。口縁部下に断面三角形の突帯が一条付される。内外面にへら磨きが施されている。3165 は弥生土器壺である。頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。3166 は弥生土器壺と思われる。上部の部分であるが最上部を欠く。外面には、貝殻腹縁押捺による4条の横方向の線と斜め下に向かう一条の線がみられる。3167 は弥生土器壺である。厚底を呈するもので、わずか

に上げ底気味である。3168は口縁部が外方向にL字状に折れ、端部に刻みが施される。3169は口縁部が外方に強く折れ、逆L字状にちかひ形態を呈する。

3170は扁平打製石斧で、基部を欠損する。3171は弥生土器甕である。3173は土師器坏である。3174は石包丁である。3175は口縁部が外方にくの字状に折れる弥生土器甕。3176も口縁部がくの字状に折れるが、胴部に比べ口縁部の器壁が厚い。3177は口縁部が短く外方にくの字状に折れる甕。3178～3180は平底の弥生土器甕底部で、いずれも厚底を呈する。3181は弥生土器甕である。平底の底部で、厚底を呈する。3182は弥生土器甕である。下城式甕で外面口縁下に刻み目突帯が一条付される。3183は扁平打製石斧である。3184は口縁部資料で、口縁部が逆L字状気味に強く外方に折れ、端部が肥厚する弥生土器甕。3185～3187は弥生土器甕底部である。3188は土師器坏である。復元口径は14 ϕ である。3189は弥生土器甕である。平底で、底部の厚さは比較的薄い。3190は弥生土器甕である。3191は弥生土器甕である。3192は姫島産黒曜石スクレイパーである。自然面を残す剥片の縁辺部に細かな割離がみられる。3193は姫島産黒曜石剥片である。3194は磨製石斧である。刃部を欠損した後に、敲石として転用している。3195は弥生土器甕である。頸部から肩部に向かい大きく張るもので、頸部下に断面三角形の突帯が一条付く。

3196は弥生土器甕である。口縁部は外方にくの字状に折れ、胴部は大きく張る。3197は弥生土器甕で頸部が斜方向に伸び、口縁部がわずかに外方に折れる。3198は弥生土器甕である。3199は弥生土器甕である。3200は下城式甕で、口縁下に刻み目突帯が一条付く。3201は石包丁の中央部の破片である。刃部は直線的である。3202は弥生土器甕である。3203は弥生土器甕である。3204は弥生土器高坏である。坏部中程に稜をもち、口縁部に向かい大きく外反する。3206は土師器坏である。体部は底部から斜方向に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口径は13 ϕ である。底部切り離しは、回転ヘラ切りである。3207は須恵器鉢である。3208は弥生土器鉢である。口径49 ϕ の小型品で、卵形の胴部から口縁部が短く立つ。3209は須恵器坏蓋で、内面に低い返りが付く。3210は弥生土器甕である。3211は弥生土器鉢である。3212は土師器碗である。底部資料で、断面三角形の高台が付く。3213は土師器坏で口径13.8 ϕ である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。3215は土師器碗で、高い高台が外開きに付く。3214は越州窯青磁碗で、高台はなく平底である。外面下部から外底面にかけ露胎で、見込み部と外底面に重ね焼きの痕跡が残る。

3216は壺の肩部で、沈泥による文様がみられる。3217は立岩産石包丁である。3218は扁平打製石斧である。3219は須恵器坏である。外底面はヘラ切り離し後にナダが施されている。3220は弥生土器高坏で、外面と坏部内面には赤色顔料の塗布がみられる。3221は弥生土器甕である。3222は弥生土器高坏坏部である。3223は弥生土器甕の口縁部で、逆L字状気味に強く折れる。3224は弥生土器甕で、裾部が大きく開く。端部は肥厚する。3225は弥生土器甕の底部で、厚底を呈する。3226は弥生土器甕で、口縁部が外方に強く折れる。3228は弥生土器甕である。外開きの頸部が逆L字口縁に続く。内外面にヘラ磨きが施されている。3229は弥生土器甕である。3230は石包丁端部の破片である。3231、3232は弥生土器甕である。両者とも平底で、厚底を呈する。3233は弥生土器甕である。3234は打製石鏃である。サヌカイト製で五角形を呈する。3235は弥生土器甕の上半部の資料で、口縁部が短く外方に折れる。3236は弥生土器甕の平底の底部である。

3237は弥生土器甕である。頂部は厚みをもたないが、円盤貼付状をなす。3238は弥生土器甕の胴部である。3239は弥生土器甕の頸部である。頸部下に断面三角形の突帯が付き、頸部が外開き気味に伸びる。3240は弥生土器高坏である。坏部との接合部からやや下がった位置に断面三角形の突帯が一条付く。3241は砥石である。3242は弥生土器甕である。3243は土師器高台付き碗である。3244は弥生土器高坏の坏部で、やや深めの形態を呈する。3244は弥生土器甕の底部で、平底である。3245は弥生土器甕の底部。3246、3247は弥生土器の下城式甕である。3248は弥生土器甕である。3249は弥生土器甕である。3250は弥生土器鉢と思われる。内湾する体部から、口縁部が短く逆L字状に折れる。3251は打製石鏃である。姫島産黒曜石製で、やや粗い調整割離により整形されている。3152は弥生土器高坏の坏部である。3253、3254は弥生土器甕と脚部である。3253は甕の底部で、薄い底部を呈する。3254は脚部である。3255は弥生土器甕である。平底の底部で、厚底を呈する。3256は弥生土器甕で、口縁部が短く外反する。胴部は肩から中位にかけやや張りをもち底部に向かう。3257は下城式甕である。口縁部は直立気味で、口縁下に断面三角形の刻み目突帯が付く。3258は小型の筒型器台である。極めて厚手で、中央部がやや括れる。

3259は弥生土器鉢である。小型品であるが器壁は厚い。3260は打製石鏃である。輝緑凝灰岩製の立岩産石包丁片を再利用したものであろう。3261は弥生土器甕である。3262は磨石である。扁平で長細い石を利用したもので、上下面に磨り面がみられる。3263は弥生土器甕である。口縁部資料で、鋤先状を呈する。3264は敲石である。上下

面の各々中央部に敲打痕が残る。3265は弥生土器甕である。3266は甕である。3267は甕の底部で、平底を呈する。3268は弥生土器甕である。3269は弥生土器甕である。3270は弥生土器甕である。3271は砥石である。上面、側面、端面が研ぎ面として使用されている。3272は石包丁未成品と思われる。3273は砥石である。3274は弥生土器甕である。平底の底部で、厚底を呈する。3275の弥生土器脚部である。わずかに円筒状を呈した後、底部に向かい大きく開く。3276は弥生土器甕である。3277は須恵器甕と思われる。3278は磨製石斧である。3279は中世の土鍋で、外面口縁下に高さ約2^{cm}の鐙を巡らす。3280は弥生土器高坏の坏部である。3281は弥生土器高坏である。3282は弥生土器甕である。3283は緑泥片岩製の扁平打製石斧である。

3284は鉄製刀子である。先端部を欠くもので、刃部の現存長9^{cm}、幅12^{cm}、茎部5^{cm}である。部分的に鞘の痕跡と思われる木質が残存する。3285は弥生土器下城式甕で外面口縁下に刻み目突帯が一条付く。3286も下城式甕である。3287は弥生土器甕である。肩部資料と思われる、断面三角形に突帯が付される。外面には赤色顔料が塗布される。3288は弥生土器甕 3289は弥生土器甕で口径21.7^{cm}、3290は弥生土器甕の頸部三角突帯を二条廻らす、3291は弥生土器甕で口径21.9^{cm}、3293は弥生土器甕、3294は弥生土器甕の底部。3295は弥生土器甕の口縁、3296は弥生土器高坏、3297は弥生土器甕、3298は弥生土器甕の底部、3299は弥生時代の器台。3300は弥生土器甕、3301は弥生時代のメノコ状土器片、3302は弥生土器甕で凹線文の瀬戸内系、3303は弥生土器甕の胴部、3304は弥生土器甕、3305は弥生土器高坏、3306は弥生土器甕、3307は弥生土器高坏で後期前葉、3308は弥生土器甕の底部、3309も弥生土器甕の底部、3310は姫島産黒曜石の石鏃、3311は弥生土器甕である。3312は須恵器甕の底部である。3313は弥生土器甕、3314は泥岩の砥石、3315は弥生土器甕、3316は弥生土器跳上げ口縁の甕、3317は弥生土器甕、3318は弥生土器鉢、3319は弥生土器甕の底部である。3320は弥生土器甕、3321は弥生土器鉢である。

3322は弥生土器甕で、口縁部が緩やかに外方に折れる。3323は口縁部が大きく外反する。胴部は肩がやや張り、長胴気味になる。3324は青銅製の仿製内行花文鏡で、面径は7.5^{cm}である。鏡上りが悪いため文様が不鮮明であるが、縁は幅広い平縁で、縁の内側にやや粗い樹文帯がある。そして、円形を呈する紐の周囲に7弧文が展開する。以上3322～3324は同一ピットの出土である。

3325は土師器碗である。3326は弥生土器鉢である。3327は弥生土器短頸甕である。長胴気味で、胴部中程が最大径となる。3328は弥生土器鉢あるいはミニチュア製品と思われる。3329は多条沈線を廻らせる弥生土器甕か。3330は鉄製刀子である。3331は弥生土器甕、3332は弥生土器跳上げ口縁の甕、3333は弥生土器甕の底部、3334は弥生土器甕の底部、3335は弥生土器高坏、3336は瓦器塊、3337は弥生土器甕、3338は土師器坏、3339は弥生土器甕である。

3340は弥生土器鑊先口縁甕である。3341は弥生土器高坏の脚、3342は安山岩の台石、3343は弥生土器甕の肩部、3344は須恵器甕の肩部、3345は弥生の複合口縁甕、3346は須恵器甕の胴部、3347は弥生土器高坏、3348は弥生土器甕、3349も弥生土器甕、3350は弥生土器甕、3352は弥生土器甕、3353は弥生土器鉢の脚部、3354、3355は弥生土器甕、3356は弥生土器高坏、3357は磨製石斧、3358～3366までは弥生土器甕、3367は鉢、3368は弥生土器で器種不明。3369は弥生土器鉢である。

3370は敲石、3371は弥生土器甕、3372は砥石、3373は弥生時代終末から古墳時代初期の高坏、3374は敲石、3375は凹線文を持つ弥生土器甕、3376～3381は弥生土器甕、3382は鉄鏃である。3383～3385は弥生土器甕、3386は弥生土器甕である。3387は弥生土器甕、3388と3389は弥生土器甕、3390は土師器の甕、3391と3392は弥生土器甕、3393は高坏の脚部で穿孔がある。3394は弥生土器甕、3395は単口縁の弥生土器甕、3396と3397も弥生土器甕、3398は弥生土器器台、3399は複合口縁の弥生土器甕、3400は手づくねの鉢、古代か。3401はと3402は弥生土器甕、3403～3405は弥生土器甕、3406は備前焼銅鉢、3407と3408は弥生土器甕、3409は弥生土器高坏、3410～3412は弥生土器甕、3413は須恵器提瓶の口縁部、3414は須恵器坏、3415は弥生土器甕で口縁部外面に刺突文がある。3416は緑泥片岩製の石包丁破片、3417は弥生土器器台、3418は弥生土器鉢、3419は弥生土器甕胴部、3420は砥石、3421と3422は弥生土器甕、3423は打製石斧の基部、3424は弥生土器甕の底部、3425は弥生土器甕の口縁、3426は弥生土器複合口縁甕、3427は高台付の須恵器坏身である。

3428は弥生土器甕、3429は土師器甕、3430は弥生土器の鉢脚部か。3431は弥生土器甕、3432は弥生土器高坏、3433は弥生土器甕、3434は磨製石斧、3435は弥生土器甕の口縁、3436は弥生土器甕の口縁、3437は弥生土器甕の口縁、3438は弥生土器甕の口縁、3439は弥生土器甕の口縁、3440は縄文土器鉢、3441は弥生土器甕の底部、

3442 は弥生土器壺の底部、3443 は弥生土器甕の口縁、3444 は弥生土器壺、3445 は弥生土器甕、3446 は弥生土器壺、3447 と 3448 は弥生土器甕である。3449 は弥生土器甕の口縁、3450 と 3451 は弥生土器の高坏、3452 は弥生土器甕、3453 は複合口縁をなす弥生土器壺、3454 は弥生土器甕、3455 は弥生土器甕台、3456 は弥生土器甕、3457 は弥生土器甕台、3458 は複合口縁をなす弥生土器壺、3459 は弥生土器甕、3460 は弥生土器甕の胴部、3461 は土師質小皿、3462 は弥生土器甕の底部、3463 は弥生土器壺、3464 は弥生土器甕、3465 は弥生土器壺、3466 は弥生土器甕、3467 は弥生土器壺、3468 は弥生土器甕、3469 と 3470 は弥生土器甕である。

3471 ～ 3473 は弥生土器甕、3474 は弥生土器壺、3475 は打製石鏃、3476 ～ 3478 は弥生土器壺、3479 は弥生土器壺の口縁、3480 は玉縁口縁の白磁の碗、3481 は手づくねの製土器、内面に布目痕、3482 は弥生土器壺、3483 ～ 3496 は弥生土器甕、3497 は弥生土器甕の口縁、3498 は弥生土器高坏の脚部、3499 ～ 3503 は弥生土器甕の跳上げ口縁、3504 は粘板岩の砥石、3505 は弥生土器甕の厚手底、3506 は弥生中期の甕、3507 は縄文後期の磨消縄文の深鉢、3508 は弥生土器甕、3509 は土師器の鉢、3510 は土師質小皿で底部糸切り後板状片痕、3511 は砥石、3512 は弥生土器高坏の脚部、3513 は縄文晩期浅鉢の口縁、3514 は縄文の深鉢、3515 は土師器鉢で外面に叩き調整、3516 は弥生土器甕台、3517 は土師器鉢、内外面に磨き調整、3518 は染付碗、3519 は陶器の片口鉢で灰白色の釉、3520 は鉄軸の上鍋で把手が付く、3521 は高村焼の捏鉢で口縁内面を赤く塗る。3522 は高村焼の焙烙、3523 は高村焼の捏鉢で胴部に突帯を貼る。3524 は濃藍色の染付皿、内面に重ね焼痕、3525 は高村焼の捏鉢で口縁内面にベンガラ塗布、3526 は弥生土器長頸壺、頸部に三条沈線、3527 は弥生土器甕の口縁、3528 は那覇産黒曜石の石鏃、3529 は弥生土器の鉢、3530 は弥生土器壺の胴部、3531 は弥生土器壺、3532 は土師質小皿、底部糸切り難し、3533 は土師質土鍋、3534 は土師質小皿、底部糸切り、3535 は土師質小皿で底部糸切り、径7.8^{cm}、高さ1.3^{cm}、3536 は土師質小皿、底部糸切り後板状片痕、径7.8^{cm}、3537 は土師質小皿で糸切り、3538 は土師質小皿で底部糸切り難し、3539 は土師質小皿、糸切り、径7.8^{cm}、高さ1.2^{cm}、3540 は土師質鍋、3541 は瓦器塊、3542 は土師質小皿、底部糸切り難し、3543 は瓦質鍋、3544 は瓦質鍋、3545 は弥生土器壺の底部である。

3546 は弥生土器甕、3547 は弥生土器壺、3548 は弥生土器甕、3549 は砥石、3550 ～ 3552 は江戸時代の磁器、3553 は土人形で外面は丁寧なナテ、3554 は素焼きで、外面に瘤状の突起がある。3555 は瓦質の鉢で、胴部に文様がある。3556 は平瓦、3557 は弥生土器壺、3558 は弥生土器甕、3559 は須恵器高坏、3560 は瓦質の摺鉢、3561 は弥生土器甕の口縁、3562 と 3563 は弥生土器甕、3564 はキセルの覗い口、3565 は安山岩の砥石、3566 は瓦質の鉢、3567 は弥生土器高坏、3568 は那覇産黒曜石のスクレイパー、3569 は外面に貝殻条痕を持つ。3570 は瓦質土器深鉢底部、3571 は須恵器甕の胴部、3572 と 3573 は弥生土器甕である。

第7節 包含層出土遺物

1) 縄文時代

土器 (3574 ～ 3582、3584 ～ 3586) のうち、3574 ～ 3582、3585、3586 は縄文時代後期所産の有文土器である。3574 は外面に縦方向の沈線が施される。3575 ～ 3578 は鐘崎式である。3575、3576 は口縁部で、3575 は口縁部が緩やかに外反し、瘤状把手が付く。頂部には刺突がみられる。3576 は肥厚する口縁部が外方に折れるもので、胴部に沈線がみられる。3577、3578 は胴部資料、沈線による文様が施される。3579 ～ 3582 は石町式である。3579、3582 は内湾気味の口縁部で、3579 は沈線により、3582 は沈線と縄文による文様が各々施される。3580、3581 は胴部である。3581 は上半部の頸部が無文で、下半部には縄文が施文される。3580 は沈線と縄文による文様がみられる。3585 は西平式の口縁部である。口縁部文様帯は二条の沈線が巡り、波頂部に、凹点が施される。3586 は胴部の資料で、横走沈線と縄文がみられる。3584 は無文土器である。体部と上半部内傾し、口縁部が短く外傾する。鐘崎式などに伴うものか。

石器 (4111 ～ 4121、4152 ～ 4207) のうち、4111 ～ 4120 は石鏃である。弥生時代のものも含まれると思われるが、4111 と 4112 は縄文時代早前期の所産であろう。4119 は五角形状を呈するものである。このような形態は縄文時代晩期に類例が多い。4121 は石匙である。横長剥片を利用し、握み部と刃部を作り出している。4152 ～ 4207 は扁平打製石斧である。完形品に比べ欠損品が多い。東九州においては、縄文時代後期後半から晩期の遺跡で多くみられる。本遺跡では、これらの時期の土器は僅かなため、弥生時代の所産である可能性も残る。

2) 弥生時代から古墳時代前期

3587～3941までが弥生時代から古墳時代前期の土器である。弥生時代の遺構の掘込みが、黄褐色ローム土の上に厚く滞積した黒褐色土からであったため、遺構堆積土との峻別が難しく、遺構検出のためにより掘り込んだため、結果的に包含層として取り上げた遺物が多くなった。本来は遺構に伴うものであった可能性が高い。

3587～3652は壺である。前期に位置づけられるのは3587～3604、中期が3605～3652である。

3653～3959は甕である。前期～中期初頭が3653～3689、中期が3690～3733、3734～3957は後期の所産である。

3758～3779は高坏である。3758～3761は中期、3762以降は後期である。3780と3781は蓋か。

3782～3827は小型土器。いずれも後期のものである。3823～3825は口縁部下に穿孔のある把手を付ける。3822は把手。時期が異なるかも知れない。3828～3841は器台、3842～3854は鉢の脚である。

3855～3869は口縁部外面に間線文を持つもの。3870～3882は壺の胴部、3883～3927は甕、3928～3936は壺の底部。3937～3941も壺、または甕の底部である。

弥生時代の石器は、4208～4244は磨石・敲石、4245～4272までの砥石で、4122が残存長14.4^{cm}の石剣である。4123は石戈の基部。4124～4144は石包丁である。4145は扁平片刃石斧、4146～4151は磨製石斧である。

3) 古代

3942～3995は土師器である。3943は皿で、やや口径が大きく口縁部が外反する。8世紀代のものか。3942、3944～3956は坏または碗の口縁部である。大半の体部が外傾し、口縁部は肥厚するものやわずかに外反するものもみられる。いずれもナデ仕上げで、ヘラ磨きはみられない。8世紀から9世紀に比定されるものである。3958～3971は坏の底部で、切り離しが分かるものはすべてヘラ切り離しである。体部はいずれも斜方向に立ち上がる。坏の口縁部と同様な時期であろう。3972、3973は全形が分かる坏で、いずれも口径に比し器高が低い。3972は体部が内湾気味に口縁にいたるもので、下半部にケズリが施される。3973は底部ヘラ切りの後ナデ仕上げである。両者は8世紀に比定できる。3957は碗の口縁部である。3975～3978、3980～3993は土師器碗の底部である。いずれも高台が付くが、外開き気味のものが多い。高さは、低いものから高いものまでバリエーションがみられる。8～10世紀にかけての所産か。また、3974、3979、3994、3995は12世紀代の土師器碗である。断面三角形または方形の比較的低い高台が付く。3979は内外面にヘラ磨きが施される。3975は内面見込みから体部にかけてヘラ磨きがみられるが、3979に比べるとやや雑である。

3996～4029は須恵器である。このうち、3996、4002は坏で、古墳時代のものか。3997～、4001は蓋である。3997は坏蓋で、扁平な筒みが付く。8世紀代のものか。4003～4009は高台の付かない坏である。4006は底部の切り離し状況が分かる資料で、ヘラ切りである。これらは8世紀代に比定できよう。4010～4012は高台付きの坏である。断面方形の低い高台が付される。4013は高坏、4014は皿である。以上のうち、高台付きの坏と皿は8世紀代に位置づけられよう。4015～4026は壺あるいは甕である。4015～4017は口縁部外部が肥厚する。また、4015、4016、4018は外面に波状文がみられるが、4015と4018は柄で、4016は棒状工具で施されている。4019～4021は外面に格子目タキ等が施され、内面には青海波状の充て具裏が残る。また、4020には円形の浮文がみられる。4023は長頸壺である。4027～4029は高台が付く鉢などか。4030～4034は内黒土器碗である。高台はいずれも細目で、外開き気味である。9世紀代のものか。4035は緑釉陶器である。高台は断面方形で、比較的低い。

4037～4046は、甕、甕である。4037は甕の口縁部で、体部は口縁部に向かい内傾する。4038～4040は把手である。4041～4046は甕である。いずれも口縁部は外方に強く屈曲し、胴は4046にみるように長胴形態を呈すると思われるが、4045は口縁部が緩やかに外反し、胴部はなで肩状をなす。4045は、胴部外面上半にヘラケズリが、内面にヘラ磨きが各々みられる。4046は胴部外面下部にヘラケズリが施され、内面はナデ仕上げである。

4) 中世から近世

その他の出土遺物(中世～近世)

中世以降に属する遺物を第284図4047～第286図4110に掲げた。4047～4054は白磁。4055～4058は青磁である。4059～4076は土師器。4077と4078は備前焼、4079は瓦器碗、4080は瓦質土器碗、4081は甕が丸

くなる角形の鉢、4082は深鉢、4093～4095は瓦質土器の鍋、鉢、4096はミガキのある土師質の鍋、4099は脚、4102は深鉢である。4103は赤焼けの瓦質土器で、胴部に波状文のある壺、4104は瓦質土器の壺、4105は瓦質土器の甕が、4106は焼き締め陶器の壺、4107と4108は瓦質土器深鉢、4109は焼き締め陶器の角火鉢が、4110は素焼きの土管である。

第8節 時期不明の遺構

1) 帯状柱穴列

SK198 (第656図)

調査区 I/J/K-32/33/34に位置する。連続する土坑と柱穴群である。4次-E調査区にも若干延びているので、確認出来た全長は約30mになる。深さ0.8mほどの深い柱穴や浅い柱穴が混じりながら、幅1～2mほどの範囲ではほぼ一直線上に展開する。しかしながら、柱穴は必ずしも一直線とはならず、幅の中で自由に配置されているように見える。一見並んでいるように見える場合も、深さが不統一であったりして、単なる横列などの立て替えではないと考えられる。また、中央部付近では柱穴の希薄な部分があり、通路状にも見える。今回の調査では他の地区でも同様の遺構が確認されている。柱穴群上部の不定形に広がる土坑埋土から、中世の瓦器破の小破片が1点出土している(小破片のため図化していない)が、それのみで時期を決定するのは難しいと考える。

なお、古代の頃の「小結」で扱っているように、1次調査区や3次調査区でも出土している。時期の決め手を欠くが、他の事例などから古代ではないかと想定している。

2) 掘立柱建物

SBO02 (第464図)

調査区 G-8・9、H-8・9に位置する。1間×2間の長方形を呈するもので、主軸方位はN-16°-Wである。柱間寸法は、南側桁行が東から2.3m、2.8m、北側桁行が東から2.3m、2.7m、東側梁行が2.2m、西側梁行が2.2mで、身舎面積は約11.1㎡である。VI期のSH003と重複しており、竪穴建物を切る。柱痕については、精査したにも係らず確認することができなかった。

柱穴からは目だった遺物の出土なく、本掘立柱建物の時期は不明である。

3) 溝

SD009

調査区 C-46に位置する溝である。略南北方向に直線的に延びる。溝の方向はN-62°-Wで、長さ6.2m、幅1.0m、深さ0.3mである。出土遺物は細片のみで、溝の時期を確定することはできない。

SD011

調査区 D-47～49に位置する溝である。略東西方向から南方に緩やかに直角に折れる。両端をSD006及びSD015に切られる。溝の方向はN-71°-Wで、調査区内で確認できた溝の長さはおおよそ17mであった。最大幅1.0m、深さ0.25mである。出土遺物は細片のみで、溝の時期を確定できない。

SD012

調査区 D-E-48/49に位置する溝で、SD011と平行に走り、SD011に切られる。略東西方向に直線的に延び、その方向はN-74°-Wで、長さ12.1m、幅0.7m、深さ0.2mである。出土遺物は細片のみで、溝の時期を確定することはできない。

第5章 総括

第1節 弥生時代～古墳時代前期の土器について

はじめに

九州の弥生土器の編年の概要は、福岡県を中心に森貞次郎¹・小田富士雄²が1950年代から1970年代にかけて整備し、前期を夜臼式土器-板付Ⅰ式土器-板付Ⅱ式土器、中期に城ノ越式土器-須玖Ⅰ式土器-須玖Ⅱ式土器、後期に高三瀆式土器-下人隈式土器-西新式土器という土器様式の名称が提唱された。その後、縄文時代との間に早期が設定されると、縄文時代晩期末に編年されていた山ノ寺式土器と弥生土器の最古式の夜臼式土器をこれにあてて4期区分の編年案が提示され、武末純一も2011年に北部九州の弥生土器編年を論じ、この案を継承している³。

諫山遺跡のある豊前南部から豊後についても、この編年案を軸としながら、この地域の在地系土器とも言える、弥生時代前期末から中期にかけて存続する下城式土器⁴、後期から古墳時代前期にかけて型式変化する安国寺式土器⁵が加わる⁶。また、1980年代に豊前北部で弥生時代後期終末に位置付けられた高島式土器⁶もこの地域の土器編年を考える上で重要である。

こうした研究を背景にして豊前南部地域（大分県中津市・宇佐市）の土器編年研究は、1970年代に宇佐市台の原遺跡の報告書⁷で弥生時代前期末から中期にかけて、1980年代には宇佐市安心院宮の原遺跡の報告書⁸で弥生時代中期末から後期前半が欠けてももの前期末から古墳時代前期初頭までの、それぞれの遺跡から出土した土器を編年する案が提示されている。また、豊前北部についても、1980年代に福岡市行橋市下碑田遺跡の報告書⁹で遺跡から出土した土器の編年が提案されている。

以上の豊前地域を含めた北部九州の土器編年から諫山遺跡出土の弥生土器を見ると、弥生時代前期末から古墳時代初頭まで連続して存在していることが判明した。そこで、これらの土器を8期に分けて編年し、時期区分を行う。

I期

SK017 (4・7)・SK015 (1～3・5・6・8～13) 出土土器をこの時期とする。

壺形土器は4が北部九州系で内傾する頸部と胴部の境に二条の平行沈線が廻るが、1～3は口縁部が大きく開き、頸部は外傾し、肩部には放射肋のある貝殻の腹縁の刺突で幾何学的な文様で飾られており、下関市綾羅木郷遺跡¹⁰出土の綾羅木Ⅲ式土器と類似する。

壺形土器は口縁部が如意状になる北部九州系のもの(5・6)と、口縁部周辺に断面三角形の突帯が廻るものである。後者は突帯の位置が口縁部外端部に廻る7～10と口縁部下位に刻目を加えた突帯が廻る11がある。さらに7～10には胴部にも突帯が廻る9、刻目がある10などバラエティがある。11は大分県中心に分布する口縁部が内湾気味になる下城式土器であるが、同土坑からは刻目突帯を境に口縁部が外反する形態も認められる。底部は数量的には13のような形態が主体を占めるが、12のような厚底も見ることが出来る。

I期は板付Ⅱ式土器の壺形土器や壺形土器、肩部が北部九州の高槻式土器と同様、貝殻文で飾られる1～3の綾羅木Ⅲ式土器が存在すること、壺形土器は7・8のように口縁外端部に断面三角形の突帯が廻ること、11の下城式土器の内湾する口縁直下に刻目突帯が廻ることから前期末と考える。

II期

II期はSK053 (14～16)とSK057 (17～19) 出土土器を充てる。

土坑53の壺形土器14は直立した頸部から外反する口縁部と続く。壺形土器15は口縁部が如意状になり、胴部には二条の平行沈線が廻る古い形態を残すが、胴部が張る新しい兆俵も見ることが出来る。また、16は口縁外端部の突帯の貼り付けが、幅広になり、断面が逆L字状になり新しい口縁部形態の萌芽を見ることが出来る。

さらに、土坑57出土の壺形土器17は短い口縁部は外傾し、胴部は緩い算盤玉状に張り、頸部直下と最大径部に断面台形の突帯が廻る。共存する壺形土器18・19の口縁部は如意状口縁の系譜上にあるが、外反度が増して水平に近づき、屈曲部内面に稜が生じるものもある。さらに編年図に図示していないが同土坑からは厚底の底部が多く出土している。また、I期9からII期16と続く形態の壺形土器20はSK056の出土であるが、16に比較すると口縁部の平坦部上面が拡大し、胴部がさらに張るためか断面T字の兆しを感じる事が出来る。

II期は、SK057の壺形土器に新しい傾向が認められるが、壺形土器に古い要素が含まれる。一方、SK053の

出土土器は壺形土器の形態や、甕形土器にⅠ期の如意状口縁の影響が残ることや、未発達な逆し字状の口縁部の16が存在する。このことからSK053とSK057の時期には若干の時期差が含まれる可能性があるが、概ね城越式土器に相当すると考え中期初頭を含めた前葉に位置付ける。

Ⅲ期

Ⅲ期は一括資料も多いがそれぞれの中から特徴的な土器を、SK054 (23・28・29)・SK061 (21・26・30)・SK065 (22・25)・SK121 (31)・SK149 (24・27) から出土した資料を充てる。器種は壺形土器・甕形土器・壺形土器・高坏がある。

壺形土器には2形態がある。21～23は外反する口縁部の端部に平坦面を形成し、未発達な鋤先口縁の形態になる。これに対し、24は口縁部が朝顔状に開くのみで端部に装飾的な付属物はない。胴部は最大径が上位に位置して球状に張る。

甕形土器 25～27は口縁部が内部に稜を生じて屈曲し、端部は肥厚する。底部は厚底が目立ち、わずかに内側が窪み上げ底状になる。口縁端部がわずかに跳ね上がり状になり、26は胴部上位に二条の平行沈線が廻り、27は同位置に断面三角形の突帯が一条貼り付けられている。以上如意状口縁の系統の3点に対し、28はⅡ期20の影響を受けており、口縁部上面の平坦部がさらに拡張し、内側に突出する傾向が見られ、緩い断面T字状になる。その下位の断面三角形の突帯も継承されている。しかし、底部の器壁は薄く上げ底状である。

29は壺形土器であるが、胴部下位で内部に稜を生じて緩く屈曲し、口縁端部はわずかに肥厚する。

30・31は高坏形土器の坏部である。いずれも口縁部の上面の平坦部が広く、内側に一部が突出する断面が鋤先状になる。さらに口縁部から坏底部までが深い特徴を持つ。

Ⅲ期は壺形土器に未発達な鋤先状口縁が見られ、浅顔形の口縁部を持つ壺形土器が伴う。甕形土器の口縁部が断面T字形になることや跳ね上がり口縁が見られる。また高坏形土器の坏部が深く、口縁部が緩い鋤先状になることから、須玖Ⅰ式土器にあたると考え中期前葉～中葉と考える。

Ⅳ期

Ⅳ期の資料は、各遺構から良好な状態で出土した特徴的な資料を公示した。SK025 (32)・SK026 (37)・SK098 (41)・SK173 (39)・SK190 (34)・SK191 (46・47・48)・SK192 (35・36・40・45)・SK193 (33・38)・SH082 (42・43・44) がそれで、壺形土器・甕形土器・壺形土器・高坏形土器に加え、小型と長頸の壺形土器・鉢形土器も確認できる。

壺形土器 (32～37) の32～34は、口縁部の上面平坦部がさらに拡大し、内側に明確な突出部分を形成する。このため、断面形態が鋤先状になる。胴部は最大径が上位にせり上がり、その部分から肩部にかけて断面台形の突帯が三条廻る。底部は器壁が薄い平底である。Ⅲ期に存在した、口縁部が朝顔形に開く24は胴部が扁球状になり、口縁部が短く外反する35は、Ⅱ期の17の系譜上のもので、Ⅲ期に良好な資料はないが、外反し短く立ち上がる口縁部はやや肥厚し、胴部は最大径が中位から下位に位置する。突帯が頸部下と最大径部、その中間の3カ所に廻る。37はそのミニチュア土器である。

甕形土器 (38～42) は、口縁部が内側に稜を生じて屈曲し、口縁端部は肥厚し、跳ね上がり状の形態になるものが多いが、39の口縁部は屈曲が緩く、口縁端部に肥厚は見られない。しかし、胴部上位には40・41と同様に断面三角形の突帯が一条廻る。また、38・42には胴部突帯が見られない。こうした甕形土器の多くの底部は厚底で、この地域の特徴を表している。しかし、41は跳ね上がり口縁で、薄底底部であり、北部九州的である。42も口径に対し、器高が低く、底部は器壁が薄く、在地の甕形土器とは異なる印象を受ける。

壺形土器 (44) は、数量が少ないが、Ⅲ期29と比較すると、口縁部の屈曲が緩くなり、器高も低くなる。

高坏形土器 (45～48) は、SK191からは数点出土しており、いずれもⅢ期の高坏形土器に比較すると坏部の口縁部の上面平坦部は広がり、内側の突出も明確になり、断面が鋤先状になる。さらに口縁部から坏内底部までが浅くなる。脚部は細い円柱状で、褶開きの形態である。

長頸壺 (43) は、細く延びた口縁部外面に断面三角形の突帯が一条廻る。胴部は中位で最大径となる。

Ⅳ期は壺形土器や高坏形土器の口縁部が完全な鋤先状態となる。また、高坏形土器の坏部が浅くなる形態などから須玖Ⅱ式土器に相当し、中期後葉と考える。

V期

V期の資料は、SH115 (49・54・56・58～60・64・68～72) を中心に、SH027 (53・61)、SH040 (52・

57・62・65・66)、SH080 (50・51・55・63・67) の資料を加えた。いずれも堅穴建物内に一括廃棄状態で出土した土器で、SH115からは瀬戸内系と北部九州系の土器が一緒に廃棄されており、両地域の並行関係を知る上で良好な資料と言える。

壺形土器 (49～53) は3形態があり、49は口縁部が緩く複合口縁状になり、北部九州に分布する袋状口縁壺からの型式変化を見ることが出来る。50・51は同一個体で、頸部は内傾し口縁部が開く。頸部と胴部の接合部と胴部最大径部に断面三角形の突帯が廻る。口縁内端部に粘土帯が遅れば複合口縁壺の形態になる。52は長頸壺であるが、胴部中位に注口部がある。53は口径に比較すると胴部が張り丸味をおび、器高も低い形態の土器で壺形土器との中間形態であるが、壺形土器に含める。底部が判る51～53はいずれも安定した平底である。

壺形土器 (54・55) は口縁部が外反又は外傾し、胴部はⅣ期に比較すると明らかに脹らみ、長胴形になる。胴部の突帯や沈線などの文様は姿を消し、縦方向の刷毛目調整が目立つ。55も小型であるが壺形土器の範疇に入れる。壺形土器の底部も安定した平底で、自立できる。

高坏 (57) はⅣ期と全く異なり、鋤先状口縁の外側平坦部を除去したような形態で、坏部の口縁部は内湾し、坏底部に直線的に続く。脚部も接合部である円柱部からⅣ期に比較するとラップ状に大きく開く。

58～60は脚付の鉢形土器である。58・59は直口する鉢形土器に断面が八字状に広がる安定した脚が付く。60は口縁部が外反する鉢形土器の底部に粘土を巻き、上げ底にした厚底状にしており、脚とは趣が異なる。61は口縁部が直立し、胴部が球状に張る器形のため、丸底気味であるが底部の器壁が厚く外面の一部に平底を意識した稜線が生じている。

62～66はバラエティがあるが鉢形土器として紹介する。62は口縁部が外反し、口径に対し器高が低い。63は小型で口縁部が肥厚し、胴部中位に断面三角形の突帯が廻る。64は口縁部が内湾する鉢形土器で、口径に対し器高が高いため筒形をしている。3点とも安定した平底であるが、65・66は口縁部が直口する鉢形土器であるが、坩のような形態である。底部は丸底であるが、底部の器壁は厚く、内面を平坦に仕上げしており、平底に対する意識がみとれる。

67～69は中位から両端が開く円筒形の器台である。下部の口径がやや大きい、と上部の形態が類似する。67は68・69に比較すると器壁も均一でやや精緻である。67・68は中位の器壁が厚く両端に行くに従って薄くなる。

70～72は瀬戸内系の土器で、70は壺形土器で、長く延びた頸部の外面には数条の平行沈線が刻まれている。また71と72は同一個体であるが、口唇部に凹線文が二条廻る壺形土器で頸部のくびれ部には突帯が廻る。器面調整も胴部内面中位から下位にかけてヘラ削りされており、異なる土器づくりの技術を見ることが出来る。72の底部は器壁が薄く、大きな平底である。

この時期の土器の共通する特徴は、あらゆる器種を通じて、安定した平底底部を持つことである。一部には底部の中央が膨らむものや、鉢などの小型土器には丸底も見られるが、平底が圧倒的に多い。

V期は、複合口縁の祖形ともいえる49が存在することや、底部に安定した平底が残ることから、北部九州の高三脚式土器に相当すると考え、後期前葉に位置付ける。これに伴う瀬戸内系の壺形土器は、瀬戸内編年のV-1期にあたり、ほぼ同時期と考える。

Ⅵ期

Ⅵ期はSH105 (75・77・81・82・85・88～90・92～94・98～101・103) 出土資料を中心に、類似した土器を出土したSH026 (84・91・95～97)、SH049 (79・80・83・86・87・102・104)、SH066 (76・78・105)、SH102 (74)、SH110 (73) の資料で補足したものである。

壺形土器 (73～78) は形態には数種ある。73・74は口縁端部が内傾するようにタガを貼り付け複合口縁に仕上げている。74はさらに端部が外側に跳ねるよう成形されている。2点とも胴部は球状に張り、頸部との境に突帯が廻る。75・76も頸部が締め、口縁部は単純に外反して開き、胴部が球状に張るため、壺形土器の形態になる。これに対し、77・78は口縁部の開きや胴部の張りに比較すると頸部の締めがゆるく明確な壺形ではない。しかし、壺形土器に比べると頸部は締め、胴部最大径部に突帯が廻るなど、異なる点が多く器形的には中間的な形態である。

壺形土器 (79～82) は口縁部が外反し、長胴の胴部が膨らむ形態である。大きさは各種があり、器面調整は縦方向の刷毛目であるが、82はヘラ撫で状である。

壺形土器も壺形土器も底部は平底であるが、凸レンズ状に脹らみ自立できない不安定な形態である。

高坏(83・84)は2形態あり、口縁端部が内湾する83は、V期の57の系譜を引くもので、脚部はラッパ状に大きく開き、中位には縦に2個並んで円形の透かしが入れられている。84は坏部の上位で屈曲し外傾する形態で、この時期から出現する。脚部は83と同様な穿孔がある。85・86は脚付きの鉢で、高坏の一種と考える。85はワイングラス状の形態で、脚が付くことが判る。口縁部が短く直立し、胴部が張る86も脚が付くと考える。両者ともヘラ磨きで丁寧な仕上げである。

87～89は口縁部が外反し、胴部が短く球状に張る器形で、88・89の底部は凸レンズ状の平底で、87は小さな平底の小型の土器である。90も小型であるが、口縁部が外反し、長胴の胴部を持つ。しかし、底部には小さな八字状の脚が付く。87～90は壺形土器の一種であるが、異なる要素を持つ。

91～93は長頸壺である。91は口縁部が直口気味で、胴部は張り、中位が最大径となる。92・93は同一個体で、口縁部は91に比較するとやや外反し、胴部は最大径が下位になる。底部は両者とも丸底気味であるが平底である。

94～101は底部から口縁部に直線的に伸びる単純な形態の小型の鉢形土器であるが、大きさや器高に差があり、それが全体な器形に変化を与えている。94～96は器高が低く浅鉢形をしているが、97～101は口縁部が外傾するものや、直立するものなどであるが、器高が高く、壺形をしている。96もミニチュアであるがこのタイプである。これらの鉢形土器の底部は、97・99が丸底であるが、他は不安定な平底をしている。

102～104は器台である。102は上面に穿孔があり、一部が斜め上方に突出するタイプの脊形器台である。103・104はV期の器台(67～69)の系譜を引く円筒形の器台であるが、胴部のくびれが上位に来る。

105は瀬戸内系の土器で、外反する口唇部に門縁が廻り、胴部との接合部に斜めに刻目が加えられた突帯が貼り付く。その下位には連続刺突文が加えられている。胴部は最大径が上位に位置し複合口縁より長胴である。

VI期の脚付器種以外の底部を有する各器形の共通性は平底の底部が丸みをおび出し、凸レンズ状又は底部面積が縮小し、不安定な形態になる。これに比例して器形の器種が増加するものと考えられる。また、壺形土器・鉢形土器・器台の器面には明確な叩き調整が観察できる。

こうした底部の形態からVI期は、北部九州の下大隈式土器に相当する。その一方北九州で設定されている下大隈式土器に後続すると理解される高島式土器の器形や器種構成とも類似している。両者を含め後期中葉から後葉の時期と位置付ける。さらに、105の瀬戸内系土器も瀬戸内編年のV-2期と考える。

VII期

VI期は類似する土器を出土する、SH129(109・111・113・116～118・120・121・124・125)とSH132(106～108・110・112・118・122・123・126)資料を中心にして、SH039(114・115・127)、SH128(119)を加えた。

壺形土器(106・107)は、VI期の複合口縁壺の系譜を継承するものである。複合口縁の立上り部はVI期に比較すると直立し、頸部も短くなる。しかし、胴部以下は図示していないが、同じ遺構から平底の名残を持つ、やや長胴の胴部が出土している。

壺形土器(108～111)はVI期と同じく口縁部が屈曲し、長胴の胴部を持つが、口縁部の外反が弱くなり、直線的に外傾する。また底部は108・109のように平底の面積が縮小し、名残として存在するのみである。その一方、110・111のような丸底が多くなる。

高坏(114～116)は、VI期に存在した坏部の口縁部が内湾するタイプがほとんど姿を消し、口縁部が外反するタイプが主体を占める。このタイプも外反する口縁部が延び、屈曲位置が坏部の中位になる。脚部は円柱状の部分からラッパ状に広がり、円形の穿孔が見られる。117はVI期の86と同じ器形と考えるが、この時期にも存在する。

118は口縁部が外反し、胴部が丸味をおびるが、口径に対し器高が低い鉢形土器に円形の穿孔が縦に2ヵ所並んで付けられた脚を持つ土器である。

112・113は小型で器高が低い土器で、VI期の87～89の系譜を引くが、頸部の縮りが緩くなる。また底部は、118に平底の名残があるものの、113のような丸底が多くなる。

119・120は長頸壺であるが、119がVI期の91の系譜を引き、口縁部は直立気味に立ち上がるが、胴部は扁球状になる。120はVI期の92・93の系譜上にあり、口縁端部が欠けるものの、明らかに外反し、胴部は球状に張る。

2点とも底部は丸底で、Ⅵ期とは大きく異なる

121～125は底部から口縁部に直線的に伸びる鉢形土器であるが、Ⅵ期と比較すると、口縁部形態はほとんど変化はないが、底部はすべて丸底化している。

126は、Ⅵ期の103の宍形器台の系譜を引くものであり、127は円筒形の器台の大型タイプの上部の3分の1が抉れた、器壁の厚い器台で、叩き調較が観察できる。

Ⅵ期の底部を持つ器種の共通性は、壺形土器等に平底の面積を小さくするなど、その名残があるものを含みながらほとんどが丸底化している。また、高環の器形などから、明らかに下大隈式土器より新しく、次に型式設定されている西新式土器に相当すると考え、弥生時代終末に位置付ける。

Ⅶ期

Ⅶ期はSH130(128～134・136～140・142～145・147)の土器を中心に、SH134(135・141・146)で補足した。

壺形土器は、複合口縁壺は確認できなかった。128は口縁部が短く外反し、胴部は球状に張る。129は短い口縁部が外傾し、球状に張る胴部はやや長胴である。

壺形土器(130～135)は器形の大きさはさまざまであるが、Ⅶ期の壺形土器に比較すると、頸部の縮りが緩くなるため、胴部の張りが小さくなる。また、136・137は口径が土器の最大径となる鍋形をしており、これ以前の時期には確認できない器形である。

高環(138・139)は、Ⅶ期115の系譜を引くものである。比較すると脚部に大きな変化はないものの、外反する口縁部がさらに発達するため、屈曲部の位置が、環部の下に移動する。

140は口縁部が緩くくびれる鉢形土器である。また、144～147は底部から緩く湾曲しながら口縁部に達する鉢形土器で、丸底部分が広いので全体が碗形になる。

141～143は短く外傾する口縁部に、浅鉢状の丸底胴部が付く小型丸底壺である。

Ⅶ期の底部は、壺形土器や碗形土器など、大型土器を含む全ての土器が丸底化する。また、口径が最大径となる鍋状の大型土器が存在し、さらに、古墳時代の土器に一般的に存在する小型丸底壺も伴っている。

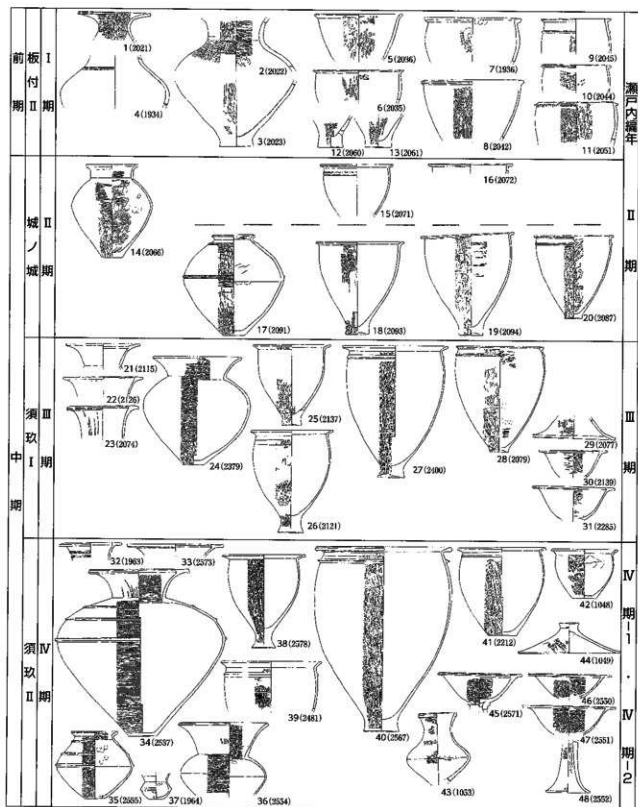
古墳時代の始まりを上器で判断する材料として、近畿地方を中心に分布する庄内式土器の存在がある。この土器は北部九州で西新式土器に伴うことが明らかにされている。大分県でも大分市守岡遺跡Ⅰ区19号住居跡から丸底化した土器群に伴い、小型丸底壺と庄内式土器が出土している⁵¹。

諫山遺跡では庄内式土器は出土していないものの、丸底化の方向性を意識した凸レンズ底の下大隈式土器・高島式土器より明らかに後出する丸底化の進行したⅦ・Ⅷ期は西新式土器に該当する。Ⅶ期は、さらに丸底化が進行しており、新たな器種も出現する。武末純一が述べる、⁵²「北部九州での庄内式土器の流入期である西新式期の早い段階を弥生時代の下隈とする」とするならば、同じ西新式土器でもⅦ期を「早い段階」とし、Ⅶ期を古墳時代初頭の土器群と考える。

(坂本嘉弘)

註

- 1 森貞次郎 1955 「各地域の弥生式土器—北九州—」『日本考古学講座4 弥生時代』河出書房
1966 「弥生文化の発展と地域性—九州—」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
- 2 小田富士雄 1972・1973 「入門講座 弥生土器 九州1～6」『考古学ジャーナル76・77・79・82～84』ニューサイエンス社
- 3 武末純一 2011 「弥生文化の地域的様相と発展—九州北部地域—」『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』青木書店
- 4 賀川光夫 1951 「東九州における押型土器と弥生式土器」考古学雑誌第37巻第1号
- 5 賀川光夫 1958 「大分県国東町弥生式遺跡の調査」九州総合文化財研究所
- 6 北九州市瀬戸文化財調査会 1976 「北九州市小倉南区・高島遺跡」古文化財調査報告書第3号 古文化研究会
- 7 大分県教育委員会 1975 「台ノ原遺跡」大分県文化財調査報告書第33輯
- 8 安心院町教育委員会 1984 「安心院 宮ノ原遺跡」
- 9 行橋市教育委員会 1985 「下俣田遺跡」行橋市文化財調査報告書第17集
- 10 下関市教育委員会 1981 「鏡塚木塚遺跡」
- 11 大分市教育委員会 1976 「守岡遺跡」



() 内番号は押図の土器番号

第 18 図 諫山遺跡出土 弥生時代 前・中期土器編年図 (1/12)

第2節 諫山遺跡について

縄文時代から近世にかけて、各時期の様々な遺構が出土した。調査面積は32,766平方メートルにおよぶ。今回の調査では、道路幅約50～60メートルのトレンチを東西に台地を横断するように600メートルにわたって設定したことになる。台地全体からすれば微々たるものであるが、この台地上に展開した各時代の様相の一端は明らかにすることが出来た。最後に、時代ごとに要点をまとめておきたい。

旧石器はほとんど出土していないことから、諫山の台地では大規模な旧石器時代遺跡は形成されていない可能性が高い。縄文時代になると、多数の陥し穴が掘られる。分布は台地西側に偏っており、西側斜面を上り下りする動物を捕獲するために作られたことがわかる。他の遺構は全く確認されなかったことから、居住域とは隔絶した狩猟場であったことが想定出来る。しかしながら、後期の土器が僅かではあるが出土していることは、これらが陥し穴に伴うものでなければ、後期にはこの台地上で集落が展開していた可能性がある。

弥生時代になると、台地の東側（犬九川の沖積地を見下ろす側）で前期末に貯蔵穴が多く作られる。この貯蔵穴群は台地中央や台地西側には及んでいない。つまり、東九州の地に弥生文化の大きな波が押し寄せた前期末になって、この広い台地の東側の一角にも稲作に基盤を置いた集落が出現したことを示唆するものである。中期になると、台地中央部寄りにまで集落が広がって行き、中期後半には台地西側にも建物が建てられる。おそらく中期の後半から後期中頃にかけてがピークと思われ、大型円形（多角形）堅穴建物と小型方形堅穴建物に中・小規模掘立柱建物が伴う集落景観が想定出来る。後期後葉～終末には大型建物も全て方形となり、数基ずつのまとまりをなすように見える。この動きは古墳時代初頭までに及ぶ。このように、前期末に台地上に出現した集落は、おそらく途切れることなく古墳時代初頭までは存続している。注目出来るのは、前期末から古墳時代初頭までほぼ一貫して台地中央部には建物が建てられないことである。このことは、台地西側と台地東側の集落が同一集落ではなかったことを示すと同時に、台地中央部における土地利用のあり方を示すものであろう。畑地などが広がっていたと想定したいが、それを示す遺構、遺物は出土していない。畑作に関係すると考えられる扁平打製石斧の出土傾向を見ると、出土グリッドの分かる44点が東西方向に刻んだ5から31ラインに収まり、中央部には及んでいない（ちなみに、東側は3点）。つまり32ラインから47ラインの間では出土していない。よって、扁平打製石斧の出土と台地中央部の畑作とは結びつかない。

古墳時代初頭まで続いた集落は、4世紀代になって姿を消す。その後、200年余りの空白期間の後、6世紀代以降になって4軒の竈を持つ建物が建てられるが、大規模集落に発展することはなかった。

しかし、7世紀から8世紀になると、直線的に延びる溝が掘られ、さらに9世紀代になると台地東側で幾つか土坑が掘られ、周辺からは越州窯青磁や緑釉陶器が出土した。この動きは12世紀前半頃まで継続しているとみられる。このことは、豊後大野市の加原遺跡の動態とほぼ同様であり、12世紀後半から13世紀になって龍泉窯青磁碗を持つ集落遺跡が出現する直前の状況を示している。加原遺跡がそうであったように、この諫山台地の一角に何らかの公的機関あるいは在地土豪（郡司など）の居宅などの施設が存在した可能性を考えておきたい。下毛郡司に諫山氏の名前が見えることと何らかの関係性を有するものと考えられる。

その後は、また300年ほどの空白を置いて、15世紀中頃になって台地西部で屋敷区画が作られる。この屋敷の居住者については不明であるが、諫山地区における有力者であったことは間違いない。諫山氏は15世紀代に衰退すると考えられることと、別地点の「城屋敷」が諫山氏の居館の可能性があるので、名主クラスの諫山氏を居住者とすることはできないだろう。この屋敷は18世紀中頃まで継続するが、調査範囲内ではその後屋敷として利用されることはなかったようである。（小柳和宏）

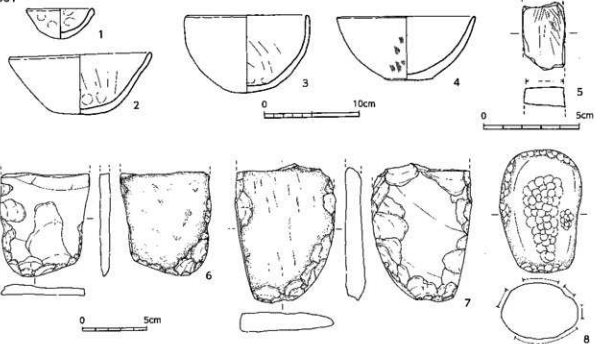
参考文献

『三光村史』三光村 昭和63年

『加原遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター 平成26年

遺物 図 版

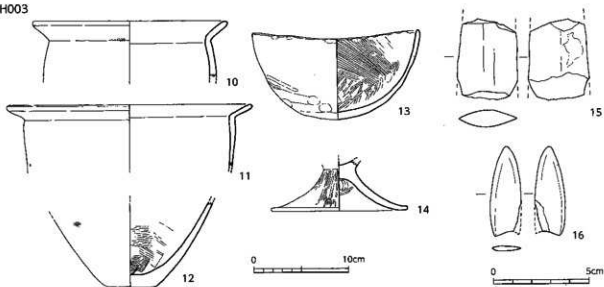
SH001



SH002

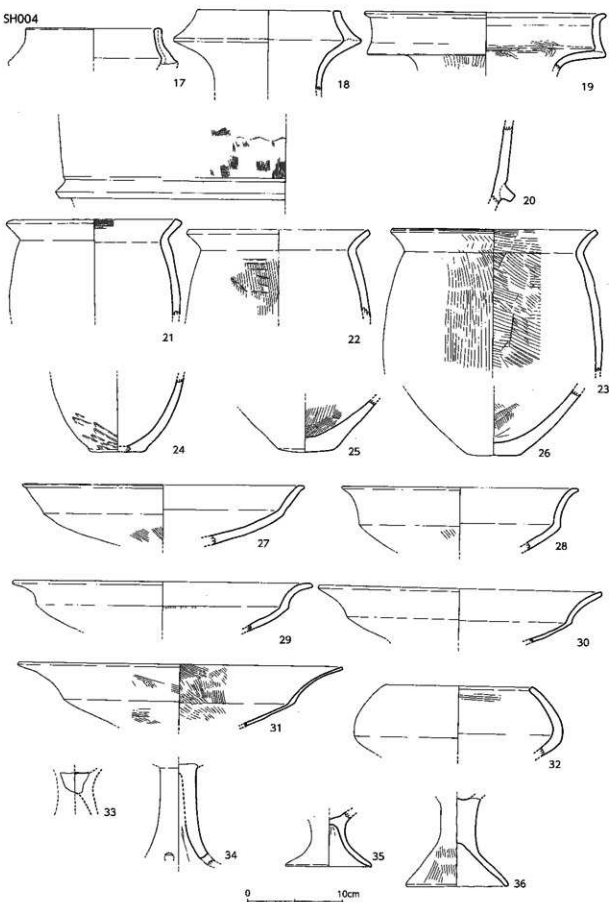


SH003



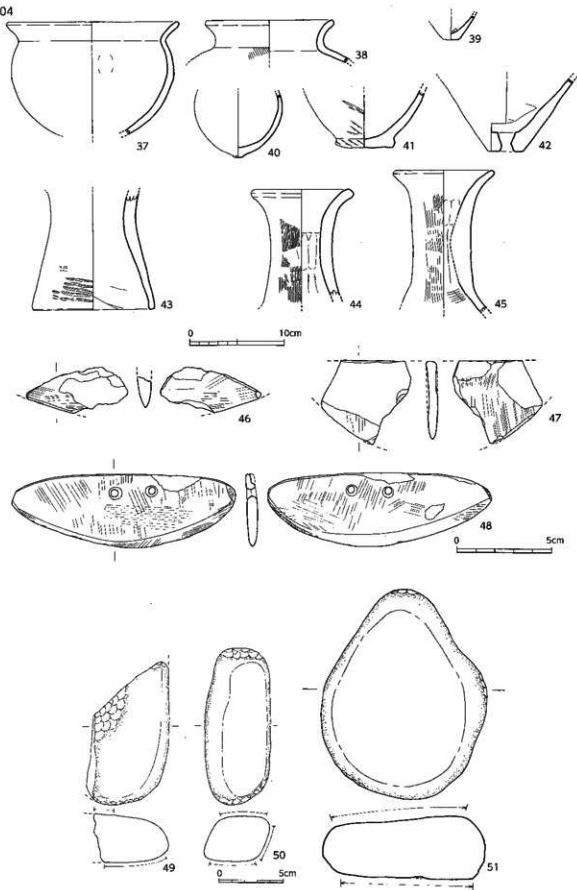
第20圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(1)

SH004

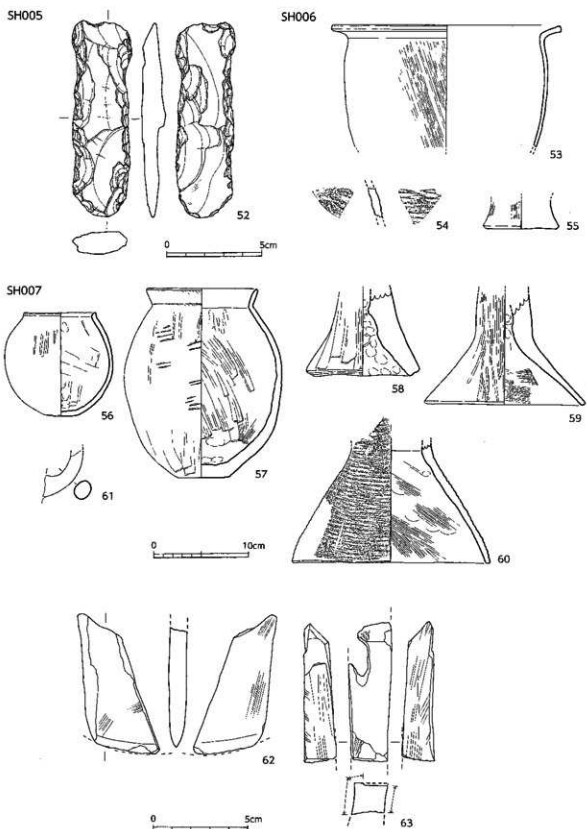


第21圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(2)

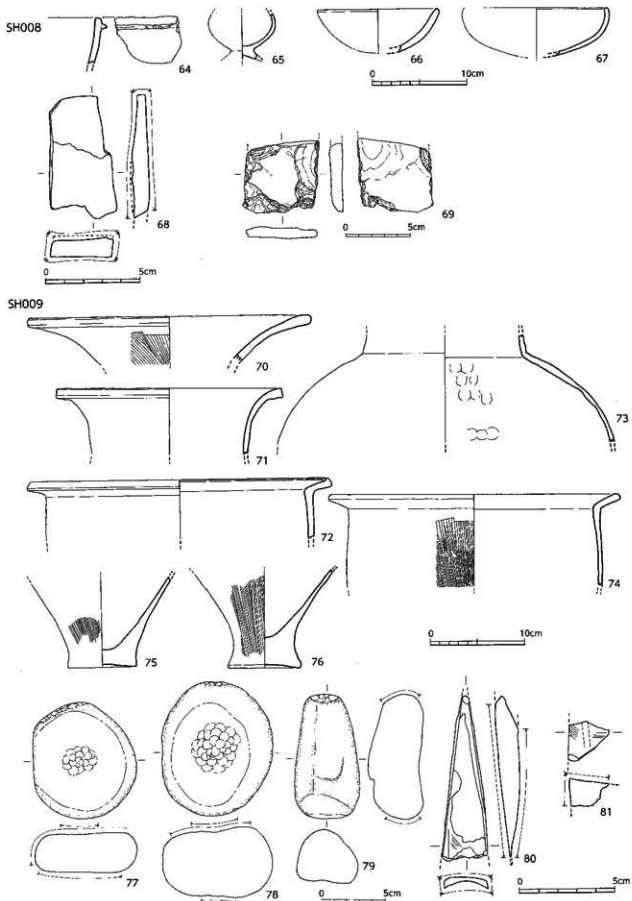
SH004



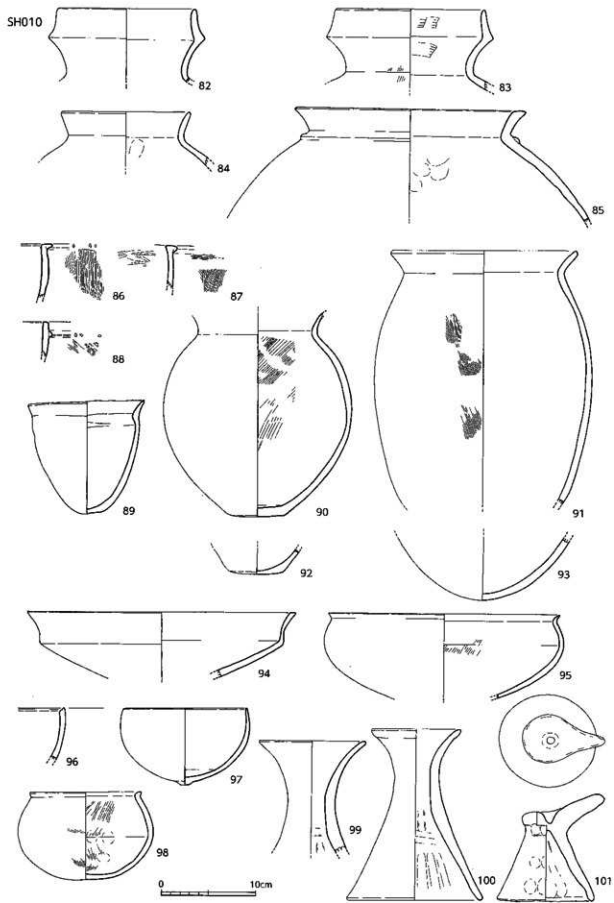
第 22 圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (3)



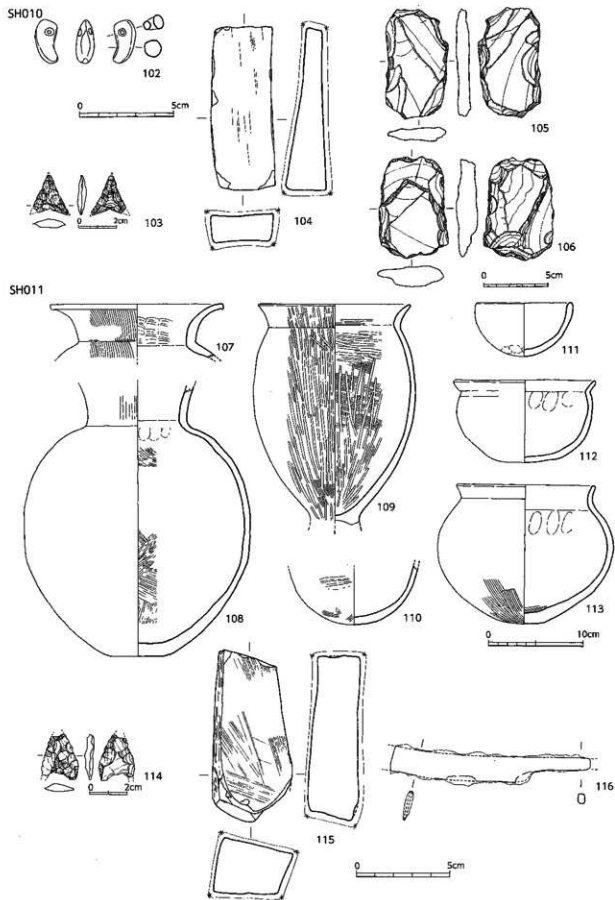
第23图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(4)



第24図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(5)

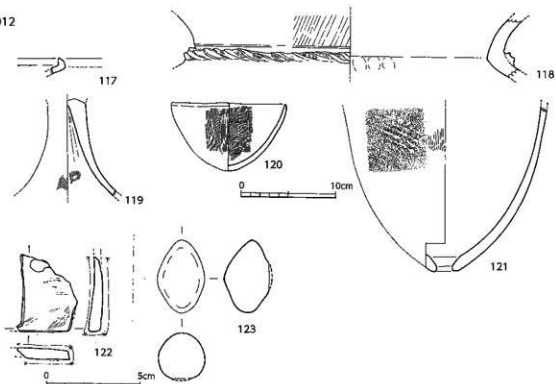


第 25 图 鍊山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (6)

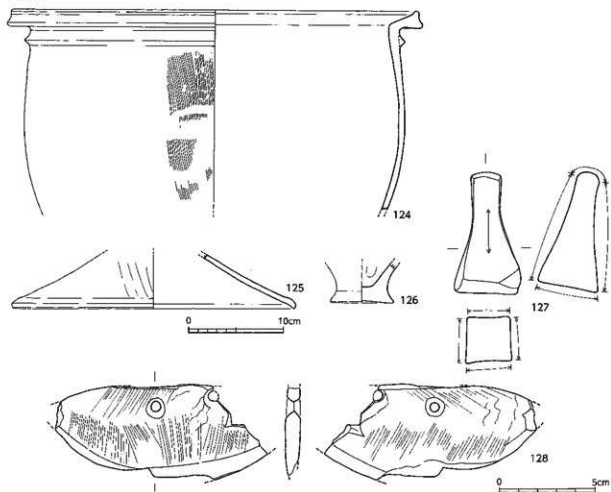


第26圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(7)

SH012

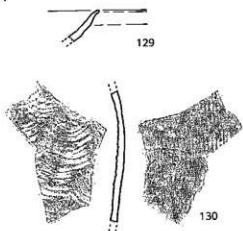


SH013

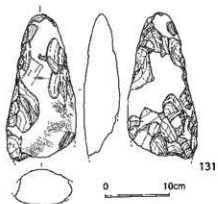


第27図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(B)

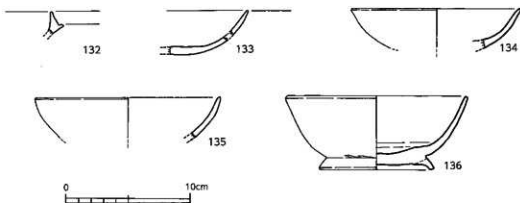
SH014



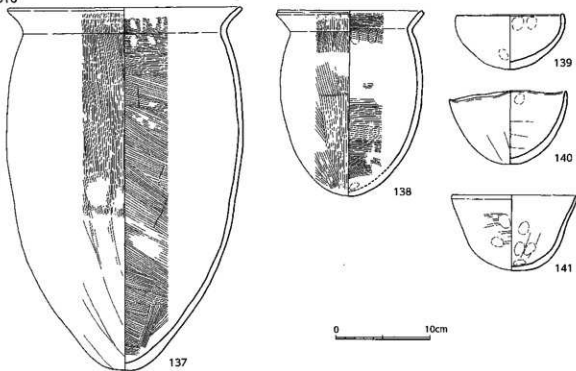
SH010



SH015

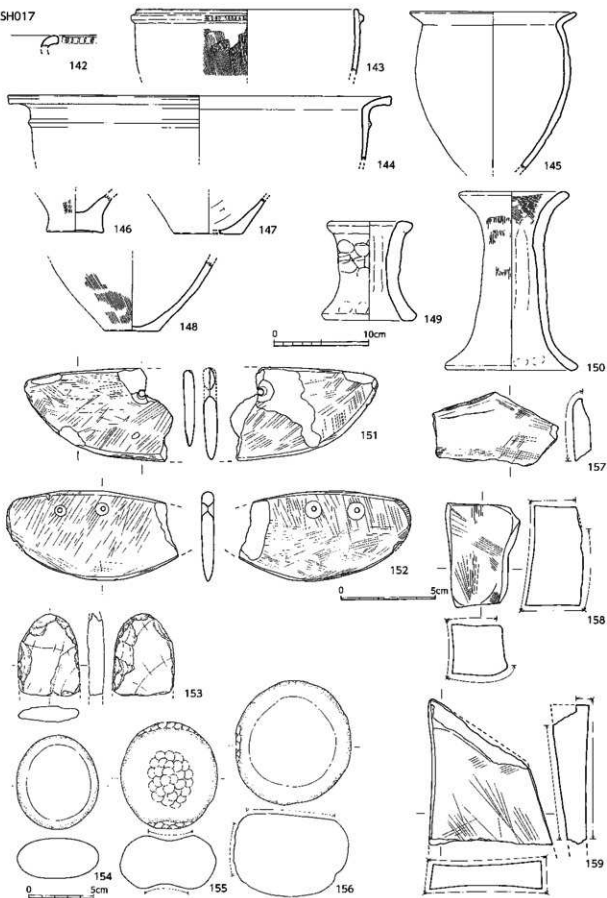


SH016



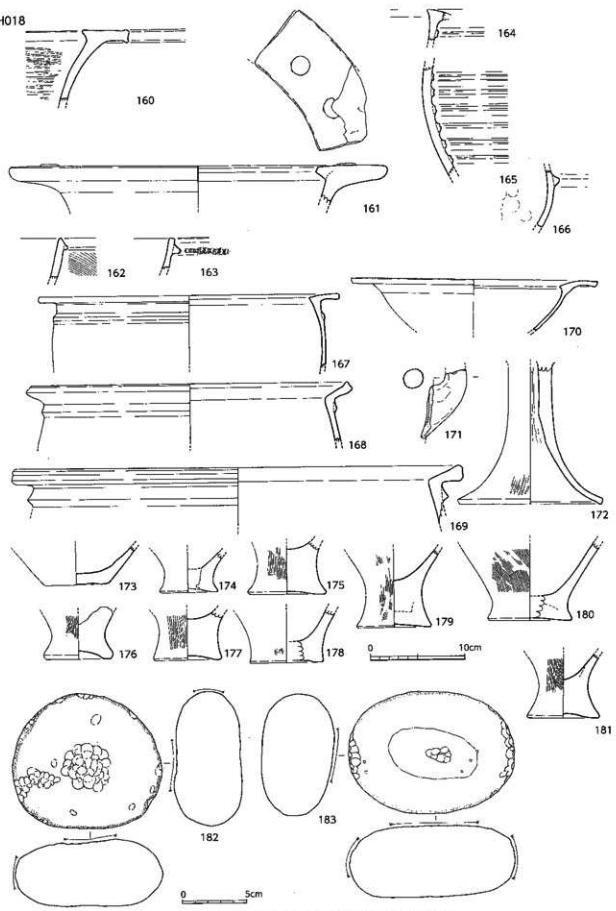
第28圖 譚山遺跡 住居跡出土遺物実測図(9)

SH017

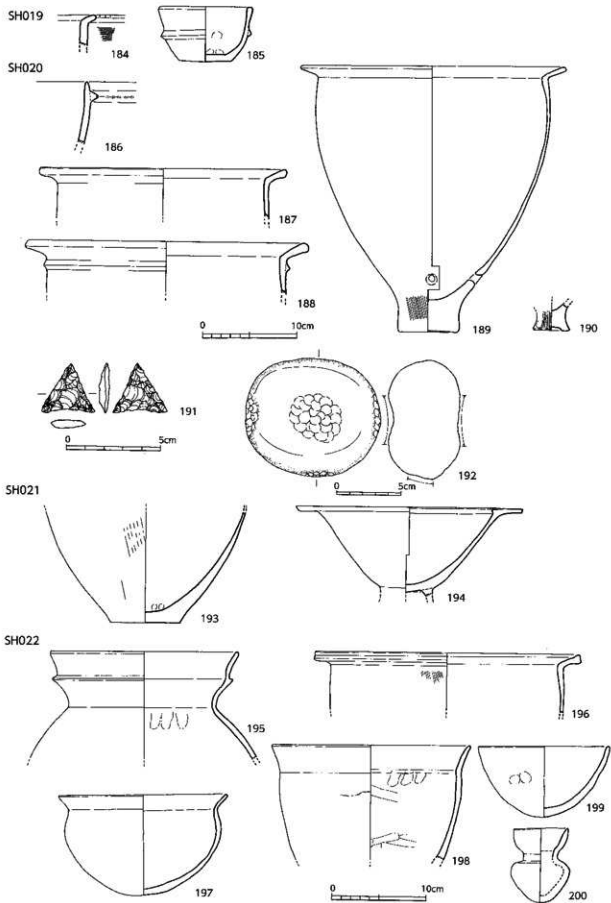


第 29 图 陟山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (10)

SH018

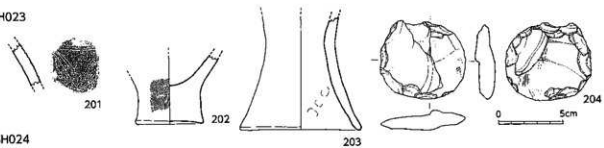


第30图 陕山道跡 住居跡出土遺物実測図(11)

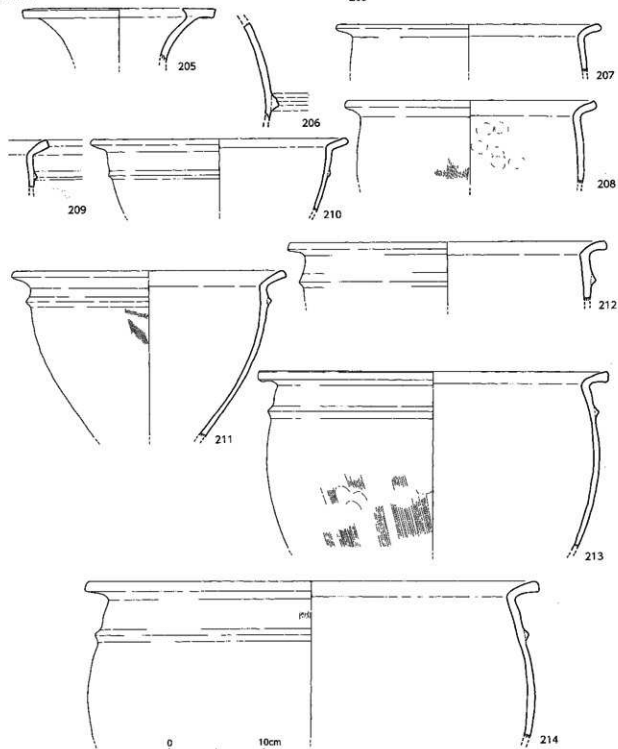


第31图 崦山遺跡 住居跡出土遺物実測図(12)

SH023

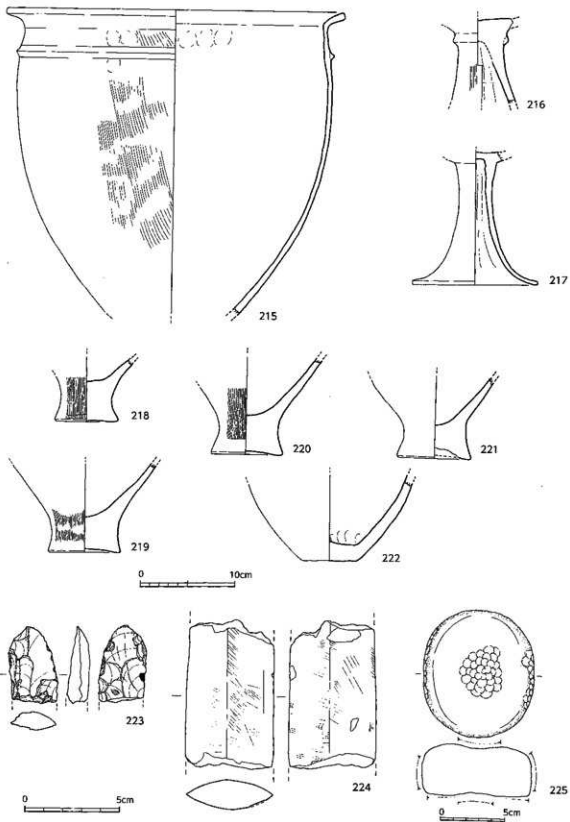


SH024

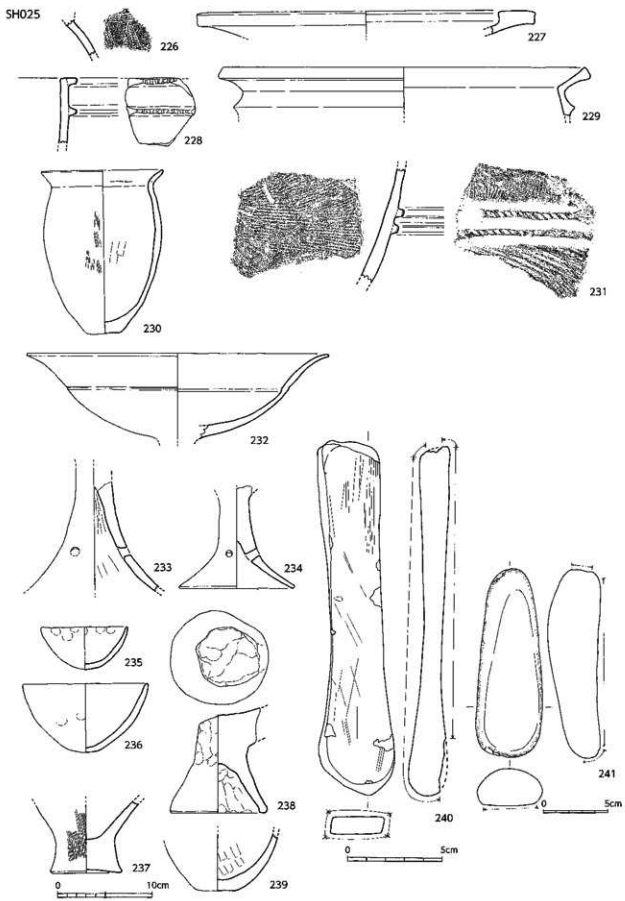


第32圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(13)

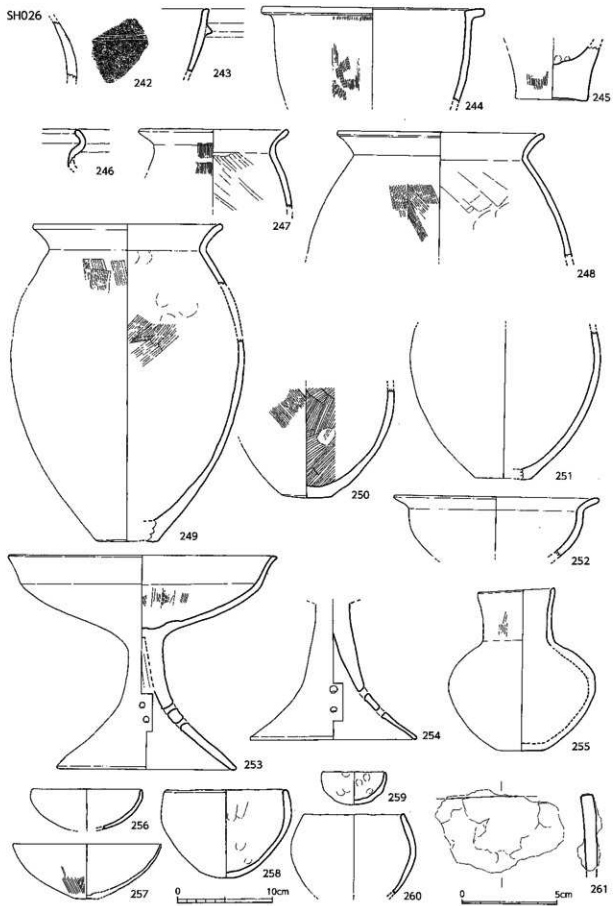
SH024



第 33 圖 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (14)

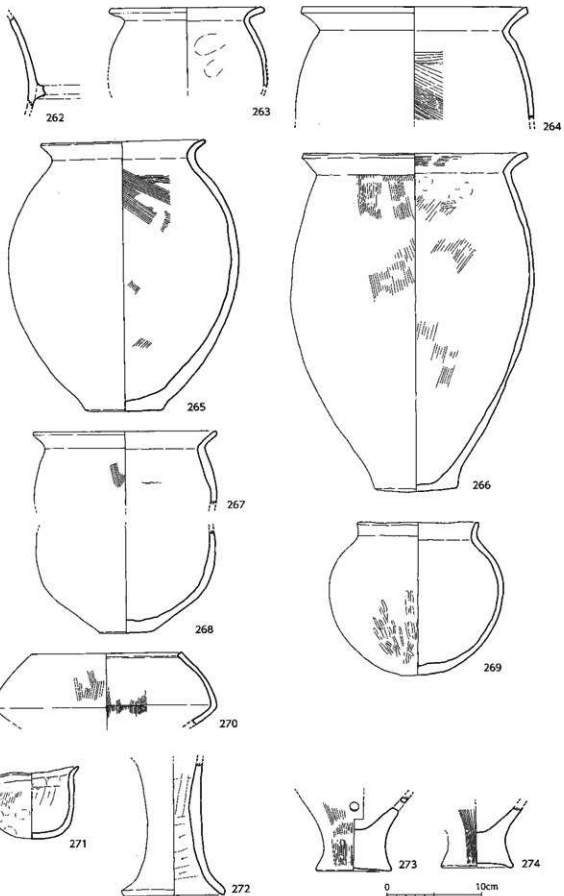


第34图 諫山遺跡 住居跡出土土器実測図(15)



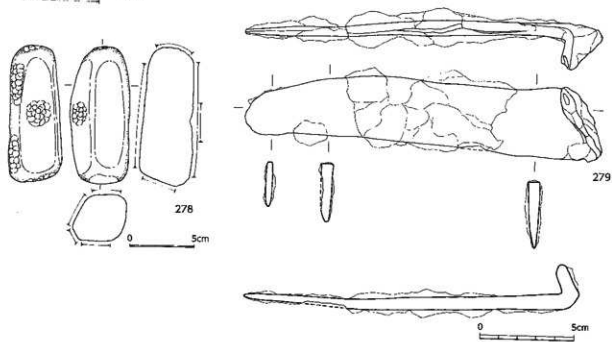
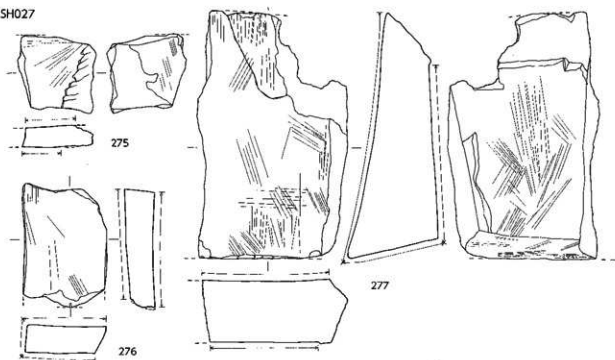
第35圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(16)

SH027

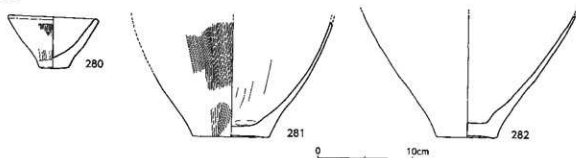


第36圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(17)

SH027

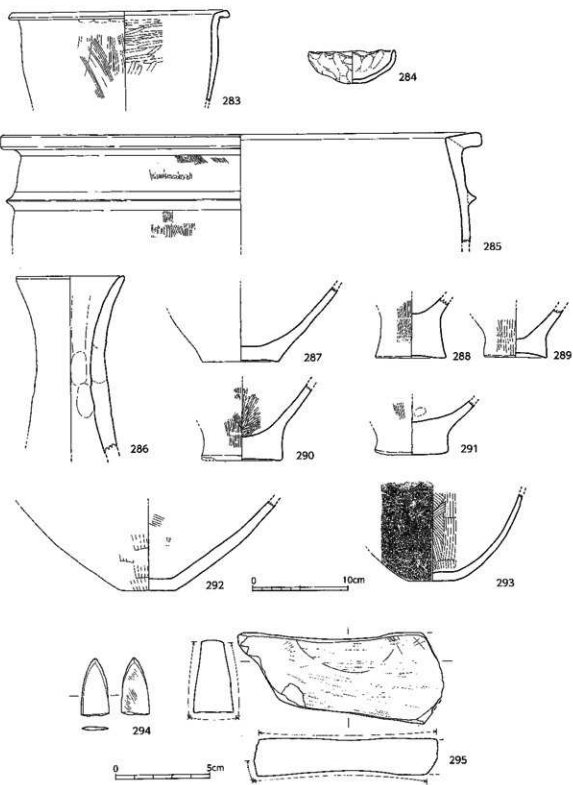


SH028



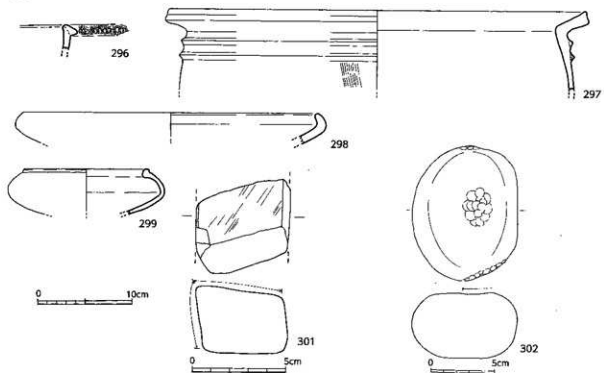
第 37 图 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (18)

SH029

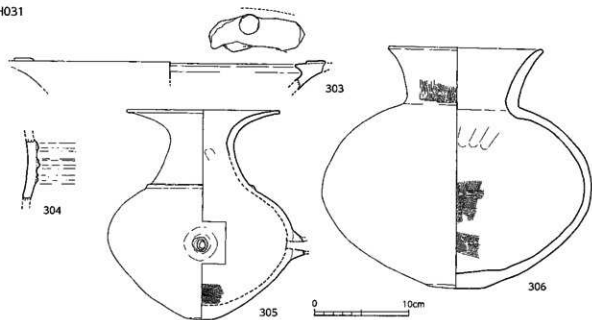


第38圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(19)

SH030

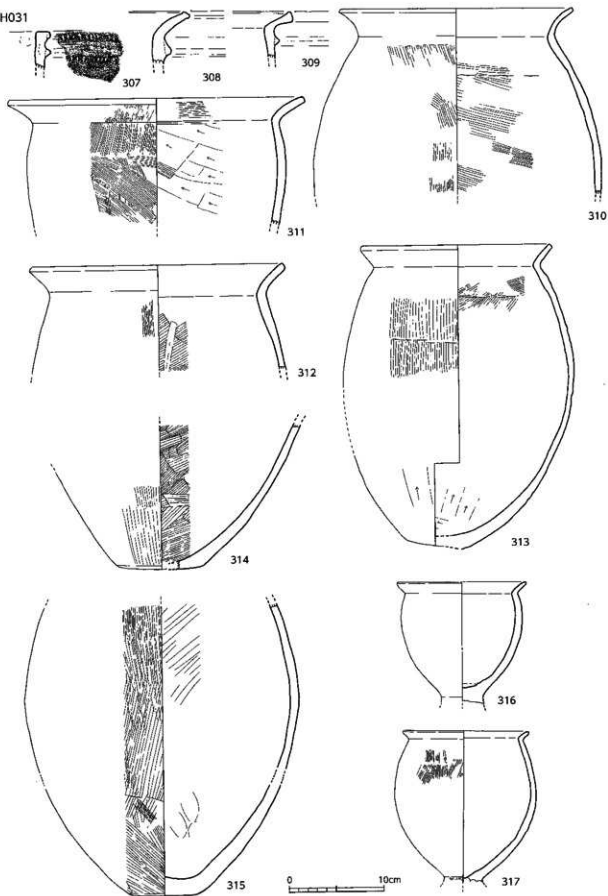


SH031

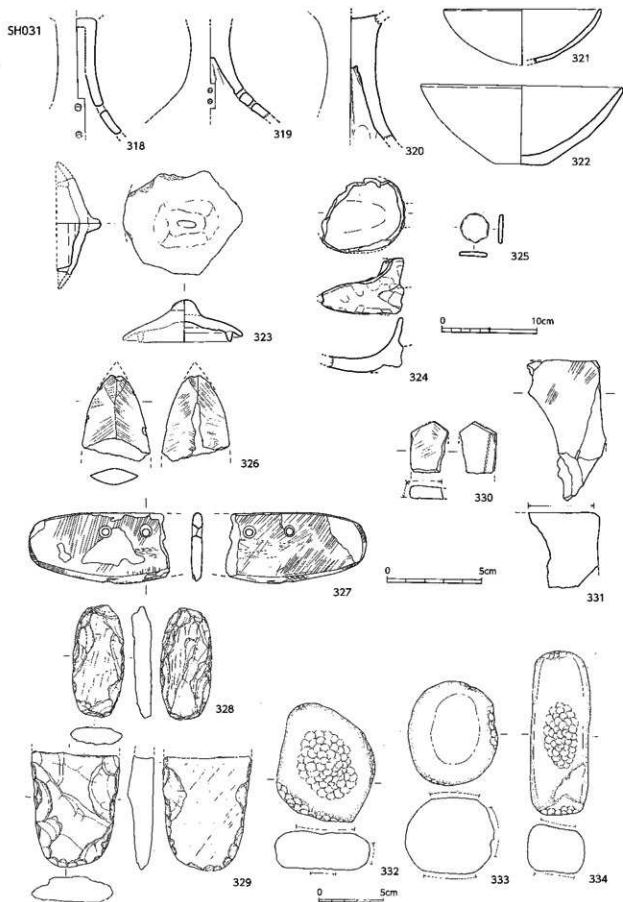


第 39 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (20)

SH031

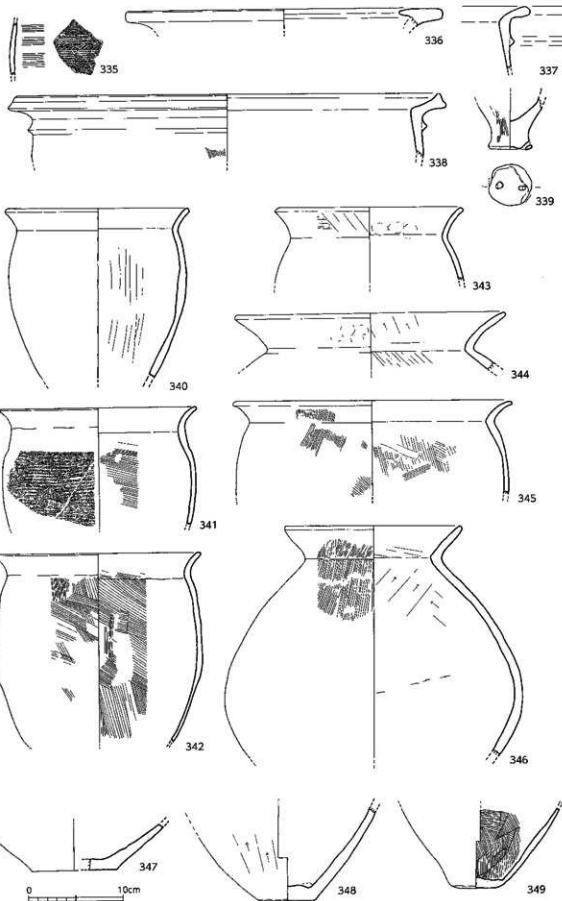


第 40 图 陕山道跡 住居跡出土遺物実測図 (21)



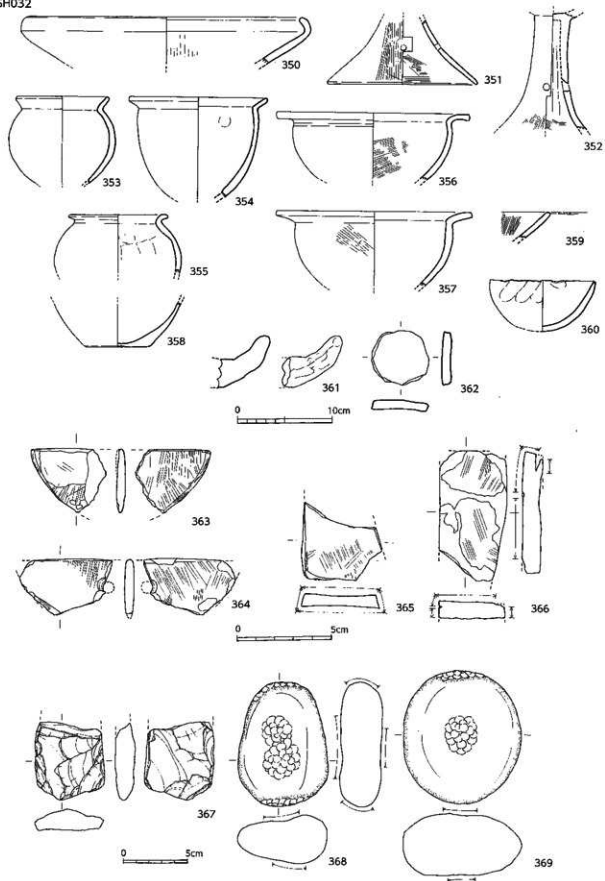
第 41 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (22)

SH032



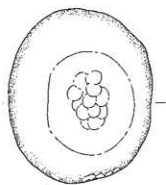
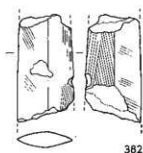
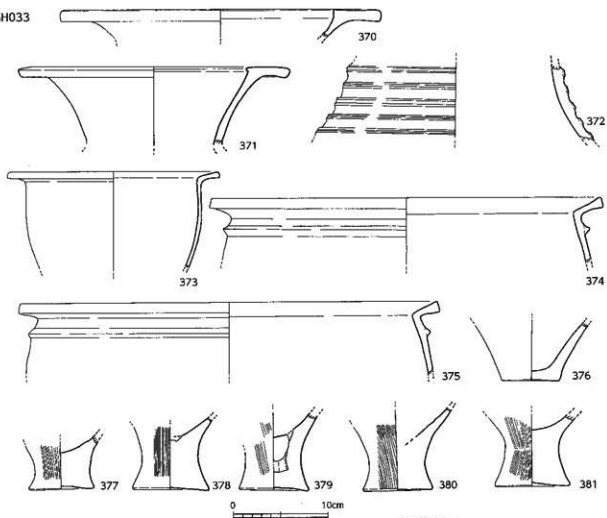
第42図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(23)

SH032



第 43 图 鎌山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (24)

SH033

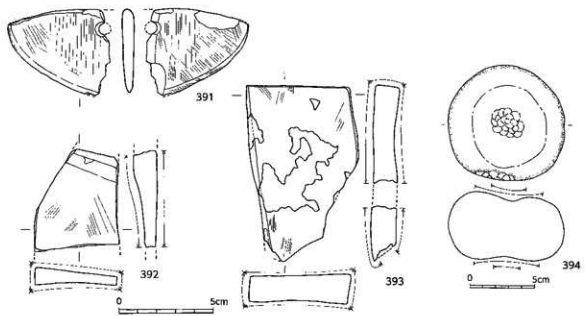
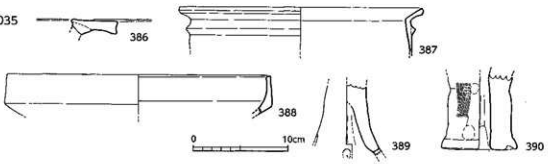


SH034

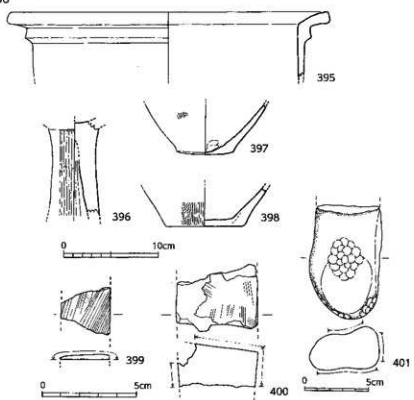


第 44 図 課山遺跡 住居跡出土土器実測図 (25)

SH035

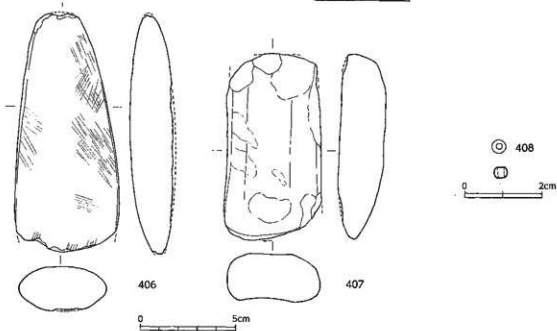
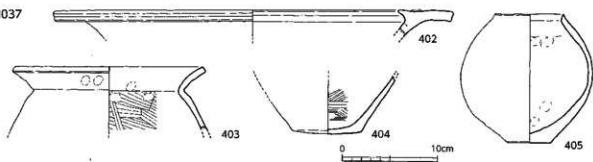


SH036

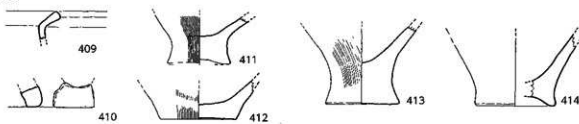


第 45 图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (26)

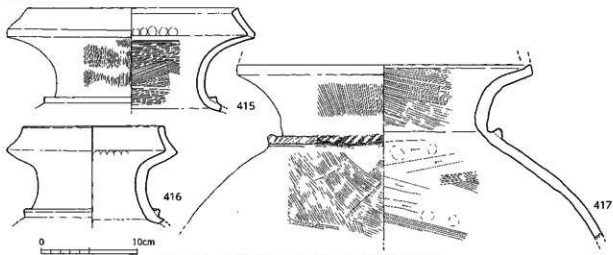
SH037



SH038

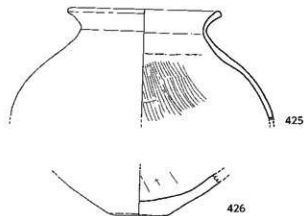
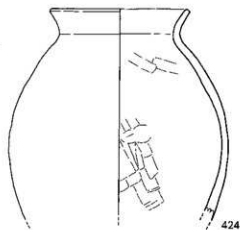
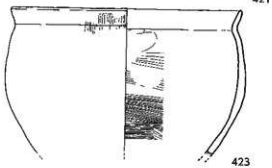
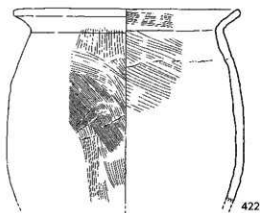
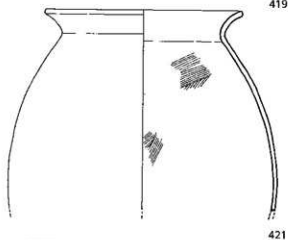
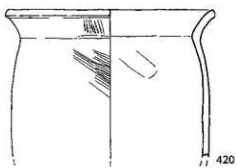
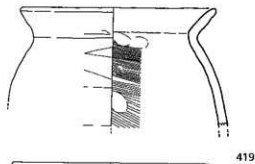
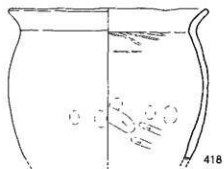


SH039



第46图 滕山遗址 住居跡出土遺物実測図(27)

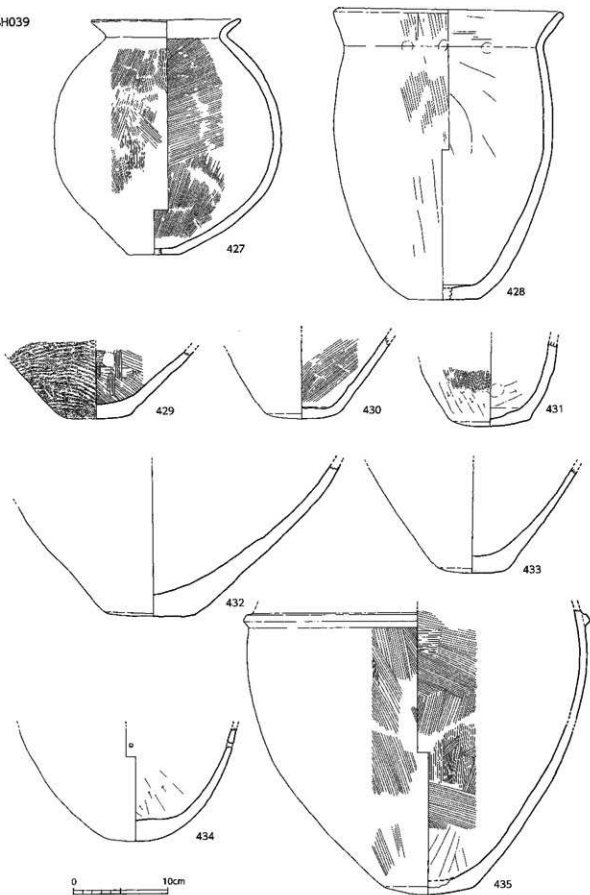
SH039



0 10cm

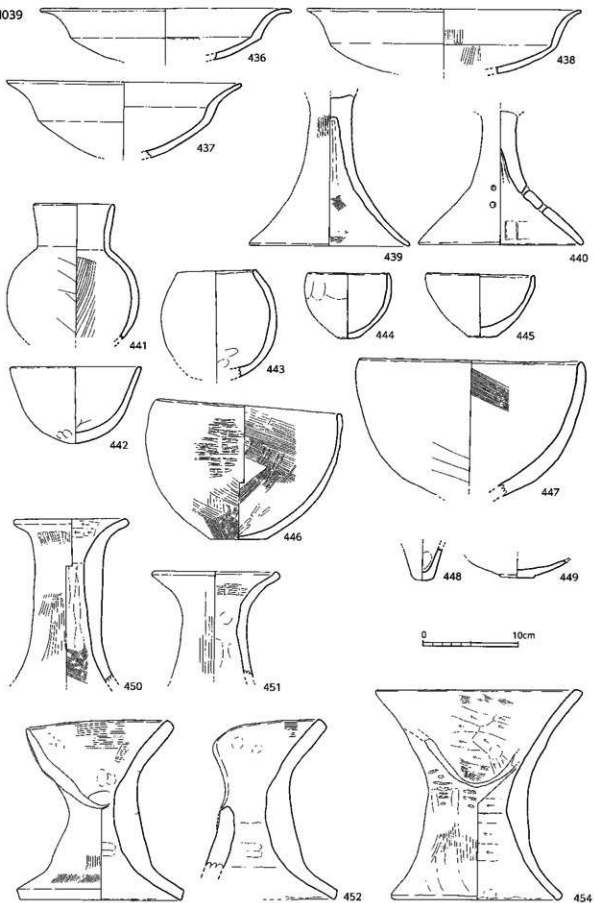
第 47 图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (28)

SH039



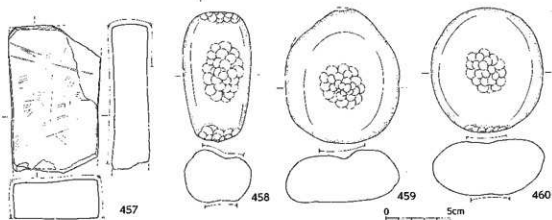
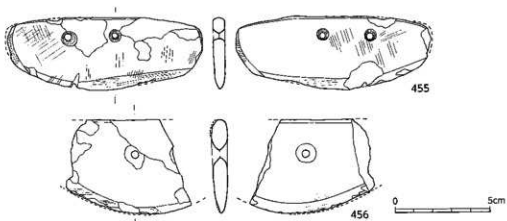
第 48 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (29)

SH039

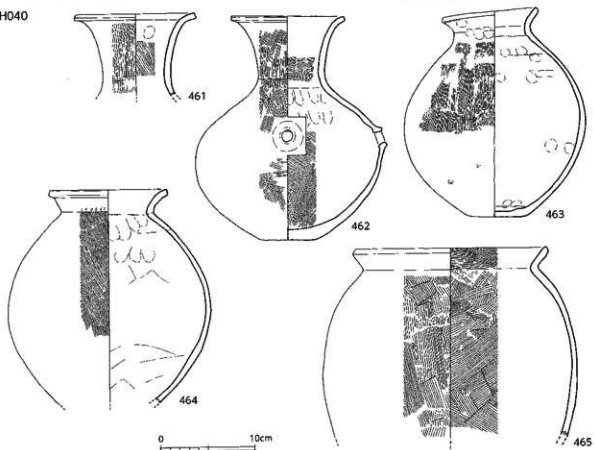


第 49 图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (30)

SH039

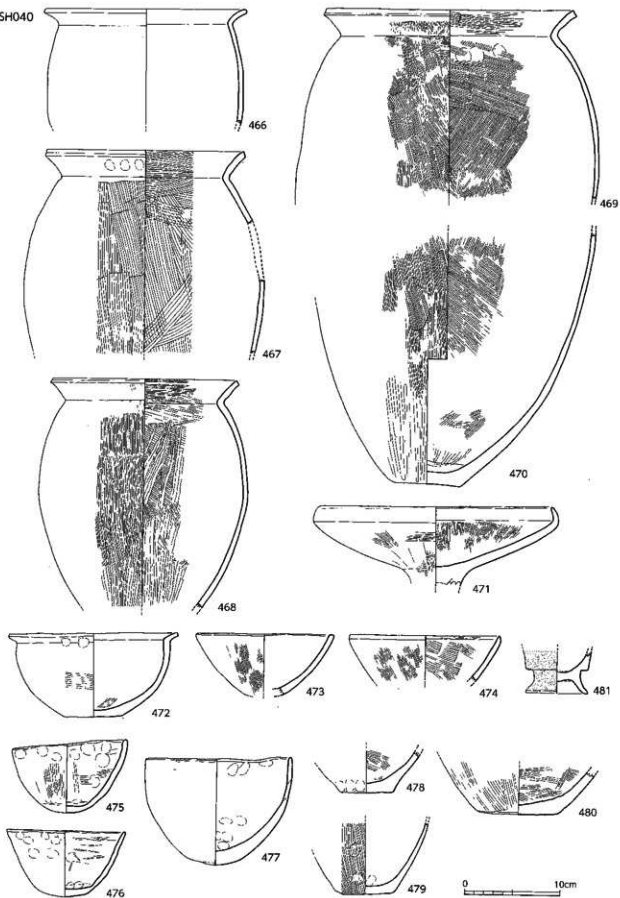


SH040



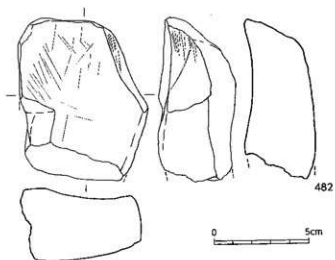
第50図 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測図(31)

SH040

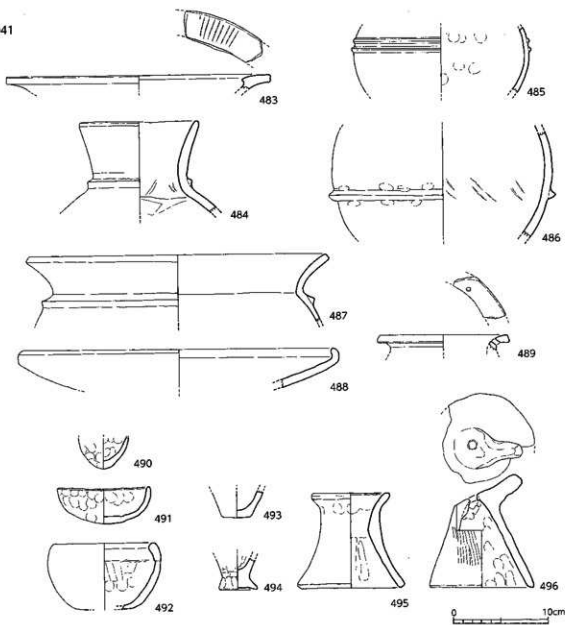


第51図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(32)

SH040



SH041

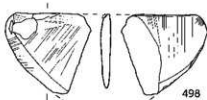


第 52 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (33)

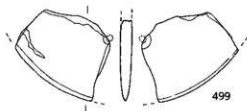
SH041



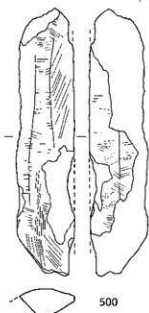
497



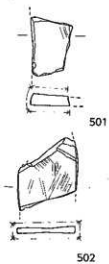
498



499



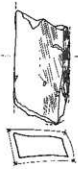
500



501



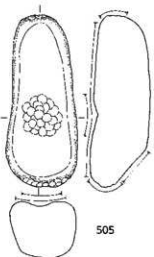
502



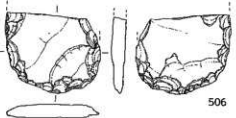
503



504



505



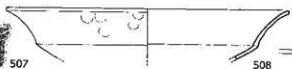
506



SH042



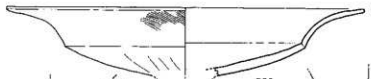
507



508



510



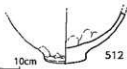
509



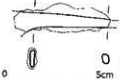
513



511



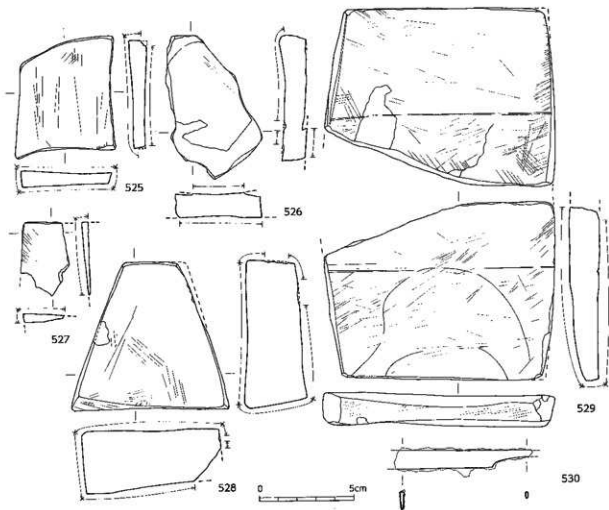
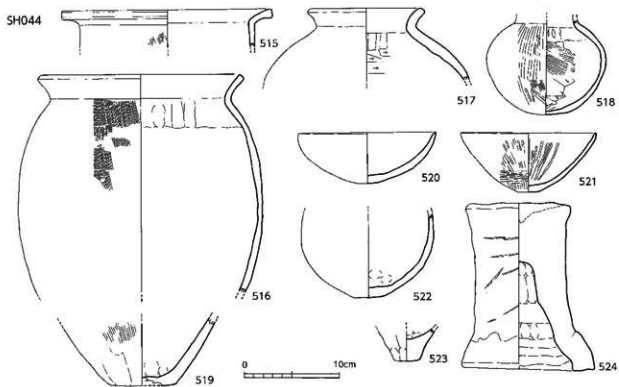
512



514

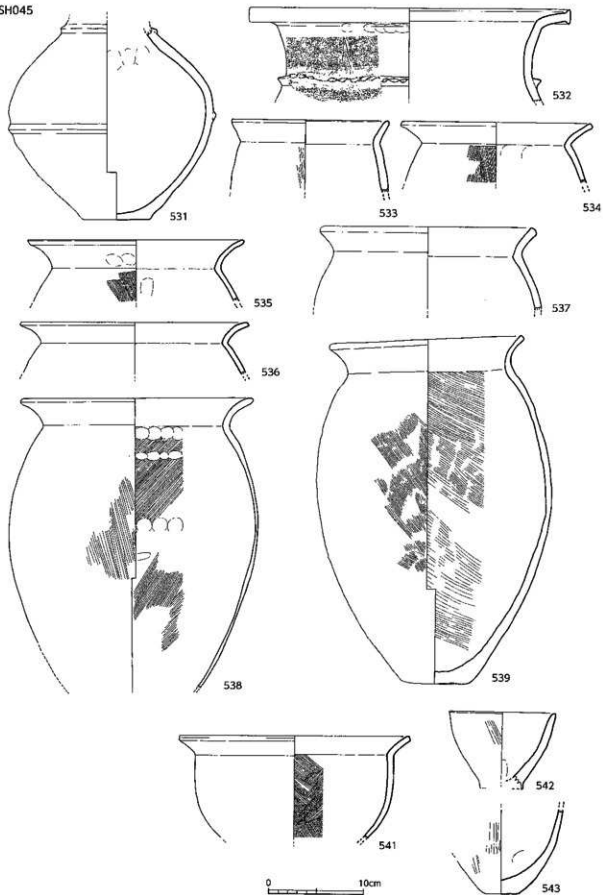


第 53 图 疎山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (34)

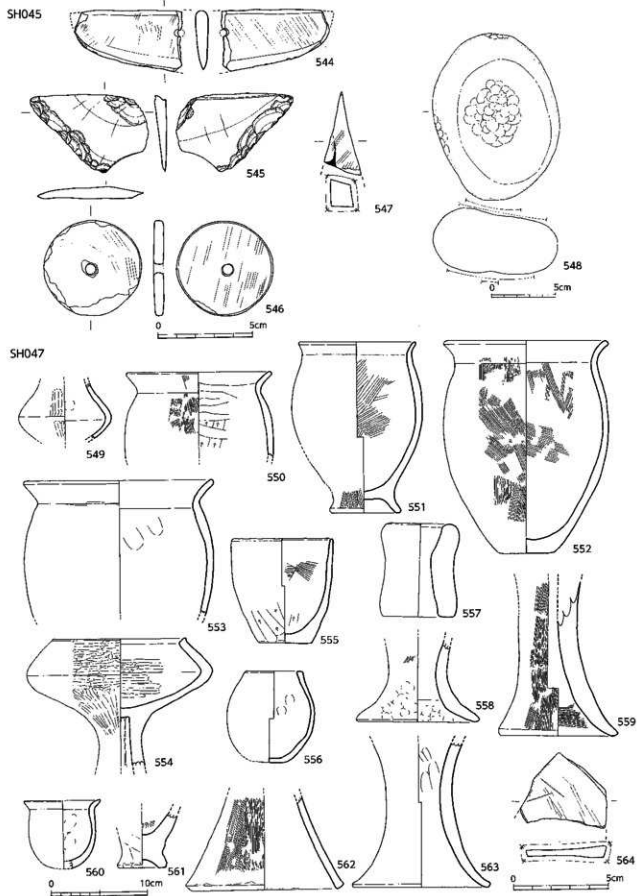


第 54 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (35)

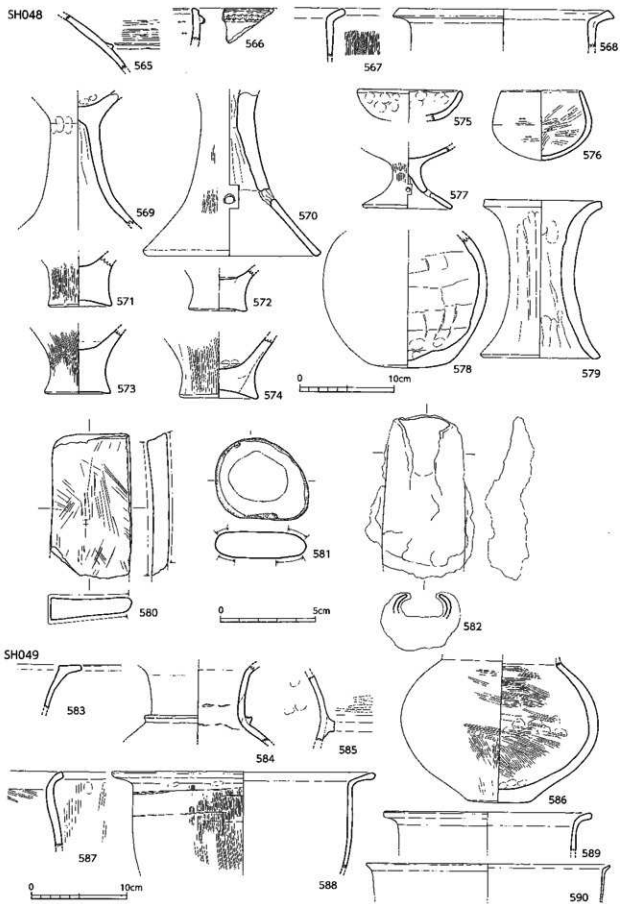
SH045



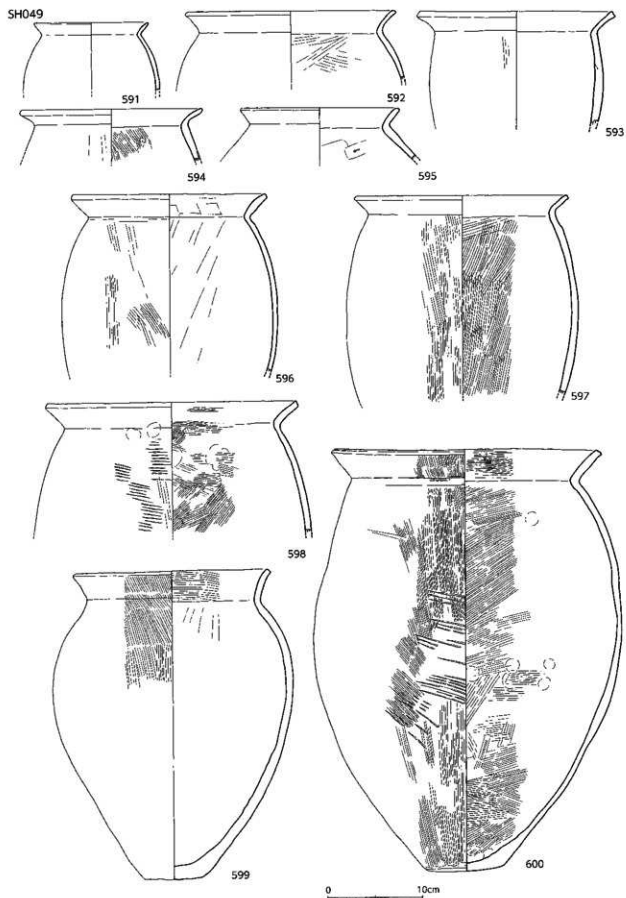
第 55 図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (36)



第 56 圖 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (37)

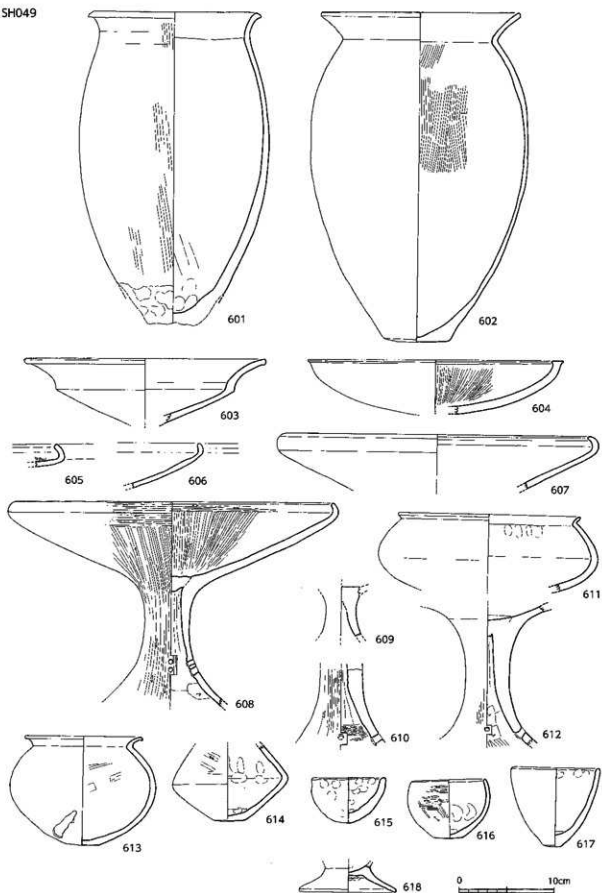


第 57 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (38)



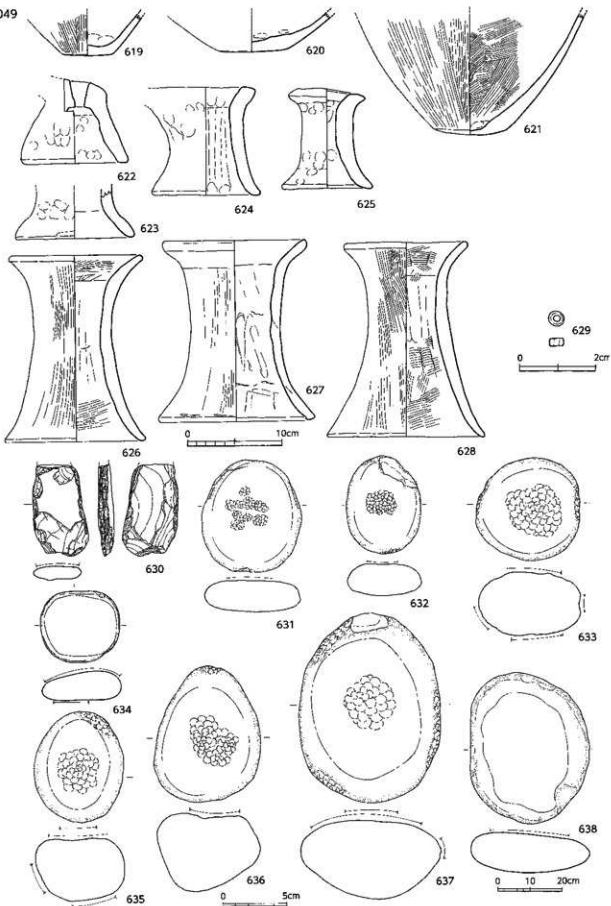
第 58 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (39)

SH049



第59図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(40)

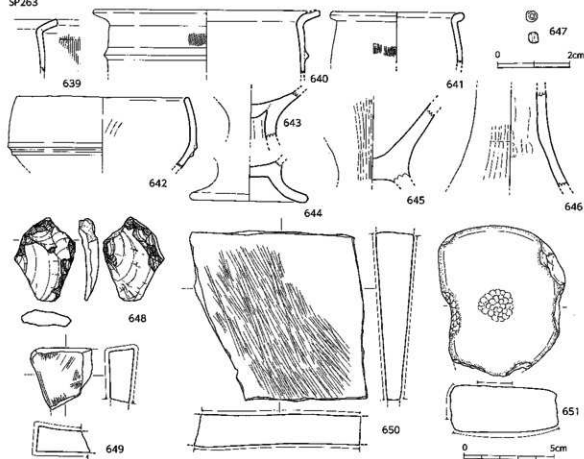
SH049



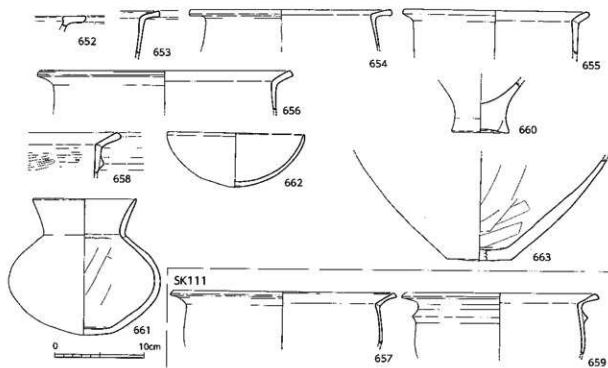
第60圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(41)

SH050・051・052

SP263



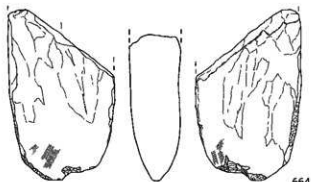
SH053



SK111

第61図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図(42)

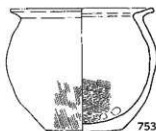
SH053



664



0 5cm



753

SH054



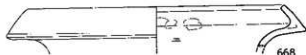
665



666



667



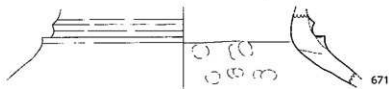
668



669



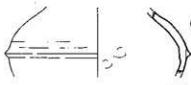
670



671



672



673



674



675



676



677

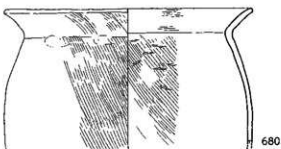


678



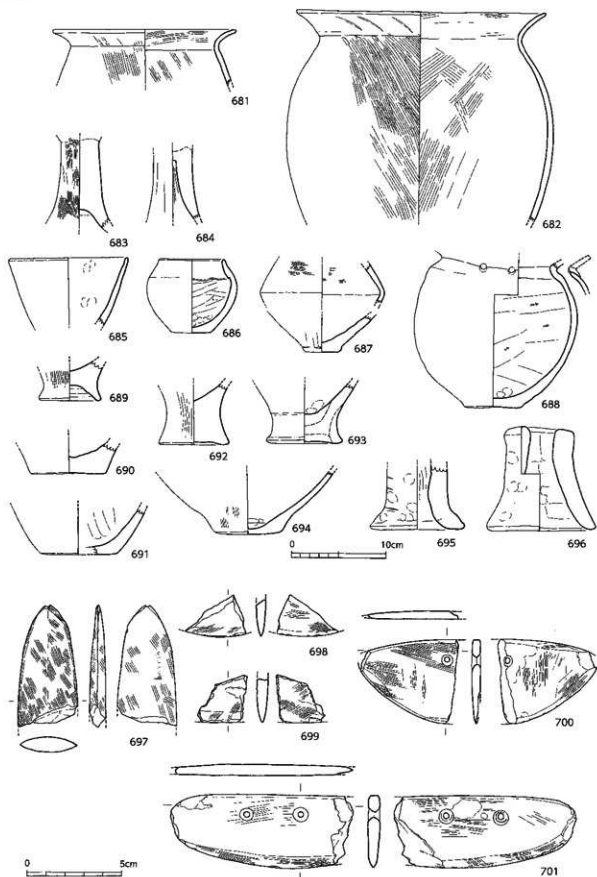
679

0 10cm



680

第 62 图 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (43)

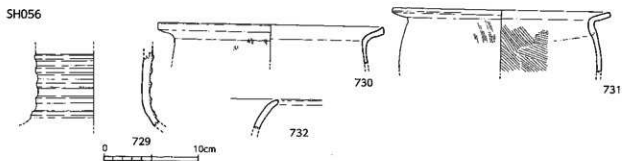
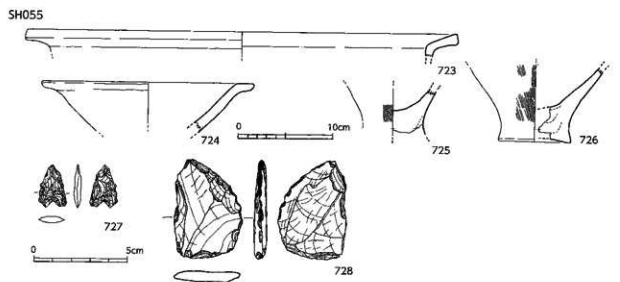
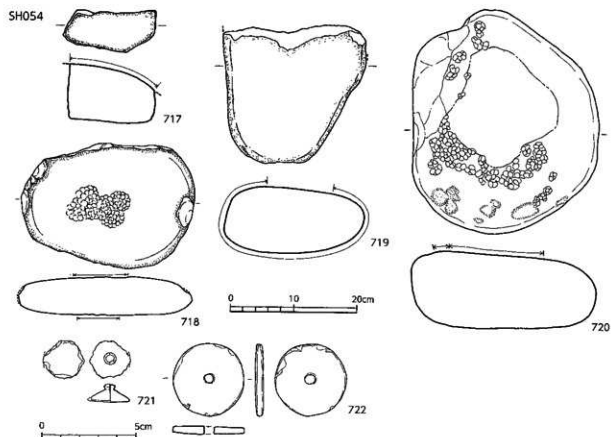


第63圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図(44)

SH054

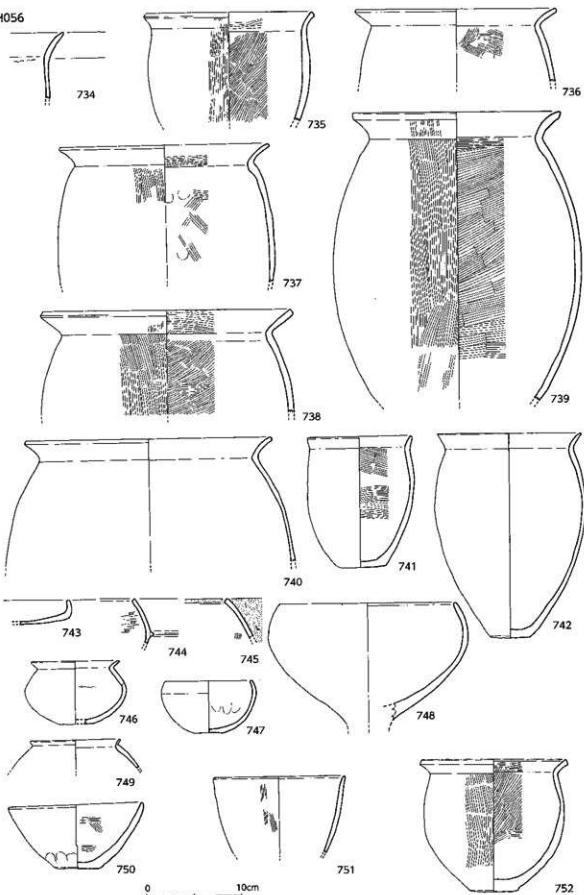


第64図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(45)

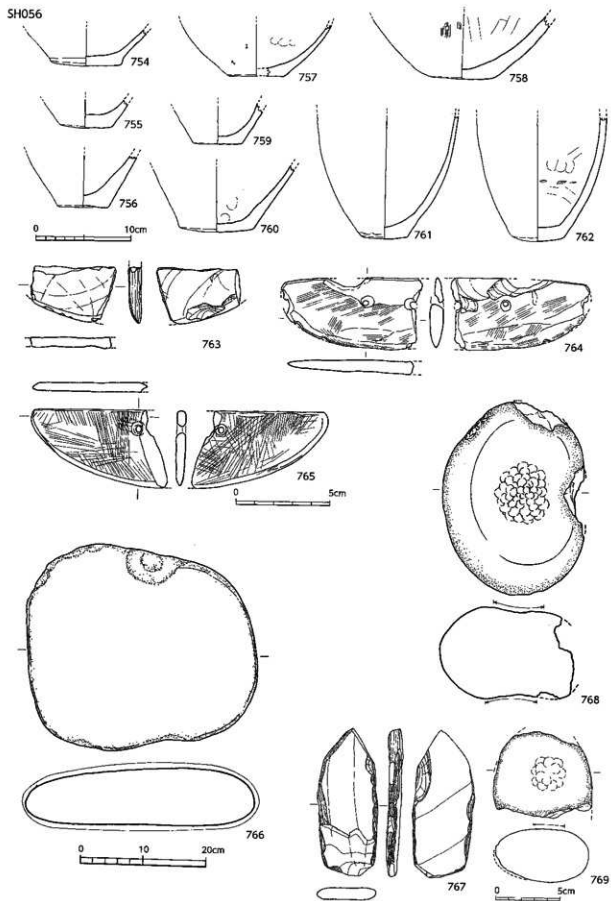


第 65 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (46)

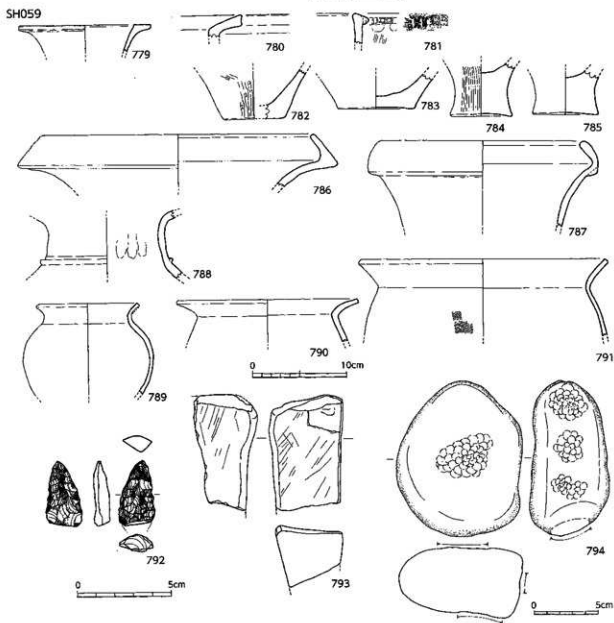
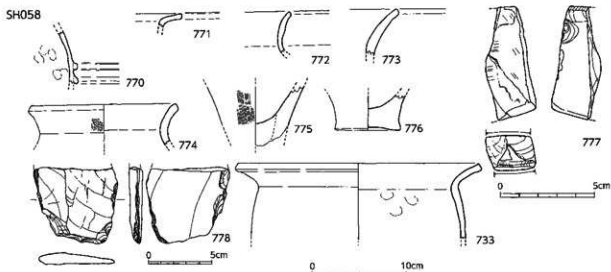
SH056



第 66 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (47)

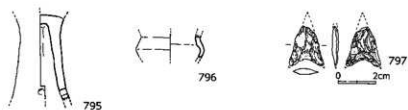


第 67 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (48)

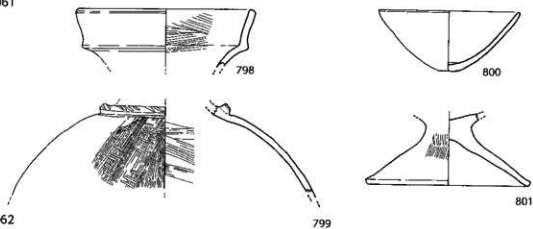


第 68 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (49)

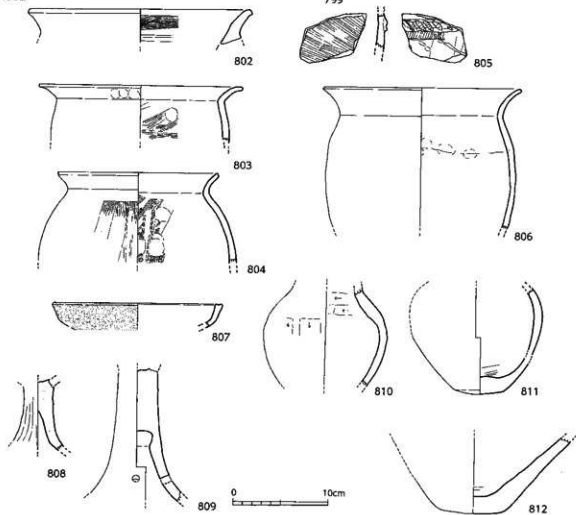
SH060



SH061

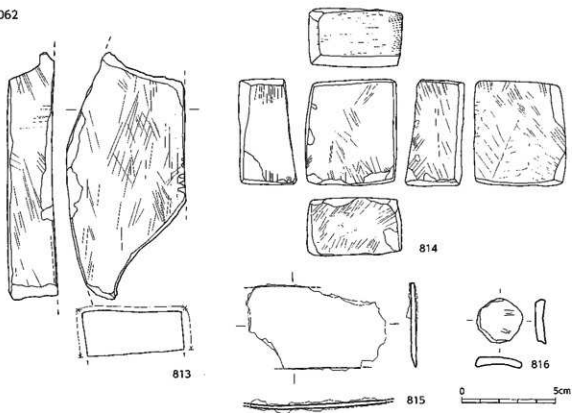


SH062

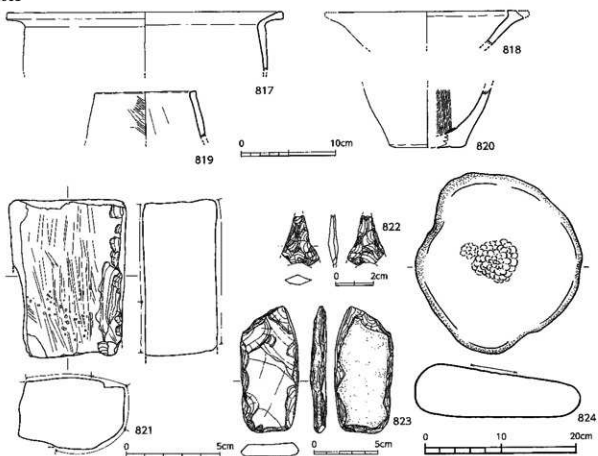


第 69 圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (50)

SH062

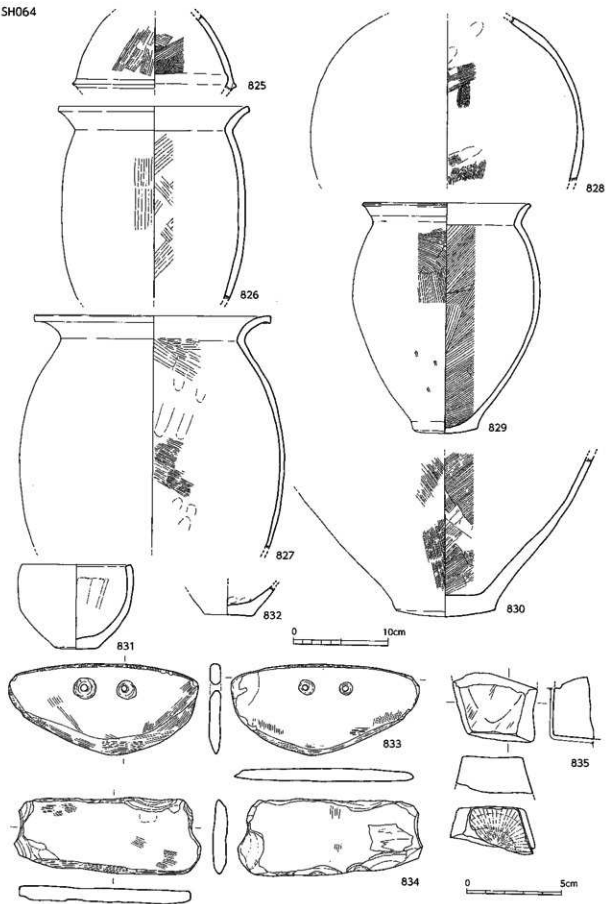


SH063



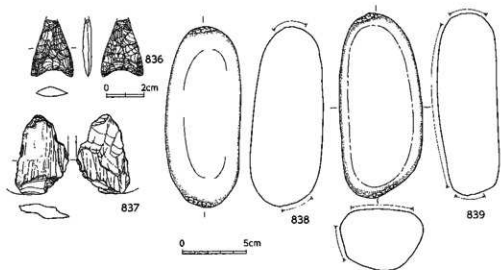
第70圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(51)

5H064

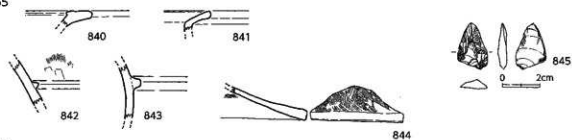


第71图 疎山遺跡 住居跡出土遺物実測図(52)

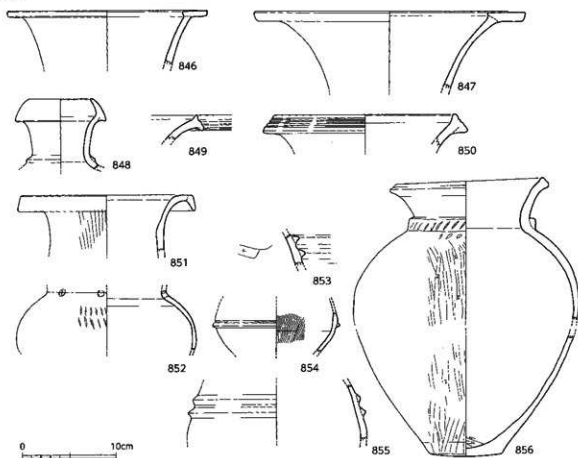
SH064



SH065

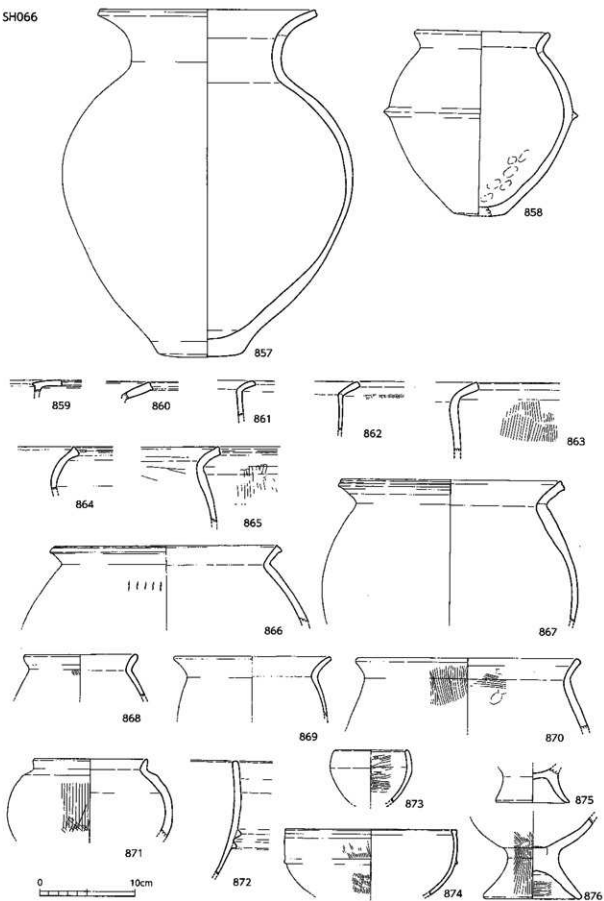


SH066



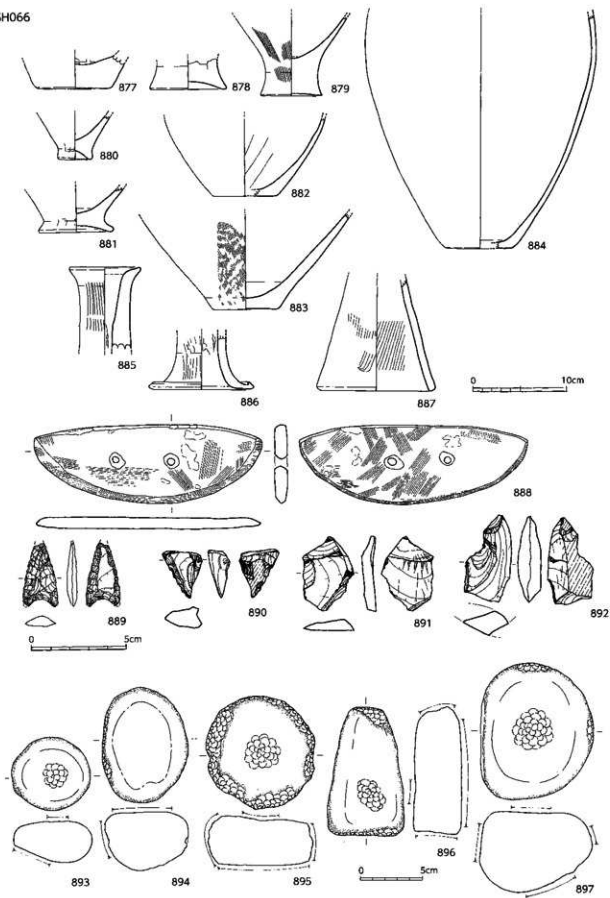
第72図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図(53)

SH066



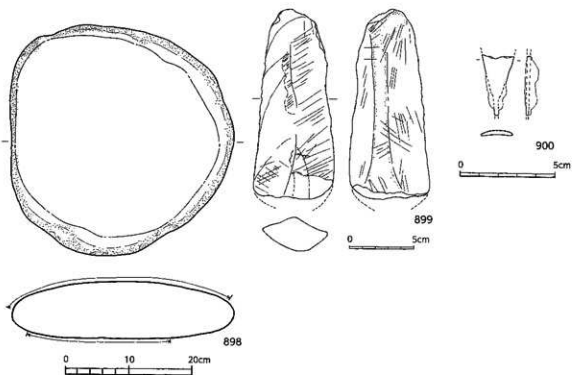
第 73 図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (54)

SH066

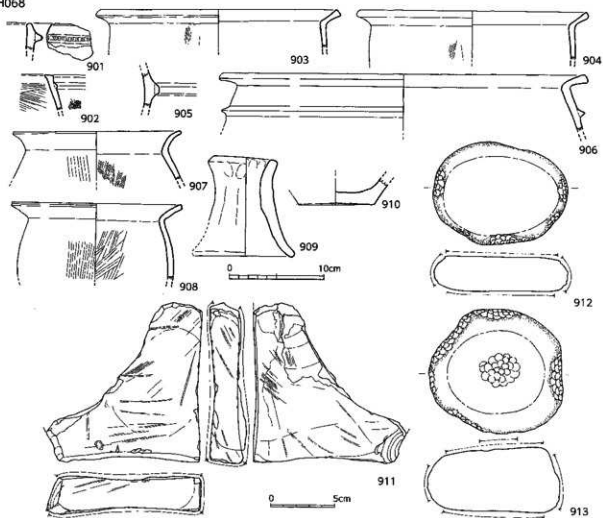


第74圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(55)

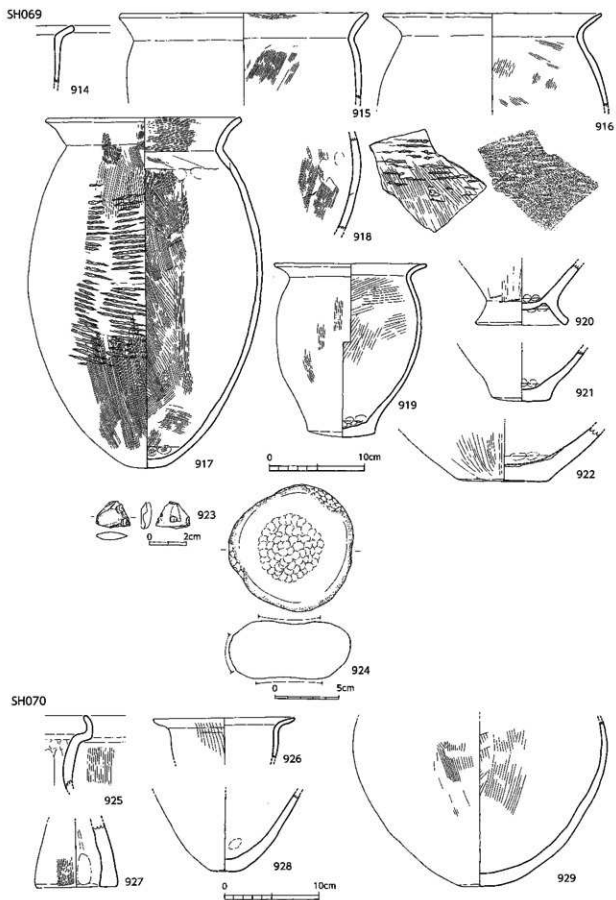
SH066



SH068

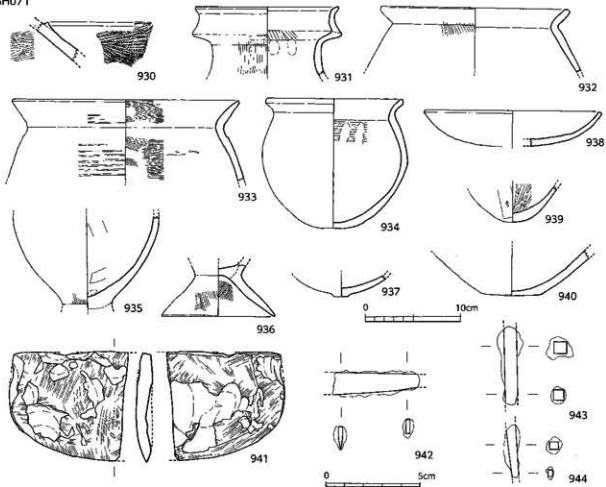


第 75 图 陡山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (56)

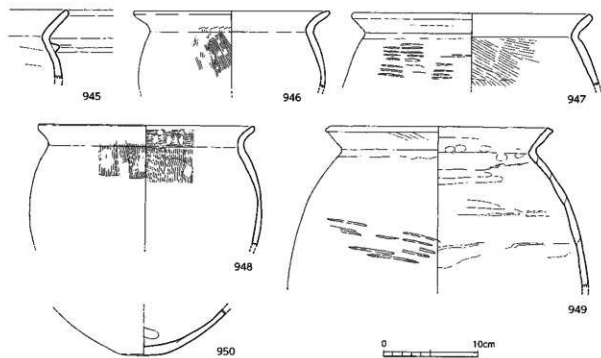


第 76 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (57)

SH071

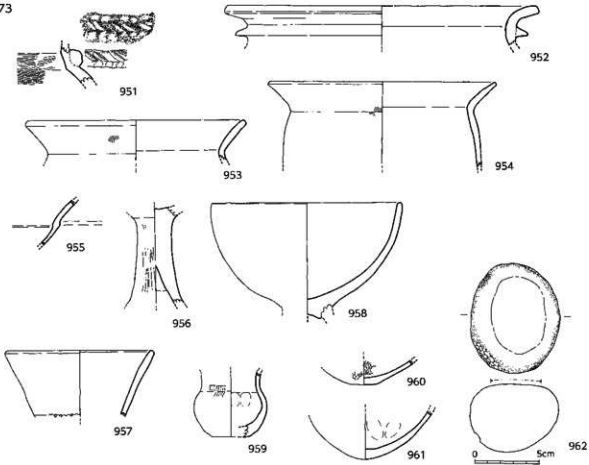


SH072

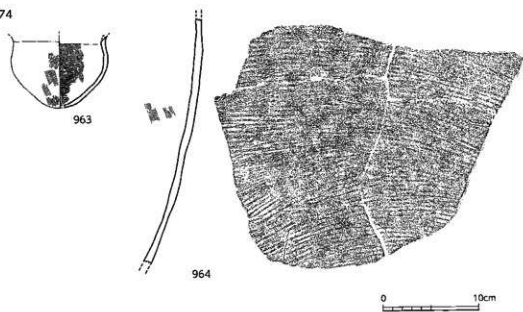


第 77 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (58)

SH073

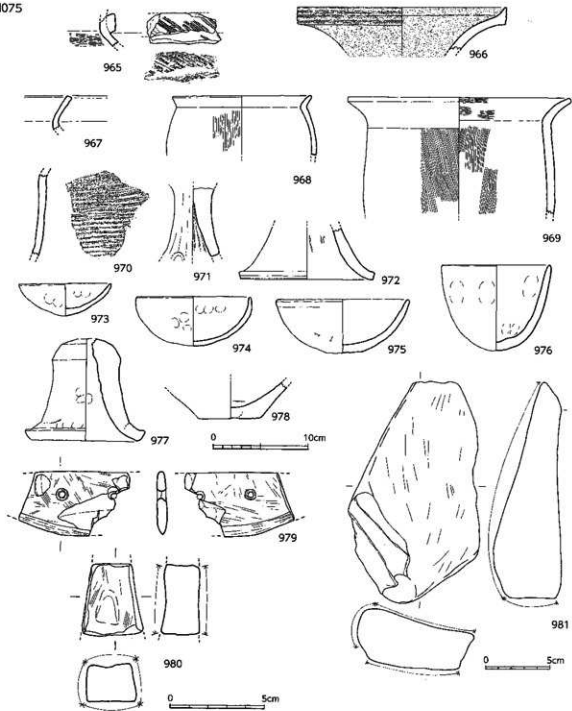


SH074

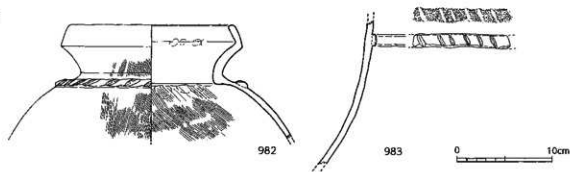


第 78 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (59)

SH075

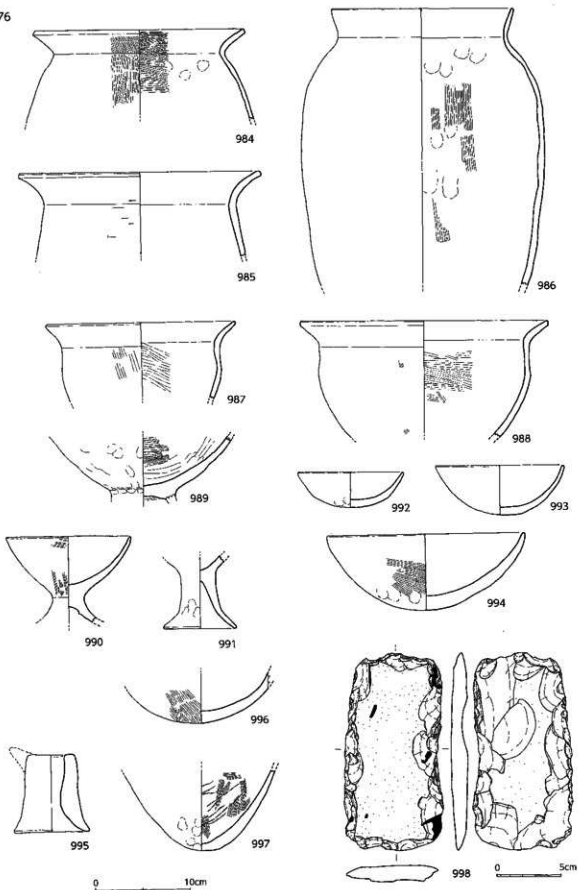


SH076

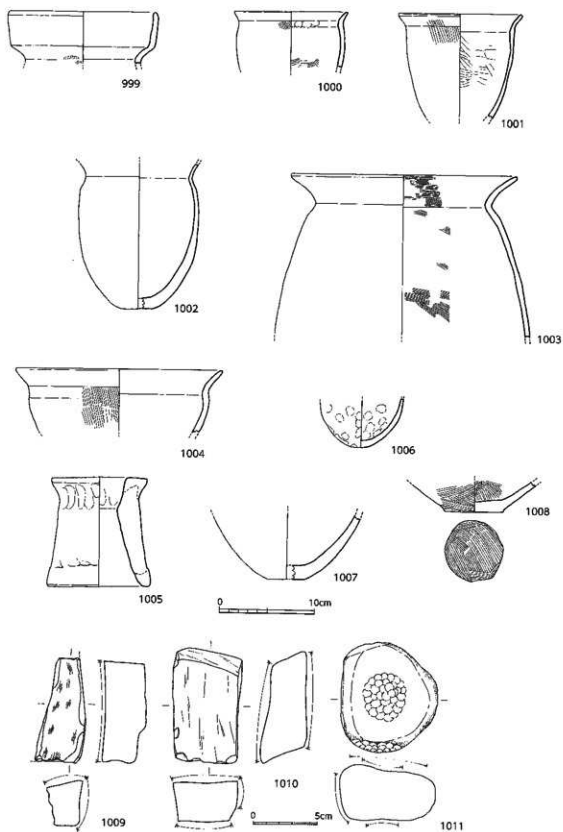


第 79 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (60)

SH076

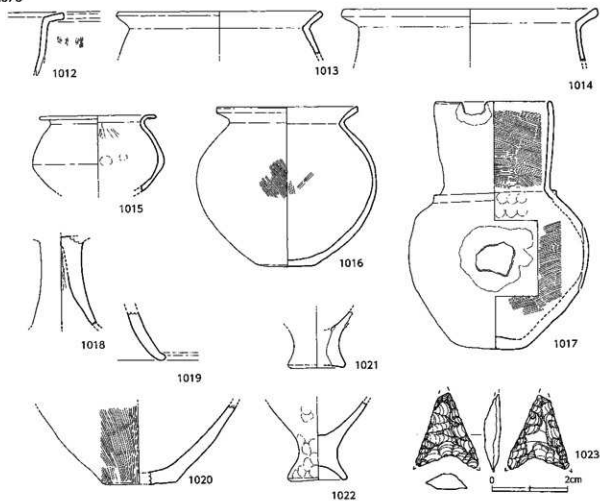


第80圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測図(61)

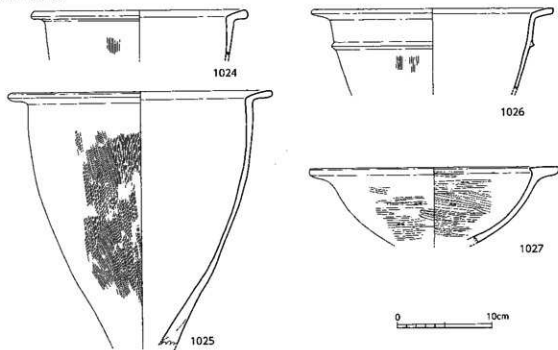


第 81 圖 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (62)

SH078

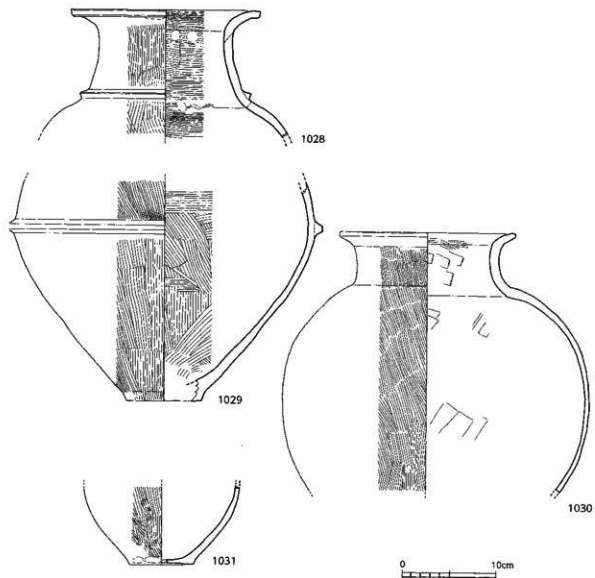


SH078 張出部



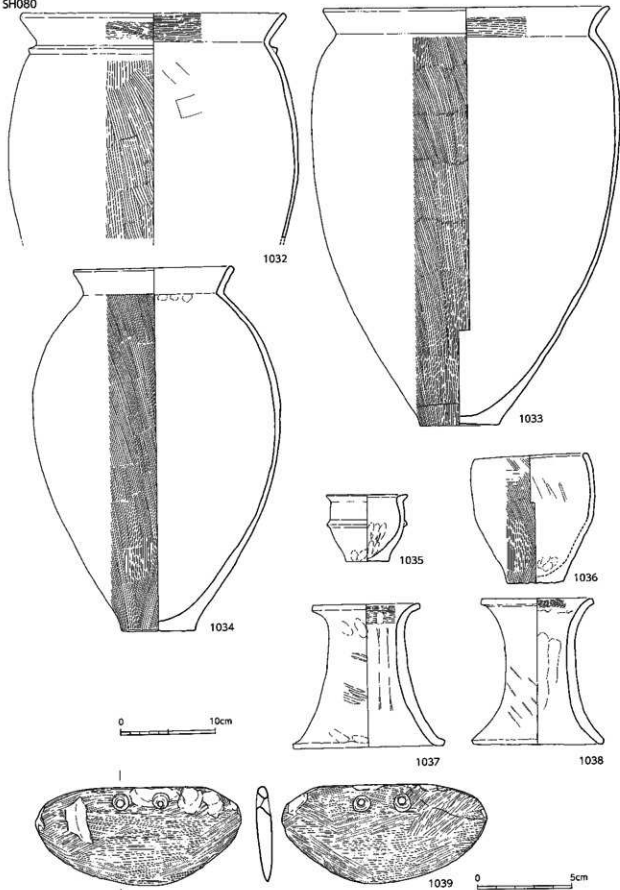
第82図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(63)

SH080

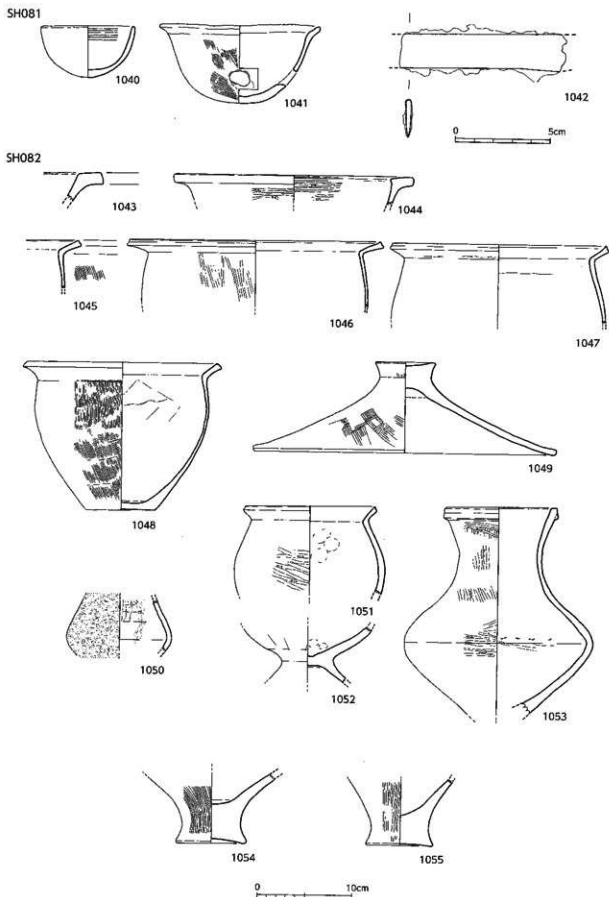


第 83 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (64)

SH080

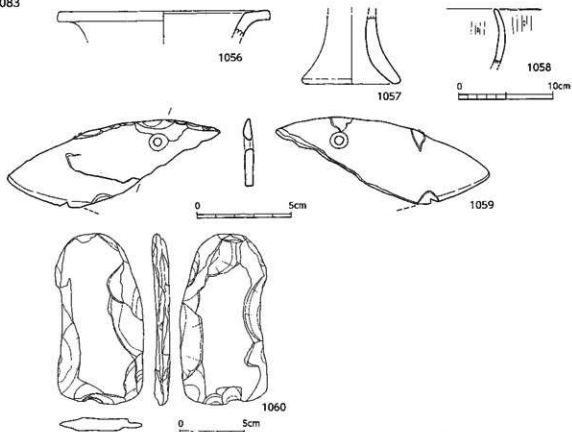


第 84 圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (65)

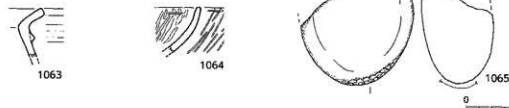


第 85 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (66)

SH083



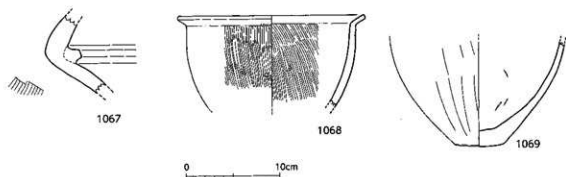
SH084



SH085

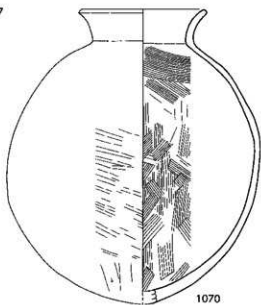


SH087

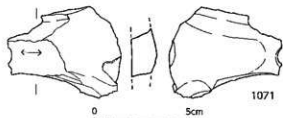


第86圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(67)

SH087

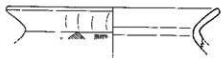


1070



1071

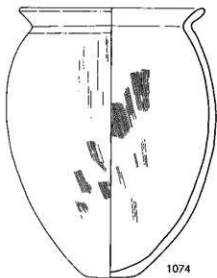
SH088



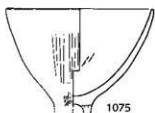
1072



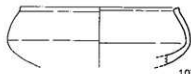
1073



1074



1075



1076



1077



1078



1079



1080



1081

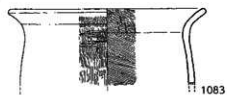


1082



第 87 图 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (68)

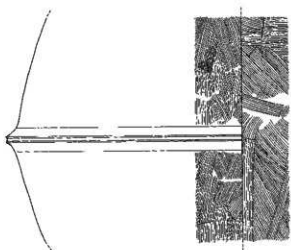
SH089



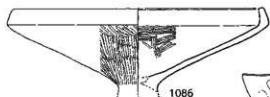
1083



1084



1085



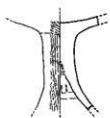
1086



1088



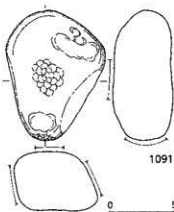
1089



1087



1090



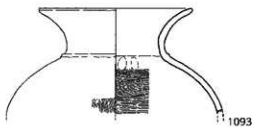
1091

0 5cm

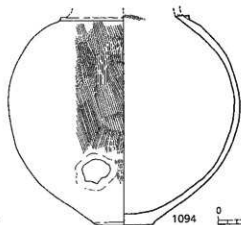
SH090



1092



1093

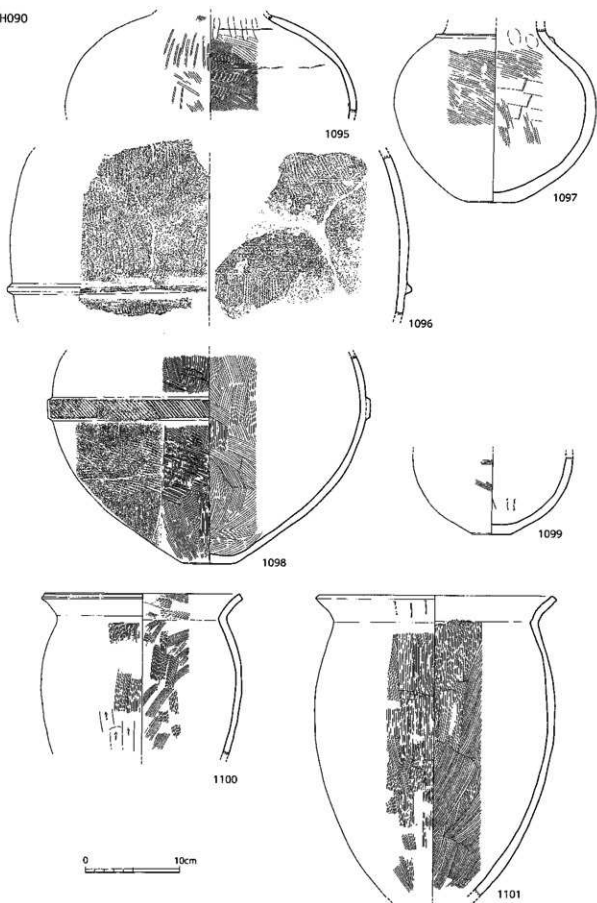


1094

0 10cm

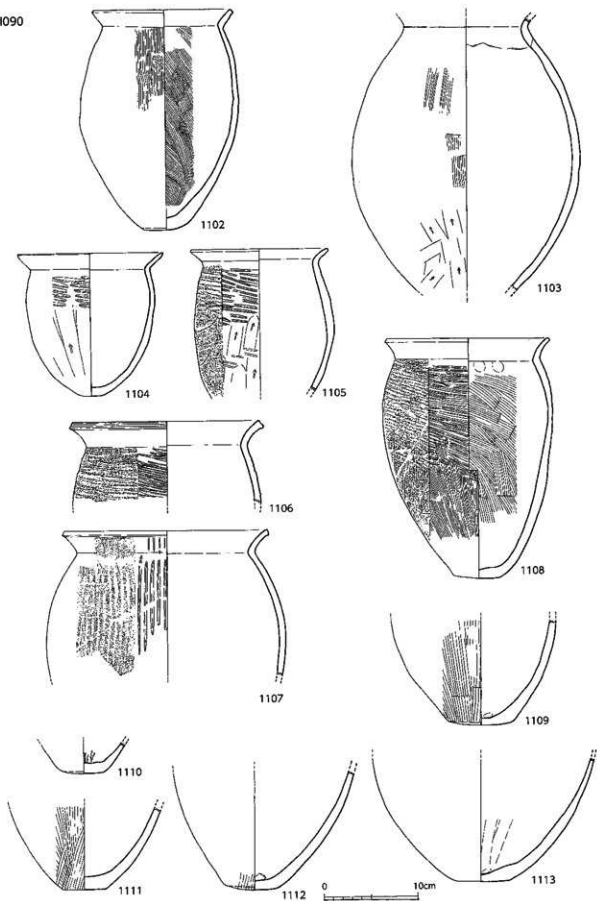
第 88 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (69)

SH090



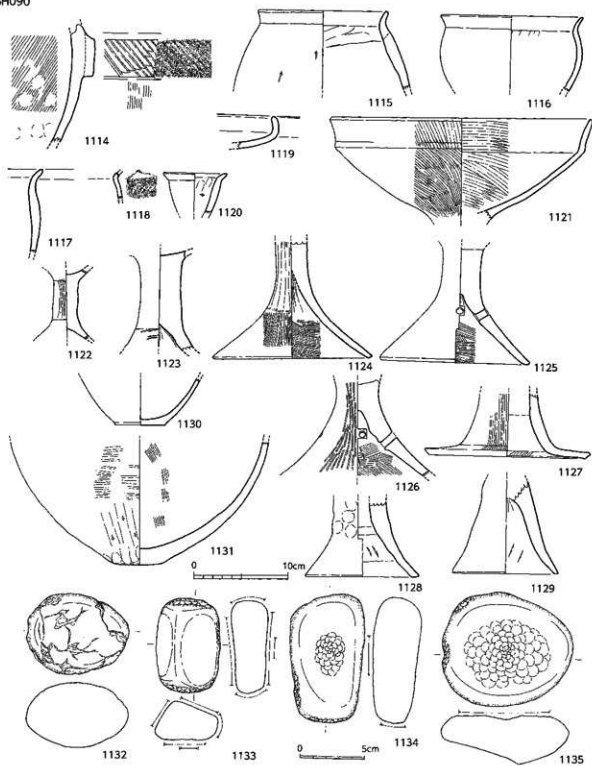
第 89 図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (70)

SH090

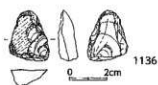


第90圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(71)

SH090

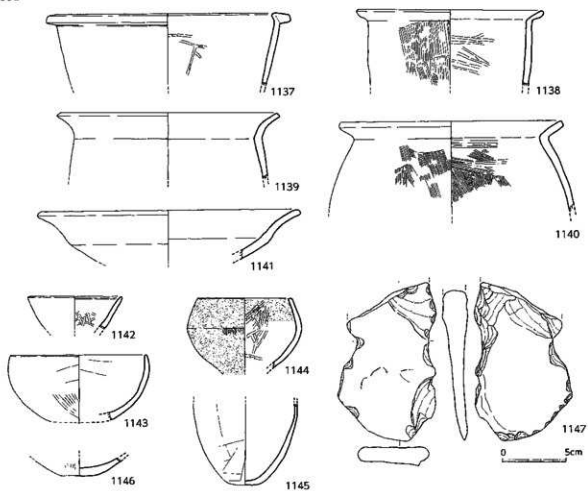


SH094

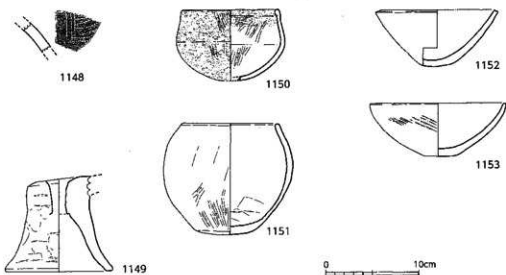


第91图 陈山遗址 住居跡出土遺物実測图(72)

SH095

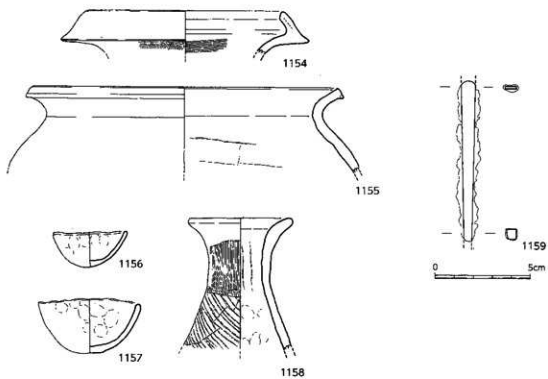


SH096

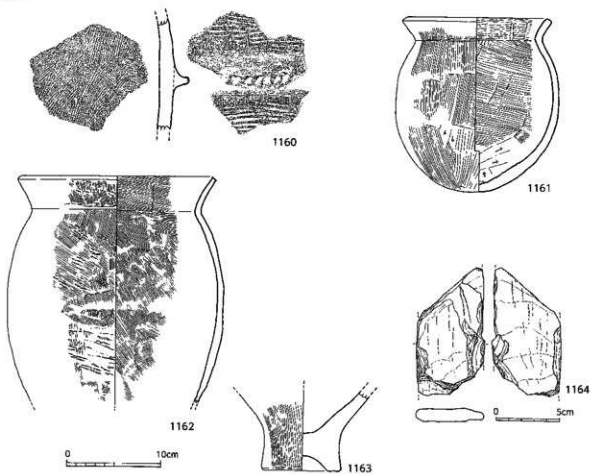


第92圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(73)

SH097

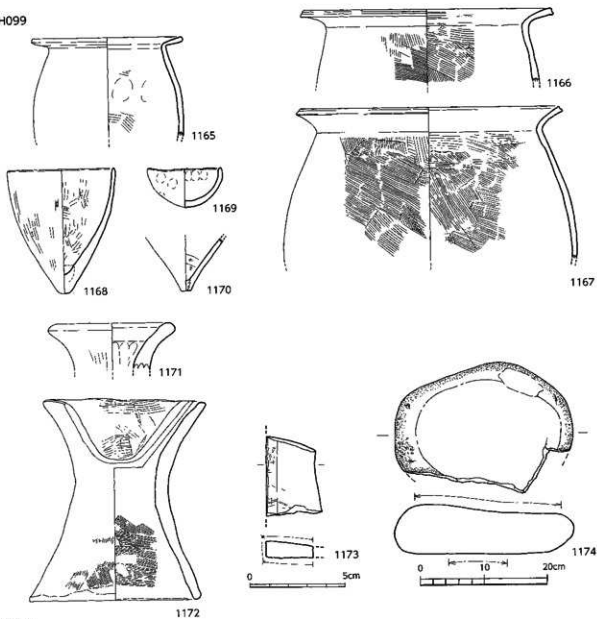


SH098

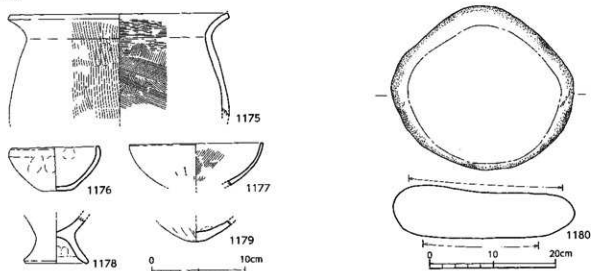


第93圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(74)

SH099

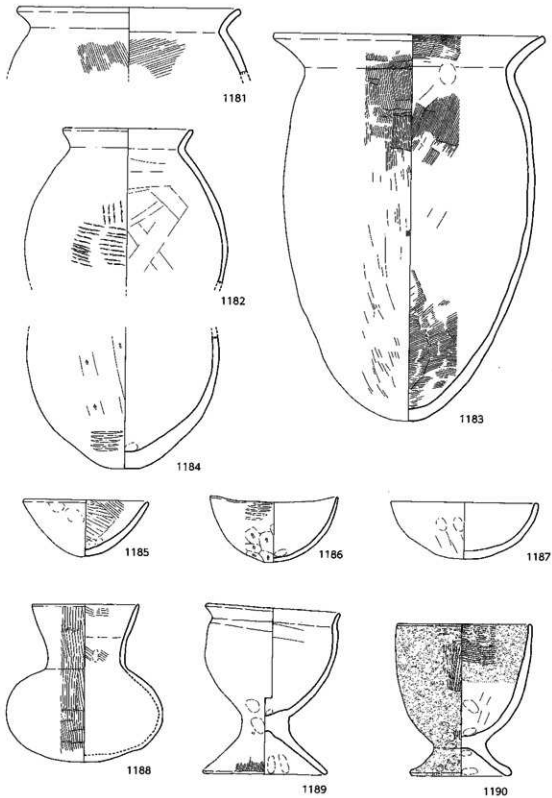


SH100



第 94 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (75)

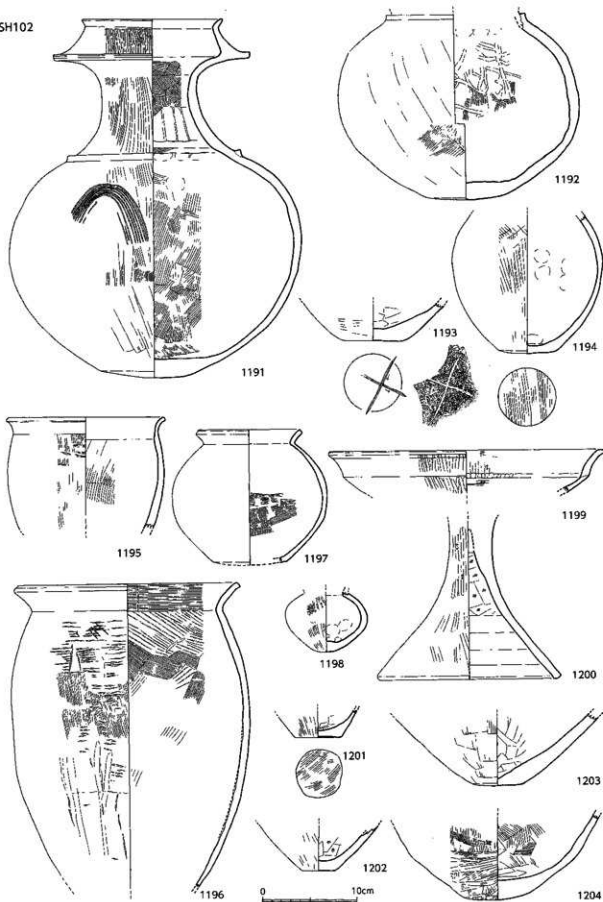
SH101



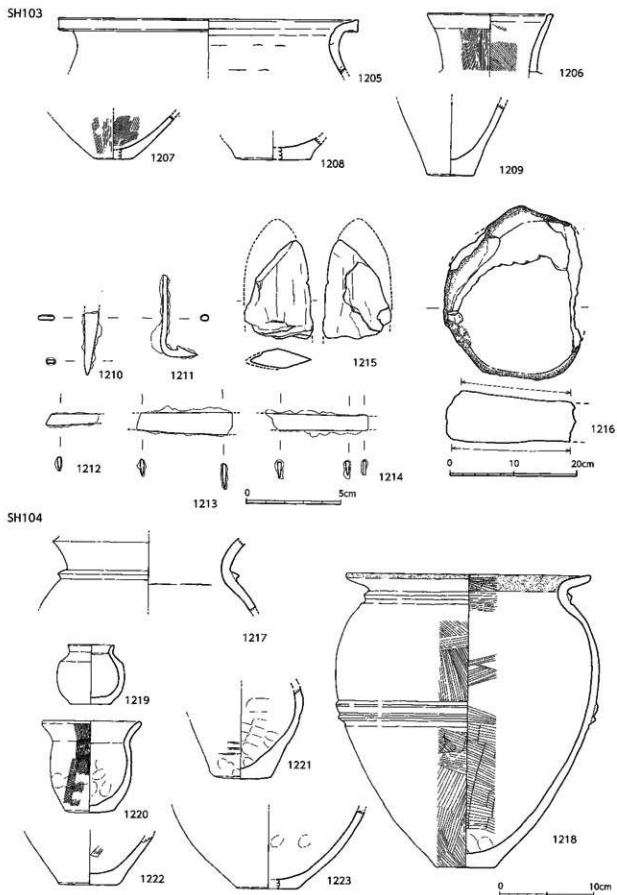
0 10cm

第95圖 陳山遺跡 住居跡出土物実測図(76)

SH102

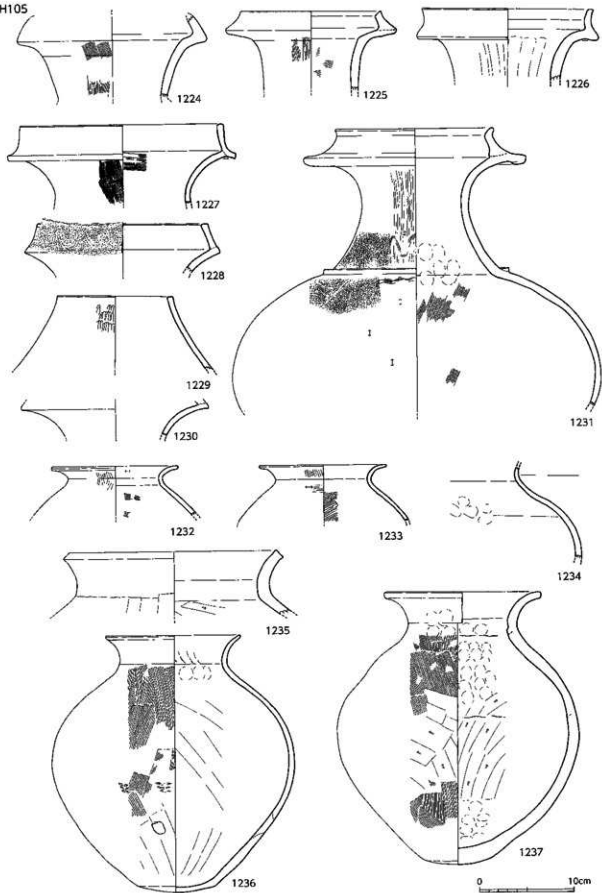


第 96 圖 謙山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (77)



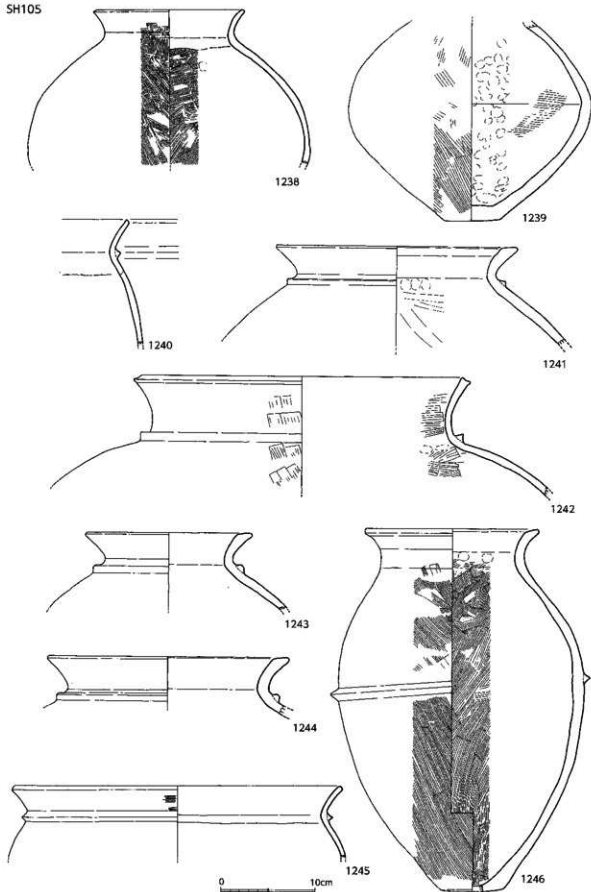
第 97 图 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (78)

SH105



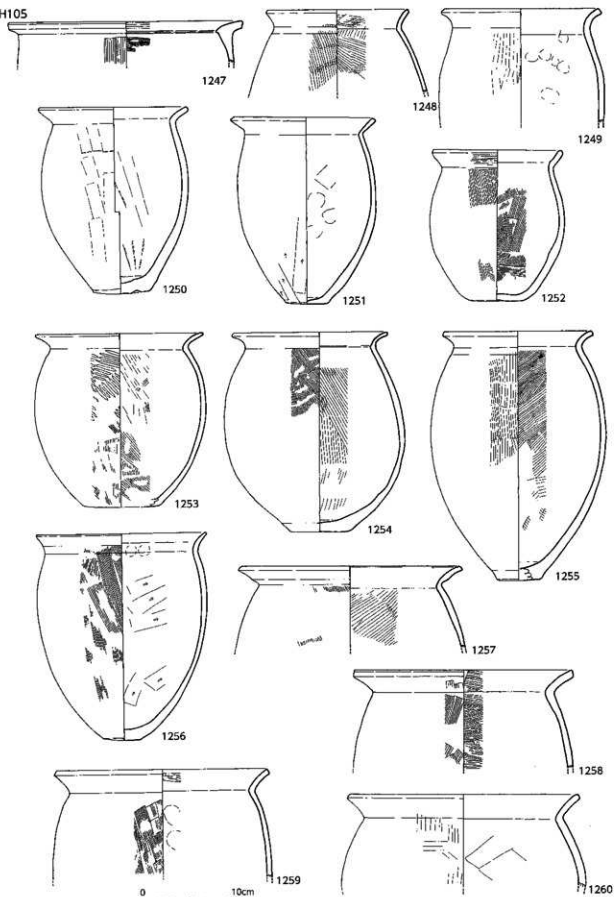
第98圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図(79)

SH105



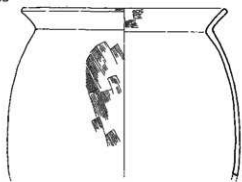
第99圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(80)

SH105

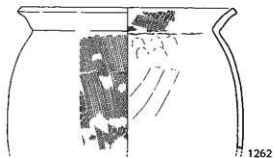


第 100 図 鎌山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (B1)

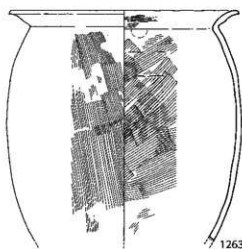
SH105



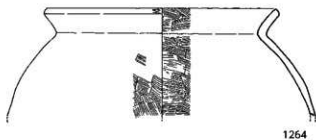
1261



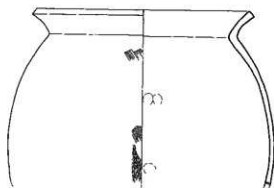
1262



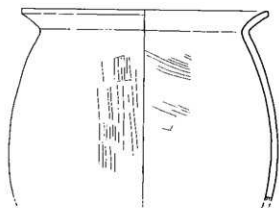
1263



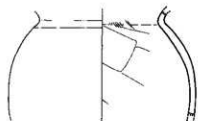
1264



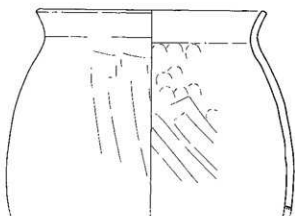
1265



1266



1267

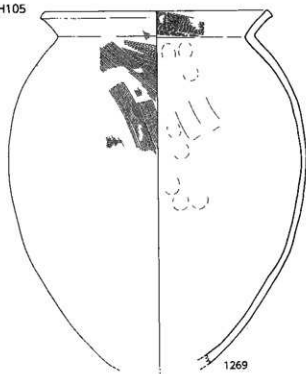


1268

0 10cm

第 101 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (82)

SH105



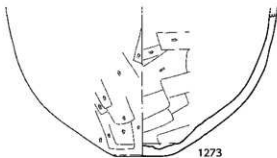
1269



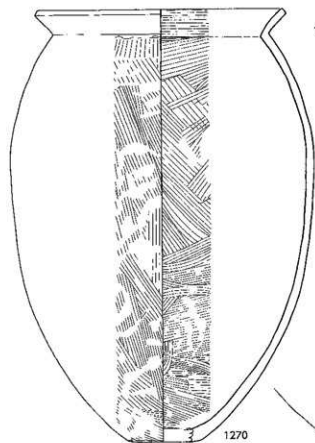
1271



1272



1273



1270



1274



1275



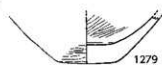
1276



1277



1278



1279

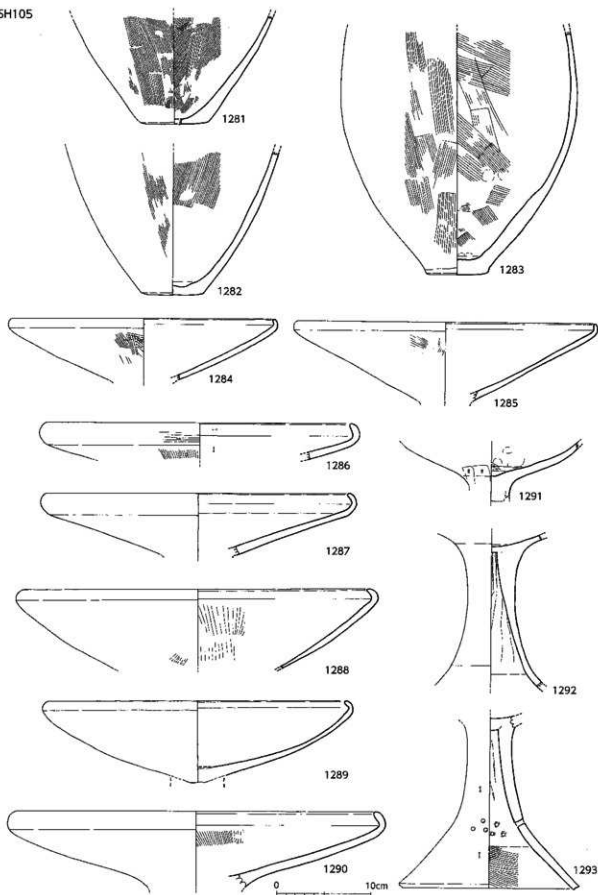


1280

0 10cm

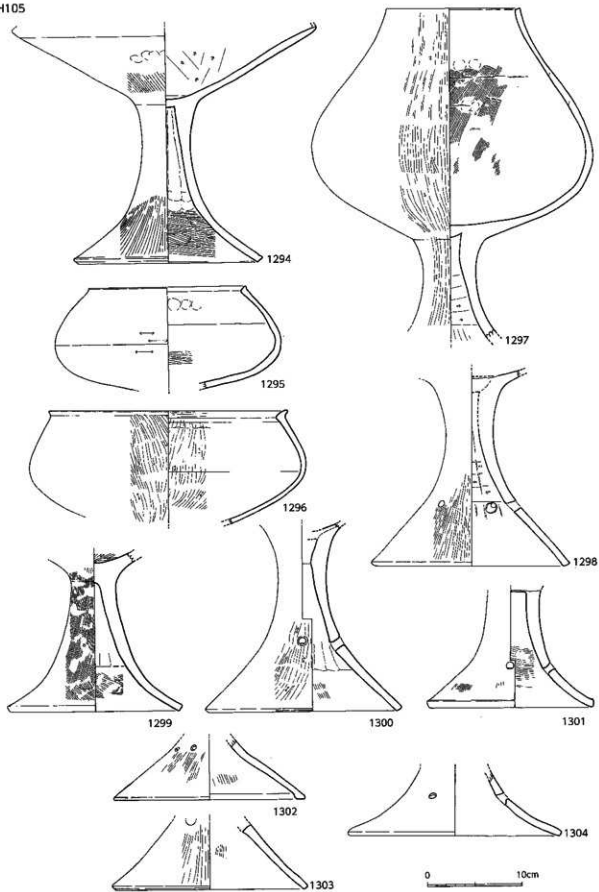
第 102 図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (B3)

SH105



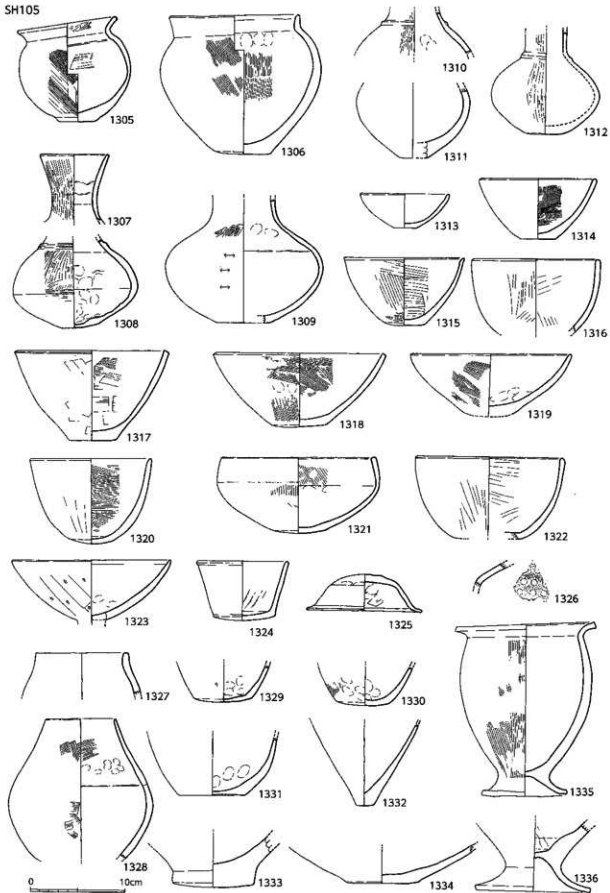
第 103 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (84)

SH105

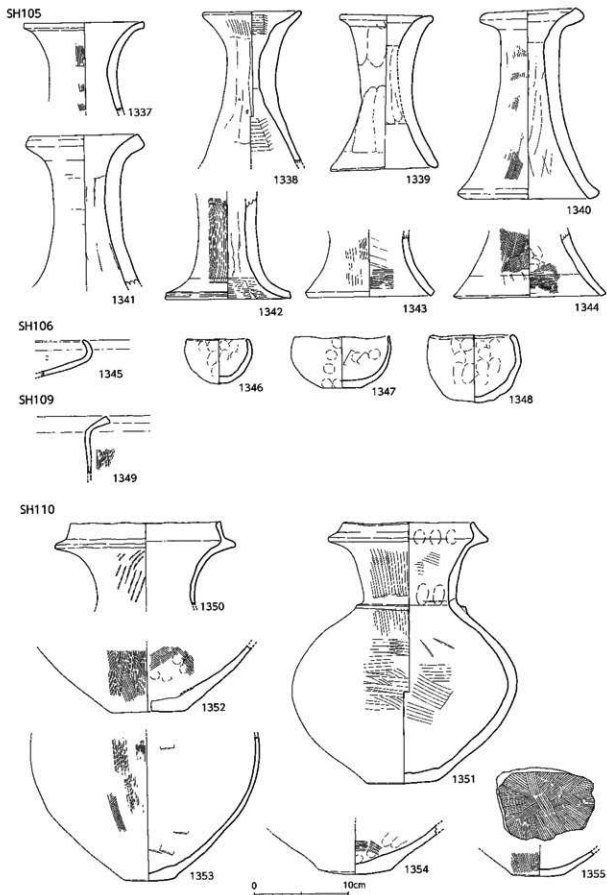


第 104 圖 謙山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (B5)

SH105

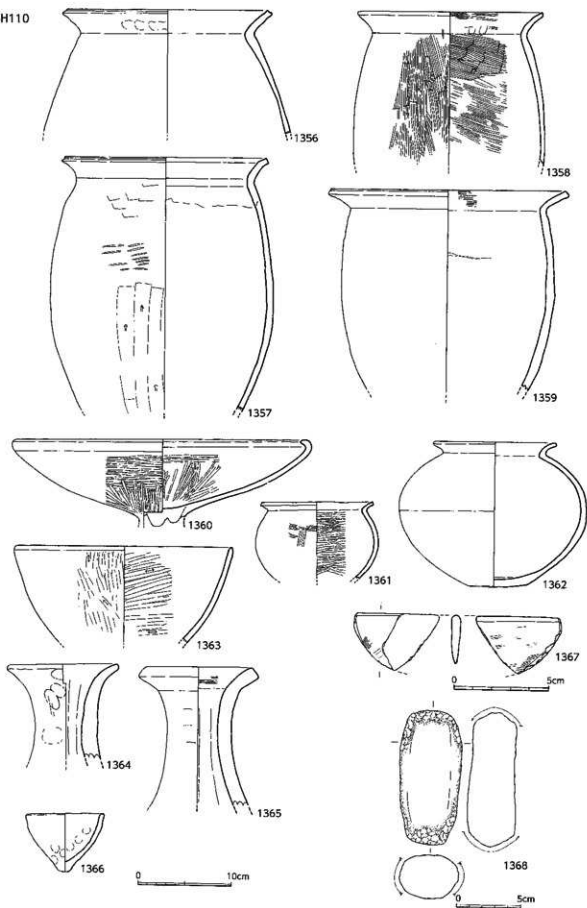


第 105 圖 隗山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (86)



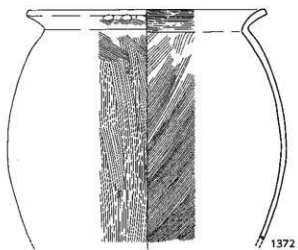
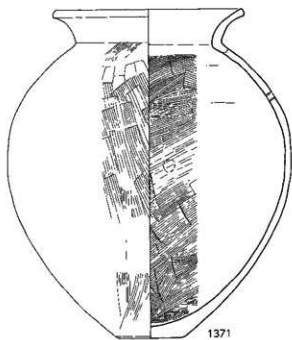
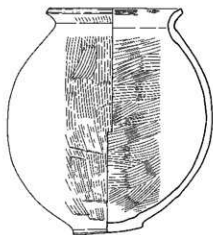
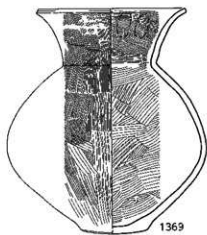
第 106 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (87)

SH110



第 107 图 隗山遗址 住居跡出土遺物実測図 (88)

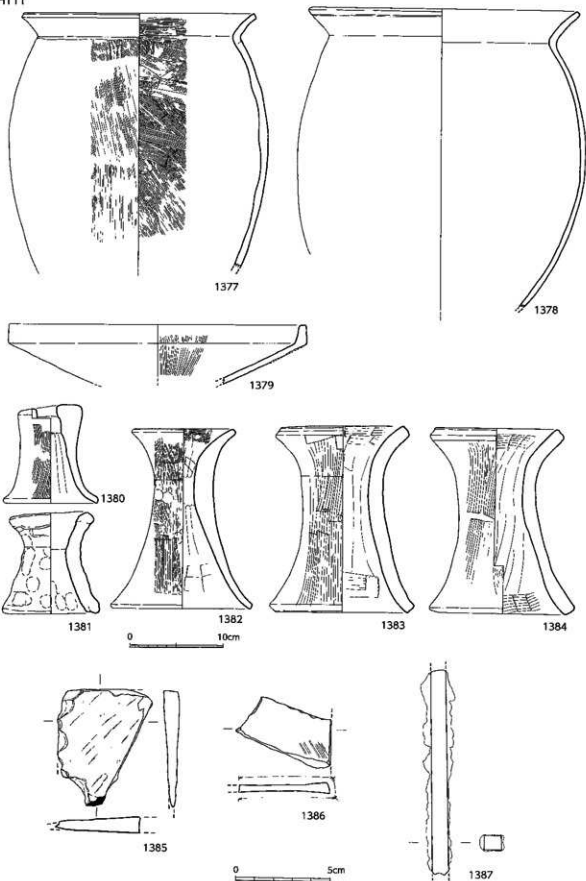
SH111



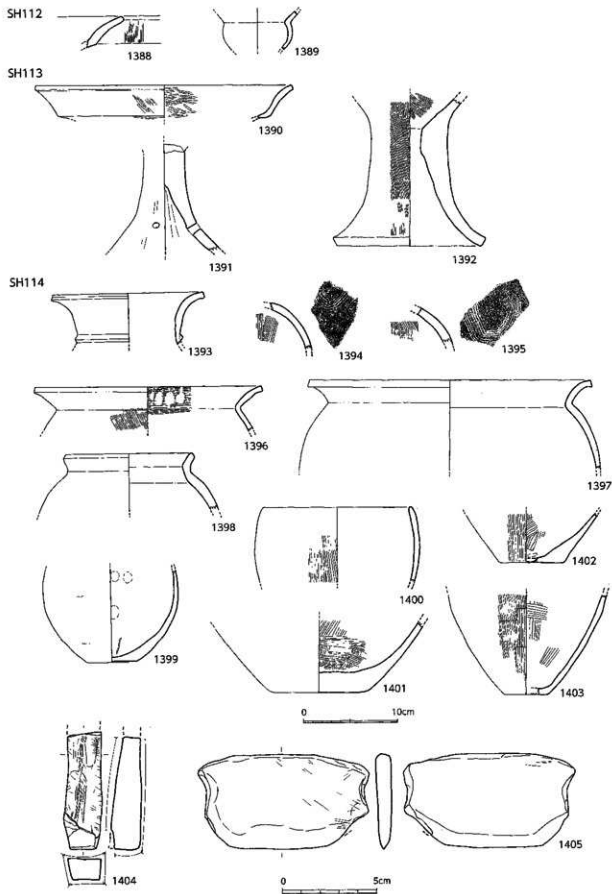
0 10cm

第 108 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (89)

SH111

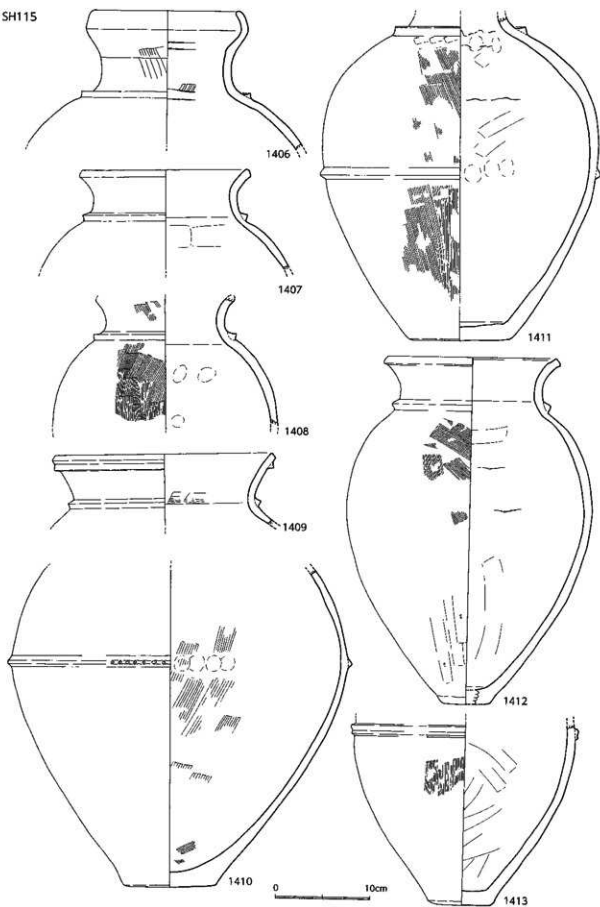


第 109 圖 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (90)



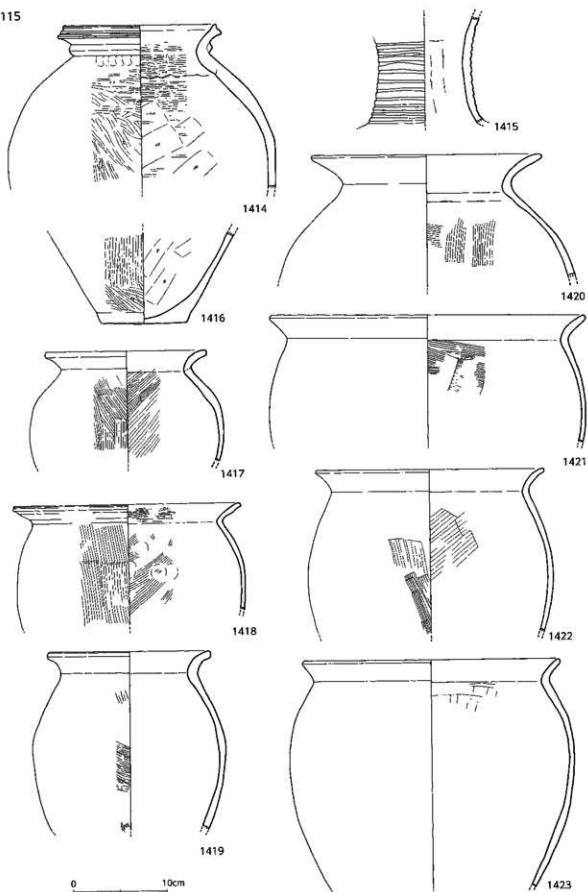
第 110 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (91)

SH115



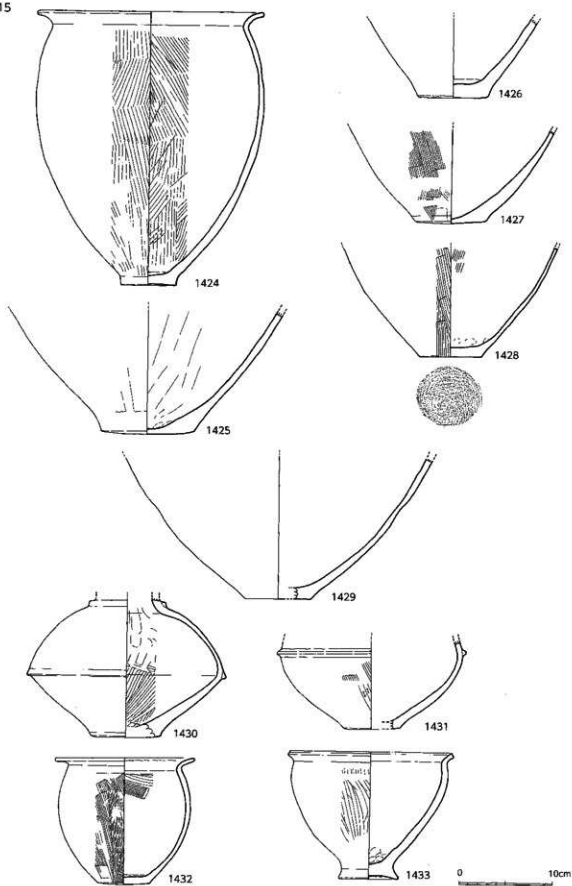
第 111 图 陝山道跡 住居跡出土遺物実測図 (92)

SH115



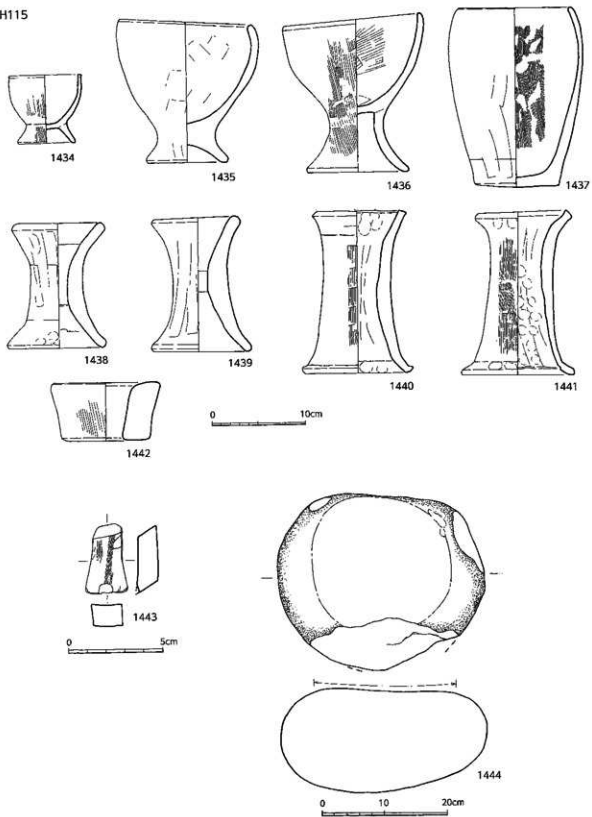
第 112 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (93)

SH115



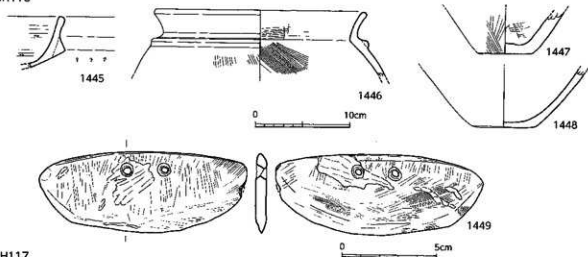
第 113 图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (94)

SH115

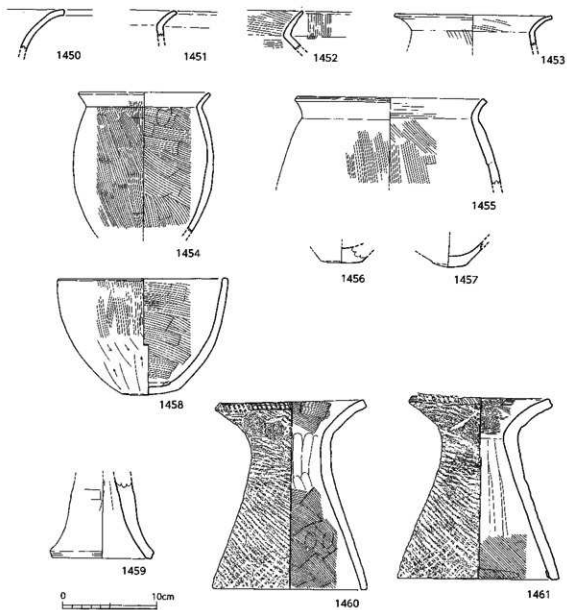


第 114 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (95)

SH116

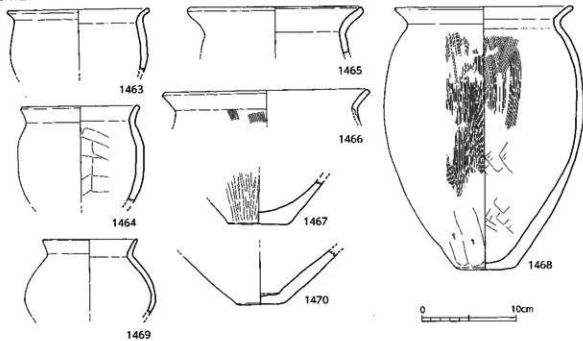


SH117

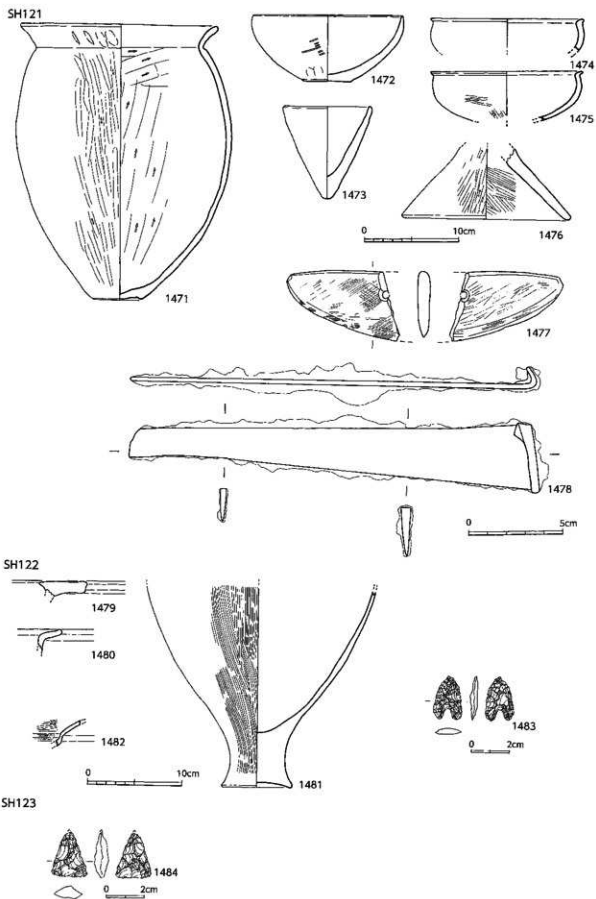


第 115 圖 疎山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (96)

SH121

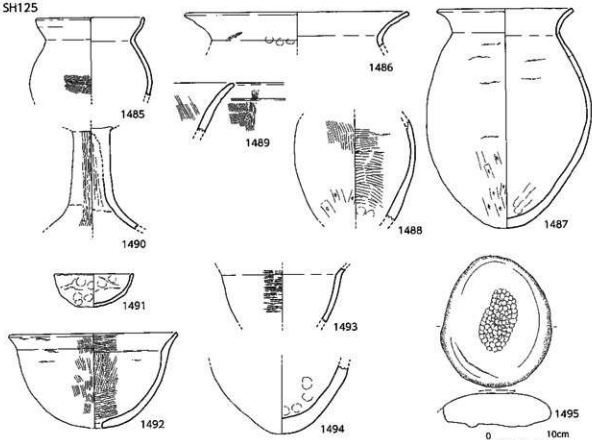


第 116 図 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (97)

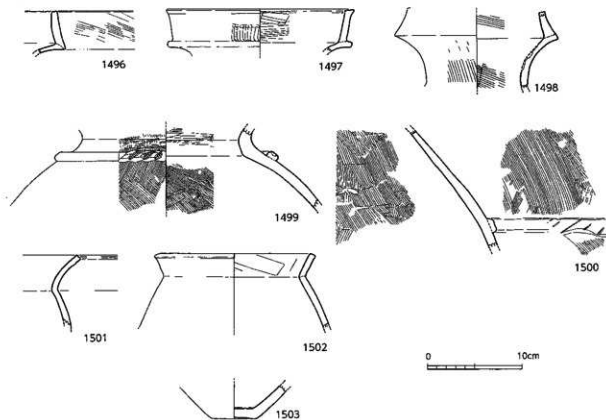


第 117 图 鍊山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (98)

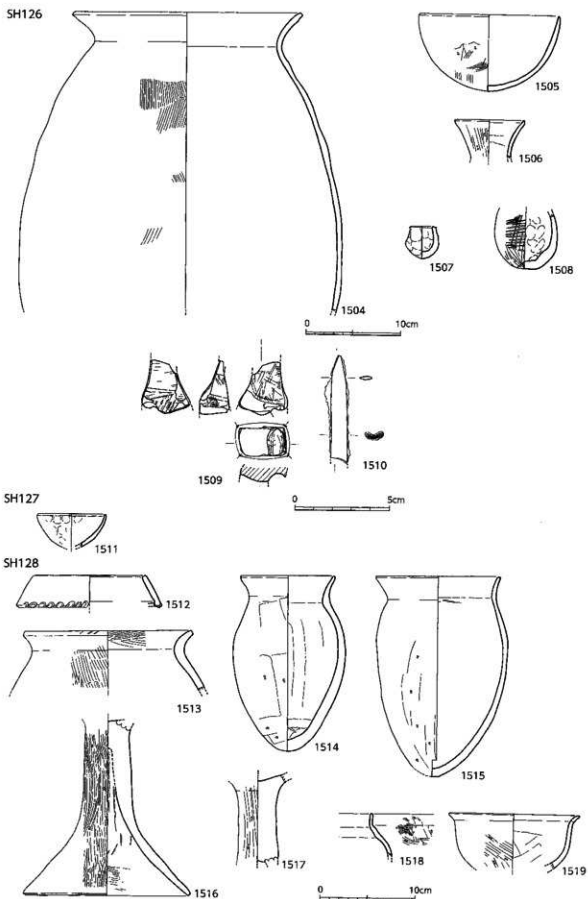
SH125



SH126

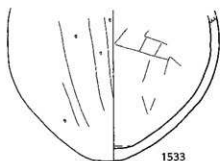
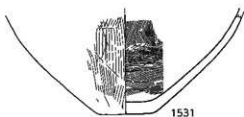
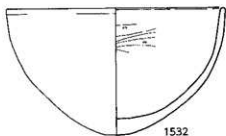
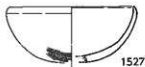
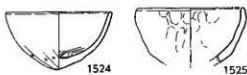
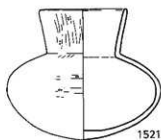


第 118 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (99)

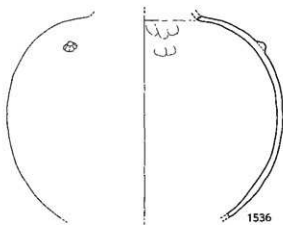
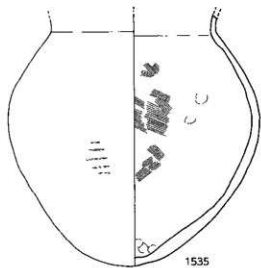


第 119 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (100)

SH128



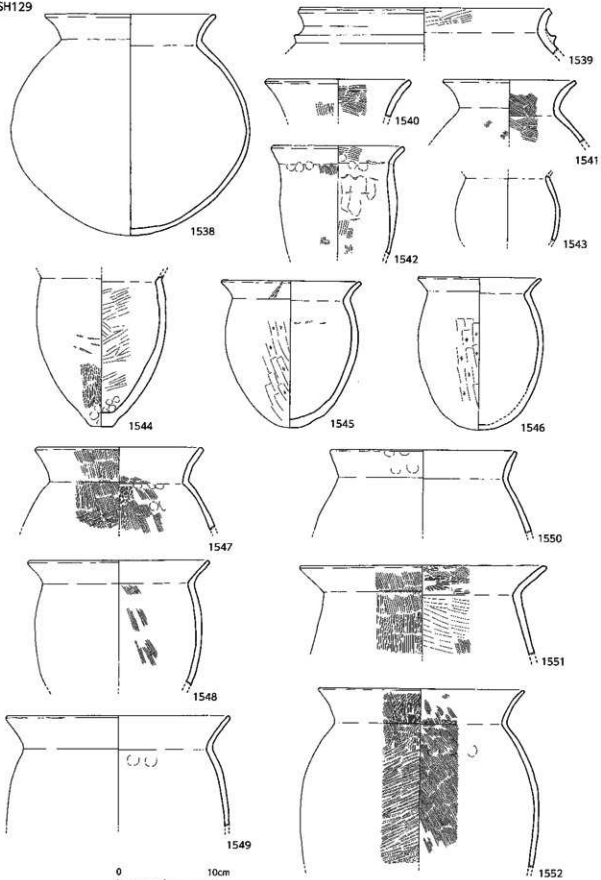
SH129



0 10cm

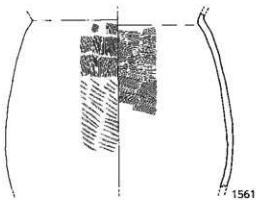
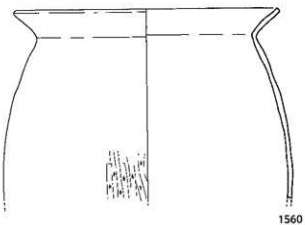
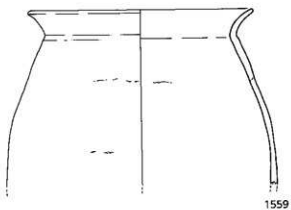
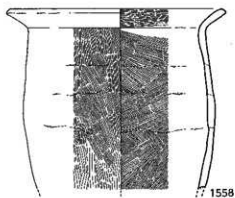
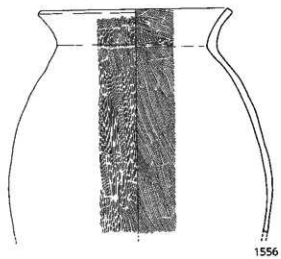
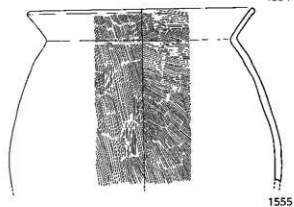
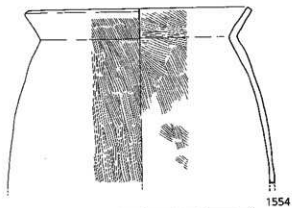
第120图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図(101)

SH129



第 121 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (102)

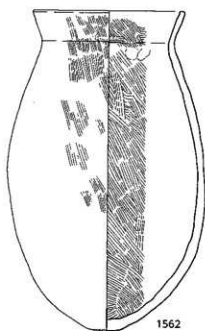
SH129



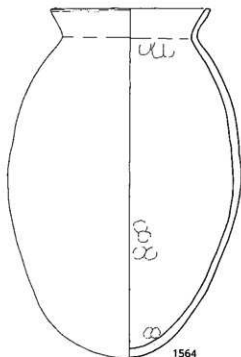
0 10cm

第122図 藤山遺跡 住居跡出土遺物実測図(103)

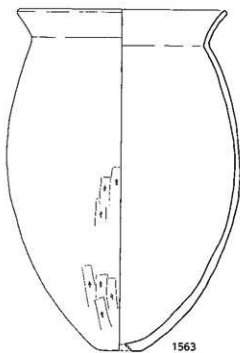
SH129



1562



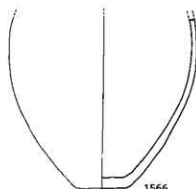
1564



1563



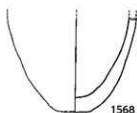
1565



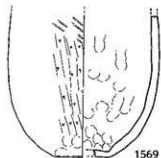
1566



1567



1568

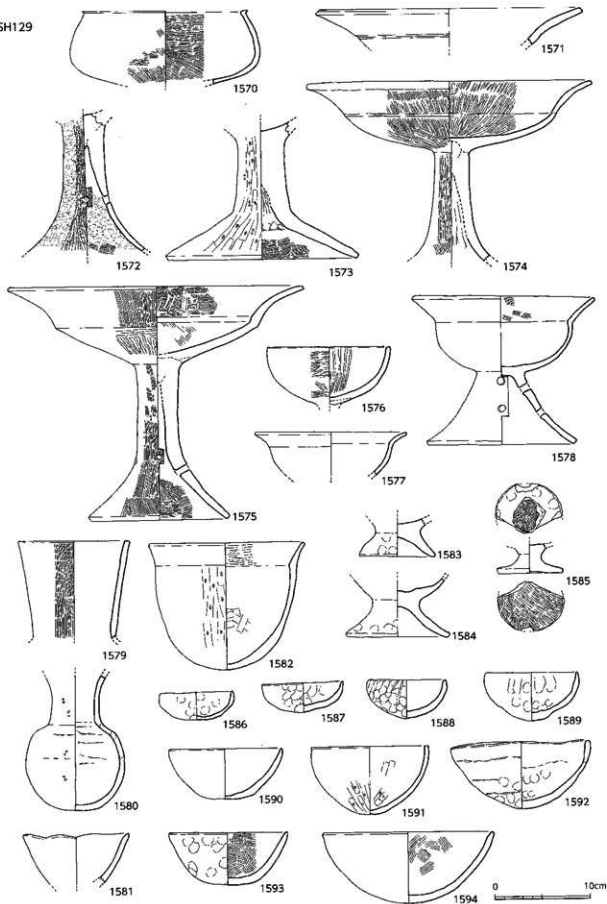


1569



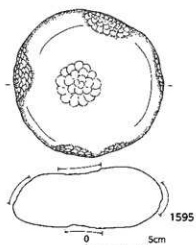
第 123 图 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (104)

SH129

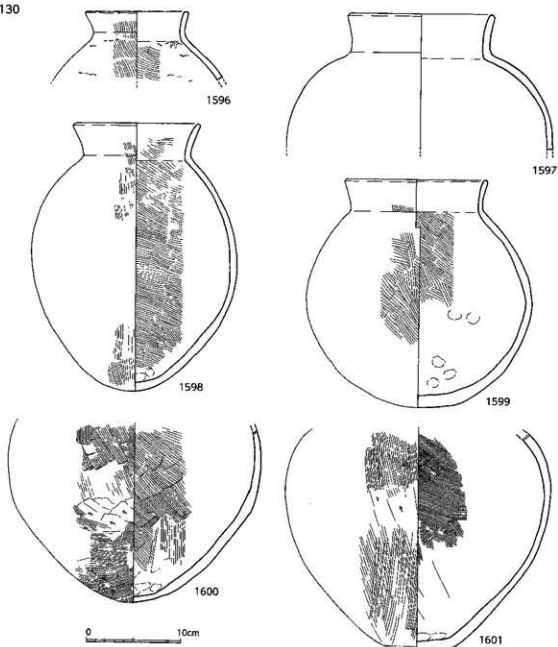


第124圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (105)

SH129

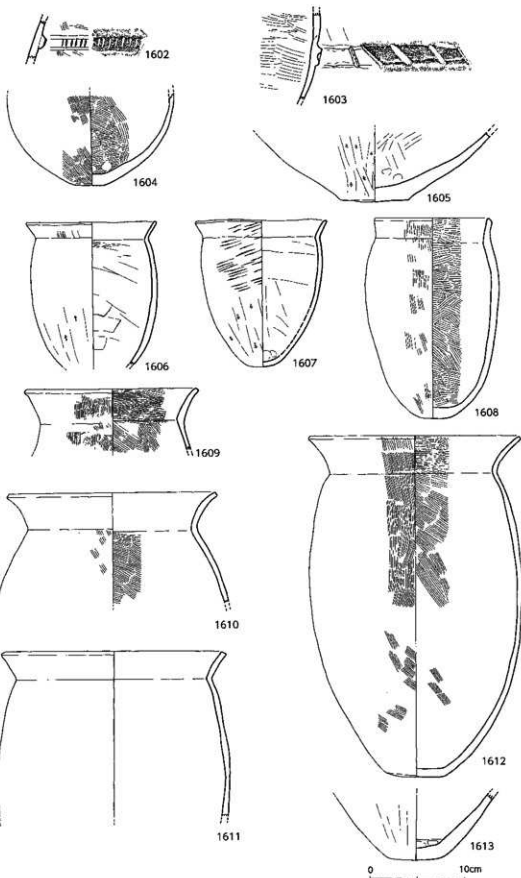


SH130



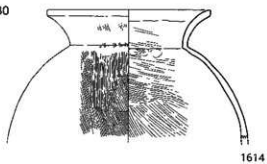
第 125 図 陳山遺跡 住居跡出土物実測図 (106)

SH130

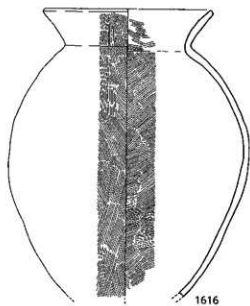


第 126 圖 謙山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (107)

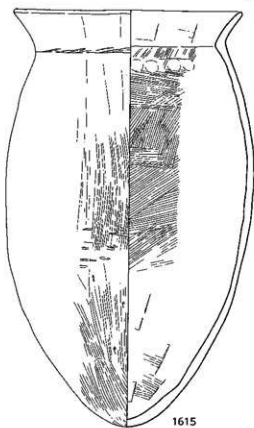
SH130



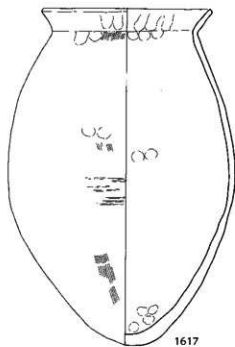
1614



1616



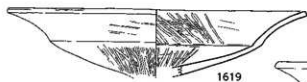
1615



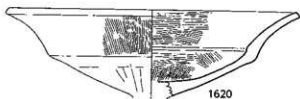
1617



1618



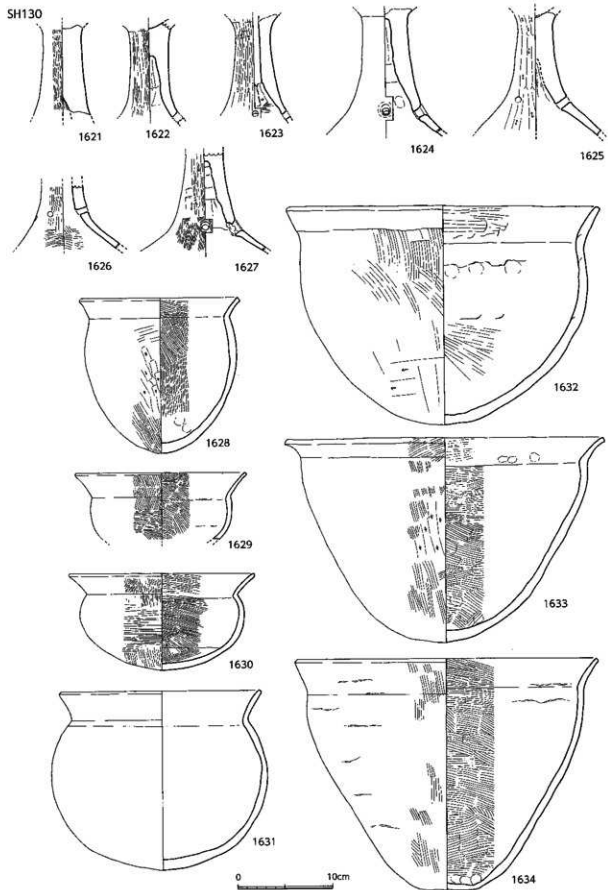
1619



1620

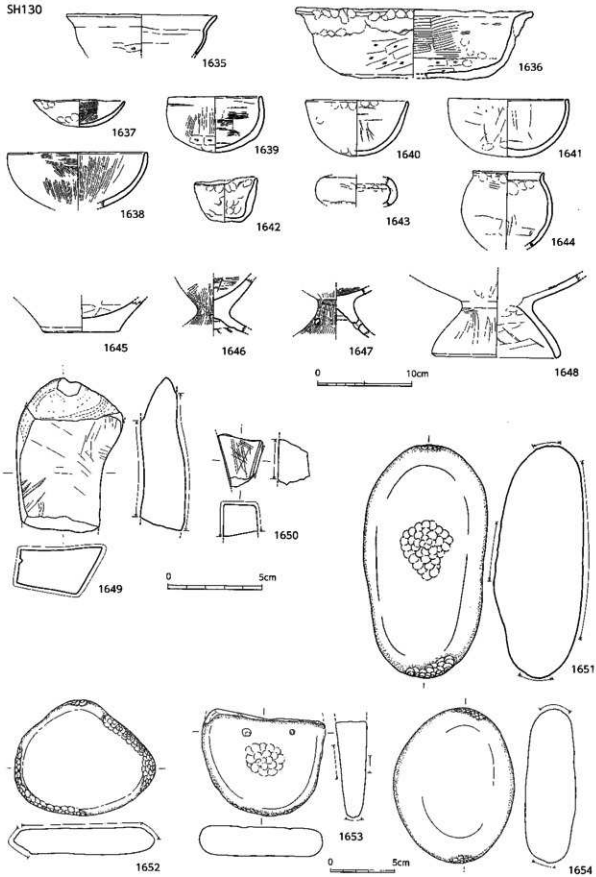
0 10cm

第 127 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (108)



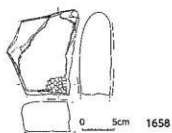
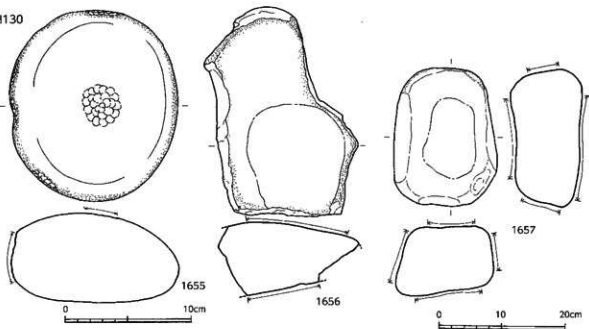
第128圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測圖(109)

SH130

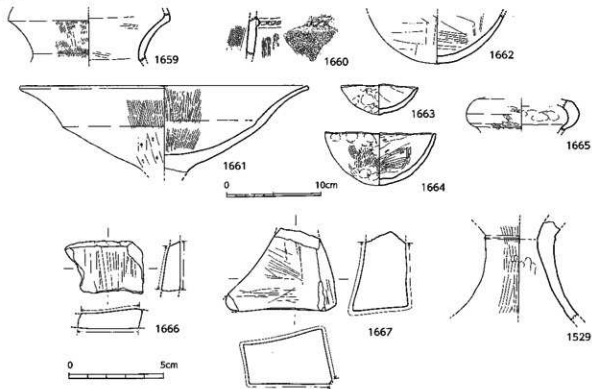


第 129 圖 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (110)

SH130

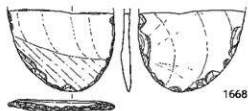


SH131

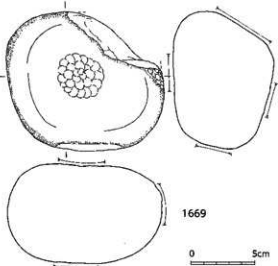


第 130 图 隰山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (111)

SH131



1668



1669

0 5cm



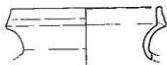
1670

0 10 20cm

SH132



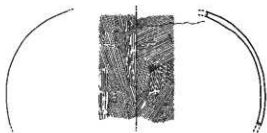
1671



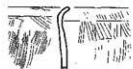
1672



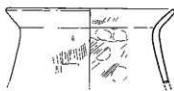
1673



1674



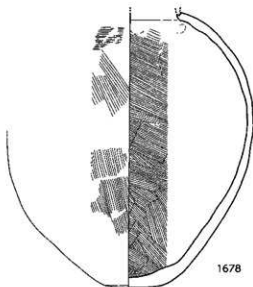
1675



1676



1677

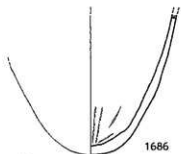
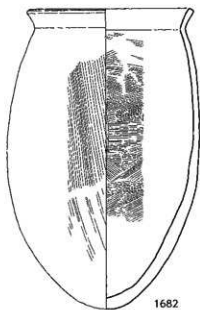
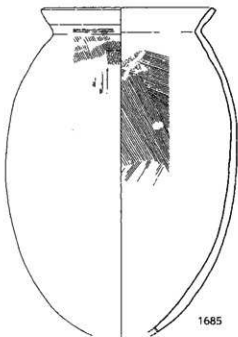
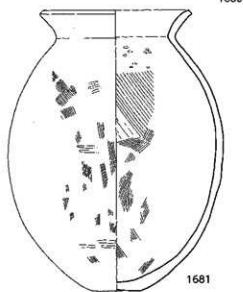
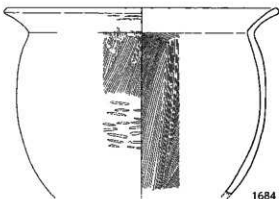
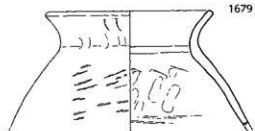
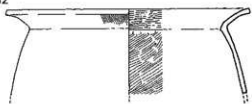


1678

0 10cm

第 131 图 陳山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (112)

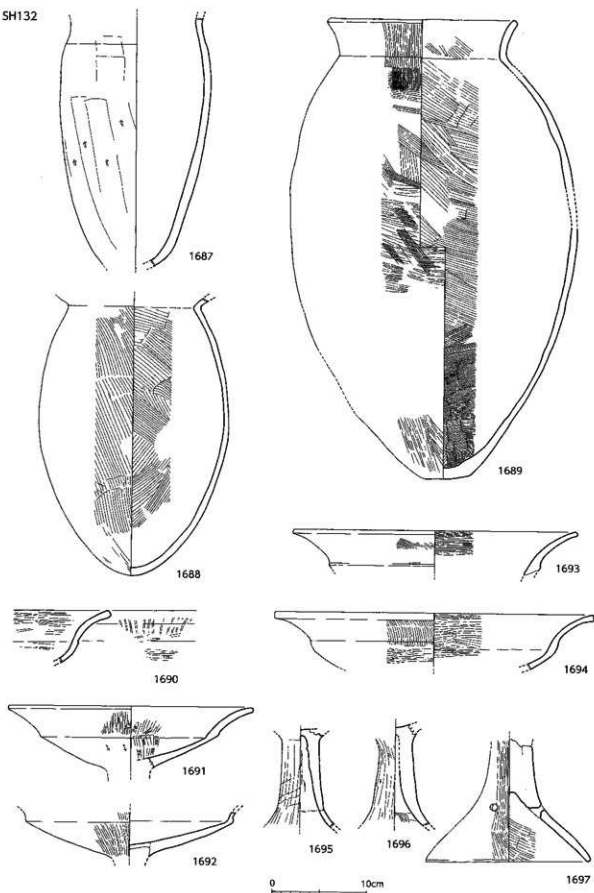
SH132



0 10cm

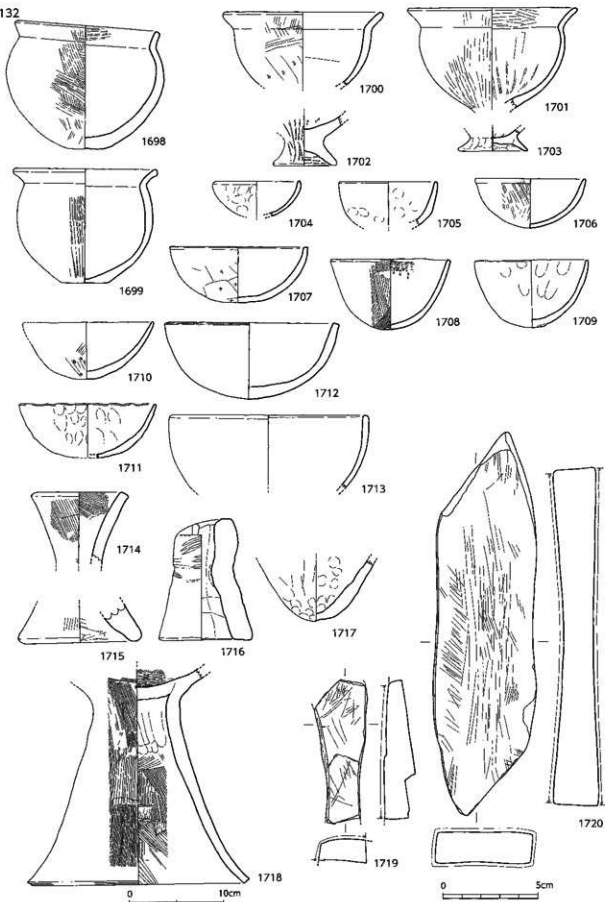
第 132 圖 譙山遺跡 住居跡出土遺物実測圖 (113)

SH132

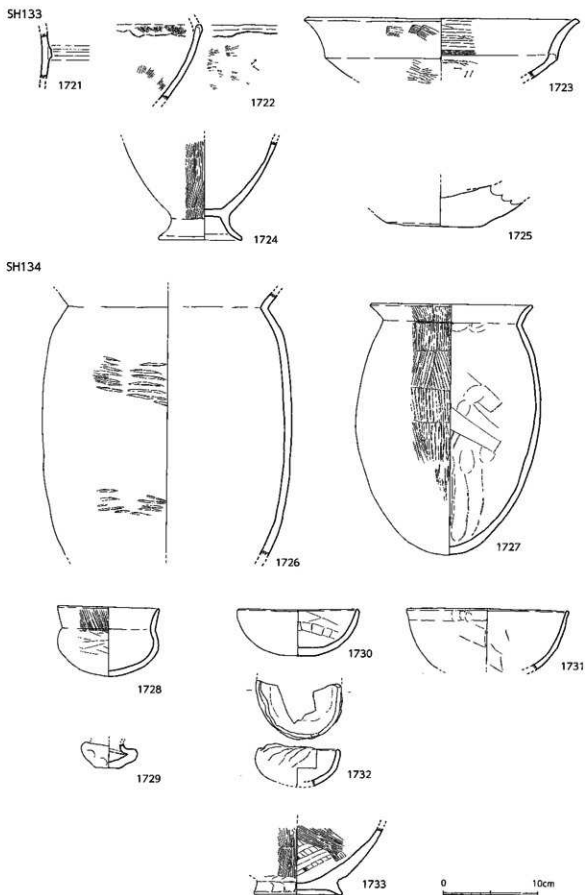


第 133 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (114)

SH132

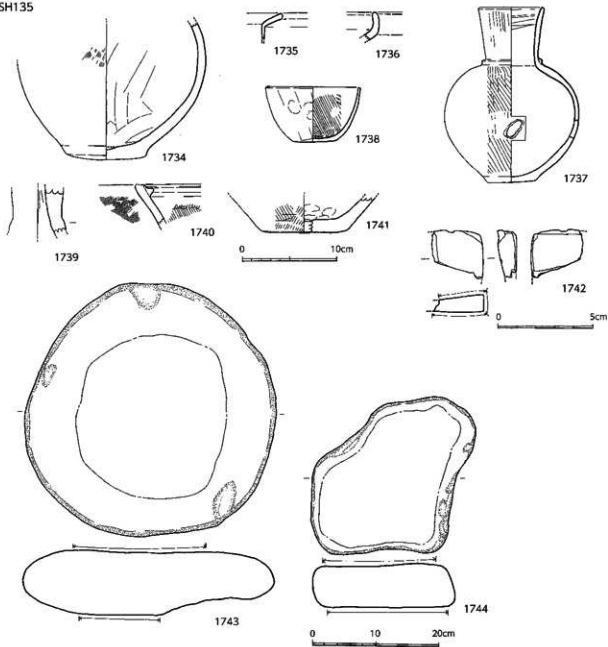


第 134 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (115)

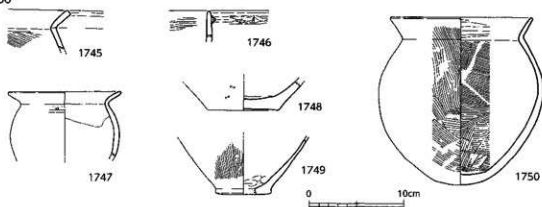


第 135 圖 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (116)

SH135



SH136

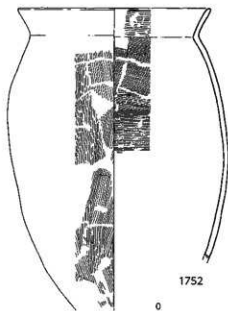


第 136 図 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (117)

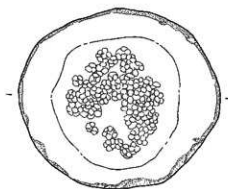
SH136



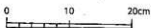
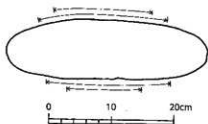
1751



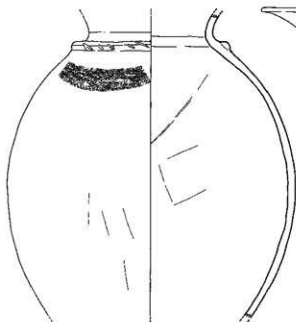
1752



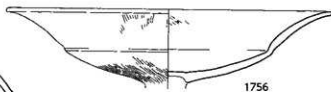
1753



SH137



1754



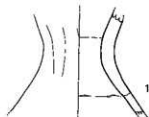
1756



1757



1758



1760



1755



1759

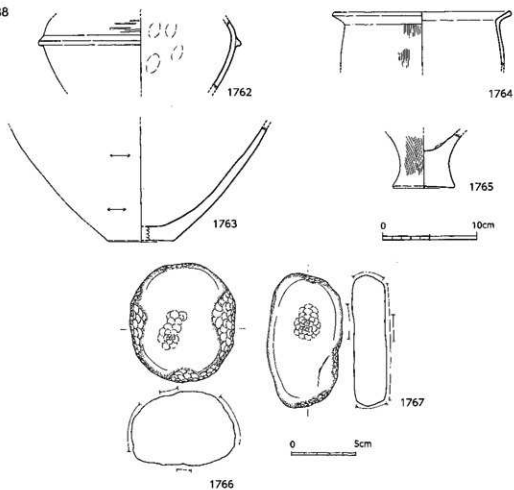


1761

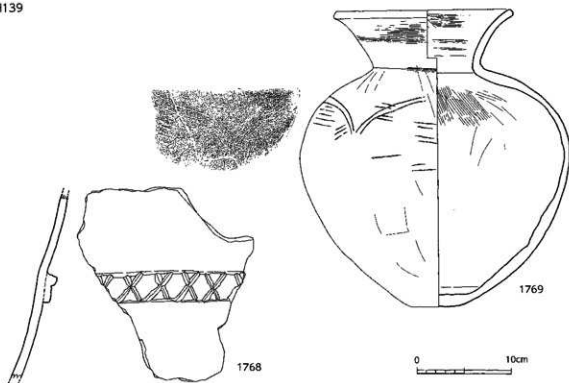


第 137 图 諫山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (118)

SH138

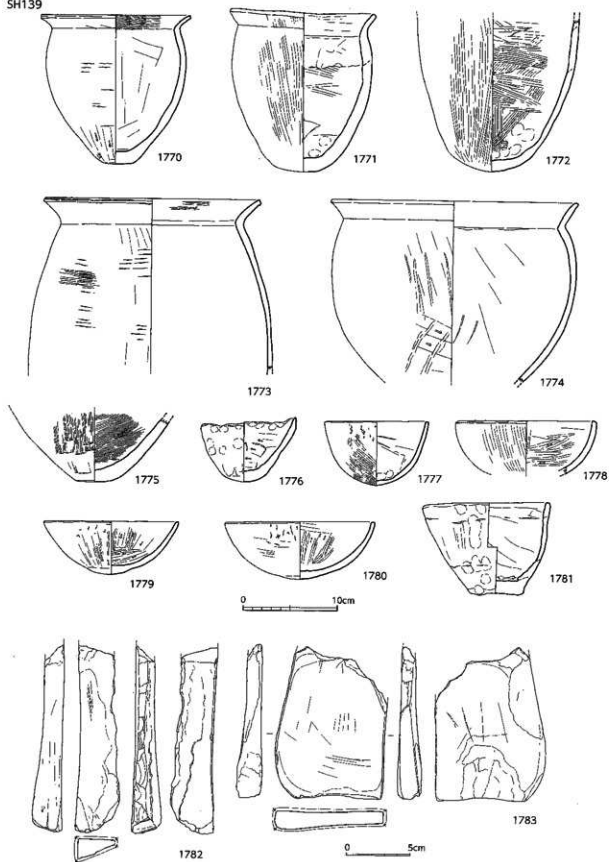


SH139

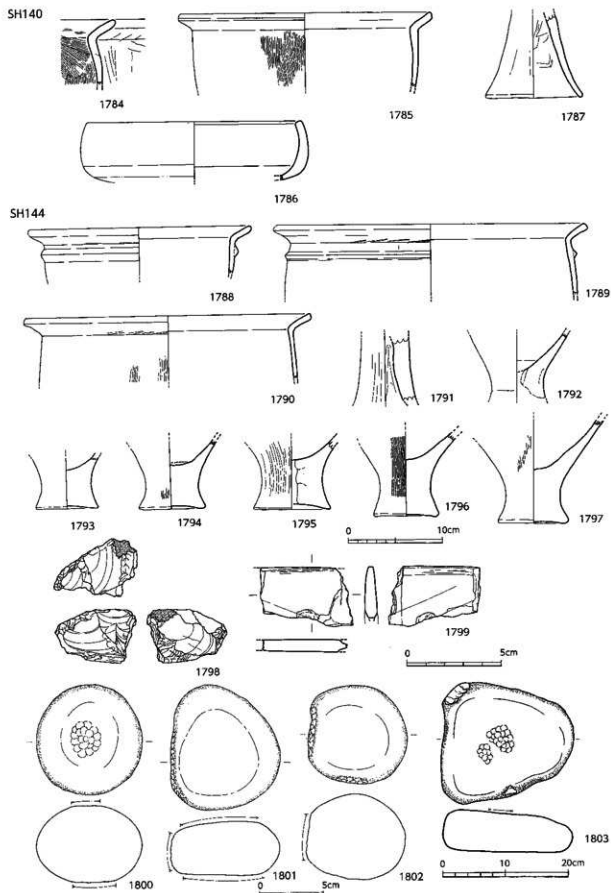


第138圖 隳山遺跡 住居跡出土遺物実測図(119)

SH139

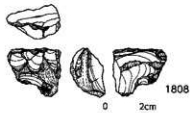
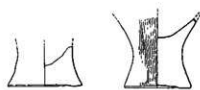
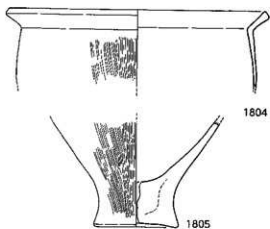


第 139 图 陈山遗址 住居跡出土遺物実測図 (120)

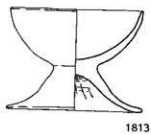
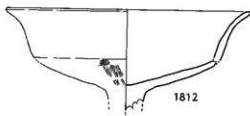
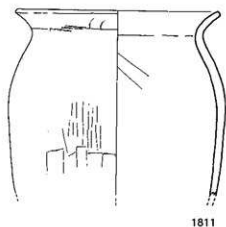
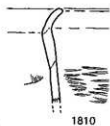
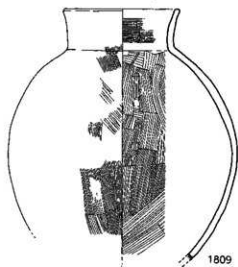


第 140 圖 隸山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (121)

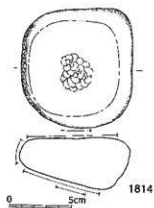
SH147



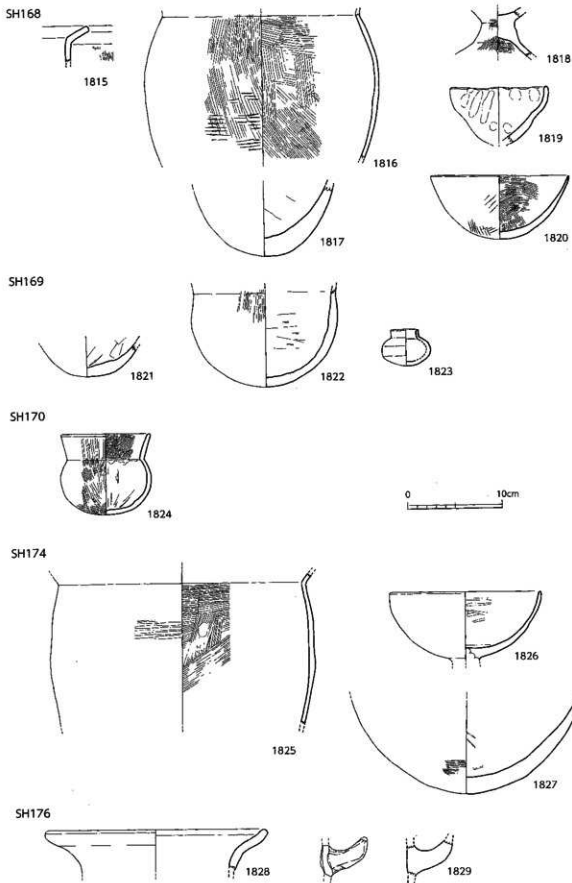
SH159



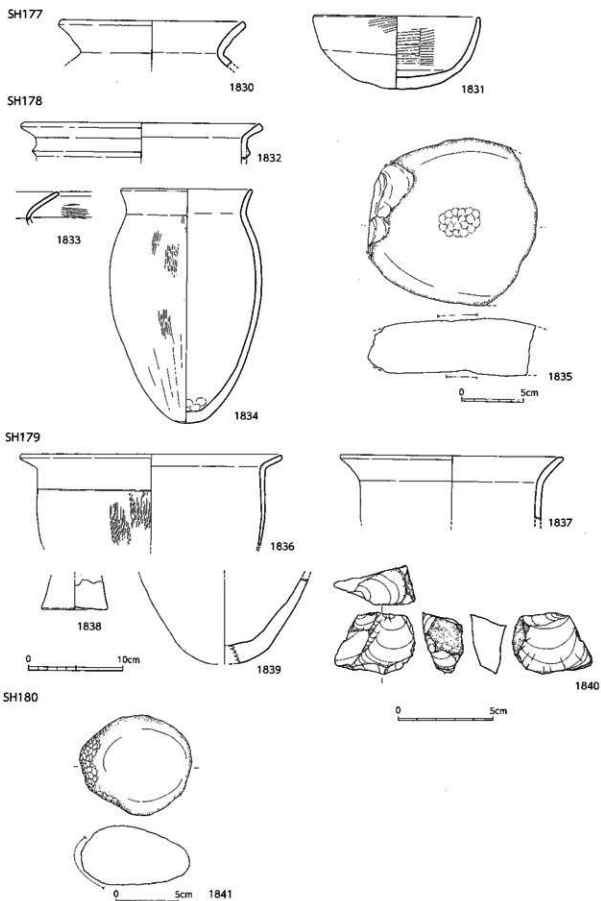
SH161



第 141 圖 陝山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (122)

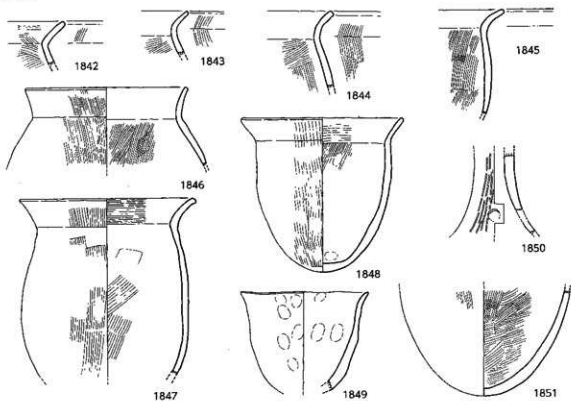


第 142 圖 譚山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (123)



第 143 图 谈山遗址 住居跡出土遺物実測図 (124)

SH181

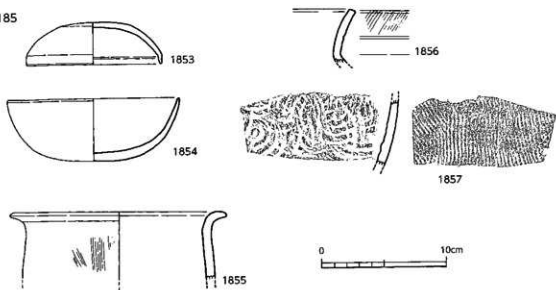


SH184



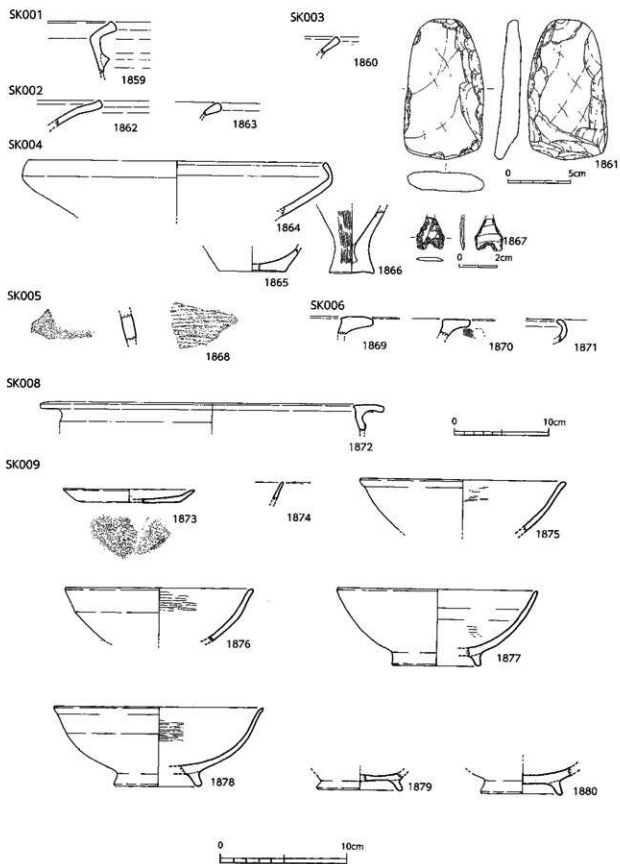
0 10cm

SH185



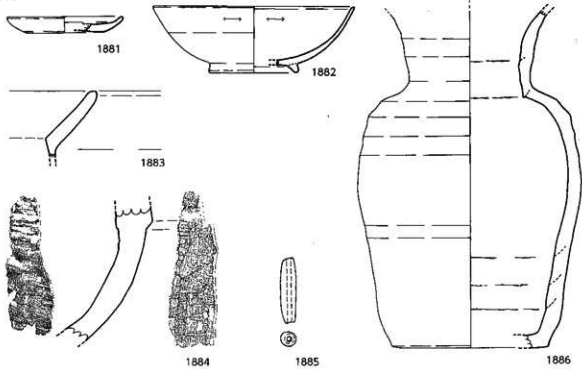
0 10cm

第 144 圖 隴山遺跡 住居跡出土遺物実測図 (125)

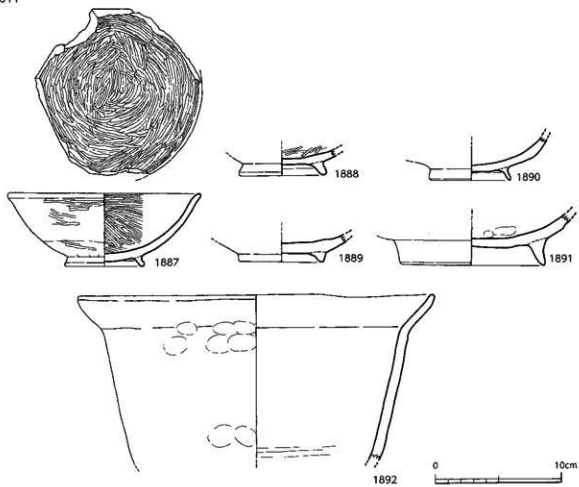


第 145 圖 隸山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (1)

SK010

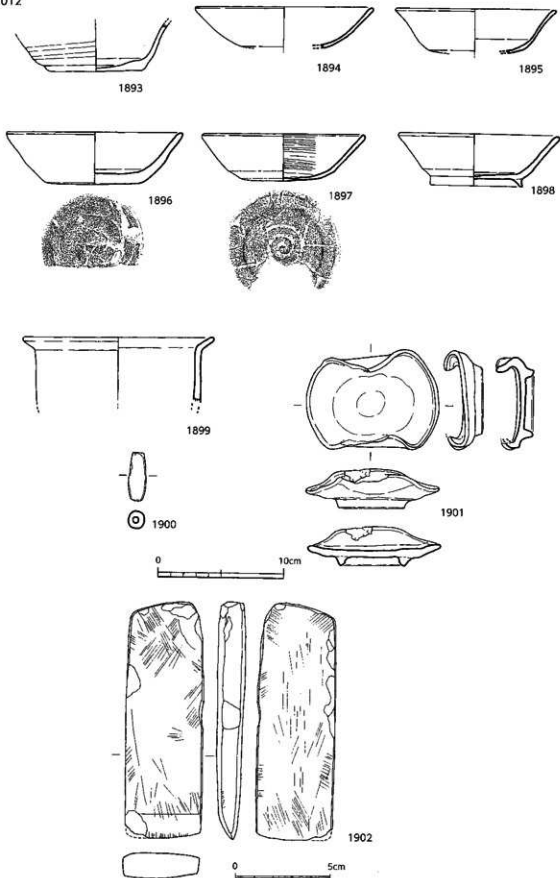


SK011



第146圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測圖(2)

SK012



第 147 圖 隗山遺跡 土坑出土遺物実測図 (3)

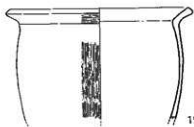
SK013



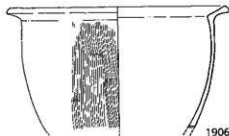
1903



1904



1905

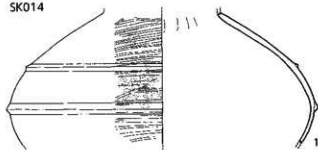


1906

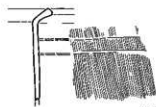


1907

SK014



1908



1909



1911



1910



1912

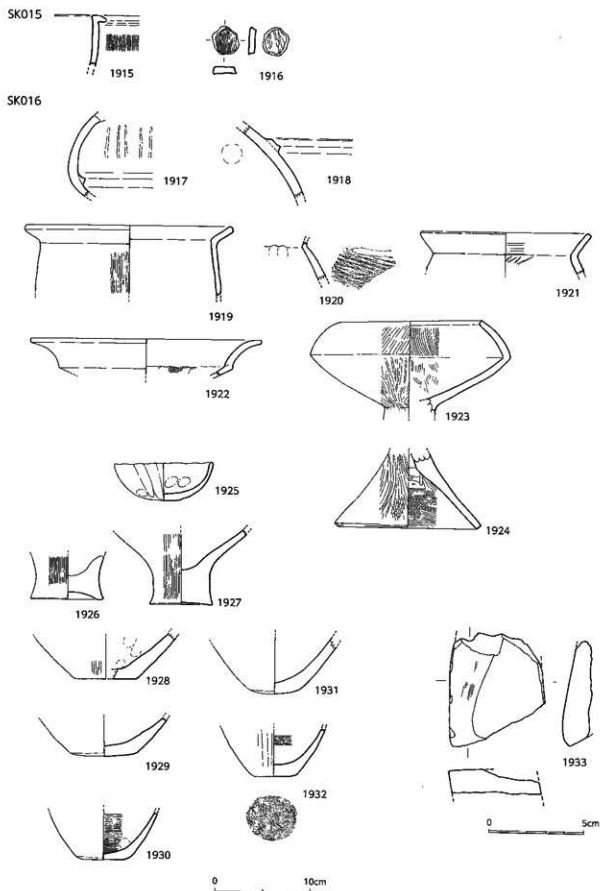


1913



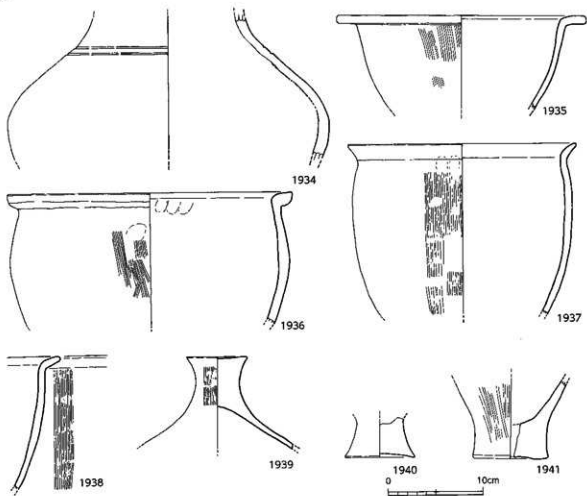
1914

第 148 图 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (4)

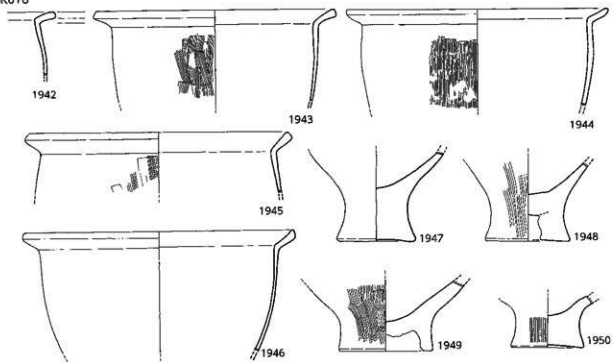


第 149 圖 謙山遺跡 土坑出土遺物実測図 (5)

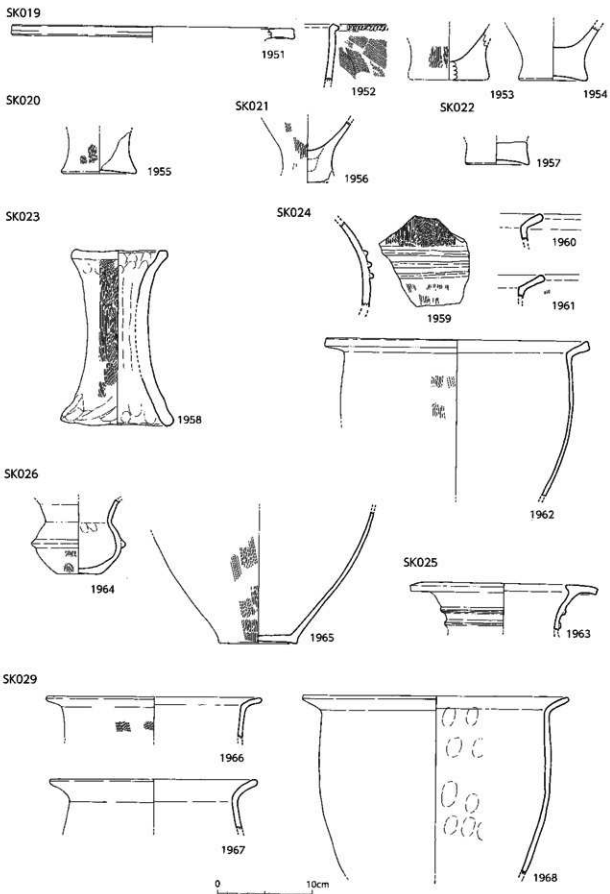
SK017



SK018

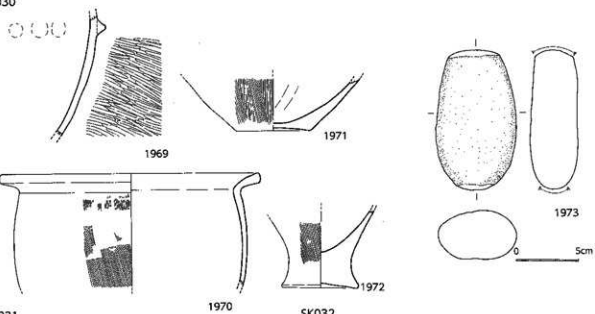


第 150 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (6)

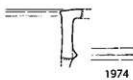


第 151 图 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (7)

SK030

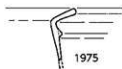


SK031



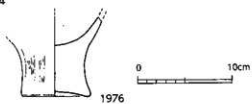
1974

SK032

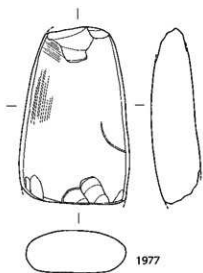


1975

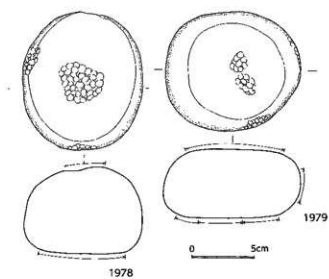
SK034



1976



1977

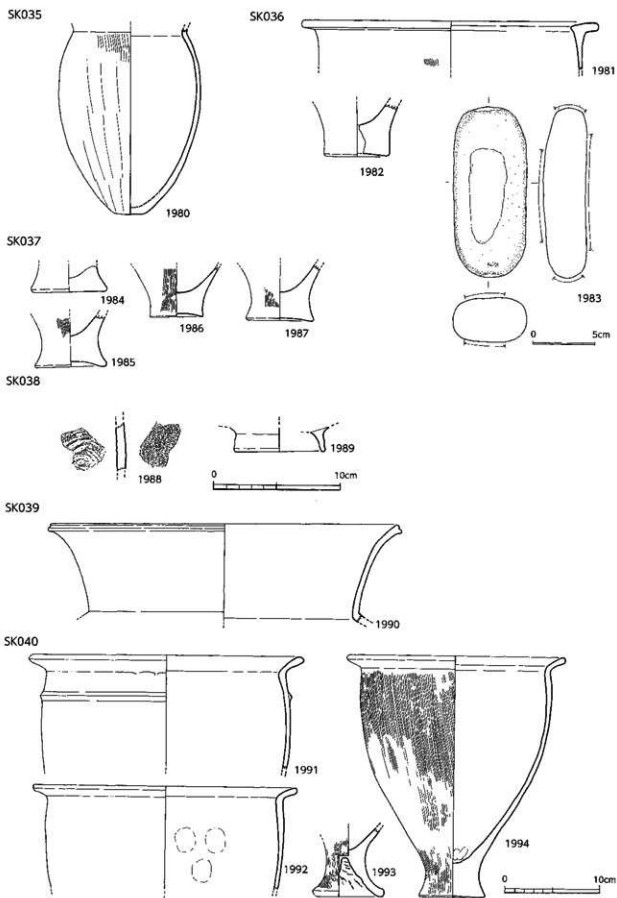


1978

1979

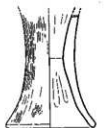
0 5cm

第 152 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (8)



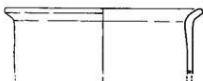
第 153 圖 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (9)

SK041

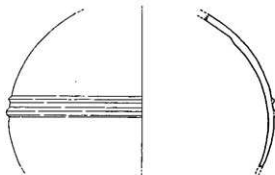


1995

SK042



1996



1997

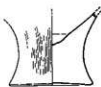
SK043



1998



1999



2000

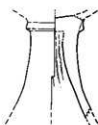
SK044



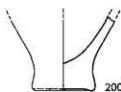
2001



2002

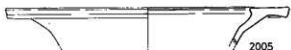


2003



2004

SK045



2005

0 10cm

SK047



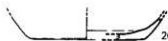
2006



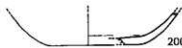
2007



2010



2008

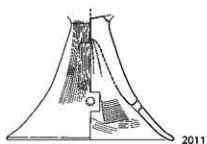


2009

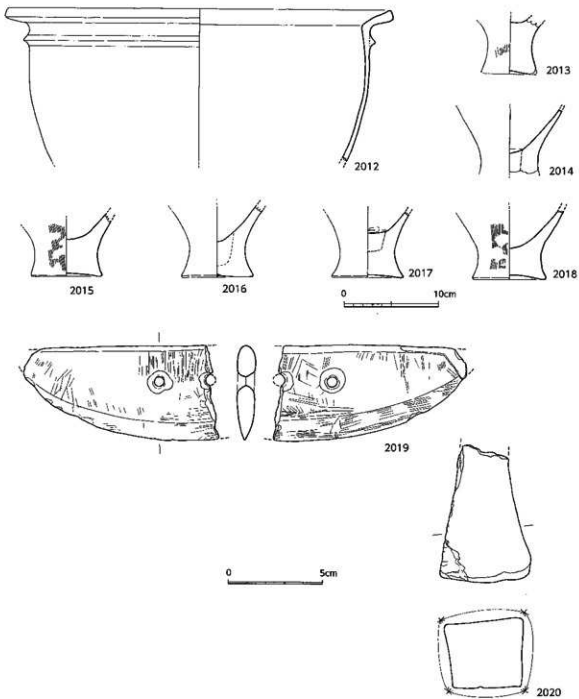
0 10cm

第 154 图 隰山遺跡 土坑出土遺物実測図 (10)

SK048

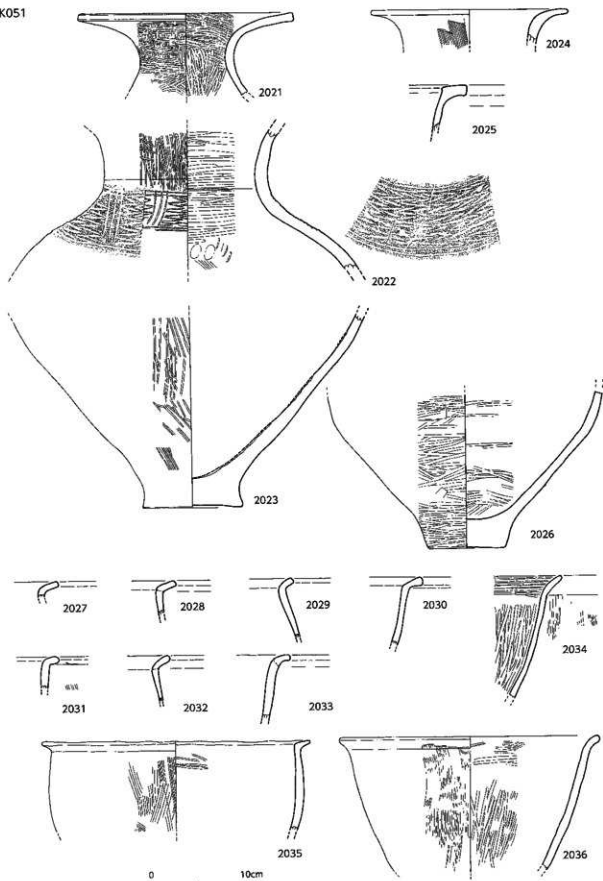


SK050



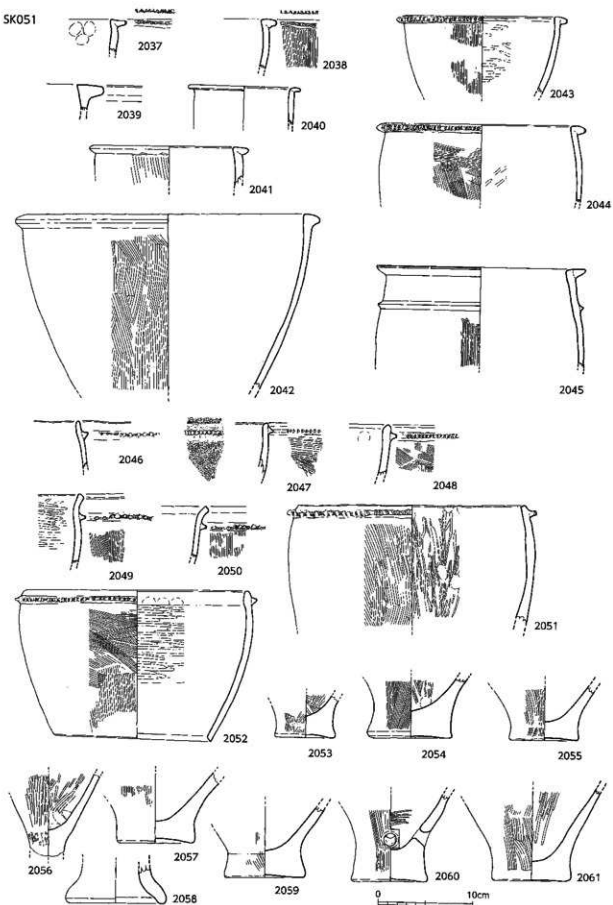
第 155 图 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (11)

SK051



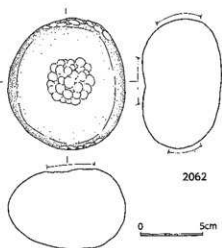
第 156 図 隸山遺跡 土坑出土遺物実測図 (12)

SK051

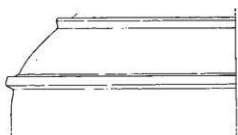


第 157 圖 陝山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (13)

SK051



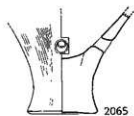
SK052



2064

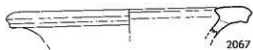
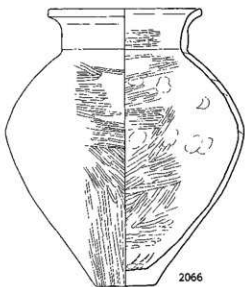


2063



2065

SK053



2067

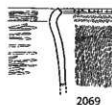


2068

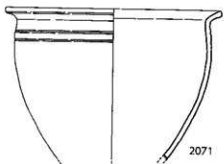


第158圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(14)

SK053



2069



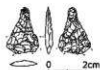
2071



2070

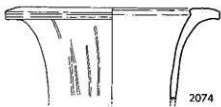


2072



2073

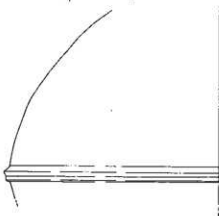
SK054



2074



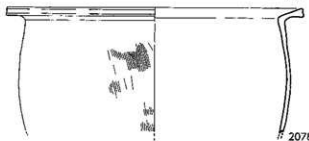
2075



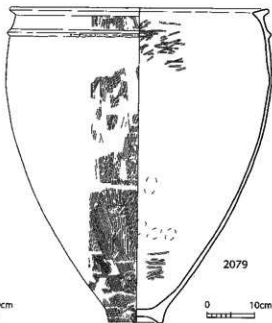
2076



2077



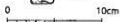
2078



2079



2081



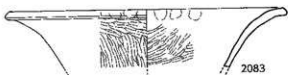
第 159 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (15)

SK055



2082

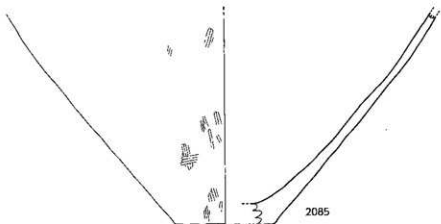
SK056



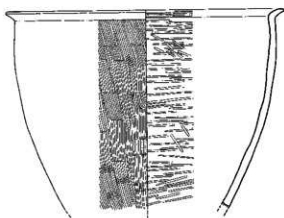
2083



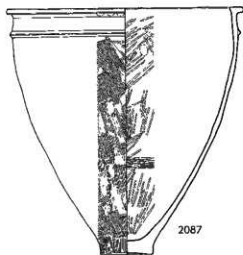
2084



2085



2086

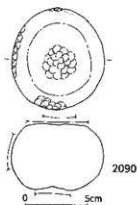
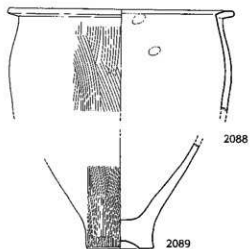


2087

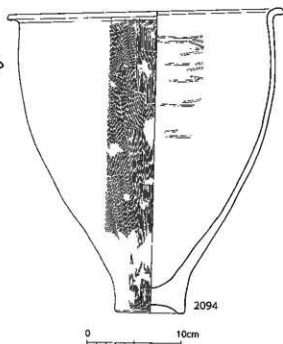
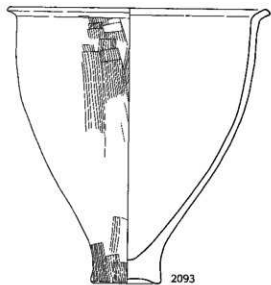
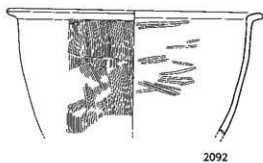
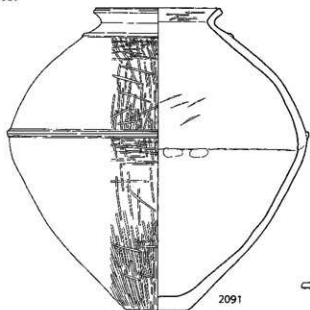


第 160 图 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (16)

SK056



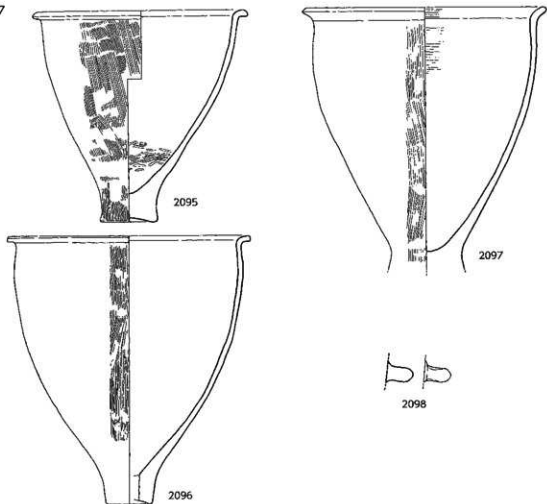
SK057



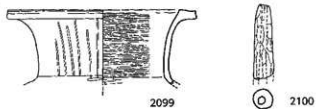
0 10cm

第161圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(17)

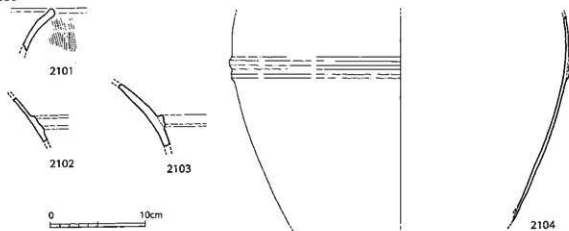
SK057



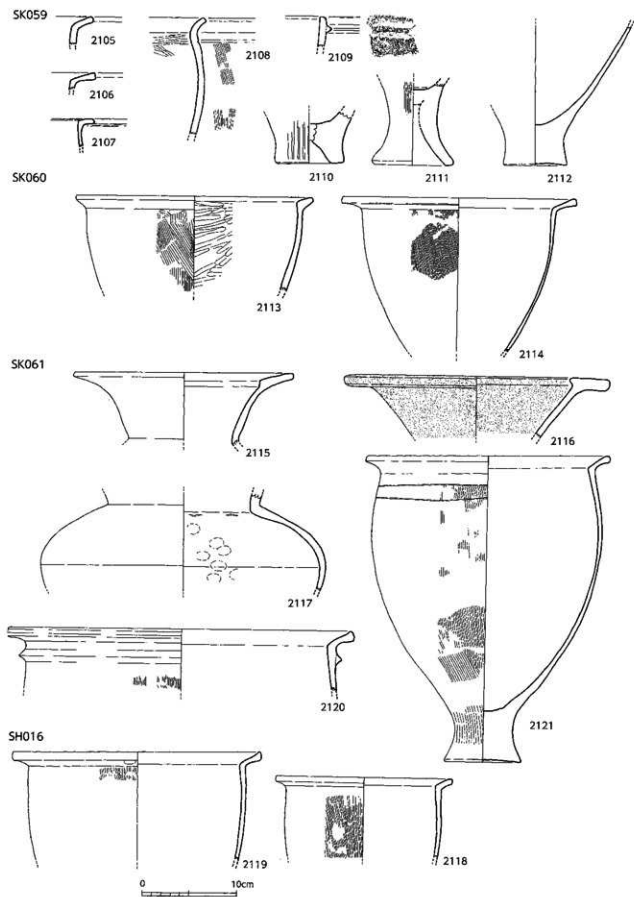
SK058



SK059

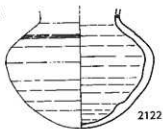


第 162 圖 疎山遺跡 土坑出土遺物実測図 (18)



第 163 圖 隰山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (19)

SK062



2122

SK063



2123



2124

SK064



2125

SK065



2126



2127



2128



2129



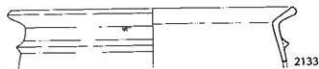
2130



2131



2132



2133



2134

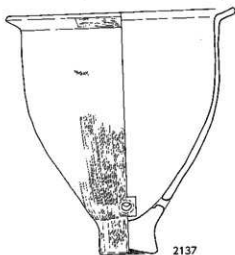


2135

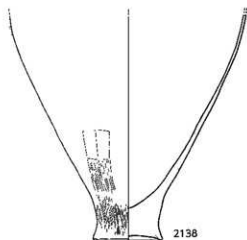
0 10cm



2136



2137



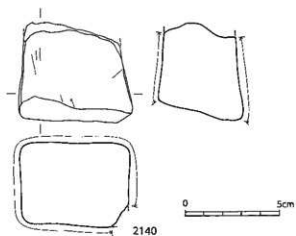
2138



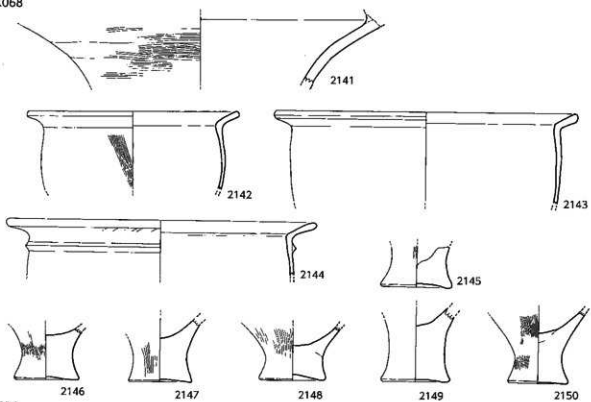
2139

第 164 図 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (20)

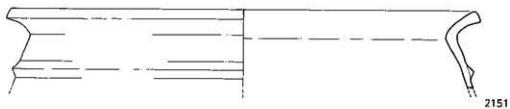
SK065



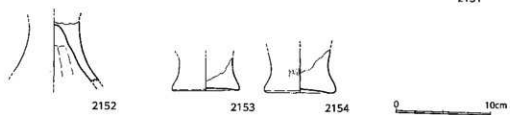
SK068



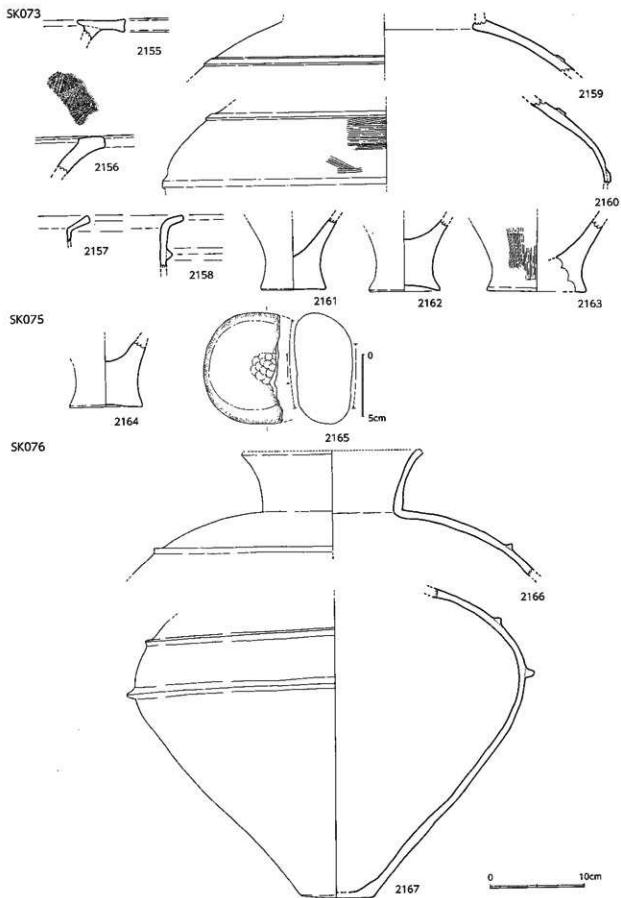
SK070



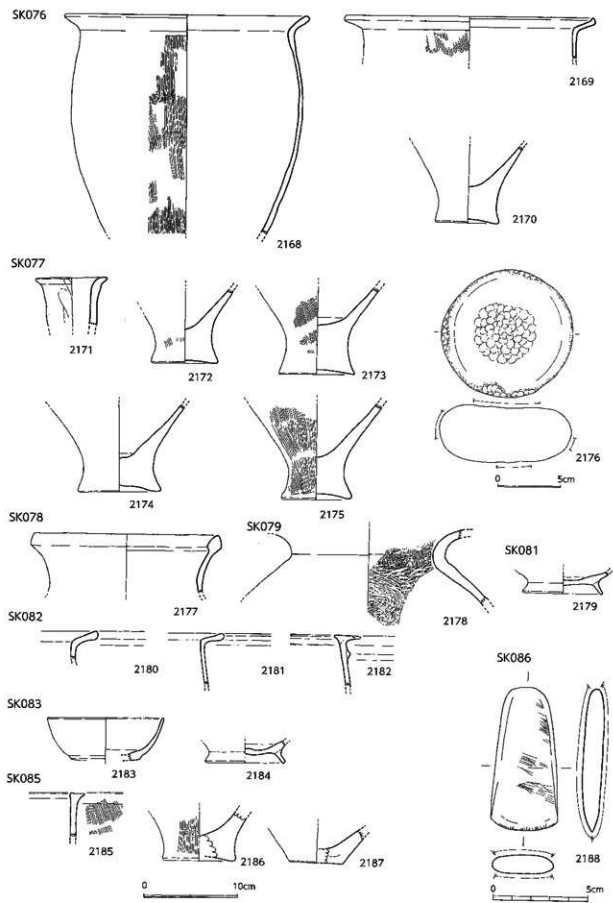
SK072



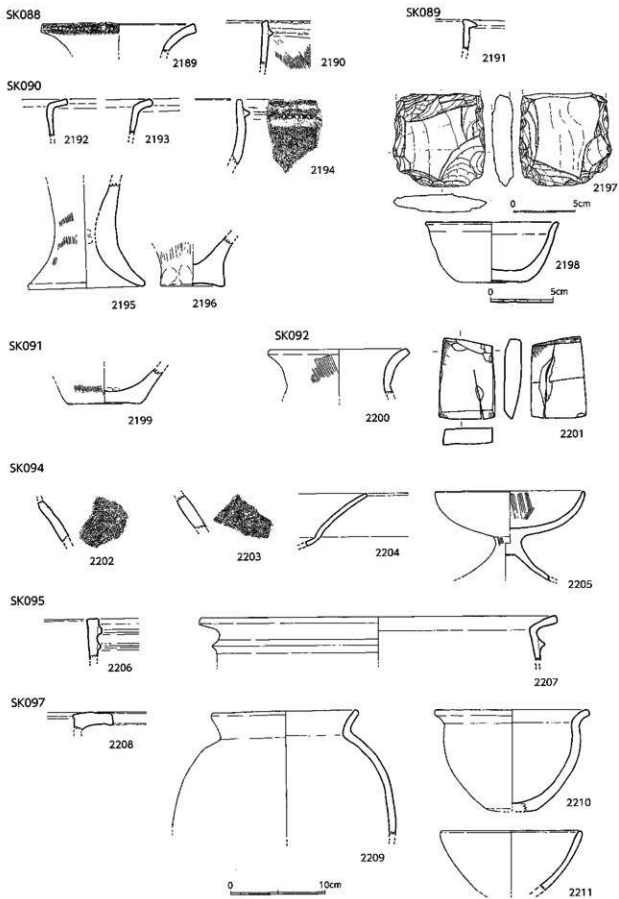
第165圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(21)



第 166 圖 隸山遺跡 土坑出土遺物実測図 (22)

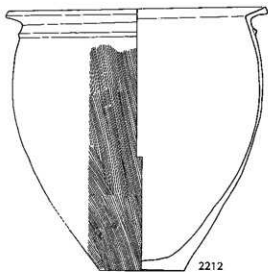


第 167 図 碑山遺跡 土坑出土遺物実測図 (23)

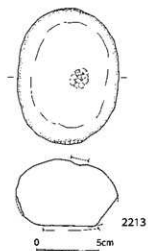


第 168 圖 陝山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (24)

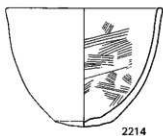
SK098



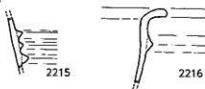
SK099



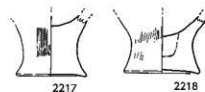
SK100



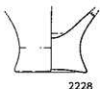
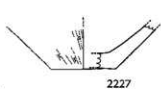
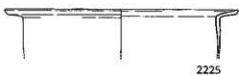
SK103



SK106



SK107

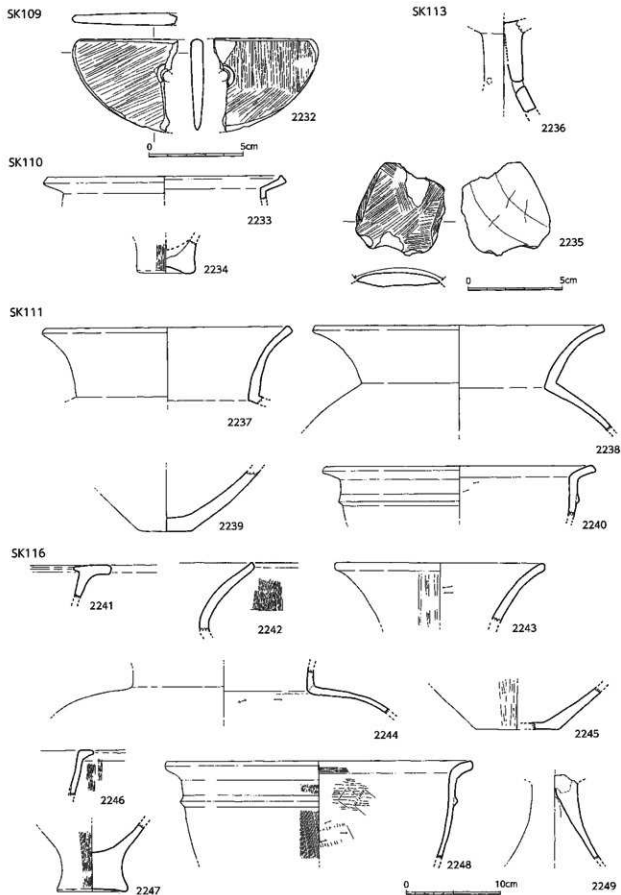


SK108



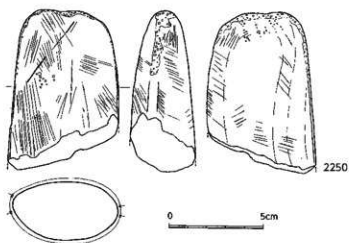
0 10cm

第 169 图 濠山遺跡 土坑出土遺物実測図 (25)

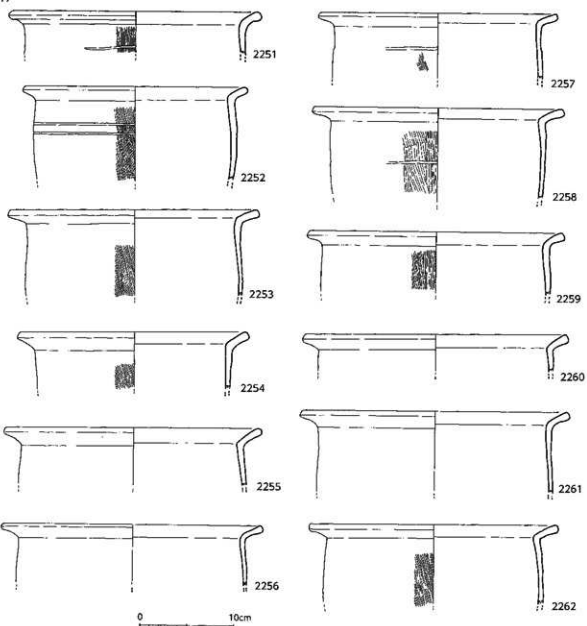


第 170 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測圖 (26)

SK116

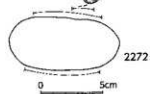
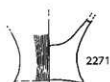
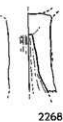
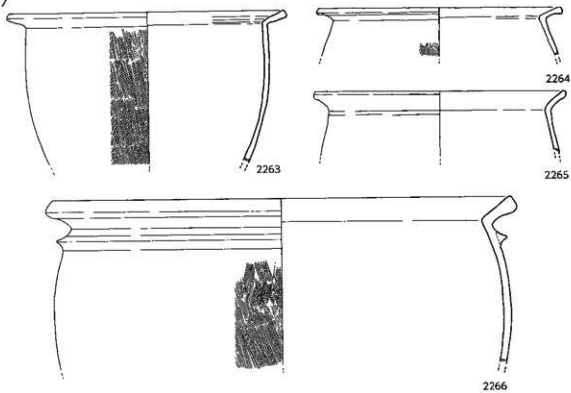


SK117

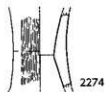


第 171 圖 談山遺跡 土坑出土遺物夾測圖 (27)

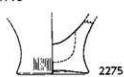
SK117



SK118



SK119



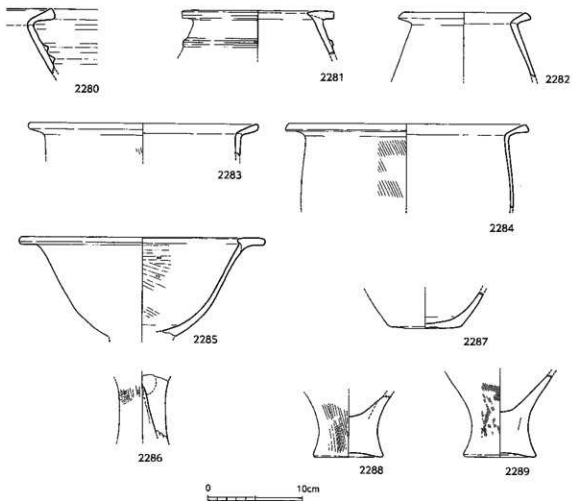
SK120



0 10cm

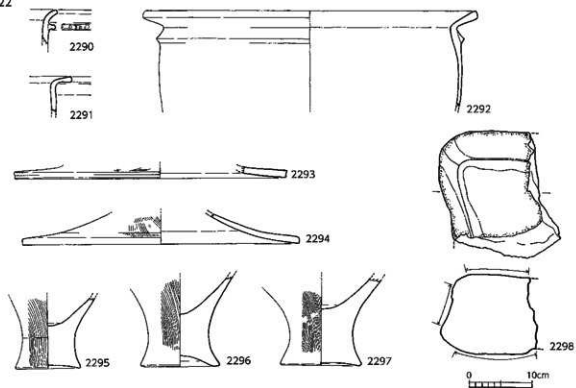
第 172 图 陳山遺跡 土坑出土遺物実測图 (28)

SK121

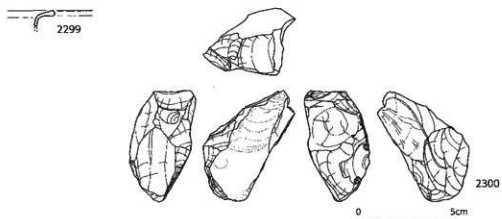


第 173 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (29)

SK122



SK125



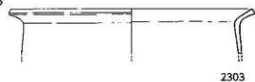
SK126



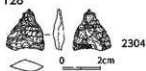
SK127



SK128

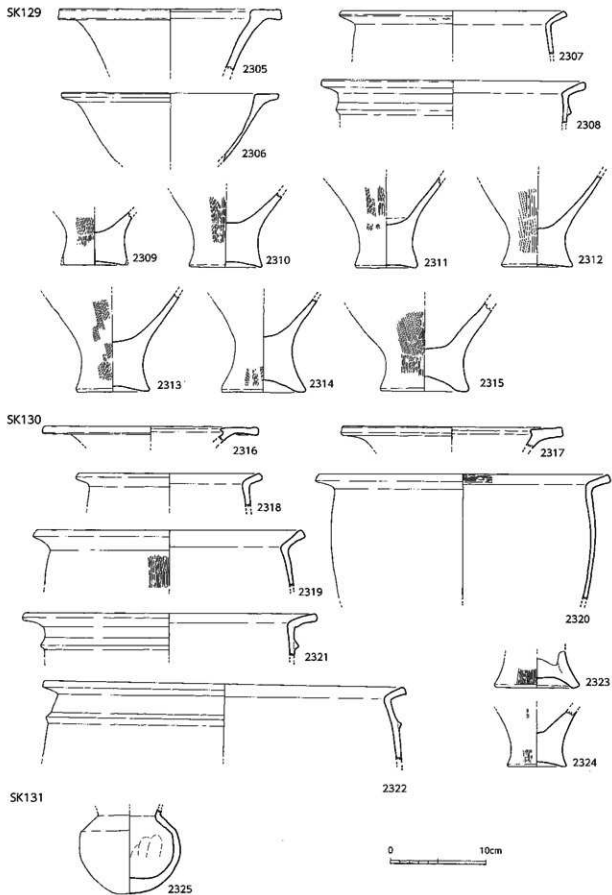


SK125~128

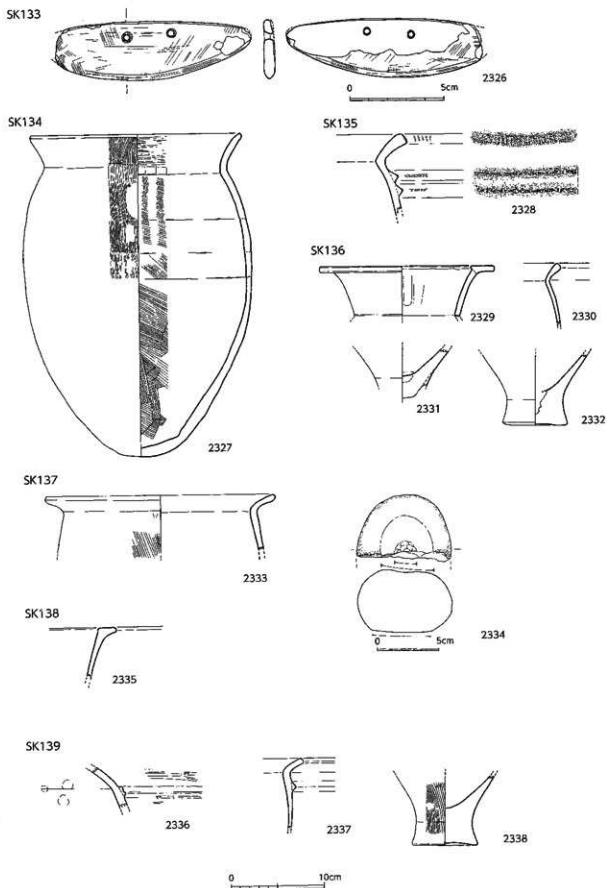


0 10cm

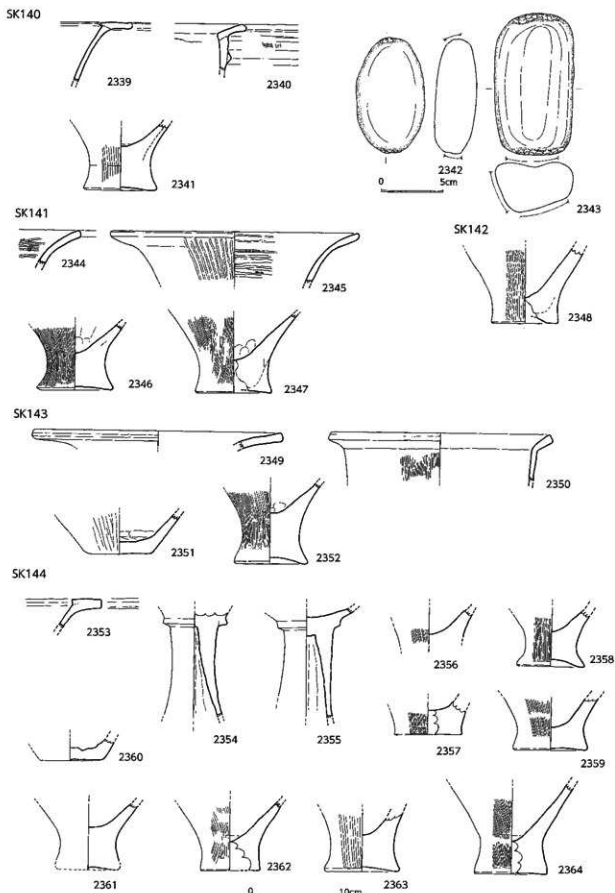
第 174 図 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (30)



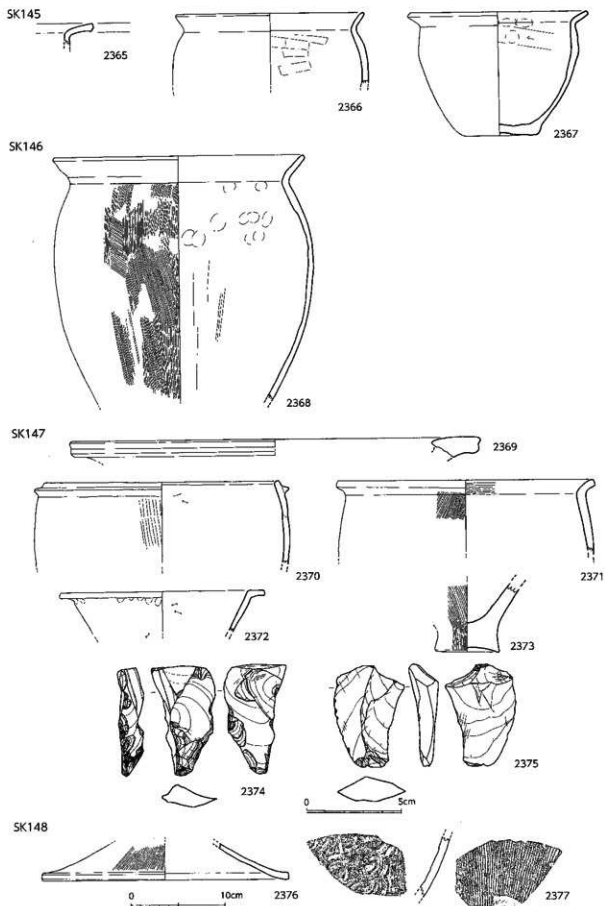
第 175 圖 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (31)



第 176 图 Liaoshan 遗址 土坑出土文物实测图 (32)

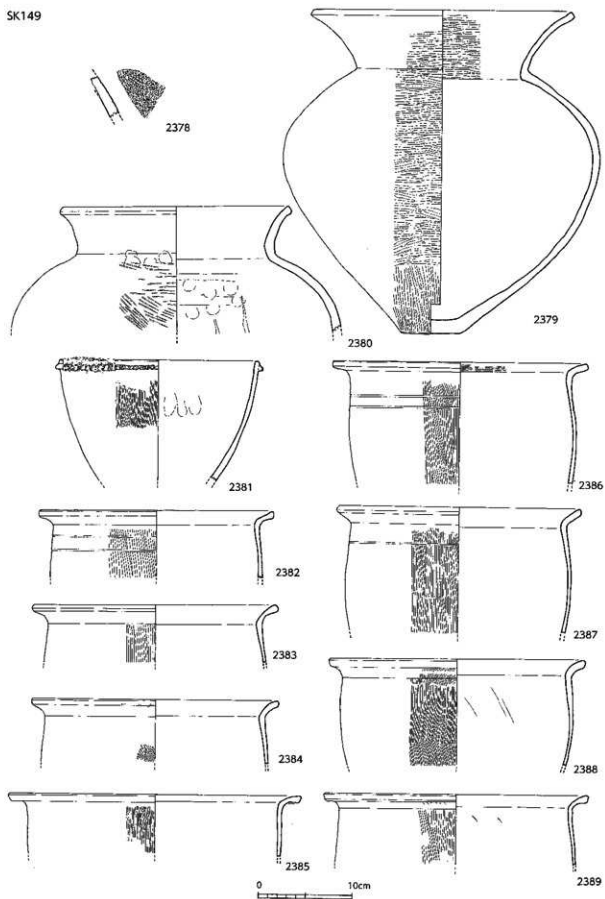


第177图 陳山遺跡 土坑出土遺物與測圖(33)



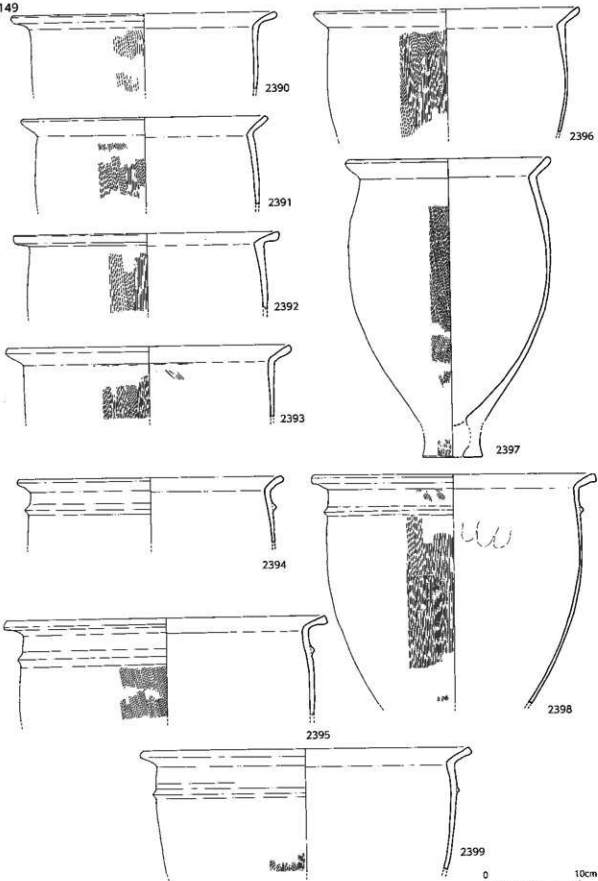
第 178 圖 鍊山遺跡 土坑出土遺物実測図 (34)

SK149



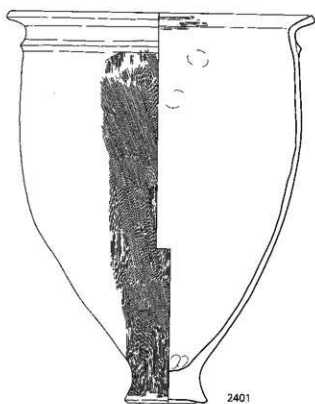
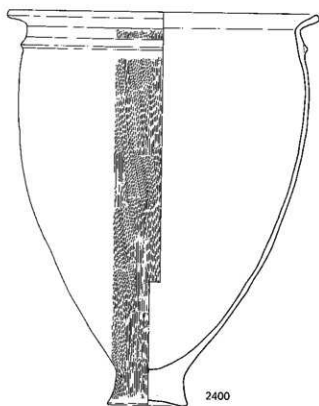
第 179 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (35)

SK149



第 180 図 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (36)

SK149



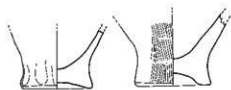
0 10cm

第 181 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (37)

SK149

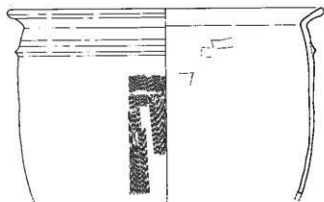


2402



2404

2405

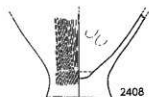


2403

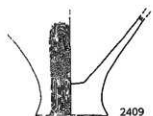


2406

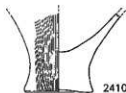
2407



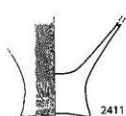
2408



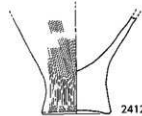
2409



2410



2411



2412

SK150



2413



2414

SK152



2415



2416



2417

SK153



2418



2419



2420



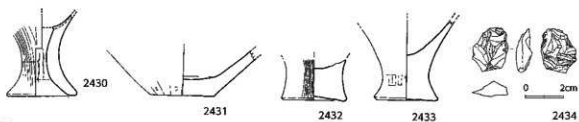
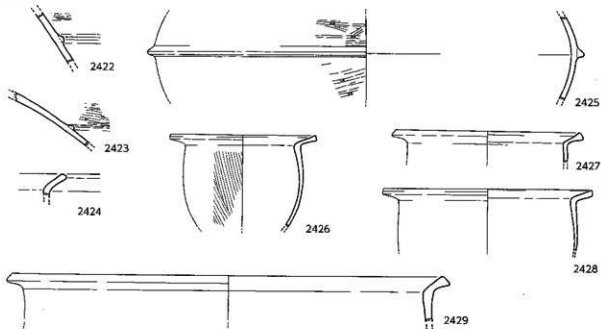
2421

0 10cm

0 5cm

第 182 图 陝山遺跡 土坑出土遺物実測図 (38)

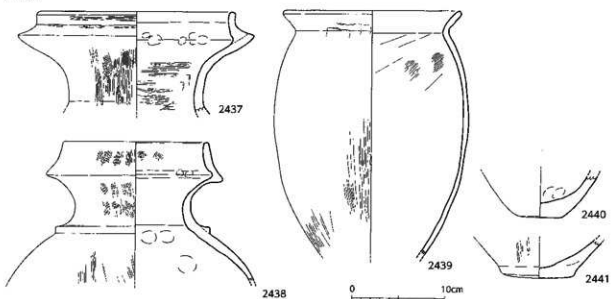
SK154



SK156

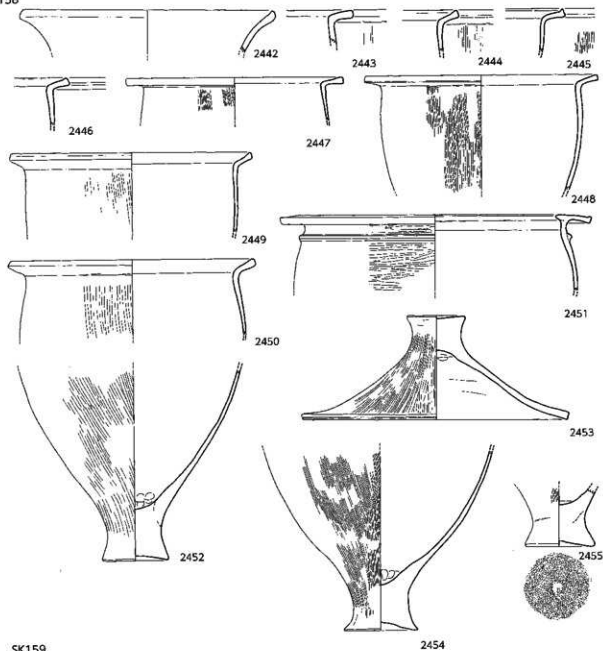


SK157

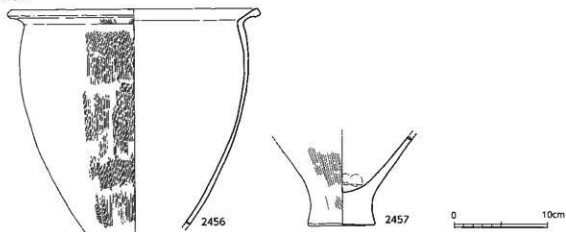


第 183 图 陡山沱遗址 土坑出土遗物实测图 (39)

SK158

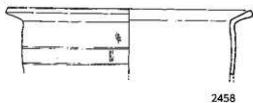


SK159

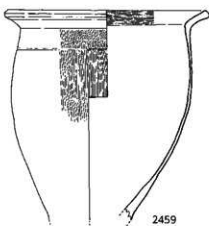


第184圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測圖(40)

SK161



2458



2459



2460



2461

SK163



2462

SK164



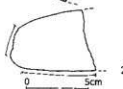
SK168



2464



2465



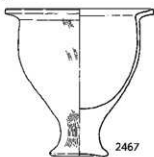
2463

0 5cm

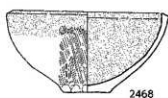


2466

SK170



2467



2468



2469

SK171



2470



2471



2472

SK172



2473

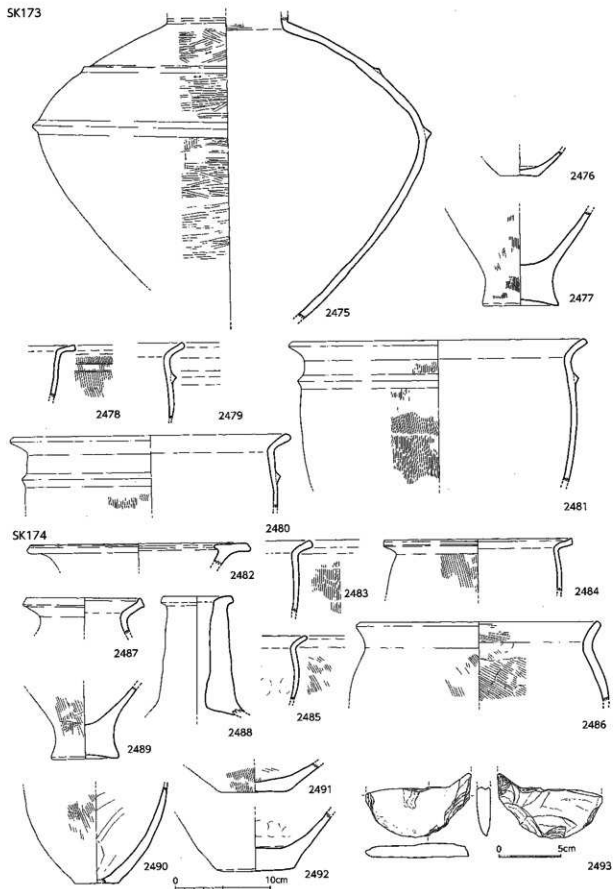


2474

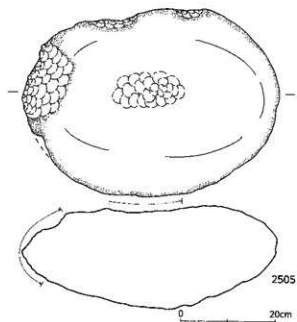
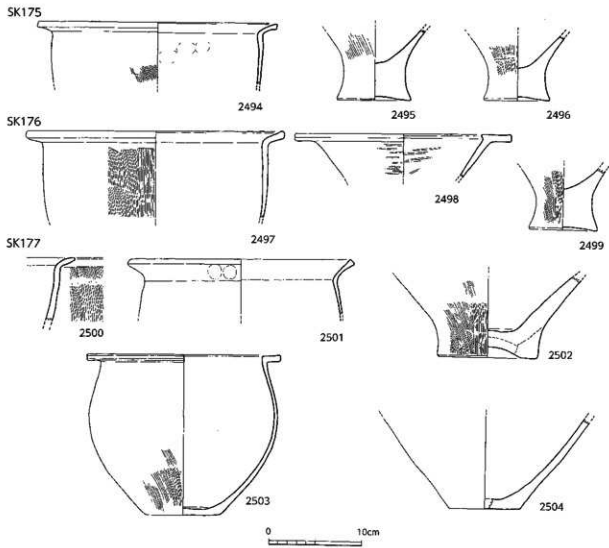
0 10cm

第 185 図 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (41)

SK173

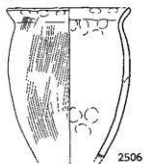


第186図 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図(42)



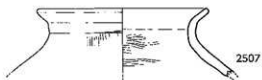
第187圖 隴山遺跡 土坑出土遺物実測図(43)

SK178

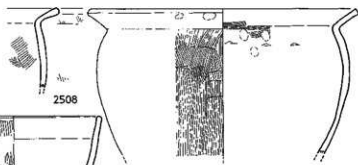


2506

SK179



2507



2508



2510

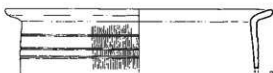


2511

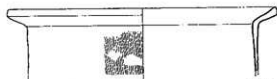
SK180



2512



2516



2513



2517



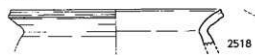
2514



2515



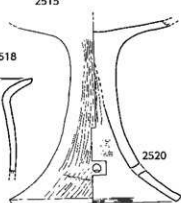
SK181



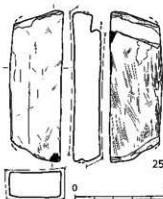
2518



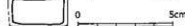
2519



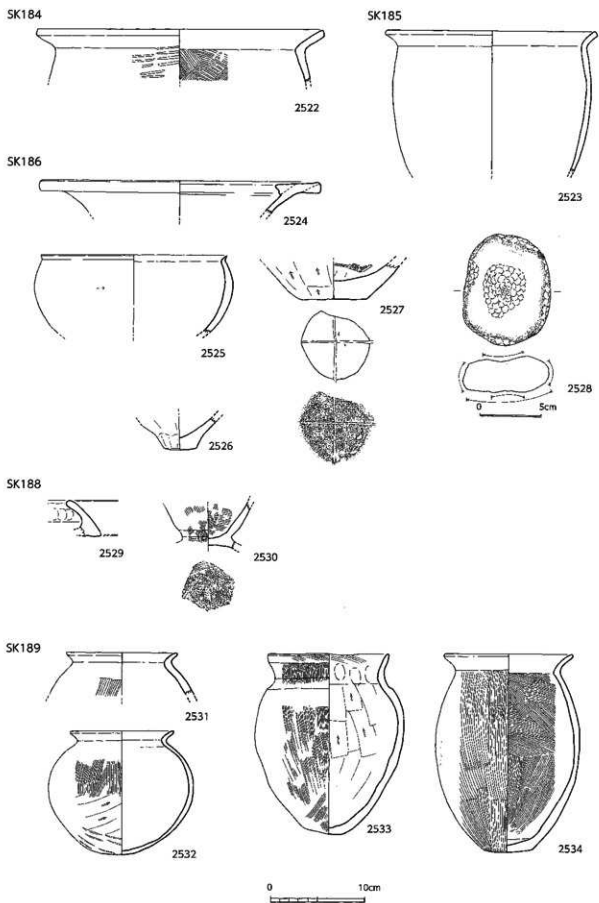
2520



2521

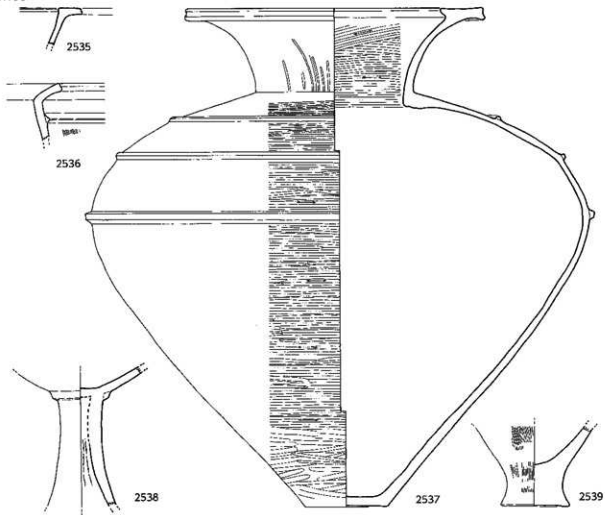


第 188 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (44)

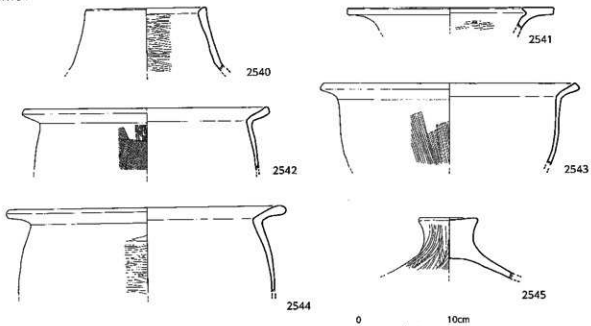


第 189 圖 鍊山遺跡 土坑出土遺物実測図 (45)

SK190

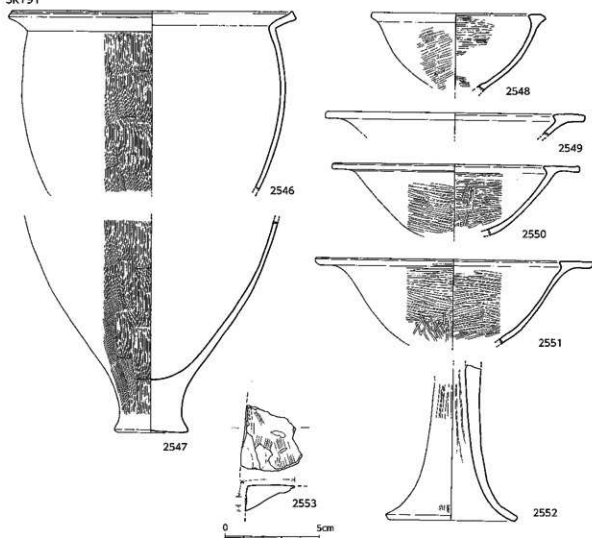


SK191

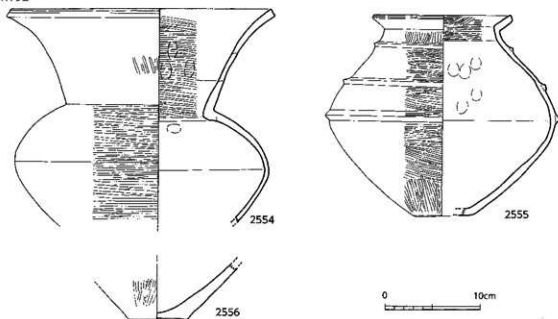


第190図 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図(46)

SK191

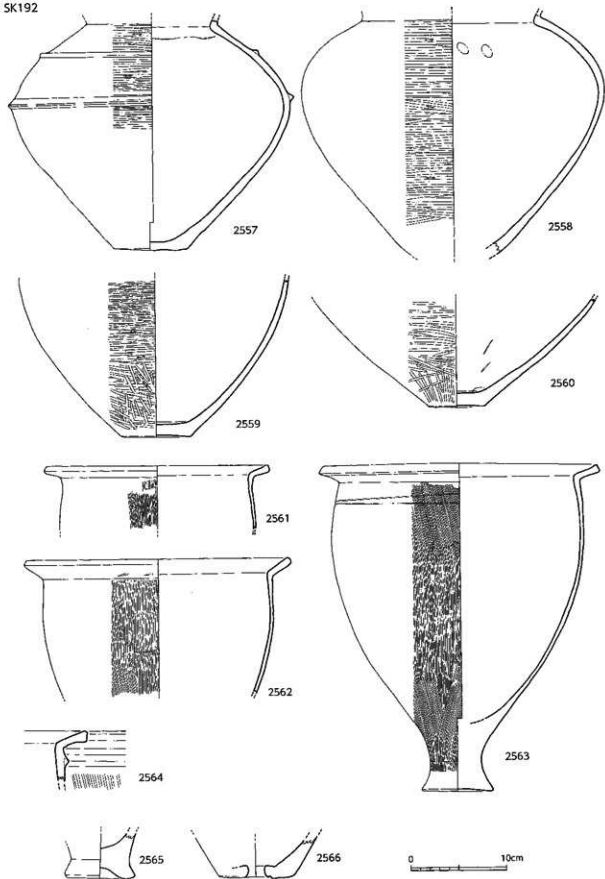


SK192



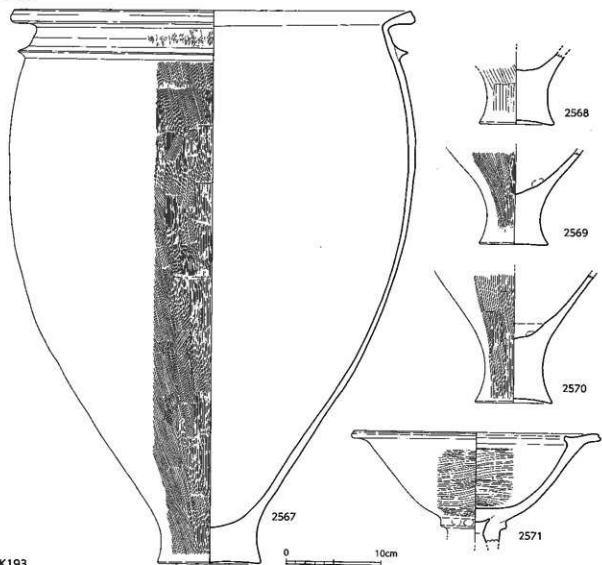
第191图 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図(47)

SK192

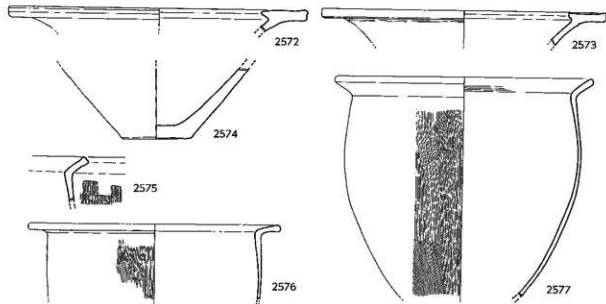


第 192 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (48)

SK192

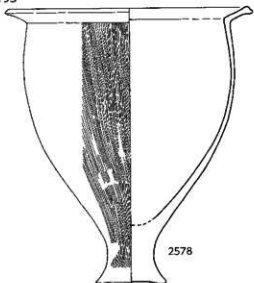


SK193

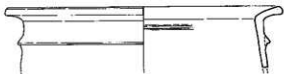


第193圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(49)

SK193



2578



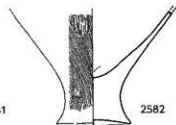
2579



2580

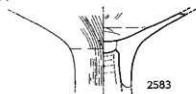


2581

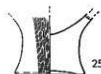


2582

SK194



2583

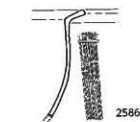


2584

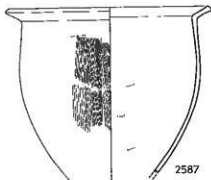
SK195



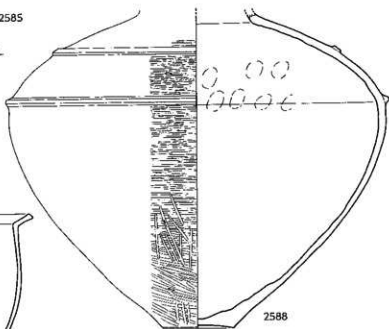
2585



2586



2587

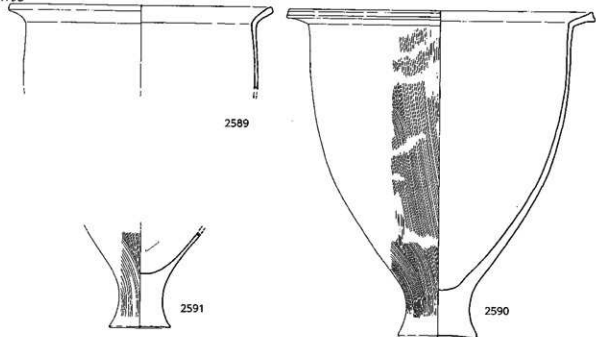


2588

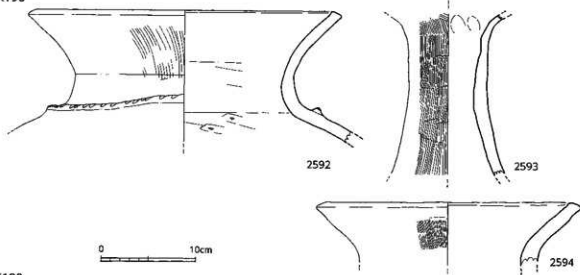
0 10cm

第 194 圖 陳山遺跡 土坑出土遺物實測圖 (50)

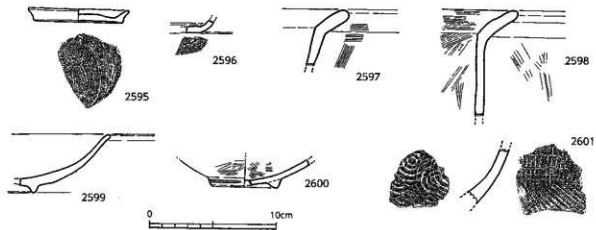
SK195



SK196

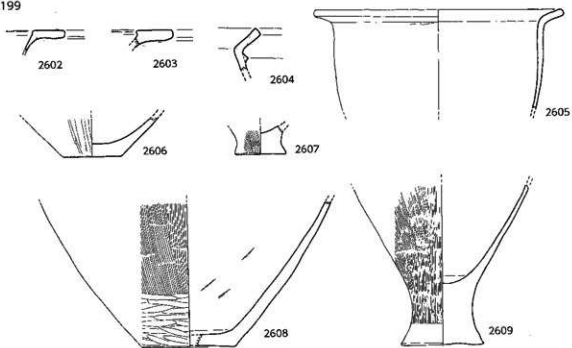


SK198



第195圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(51)

SK199



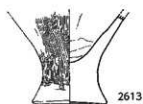
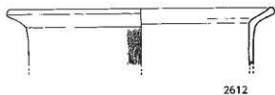
SK208

SK202



0 10cm

SK210



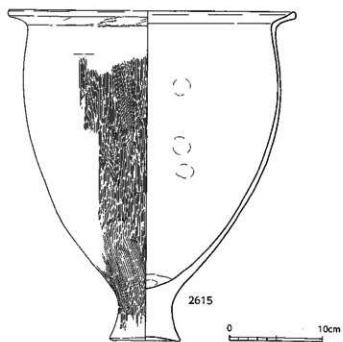
SK211



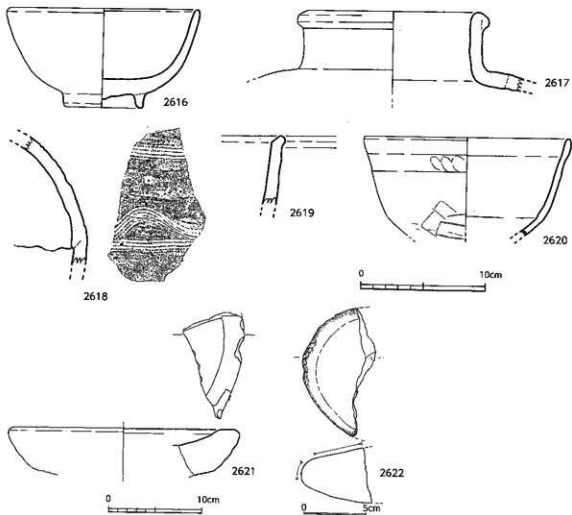
0 10cm

第 196 図 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図 (52)

SK212



SK213

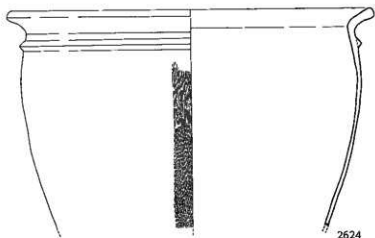


第197图 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図(53)

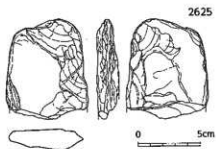
SK215



2623



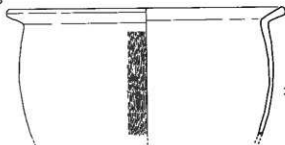
2624



2625

0 5cm

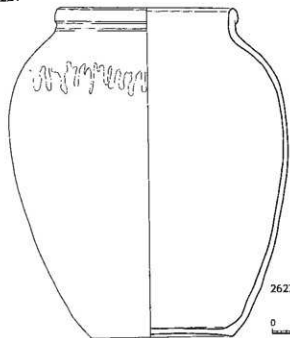
SK216



2626

0 10cm

SK220 · SK221

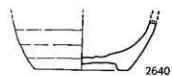
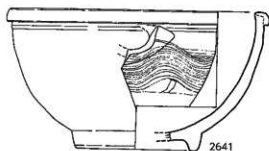
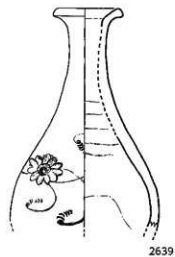
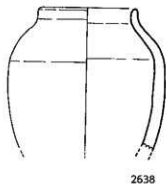
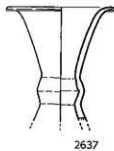
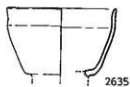
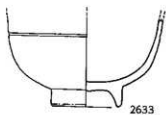
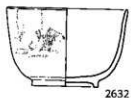
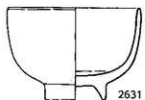
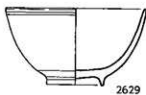
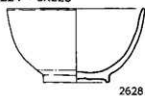


2627

0 20cm

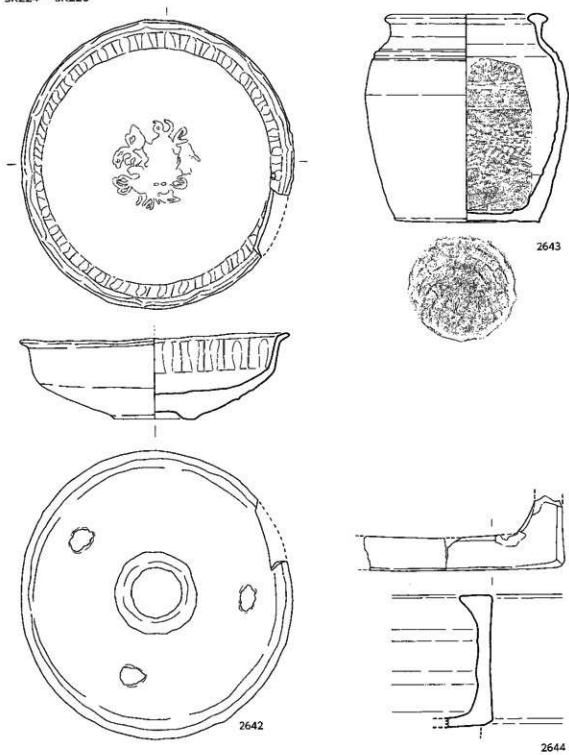
第198圖 陳山遺跡 土坑出土遺物実測圖(54)

SK224 ~ SK226



第199圖 諫山遺跡 土坑出土遺物実測図(55)

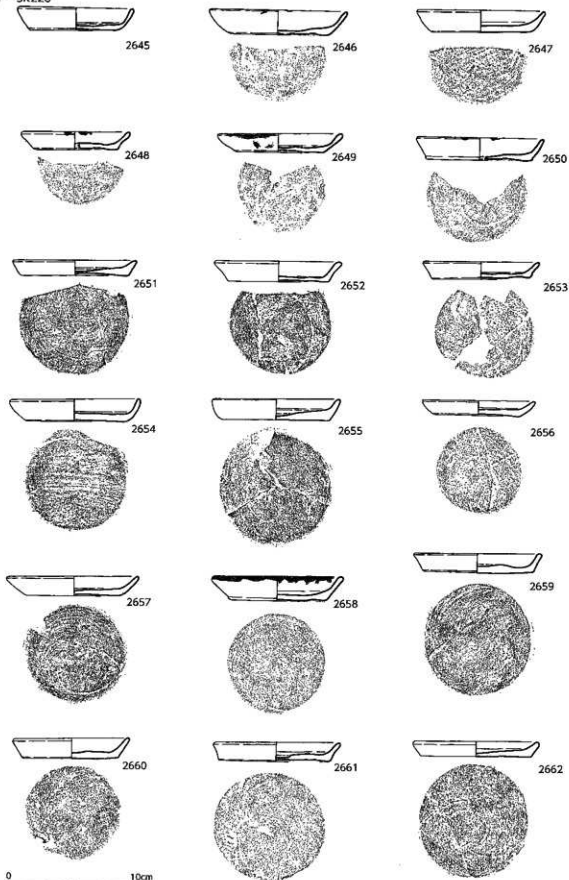
SK224 ~ SK226



0 10cm

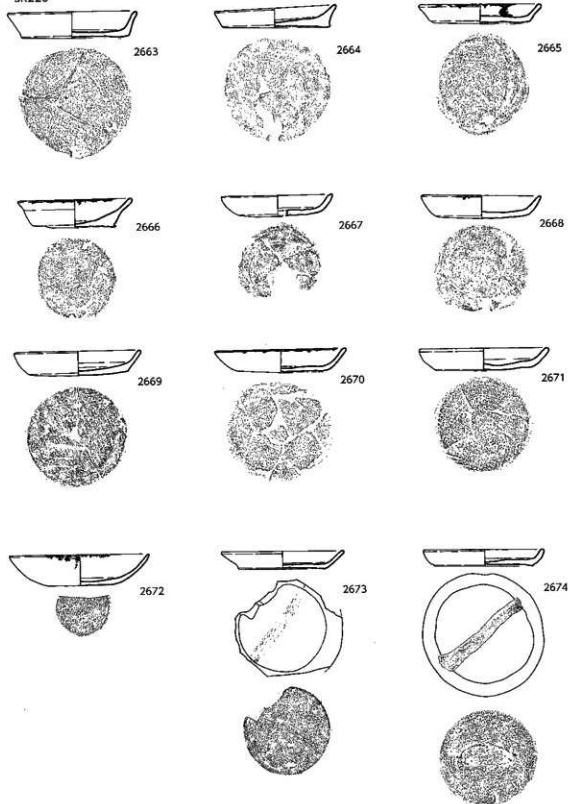
第 200 図 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (56)

SK224 ~ SK226



第201図 陝山遺跡 土坑出土遺物実測図 (57)

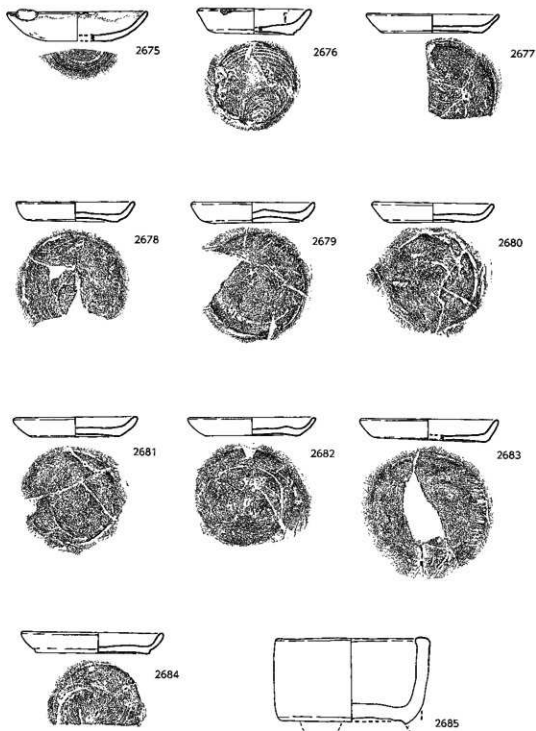
SK224 ~ SK226



0 10cm

第 202 図 陝山遺跡 土坑出土遺物実測図 (58)

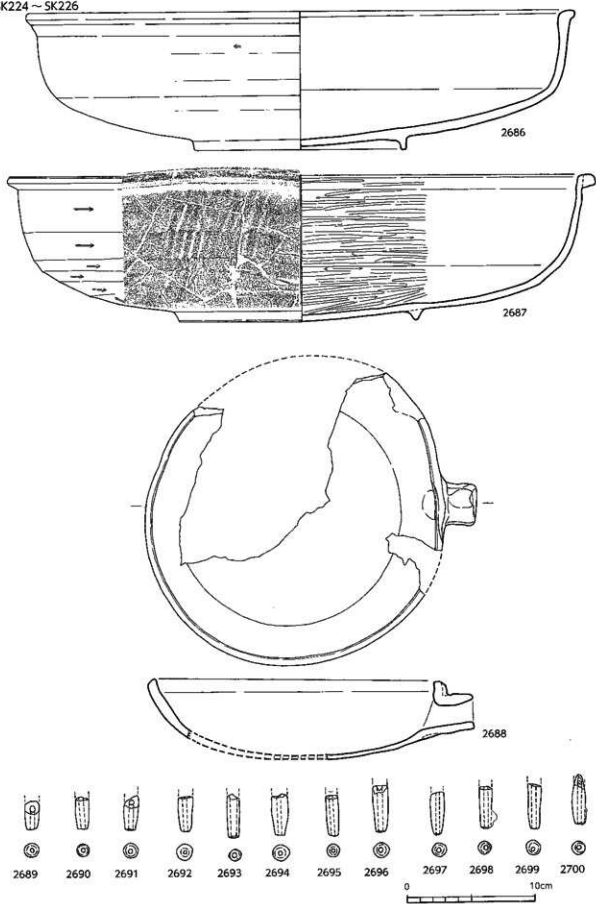
SK224 ~ SK226



0 10cm

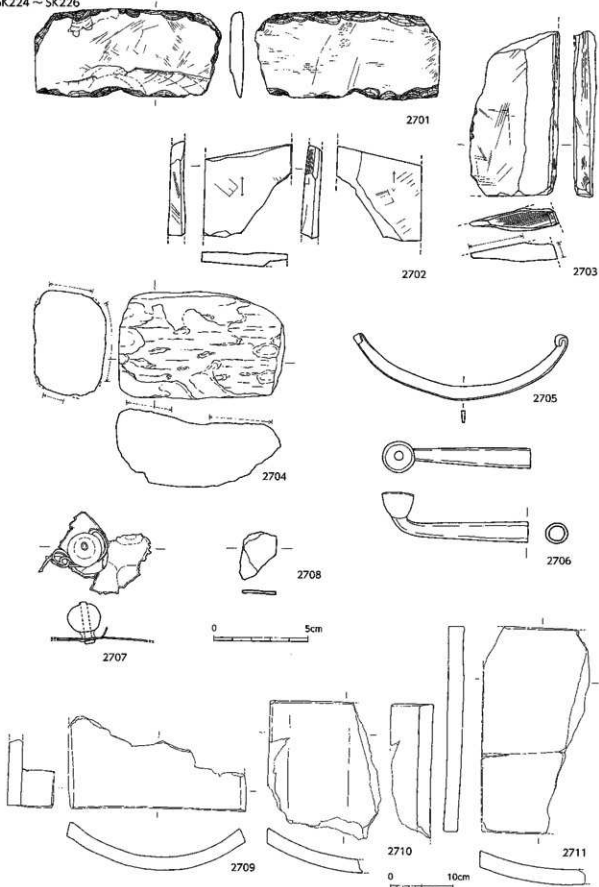
第 203 図 藤山遺跡 土坑出土遺物実測図 (59)

SK224 ~ SK226



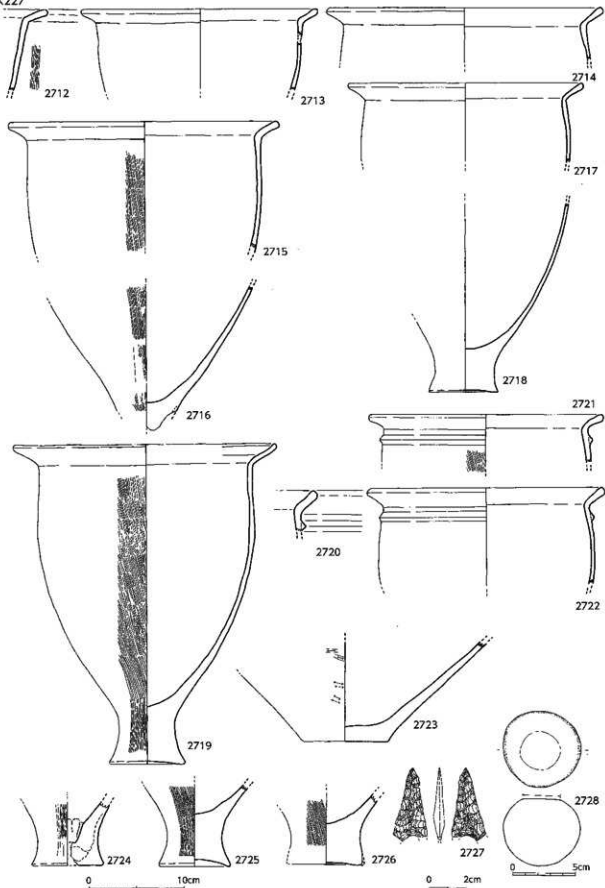
第 204 図 陳山遺跡 土坑出土遺物実測図 (60)

SK224 ~ SK226



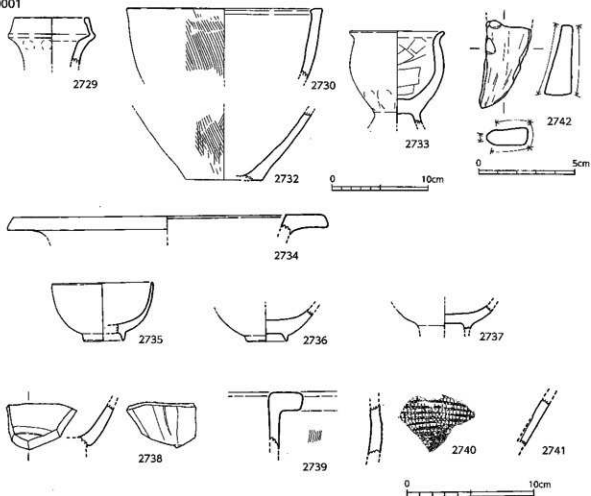
第 205 圖 談山遺跡 土坑出土遺物実測図 (61)

SK227

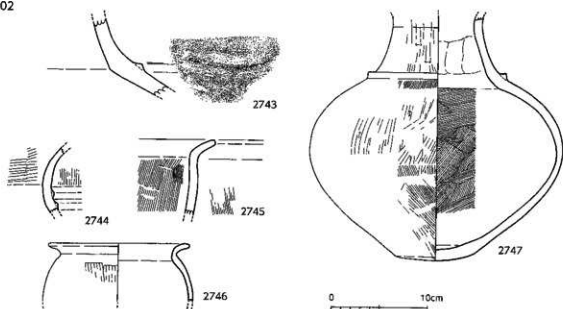


第 206 圖 隸山遺跡 土坑出土遺物実測図 (62)

SD001

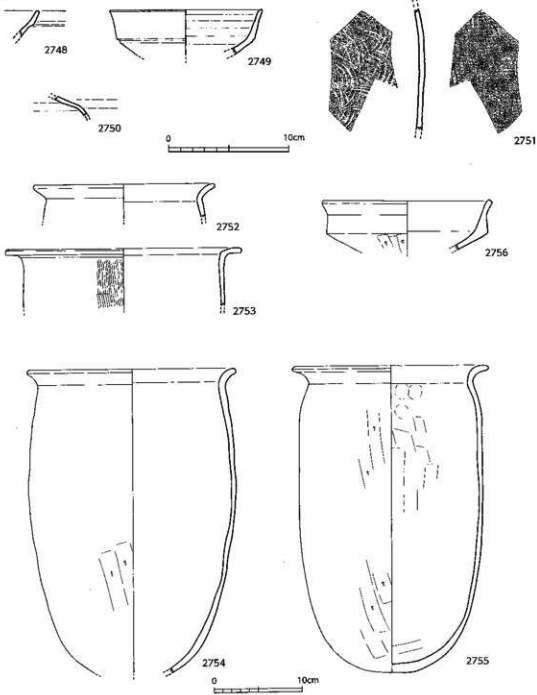


SD002



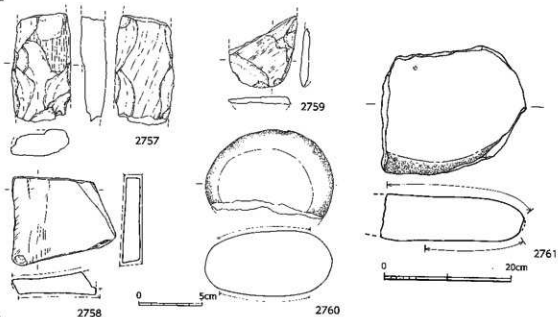
第 207 圖 隴山遺跡 溝遺構出土遺物実測図 (1)

SD002

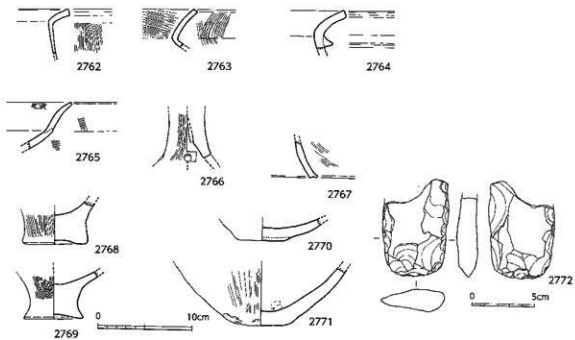


第208図 諫山遺跡 溝遺構出土遺物実測図(2)

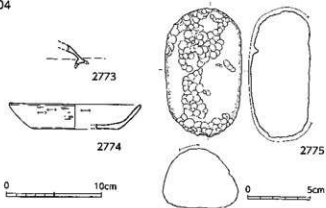
SD002



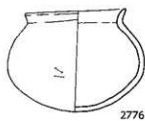
SD003



SD004

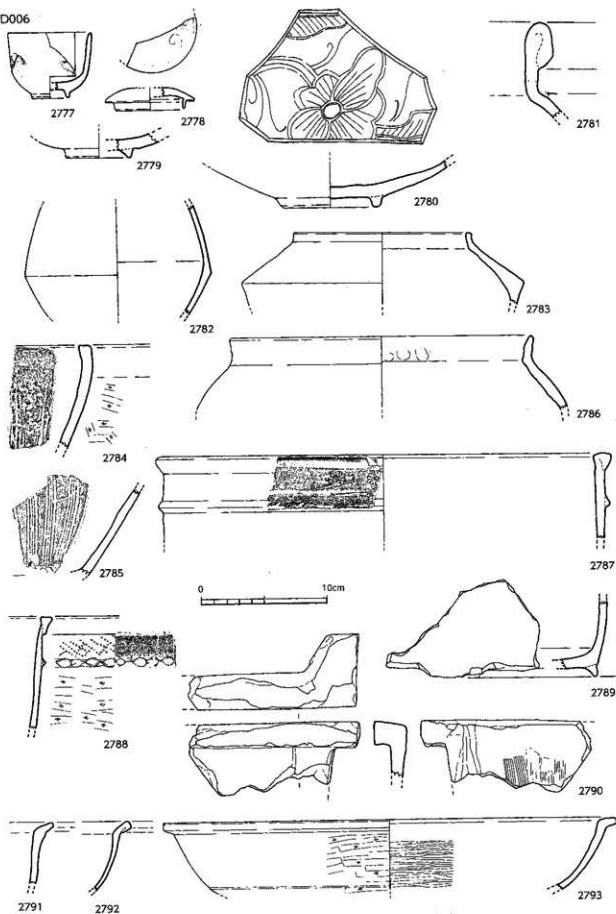


SD005



第 209 图 隗山遺跡 溝遺構出土遺物実測図 (3)

SD006



第210圖 陳山遺跡 滿洲橋出土遺物実測図(4)

SD006



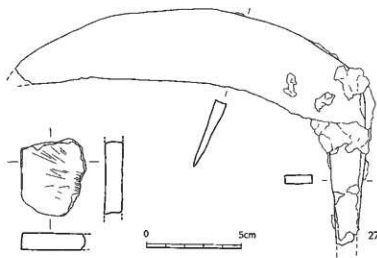
2794



2795



2796



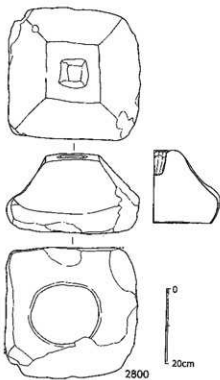
2797

2798



2799

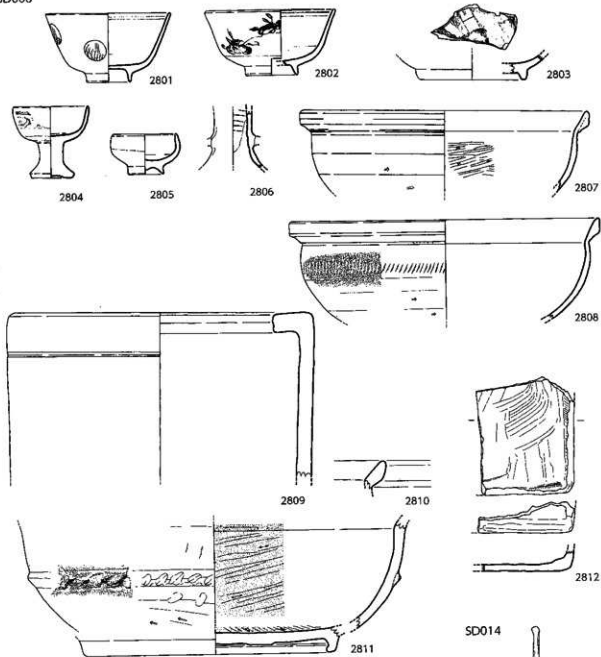
SD007



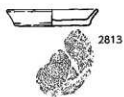
2800

第 211 圖 陳山遺跡 溝遺構出土遺物實測圖 (5)

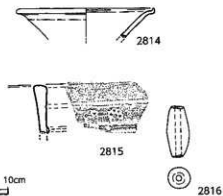
SD008



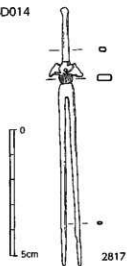
SD010



SD013

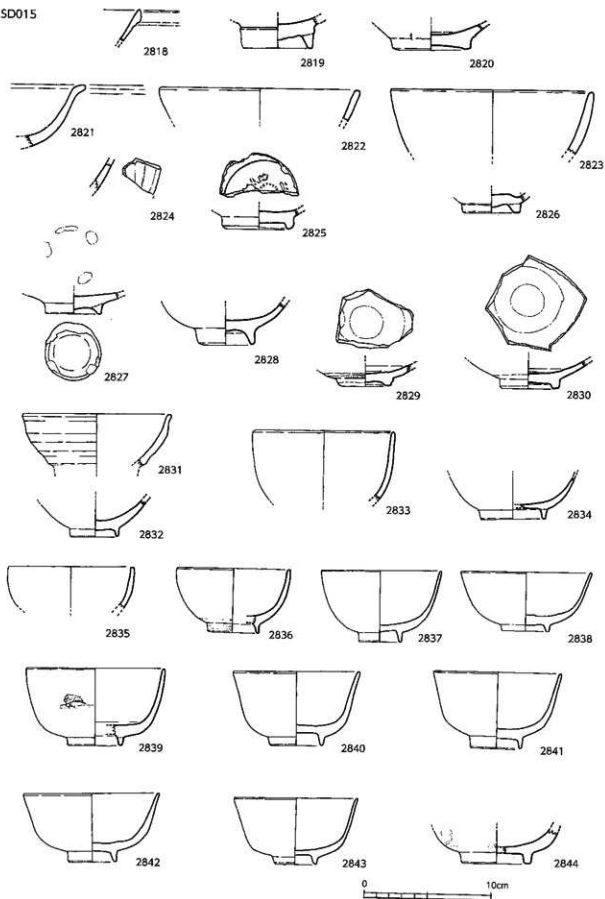


SD014



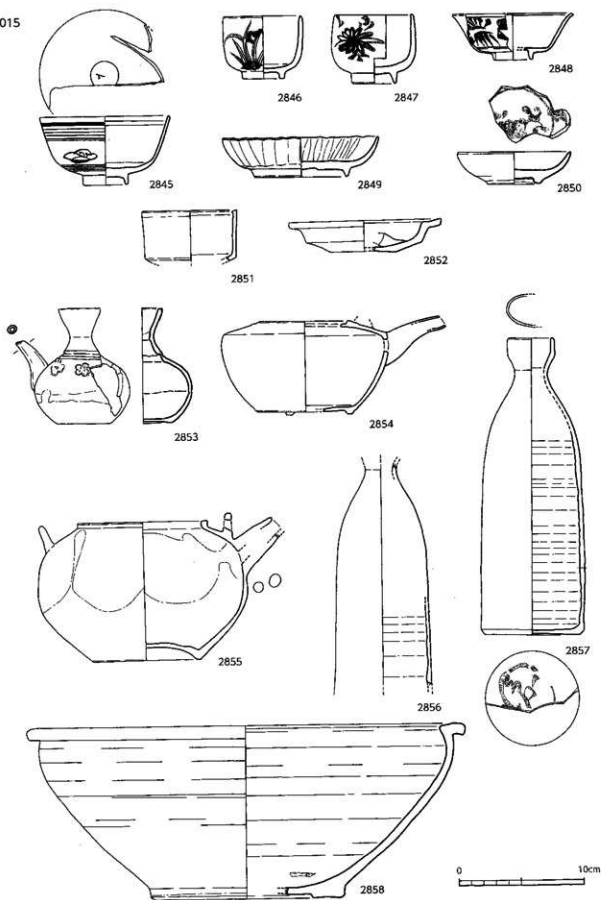
第 212 图 陳山遺跡 溝遺構出土遺物実測図 (6)

SD015



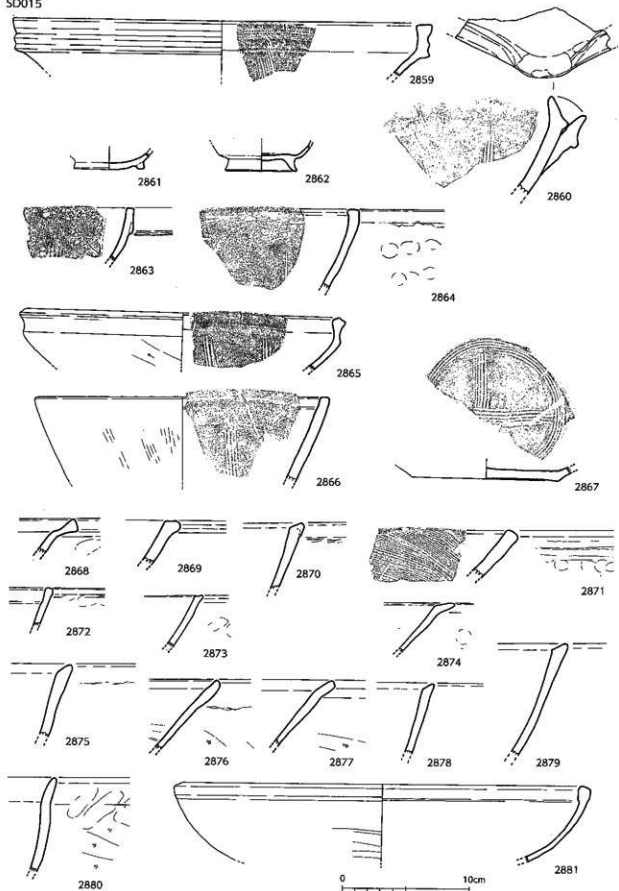
第 213 图 諫山遺跡 溝邊構出土物実測図 (7)

SD015



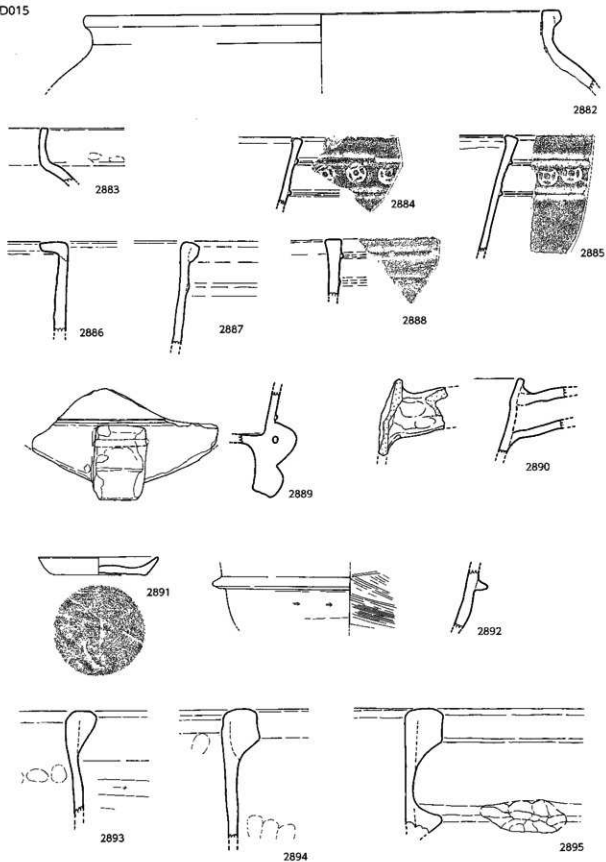
第 214 图 陕山遗址 清道桶出土文物实例图(8)

SD015



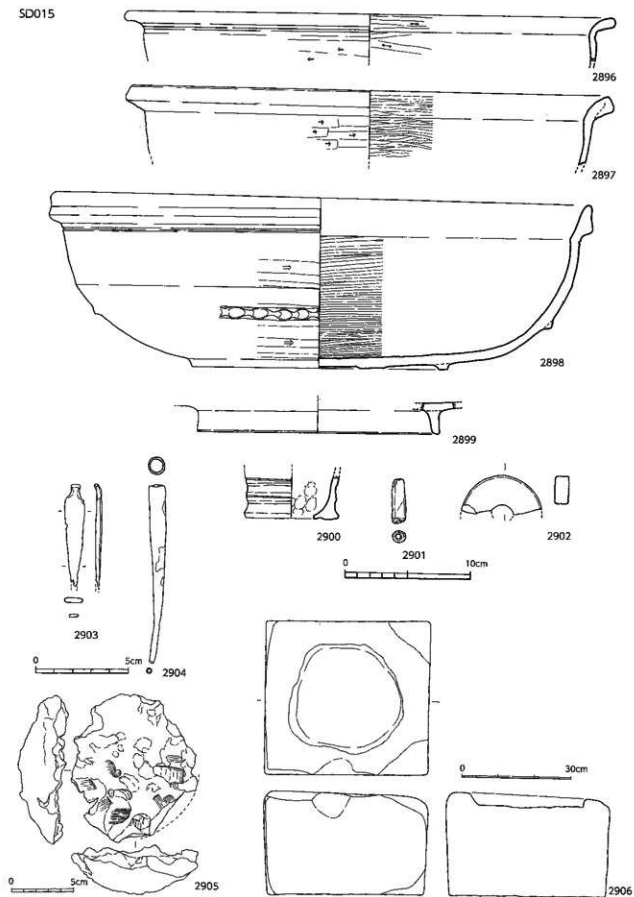
第 215 図 談山遺跡 溝遺構出土遺物実測図 (9)

SD015



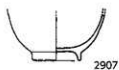
第216圖 諫山遺跡 溝遺構出土遺物実測図(10)

SD015

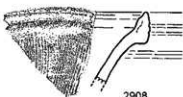


第 217 图 陕西清涧 满道村出土文物实测图 (11)

SD016



2907



2908

SD017



2909



2910



2911



2912



2913



2914



2915

SD018



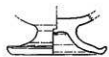
2916



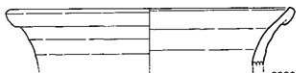
2917



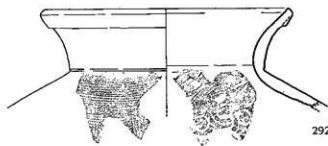
2918



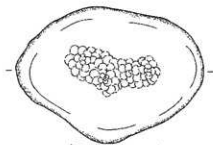
2919



2920



2921



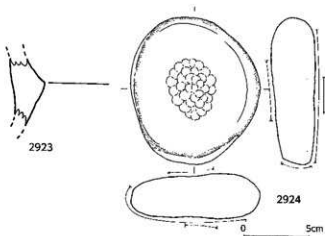
2922



0 5cm

第218圖 隗山遺跡 溝遺構出土遺物実測図(12)

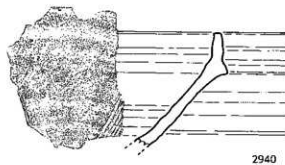
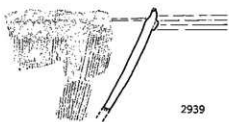
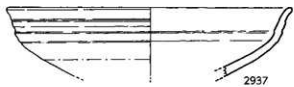
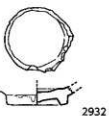
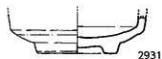
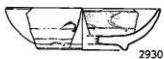
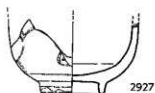
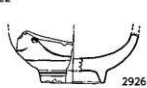
SD019



SD021



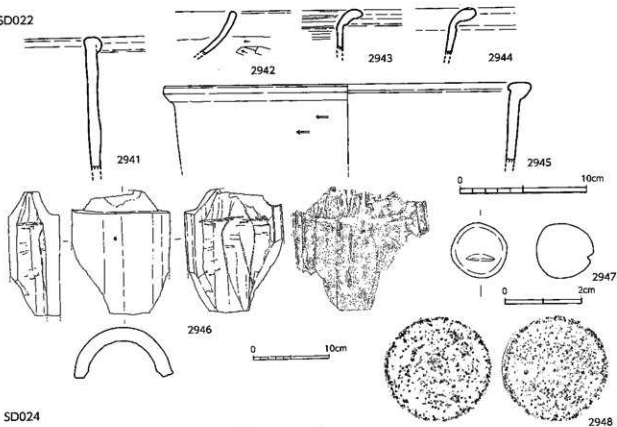
SD022



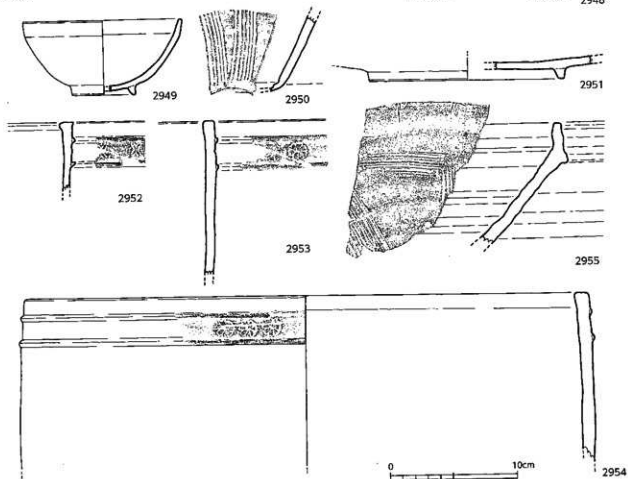
0 10cm

第 219 图 陝山遺跡 溝遺構出土遺物実測図 (13)

SD022

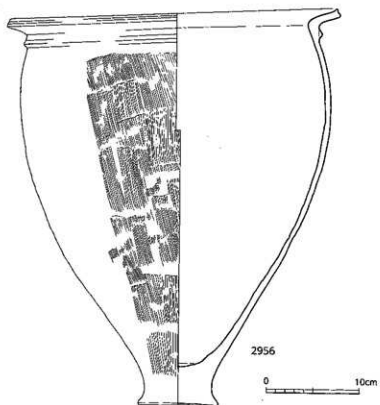


SD024

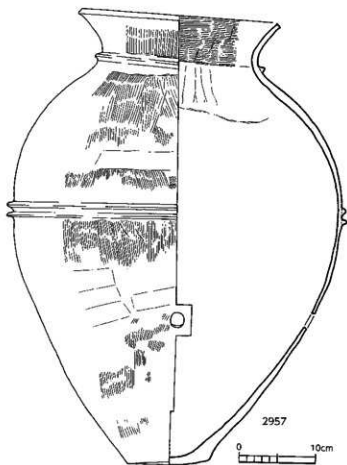


第 220 図 陳山遺跡 溝遺構出土物実測図 (14)

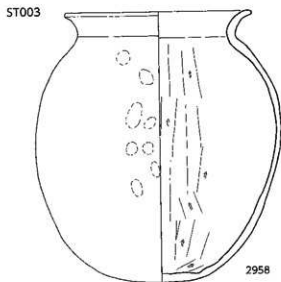
ST001



ST002



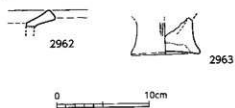
第221圖 諫山遺跡 墳墓出土遺物実測図(1)



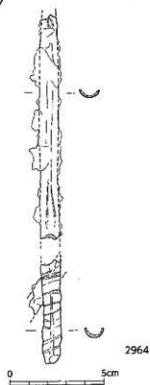
ST004



ST005



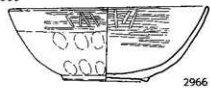
ST007



ST008



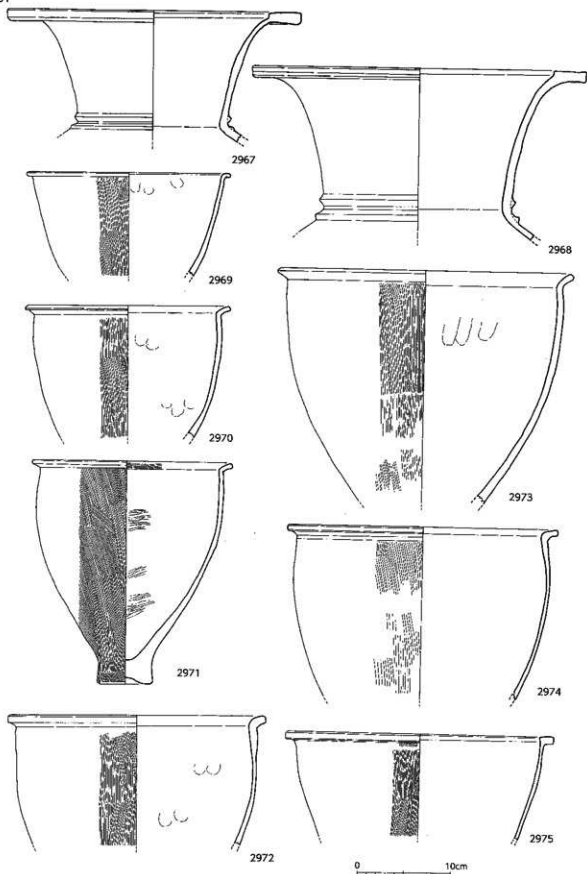
ST009



0 10cm

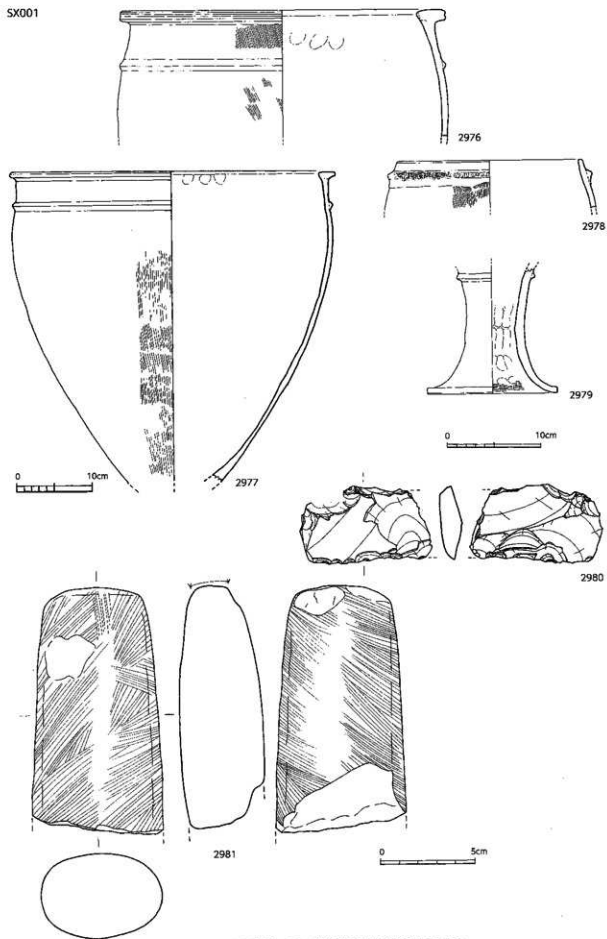
第 222 図 諫山遺跡 墳墓出土遺物実測図 (2)

SX001

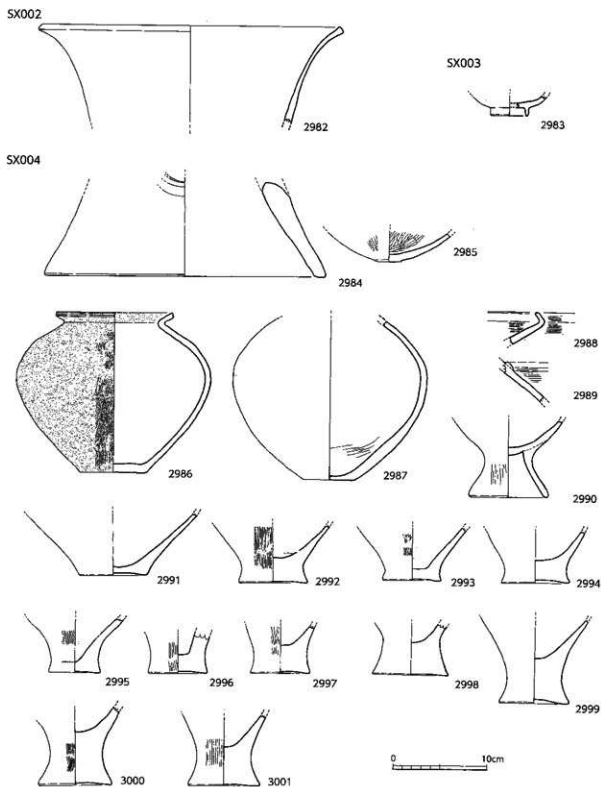


第 223 図 鎌山遺跡 その他遺構出土土物実測図 (1)

SX001

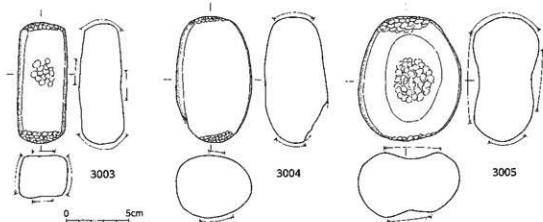
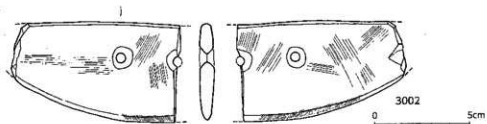


第 224 図 談山遺跡 その他遺構出土遺物実測図 (2)



第 225 図 陟山遺跡 その他遺構出土遺物実測図 (3)

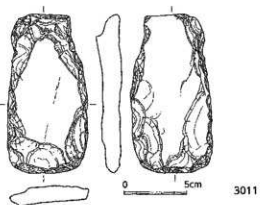
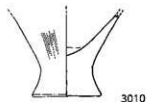
SX004



SX005



SX006



0 10cm

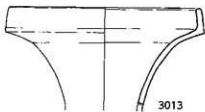
第 226 図 陳山遺跡 その他遺構出土遺物実測図 (4)

SX007

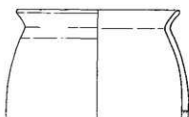


3012

SX008



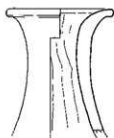
3013



3014

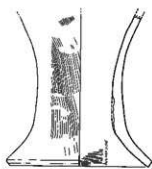


3015

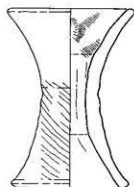


3016

0 10cm



3017

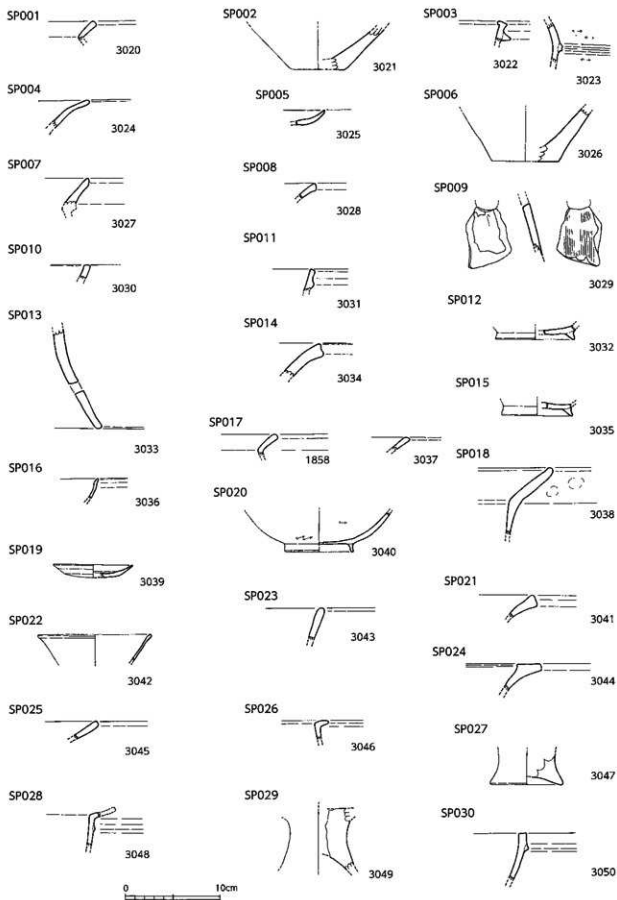


3018

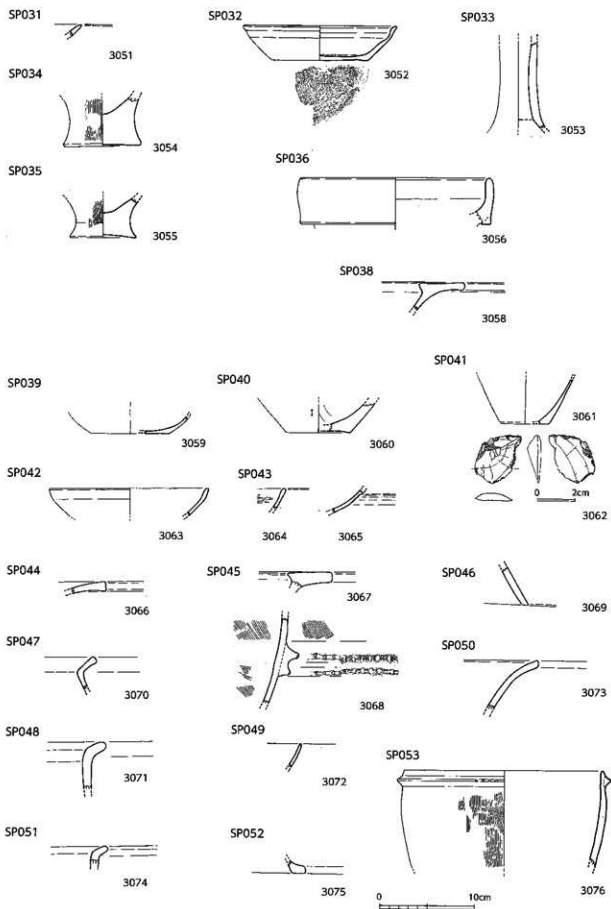


3019

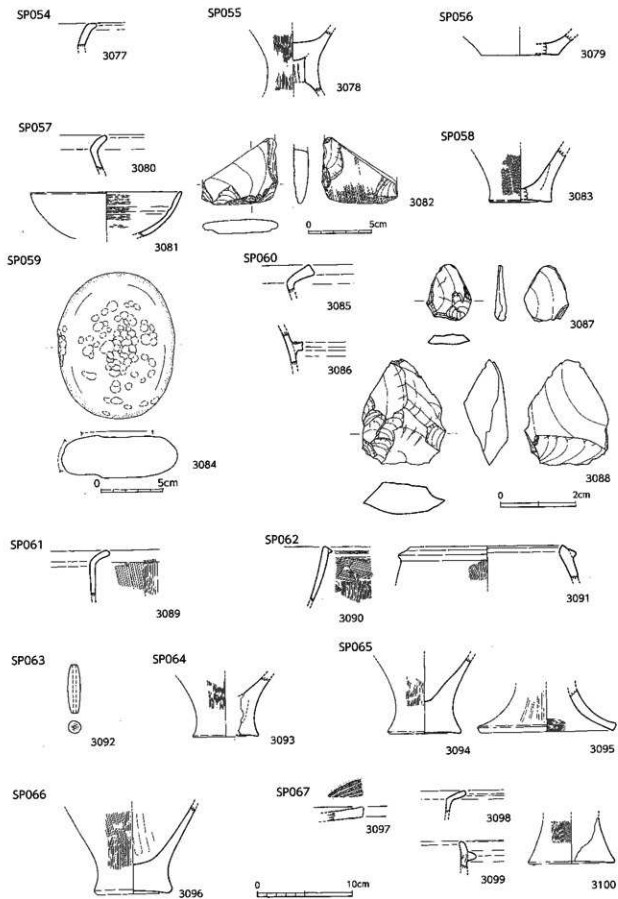
第227図 諫山遺跡 その他遺構出土遺物実測図(5)



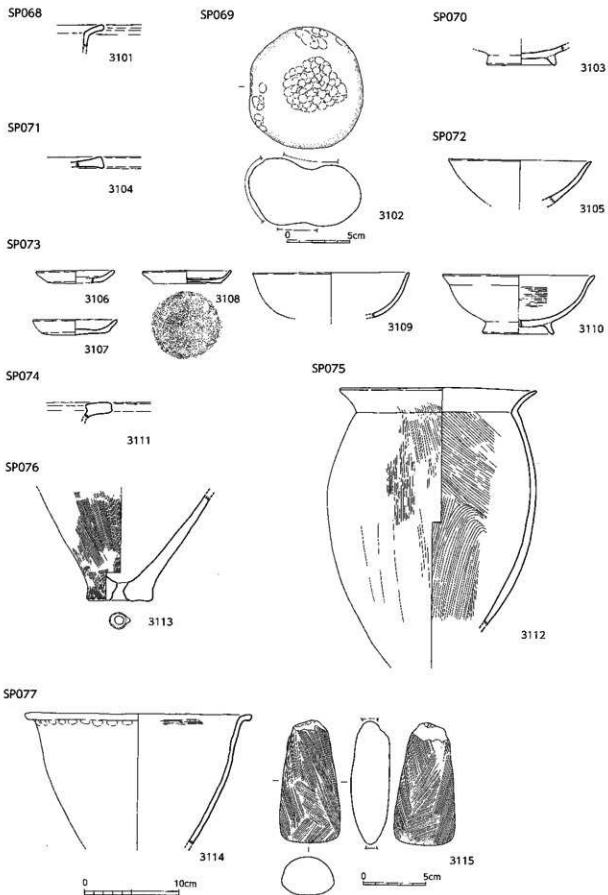
第 228 圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (1)



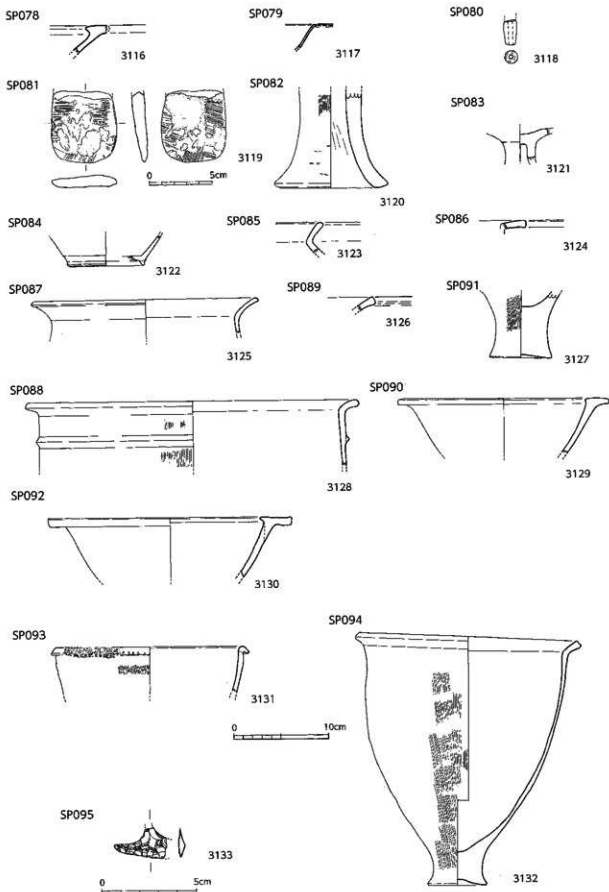
第 229 圖 談山遺跡 柱穴出土遺物実測圖 (2)



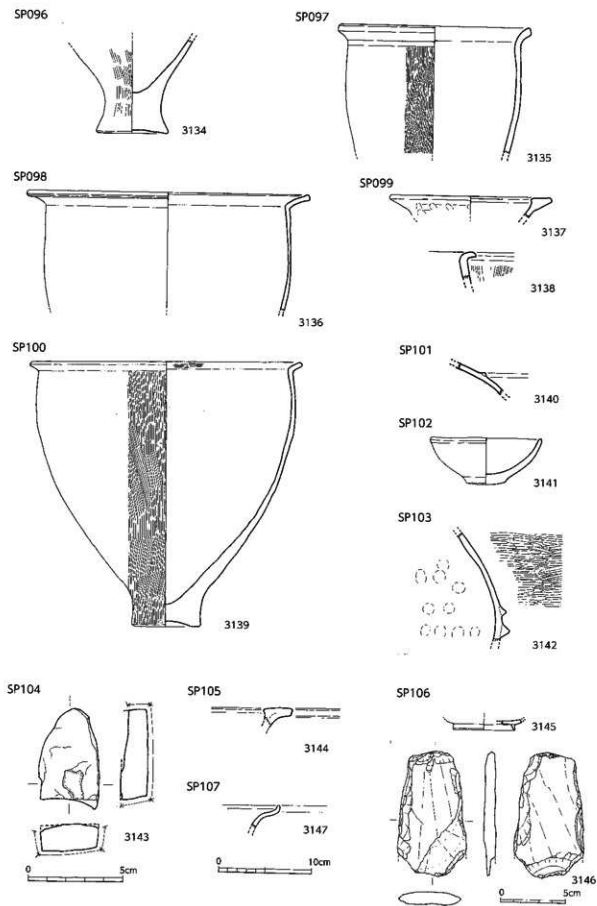
第 230 图 豫山遗址 柱穴出土文物实测图 (3)



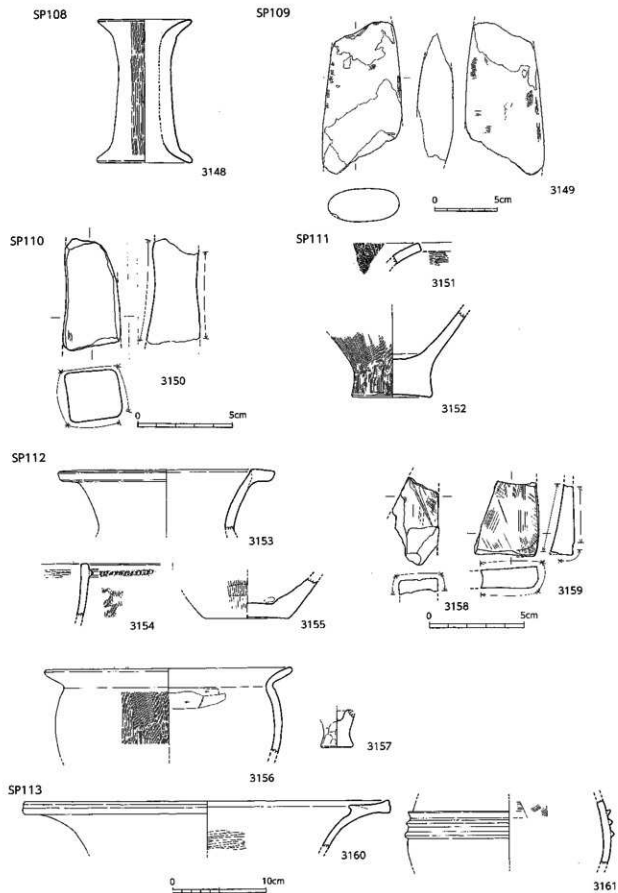
第 231 圖 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (4)



第 232 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (5)

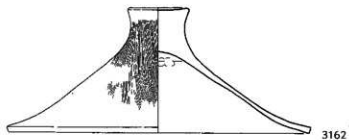


第 233 圖 隸山遺跡 柱穴出土遺物實測圖 (6)



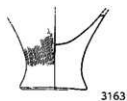
第 234 图 陟山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (7)

SP114



3162

SP115



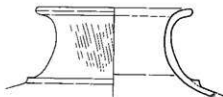
3163

SP116



3164

SP117



3165

SP118



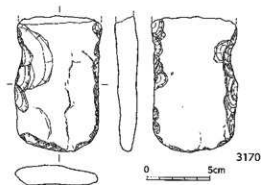
3166

SP119



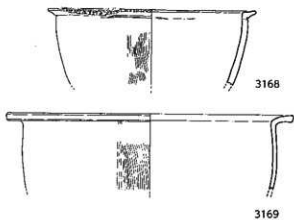
3167

SP121



3170

SP120



3168

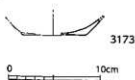
3169

SP122



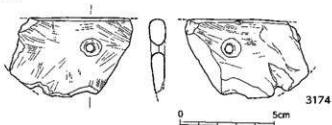
3171

SP124



3173

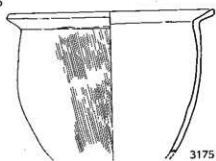
SP125



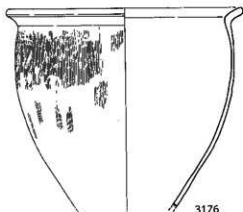
3174

第 235 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (B)

SP126

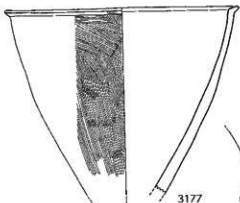


3175

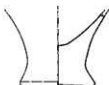


3176

SP127



3177



3178



3179



3180

SP128



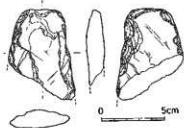
3181

SP129



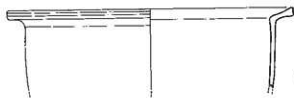
3182

SP130



3183

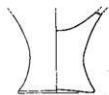
SP131



3184

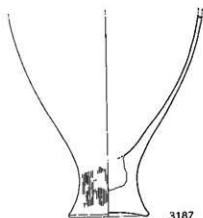


3185



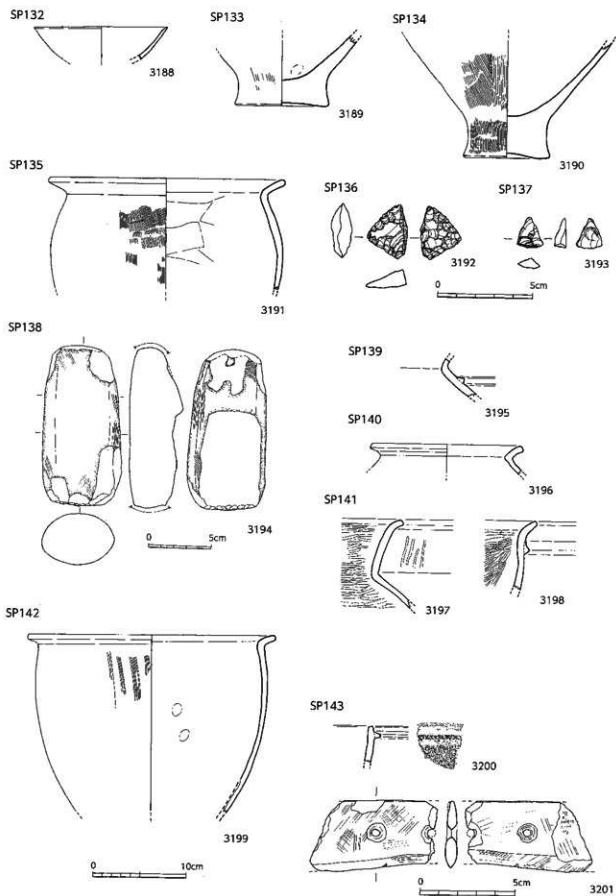
3186

0 10cm

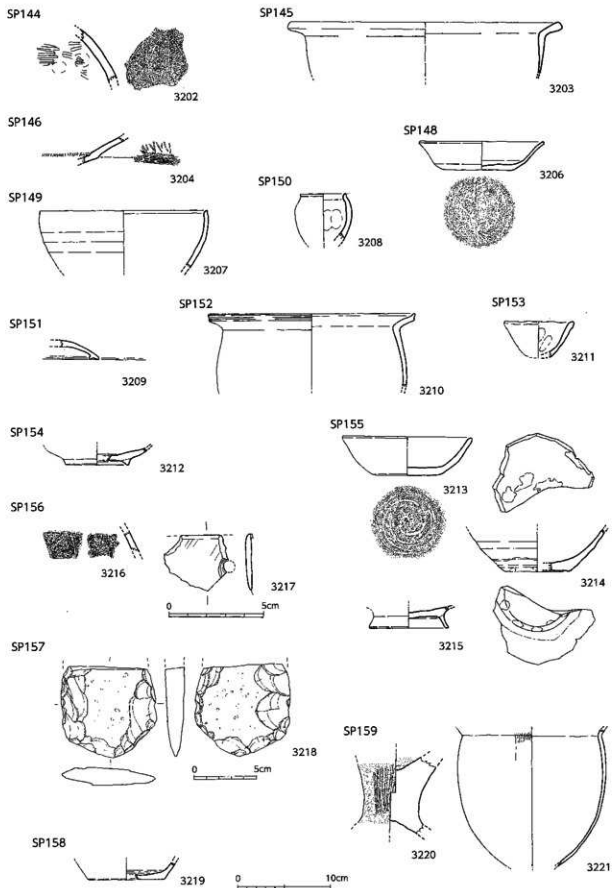


3187

第 236 图 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (9)

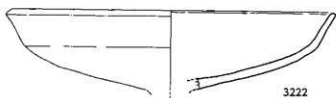


第 237 圖 磯山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (10)



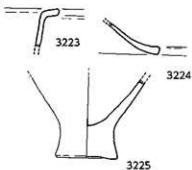
第 238 圖 陝山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (11)

SP160



3222

SP161

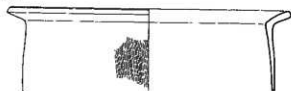


3223

3224

3225

SP162



3226

SP163



3228

SP164



3229

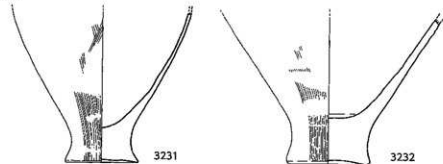
SP165



3230



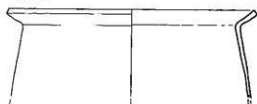
SP166



3231

3232

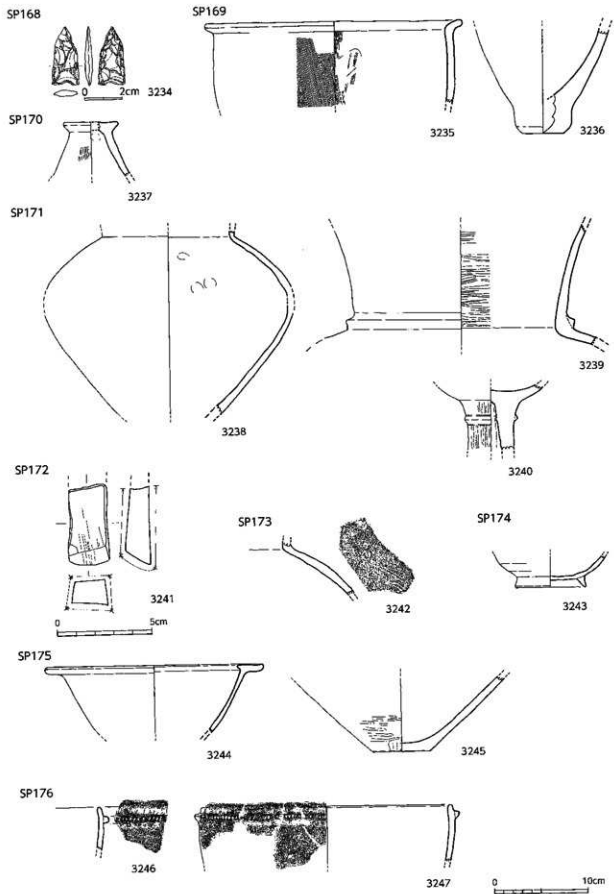
SP167



3233

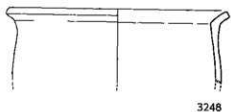


第 239 図 藤山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (12)



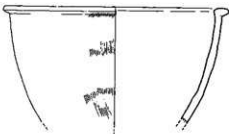
第 240 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (13)

SP177



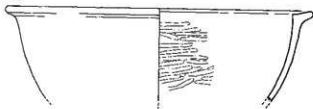
3248

SP178



3249

SP179



3250

SP180



3251

SP181



3252

SP182



3253

3254

SP183

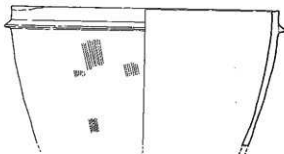


3255

SP184



3256



3257

3258

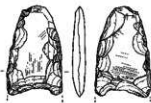


SP185



3259

SP186



3260

0 5cm

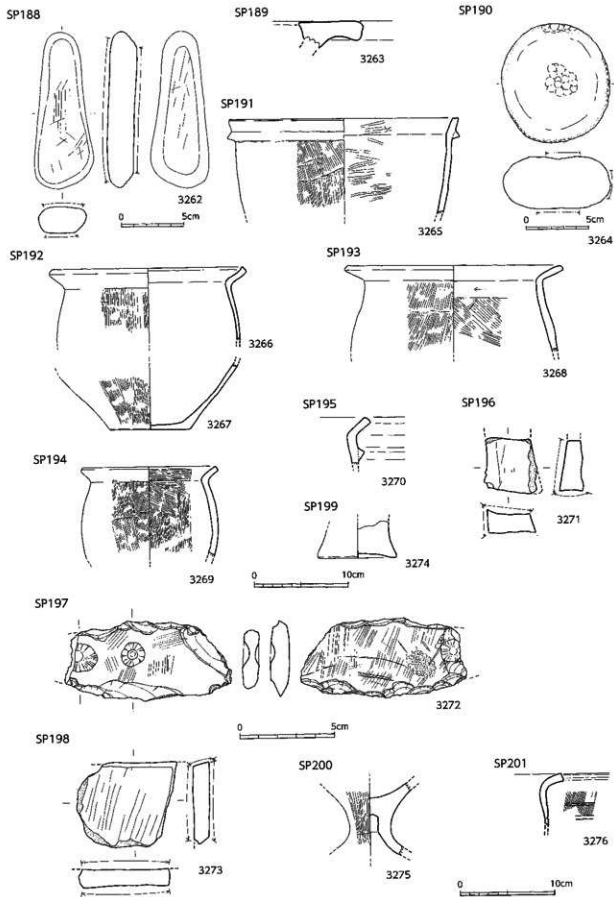
SP187



3261

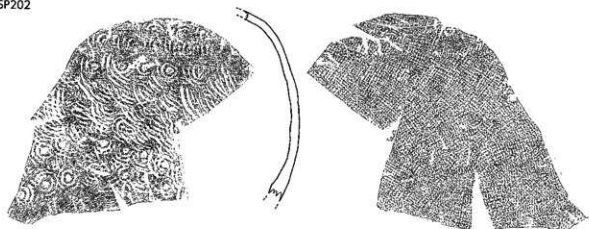
0 10cm

第 241 圖 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (14)

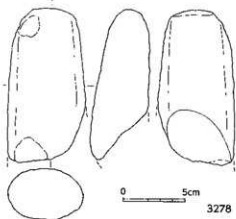


第 242 图 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (15)

SP202



SP203

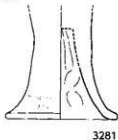


SP204

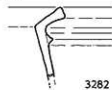


3277

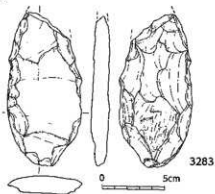
SP205



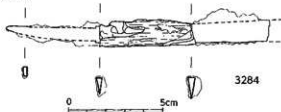
SP206



SP207



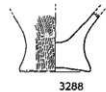
SP208



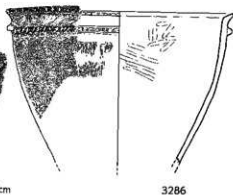
SP210



SP211



SP209



第 243 图 陝山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (16)

SP212



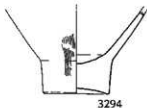
SP213



SP214



SP215

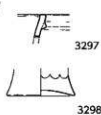


SP216



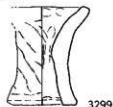
3296

SP217

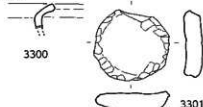


3298

SP218



SP219

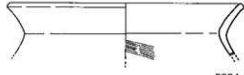


3301

SP220



SP221



SP222



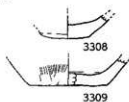
SP223



SP224



SP225

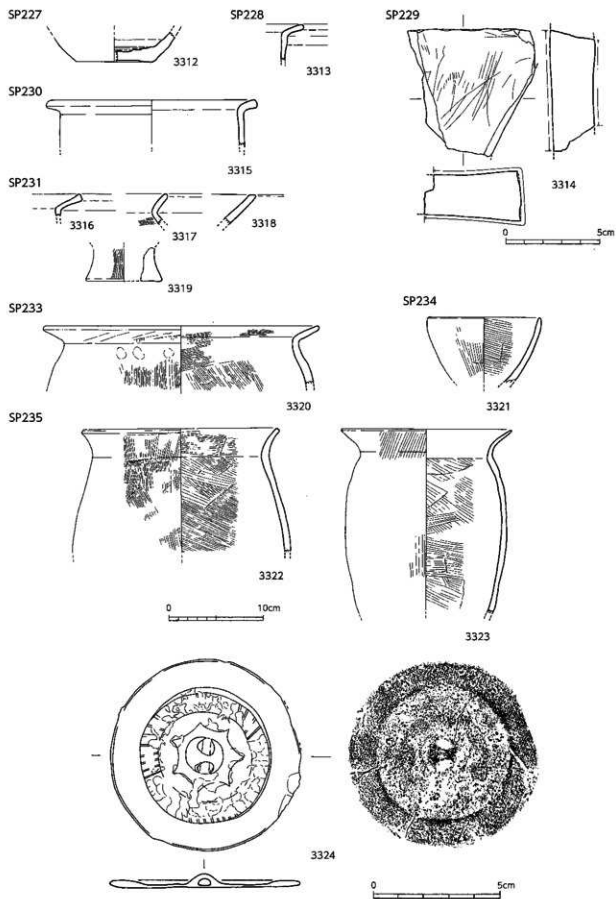


3310

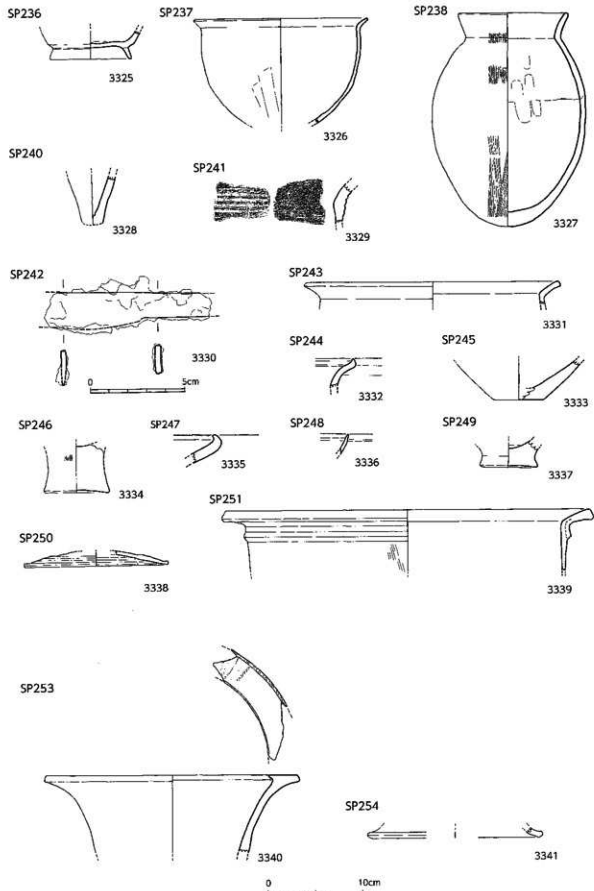
SP226



第 244 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (17)

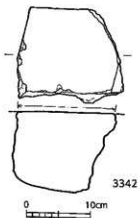


第 245 圖 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測圖 (18)



第 246 圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物實測圖 (19)

SP255



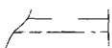
3342

SP256



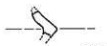
3343

SP257



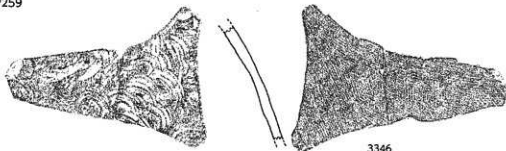
3344

SP258



3345

SP259



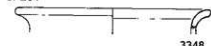
3346

SP260



3347

SP261



3348

SP262



3349

SP264



3352

SP265



3353

SP266



3354

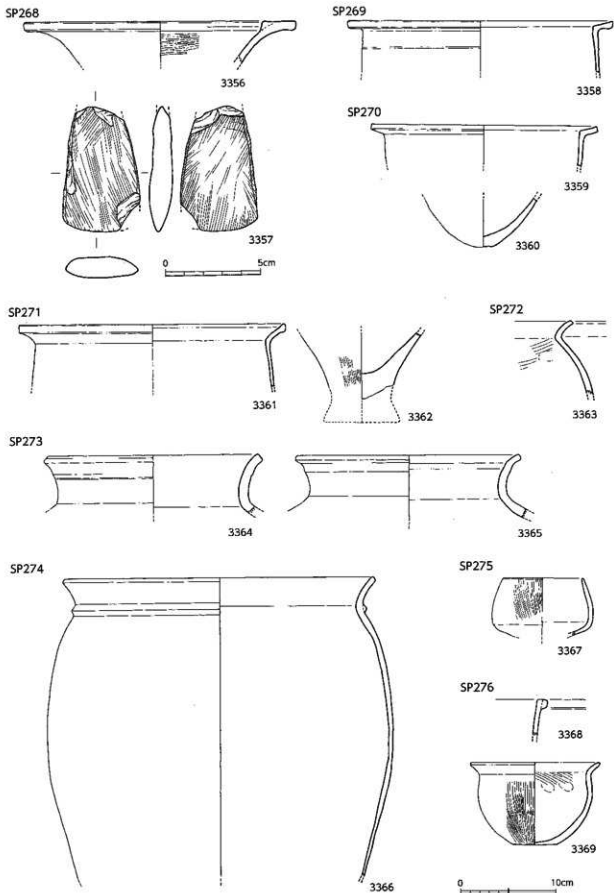
SP267



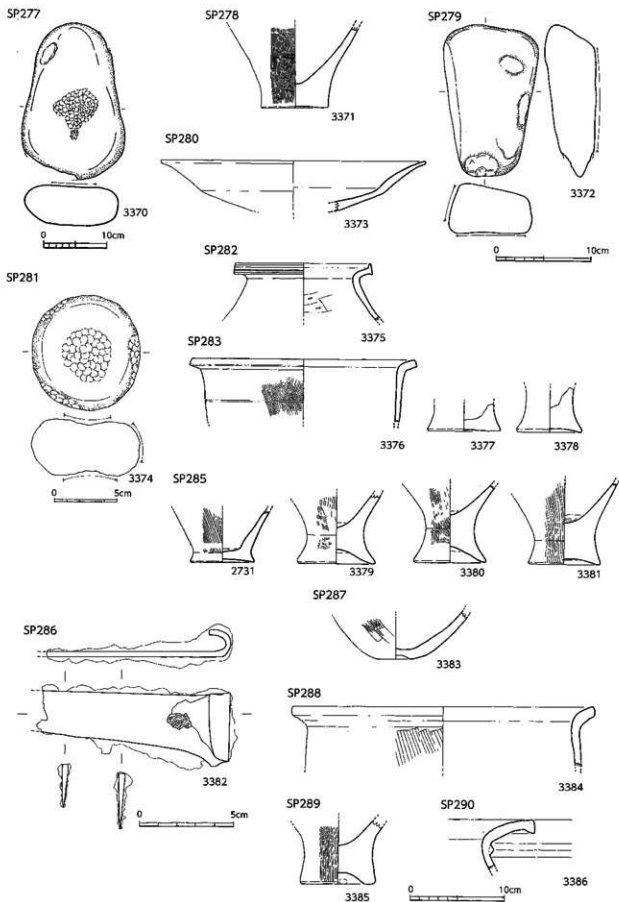
3355



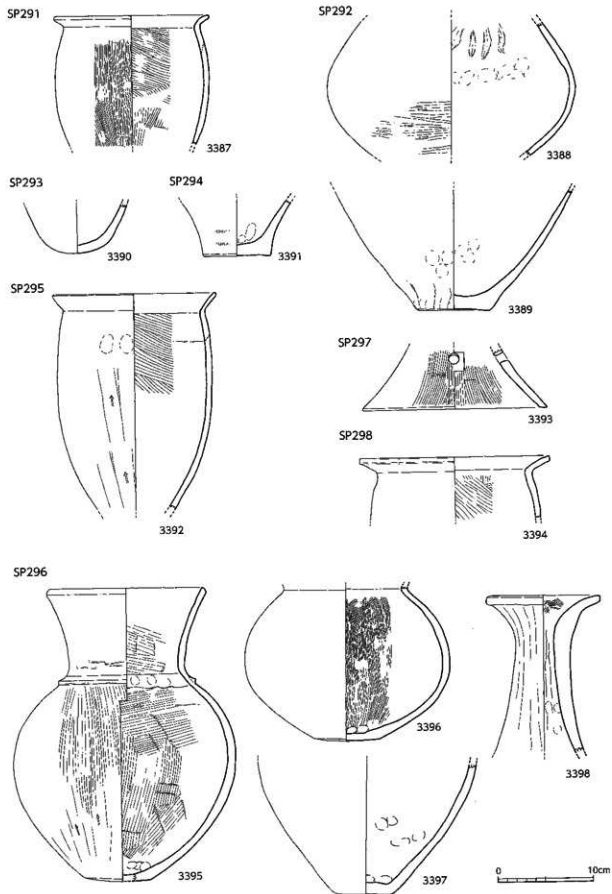
第 247 圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物夾測圖 (20)



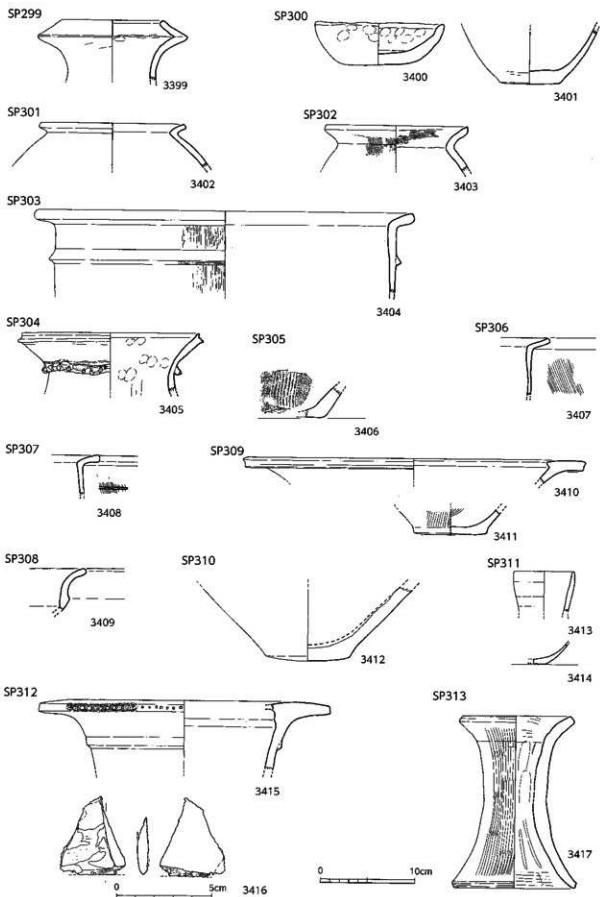
第 248 图 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (21)



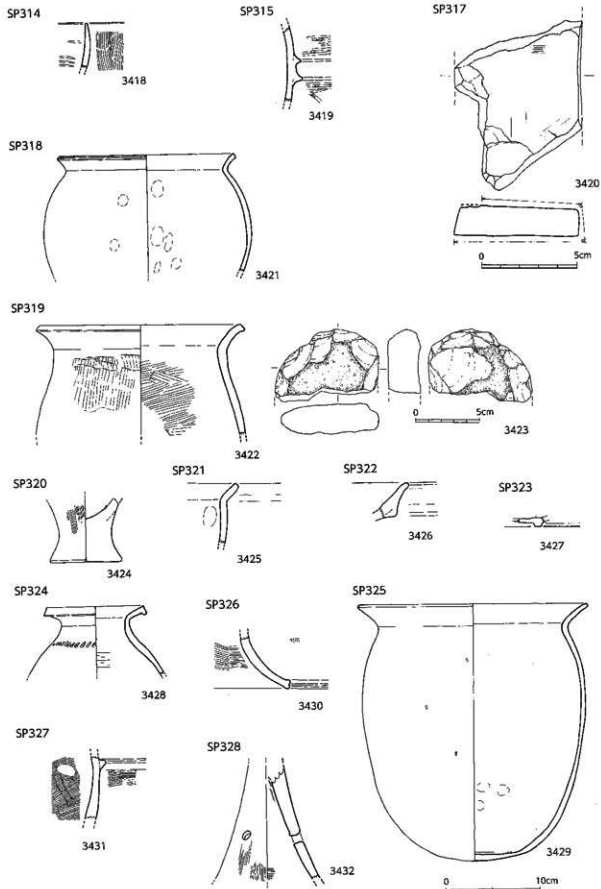
第249圖 隴山遺跡 柱穴出土遺物実測圖 (22)



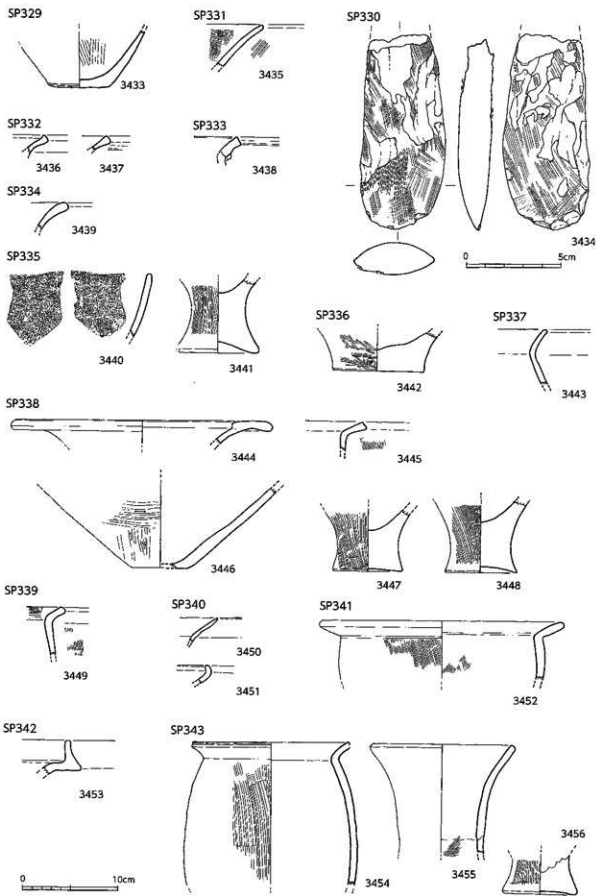
第 250 圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物實測圖 (23)



第 251 圖 隴山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (24)

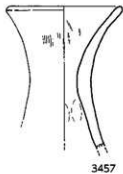


第 252 图 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (25)



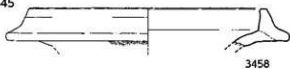
第 253 圖 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (26)

SP344



3457

SP345



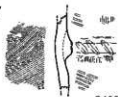
3458

SP346



3459

SP347



3460

SP348



3461

SP349



3462

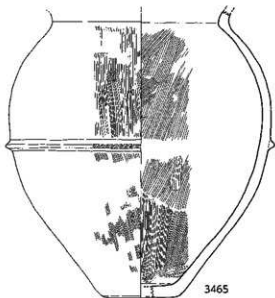
SP350



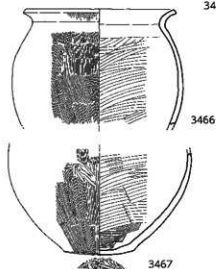
3463



3464



3465

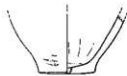


3466

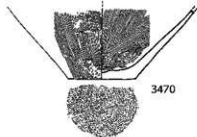
3467



3468



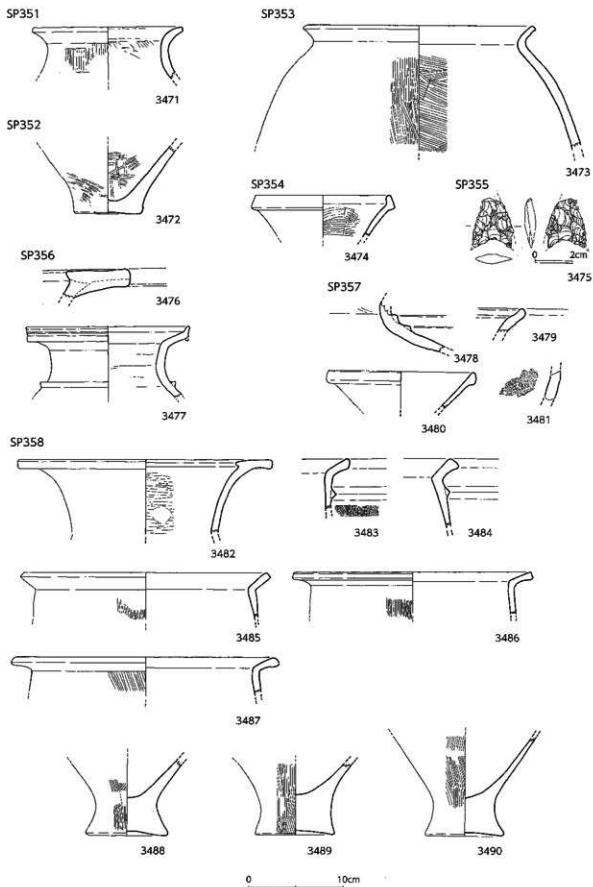
3469



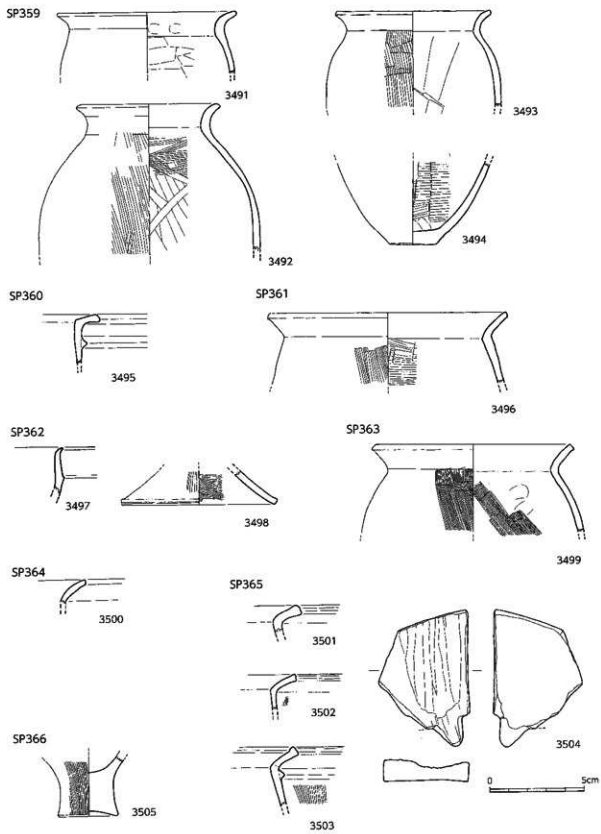
3470

0 10cm

第 254 图 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (27)

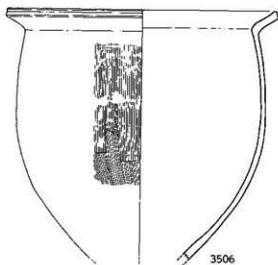


第 255 圖 隸山遺跡 柱穴出土遺物実測圖 (28)



第 256 圖 隸山遺跡 柱穴出土遺物實測圖 (29)

SP367



3506

SP368



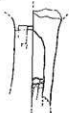
3507

SP370



3509

SP372



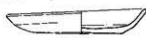
3512

SP369

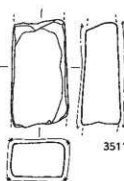


3508

SP371



3510



3511

0 5cm

SP373



3513

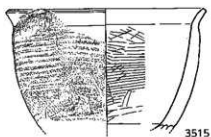
0 10cm

第257圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (30)

SP374

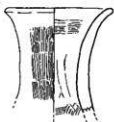


3514



3515

SP375



3516

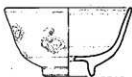
SP376



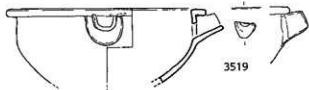
3517

0 10cm

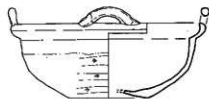
SP377



3518



3519



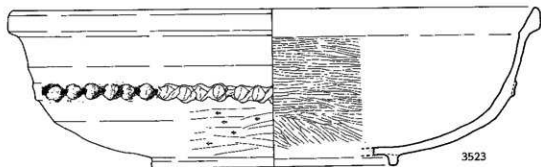
3520



3521



3522

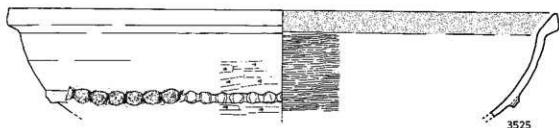
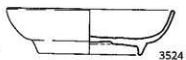


3523

0 10cm

第 258 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (31)

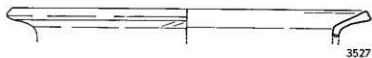
SP378



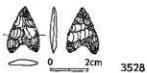
SP379



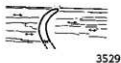
SP380



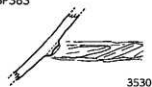
SP381



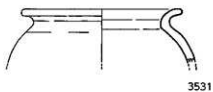
SP382



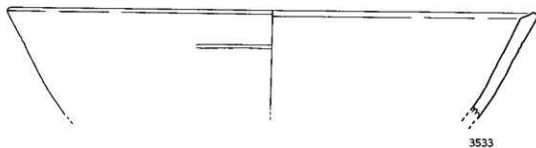
SP383



SP384

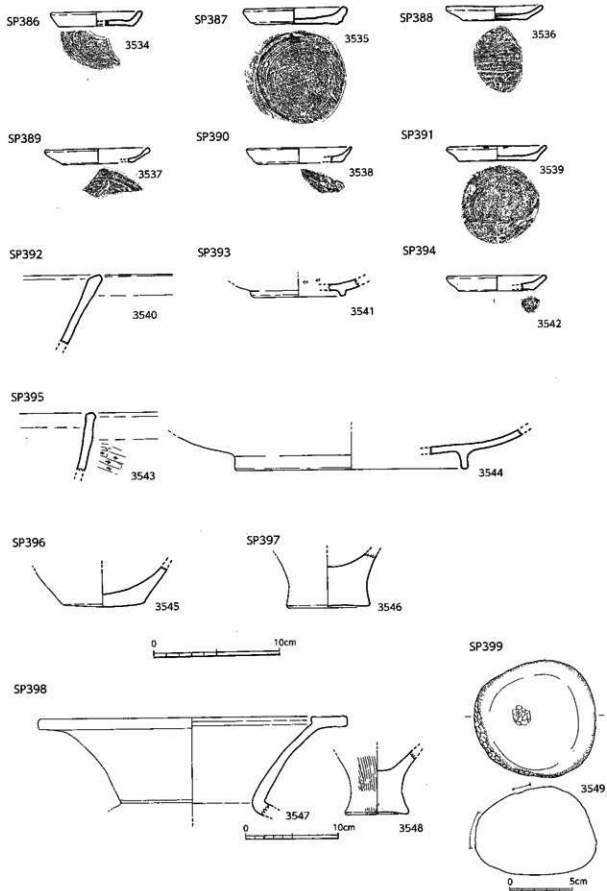


SP385

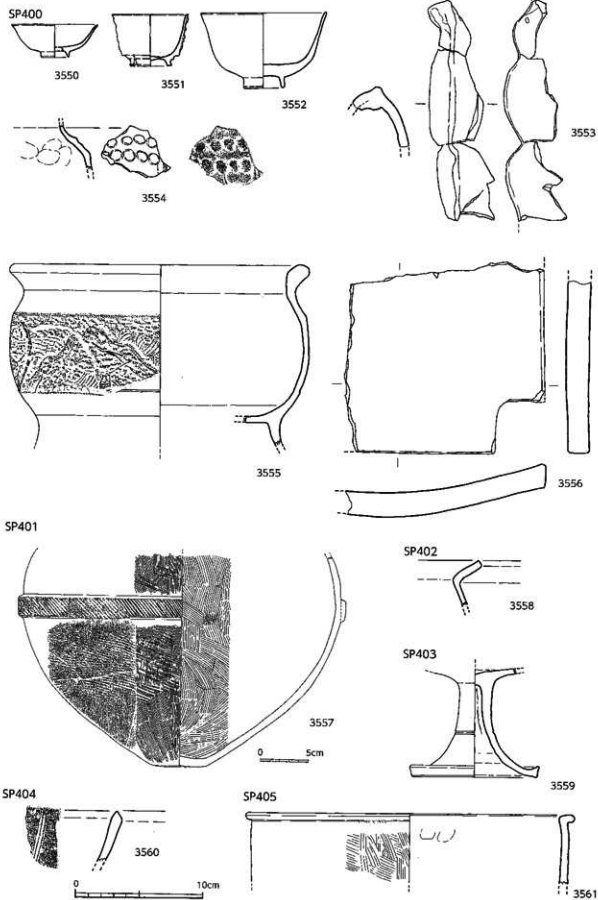


0 10cm

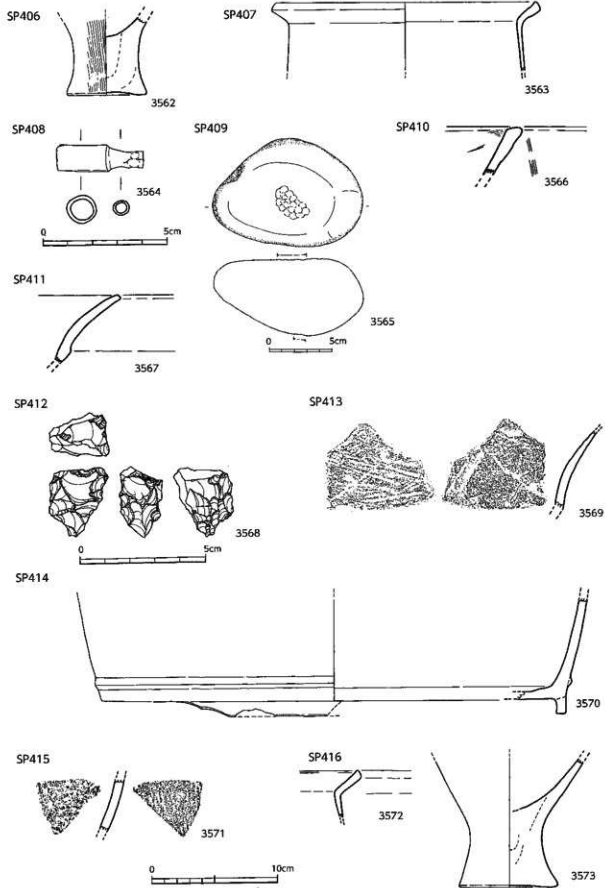
第259圖 陳山遺跡 柱穴出土遺物実測圖 (32)



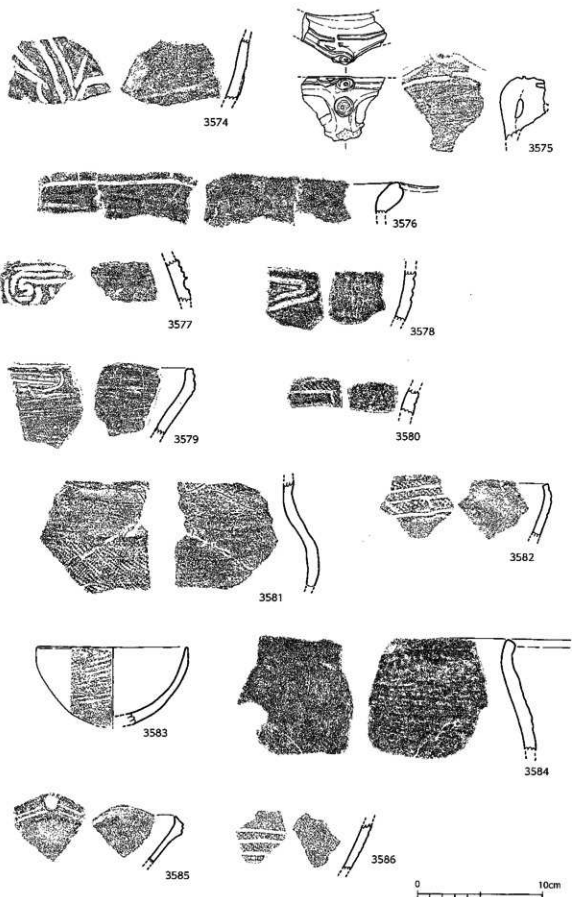
第 260 図 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (33)



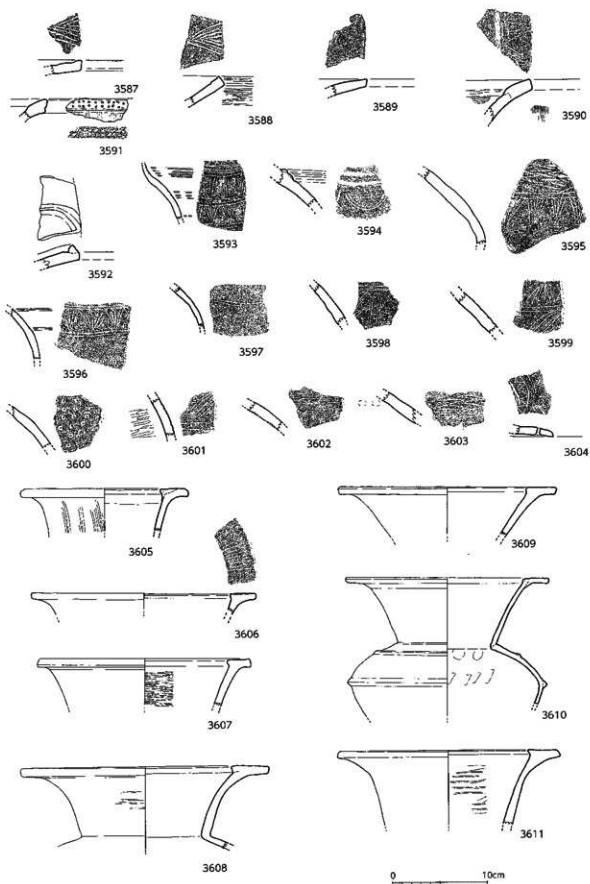
第261圖 諫山遺跡 柱穴出土遺物実測図(34)



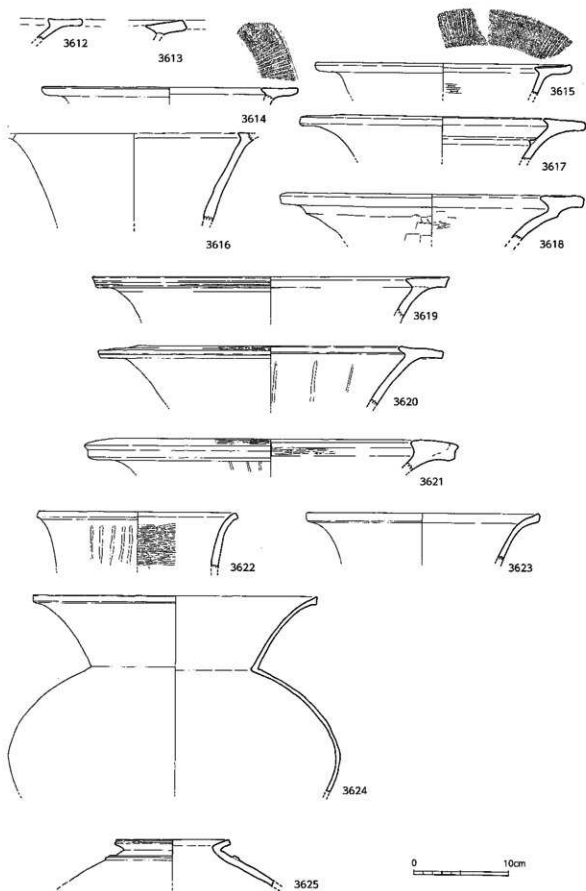
第 262 図 陝山遺跡 柱穴出土遺物実測図 (35)



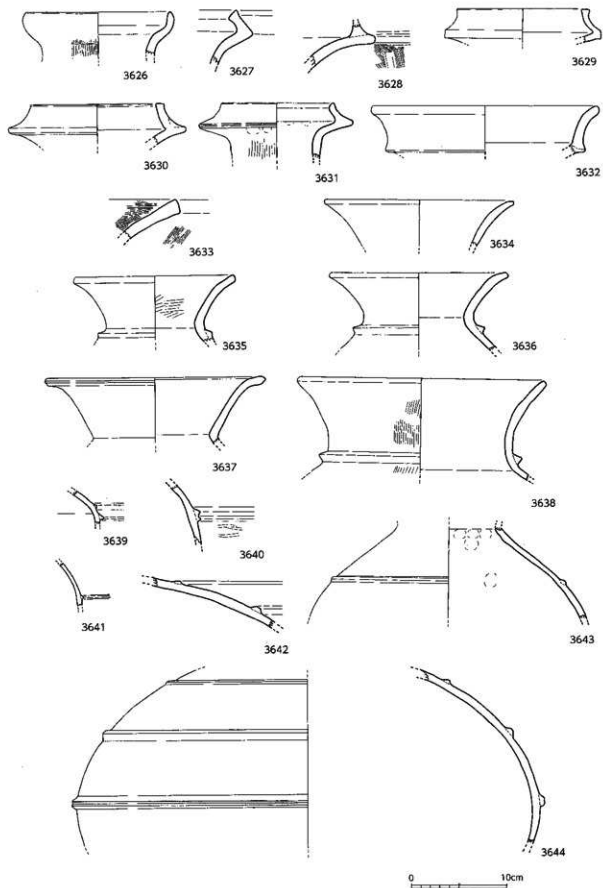
第 263 图 陈山遗址 包含层出土器物实例图 (1)



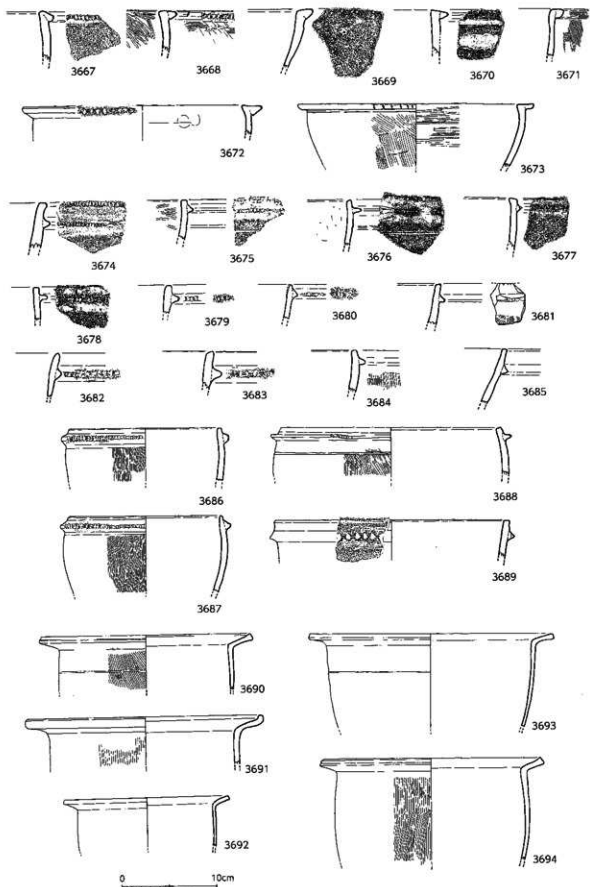
第 264 図 跡山遺跡 包含層出土遺物実測図 (2)



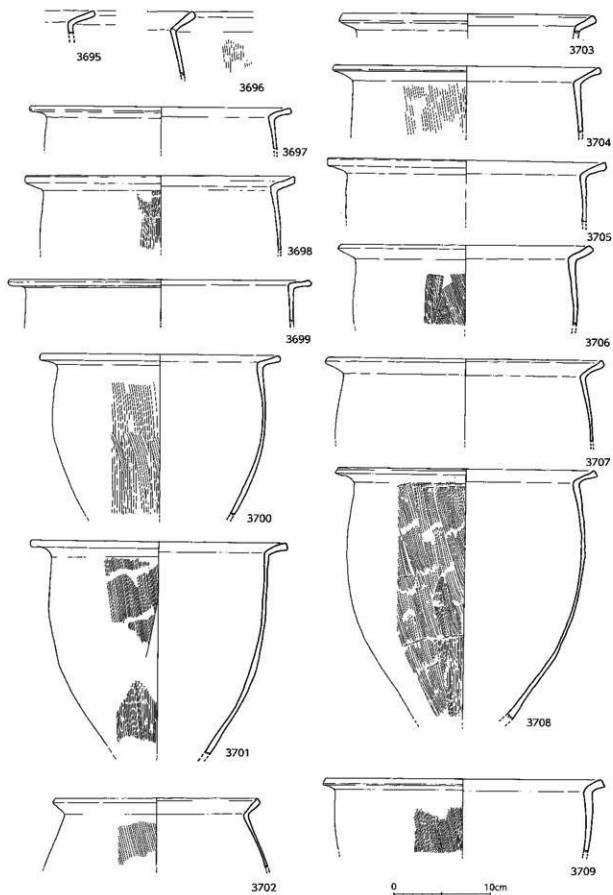
第 265 圖 陟山遺跡 包含層出土遺物実測圖 (3)



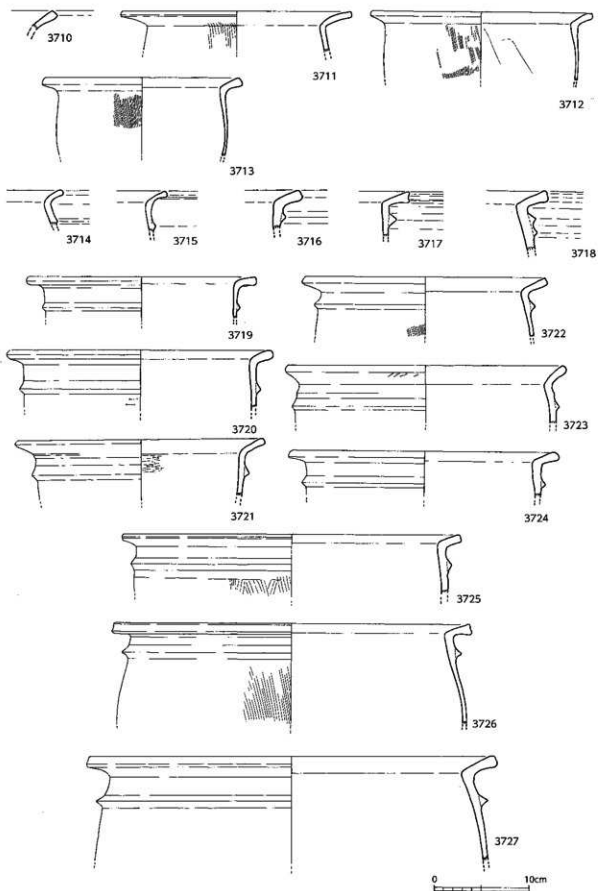
第 266 图 鍊山遺跡 包含層出土遺物実測図 (4)



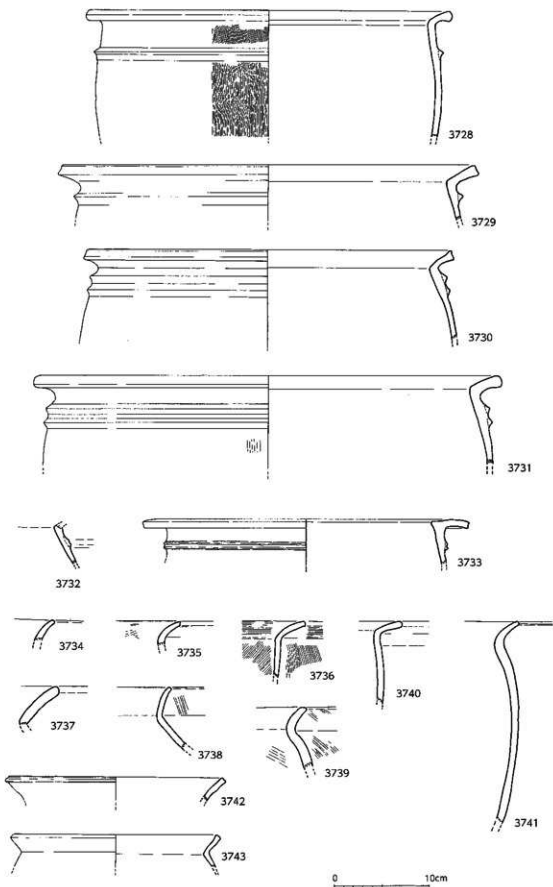
第 268 图 陳山遺跡 包含層出土遺物実測图 (6)



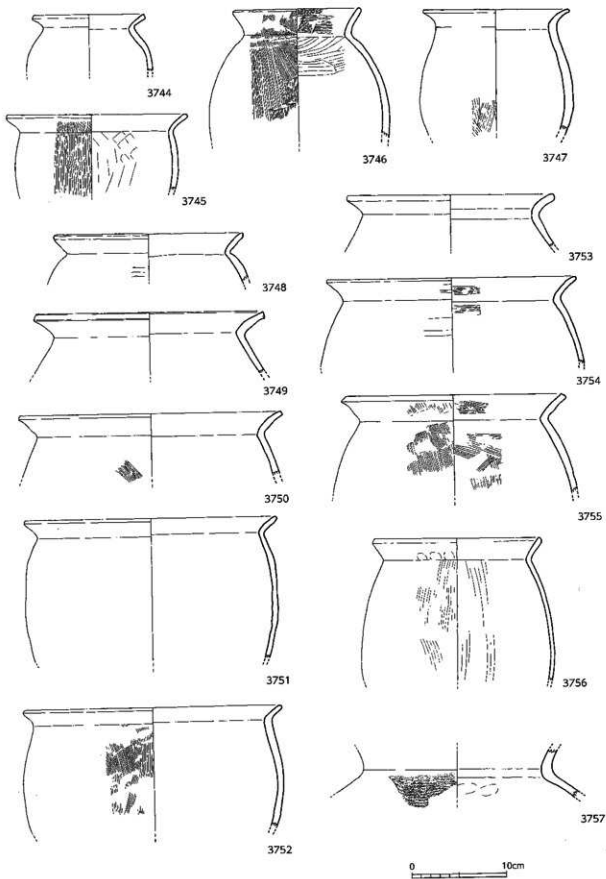
第 269 図 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (7)



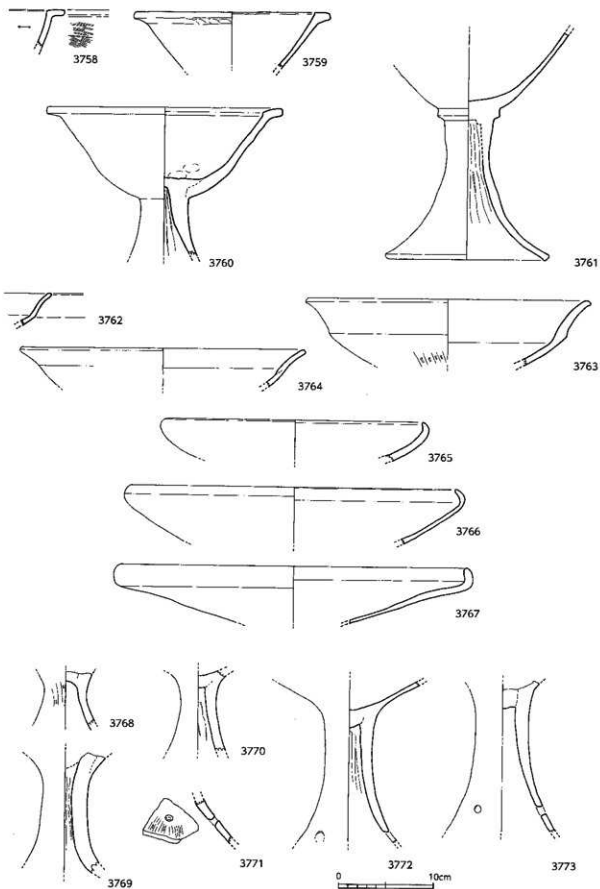
第 270 圖 陝山遺跡 包含層出土遺物實測圖 (B)



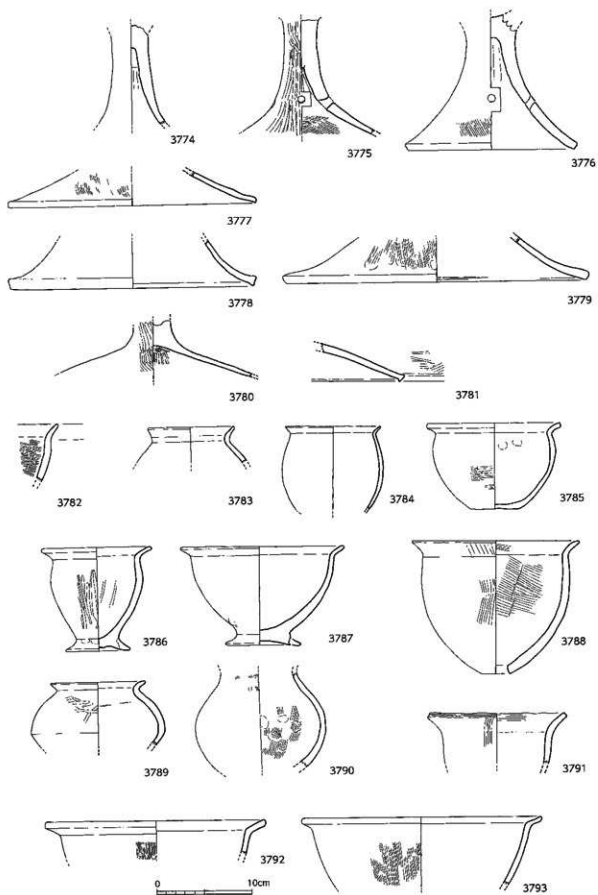
第 271 図 藤山遺跡 包含層出土遺物実測図 (9)



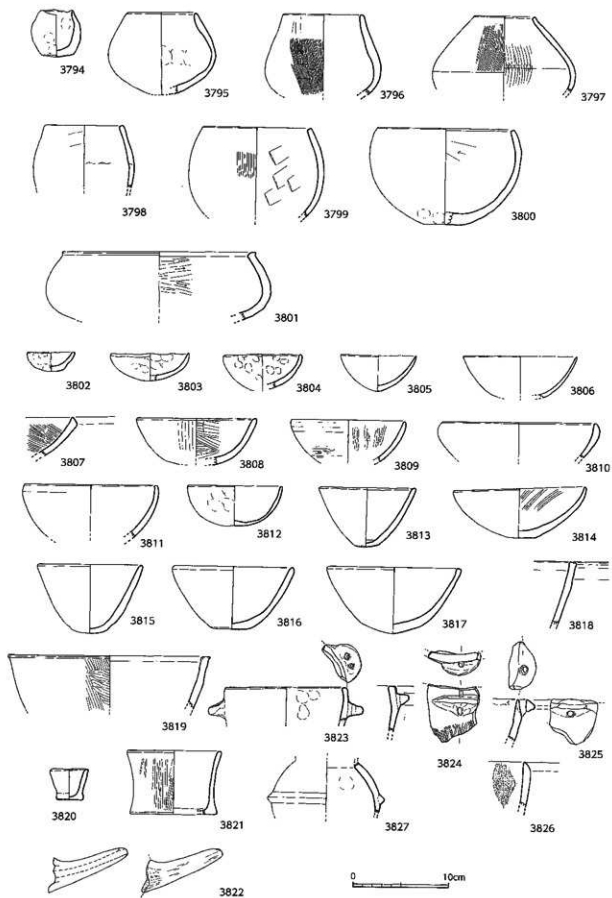
第 272 图 陳山遺跡 包含屬出土遺物実測図 (10)



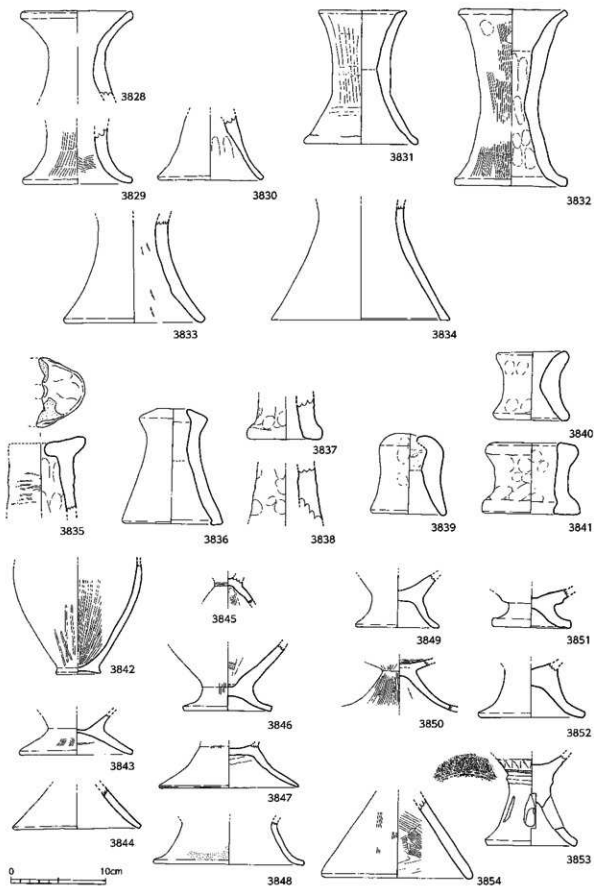
第 273 图 諫山遺跡 包含層出土物実測図 (11)



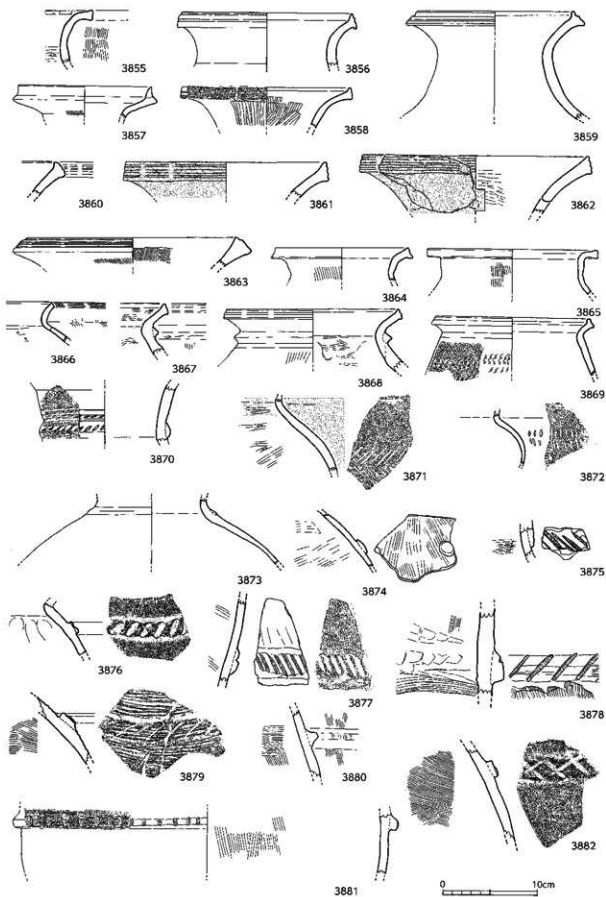
第 274 图 陝山遺跡 包含層出土遺物実測図 (12)



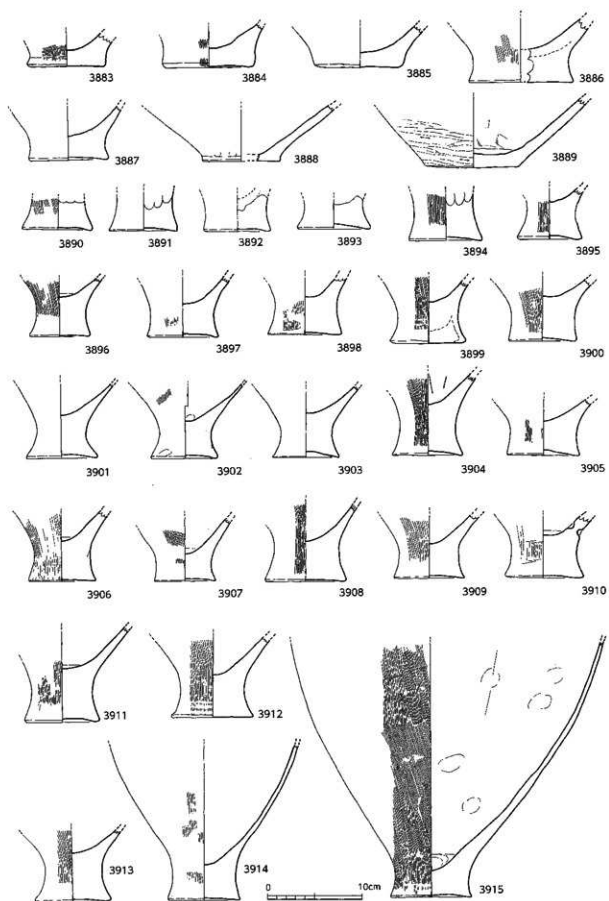
第 275 图 庐山遗址 包含层出土器物实测图 (13)



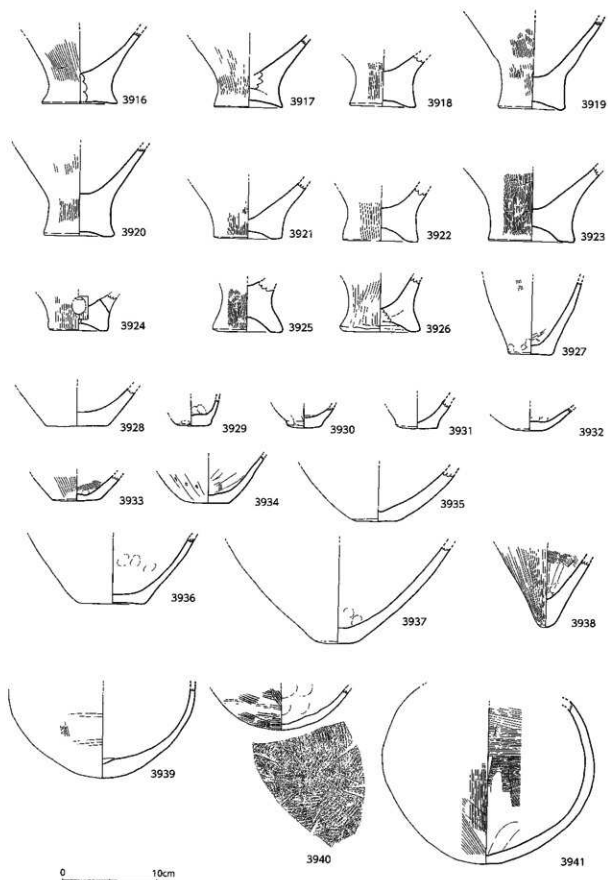
第 276 圖 諫山遺跡 包含層出土遺物実測圖 (14)



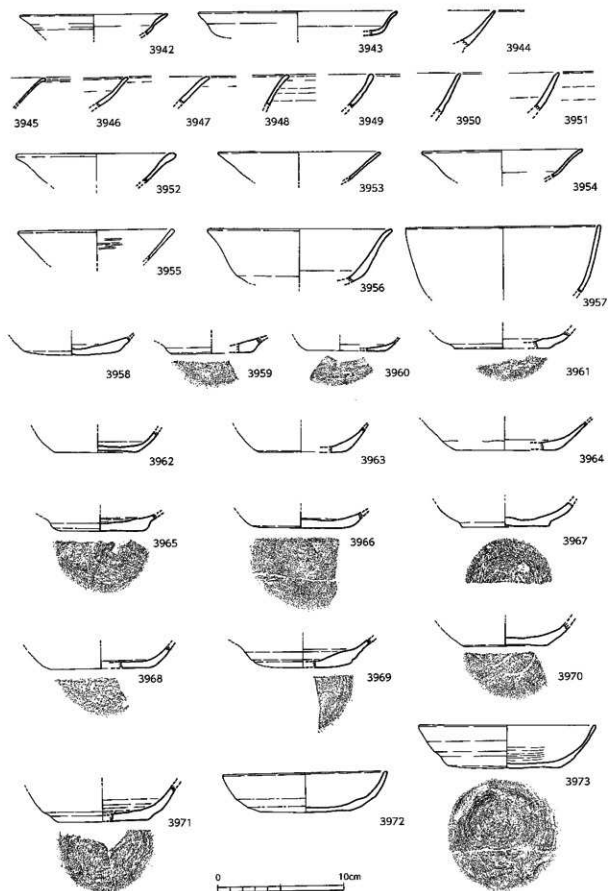
第 277 图 陝山遺跡 包含層出土遺物実測図 (15)



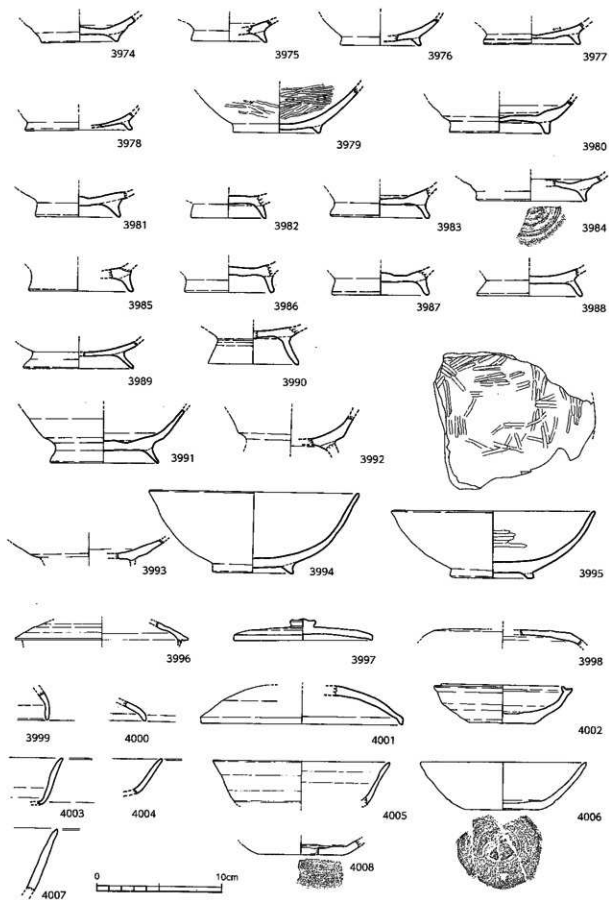
第 278 圖 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (16)



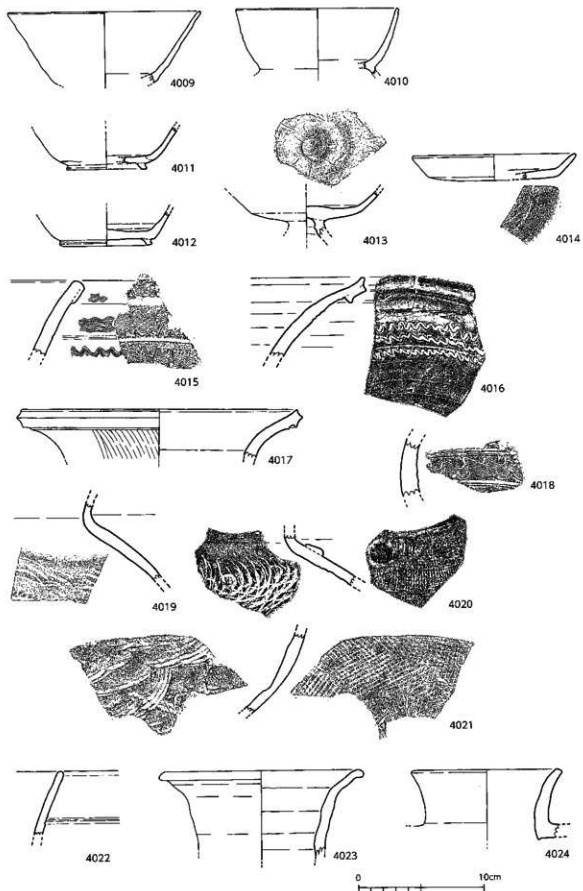
第 279 图 濂山遗址 包含层出土器物实测图 (17)



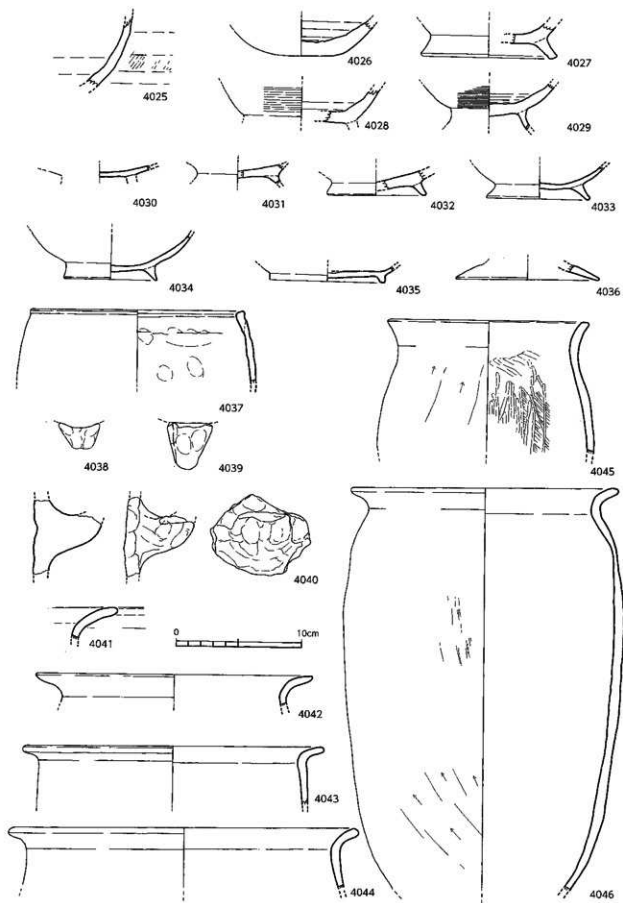
第 280 图 陳山遺跡 包含層出土遺物実測図 (18)



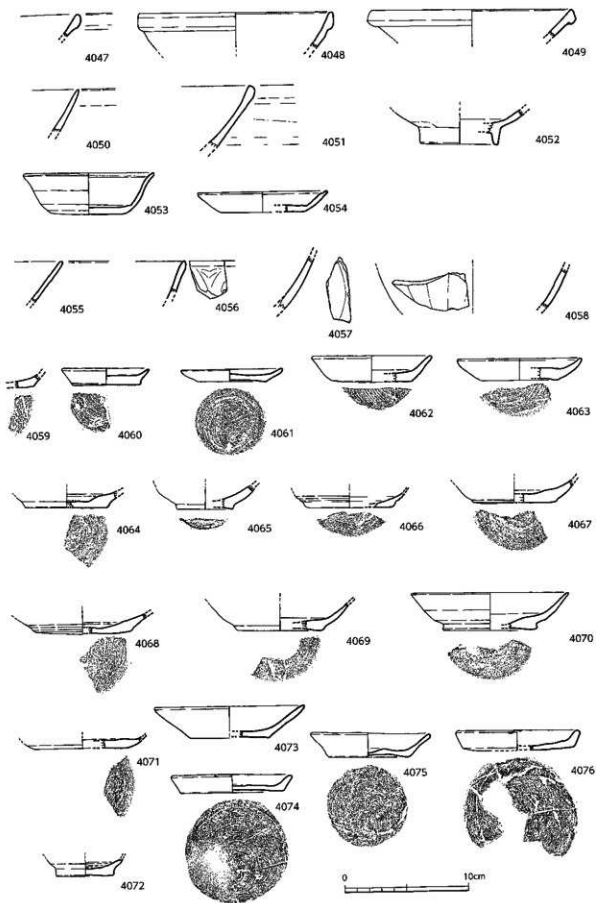
第281圖 諫山遺跡 包含層出土遺物実測圖(19)



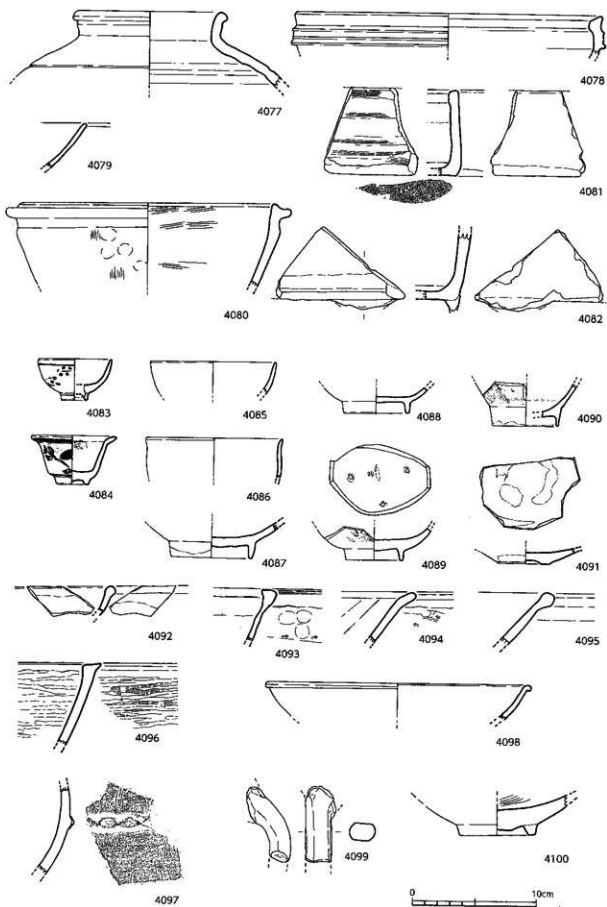
第 282 圖 談山遺跡 包含層出土遺物實測圖 (20)



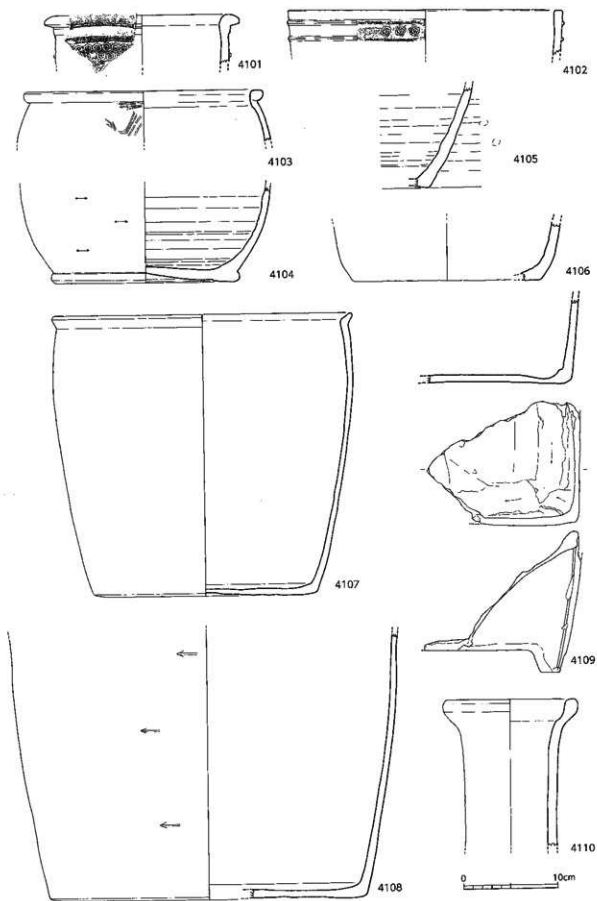
第 283 图 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (21)



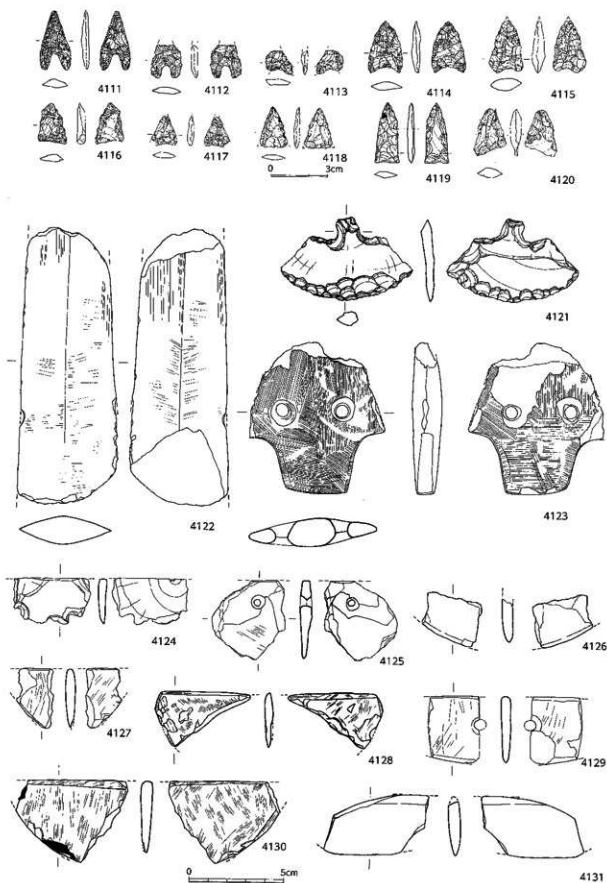
第 284 圖 陟山遺跡 包含層出土物実測図 (22)



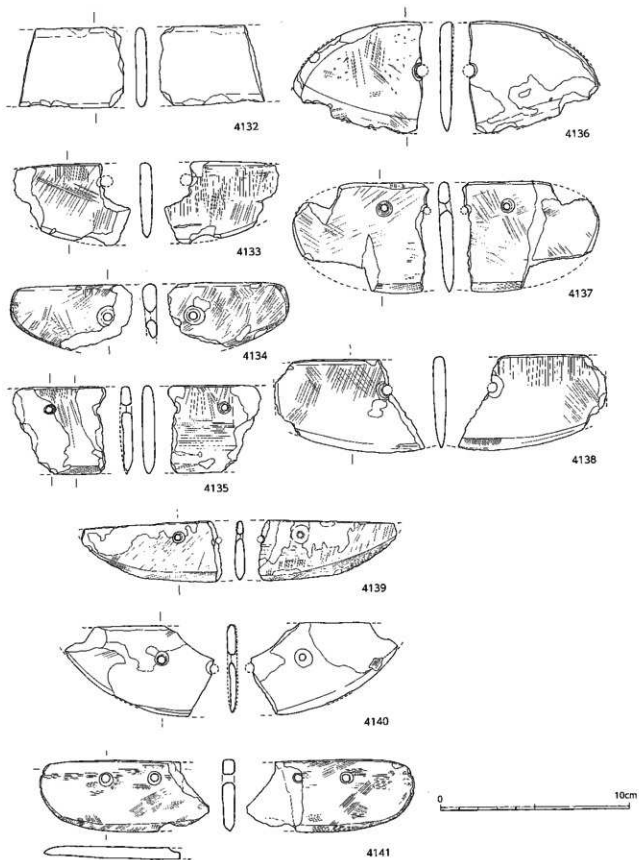
第 285 图 鍊山遺跡 包含層出土遺物実測図 (23)



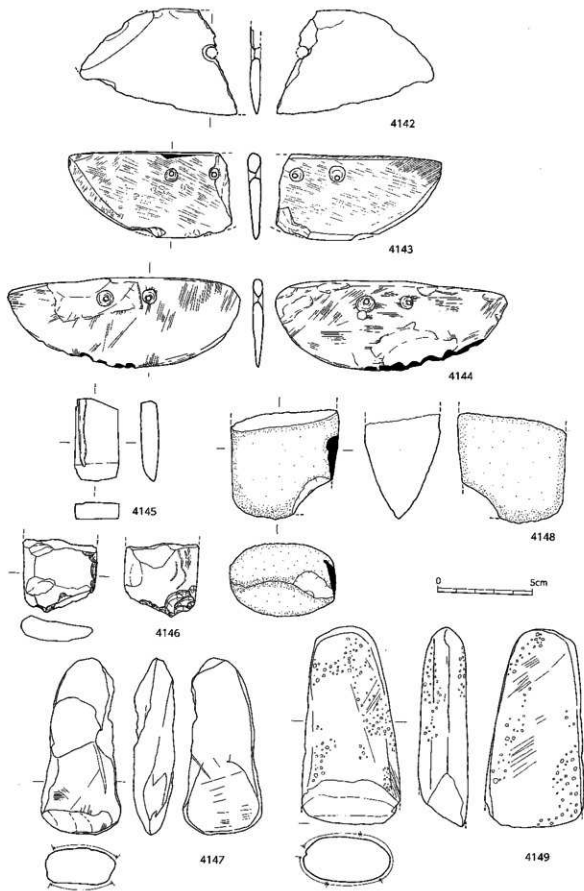
第286图 隰山遗址 包含层出土物实测图(24)



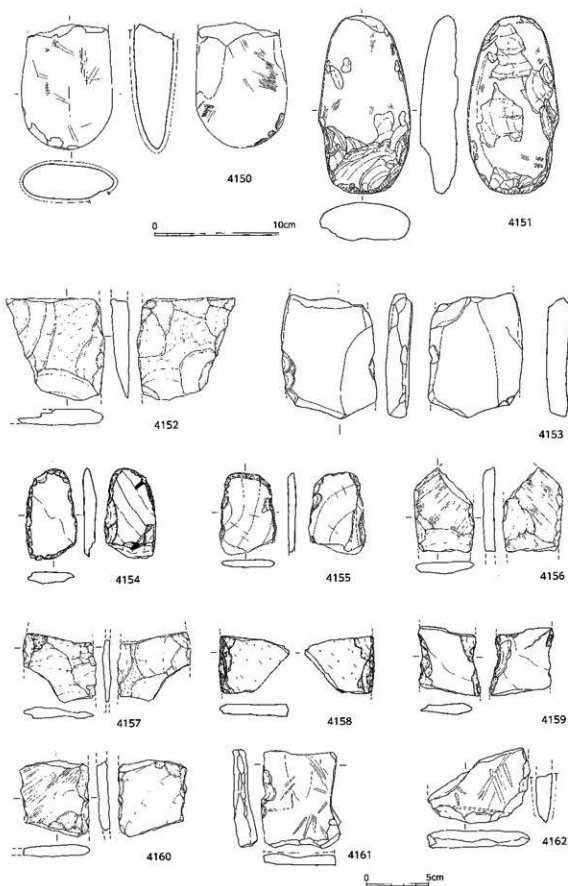
第 287 圖 隸山遺跡 包含層出土遺物實測圖 (25)



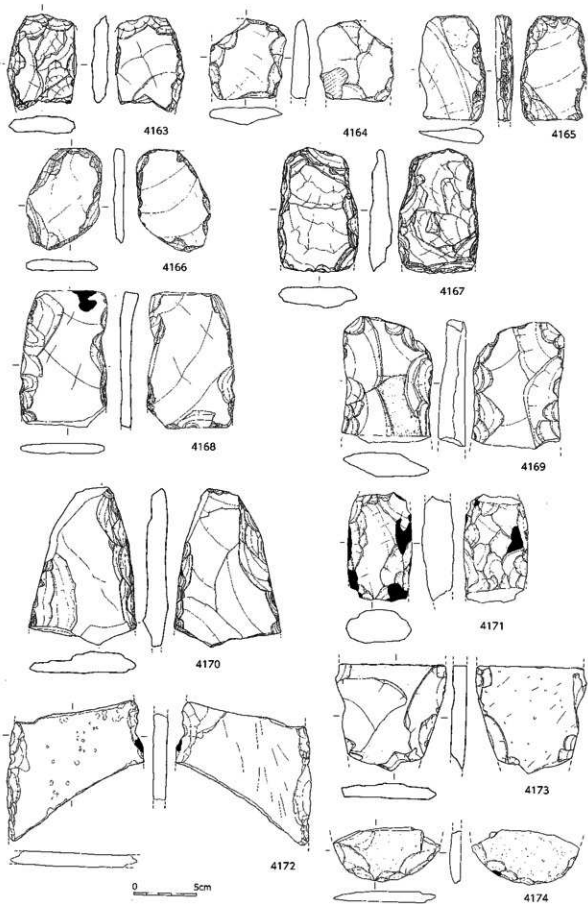
第 288 图 鍊山遺跡 包含層出土遺物実測図 (26)



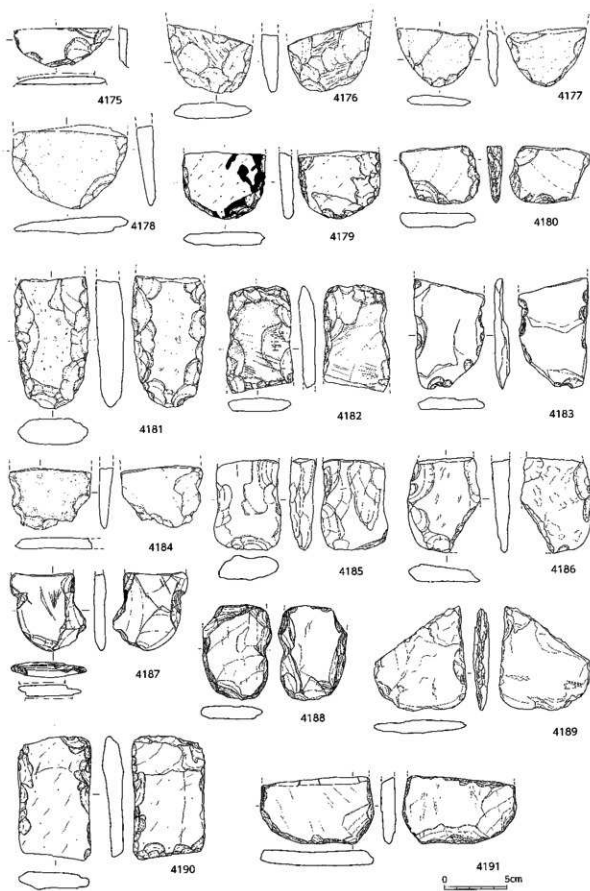
第 289 圖 隴山遺跡 包含層出土遺物實測圖 (27)



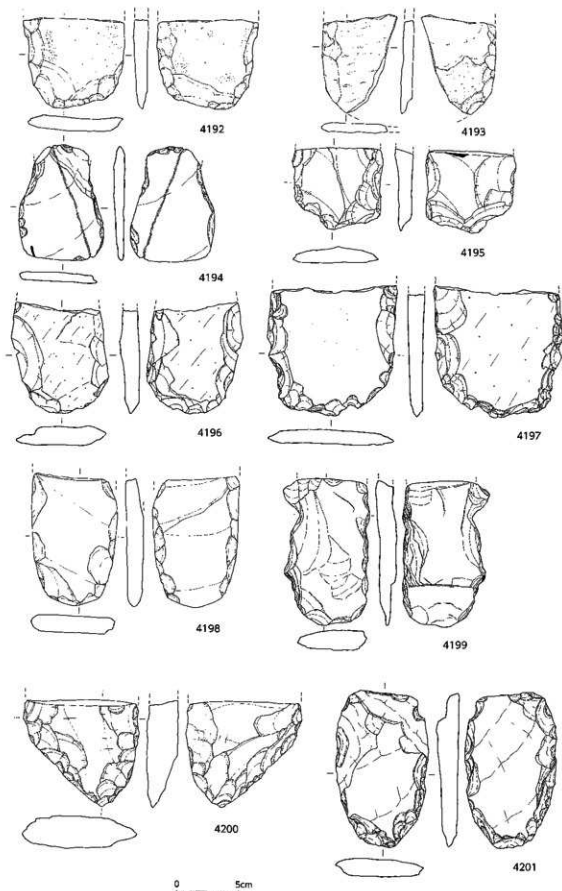
第 290 图 陳山遺跡 包含層出土遺物実測图 (28)



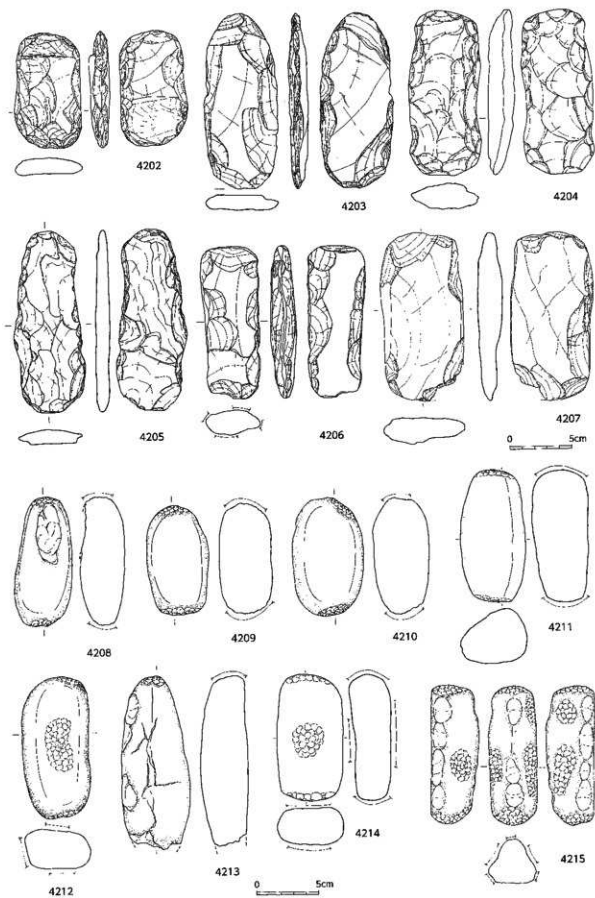
第 291 图 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (29)



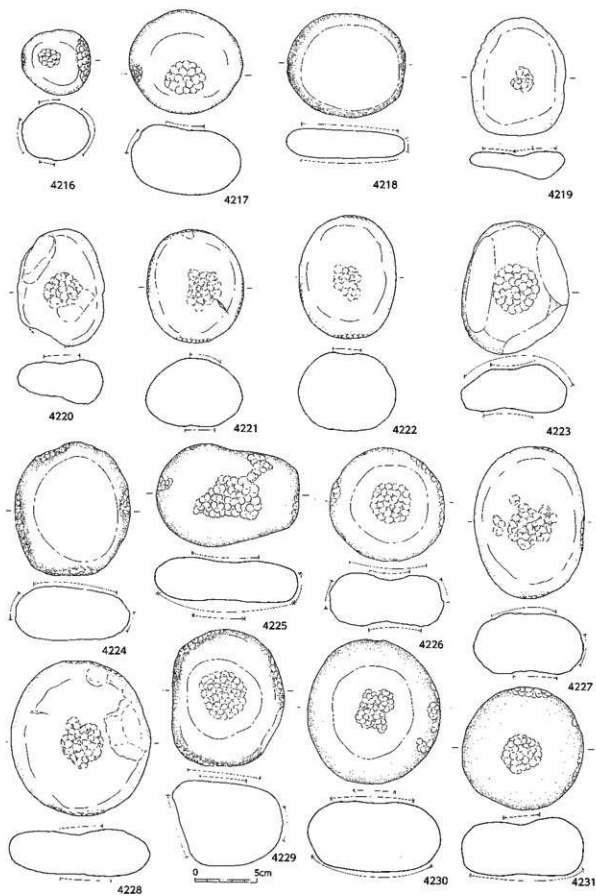
第 292 圖 隸山遺跡 包含層出土遺物実測圖 (30)



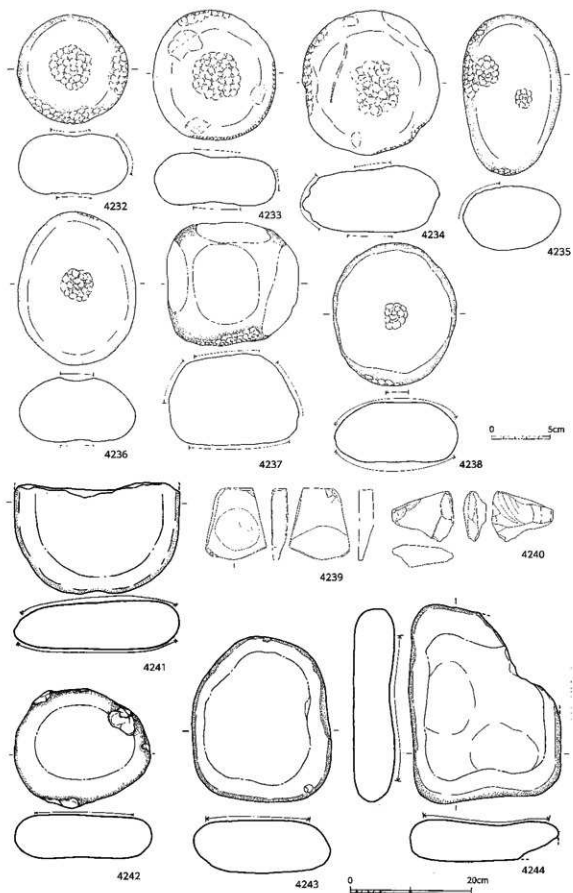
第 293 圖 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (31)



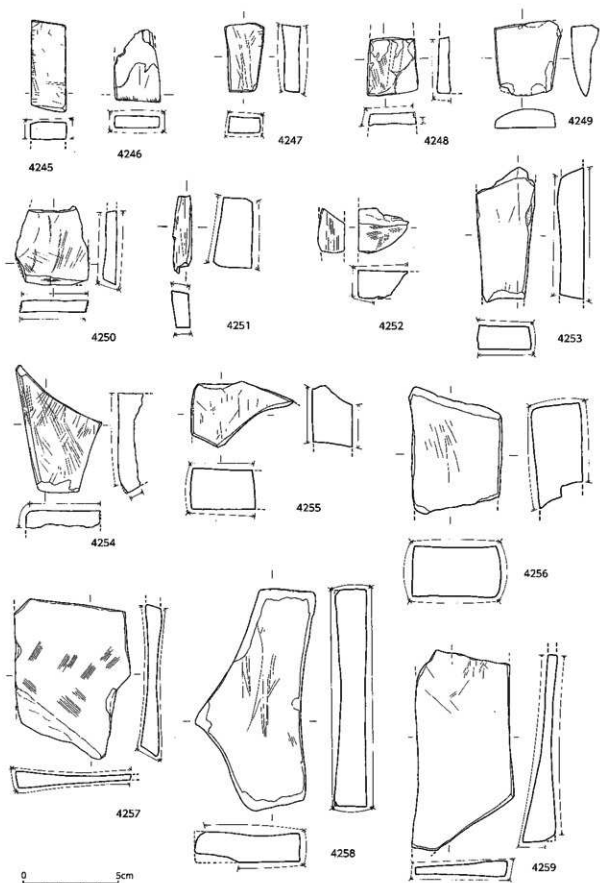
第 294 图 談山遺跡 包含層出土遺物実測図 (32)



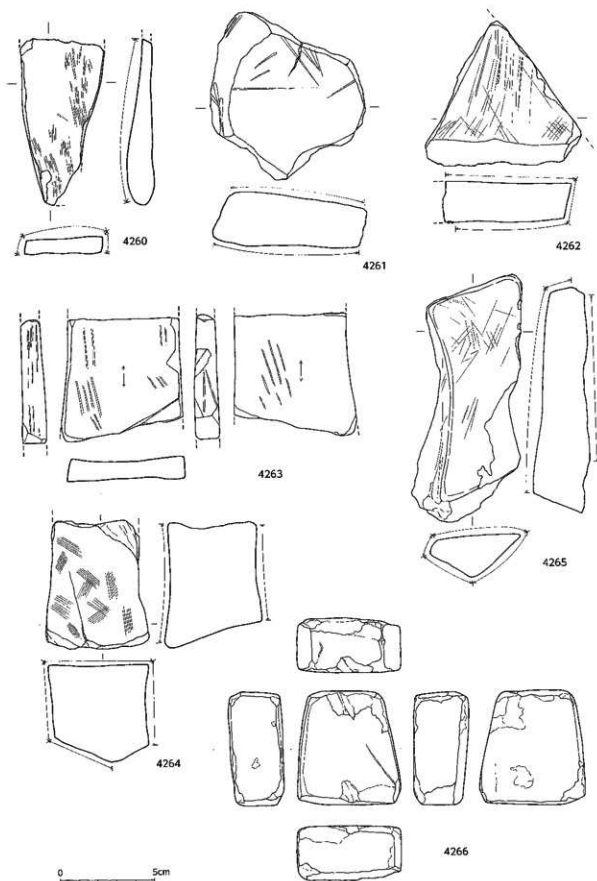
第 295 図 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (33)



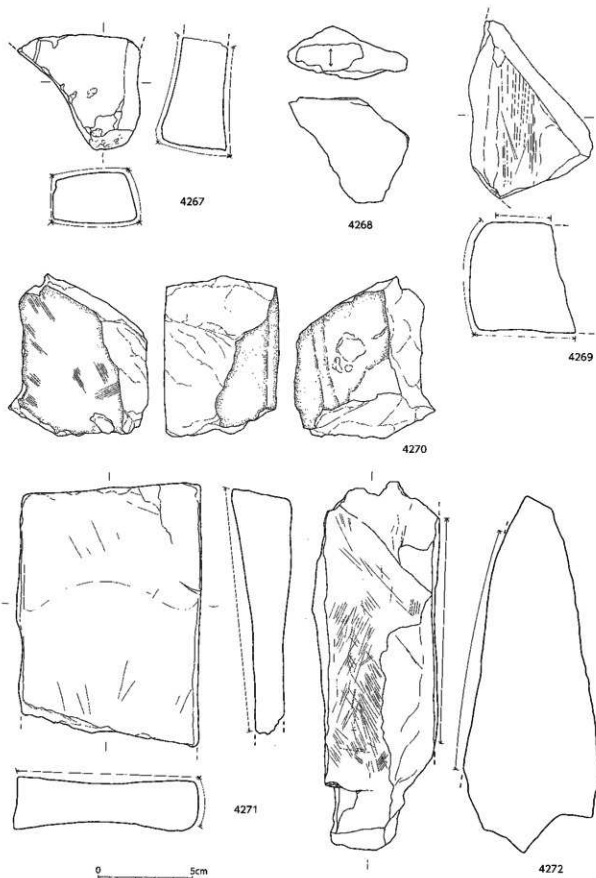
第296圖 陝山遺跡 包含層出土遺物実測圖(34)



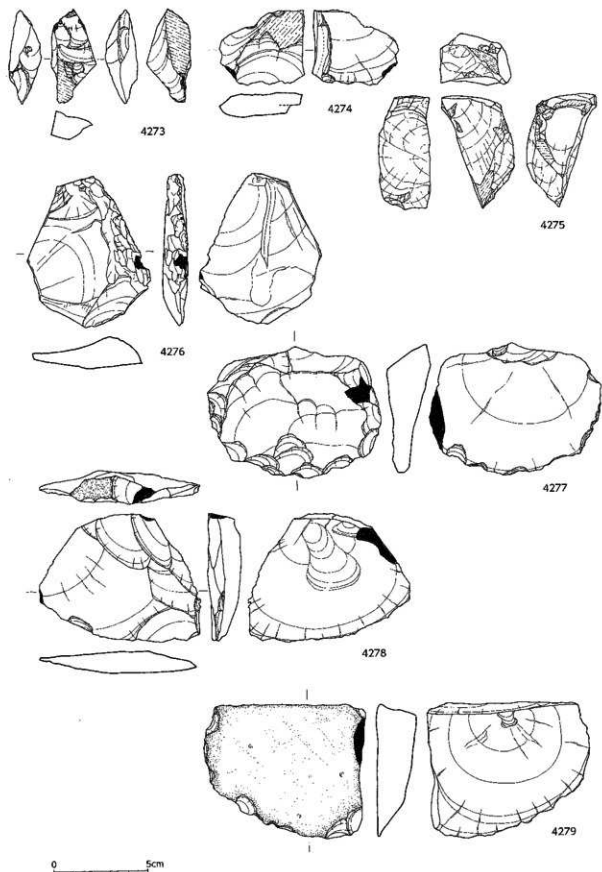
第 297 圖 陳山遺跡 包含層出土遺物測圖 (35)



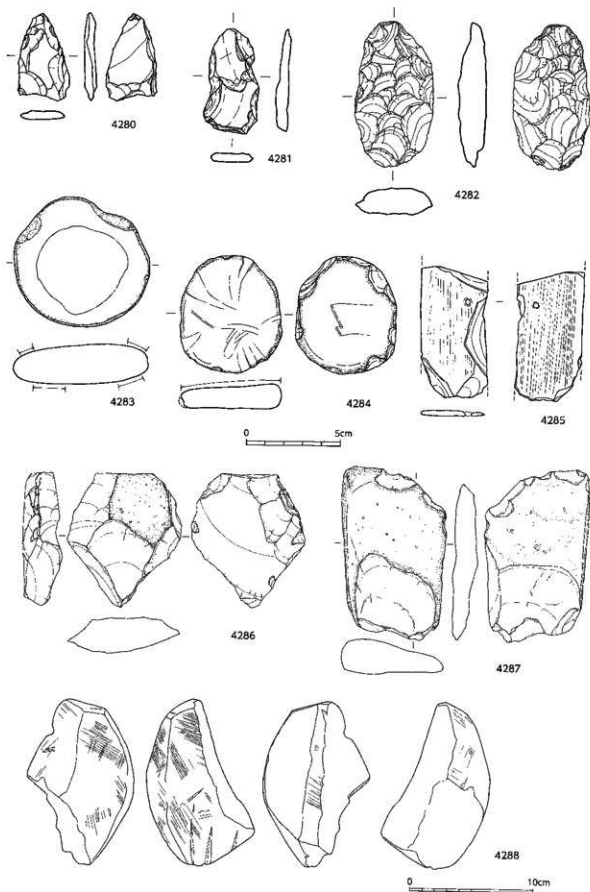
第 298 図 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (36)



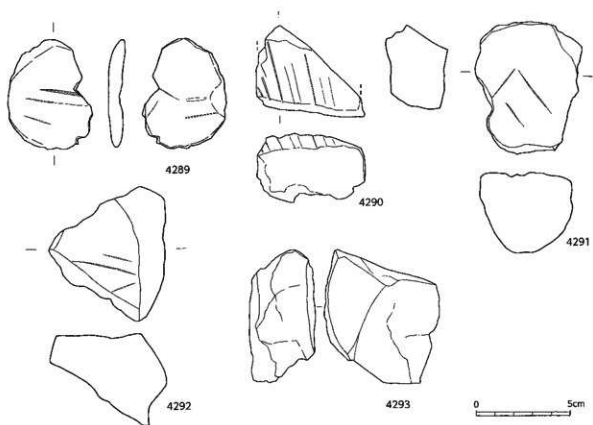
第 299 圖 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (37)



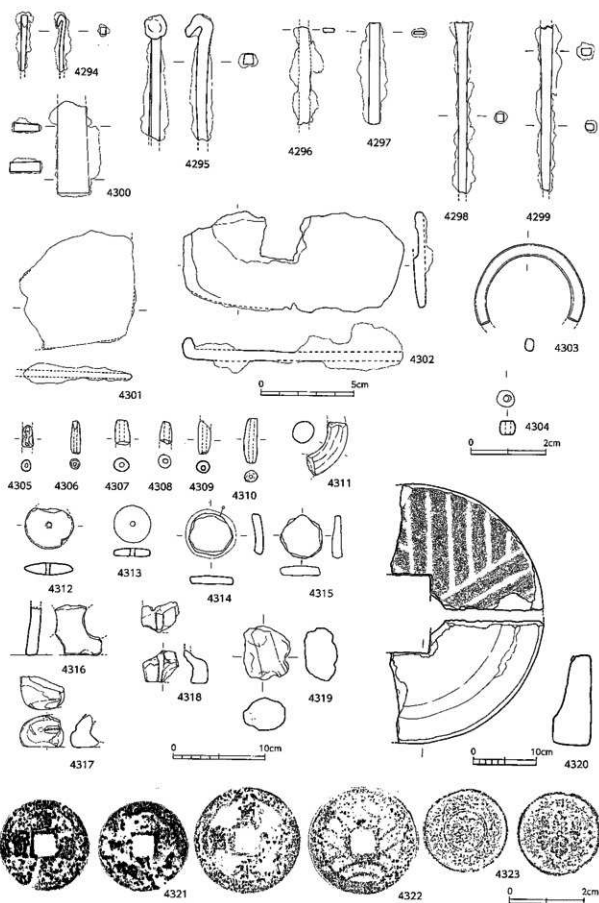
第 300 図 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (38)



第 301 图 談山遺跡 包含層出土遺物実測図 (39)



第 302 図 諫山遺跡 包含層出土遺物実測図 (40)



第 303 图 谈山道跡 包含層出土遺物実測図 (41)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第86集

諫山遺跡

本文・遺物図版編

東九州自動車道（県境～宇佐間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

2016（平成28）年3月31日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ピワノ門1977番地
TEL 097-597-5675

印刷 小野高速印刷株式会社
〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6
TEL 097-558-3444
